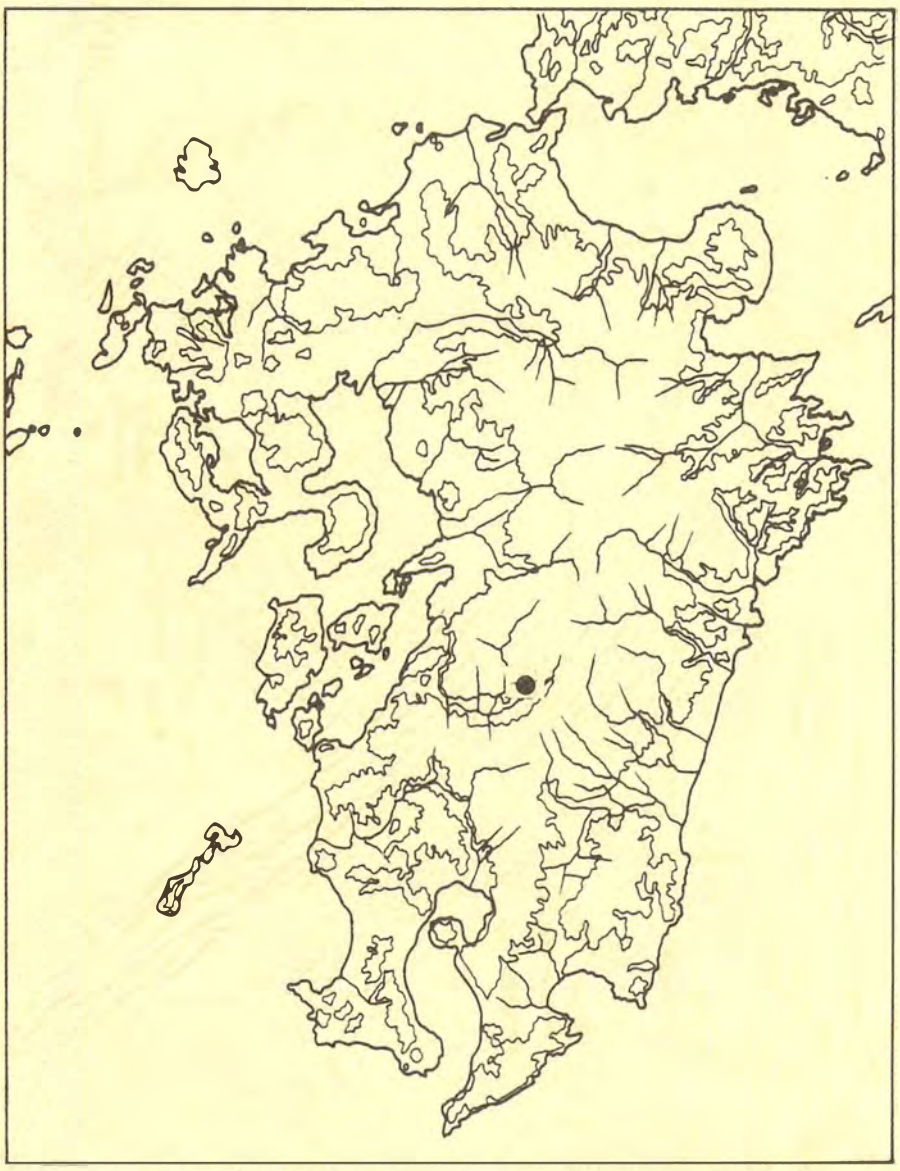
沖松遺跡

－ 熊本県球磨郡須恵村字沖松所在の遺跡 －

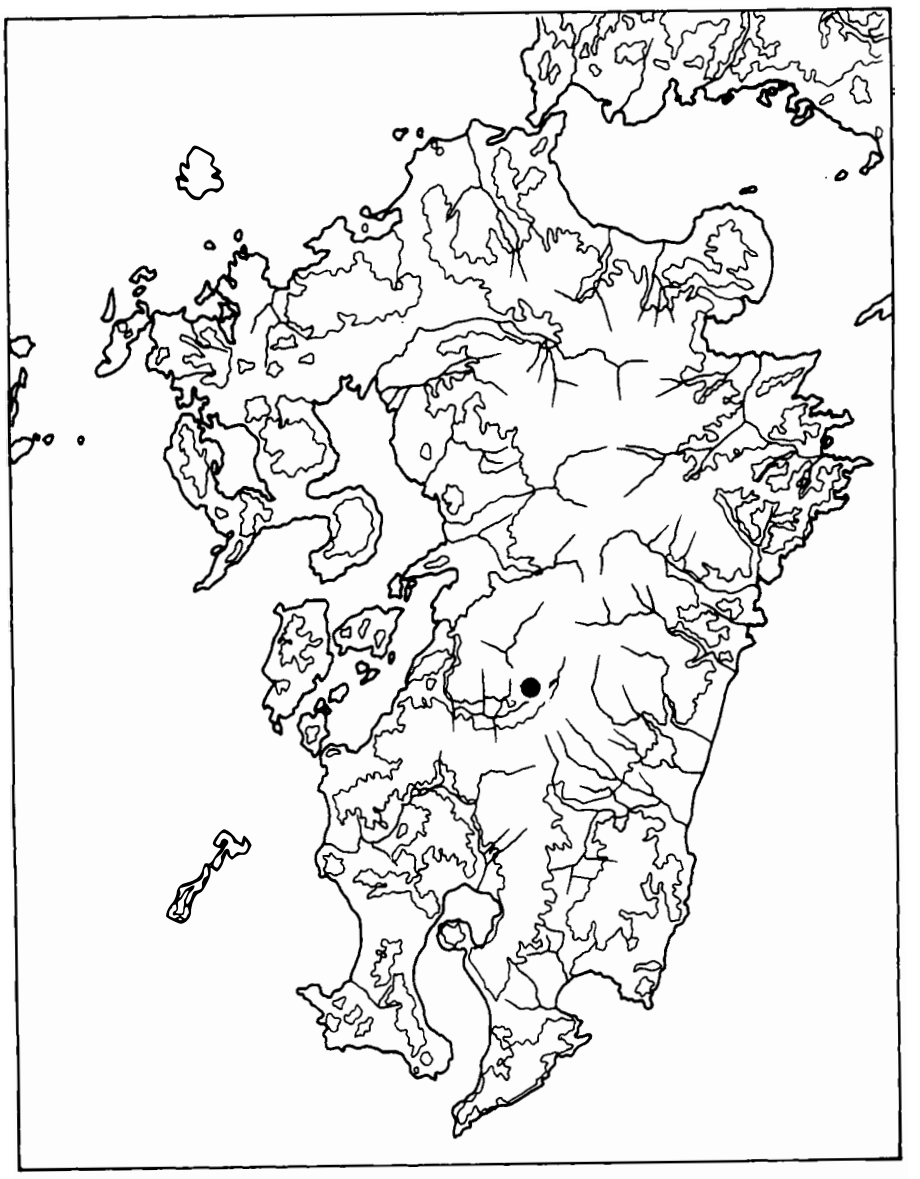


1996

熊本県教育委員会

沖松遺跡

－熊本県球磨郡須恵村字沖松所在の遺跡－



1996

熊本県教育委員会

序　　文

農業の近代化をめざす県営農業農村整備事業は、県下各地で実施されていますが、施工面積が広範囲に及ぶため、その区域内に文化財が含まれることが多くなってきています。熊本県教育委員会としましては、その文化財の取り扱いについては極力保存に努めていますが、やむを得ず破壊される場合には発掘調査を実施し、記録保存の措置をとっております。

ここに報告する球磨郡須恵村沖松遺跡の発掘調査は、県営畑地帯総合土地改良事業に伴って平成４年度・平成５年度の２箇年にわたり実施したものです。遺跡のある須恵村はエンブリー博士の民族学調査で世界的に有名な村でもあります。

調査の結果、先土器時代から中世までの、多種多様な遺構や遺物が出土しました。なかでも縄文時代の深鉢形土器の中に、死亡した乳幼児を葬ったのではないかと考えられる埋設土器が22基発見されました。中にはその深鉢形土器のうえに浅鉢形土器を蓋として被せていました。その他にも古墳時代の住居跡など貴重な資料が発見されています。こうした調査成果を報告するにあたり、この成果が学術研究のみならず、広く県民の皆様に活用され、文化財愛護などに役立てられることを願ってやみません。

最後に、埋蔵文化財の発掘調査に御協力いただいた県農政部、県球磨事務所川辺川土地改良推進室、須恵村、須恵村教育委員会及び地元の方々に対し、心から感謝の意を表します。

平成８年３月31日

熊本県教育長　東　坂　　力

例　　言

1．本書は県営畑地帯総合土地改良事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2．発掘調査は、熊本県球磨郡須恵村字沖松に所在する沖松遺跡が対象で、県農政部の依頼を受けて、熊本県教育委員会がおこなった。
3．遺物の整理は熊本県文化財収蔵庫でおこなった。なお、遺物の保管も文化財収蔵庫である。
4．遺跡の本調査は平成４・５年度に実施し、整理報告書作成は、平成６・７年度におこなった。
5．本書は、古い時代から順に記載している。
6．本書の地形図は、県農政部から提供を受けたものをもとにして、作成した。
7．現地調査での実測および写真撮影は調査員全員でおこなった。遺構の製図は主として富永圭子・丹生英理・井手田敦子がおこなった。遺物の実測は土器を富永・丹生・井手田・本松亜希子・福永里美・古城史雄がこれにあたり、土器の一部を埋蔵文化財サポートシステムに委託した。石器は主に富永・原田弘子・古城がおこなった。そのほか村崎孝宏・水野哲郎・木崎康弘・戸田清恵・木下俊恵・中田弥生の協力を得た。製図は富永・丹生・本松・福永・井手田がおこなった。遺物の写真は福田信子・山田大輔がおこなった。
8．本書の執筆は、第Ⅰ章第１節を島津義昭が、その他は古城がおこなった。
9．本書の編集は、熊本県教育委員会で古城がおこなった。
10．石材鑑定は特に委託せず「ワクド石遺跡」及び大久保遺跡の石材鑑定を参考としたが、玄武岩質安山岩・流紋岩質安山岩等分類できなかったものは一括して安山岩としている。

凡　　例

1．現地での実測図は、以下の縮尺で作成した。

集石・埋設土器・土坑	10分の１
竪穴式住居跡・掘建柱建物跡	20分の１

また本書収録の際には以下の縮尺となった。

集石・埋設土器・土坑	30分の１
竪穴式住居跡・掘建柱建物跡	60分の１

2．遺構の方位はすべて磁北である。
3．挿図の出土遺物の縮尺は、基本的に土器は３分の１、その他の遺物については大きさにより様々である。挿図のスケールを参照されたい。
4．集石・埋設土器・竪穴式住居跡・土坑・掘建柱建物跡等遺構の番号は、報告書作成時に再度整理しなおしたものである。旧番号と新番号の対照は、章末の遺物計測表で可能である。

本 文 目 次

序文
例言・凡例

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査及び整理の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第３節　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　1．調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　2．調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　1．地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　2．歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第２節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　1．遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　2．遺跡の基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

第Ⅲ章　調査とその成果

第１節　先土器時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第２節　縄文時代早期の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　1．遺物の出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　2．遺構とその位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　3．土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第３節　縄文時代後期から晩期の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　1．埋設土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　　①　埋設土器の分布と検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　　②　土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　2．縄文時代の住居跡について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
　3．包含層出土の遺物とその分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
　　①　縄文時代後期前半の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
　　②　縄文時代後期後半から晩期の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
　　③　不明土器・土製品等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
　　④　縄文時代の石器・石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75

4．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第４節　弥生時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
第５節　古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144
1．竪穴式住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144
2．竪穴式住居跡出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165
①　土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165
②　鉄鏃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・167
③　石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185
3．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185
4．土坑出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185
5．遺構外出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
①　土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
②　装飾品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
6．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
第６節　奈良時代以降の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・194
1．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・194
2．土坑出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・202
3．28号竪穴式住居跡とその出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・215
4．掘立柱建物跡とその出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・215
5．中世の竪穴式住居跡とその出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・217
6．包含層出土の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・223
7．その他の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・225
8．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・227
第７節　表面採集資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・228

第Ⅳ章　自然科学的分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・229

第Ⅴ章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・243
第１節　縄文時代早期の調査について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・243
第２節　縄文時代後期から晩期の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・243
第３節　弥生時代の調査について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247
第４節　古墳時代の調査について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247
第５節　奈良時代以降の調査について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・248
第６節　結び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・249

参考文献
図版

挿　図　目　次

第１図　周辺地形図 ……3
第２図　沖松遺跡周辺遺跡分布図 ……6
第３図　基本土層図 ……10
第４図　主要トレンチ配置図 ……11
第５図　遺跡縦断・横断土層模式図 ……12
第６図　先土器時代石器実測図 ……13
第７図　縄文時代早期遺構配置図・土器分布図 ……14
第８図　１・２号集石実測図 ……15
第９図　３号集石実測図 ……16
第10図　４～６号集石実測図 ……17
第11図　埋設土器分布図 ……19
第12図　１～６号埋設土器検出状況実測図 ……21
第13図　７～11号埋設土器検出状況実測図 ……22
第14図　12～16号埋設土器検出状況実測図 ……23
第15図　17～22号埋設土器検出状況実測図 ……24
第16図　１～３号埋設土器実測図 ……26
第17図　４・５号埋設土器実測図 ……27
第18図　６・７号埋設土器実測図 ……28
第19図　８号埋設土器実測図 ……29
第20図　９号埋設土器実測図 ……30
第21図　10号埋設土器実測図 ……31
第22図　11・12号埋設土器実測図 ……32
第23図　13号埋設土器実測図 ……33
第24図　14・15号埋設土器実測図 ……34
第25図　16・17号埋設土器実測図 ……35
第26図　18号埋設土器実測図 ……36
第27図　19～21号埋設土器実測図 ……37
第28図　22号埋設土器実測図 ……38
第29図　１～３号住居状遺構実測図 ……39
第30図　７号トレンチ遺物分布図 ……40
第31図　縄文式土器等分布図（１） ……42
第32図　縄文式浅鉢形土器等分布図（２） ……43
第33図　縄文式深鉢形土器分布図（３） ……44
第34図　縄文式深鉢形土器分布図（４） ……45
第35図　縄文式土器底部等分布図（５） ……46
第36図　縄文式土器底部等分布図（６） ……47
第37図　縄文式土器実測図 ……48
第38図　縄文式土器実測図 ……53
第39図　縄文式土器実測図 ……54
第40図　縄文式土器実測図 ……55
第41図　縄文式土器実測図 ……56
第42図　縄文式土器実測図 ……57
第43図　縄文式土器実測図 ……58
第44図　縄文式土器実測図 ……59
第45図　縄文式土器実測図 ……60
第46図　縄文式土器実測図 ……61
第47図　縄文式土器実測図 ……62
第48図　縄文式土器実測図 ……63
第49図　縄文式土器実測図 ……64
第50図　縄文式土器実測図 ……65
第51図　縄文式土器実測図 ……66
第52図　縄文式土器実測図 ……67
第53図　縄文式土器実測図 ……68
第54図　縄文式土器実測図 ……69
第55図　縄文式土器実測図 ……70
第56図　縄文式土器実測図 ……71
第57図　縄文式土器実測図 ……72
第58図　縄文式土器実測図 ……73
第59図　縄文式土器・土製品等実測図 ……74
第60図　打製石斧分布図（１） ……76
第61図　打製石斧分布図（２） ……77
第62図　打製石斧実測図 ……78
第63図　打製石斧実測図 ……79
第64図　打製石斧実測図 ……80
第65図　打製石斧実測図 ……81
第66図　打製石斧実測図 ……82
第67図　打製石斧実測図 ……83
第68図　打製石斧実測図 ……84
第69図　打製石斧実測図 ……85
第70図　打製石斧実測図 ……86
第71図　打製石斧実測図 ……87
第72図　打製石斧実測図 ……88
第73図　打製石斧実測図 ……89

第74図　打製石斧実測図 ……90
第75図　打製石斧実測図 ……91
第76図　打製石斧実測図 ……92
第77図　打製石斧実測図 ……93
第78図　打製石斧実測図 ……94
第79図　打製石斧実測図 ……95
第80図　打製石斧実測図 ……96
第81図　打製石斧実測図 ……97
第82図　打製石斧実測図 ……98
第83図　打製石斧実測図 ……99
第84図　打製石斧実測図 ……100
第85図　打製石斧実測図 ……101
第86図　打製石斧実測図 ……102
第87図　打製石斧実測図 ……103
第88図　打製石斧実測図 ……104
第89図　打製石斧実測図 ……105
第90図　打製石斧実測図 ……106
第91図　打製石斧実測図 ……107
第92図　打製石斧実測図 ……108
第93図　打製石斧実測図 ……109
第94図　Ｙ字形石斧実測図 ……110
第95図　磨製石斧分布図（１） ……111
第96図　磨製石斧分布図（２） ……112
第97図　磨製石斧実測図 ……113
第98図　磨製石斧実測図 ……114
第99図　磨製石斧実測図 ……115
第100図　石鏃分布図（１） ……116
第101図　石鏃分布図（２） ……117
第102図　石鏃実測図 ……118
第103図　石鏃実測図 ……119
第104図　石鏃実測図 ……120
第105図　石鏃実測図 ……121
第106図　石鏃実測図 ……122
第107図　石錐等実測図 ……123
第108図　石匙実測図 ……124
第109図　砥石・石皿・台石・磨石・敲石・
　　石錘分布図（１） ……125
第110図　砥石・石皿・台石・磨石・敲石・
　　石錘分布図（２） ……126
第111図　砥石実測図 ……127
第112図　石皿・台石実測図 ……128
第113図　石皿・台石実測図 ……129
第114図　磨石・敲石実測図 ……130
第115図　磨石・敲石実測図 ……131
第116図　磨石・敲石実測図 ……132
第117図　磨石・敲石実測図 ……133
第118図　磨石・敲石実測図 ……134
第119図　磨石・敲石実測図 ……135
第120図　石錘実測図 ……136
第121図　石錘実測図 ……137
第122図　石錘実測図 ……138
第123図　石錘実測図 ……139
第124図　石製装身具実測図 ……140
第125図　不明石製品実測図 ……142
第126図　石剣・石刀実測図 ……143
第127図　弥生式土器実測図 ……144
第128図　古墳時代遺構配置図 ……145
第129図　１号竪穴式住居跡実測図 ……146
第130図　２・３号竪穴式住居跡実測図 ……147
第131図　４号竪穴式住居跡実測図 ……148
第132図　５号竪穴式住居跡実測図 ……149
第133図　６・７号竪穴式住居跡実測図 ……151
第134図　８・９号竪穴式住居跡実測図 ……152
第135図　10・11号竪穴式住居跡実測図 ……153
第136図　12号竪穴式住居跡実測図 ……154
第137図　13・14号竪穴式住居跡実測図 ……155
第138図　15・16・17号竪穴式住居跡実測図 ……157
第139図　18号竪穴式住居跡実測図 ……158
第140図　19号竪穴式住居跡実測図 ……159
第141図　20・21号竪穴式住居跡実測図 ……160
第142図　22・23号竪穴式住居跡実測図 ……161
第143図　24・25号竪穴式住居跡実測図 ……162
第144図　26・27号竪穴式住居跡実測図 ……163
第145図　１～３号土坑実測図 ……164
第146図　１号竪穴式住居跡出土土器実測図 ……168
第147図　１・２号竪穴式住居跡出土土器
　　実測図 ……169
第148図　３号竪穴式住居跡出土土器実測図 ……170
第149図　３号竪穴式住居跡出土土器実測図 ……171
第150図　３号竪穴式住居跡出土土器実測図 ……172
第151図　４号竪穴式住居跡出土土器実測図 ……173
第152図　５号竪穴式住居跡出土土器実測図 ……174

第153図　５号竪穴式住居跡出土土器実測図 ･･･175
第154図　５号竪穴式住居跡出土土器実測図 ･･･176
第155図　６・８・９・10号竪穴式住居跡出土土器実測図 ･････････････････････177
第156図　11・12・14号竪穴式住居跡出土土器実測図 ･････････････････････････178
第157図　15号号竪穴式住居跡出土土器実測図 ･179
第158図　16～19号竪穴式住居跡出土土器実測図 ･････････････････････････180
第159図　20～24号竪穴式住居跡出土土器実測図 ･････････････････････････181
第160図　25号竪穴式住居跡出土土器実測図 ･･･182
第161図　27号竪穴式住居跡等出土土器実測図 ･････････････････････････183
第162図　遺構外出土土器実測図 ･････････････184
第163図　竪穴式住居跡出土鉄製品実測図 ･････185
第164図　竪穴式住居跡出土石皿実測図 ･･････186
第165図　竪穴式住居跡出土石皿実測図 ･･････187
第166図　竪穴式住居跡出土不明石製品実測図 ･188
第167図　古墳時代装身具実測図 ･････････････189
第168図　歴史時代遺構配置図 ･････････････････195
第169図　４・５号土坑実測図 ･････････････････196
第170図　６・７号土坑実測図 ･････････････････197
第171図　８・９号土坑実測図 ･････････････････198
第172図　10～12・15号土坑実測図 ･････････････199
第173図　16・17・21号土坑実測図 ･････････････200
第174図　22～24号土坑実測図 ･････････････････201
第175図　４号土坑出土土器実測図 ･････････････203
第176図　４・５・６号土坑出土土器実測図 ･･･204
第177図　７・８号土坑出土土器実測図 ･････････205
第178図　10・11号土坑出土土器実測図 ･････････207
第179図　12～15号土坑出土土器実測図 ･････････208
第180図　16～22号土坑出土土器実測図 ･････････209
第181図　23・24号土坑出土土器実測図 ･････････210
第182図　28号竪穴式住居跡実測図 ･････････････211
第183図　１号掘立柱建物跡実測図 ･････････････212
第184図　２号掘立柱建物跡実測図 ･････････････213
第185図　３号掘立柱建物跡実測図 ･････････････214
第186図　柵跡実測図 ･････････････････････････215
第187図　29・30号竪穴式住居跡遺構実測図 ･･･216
第188図　遺構内出土遺物実測図 ･････････････217
第189図　遺構外出土遺物分布図（１） ･･････････218
第190図　遺構外出土遺物分布図（２） ･･････････219
第191図　遺構外出土遺物実測図 ･････････････220
第192図　遺構外出土遺物実測図 ･････････････221
第193図　遺構外出土遺物実測図 ･････････････222
第194図　遺構外出土遺物実測図 ･････････････223
第195図　スラグ等遺物分布図 ･････････････････224
第196図　不明遺構実測図 ･････････････････････225
第197図　歴史時代遺物実測図 ･････････････････226
第198図　表面採集資料実測図 ･････････････････227
第199図　２・４・５トレンチ柱状図 ･････････････233
第200図　自然科学的分析関係 ･････････････････238
第201図　自然科学的分析関係 ･････････････････239

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表 ･････････････････ 7
第２表　縄文土器分類項目表 ･････････････ 141
第３表　古墳時代縦穴式住居跡主要出土土器一覧 ･････････････････････ 192
第４表　テフラ検出分析結果 ･････････････ 232
第５表　火山ガラス比分析結果 ･････････････ 232
第６表　重鉱物組成分析結果 ･････････････ 232
第７表　植物珪酸体分析結果 ･････････････ 237
第８表　主な分類群の推定生産量 ･････････ 237
第９表　出土遺物観察表 ･････････････････ 251

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景（カラー）
図版２　４・５号土坑（カラー）
図版３　４・５号埋設土器検出状況
図版４　６・７号埋設土器検出状況
図版５　８・９号埋設土器検出状況
図版６　10・11号埋設土器検出状況
図版７　18・19号埋設土器検出状況
図版８　20・21号埋設土器検出状況
図版９　上；22号埋設土器検出状況
　　下；遺物検出状況
図版10　住居状遺構　上；１号
　　下；２号
図版11　住居状遺構　上；３号
　　下；４号
図版12　上；７トレンチ遺物出土状況
　　下；１号竪穴式住居跡
図版13　竪穴式住居跡　上；２号
　　下；３号
図版14　竪穴式住居跡　上；４号
　　下；６号
図版15　竪穴式住居跡　上；８号
　　下；９号
図版16　竪穴式住居跡　上；10号
　　下；11号
図版17　竪穴式住居跡　上；12号
　　下；12号埋甕炉
図版18　竪穴式住居跡　上；14号
　　下；15号
図版19　竪穴式住居跡　上；16号
　　下；19号
図版20　竪穴式住居跡　上；20号
　　下；21号
図版21　竪穴式住居跡　上；22号
　　下；24号
図版22　上；27号竪穴式住居跡
　　下；１号土坑
図版23　土坑　上；２号
　　下；６号
図版24　土坑　上；10号
　　下；12号
図版25　土坑　上；15号
　　下；17号
図版26　土坑　上；21号
　　下；22号
図版27　上；23号土坑
　　下；28号竪穴式住居跡
図版28　上；１号掘建柱建物跡
　　下；２号掘建柱建物跡
図版29　上；３号掘建柱建物跡
　　下；29号竪穴式住居跡
図版30　上；30号竪穴式住居跡
　　下；不明遺構
図版31　１～５・７・８号埋設土器
図版32　９～13号埋設土器
図版33　14～19・21・22号埋設土器
図版34　ナイフ形石器・縄文時代早期・後期の土器
図版35　縄文時代後期の土器
図版36　市来式土器；24,
　　浅鉢形土器Ⅰａ類；31～37
図版37　浅鉢形土器Ⅰａ類；30・38～43,
　　Ⅱ類；44～50
図版38　浅鉢形土器Ⅲ類ａ・ｂ；51～56,
　　Ⅲｄ類；79,　Ⅴａ類；83
図版39　浅鉢形土器Ⅲｅ類；80,
　　Ⅳａ類；81・84・85,　Ⅳｂ類；87
図版40　浅鉢形土器Ⅳ類；86・88・89～92
　　Ⅴ類；93・94・96
図版41　浅鉢形土器Ⅴｂ類；97・98
　　Ⅵ類　；101・102
　　深鉢形土器ⅠＡ類；106・107・112・114
図版42　深鉢形土器ⅠＡ類；122～124,
　　ⅡＡ類；108・109・125・126
図版43　深鉢形土器ⅡＡ類
図版44　深鉢形土器ⅡＡ類；133,
　　ⅢＡ類；129・137・140
図版45　深鉢形土器ⅢＡ類

図版46　深鉢形土器ⅢＡ類；142，ⅢＡｇ類；143
ⅢＡｈ類；144
図版47　深鉢形土器ⅢＡ類
図版48　深鉢形土器ⅢＡ類
ⅢＡｇ類；173，ⅢＡｈ類；197
図版49　深鉢形土器ⅢＡ類；194，ⅢＡｈ類；199
ⅣＡ類；200～206，
ⅣＢａ類；208
図版50　深鉢形土器ⅣＢａ類；209，ⅣＢｂ類；211
図版51　深鉢形土器ⅣＢｂ類；210・215
ⅣＢｃ類；222
図版52　深鉢形土器Ⅶ類（ａ；242，ｂ；238）
図版53　深鉢形土器ⅧＢ類；248・249
ⅧＡ類；256・261・262
Ⅸ類；263・265～267
組織痕文土器；269～271
図版54　深鉢形土器Ⅵ類；226，Ⅶａ類；237
Ⅶｅ類；243，底部Ⅵ類；327　328
図版55　深鉢形土器Ⅵ類；225，底部Ⅲ類；332
底部Ⅳ類；324・326
図版56　高坏形土器・土製品等
図版57　土製品・焼成粘土塊
図版58　焼成粘土塊
図版59　焼成粘土塊
図版60　打製石斧　１；Ⅰ類（短冊形）
２；Ⅱ類（バチ形）
図版61　打製石斧　１；Ⅲ類（分銅形）
２；Ⅳ類（円盤状石器）
図版62　打製石斧Ⅴ類
図版63　１；打製石斧Ⅵ類，２；磨製石斧
図版64　石鏃
図版65　石鏃
図版66　石錐・石匙等
図版67　砥石（１・４～６・８），石皿
図版68　１；磨石・敲石，２；石錘
図版69　１；石製装身具　２；不明石製品
３；弥生式土器
図版70　１・２号竪穴式住居跡出土土器
図版71　３号竪穴式住居跡出土土器
図版72　４～６・８・９号竪穴式住居跡出土土器
図版73　10～12・14号竪穴式住居跡出土土器
図版74　14・15号竪穴式住居跡出土土器
図版75　16～20号竪穴式住居跡出土土器
図版76　21～25号竪穴式住居跡出土土器
図版77　27号竪穴式住居跡出土土器
１～３号土坑等出土土器
図版78　不明石器・鉄鏃
図版79　４号土坑出土遺物
図版80　土坑出土遺物
５号；48，７号；62・63・65・68
８号；69，10号；72・73
11号；75・79・80・82・84
図版81　土坑出土遺物15号；91～94・100～102
16号；103～106
図版82　土坑出土遺物17号；107・113，20号；116
22号；119，
23号；123・124・127～132
図版83　土坑出土遺物24号；133，25号；134
30号竪穴式住居跡；137～140，その他
図版84　遺構外出土遺物
図版85　遺構外出土遺物
図版86　土錘・スラグ
図版87　紡錘車・鞴羽口

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成２年度から須恵村・深田村で県営畑地帯総合土地改良事業が計画された。この事業は基幹事業（農業用用排水・農道）と併せて行う事業（基幹事業以外の農業排水・農道と客土・暗渠排水・農用地造成・区画整理・農地保全・営農用水）で、農業用用排水施設、農道の新設や受益面積が概ね100ha以上のものである（基幹事業以外の新設もしくは変更で受益面積が概ね50ha以上のもの）。

須恵・深田地区は受益面積60haで主に区画整理が計画された。この事業の事業実施に先立ち、事業地区内に文化財が所在する可能性が高いことがわかり、文化課と農地建設課の間で協議が行われ試掘調査を実施することになった。

その結果、約２haの広大な遺跡が所在することがわかり、農政部局で設計変更等を行い、やむを得ず削平を受ける箇所については発掘調査を行う事となった。

第２節　調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

発掘調査の組織

（平成４年度調査）

調査責任者　大塚正信（文化課長）
　　隈　昭志（教育審議員）
調査総括　　島津義昭（主幹・調査第１係長）
調査事務局　松崎厚生（課長補佐）
　　木下英治（主幹・経理係長）
　　高浜保子・相馬治久（参事）
調査担当　　古城史雄（主任主事）
　　木村元浩（学芸員）
　　中川裕二（嘱託）

（平成５年度調査）

調査責任者　大塚正信（文化課長）
　　平野芳久（教育審議員）
調査総括　　島津義昭（主幹・調査第１係長）
調査事務局　松崎厚生（教育審議員）
　　木下英治（主幹・経理係長）
　　高浜保子・相馬治久（参事）
調査担当　　古城史雄（主任主事）
　　中川裕二（嘱託）
　　野口龍彦（文化財保護主事）
　　水野哲郎（文化財保護主事）
　　北川賢次郎・宮崎敬士（嘱託）
専門調査員　甲元眞之（熊本大学教授）
　　橘　昌信（別府大学教授）
　　佐藤伸二（八代高等専門学校教授）
　　清田純一（城南町歴史民俗資料館）
農政部局　　角田　豊（農地建設課長）
　　大保澄秀（農政審議員）
　　上田　堅（農地建設課水利係長）
　　坂本栄治（農地建設課参事）
　　球磨事務所川辺川土地改良推進室
　　横山　敏（室長）
　　一二三武（参事）

調査指導・助言および協力者（順不同、敬称略）

　　西健一郎　（九州大学）
　　泉　拓良　（奈良大学）
　　織笠　昭　（東海大学）
　　鶴嶋俊彦　（人吉市教育委員会）
　　和田好史　（人吉市教育委員会）
　　吉永　明　（八代市教育委員会）
　　溝下昌美　（湯前町教育委員会）
　　渋谷　敦　（熊本県文化財保護委員）
　　高田素次　（熊本県文化財保護委員）
　　須恵村役場・須恵村教育委員会
　　熊本県土地開発連合会

調査作業員

五嶋マツミ・荒木忠代・松坂アサカ・川辺ナラヨ・中村ユキヨ・釜田ミヤ子・恒松リツ・富田ミツ子・平田シマエ・宮田マスノ・林田ミエ・恒松シヅエ・

松山ヒサ子・尾方信子・迫田洋子・高田ユリ子・佐田ミヨ子・松村ユキエ・恒松シカエ・万江敬子・西ミサコ・森下ヒデカ・丸目ムツ子・平野トシ子・上田孝江・浜崎文美子・松村厚子・漆野綾子
出合宏光（琉球大学生）・須恵慎嗣・村上晃勇（別府大学生）・岩崎秀幸（西南大学生）・酒井智則（北九州大学生）・桐田八千柔・山本かおる・中野聡子（福岡大学生）・平野国利・福田貴文・酒井香織・坂本ちづる・大中みゆき・稲田正広・永井孝広・田浦武徳・別府章・豊永貴士

整理の組織

（平成６年度・７年度整理・報告書作成）

報告書責任者桑山裕好（文化課長）
丸山秀人（課長補佐）
報告書総括　島津義昭（主幹・調査第１係長）
事務局　白井哲哉（教育審議員）
木下英治（平成６年度主幹・経理係長）
藤本和夫（平成７年度主幹・経理係長）
高浜保子（参事）
高宮優美（主任主事）
報告書担当　古城史雄（主任主事）
冨永圭子・丹生英里・本松亜希子
原田弘子（嘱託）
福永里美・井出田敦子（臨時職員）
整理作業　後藤直美・渕上慶子・後藤ちず子・吉田律子・山元友子・村山紀子・上田律子・河野智子

指導・助言および協力者（順不同、敬称略）

山本信夫　（太宰府市教育委員会）
富田紘一　（熊本市博物館）
水ノ江和同（福岡県教育委員会）
松永幸男　（北九州市立考古博物館）
美濃口雅朗（熊本市教育委員会）
中原幹彦　（植木町教育委員会）
東　和幸　（鹿児島県教育委員会）
前迫亨一　（鹿児島県教育委員会）
吉本正典　（宮崎県教育委員会）

第３節　調査の方法と経過

１．調査の方法

平成３年度の試掘調査の結果、遺跡の範囲が約20,000㎡に及ぶため２カ年にわたって調査した。

①　表土剥ぎ

調査面積が広く、調査期間が長期にわたるため、表土を剥いだ後の遺構面の悪化が心配されるため８回に分けて表土剥ぎを行った。また球磨事務所川辺川土地改良推進室及び施工業者と協議を行い、施工を急ぐ箇所より順次調査した。

②　調査区の設定・調査の手順

上記の理由のため調査箇所は不規則で、表土剥ぎの地区にあわせてＡ～Ｇの大調査区を設けた。さらに実測、測量及び遺物取り上げのためにより小さな調査区である一辺が10ｍの正方形のグリッドを調査区全体に網の目のように設定した。グリッドは南北方向をアラビア数字で、東西方向をアルファベットで示した（第４図参照）。

調査は重機による表土剥ぎ及び調査区の清掃から始めた。遺構は平面形を確認の後、土層堆積の状況を確認するためのセクション・ベルトを残して掘り始める。次に土層観察と土層断面図の作成、そして遺物出土状況等の写真撮影、その後ベルトを取り除き平面図・断面図を作成し、再度写真撮影を行う。一方遺物包含層の調査では、１つのグリッドを単位として掘り下げを行う。その後平板・レベルを用い遺物を取り上げる。

２．調査の経過

平成４年６月から平成６年３月にかけて調査を行った。以下月ごとの進捗状況を記す。

［平成４年度調査］

６月　３日より発掘調査を開始した。調査事務所の設営・重機による表土剥ぎを行う。１回目の表土剥ぎの面積は約2,000㎡で、この調査区名をＡ区とした。削平を受けていることが予想された地区であり、表土を剥ぐと第Ⅶ層が露出した。しかし調査区北西隅では第Ⅲ層が残存し、埋設土器２基を検出した。調査員は古城と木村調査員の２名であった。

第１図　周辺地形図

７月　月末にはＡ区の調査を終了し、次のＢ区の表土剥ぎを行う。工事の都合により遺跡の北端へと飛ぶ。遺跡の最高所で、多くの遺構の存在が予想される地点である。表土を剥ぐと調査区の北東は良好な残存状態であったが、西側は削平を受けていることが判明した。岩崎・須恵・出合・酒井の４人の学生が調査に参加する。また月末より中川調査員が合流する。

８月　梅雨明けとともに暑さが本格的となり、土の乾燥が激しく遺構検出が困難を極める。水を調査事務所から一輪車で汲んで来ては散布するが、事務所と調査区が離れており、一向に作業ははかどらない。なんとか月末までにはすべての遺構を確認することができた。

９月　引き続きＢ区の調査を行う。今月の来訪者は九州大学西健一郎氏・城南町歴史民俗資料館清田純一氏・人吉市教育委員会鶴嶋俊彦・和田好史の両氏であった。

10月　今月の来訪者は熊本県文化財保護委員の渋谷敦・高田素次の両先生であった。

11月　中旬にＢ区の調査を終了した。次の調査区はＡ区の南側に飛ぶＣ調査区である。この頃より霧が頻繁に発生し、午前中は写真撮影はおろか、レベルの数値が読めない時もあった。

12月　引き続きＣ区の調査を進める。調査区南側で古墳時代の住居跡を検出するが、削平がひどい。また里道により半分以上破壊されていた。

１月　下旬にはＣ区の調査もほぼ終了し、Ａ区とＢ区の間の未調査区Ｄ区に移る。表土を剥ぐとおびただしい縄文土器が出土し始める。

２月　Ｄ区の本格的な調査に入る。熊本大学甲元眞之教授・別府大学橘昌信教授・八代高等専門学校佐藤伸二教授の指導を受ける。

３月　Ｄ区を引き続き調査する。空中写真撮影を実施する。今年度の作業を25日で終了した。

［平成７年度調査］

４月　14日より平成７年度の調査を再開する。引き続きＤ区の調査を行う。木村調査員が離れ、替わりに深田村灰塚遺跡の調査が始まるまでの間、野口・水野調査員の協力を得た。

５月　連休明けより北川調査員が調査に参加する。月末にはＤ区の調査も終盤を迎える。また深田村灰塚遺跡の調査が諸般の事情により延期されることが決定した。

６月　Ｂ区の西側を次回の調査区とすることとなり（Ｅ区）、初旬より表土剥ぎを行う。また灰塚遺跡調査延期のため沖松遺跡を２班に分けて調査することになり、調査区の南東端（Ｆ区）の表土剥ぎも平行して行う。Ｅ区を古城・水野、Ｆ区を野口・北川が担当する。しかし記録的な長雨のため調査が大幅に遅れることになった。

７月　長雨の影響が続く。たまの晴れ間も遺跡内が水没しているためほとんど調査ができない状態であった。下旬より中川調査員が加わる。

８月　長雨も峠を越えたが、遺跡内には土砂が堆積し、清掃に追われる。また８月下旬に深田村灰塚遺跡の調査が開始されることになり、野口・水野・北川調査員は灰塚遺跡の調査を担当することになる。

９月　調査員が２名になったため、Ｆ区の調査を先行することにした。

10月　Ｅ区を再開させる。熊本県立球磨商業高校の生徒が郷土巡見の一環として見学に訪れる。

11月　Ｆ・Ｅ区の調査を終了させ、Ｃ区の西側、遺跡の南西部分の調査（Ｇ区）に取り掛かる。昨年同様濃霧に悩ませられる。八代高等専門学校佐藤伸二教授・城南町歴史民俗資料館の清田純一氏の指導を受ける。

12月　Ｇ区の調査を本格的に始める。北側はかなり削平されており第Ⅵ層が部分的に露出していた。

１月　今月より宮崎調査員が加わる。一方古城は研修のため一時的に調査を離れた。

２月　遺跡の最南端部分の表土剥ぎにとりかかる。当初Ｈ区としたが、調査面積も狭いため、一括して同じＧ区とした。

３月　いよいよ調査の最後の月である。実測が追いつかず下旬より灰塚遺跡の水野調査員が応援にくる。また埋蔵文化財サポートシステムに遺物取り上げを委託した。かろうじて31日で調査を終了したが、最後はかなり粗い調査になってしまい後味の悪さを残す結果となってしまった。

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

１．地理的環境

熊本県は九州のほぼ中央にあり、北東から南東にかけての端部は、九州山地の山岳地帯である。沖松遺跡は、熊本県の南東部に位置し、九州山地に囲まれた人吉盆地に所在する。

その人吉盆地を南北に２分するかのように球磨川が流れ、球磨川の南部・北部には広大な台地が形成される。しかし北と南とでは、その地形的特徴に違いが認められる。南部は、九州山地の麓より多くの支流によって幾重にも重なり合った複合扇状地が広がる。一方北部の台地や丘陵地は、球磨川の支流川辺川により作られた扇状地と阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵部がその両側に広がる。このため南部がなだらかな台地なのに対して、北部は起伏に富むという印象を受ける。

また沖積地は球磨川及びその支流沿いに細長く存在し、特に人吉盆地の中央部で広く発達している。また北側の沖積地は、南側に比べ極端に狭く、このことが弥生時代以降の生産基盤の問題と関わり、古墳時代の大規模な高塚古墳が南側に集中することは、そのことをある面で暗示している。

２．歴史的環境

先土器時代

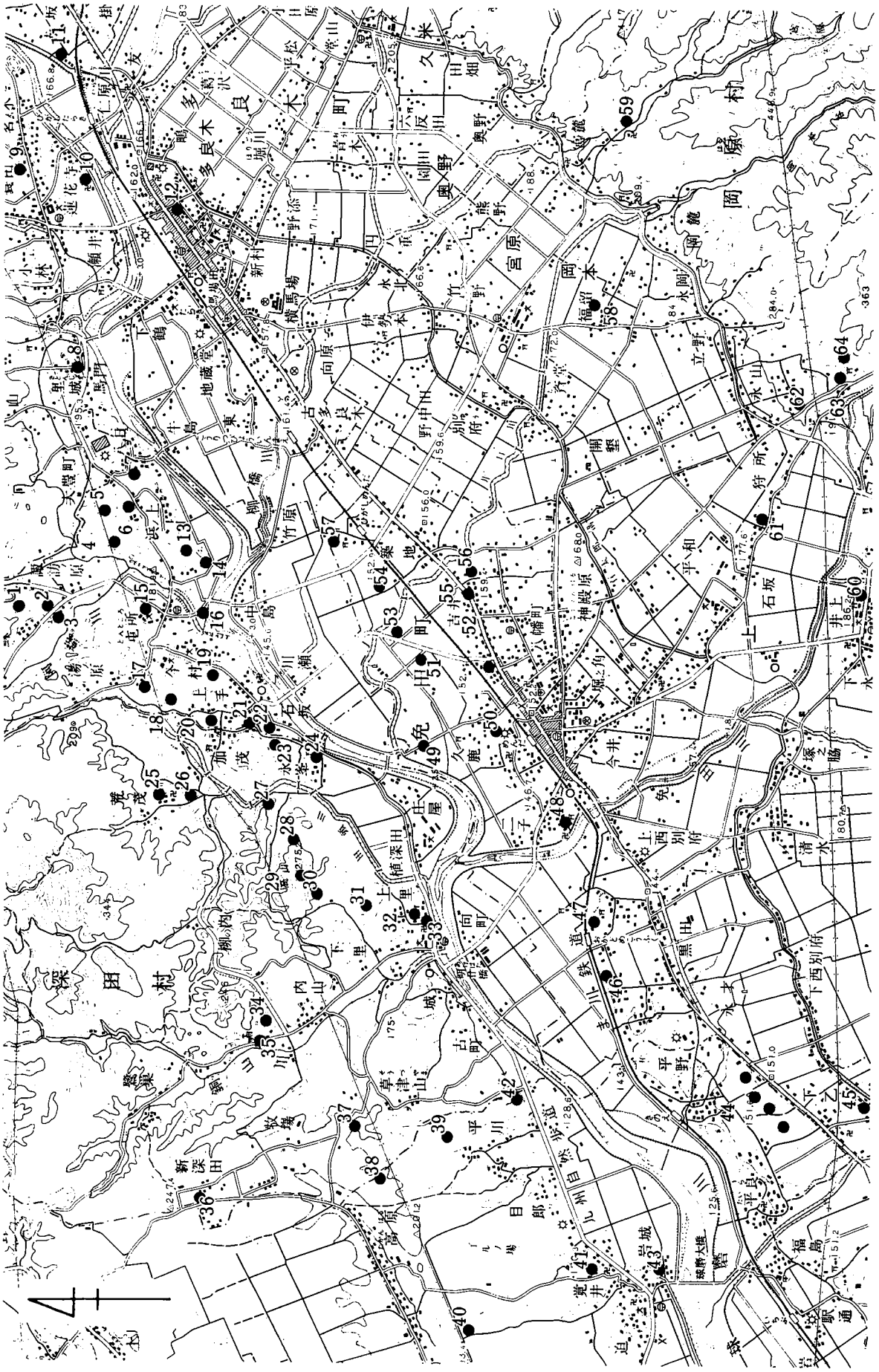
人吉・球磨地方の先土器時代の遺跡は今日までに53箇所が確認されている。分布の中心は人吉市周辺が多いが、近年須恵村内でも発見されている。須恵村内では平成３年度の発掘調査で中尾遺跡（17）でナイフ形石器・三稜尖頭器が、別府遺跡（18）では細石核が発見されている。また沖松遺跡でも１点ではあるがナイフ形石器が出土している。また須恵村管内に限らずもう少し目を広げると深田村下里遺跡（32）ではナイフ形石器文化以前のものが、同じく深田村の運動公園遺跡でも狸谷Ⅰ期石器文化のものが発見されている。また細石器文化のものでは多良木町里城遺跡（８）がある。

縄文時代

沖松遺跡では早期・後期・晩期に属する遺物が出土している。須恵村内の他の縄文時代の遺跡もほとんど上記の３時期のいづれかに該当する。縄文時代の前期から中期にかけての遺跡数が少なく、規模も小さいというのは人吉・球磨地方全体的な現象のようである。草創期の遺跡は須恵村では発見されていないが周辺では多良木町里城遺跡（８）が挙げられる。早期の遺跡は人吉・球磨地方ではかなり多く存在する。須恵村でも諏訪原遺跡（２）・浜ノ上遺跡（13）・柿ノ木遺跡（１）・馬渡遺跡（４）・堂園遺跡（19）・中尾遺跡（17）・隣接した深田村灰塚遺跡（23）など多くの遺跡が知られている。一方須恵村内で確実に前期・中期に属する遺跡は知られていない。人吉・球磨地方全体でも球磨村久保遺跡や人吉市射場ノ本遺跡・同鼓ケ峯遺跡などが挙げられる位である。次に後期から晩期にかけては遺跡の数も増大し規模も大きくなる。須恵村内では沖松遺跡の他に諏訪原遺跡・柿ノ木遺跡・馬場遺跡・別府遺跡・堂園遺跡などが存在する。その他この時期の遺跡として錦町大原天子遺跡（39）や人吉市中堂遺跡がある。中堂遺跡では後期から晩期の住居跡や埋設土器が検出されており、沖松遺跡との対比の点でも重要である。

弥生時代

沖松遺跡出土の弥生時代の資料としては重弧文土器などの小破片が少量出土している。須恵村内においても、弥生時代の資料が出土した遺跡は沖松遺跡のほかに８遺跡があるのみである。人吉・球磨地方全体を概観しても弥生時代前期・中期の遺跡は少なく、免田町下乙・本目遺跡（45）では亀ノ甲式・城ノ越式土器が、多良木町の大久保台地で城ノ越式土器が発見されているが、その詳細は不明である。その中で人吉市蟹作町中通遺跡では黒髪式土器に伴う円形の竪穴住居跡が検出されている。次に弥生時代後期になると遺跡数が増加し、独特の文様をもつ重



第２図　沖松遺跡周辺遺跡分布図　（１／25,000）

沖松遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	柿の木遺跡	須恵村柿の木	縄・弥	
2	諏訪原遺跡	須恵村諏訪原	縄・弥	縄文土器・石器、弥生土器・石器
3	小春遺跡	須恵村小春	縄	
4	馬渡遺跡	須恵村馬渡	縄	
5	八日遺跡	須恵村八日	縄	
6	毛谷遺跡	須恵村毛谷	縄	
7	京塚遺跡	須恵村京塚	縄	
8	里城遺跡	多良木町多良木里城	旧・縄	
9	青蓮寺遺跡	多良木町黒肥地北山下		
10	蓮華寺・相良頼景遺跡	多良木町黒肥地		
11	赤坂古墳	多良木町上赤坂	古	刀・クツワ・馬具
12	青銅製経筒	多良木町中央公民館		
13	浜ノ上遺跡	須恵村浜ノ上	縄・平	縄文土器、石器、土師器
14	浜ノ上横穴群	須恵村浜ノ上	古	
15	屯所遺跡	須恵村屯所		
16	中島遺跡	須恵村中島	弥	弥生土器
17	中尾遺跡	須恵村中尾	旧・縄	縄文時代晩期
18	別府遺跡	須恵村別府	旧・縄・古・奈・平	縄文時代土器・古墳時代土器
19	堂園遺跡	須恵村堂園	縄・奈・平	縄文晩期
20	沖松遺跡	須恵村沖松	旧・縄・弥・古・奈・平	縄文・古墳時代土器
21	上手遺跡	須恵村上手	弥	
22	石坂横穴群	須恵村石坂	古	馬具・須恵器
23	灰塚遺跡	深田村	縄・平・鎌	
24	永峰横穴群	深田村永峰	古	
25	荒茂横穴群	深田村荒茂	古	
26	勝福寺跡遺跡	深田村荒茂		
27	高山瓦窯跡	深田村高山		瓦窯、平瓦・軒平瓦
28	前平遺跡	深田村前平	縄	縄文土器・石器
29	高山城跡	深田村高山	歴	
30	赤坂窯跡推定地	深田村赤坂		須恵器、羽口
31	オンバガサコ遺跡	深田村萩尾	旧・歴	須恵器出土
32	下里遺跡	深田村下里	旧・縄	石錘、縄文晩期土器
33	下里横穴群	深田村下里	古	球磨川岸壁に開口
34	内山遺跡	深田村内山		石器・石鏃
35	万福寺遺跡	深田村内山		池跡・参道跡をとどめる
36	新深田遺跡	深田村新深田	古	地下式板石積石室墳
37	天子山遺跡	深田村草津山	弥	石庖丁１、弥生後期土器
38	木上益手遺跡	錦町木上益手	縄	縄文早期、塞ノ神式
39	大原・天子遺跡	錦町大原・天子	縄	縄文晩期土器、平安土師器・須恵器・近世屋敷・有肩打製石斧
40	夏女遺跡	錦町高原	弥・古	弥生後期古墳前期、鏡・銅剣
41	荒田横穴群	錦町木上荒田	古	道路改修で消滅
42	竜口横穴群	錦町木上龍口	古	５基確認
43	岩城横穴群	錦町木上岩城	古・縄	
44	四ツ塚古墳群	錦町木上三つ塚	古・弥	円墳４基
45	下乙本目遺跡	免田町本目	弥・古	
46	才園古墳	免田町畑中	古	円墳、金環・刀子・クツワ・管玉・切子玉・丸玉
47	黒田墓誌銅板出土地	免田町平城	奈	銅板１枚
48	宝塚古墳	免田町久保	古	
49	上久鹿遺跡	免田町久鹿		土師器
50	前田遺跡	免田町前田	平	瓦(布目)軒平
51	古屋敷遺跡	免田町竹下		湖州鏡・土師器・滑石鍋
52	市房隠遺跡	免田町馬立原	弥	弥生土器
53	鬼の釜古墳	免田町久鹿萩原	古	円墳、横穴式石室
54	上築地遺跡	免田町築地権現		弥生後期土器、石鏃・石庖丁
55	廻迫遺跡	免田町神の田		縄文土器、石鏃
56	廻り迫蔵骨器出土地	免田町神の田		須恵器・蔵骨器
57	古城遺跡	須恵村古城	縄	
58	福留古墳	岡原村岡本福留	古	古墳、剣
59	宇土谷蔵骨器出土地	岡原村宮原宇土谷		歴史、有肩打製石器
60	井上遺跡	上村井上		縄文～弥生土器
61	石坂古墳	上村石坂	古	消滅
62	永山遺跡	上村永山	古	縄文～弥生、石庖丁
63	伊勢尾蔵骨器出土地	上村上の原		蔵骨器１個
64	上の原窯跡	上村上の原	奈良～平安	須恵窯跡

弧文土器（免田式土器）が多く出土するようになる。人吉市荒毛遺跡ではＶ字溝が発見され、重弧文土器が多量に出土している。また免田町下乙本目遺跡・市房隠遺跡（52）でも多量の重弧文土器が出土している。一方この時期の集落遺跡としては夏女遺跡（40）がある。この遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡69基が発見されている。遺物としては、重弧文土器や石庖丁それに青銅鏡・銅釧が発見されている。その他青銅器を出土した遺跡として多良木町の大久保台地にある槍掛松遺跡があり、細形銅剣が発見されている。その他特記すべき点としては前述の下乙本目遺跡で墳丘墓が検出されたことである。

古墳時代

沖松遺跡では27基の古墳時代の住居跡を検出した。人吉・球磨地方における当時の集落の調査例としては、人吉市アンモン山遺跡・前述の中通遺跡・錦町夏女遺跡や相良村深水小園遺跡がある。また球磨・人吉地方の古墳時代の特色として挙げられるのは、地下式板石積石室墓の存在である。須恵村内ではその存在は知られていないが、人吉・球磨地方では人吉市荒毛遺跡・錦町農芸学院遺跡・深田村新深田遺跡（36）・免田町下乙本目遺跡などが知られている。これら地下式板石積石室墓のある遺跡では、弥生時代後期の重弧文土器や、弥生後期から古墳時代初頭と考えられる小型箱式石棺が発見されている。

人吉・球磨地方で高塚古墳が作られるようになるのは、５Ｃ後半以降からのことと考えられるが、現在のところ須恵村内には高塚古墳は知られていない。人吉・球磨地方全体を概観すると球磨川南側の平野部に球磨郡内唯一の前方後円墳を有する亀塚古墳群、人吉・球磨地方で最大径の円墳がある四塚古墳群（44）や鍍金神獣鏡が出土した才園古墳群（46）・巨石墳で刳り貫き玄門を有する鬼の釜古墳（53）などの有力古墳が作られている。しかもそれは時代が新しくなるにつれ西から東に移動しているようだ。またその周辺部に小型の古墳群が作られている。特に水上村千人塚古墳群は74基の小円墳からなる。一方横穴墓に目を向けると、須恵村内では馬具や直刀・鉄鏃が出土している石坂横穴墓群（22）や須恵器高坏が出土した浜ノ上横穴墓群（14）が存在する。その他特記すべきこととしては宮崎県に多い地下式横穴墓が人吉市天道ケ尾で初めて発見されている。

歴史時代

沖松遺跡では奈良・平安時代の土坑・掘建柱建物跡や中世の竪穴式住居跡などが発見されている。その他須恵村内では多くの奈良・平安時代の遺跡が見つかっている。やはり掘建柱建物跡１棟が検出され、多くの土師器・須恵器が出土した別府遺跡、越州窯系青磁・緑釉陶器の破片が副葬された土壙墓が発見された堂園遺跡や須恵器・土師器が発見されている屯所遺跡（15）・浜ノ上遺跡などがある。

須恵村を含めた免田町・上村・深田村の東端地域は「球玖郷」に比定されると言う説が有力である。この地域に目をむけると、前述した須恵村内の遺跡以外に古代瓦が出土した免田町久鹿の前田遺跡（50）や蔵骨器が発見されている免田町廻り迫遺跡（55）・岡原村宇土谷遺跡（59）・上村伊勢尾遺跡（63）・翊登遺跡・東小原遺跡・西小原遺跡や銅板製墓誌が出土した黒田遺跡（47）がある。また生産遺跡としては須恵器の窯跡が発見されている錦町下り山遺跡・七中口遺跡・上村上ノ原遺跡（64）、瓦窯跡では深田村高山遺跡（27）がある。この他窯跡が推定される遺跡に須恵村上阿蘇遺跡がある。以上のことや古墳時代後期の有力古墳（才園古墳群・鬼の釜古墳）の存在から球磨郡の郡家を免田町久鹿付近とする説もある（鶴嶋1995）。

一方熊本県教育委員会が平成５年より発掘調査を継続している深田村灰塚遺跡では鎌倉初期の遺構として、掘建柱建物跡50基以上・竪穴式住居跡・土坑・井戸跡・柵・溝・土塁・白磁を出土した土壙墓や遺物に輸入陶磁器が多いなど12～13世紀頃の須恵氏の居館跡として注目されている（木崎1996）。

第２節　遺跡の概要

１．遺跡の概要

沖松遺跡の発掘調査は県営緊急畑地帯総合整備事業須恵・深田地区の計画に伴い平成４・５年度に実施された。

遺跡は、熊本県球磨郡須恵村字沖松に所在し、人吉盆地の北東寄り、球磨川の北側の田頭川と阿蘇川に挟まれた丘陵地に位置する。須恵村の西端側で、深田村と境界境をなす。遺跡の標高は約175mで、その地形は北から南に緩やかにその高度を下げていく。

遺跡の現況は畑地として利用され、調査区の中央よりやや東側に南北に延びる里道が走っていた。段々畑となり、調査区の四方を道路により遮断されている。特に北側・西側は道路工事により切断されている。本来の遺跡はもう少し北西に広がると考えられる。また遺跡丘陵縁辺部の東側は谷となり、現在は水田として利用され、その谷部には北瀬湧水と呼ばれる湧水が存在し、現在も使用されている。なお遺跡から東側現水田面まで

先土器時代の資料はナイフ形石器が１点、縄文時代早期の資料としては、土器の小破片が少量出土した。いずれも層位的にとらえられたものではない。そのほかに縄文時代早期のものと考えられる集石がある。

当遺跡の主要な時代は縄文時代後期後半から晩期前半にかけて・古墳時代・平安時代の３時期である。縄文時代後期後半から晩期前半の時期には多量の土器・打製石斧が出土しており、埋設土器や焼成粘土塊も検出されている。古墳時代では５世紀から６世紀にかけての竪穴式住居跡が検出されている。平安時代では土坑・掘建柱建物跡等が確認されている。

２．遺跡の基本層序

遺跡で認識された自然層を提示し、また平成３年度に調査を実施した近接の中尾遺跡、別府遺跡の層位を参照し、それぞれの遺物の包含位置について説明する事にしたい（第３図）。

第Ⅰ層（表土）

耕作土である。

第Ⅱ層（黒色砂質土）

きめ細かく引き締まっている。縄文時代の遺物から近世の遺物を含むが、主に奈良・平安時代以降の遺物が主体である。

第Ⅲ層（黄褐色土）

アカホヤ火山灰層である。この層は、その土質の違いによりさらにⅢａ層とⅢｂ層に分層できる。Ⅲａ層は、ふかふかとした細かい砂粒で土壌化したアカホヤ火山灰の二次的な堆積層である。縄文時代後期から中世の遺物を含むが、主に縄文時代後晩期及び古墳時代の包含層である。Ⅲｂ層は不純物を含まないアカホヤ火山灰の一次堆積層である。

第Ⅳ層（黒色砂質土）

粒子はきめ細かく不純物を含まない。別府・中尾遺跡での縄文時代早期の遺物包含層に対応する。一部にはガチガチに固まった黒色のブロックを含む一般に苦土と呼ばれるものが認められる。

第Ⅴ層（淡褐色砂質土）

きめ細かく硬質のブロックを含む。中尾・別府遺跡では細石器文化の遺物包含層に対応する。

第Ⅵ層（黄褐色土）

姶良カルデラ起源の入戸火砕流である。この層の上部に若干青っぽい硬質土がのる。また下部には黒っぽい硬質土が存在するが、細分が難しい。無遺物層である。

第Ⅶ層（暗褐色粘質土）

きめ細かく不純物をほとんど含まない。無遺物層である。

第Ⅷ層（黒褐色粘質土）

きめ細かく不純物をほとんど含まず、Ⅶ層より粘性が強い。無遺物層である。

第Ⅸ層（明茶色粘土）

きめ細かく不純物をほとんど含まない。

これらの基本層序は、遺跡全体を見通したうえで決定したものであるが、遺跡内の地点により各層の厚さは様々であり、既に削平されたりして存在しない層もある。基本的に北から南に向かい傾斜しており、約150ｍ南へ下がると約５ｍの比高差がある。調査区の北東端を最高箇所としてまず南西に傾斜し、横軸15前後の箇所より南東に傾斜し始める。

東西土層断面をＢ16～Ｋ16付近（第４図ａ～ｂ・第５図）で観察すると、全体的に西から東に傾斜している。第Ⅲ層は全域で認められ、その厚さは20～

60㎝である。縄文土器の集中する箇所のＤ16～Ｈ16付近での厚さは50～60㎝である。縦軸Ｅ付近で一旦僅かに高くなり、その後また高さを減じる。また第Ⅳ層も同様であるが、縦軸Ｇ付近より、苦土となり、住居跡の硬化面と誤認させられる。なお第Ⅵ層は認められないようである。

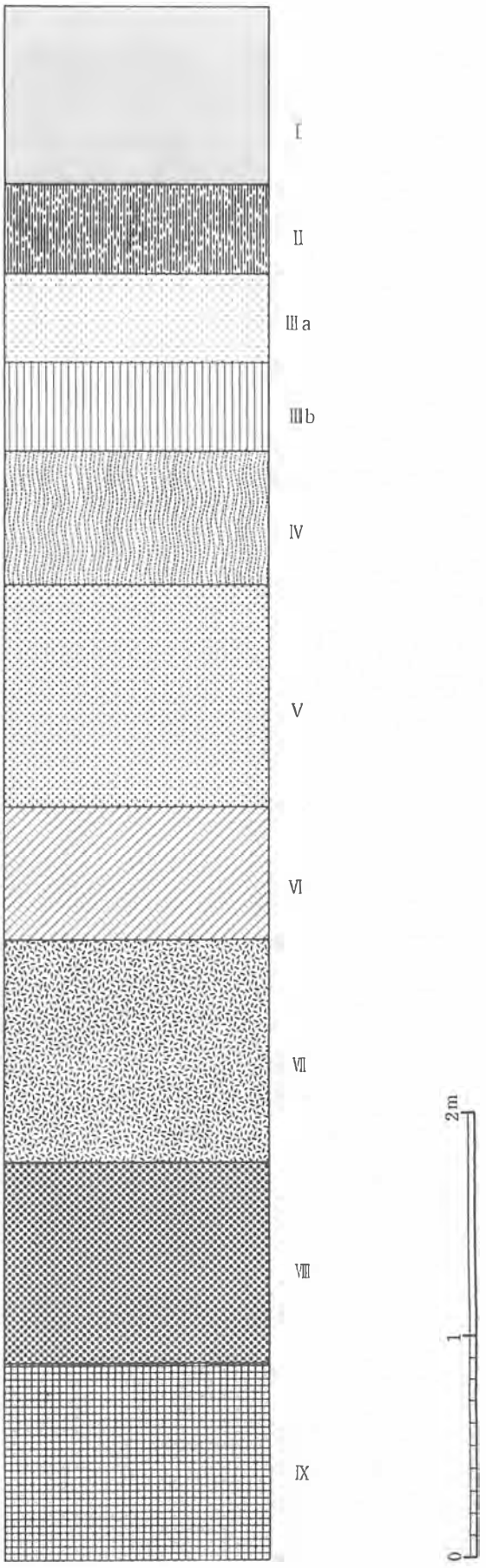
次にＤ７～Ｊ７付近の東西土層断面（第４図ｅ～ｆ・第５図）を見てみる。この箇所も西から東へ傾斜している。この付近の調査区西側端はすでに表土を剥ぐと第Ⅵ層が露出

層に第Ⅳ層が確認出来るようになる。逆に縦軸Ｆ付近になると第Ⅵ層の

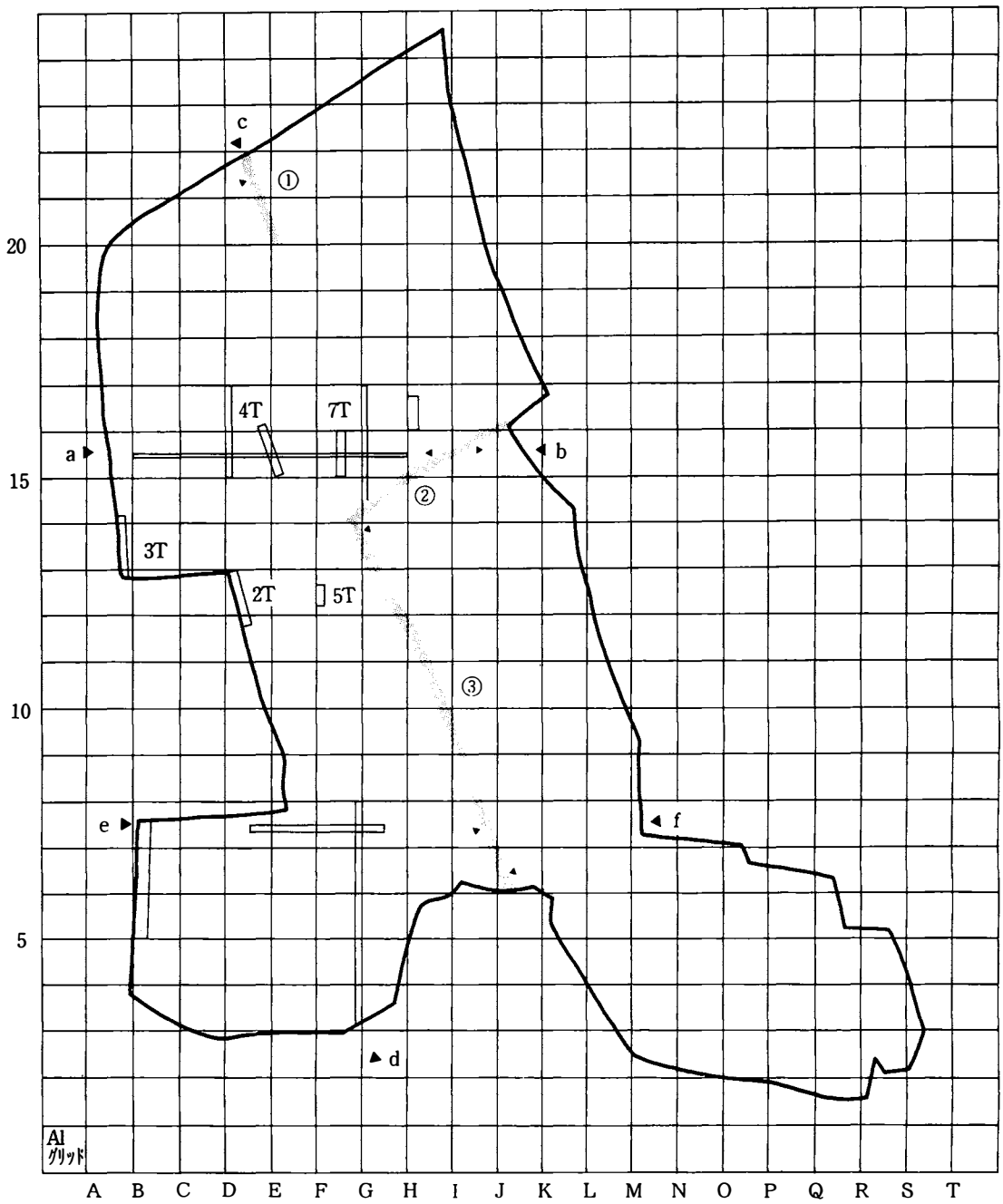
Ⅳ層のうえに第Ⅲ層が更にかぶさる。その厚さは約30㎝前後である。さらに東に行くと、縦軸Ｊ付近で第Ⅲ層は厚さ10㎝にも満たなくなり、その後第Ⅲ層・第Ⅳ層も確認できなくなり、第Ⅶ層が露出している。恐らく第Ⅵ層は西側部分のみしか存在しないものと思われる。一方第Ⅲ・Ⅳ層が東側で確認できなくなるのは、削平によるものと考える。ただしそれらの層はそれほど厚い堆積とは考えられない。

一方南北土層断面（第４図ｃ～ｄ・第５図）について観察することにする。基本的には南へ傾斜している。一貫した土層を観察することができず、Ｅ22～Ｅ21の土層、Ｇ17～Ｇ14付近のもの、Ｉ11付近、Ｇ８～Ｇ３付近の土層を見ていく。ここでは第Ⅲ・Ⅳ層

うが、その間に第Ⅲ層は確認できない。これはこの箇所が段落ちとなっており、削平されていると推定できる。Ｇ17グリッドの途中より第Ⅲ層が確認できるようになる。またこの箇所では第Ⅴ・Ⅵ層は存在しない。その後Ｇ15グリッドまでは同様で第Ⅲ層の厚さは約50㎝程である。Ｇ14グリッド付近になると第Ⅲ・Ⅳ層が確認出来なくなる。この付近も段落ちとなっており、削平のためと考えられる。逆に第Ⅳ層は確認できる。次のＩ11グリッド付近で第Ⅳ層がわずかながら認識できるようになる。その後のＧ８～Ｇ３グリッド付近で第Ⅲ層が40～50㎝の厚さで続く。しかし南に行くにつれ第Ⅲ層の撹乱が多く見られるようになり、調査区南端では第Ⅲ層の厚さも数㎝程度になる



第３図　基本土層図

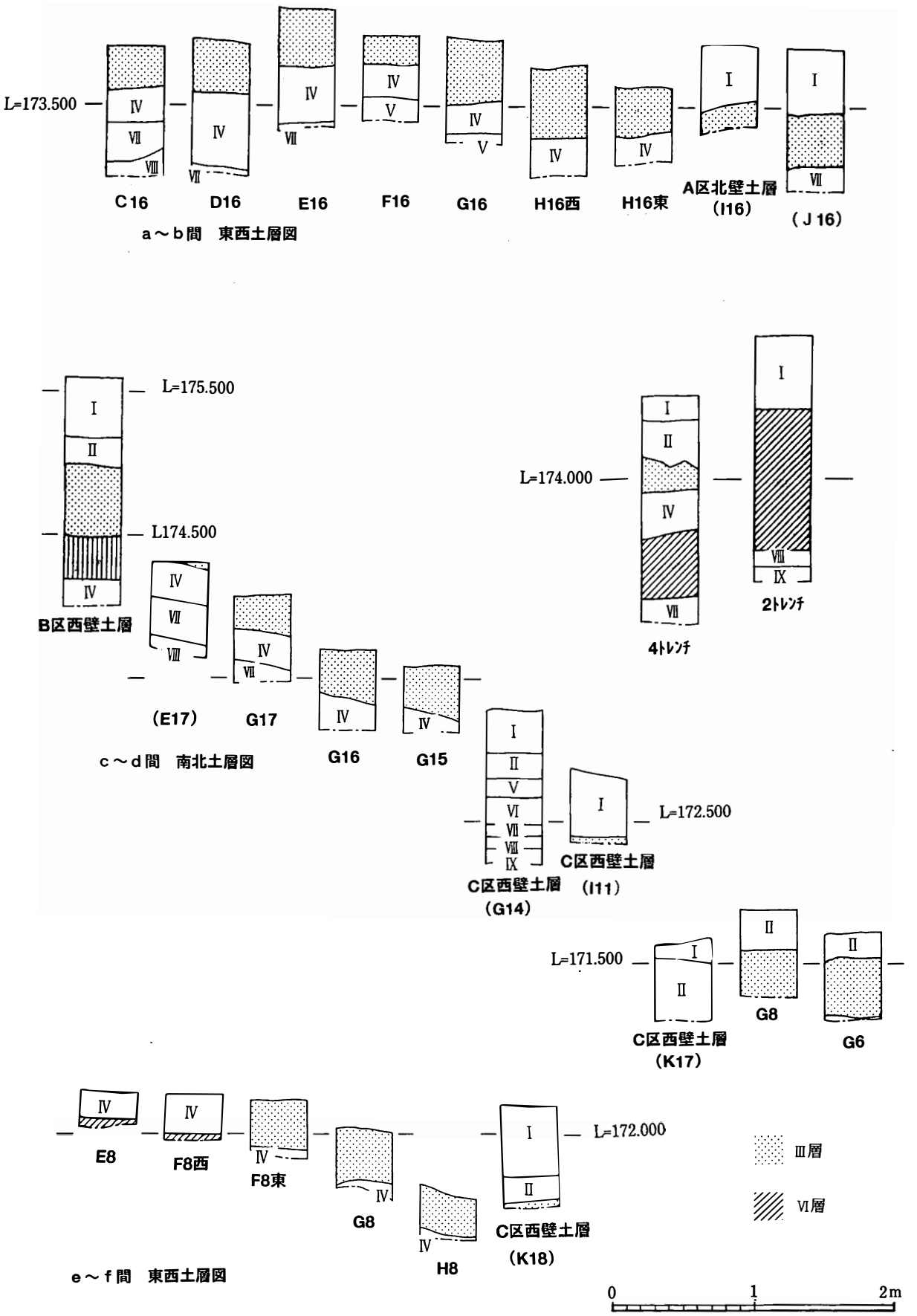


① B区西壁土層図
② A区北壁土層図
③ C区西壁土層図

グリッド名；数値・アルファベットの交差する坑の南西グリッドが当該グリッド

0　50　100m

第４図　主要トレンチ配置図



第５図　遺跡縦断・横断土層模式図

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　先土器時代の遺物

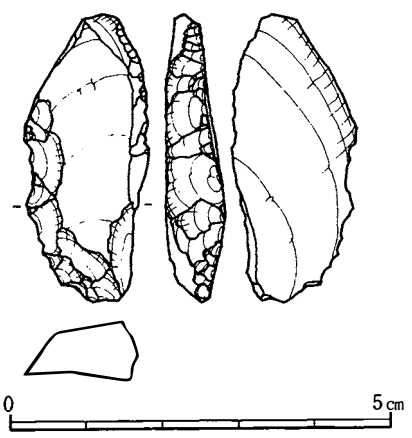
１．遺物（第６図）

先土器時代の資料としては、ナイフ形石器１点がある。ただしその出土状況は原位置からのものではなく、第Ⅲ層からの出土である。石材はチャートである。不定形の横長剥片を素材とし、右側縁部及び左側縁部基部にブランティング加工を施す。

第２節　縄文時代早期の遺構と遺物

１．遺物の出土状況（第７図）

縄文時代早期の遺物としては、土器片が９点出土した。層位的に捉らえられたものはなく、表土剥ぎ後の遺構検出のための清掃に伴い出土したものがほとんどである。これは第Ⅱ章で述べたとおり調査前にすでに一度整地が行われ段々畑になっているためと考えられる。出土した土器の３点が調査区の北側（Ｂ区）にあり、この地域の段落ちとなってる箇所は、既に第Ⅱ・Ⅲ層が削平されていた。一方調査区南西部（Ｇ区）で土器片４点や石製品が少量出土しているがやはり第Ⅱ・Ⅲ層が削平されていた地点であり、さらに西側にいくと第Ⅳ層も削平されている。



第６図　先土器時代石器実測図

２．遺構とその位置（第７図）

集石遺構６基を検出した。そのうちの５基が調査区の北側（Ｂ区）で検出された。この地域は既に述べたように、段々畑に整地され第Ⅱ・Ⅲ層が削平されている箇所が見受けられる地点である。

１号集石（第８図）

Ｆ21グリッドにおいて検出した。掘り込みをもたず、礫群として捉らえたほうがいいのかも知れない。石の散布状態は約２ｍ四方内に収まり、集中度は弱い。土器の小片が石に混り３点出土したがいずれも細片で図化に耐えるものはなく、時期を特定できるものではない。

２号集石（第８図）

Ｆ20グリッドにおいて検出された集石で、土坑は、不整な楕円形を呈し、長軸3.45ｍ・短軸2.45ｍ・深さ0.60ｍ程を測る。土坑内には最大で15㎝程の礫及び破砕した礫が詰まっている。また微細な炭化物を検出した。

３号集石（第９図）

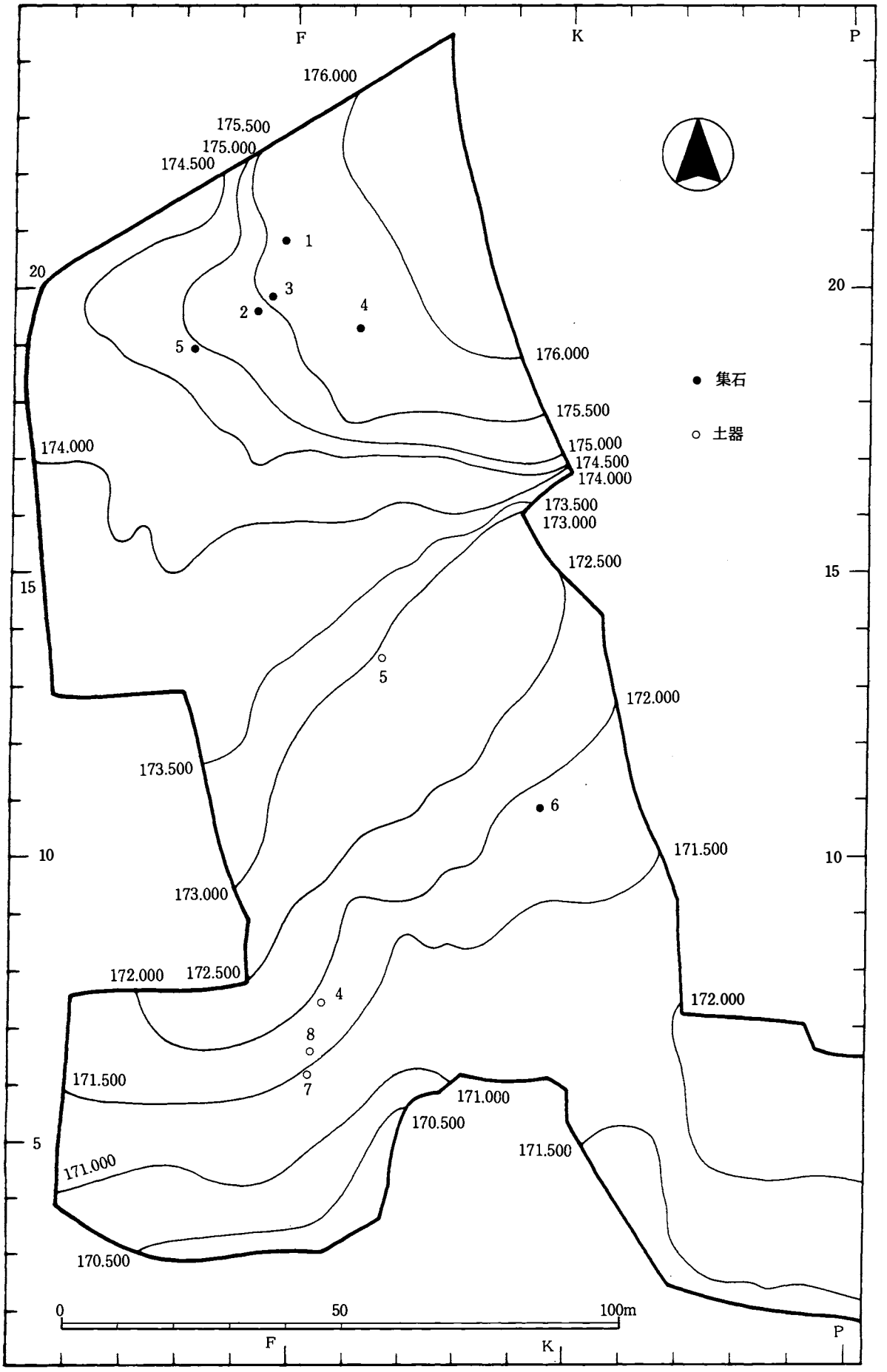
Ｆ20グリッド内、２号集石の北東に位置する。土坑は、不整形を呈し、長軸3.05ｍ・短軸2.05ｍ・深さ0.22ｍ程を測る。土坑内には最大で15㎝程の礫及び破砕した礫が詰まっている。微細な炭化物を検出した。また礫に混じり焼成粘土塊が出土した。

４号集石（第10図）

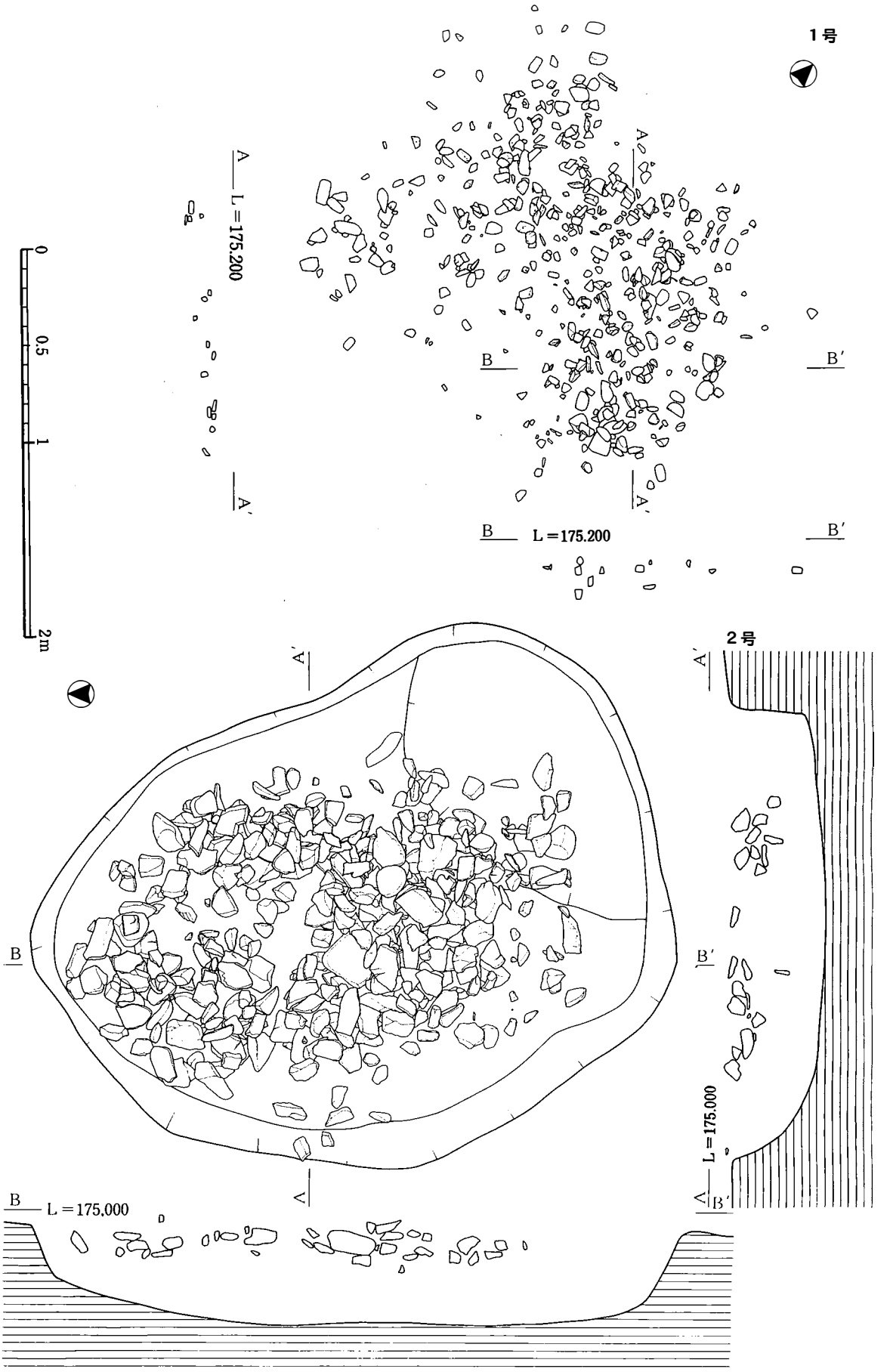
Ｈ20グリッドにおいて焼けた５㎝程度の礫が散乱した状態で検出された。石の散布状態は、約３ｍ四方に広がるが、集中度は弱く、厚さはほとんどない。礫は火を受けて割れているものと思われる。掘り込みをもたず、１号同様礫群として捉らえたほうがいいのかも知れない。

５号集石（第10図）

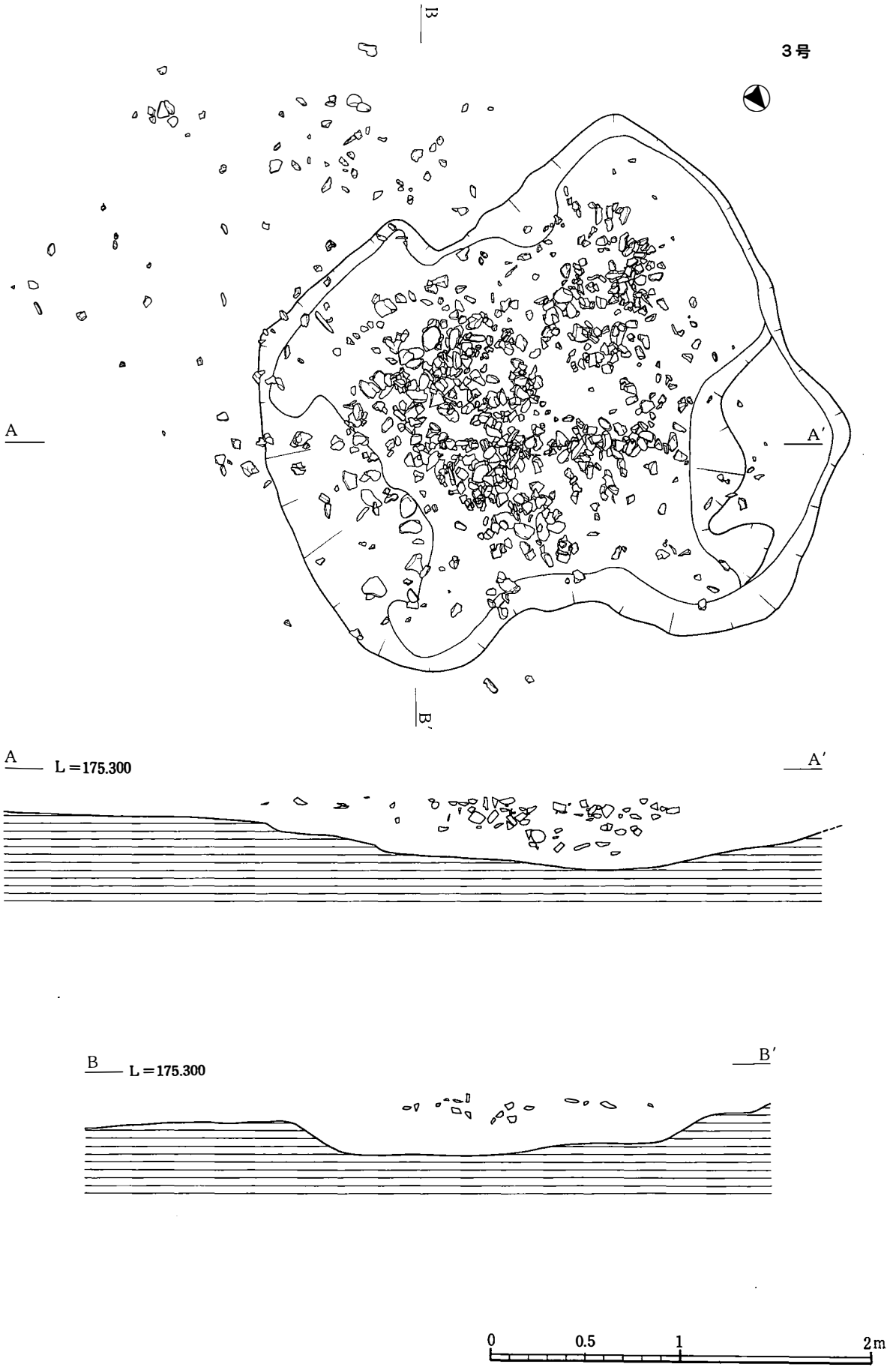
Ｅ19内グリッド内に位置する。土坑は、不整な楕円形を呈し、長径1.88ｍ・短径１.22ｍ・深さ0.25ｍ程を測る。土坑内には５～15㎝大の礫が詰まっている。また微細な炭化物を検出した。



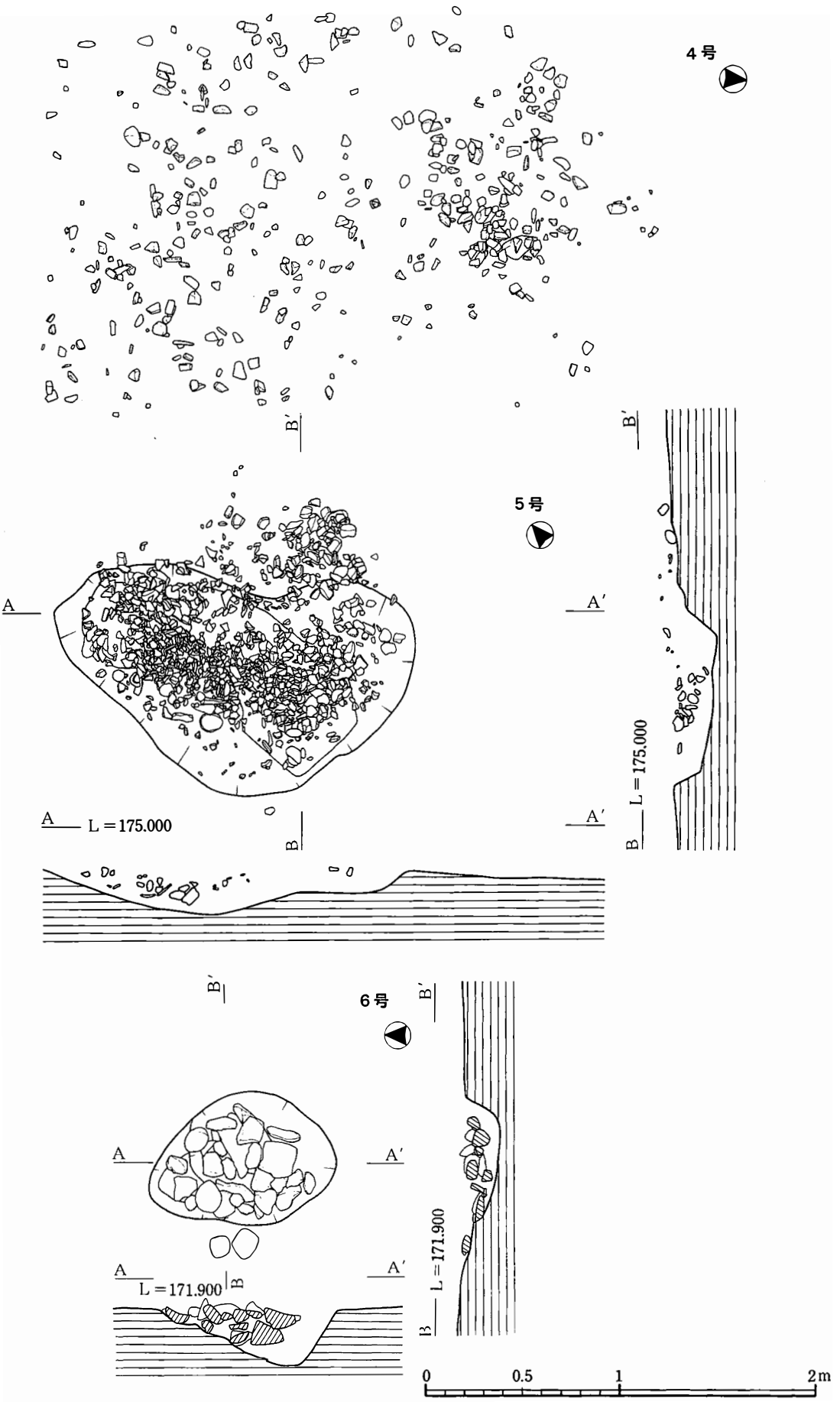
第７図　縄文時代早期遺構配置図・土器分布図



第８図　１・２号集石実測図



第９図　３号集石実測図



第10図　4～6号集石実測図

６号集石（第10図）

１基だけ他の集石から離れＬ11グリッド内に所在する。土坑は、第Ⅲ層を掘り込んでおり、上記の集石とは時期を異にすると思われるが一括してこの節で取り扱う。不整な楕円形を呈し、長径0.96ｍ・短径0.67ｍ・深さ0.20ｍ程を測る。土坑内には10～20㎝大の礫が詰まっている。微細な炭化物を検出した。

３．土器（第37図１～８）

出土した土器９点のうち８点を図化した。１は撚糸文土器の口縁部である。２～５は押型文土器で、２は格子目文、３は山形文、４・５は楕円文である。６は塞ノ神式土器である。７は手向山式土器の口縁部片である。８も手向山式土器の可能性が高い。

第３節　縄文時代後期から晩期の遺構と遺物

１．埋設土器

縄文時代後期から晩期にかけての遺構として、確実なものは埋設土器遺構のみである。一般的に埋甕、埋鉢と呼称されているものであるが、今回は山田康弘氏の提唱により埋設土器という名称を使用する（山田1994）。

①　埋設土器の分布と検出状況（第11図）

掘り込みの確認は困難で、わずかな土色の違い及び土の固さを判断基準としたが、そのいくつかのものについては掘り込みが不明瞭な点がある。当初埋設土器33基を認定していたが、掘り方が不明で、土器の残存状況の悪いものについては除外した。それにより今回埋設土器と認定したものは22基になる。なお、今回埋設土器として認定せず除外したものや、既に取り上げた後に埋設土器の可能性がでてきたものについては、包含層からの遺物として掲載している。分布は大きくは北と南に位置するものの２群に分かれる。いずれも周辺から多くの縄文時代後・晩期の土器が出土する。

１号埋設土器（第12図）

Ｋ18グリッド内より検出した。削平され深鉢形土器の胴部下半部のみで底部を欠損している。掘り込みは平面では確認できず、断面により判断したが、それによると現存で径約18㎝の円形を呈し、深さ約13㎝を測る。

２号埋設土器（第12図）

Ｅ18グリッド内に位置する。削平され深鉢形土器の胴部下半部のみ残存する。掘り込みは現況で長径約45㎝・短径約40㎝の楕円形を呈す。深さは約13㎝を測る。

３号埋設土器（第12図）

Ｄ17グリッド内より出土した。残存状況は良く、深鉢形土器の口縁部を欠損するのみである。掘り込みは現況で径約53㎝前後の円形を呈す。深さは約26㎝を測る。

４号埋設土器（第12図）

Ｄ17グリッドとＤ18グリッドにまたがった箇所より検出した。深鉢形土器の口縁部を欠損するが、底部まで残存する。掘り込みは現況で径
形を呈し、深さは約30㎝を測る。

５号埋設土器（第12図）

Ｄ17グリッド内より出土した。深鉢形土器の口縁部分を欠損する。掘り込みは現況で
径約45㎝の不整な楕円形を呈す。深さは約25㎝を測る。

６号埋設土器（第12図）

Ｆ17グリッド内より検出した。深鉢形土器の口縁部を欠損するが、底部まで残存する。掘り込みは現況で長径約56㎝・短径約44㎝の楕円形を呈す。深さは約20㎝を測る。

７号埋設土器（第13図）

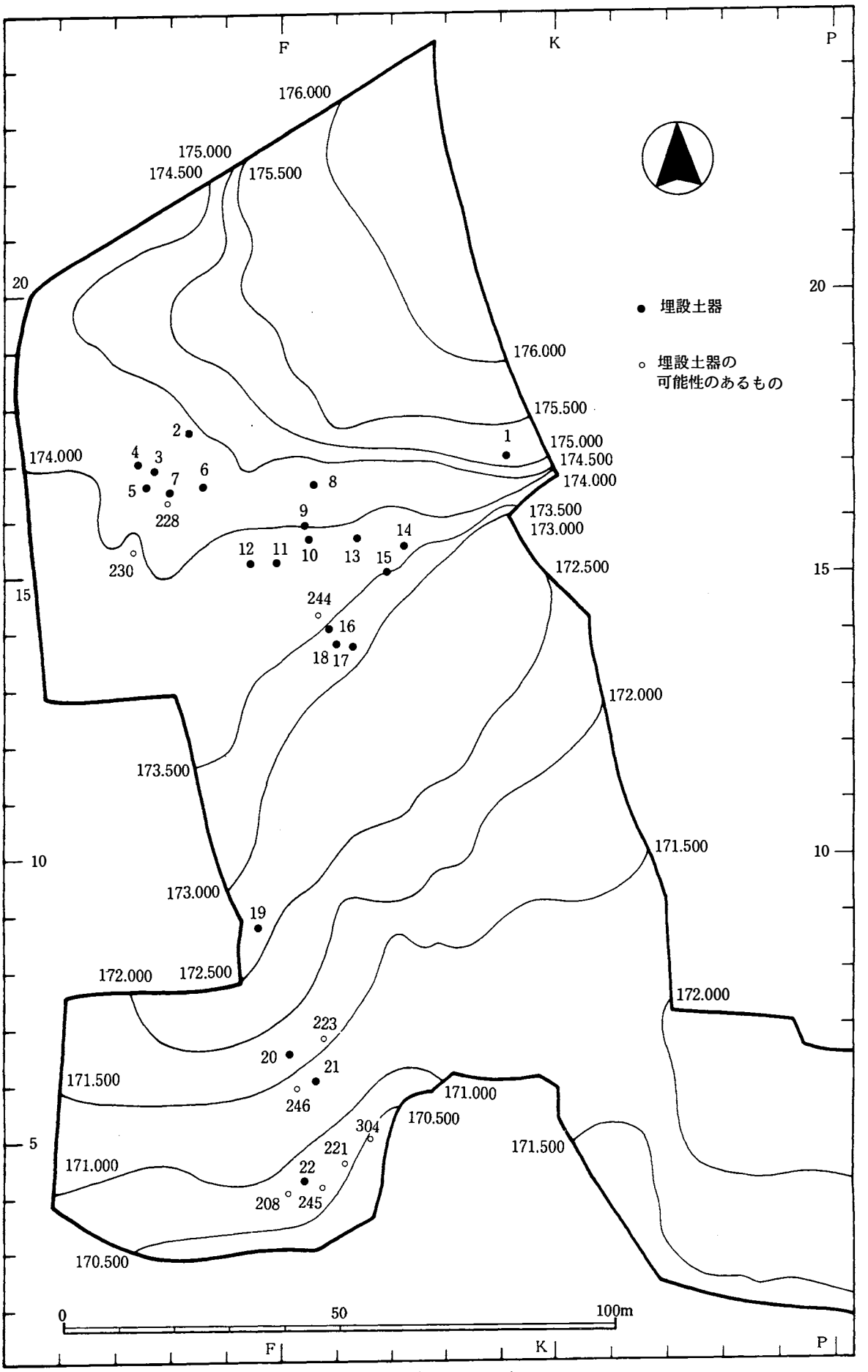
Ｄ17、Ｅ17グリッド内にまたがる地点で検出された。深鉢形土器の口縁部の一部を欠損するものの残存状況は良い。掘り込みは現況で径50㎝前後の円形を呈し、深さは約35㎝を測る。

８号埋設土器（第13図）

Ｇ17グリッド内に位置する。深鉢形土器の口縁部、胴部及び底部の一部を欠損する。掘り込みは現況で径85㎝前後の円形を呈し、掘り込みの深さは約40㎝を測り、基底面は第Ⅳ層まで達している。

９号埋設土器（第13図）

Ｇ16グリッド内より検出された。深鉢形土器の上に、浅鉢形土器を蓋として被せているものである。



第11図　埋設土器分布図

深鉢形土器は底部の一部を欠損するが残存状況は良く、浅鉢形土器片の一部は深鉢形土器内に落ち込んでいた。掘り込みは現況で径60㎝前後の円形を呈し、掘り込みの深さは約40㎝を測る。他の埋設土器より深く埋められており、第Ⅲ層下層から掘り込んだと考えられ、基底面は第Ⅳ層まで達しており、この時期の竪穴式住居跡は検出されていないが、住居内の床面より掘り込んだ可能性もあり得る。

10号埋設土器（第13図）

Ｇ16グリッド内より検出した。深鉢形土器の上に、浅鉢形土器を蓋として被せているものである。深鉢形土器は口縁部から底部までの殆どが残存し、浅鉢形土器は深鉢形土器の中に斜めに落ち込でいた。現況で掘り込みは径60㎝前後の円形を呈し、掘り込みの深さは約50㎝を測る。９号埋設土器と同様に第Ⅲ層下層から掘り込んだと考えられ、基底面は第Ⅳ層まで達しており、住居の床面より掘り込んだ可能性もあり得る。

11号埋設土器（第13図）

Ｆ16グリッド内に位置する。深鉢形土器の上に、浅鉢形土器を蓋として被せているものである。深鉢形土器は底部を欠損する。深鉢形土器の口径より浅鉢形土器の口径が小さいため、落とし蓋状に浅鉢形土器が中に落下していた。埋設土器と認識するのが遅れ既に掘削していたため掘り込みは不明である。

12号埋設土器（第14図）

Ｆ16グリッド内より検出した。深鉢形土器の胴部下半のみ残存している。現存で掘り込みは径30㎝前後の円形を呈し、掘り込みの深さは約25㎝を測る。

13号埋設土器（第14図）

Ｈ16グリッド内に位置する。深鉢形土器の胴部下半のみが残存し、上部は破壊され落ち込んでいた。掘り込みは現況で長径約65㎝、短径約55㎝の楕円形を呈す。深さは約25㎝を測る。９・10号同様少なくとも第Ⅲ層下層から掘り込んだと考えられ、基底部は第Ⅴ層に達する。

14号埋設土器（第14図）

Ｉ16グリッド内より出土した。深鉢形土器で口縁部の一部を欠損する。当初埋設土器と認識しないまま削平してしまったため掘り込みは不明である。

15号埋設土器（第14図）

Ｈ16杭付近より検出した。深鉢形土器で胴部上半を欠損する。土層観察用ベルトにかかっていたため検出が遅れ、現存で掘り込みは径42㎝前後の円形を呈し、掘り込みの深さは約20㎝を測る。

16号埋設土器（第14図）

Ｇ15グリッド内より検出した。深鉢形土器で胴部の一部と底部を欠損する。掘り込みは現況で長径約120㎝、短径約95㎝の楕円形を呈す。深さは約75㎝を測る。

17号埋設土器（第15図）

Ｈ14グリッド内の第Ⅲａ層上面で検出した。深鉢形土器で口縁部及び底部を欠損する。現存で掘り込みは径40㎝前後の円形を呈し、掘り込みの深さは約30㎝を測る。

18号埋設土器（第15図）

Ｈ14グリッド内で検出した。深鉢形土器の上に、浅鉢形土器を蓋として被せているものである。深鉢形土器は口縁部から底部までの殆どが残存する。現存で掘り込みは径55㎝前後の不整な円形を呈し、掘り込みの深さは約33㎝を測る。第Ⅲａ層上面で掘り込みを確認し、基底部は第Ⅳ層に及ぶ。

19号埋設土器（第15図）

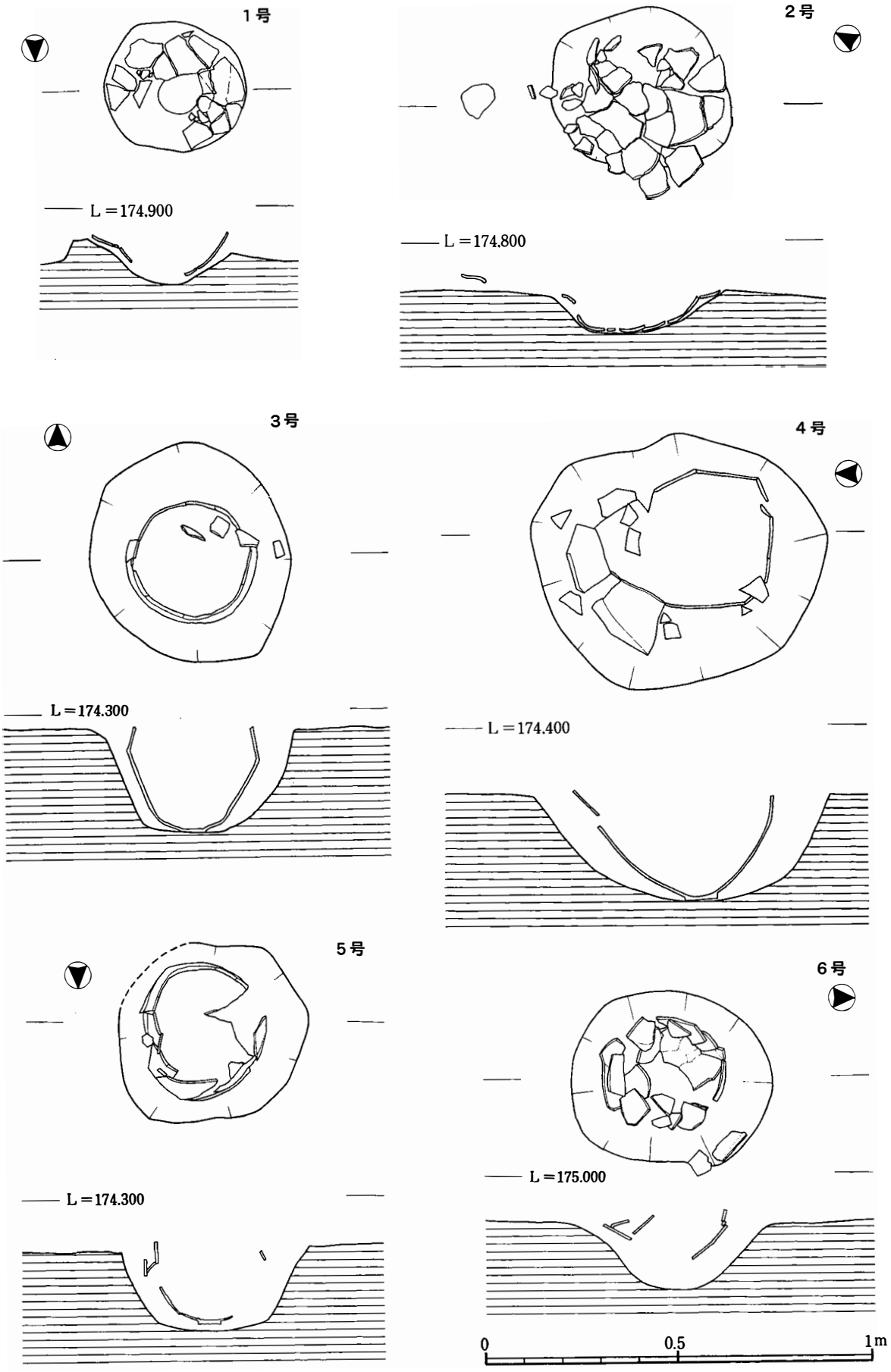
Ｆ９グリッド内に位置する。径約70㎝の円形の土坑内中央よりやや東に寄った、深さ約10㎝のところより浅鉢形土器を伏せた状態で検出した。しかし深鉢形土器は存在せず、浅鉢形土器の下に特別な掘り込みも存在しなかった。また土坑の埋土も他の埋設土器の埋土が第Ⅲ層と同じ土色なのに対して黒色粘質土で、果たして原況をとどめているか疑問ではあったが、埋設土器として掲載した。

20号埋設土器（第15図）

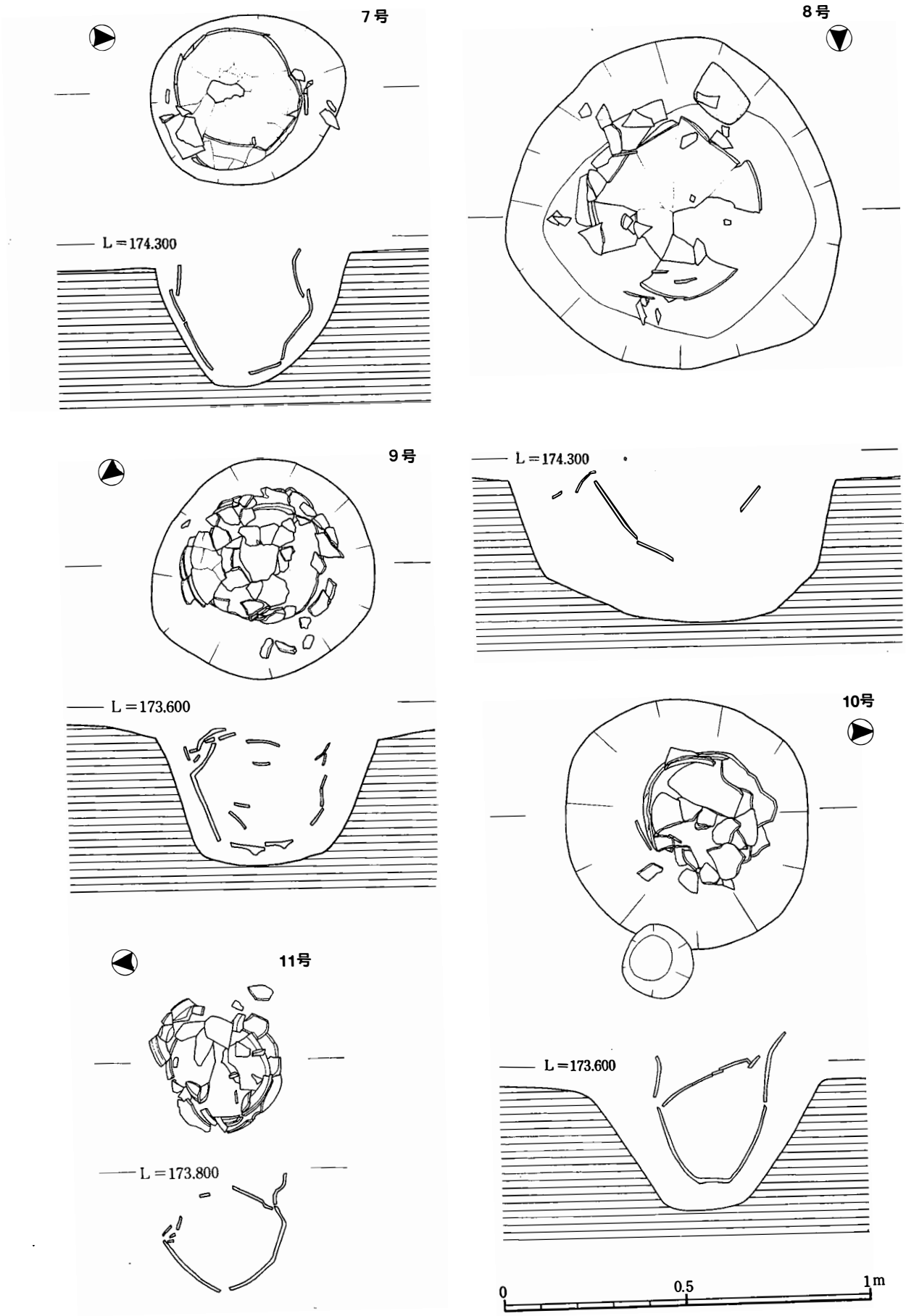
Ｇ７グリッド内より検出した。深鉢形土器の胴部のみ残存する。既に上部は削平され掘り込みは現況で長径約56㎝、短径約42㎝の楕円形を呈す。深さは約15㎝を測る。

21号埋設土器（第15図）

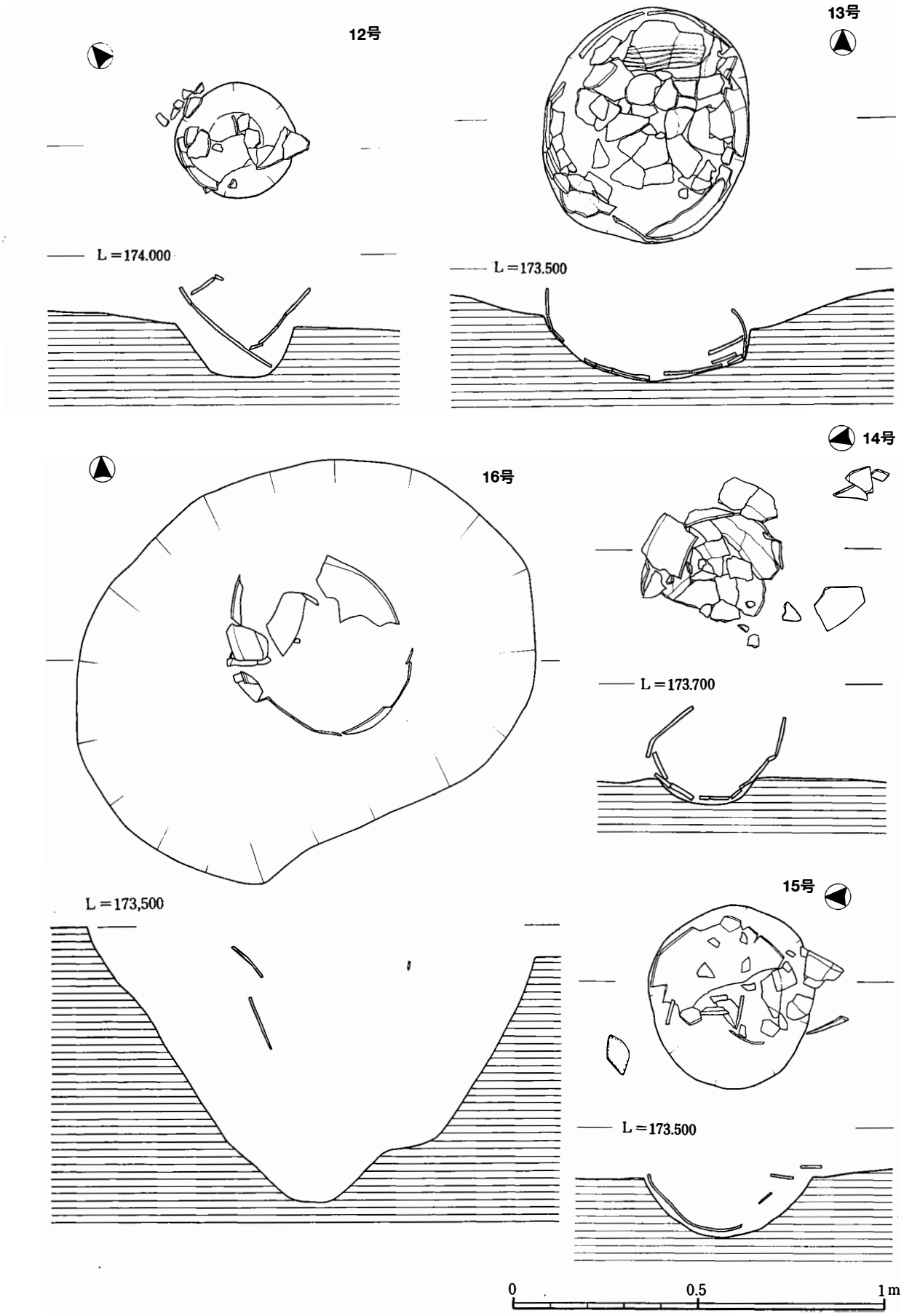
Ｇ７グリッド内に位置する。深鉢形土器で口縁部が欠け中に落ち込んでいるが、底部までほぼ完全に残存する。掘り方は樹根により一部破壊され現況で



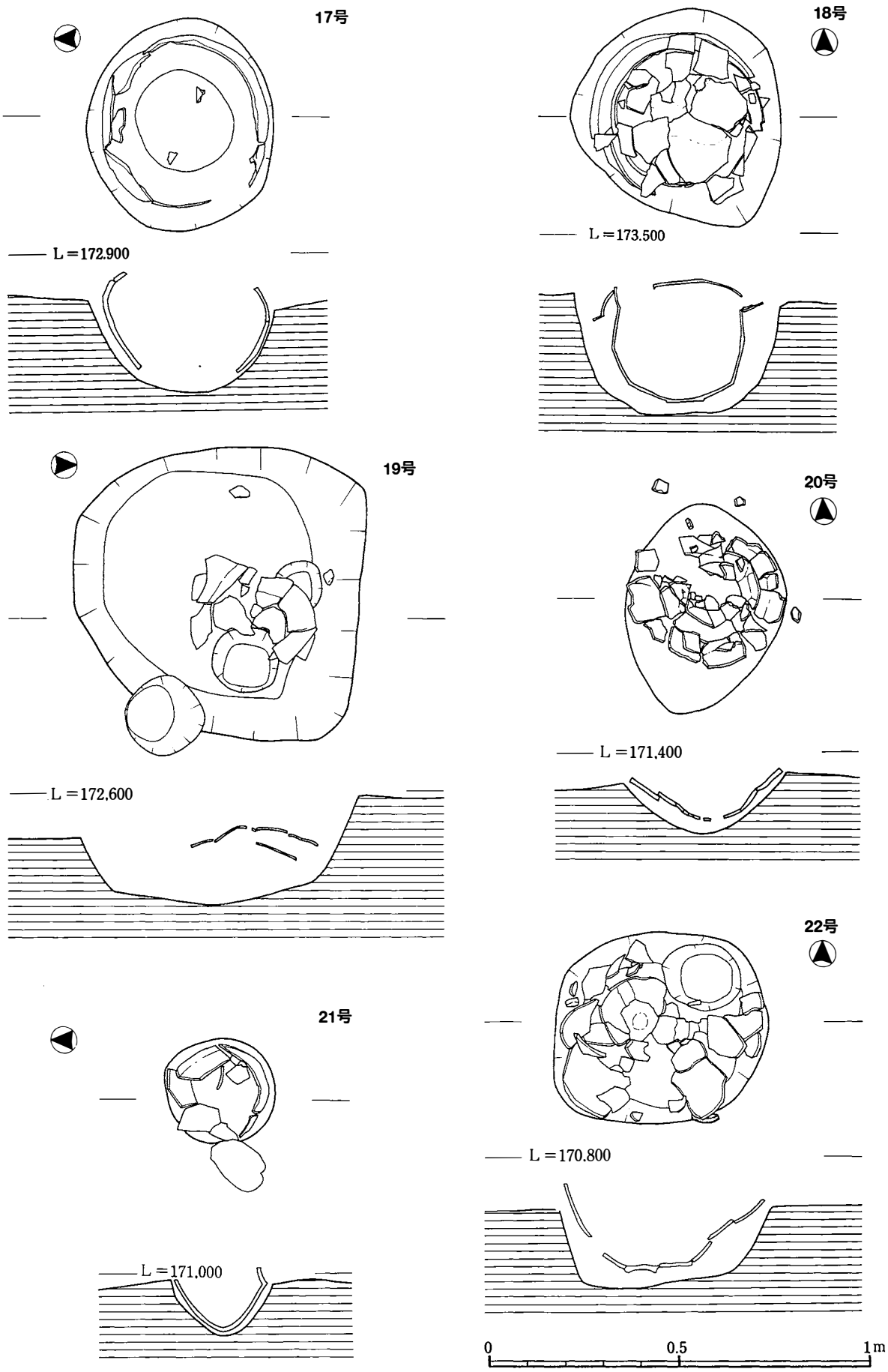
第12図　1～6号埋設土器検出状況実測図



第13図　７～11号埋設土器検出状況実測図



第14図　12～16号埋設土器検出状況実測図



第15図　17～22号埋設土器検出状況実測図

径約26㎝の円形を呈し、深さは約22cmを測る。

22号埋設土器（第15図）

Ｇ５グリッド内より検出した。深鉢形土器で上部を欠損する。上部は既に削平され、また一部はピットにより壊されているが、現況で径57㎝程度の円形を呈し、深さは約20㎝を測る。

②　土器

出土した土器は縄文時代後期から晩期前半にかけての深鉢形土器と浅鉢形土器である。

１号埋設土器（第16図１）

深鉢形土器の胴部のみ残存する。胴部が張る。

２号埋設土器（第16図２）

深鉢形土器の胴部から底部にかけて残存し、底部は平底となる。

３号埋設土器（第16図３）

深鉢形土器の頸部から胴部にかけて残存し、頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認められず、稜線となる。また頸部の湾曲は弱く、頸部の屈曲点は上部にくると考えられる。

４号埋設土器（第17図４）

深鉢形土器の底部から胴部にかけて残存する。胴部が張り、明瞭な頸部に相当するものが認められないものである。底部は平底になり、胴部と底部の境に弱い稜線をもつ。

５号埋設土器（第17図５）

深鉢形土器の頸部から底部にかけて残存。頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認めらず稜線となる。また底部は僅かに上底となる。

６号埋設土器（第18図６）

口縁部から胴部にかけて残存し、底部を欠損するやや小型の深鉢形土器である。口縁帯に３条の沈線をもつ。頸部の湾曲は弱く、口縁部直下に屈曲点がある。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認めらず、稜線となり、その境界に最大径をもつ。また胴部が僅に張る。

７号埋設土器（第18図７）

口縁部の上端を欠く深鉢形土器である。口縁帯に沈線を施し、頸部の湾曲はより弱く、口縁部直下に屈曲点がある。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認めらず、稜線となる。その境界に最大径をもつ。また底部は平底であるが、底部に穿孔した痕跡が認められる。

８号埋設土器（第19図８）

口縁部及び胴部下半の一部を欠損。口縁部と頸部の境界に最大径をもつ。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認められず、弱い稜線となる。底部は平底である。

９号埋設土器（第20図９・10）

９は浅鉢形土器で、体部の上に内湾する頸部があり、その上に短い形骸化した口縁部が屈折して立ち上がるものである。口縁部外面に１条の沈線を施す。内面は段を有す。頸部の屈曲点は下位にある。また浅鉢形土器にしては雑な作りである。

10は深鉢形土器で底部の一部を欠損する。口縁帯に４条の細い沈線を施す。頸部は湾曲し、その屈曲点はやや上位にある。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認められず稜線となり、その境界に最大径をもつ。胴部が張り底部はやや上底気味になる。

10号埋設土器（第21図11・12）

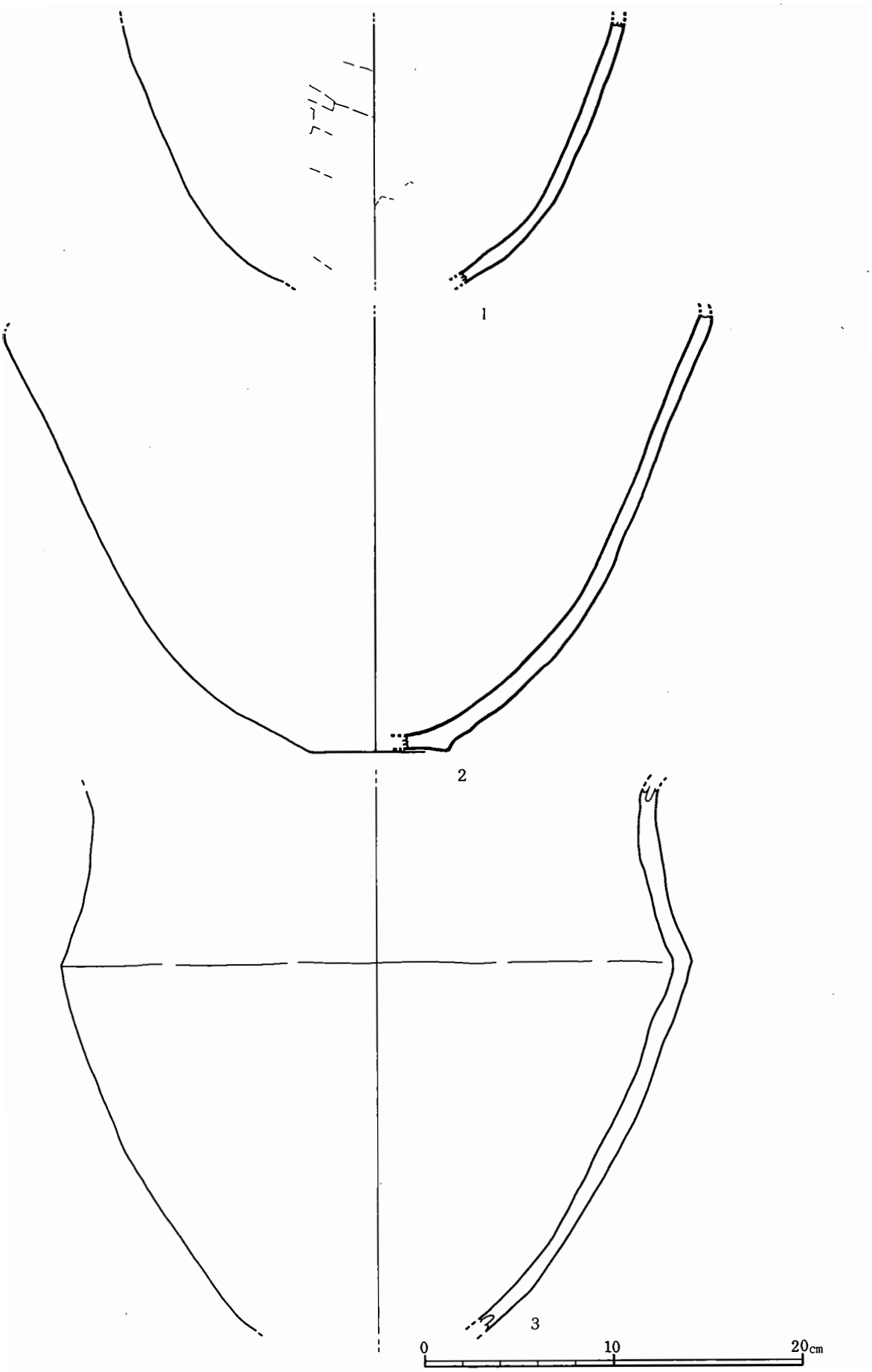
11は、浅鉢形土器で、全体の器形は９と同様であるが、小型なもので口縁部はやや外反気味に立ち上がる。また９に比べ全体的にシャープである。

12は、ほぼ完形の深鉢形土器である。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、口縁帯に５条の沈線を施すが、施文は不規則で細い。頸部の湾曲はごく弱く、口縁部直下に屈曲点がある。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認めらず稜線となり、その境界に最大径をもつ。また底部は平底である。

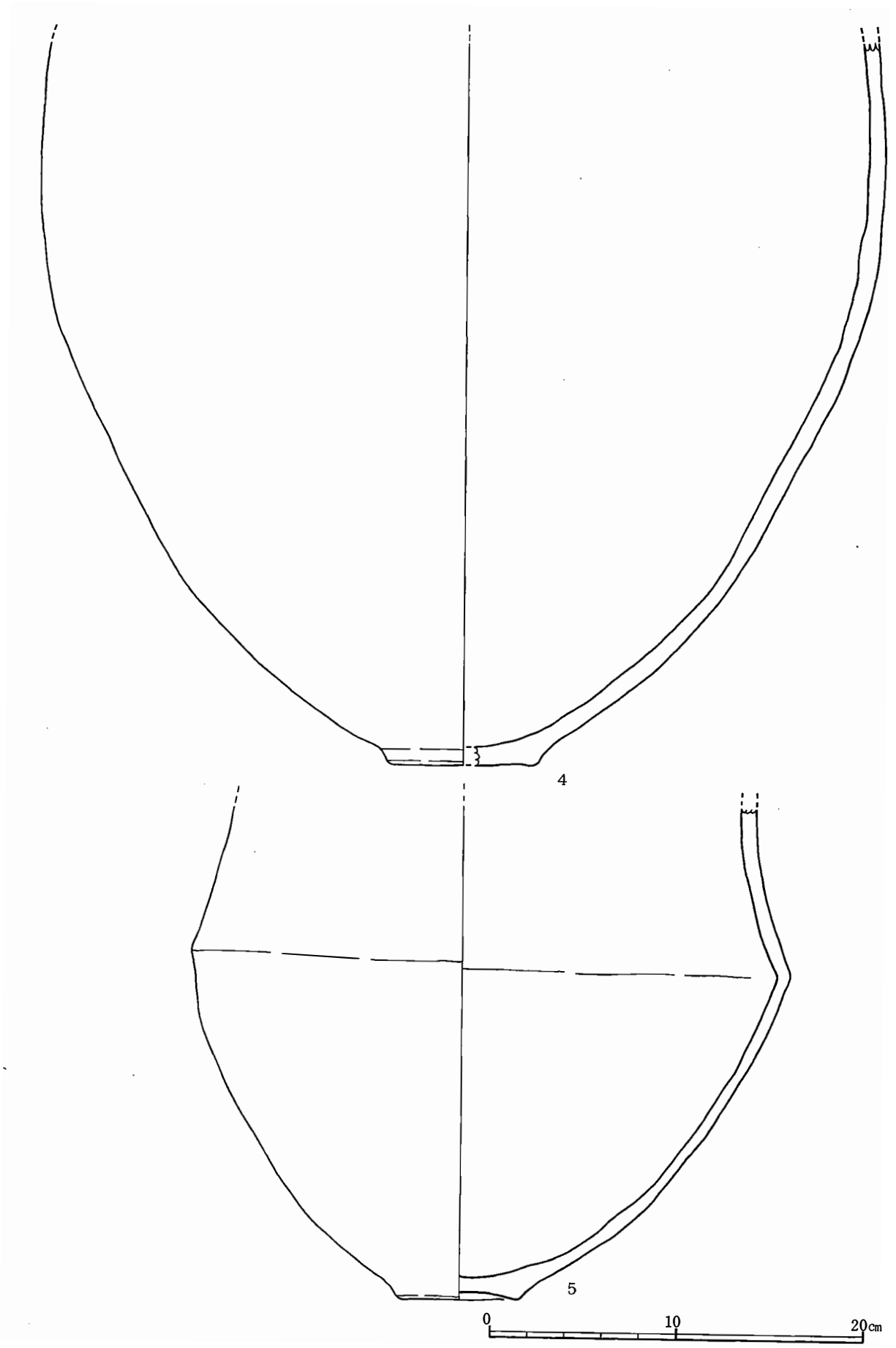
11号埋設土器（第22図13・14）

13は、浅鉢形土器で、全体の器形は９・11などと同様であるが、頸部は湾曲するというより、外反すると言ったほうが良く、水平気味に伸びる。また口縁部外面には１条の沈線を施すが雑である。頸部の屈曲点は体部直上にある。全体的な造りは９・11に比べ丁寧である。

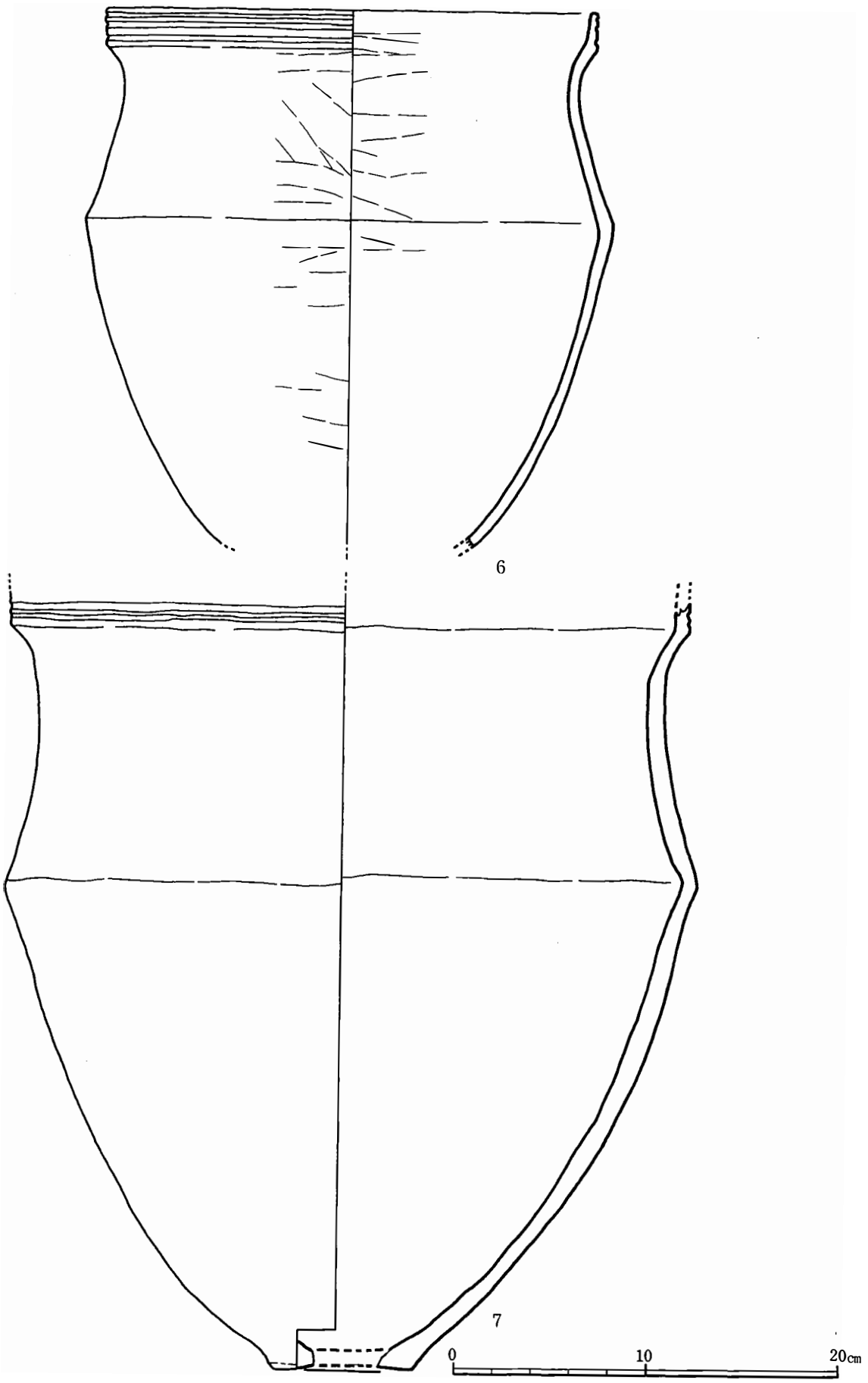
14は、深鉢形土器で、胴部下半以下を欠損する。口縁帯に４条の貝殻による施文を有す。沈線はまだ規則的である。頸部の湾曲は弱く、口縁部直下に屈曲点がある。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張



第16図　１～３号埋設土器実測図



第17図　４・５号埋設土器実測図



第18図　６・７号埋設土器実測図

り出しは認められず、稜線となる。またその境界に最大径をもつ。

12号埋設土器（第22図15）

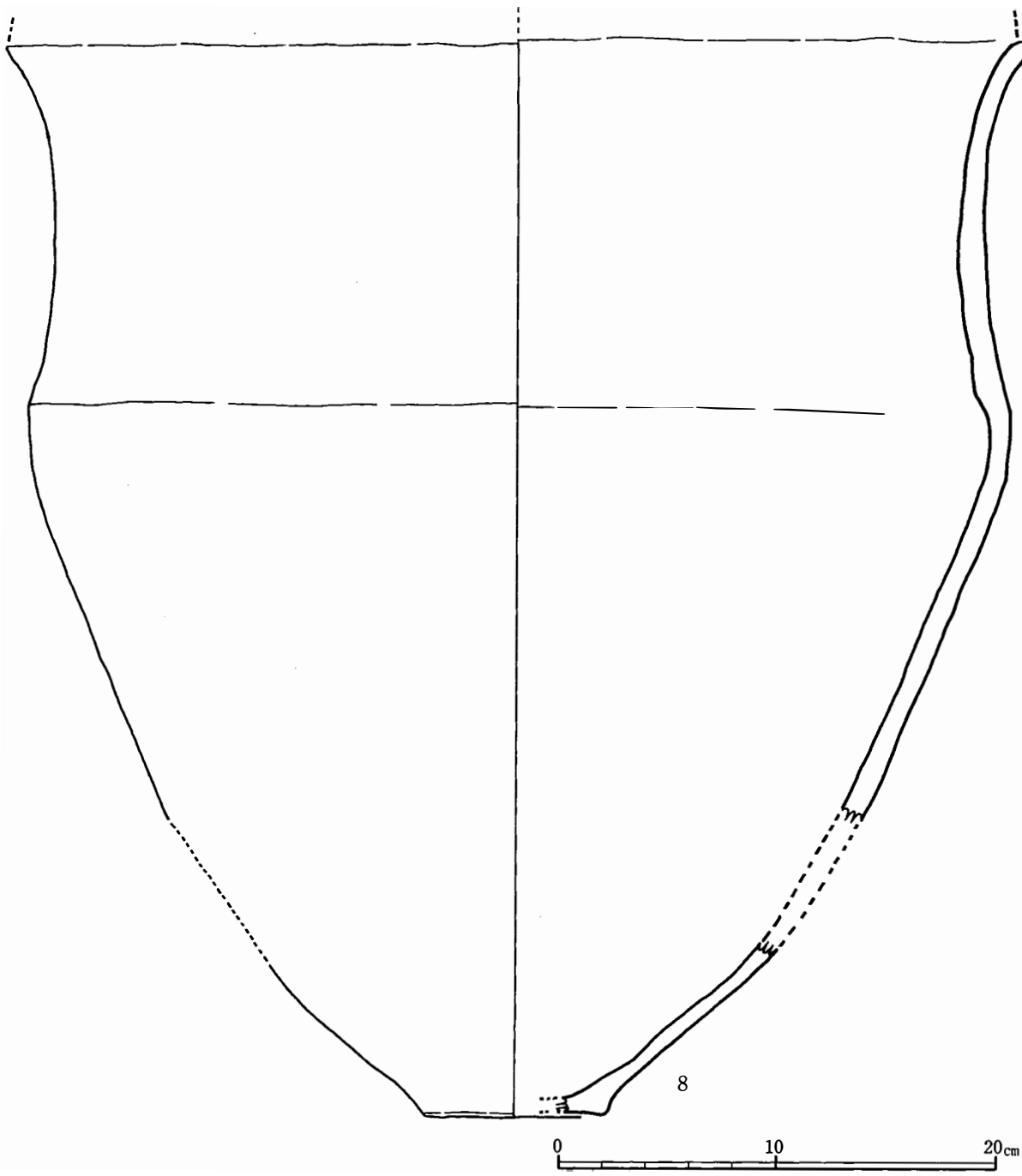
頸部より上部を欠損する深鉢形土器である。底部は平底になる。

13号埋設土器（第23図16）

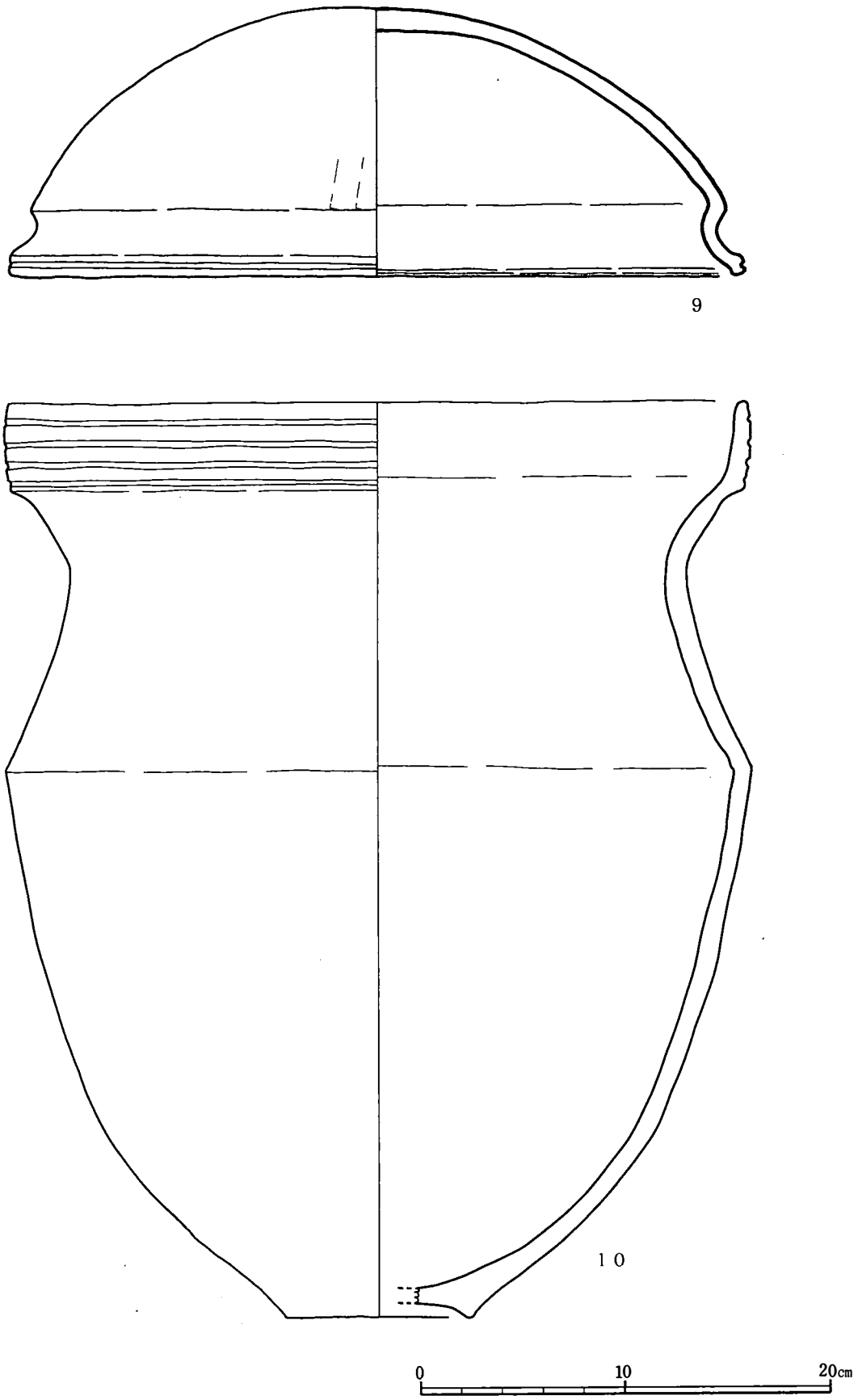
底部の一部を欠損するもののほぼ完形の深鉢形土器である。口縁部に４条の沈線を施す。頸部の湾曲はやや直線的になり、口縁部直下に屈曲点がある。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認められず弱い稜線となり、その境界に最大径をもつ。胴部は膨らみをもち、底部は平底で、胴部と底部の境が明瞭になってきている。

14号埋設土器（第24図17）

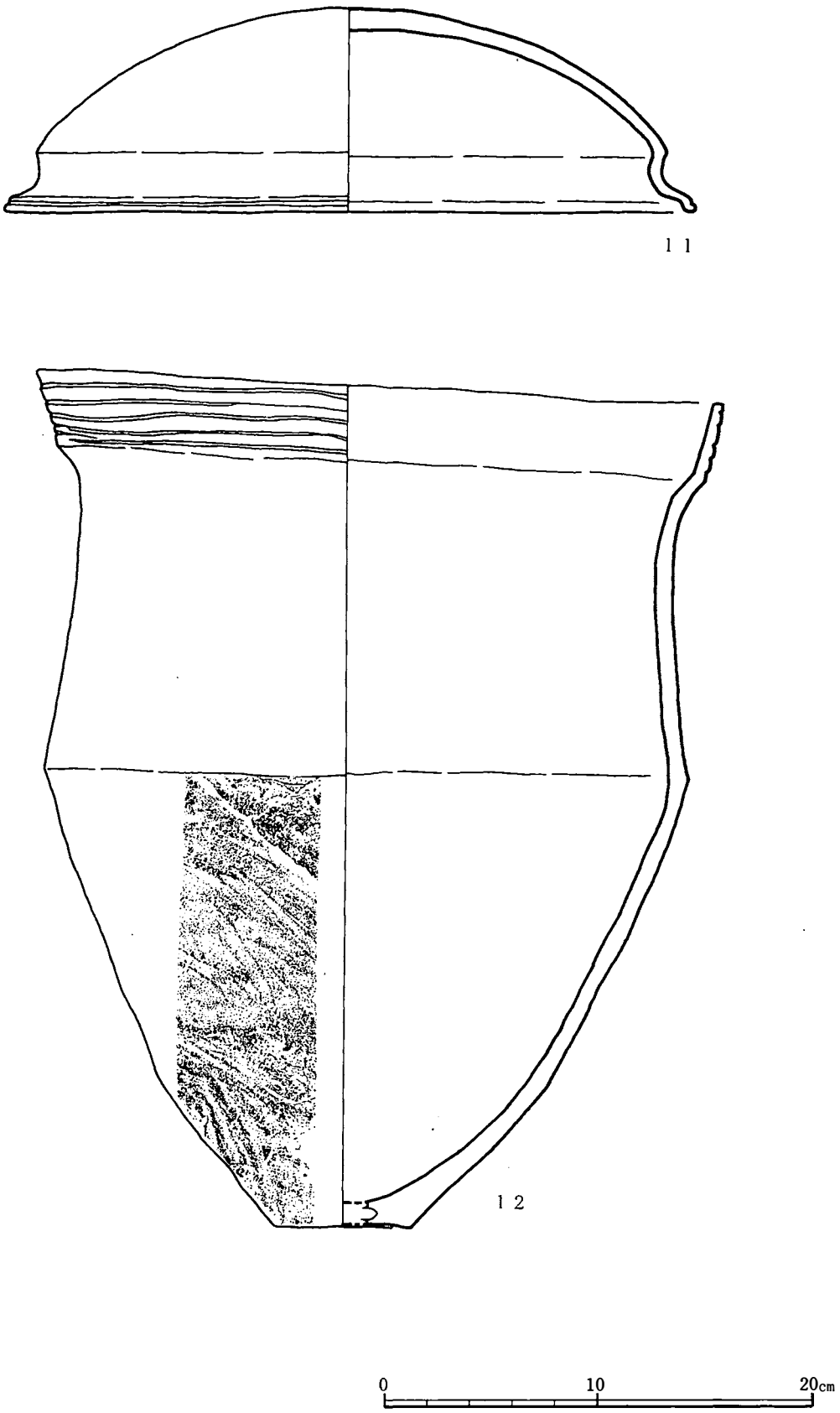
ほぼ完形の深鉢形土器で、口縁部が外反し口縁帯に４条の浅い沈線を施す。頸部の湾曲は弱く直線的になり口縁部と頸部の境が不明瞭になる。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認められず、



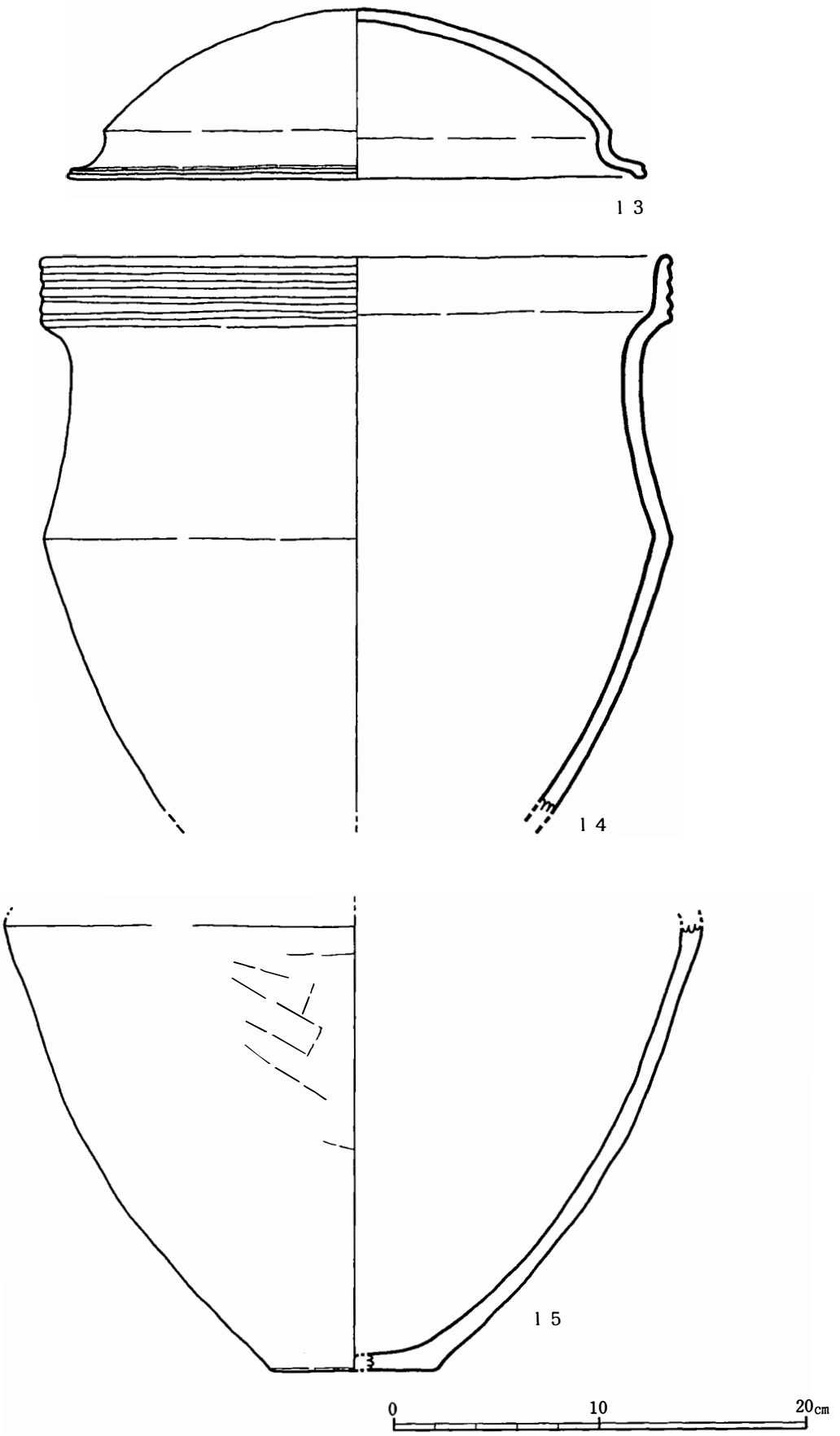
第19図　８号埋設土器実測図



第20図　９号埋設土器実測図



第21図　10号埋設土器実測図



第22図　11・12号埋設土器実測図

弱い稜線となり、その境界に最大径をもつ。底部は円盤貼付状の底部に近いものになる。

15号埋設土器（第24図18）

頸部より上を欠損する深鉢形土器である。頸部と胴部の境が不明瞭となる。底部は円盤貼付状の底部と呼ばれているものに近い形態になる。

16号埋設土器（第25図19）

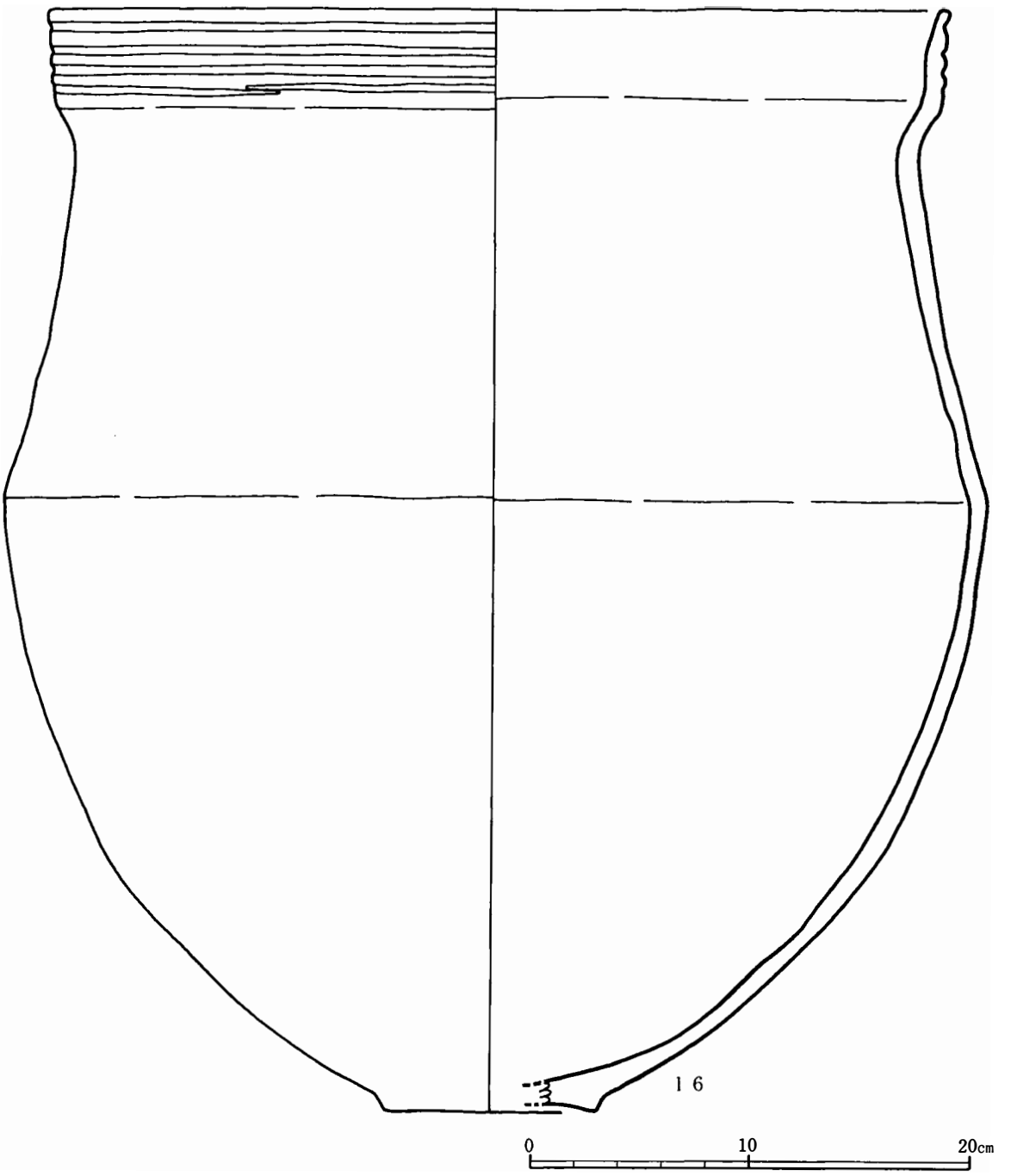
深鉢形土器で、胴部下半以下を欠損する。口縁部は内傾し、口縁帯に４条の沈線を施す。口縁部と頸部の境に最大径がある。頸部の湾曲は弱く、頸部のやや上位に屈曲点がある。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認めらず、弱い稜線となる。

17号埋設土器（第25図20）

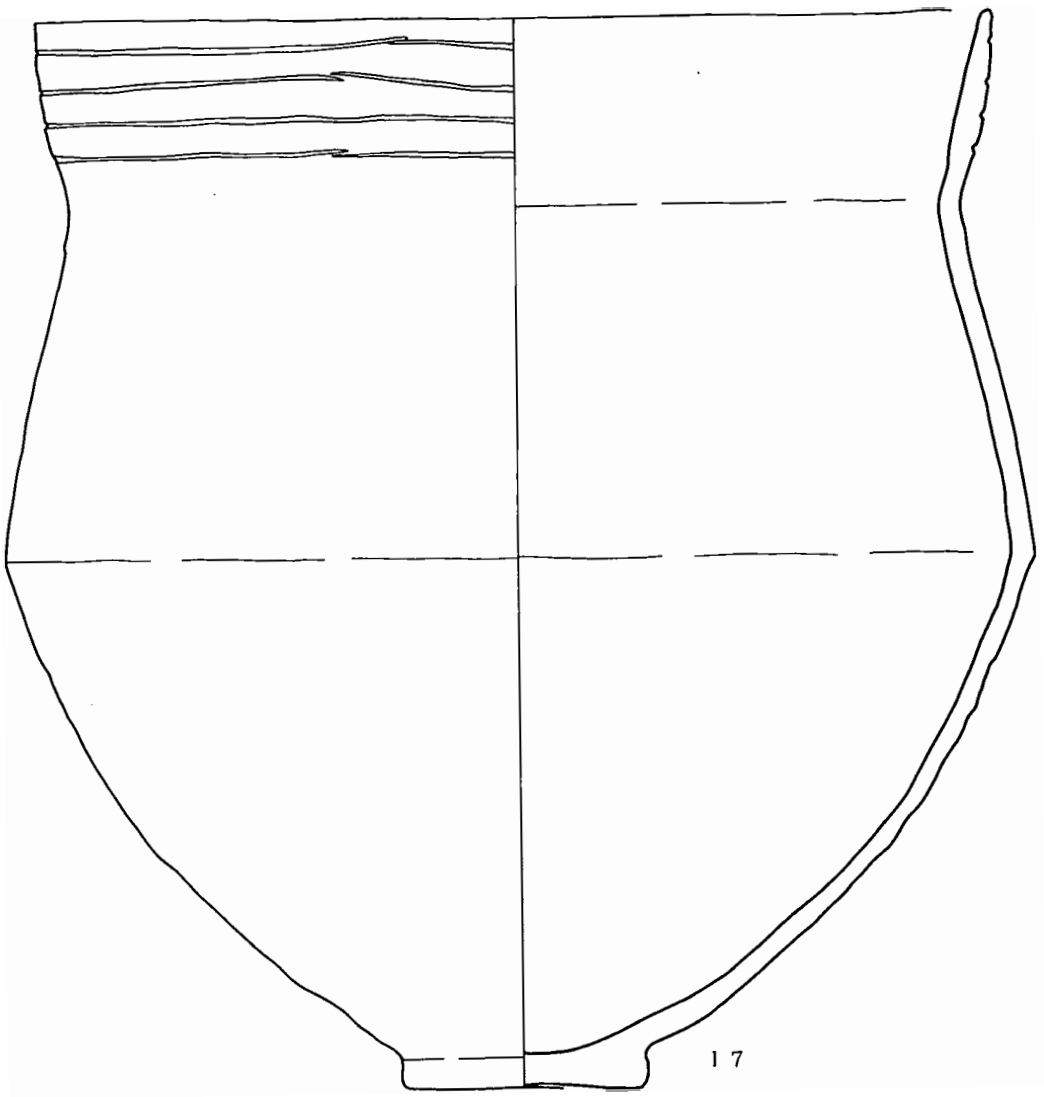
口縁部と底部を欠損する深鉢形土器で、頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認めらず、弱い稜線となるが、その境は明瞭ではない。

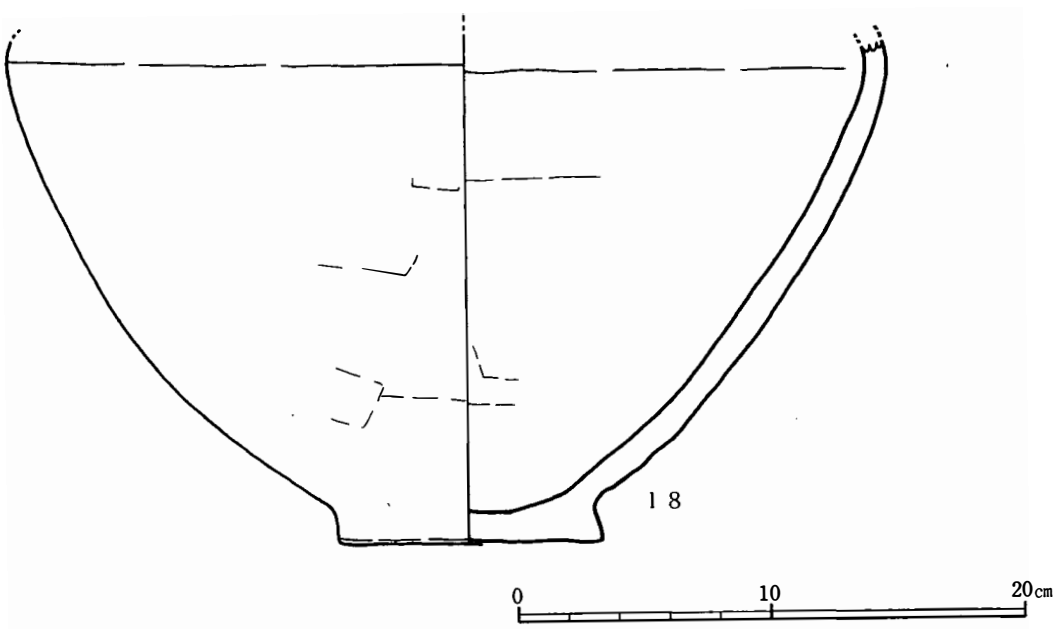
18号埋設土器（第26図21・22）

21は浅鉢形土器で、体部の上にごく短い湾曲する

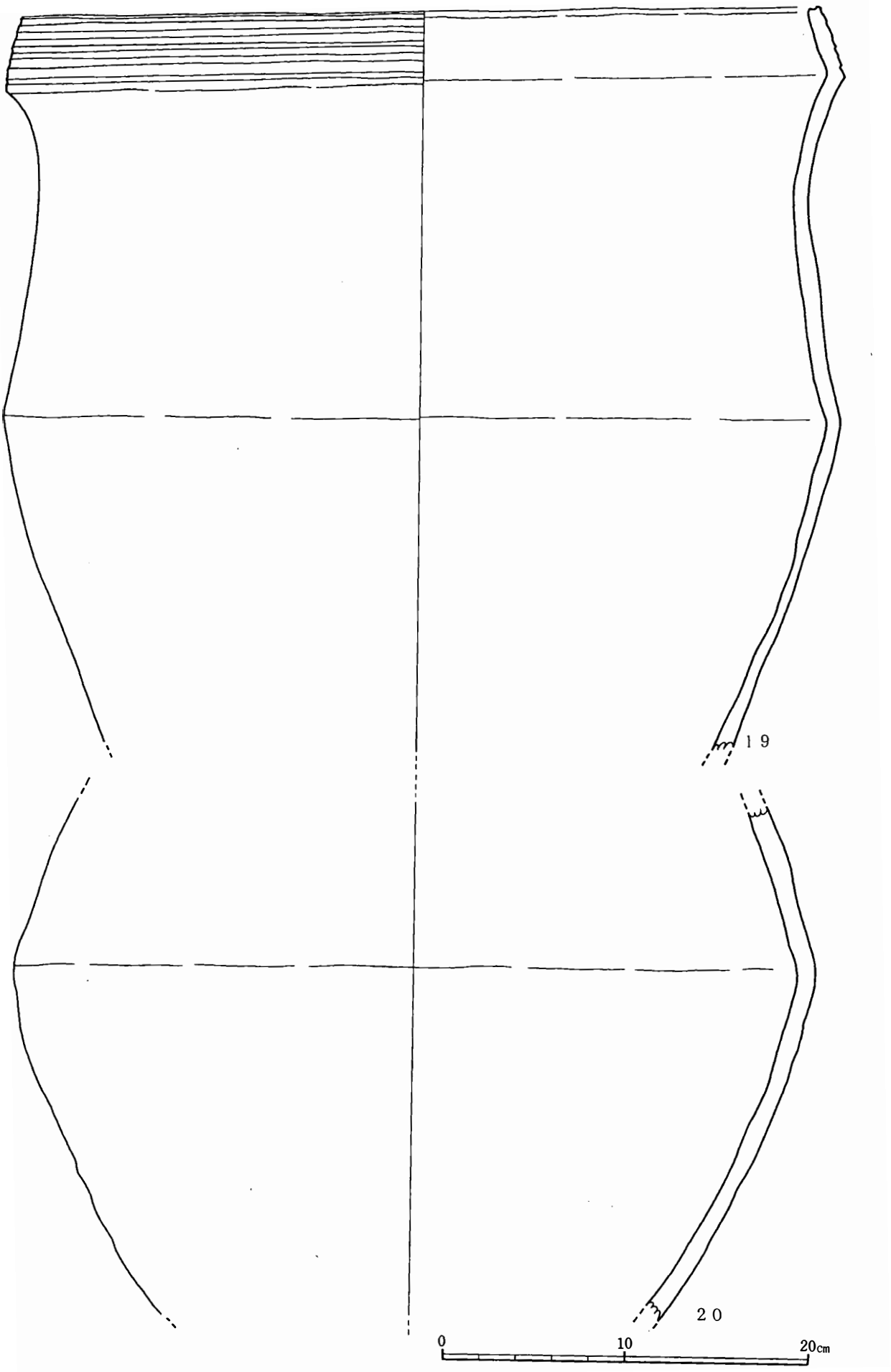


第23図　13号埋設土器実測図

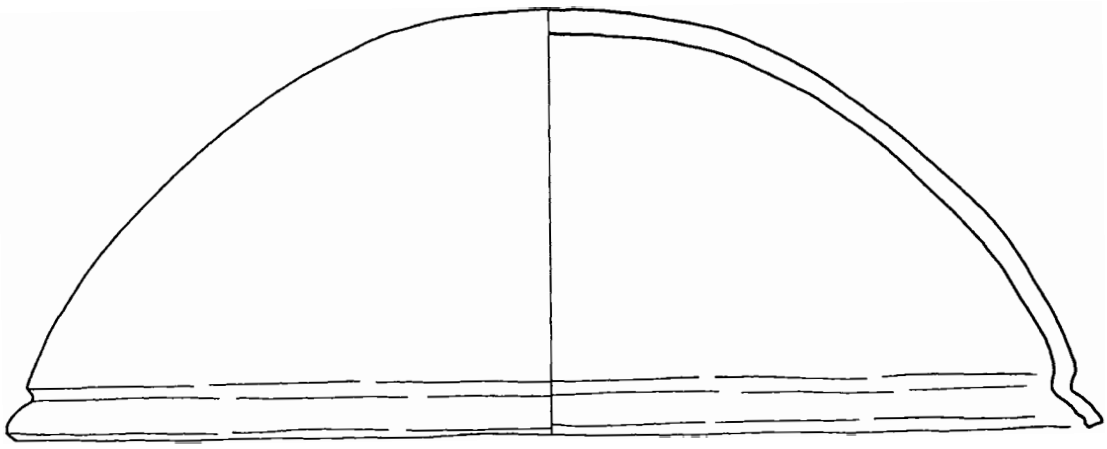


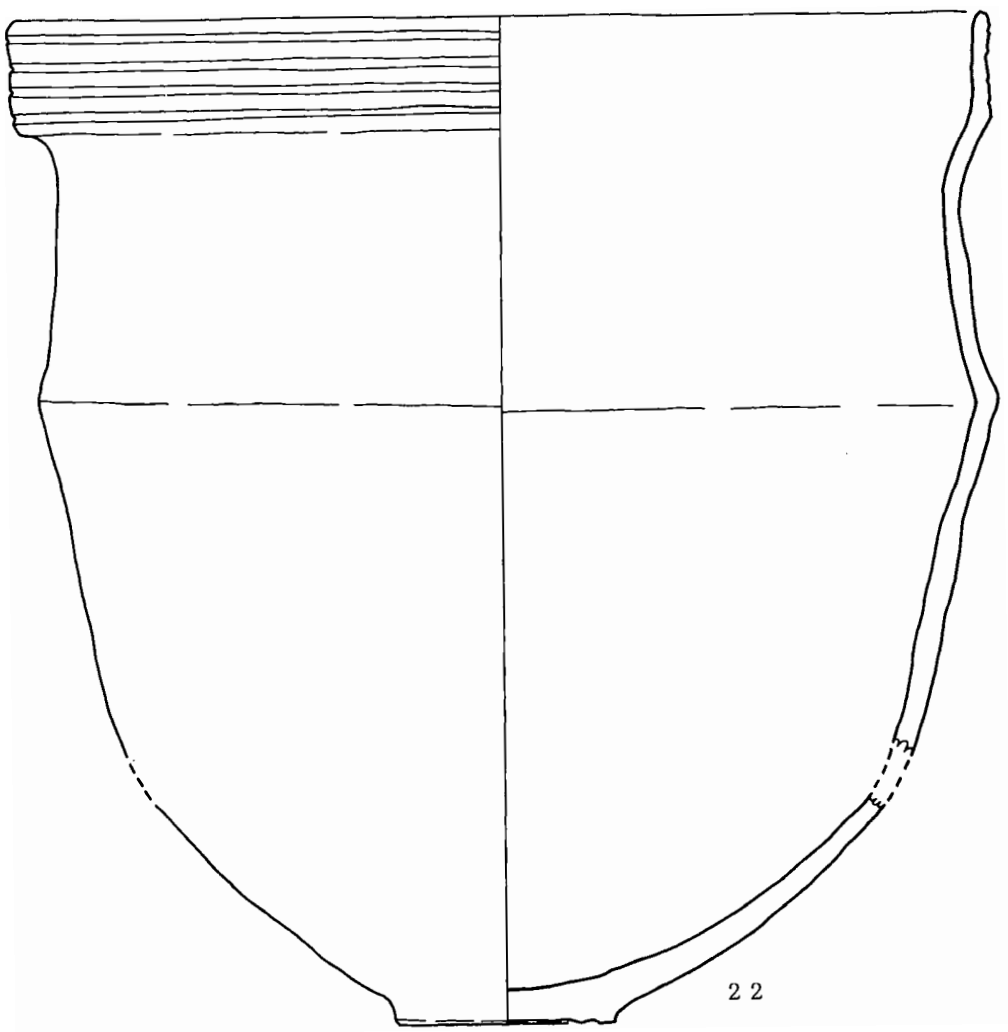


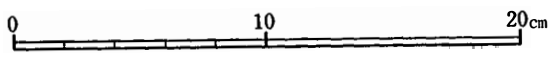
第24図　14・15号埋設土器実測図



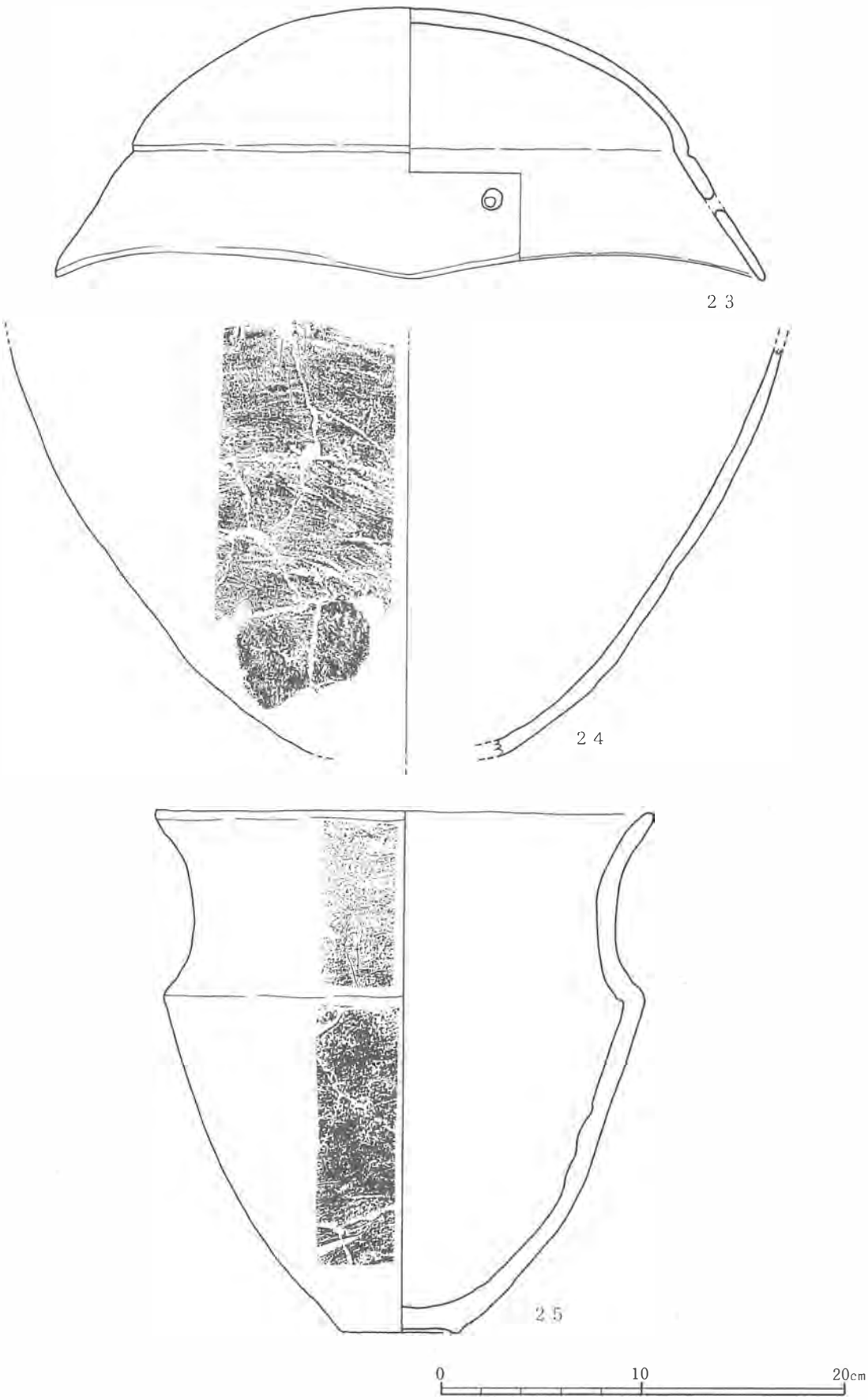
第25図　16・17号埋設土器実測図







第26図　18号埋設土器実測図



第27図　19～21号埋設土器実測図

頸部があるもので、口縁内面に段を設けることにより、頸部と口縁部を区分している。また前述の浅鉢形土器に比べ器高が深く丸みを帯びる。全体的に丁寧な作りである。

22は完形品であったが、取り上げの際に胴部の一部が破損してしまった。深鉢形土器で口縁帯に浅い４条の沈線を施す。頸部の湾曲は弱く、頸部のやや上位に屈曲点がある。また頸部と胴部の境には明瞭な段や張り出しは認められず、弱い稜線となる。胴部は張り、底部は平底となる。

19号埋設土器（第27図23）

体部から口縁部が屈曲して立ち上がる浅鉢形土器で、口縁部は波状になり、２カ所に２対の穿孔を施してある。

20号埋設土器（第27図24）

深鉢形土器で、胴部下半以下を欠損する。全体的に薄手である。

21号埋設土器（第27図25）

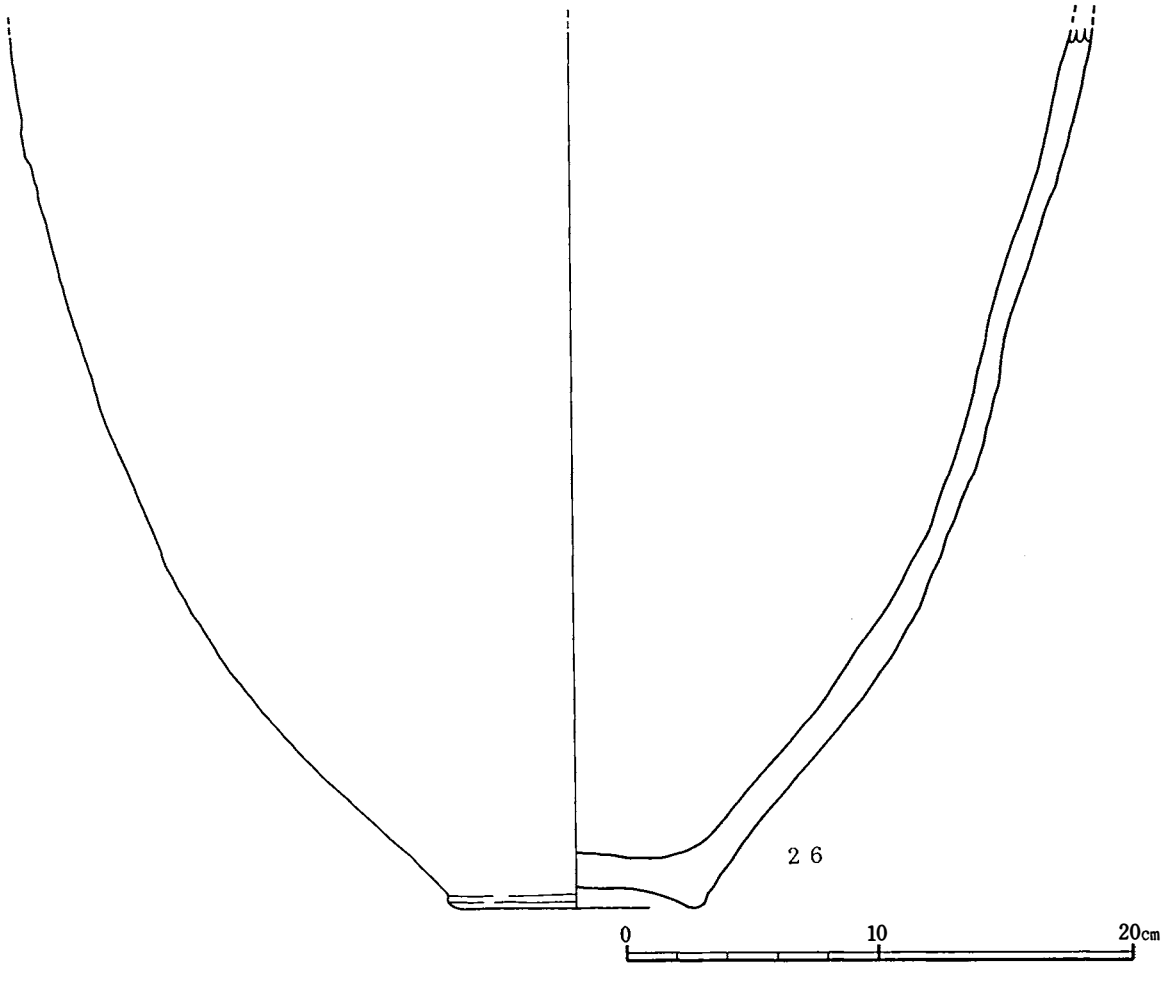
小型の深鉢形土器で胴部のうえに湾曲する頸部が付き、その頸部がそのまま口縁部となるものであり、口縁帯をもたない。頸部と胴部の境が膨らむ。また底部は上底気味の平底である。

22号埋設土器（第28図26）

頸部より上を欠損する深鉢形土器である。底部は上底になる。全体的に細長い器形になると考えられる。

２．縄文時代の住居跡について

縄文時代の遺物が密集している箇所には数本のトレンチを設定したが、土層断面でも認識できず、確実に住居跡と確認できるものはなかった。しかし埋設土器の掘り込みの確認が困難を極めたのと同様に住居跡埋土と自然堆積土と全く同質の土であるため確認できなかった可能性もあり、また埋設土器・焼



第28図　22号埋設土器実測図

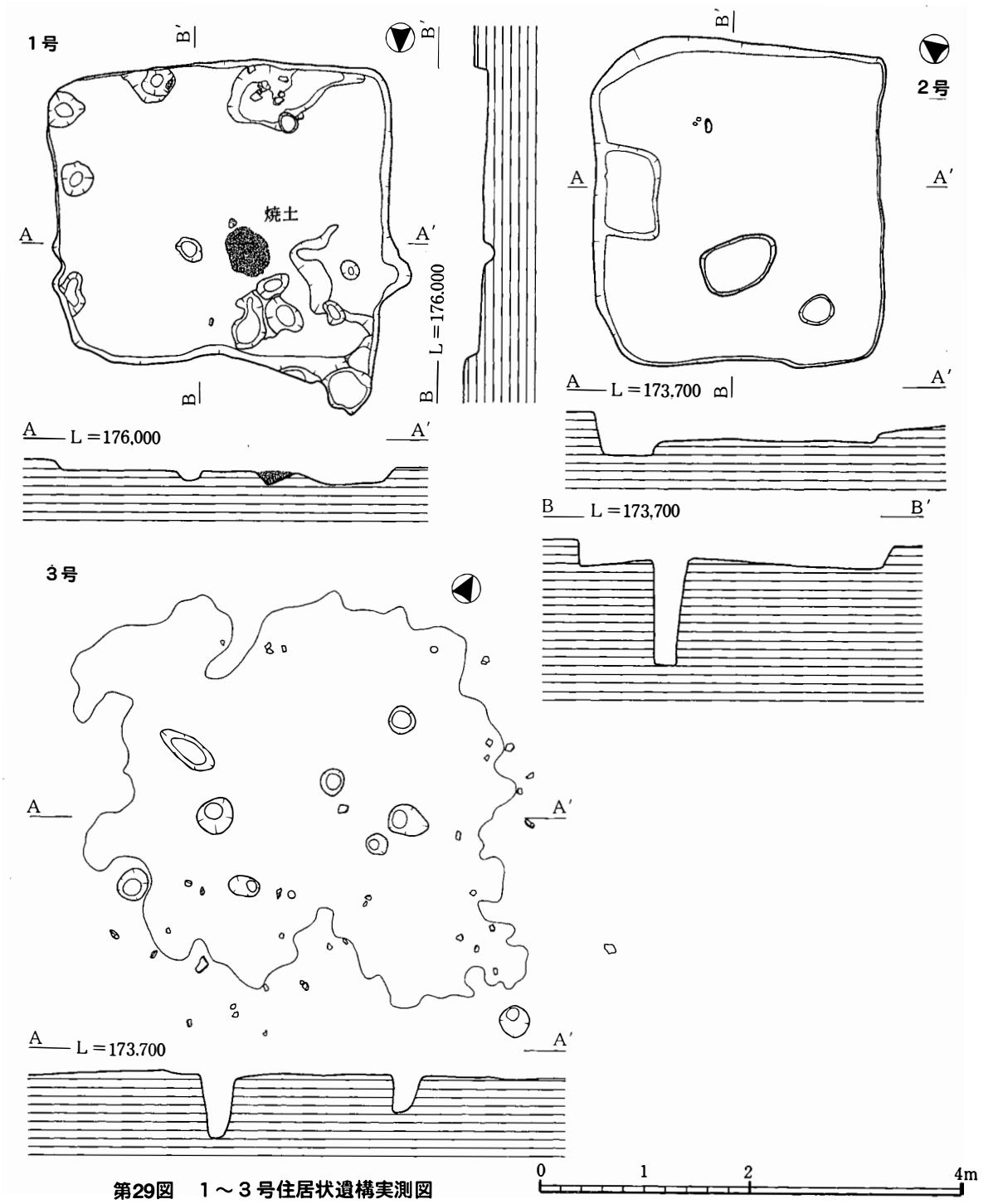
成粘土塊、多量の土器の出土を考慮すると、住居跡が全く存在しなかったとは考えにくいし、少なくとも近接した箇所に集落が存在するはずである。実際前述したような埋設土器のレベルの相違や、部分的ではあるが硬化面や焼土の存在などが確認できており、以下住居の可能性があるものについて述べてみたい。

竪穴式住居状遺構

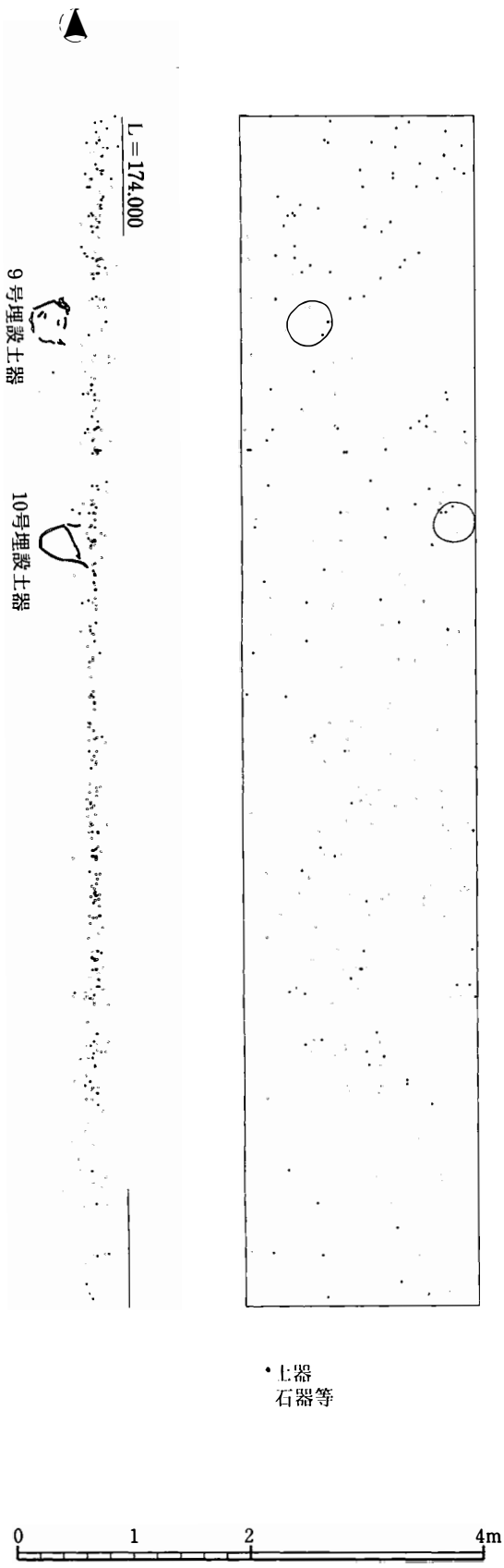
ここで竪穴式住居状遺構としたものは、平面プランは確認できたが、床に柱穴跡の痕跡や硬化面等が認められず、遺物も微量で時代を特定できなかったものなどである。

１号竪穴式住居状遺構（第29図）

G20・G19グリッドにまたがって存在する。この地点は縄文時代後期・晩期の土器の分布が少ない所である。方形プランを呈し、短軸２m70cm・長軸３m10cm・現行の深さ15cm程を測る。床面にはわずかに焼土が認められたが、硬化面の発達はほとんど認



第29図　１～３号住居状遺構実測図



第30図　７号トレンチ遺物分布図

められず、柱穴も床面から掘り込んだものは中央の穴だけであった。遺物量は土器片や石鏃など70点程出土しているがいずれも細片である。しかしすべて縄文時代晩期のものではある。

２号竪穴式住居状遺構（第29図）

Ｇ16・Ｇ15グリッドにまたがって存在する。この地点は縄文時代後期・晩期の土器の分布が多い所である。平面形は一部に明瞭さを欠くものの、方形プランを呈し、長軸３ｍ・短軸２ｍ90㎝・現行の深さ28㎝程を測る。床面にはわずかながら焼土が認められ、遺構の中央部分には硬化面も認められた。しかし柱穴は確認できなかった。遺物量も土器の小破片や石器などの５点であった。

以上の２基であるが、この時期の竪穴式住居跡の平面プランがほとんど円形であること、遺物量が微量で流れ込みの可能性があることより、縄文時代の竪穴式住居跡とは認定できなかった。

その他に床面らしき硬化面が認められた箇所が２箇所ある。

３号住居跡状遺構（第29図）

Ｇ15グリッド部分に位置するもので、床面らしき硬化面が認められ、２つの柱穴が検出された。硬化面の範囲は東西３ｍ80㎝、南北３ｍ80㎝程度で不整形を呈する。しかし硬化面直上の遺物は縄文時代の黒色磨研土器や奈良・平安時代の土師器など混在する状況であった。

４号住居跡状遺構（第31図）

Ｅ７・Ｇ７グリッドにまたがった箇所に位置する。この箇所から東に30ｍ程いった地点に縄文式土器が集中する箇所がある。床面らしい堅い部分が認められるが途中で不明瞭となり、範囲が特定できなかった。その形状は２ｍ前後で不整の楕円形を呈する。また柱穴も認められた。出土遺物は浅鉢形土器・深鉢形土器が出土している。

以上の３号や４号は硬化面や柱穴の一部の確認により住居跡である可能性は高いが、平面プランについては不明であるし、３号については縄文時代のものかどうかも不明である。

その他、住居が存在した可能性が高いと考えられるのが、前述したような第Ⅲ層下層から掘り込んだ

と考えられる９・10号埋設土器が出土した地点である。ここには２ｍ×10ｍのトレンチを設定した（第30図）。遺物がほとんど出土しなくなる標高173.8ｍ程のレベルで、50㎝程度の不整な形状の硬化面や極薄く、径10㎝程の焼土が確認された。しかし遺物の平面分布や垂直分布状況からは、住居跡があったということを積極的に示す根拠は見いだせなかった。

それ以外にも土器の集中する箇所としてＧ８グリッド周辺がある。しかし遺物は集中するものの、後期前半に属するもの、後半に属するものなど時期幅が大きく、その出土レベルもほとんど同レベルであり、土器捨て場のような状況であった。

３．包含層出土の遺物とその分布（第31～36図）

①　縄文時代後期前半の土器（第37図９～28）

出土点数は少なく、小破片も含め32点程を数え、そのうち図化に耐えるもの20点を掲載した。遺跡の南西側に集中して分布する。南北軸Ｈ－Ｅ、東西軸４－７のグリッド内にほぼ収まる。その分布は縄文時代後期後半の土器の分布と重複する。いずれも第Ⅲａ層からの出土である。

９～22は口縁部片で、９は口縁部が肥厚し、横位の沈線を施し、口唇部に押点文を施すものである。10は斜め方向の沈線を施す。11は口縁部がわずかに肥厚し、綾杉状の文様を施す。また口縁部の数箇所を突出させ、突出した箇所の口唇部に押点文を施す。12は復元口径24.4㎝を測る。波状口縁を呈し、口縁部文様帯をわずかに肥厚させ、綾杉文・刺突文・幅８㎜程の粘土紐に沈線を施し、Ｕ字形に貼り付けたものからなる。13は凹線を斜めに施す。14、15も波状口縁を呈す。横位、斜位の沈線と押点文からなる。15は口縁部を肥厚させる。16、17は同一個体と考えられ、波状口縁を呈す。口縁部に２条の沈線を施す。また暗文の風に赤色顔料を横方向に施す。

18は口縁部が肥厚し、断面が三角形状を呈し、口縁帯下部に刻み目を施す。19、20も波状口縁で肥厚し断面三角形状をなす。19は口縁帯に２条の凹線を施し、波頂部や凹線の周囲には貝殻腹縁により施文する。20は口縁帯に１条の凹線を施し、凹線の周囲に貝殻腹縁により施文する。21も口縁部を肥厚させ、斜位に沈線を施す。22は口唇部に押点文を施す。23は口縁部を肥厚させ、貝殻腹縁を押し連ねて沈線状にする。19と同一個体と思われる。24は台付皿形土器である。波頂部に突起状のものを付け、口縁部に沈線を施す。

25は口縁部に螺旋状の突帯を縦位に貼り付ける。26は磨消縄文土器、27は横位の沈線を施し、頸部との境に押点文を施す。28は胴部片で、胴部に２条の沈線を横方向に施し、その中に刺突文と押し引き列点文を施すもので、外来系の土器の可能性もある。またこの時期のものかも確かでない。

②　縄文時代後期後半から晩期の土器

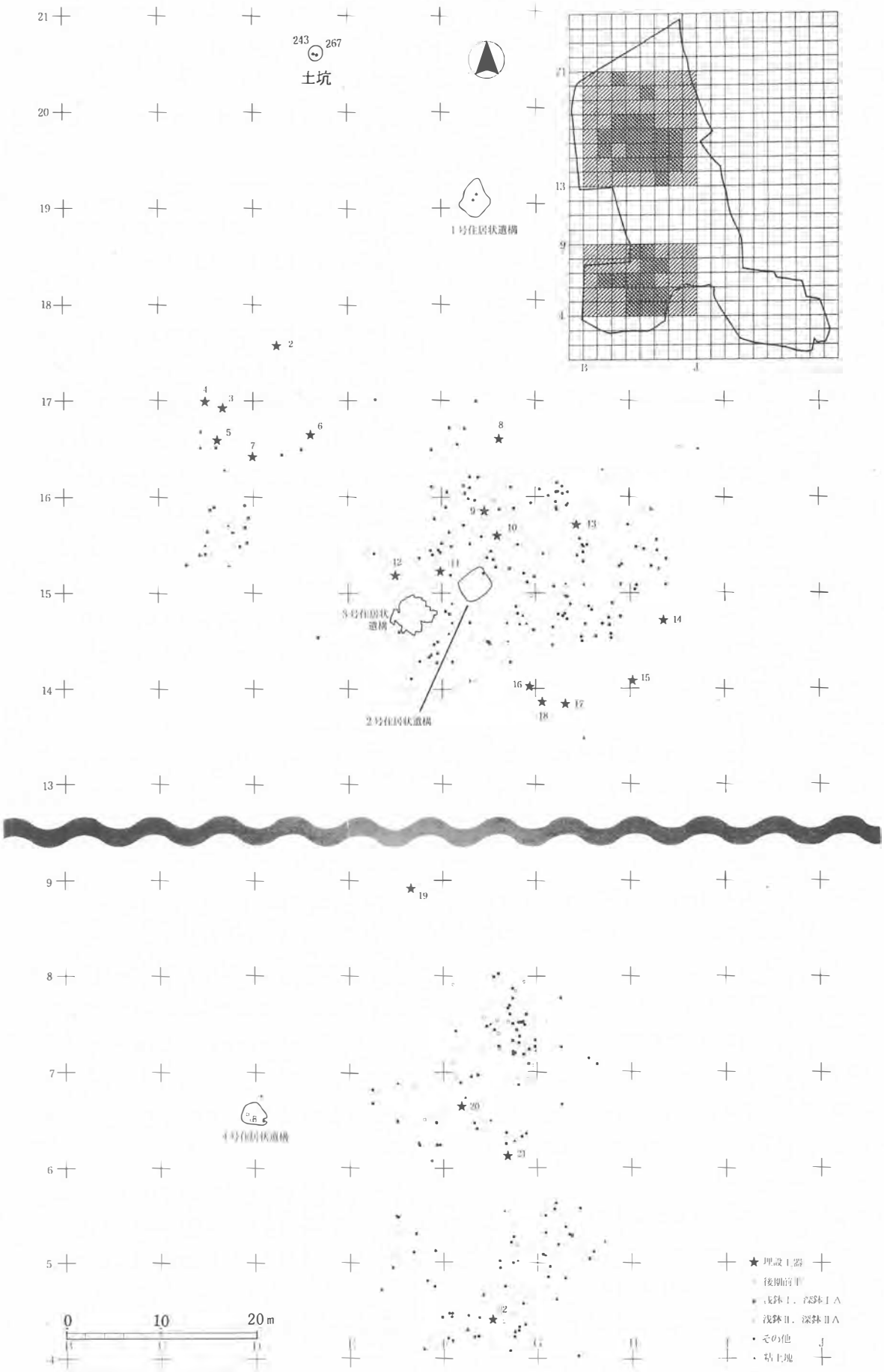
沖松遺跡において縄文時代の主流をなすものである。当初出土した土器のなかで出土地点が押さえられているもののうち口縁部等その土器の特色が判明するものすべての分布図を作成しようと試みたが中途でその分類基準があやふやになってきたり、時間的制約で断念せざる得なかった。しかし図化した土器だけの分布状況と大差ないという感触はもっている。

調査区の北側寄りＧ15杭を中心とした半径約20ｍの範囲と北西寄りのＤ16杭を中心とした半径10ｍの範囲さらに調査区南側のＧ６杭を中心とした半径20ｍの範囲にその集中を見る。その分布は調査区南に縄文時代後期後半の土器、北に縄文時代晩期前半の土器の集中を見る。その他調査区に北端のＢ区にも点在的ではあるがその分布がみられた。特にＧ18・19グリッド付近やＨ14グリッド付近は削平のため第Ⅲ層が消滅している箇所がある。またＥ16グリッド付近は本来やや高度が上がっているためにやはり第Ⅲ層が削平されている。そのためＧ15杭を中心とした半径は更に大きくなる可能性があるし、Ｄ16杭を中心とした分布とつながる可能性もある。

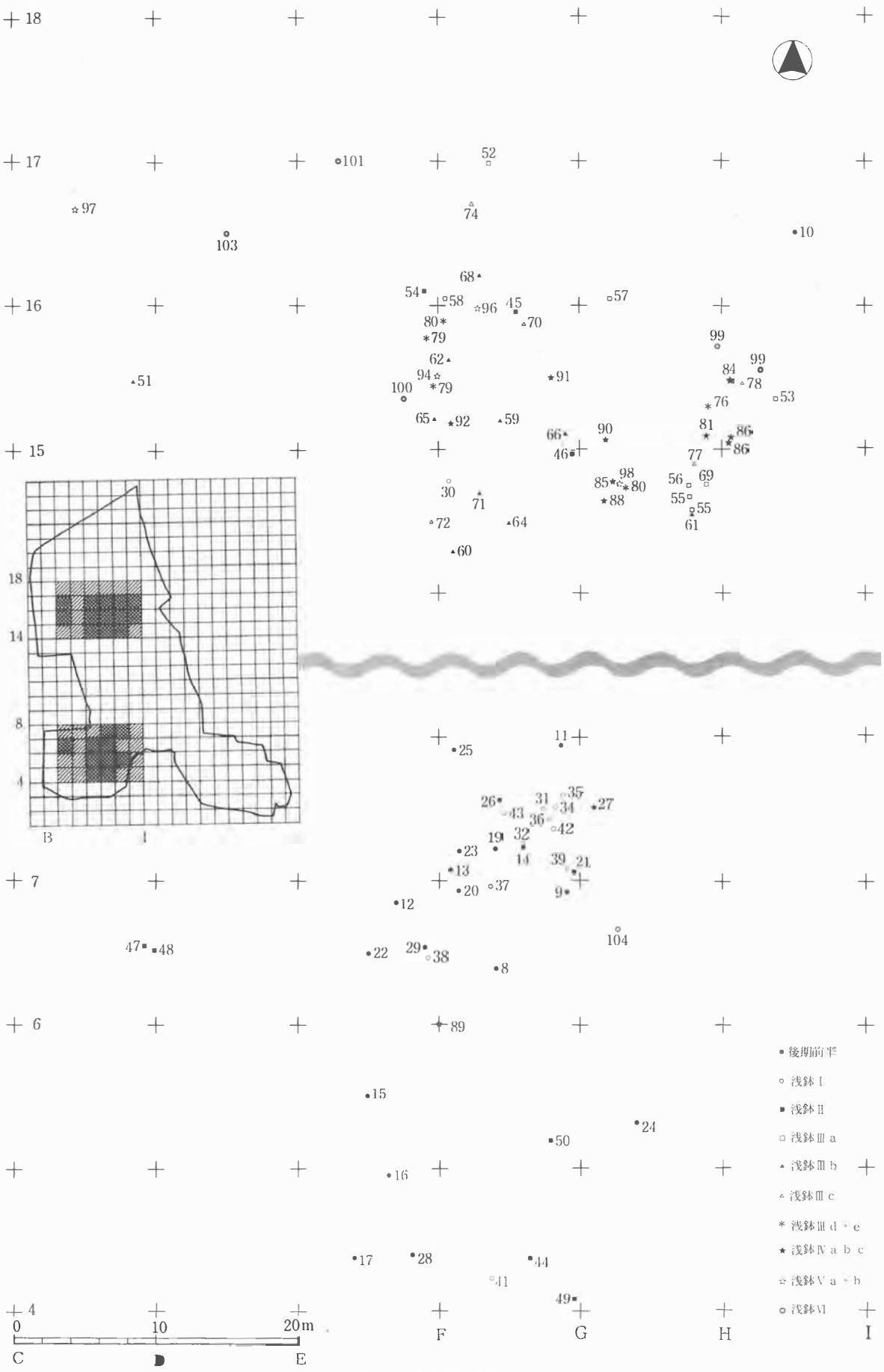
そのほとんどが包含層出土のもので、第Ⅲａ層よりの出土であり、さらに細かく分層することは出来ず、形式変化を踏まえた上での分類にならざる得ない。

浅鉢形土器（第37図29～40図）

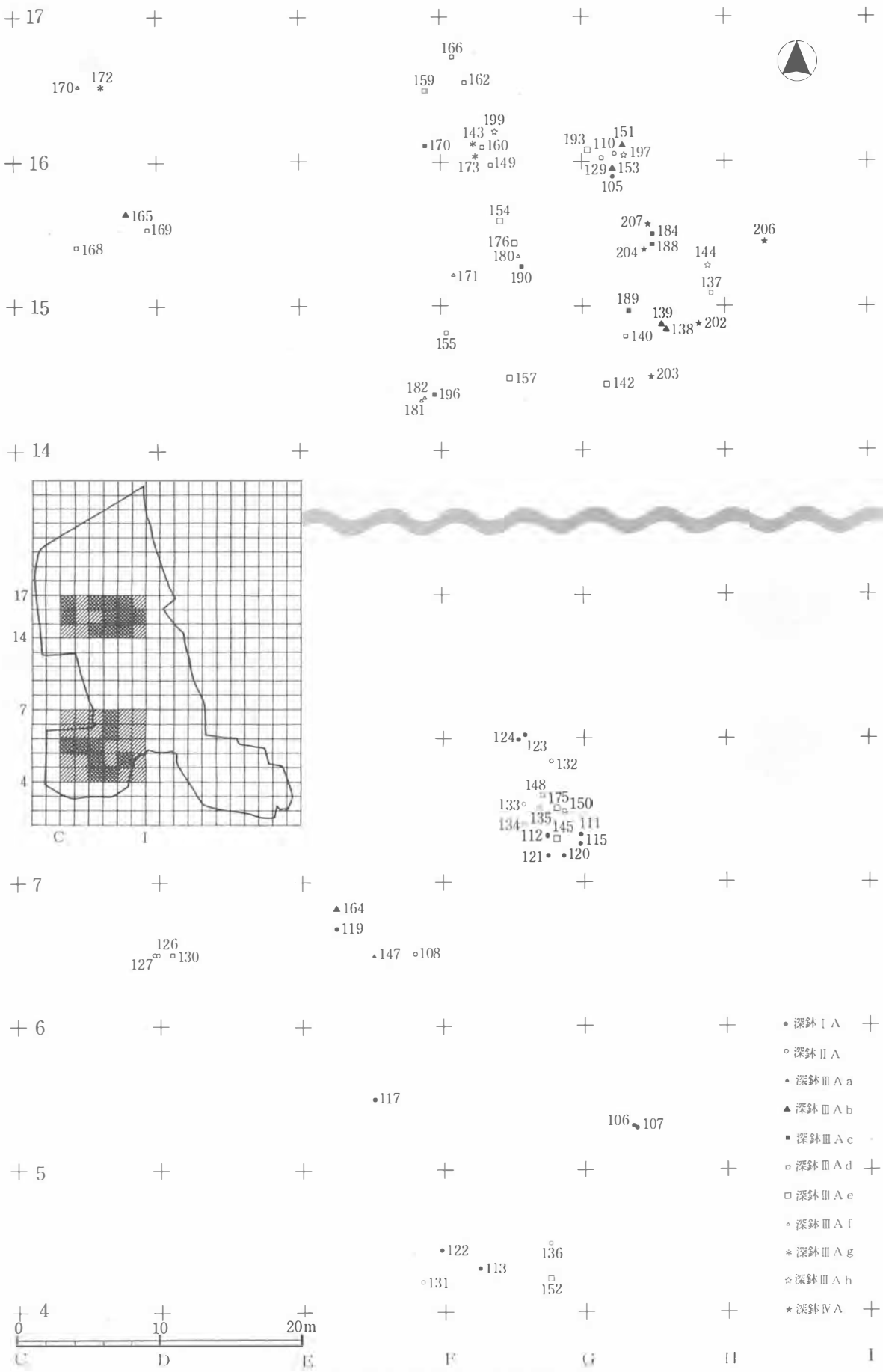
29は黒色磨研土器の胴部片で、沈線の周囲に細線羽状文を施す。



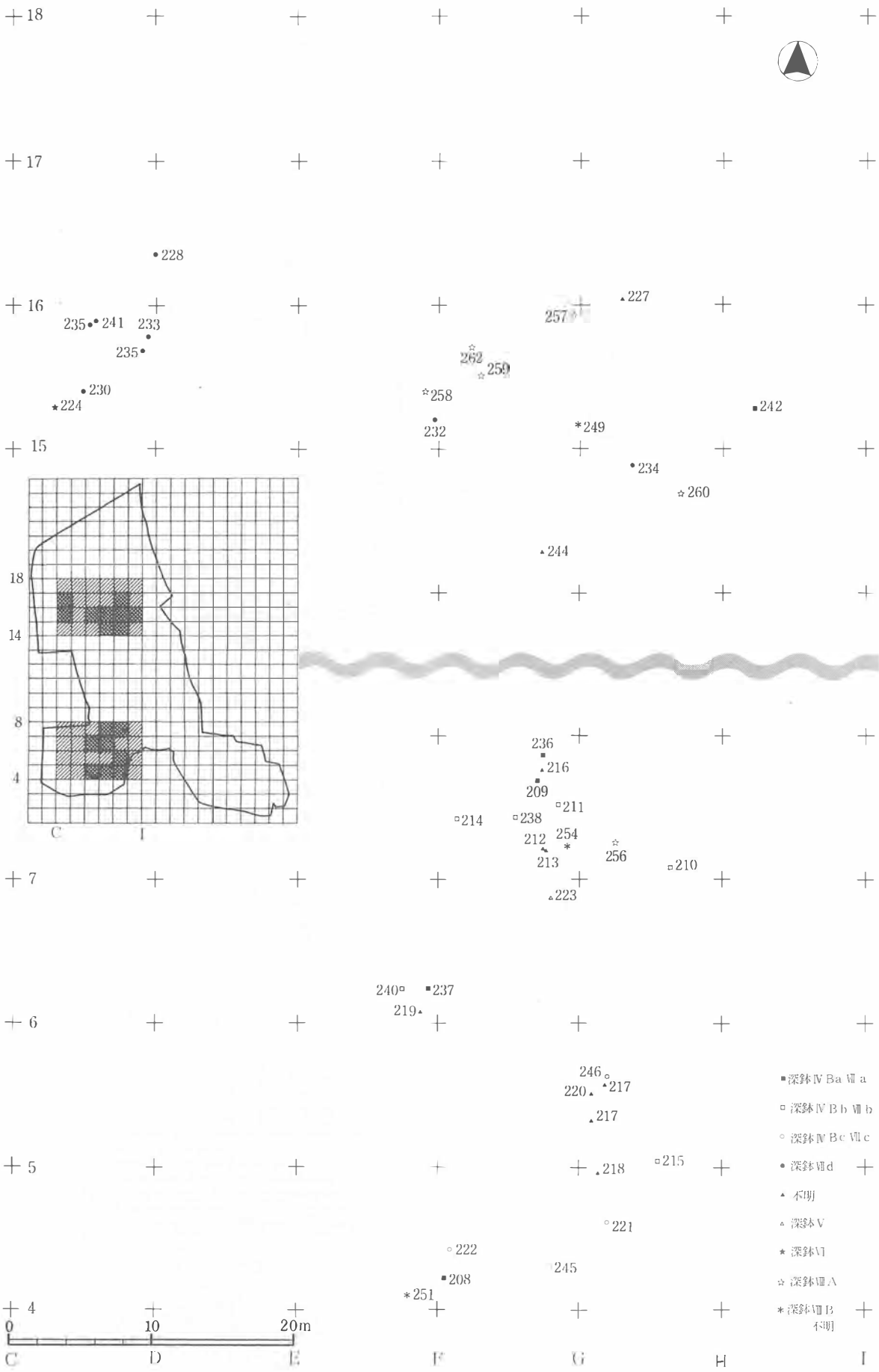
第31図　縄文式土器等分布図（１）



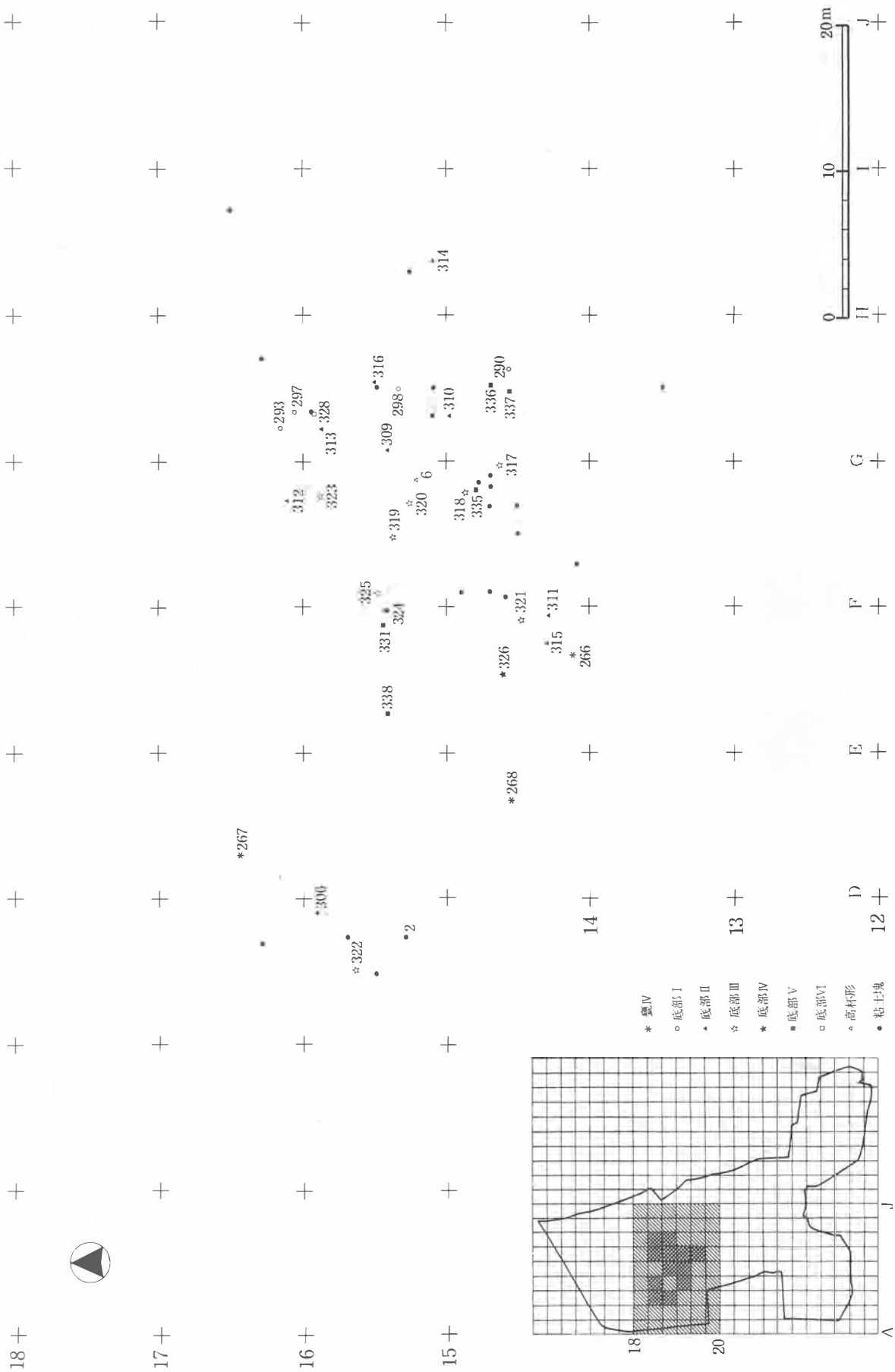
第32図　縄文式浅鉢形土器等分布図（２）



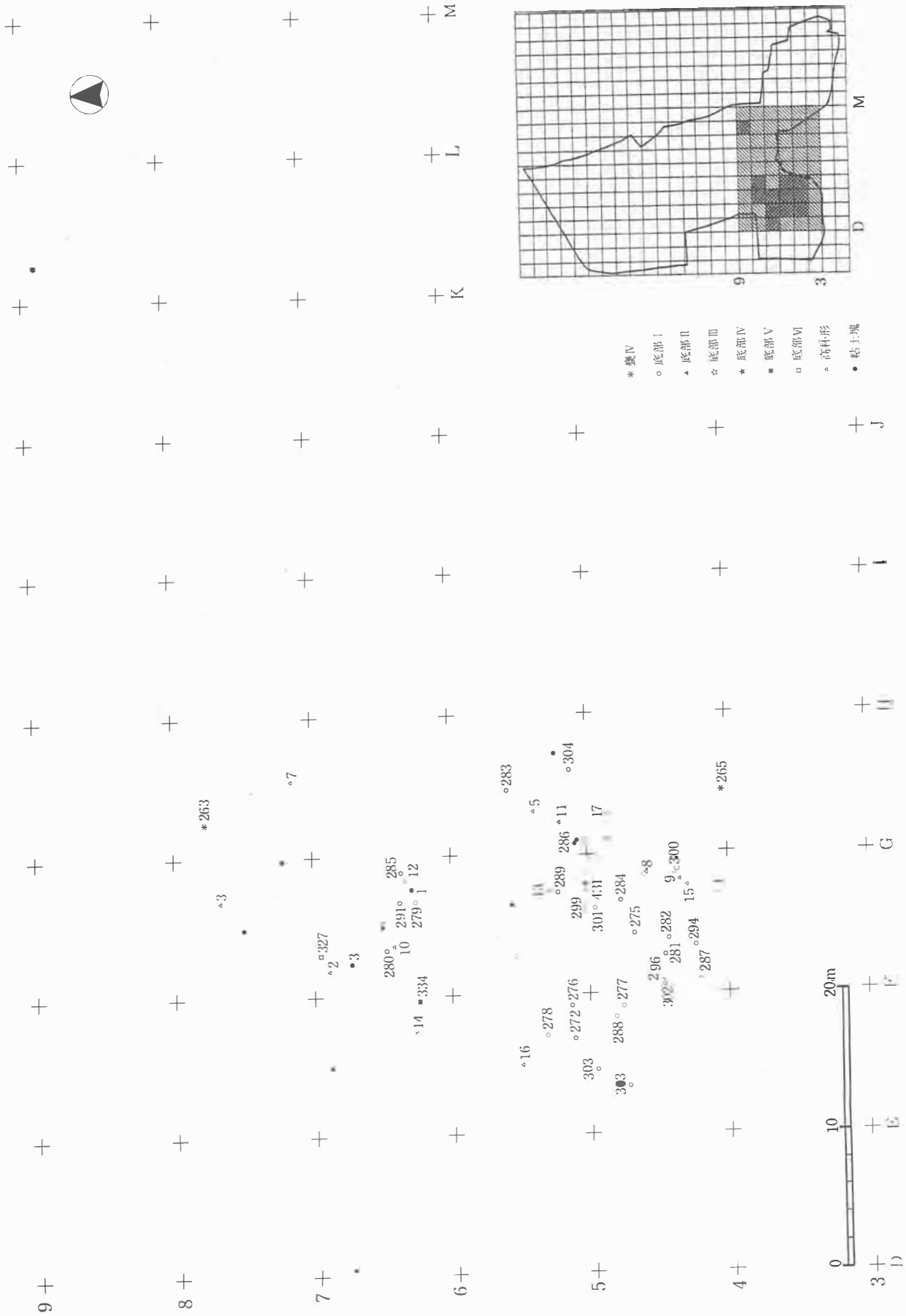
第33図　縄文式深鉢形土器分布図（３）



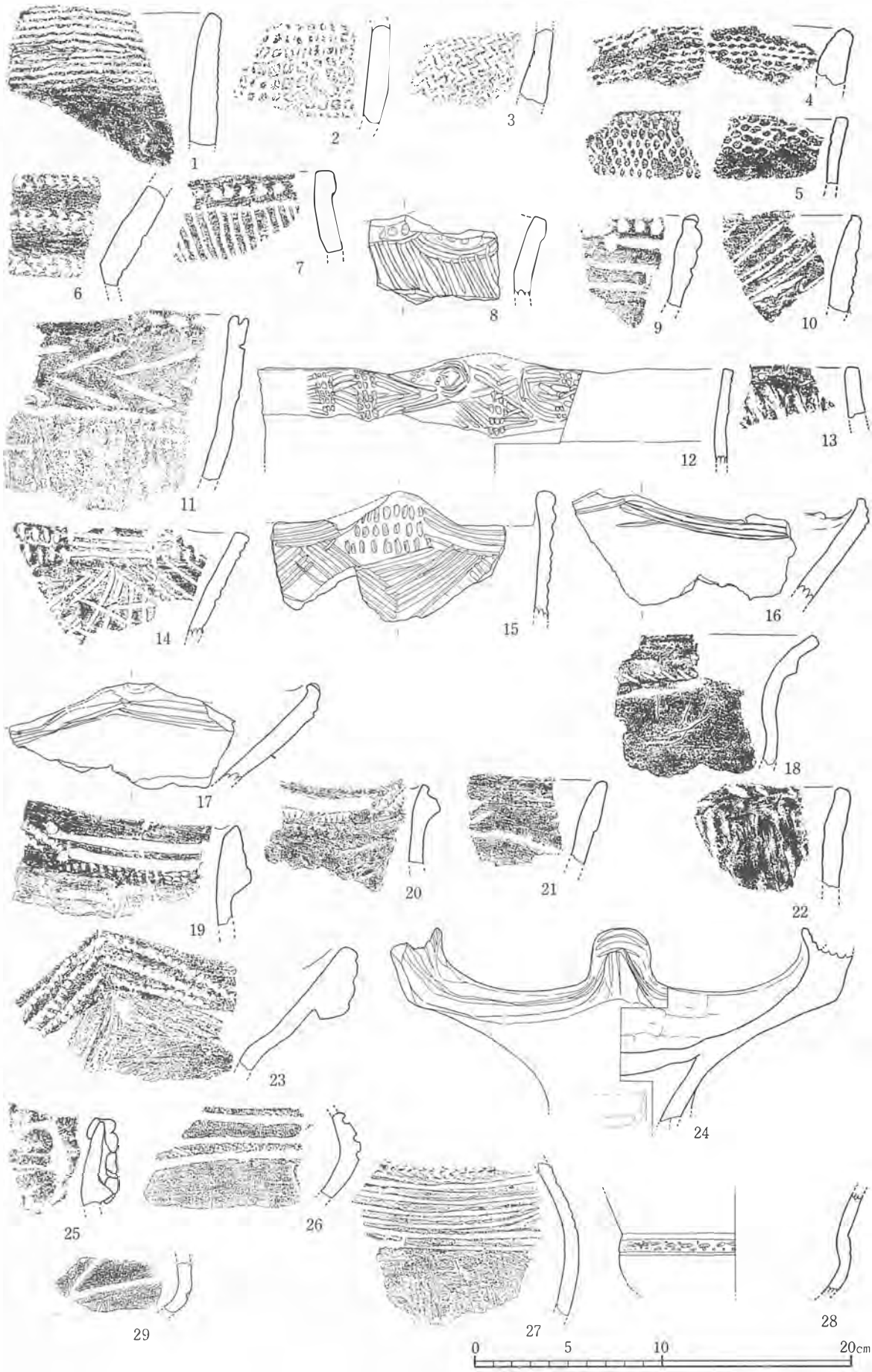
第34図　縄文式深鉢形土器分布図（４）



第35図　縄文式土器底部等分布図（５）



第36図　縄文式土器底部等分布図（6）



第37図　縄文式土器実測図

以下は土器のその特徴にある程度のまとまりをもつものであるために、類別して記述する。

Ⅰａ類（第38図30～38・40～43）

体部から口縁部が屈折して立ち上がるもので口縁帯に２～３条の凹線を施すものを基本とするが、41のように５条の凹線を施すものもある。42は口縁部がわずかに波状を呈する。43は胴部片で体部と頸部の境に押点を施すものである。いずれも丁寧な磨きを施す。30を除きすべてＧ区からの出土である。

Ⅰｂ類（第38図39）

体部の上に湾曲する頸部があり、その頸部から口縁部がほぼ直立して立ち上がるもので、出土数はⅠａ類に比して少ない。

Ⅱａ類（第38図49・50）

体部から口縁部が屈折して立ち上がるもので、わずかに波状口縁となる。口縁帯に１～２条のやや太めの沈線を施す。50は49に比べると、研磨や施文が粗雑になる。50は復元口径29㎝程を測る。

Ⅱｂ類（第38図44～48・54）

体部の上に内湾する頸部があり、その頸部から口縁部がほぼ直立して立ち上がるもので、口縁帯の幅が狭くなり、そこに１～２条のやや太めの沈線を施すものを基本とする。45、47はゆるやかな波状口縁となる。48・54は他に比べると研磨がやや粗雑である。なお44は無文である。

Ⅲａ類（第38・39図52・53・55～58・63・67・69）

やはり、体部の上に内湾する頸部があり、その頸部から口縁部がほぼ直立して立ち上がるもので、口縁帯の幅がより狭くなり、そこに基本的に１条の沈線を施すものを基本とする（52は無文）。頸部の湾曲が弱くなり、67・69のように頸部が横方向に延びるものも認められる。57・63は口縁部に小さな波状隆起を有し、さらに57は頸部と体部の境に１条の沈線をほどこす。55は復元口径38.5㎝、56は33.6㎝を測る。

Ⅲｂ類（第38・39図51・59～62・64～66・68・71）

器形的にはⅢａ類と同様だが、口縁部が形骸化してくる。頸端部をわずかにつまみ上げた様になり、口縁部内面が段上になったもので、口縁帯に１条の沈線を施すものを基本とする（61は無文）。51を除き頸部の湾曲はいずれも弱くなり、頸部の屈曲点が体部直上付近にある。湾曲すると言うより外反すると呼んだ方が良いものである。頸部が長く伸びるものが出現する（59・61・62・68・71）。その中でも、68・71は頸部が水平方向に伸びる。一方頸部が短いもの（51・60・64～66）も存在する。51・61には外器面口縁帯に赤色の彩色が認められる。

Ⅲｃ類（第39図70・72～75・77・78）

基本的にはⅢｂ類と同様だが口縁部がより形骸化し、口縁部内面が段上になったもので、無文のものである。そのために口縁帯と呼べるものが存在しない。頸部の屈曲点は体部のすぐ上にある。頸部の長いもの（70）や著しく短いもの（75・77・78）がある。頸部が短くなるにつれて、体部・頸部・口縁部の境が不明瞭になる。77は口縁部内面に赤色の彩色が認められる。

Ⅲｄ類（第39図76・79）

基本的にはⅢｃ類と同様である。口縁部がいっそう形骸化し内・外面の沈線により口縁部と頸部を区分しているものである。また頸部が著しく短くなり、頸部の屈曲点は体部のすぐ上にある。79は復元口径37㎝を測る。小さな波状隆起をもち、突起部下のややずれた箇所に押点をもち、沈線もやや不規則になって来ている。

Ⅲｅ類（第39図80）

基本的にはⅢｄ類と同様で内・外面ともに沈線により口縁部と頸部を区分しているものである。頸部が上記に比べ長く、また湾曲も強く、頸部の屈曲点が稜線となる。また頸部と体部に２対の穿孔が見られる。口径36.2㎝・器高10.9㎝を測る。

Ⅳａ類（第39・40図81・84～86）

頸部が、体部から大きく外に向かって伸びるものである。81は頸部端部の外面には沈線を施し、内面は段状となっており、形骸化した口縁部を有す。一方84は頸部がそのまま口縁部となるものであり、波状口縁となる。外来系土器の様相が強い。またこの類は頸部が直線的に伸びるもの（81・84・86）と外反するもの（85）が存在する。81は復元口径44.1㎝、84は復元口径32.3㎝を測る。

Ⅳｂ類（第40図87・88・91）

基本的にはⅣａ類と同じもので頸部がそのまま口縁部となるものだが、体部が丸みを帯び器高が深くなるものである。87は復元口径19.6㎝を測る。

Ⅳｃ類（第40図89・90・92）

Ⅳｂ類と同じもので頸部がそのまま口縁部となる。体部から外反する頸部を持ち、頸部が短いものである。89は直線的な体部で、Ⅰａ類として分類した浅鉢形土器の無文のものである可能性もある。

Ⅴａ類（第39・40図83・93～96）

体部の上に内湾する頸部があり、その頸部に形骸化した口縁部が付くもので、基本的にはⅢｄ類と同様であるが、体部が円みを帯び器高が深くなり、より体部・頸部・口縁部の境が不明瞭になるものである。83・94に比べると93・95・96は頸部と体部の境が不明瞭になり、体部がより丸みを帯び器高が深くなる。83は復元口径21.1㎝、94は復元口径16.7㎝、96は復元口径20.0㎝・器高10.5㎝を測る。

Ⅴｂ類（第40図97・98）

頸部と体部の境が認められなくなり、球形の体部に外反する口縁部が付くような器形になる。いづれも口縁部の外面には口縁部と頸部を区分しているかのような沈線を施し、内面は段状となる。98は頸部のくびれ部に刻目突帯を有し、口縁部にはリボン状の突起を有する。黒色磨研土器から刻目突帯文土器への過渡期として注目される。宮崎県松添貝塚からも同様な土器が出土しているらしい。97は復元口径16.2㎝、98は復元口径18.6㎝を測る。

Ⅵ類（第40図99～104）

体部、頸部、口縁部の区分がないものを一括した。99～101は丸みを帯びた椀形土器である。103はやや大型の鉢。104は椀形であるが底部は平底を呈する。復元すると口径12.5㎝・器高5.5㎝・底径3.8㎝を測る。

深鉢形土器

ⅠＡ類土器(第41・42図105～107・111～124)

胴部のうえに湾曲する頸部が付き、口縁部は屈折して立ち上がるもので、口縁帯に２～３条の凹線を施すものを基本とする。106・107は同一個体と考えられ、幅の広い口縁帯に平行沈線と鋸歯文状の文様をもつ、頸部の湾曲は胴部直上に屈曲点があり、胴部が小さく膨らむ。105・111～124は口縁帯に２～３条の凹線をもつ、なかには111のように凹線に沿って細線羽状文を付加したり、113のように５～６条の凹線をもつものもある。また112は波状隆起を有する。全体的に器面調整は丁寧である。復元口径は105は25.4㎝を測る。

ⅡＡ類(第41・42図108～110・125～128・131～136)

ⅠＡ類同様胴部のうえに湾曲する頸部が付き、口縁部は屈折して立ち上がるもので、口縁帯に太い沈線を巡らすものである。口縁帯の太い沈線は１条のもの（108・109）、２条のもの（128・131・132・134・135）、３条のもの（125～127・133・136）と５条のもの（110）があり、口縁は頸部よりやや内傾して立ち上がるものが多い。また頸部の湾曲は頸部中央付近に屈曲点があり（108～110・133）、頸部と胴部の境はわずかに膨らみをもつもの（109・110）や段を形成するもの（108）がある。なお131、132は口縁部がゆるやかな波状を呈す。全体的に器面調整は丁寧である。口径はいづれも復元であるが108は23.8㎝、109は24.6㎝、110は31.5㎝、125は27.6㎝、126は25.8㎝を測る。なお、110は次のⅢＡ類に含めたほうが良いのかもしれないが、胴部が僅に膨らみを持つことからⅡＡ類に含めた。

ⅢＡ類ａ～ｆ(第42～46図129・130・137～142・145～193・195・196・198)

ⅡＡ類同様、胴部のうえに湾曲する頸部が付き、口縁部は屈折して立ち上がるもので、いずれも口縁帯に３～７条の沈線をめぐらすが、線が細くなったり、沈線の間隔に広狭があったり、沈線が一周しない、直線をなさないなどより粗雑化している。施文にはヘラ状のものと貝殻を使用したものが見られるが割合は前者が多い。

全体的な器形を伺い知ることのできる資料は少ないが、129・130・137～141をみると頸部の湾曲が弱まり、直線的になる。屈曲点も口縁部直下に位置するものが多くなる。また頸部と胴部の境には明瞭な段や膨らみは認めらなくなってきており、わずかに丸みをもつもの（129）、稜線をなすもの（141）がある。口縁部の立ち上がりは、内傾するもの、直立

するもの、外傾するものなど様々である。

また頸部からの口縁部の立ち上がりを見ると、頸部端がしっかりと外反し、内傾する口縁部が付き、口縁帯の下部分が張り出すもので、３条の沈線を施すが粗雑になるもの（ａ；146・147）や、やはり頸部端がしっかりと外反し、そこから口縁部が立ち上がるもの（ｂ；138・151・153・164・165）である。この類は沈線がしっかりしているものが多い。

逆に頸部端部の外反が弱く口縁部と頸部の境が不明確になってくるものがある（ｃ；170・184～191・195・196）。この類は施文が雑で不規則なものが多く沈線の本数も多い。

また両者の中間的な形態のもので、前者に近いもの（ｄ；129・130・137・140・141・148～150・155・158～162・166・168・169）と後者に近いもの（ｅ；145・152・154・156・157・167・174～176・192・193）がある。

その他に内面では頸部と口縁部の境が不明で、口縁断面形を見ると口縁端が細くなり、三角形を呈すもの（ｆ；171・177～183）も存在する。これらは３～５条の沈線を施す。その施文は不規則で178や183のような細線を施すものも認められる。

また142のように口縁帯にＸ字状の文様を施すものも認められる。その施文は雑で、頸部の湾曲も弱く直線的になり、口縁部と頸部の境も不明確になる。口径は130は41.2㎝、137は40.9㎝、138は41.4㎝、140は42.6㎝、141は30.0㎝、142は27.4㎝を測る。

Ⅲ Ａｇ類（第44・45図143・172・173）

器形は上記と基本的に同様であるが、口縁帯の幅が著しく狭くなり、口縁部が形骸化し、頸端部をわずかにつまみ上げた様になる。頸部の湾曲は強い。なお、173は波状突起を有する。143は復元口径36.7㎝を測る。

Ⅲ Ａｈ類（第44・46図144・197・199）

頸部から口縁部が外に大きく開くもので、４～５条の沈線を施すものである。144は復元口径31.0㎝を測る。

Ⅳ Ａ類（第46図194・200～207）

外来系土器と考えられるものである。ここで言う外来系土器というのは、外来土器を模倣して在地で作ったと考えられるものも含めて取り扱う。また浅鉢形土器・椀形土器も一括してこの頁で記述する。

194は口縁部と頸部の区別が不明瞭で口縁帯に弧線状の施文を施す。200～202は頸部から口縁部が外に大きく開くもので口縁帯に鋸歯状の文様を施す。いずれも粗い作りである。200・201は１号住居状遺構からの出土である。203・204は椀形土器で弧線状の沈線を施す。器壁が薄く丁寧な磨きを施す。胎土に多くの砂粒を含む。205・207は浅鉢形土器で、205は口縁部に小さな波状隆起をもち、そこを文様集約部とする。207は赤色の彩色が認められる。204は小型の鉢形土器で口縁帯に４条の沈線を施す。丁寧な作りである。

Ⅳ Ｂ類(第47～49図208～222)

胴部のうえに湾曲する頸部が付き、その頸部がそのまま口縁部となるもので無文のものである。

頸部と胴部の境に段や沈線を有するもの（ａ）、膨らみを有するもの（ｂ）、丸みを帯びるもの（ｃ）の３種類に細分できる。これらの土器はすべてＧ区出土のものである。

Ⅳ Ｂａ類（208・209）

208の頸部は湾曲し、屈曲点は頸部の中央より下側にあり、頸部と胴部の境には段を有する。最大径は土器の口縁上端にくる。209の頸部の湾曲は弱いが、屈曲点は頸部の中央より下側にあり、頸部と胴部の境には段を有する。最大径は頸部と胴部の境にくる。208は口径36.1㎝、最大胴部径35.4㎝を測る。209は復元だが口径29.8㎝を測る。

Ⅳ Ｂｂ類（210・211・214・215）

210の頸部は口縁近くになり急に外反する。頸部と胴部の境は膨らみをを有す。最大径は頸部と胴部の境にくる。211の頸部の湾曲は弱いが、屈曲点は頸部の中央にあり、頸部と胴部の境はわずかに膨らみをもつ。最大径は口縁上端になる。214、215も同様の器形になると思われる。210は復元口径31.2㎝、211は35.7㎝を測る。

Ⅳ Ｂｃ類（221・222）

221は頸部の湾曲の屈曲点は頸部の中央より下にくる。また胴部と頸部の境は丸みをもつ。最大径は口縁上端にくる。222は胴部と頸部の境が不明瞭で

Ⅳ類に含めた方が良いのかも知れない。最大径は口縁部上端にくる。いずれも復元だが221は口径32.8㎝・胴部最大径35.2㎝、222は口径30.9㎝を測る。

その他胴部を欠損するために上記の分類には、含められないものとして212～220がある。212～217は頸部の湾曲は頸部のほぼ中央にくる。218～220は頸部の湾曲が直線的になると思われるが小破片のため不明である。いずれも復元だが212は口径27.2㎝、213は26.4㎝を測る。

Ｖ類（第49・50図223・227）

口縁部から胴部がやや膨らみを持ちながらそのまま底部に移行するものである。223はやや丸みをもつ。227は傾きが急で、器高が低くなると思われ、摺鉢形になると考えられる。223は復元口径35.0㎝・227は46.5㎝を測る。

Ⅵ類土器（第50図224～226）

無文のもので胴部のうえに外反する口縁部が付くもので、口縁部分が「く」の字を呈するものである。225は口縁部が肥厚する。225は復元口径27.8㎝を測る。226は口径32.7㎝を測る。

Ⅶ類土器(第51～54図228～247）

胴部片である。そのため口縁帯の有無等については不明である。ここでも上記ⅣＢ類の頸部と胴部の分類を準用する。

ａ類（236・237・242）

頸部と胴部の境に段を持つものとしては236，237がある。明瞭な段をもつものである。また242は頸部と胴部の境にわずかに段をもち、屈曲が鋭角的である。調整も丁寧である。

ｂ類（238・240）

膨らみをもつものとして238，240がある。調整は丁寧である。

ｃ類（245・246）

245，246は胴部と頸部の境は丸みを帯びるというより、胴部、頸部の境が不明瞭なものである。

ｄ類（228～235・241）

胴部と頸部の境には明瞭な段や張り出しは認めらず、その境が稜線状になる。232，233は頸部の湾曲も弱くやや直線的になる。なお231は230の底部である。

ｅ類（243）

243は頸部に粘土紐を貼り付けるものである。Ｅ21グリッド内の土坑からの出土であり、他に267の刻目突帯文土器が出土しているが、その状況は流れ込みの可能性が高い。

ⅧＢ類口縁部（(第55図248～255）

ⅣＢ類と同じく胴部のうえに湾曲する頸部が付き、その頸部がそのまま口縁部になる無文のものと思われるが小破片のため不明なものである。248，249は粗製の条痕文土器の口縁部片である。その他252～255は、穿孔をもつものを一括した。

ⅧＡ類（第55図256～262）

基本的にはＩＡ・ⅡＡ・ⅢＡ類と同様なものであるが、口縁帯に文様を施さない。

256・258はヘラ状工具による研磨を施し、器面調整が丁寧でＩＡ・ⅡＡ類土器と同じものである。259～261は口縁部が形骸化し、頸端部をわずかにつまみあげた様になりⅢＡｇ類と同様である。一方257は粗製である。262は口縁部が大きく外反する。

Ⅸ類（第55図263～268）

刻目突帯文土器である。263は口縁部に２条の刻目を巡らす。264・268は口縁部に刻目突帯を巡らす。265～267は口縁部とその下方に刻み目突帯を巡らす。265は粗い条痕を施す。

組織痕土器（第55図269～271）

小破片を含め６点が出土し、そのうちの３点を図化した。いずれも編布圧痕である。271は口縁部及び内面は粗い条痕を施す。

底部（第56～58図）

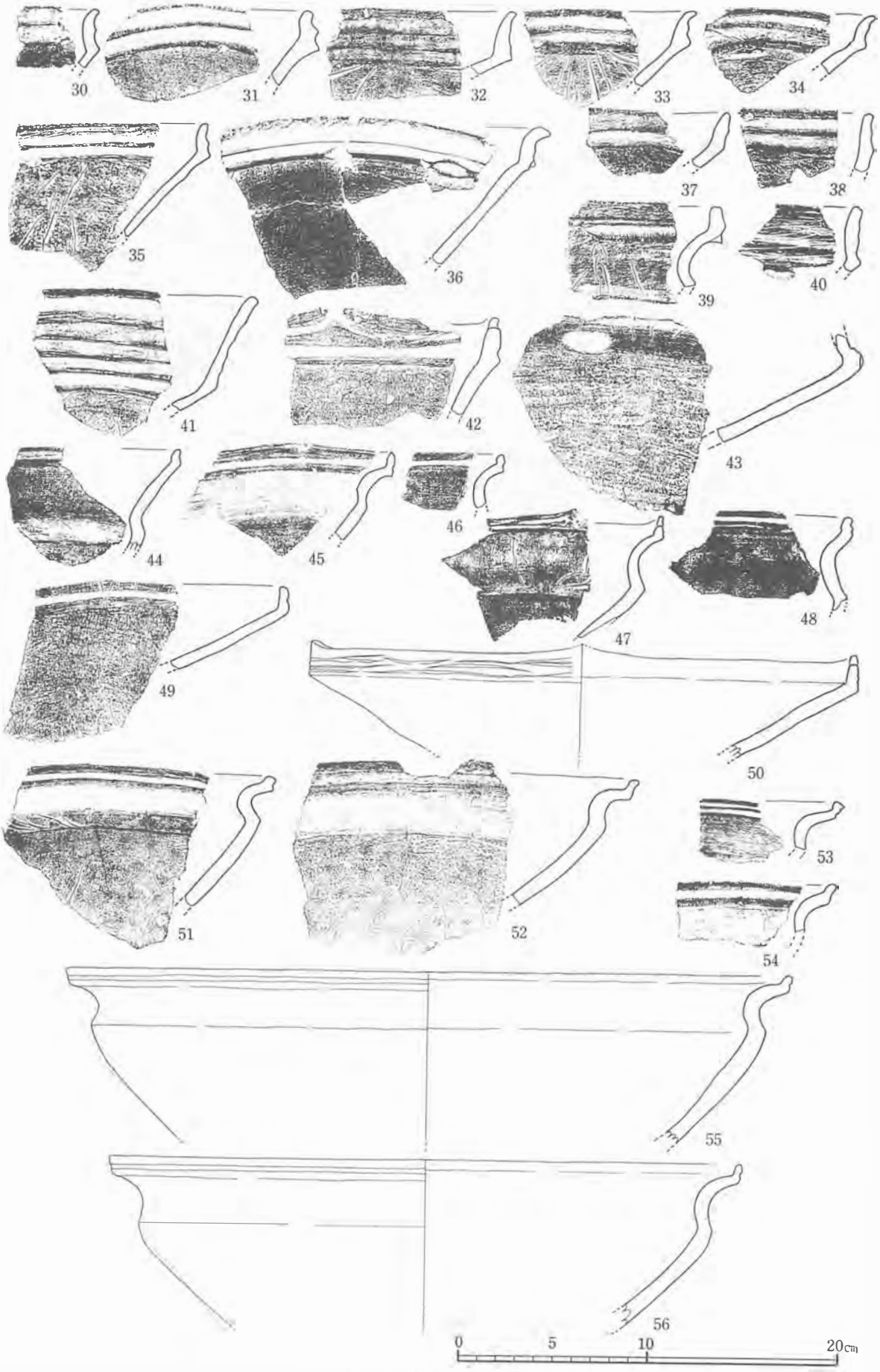
底部は形状により６種に分類した。Ⅰ類は上底気味、Ⅱ類は平底、Ⅲ類は円盤状を呈すもの。その他に底面が楕円形を呈すものをⅣ類。底部外面に何らかの圧痕が認められるものをⅤ類。その他をⅥ類とする。

Ⅰ類（269～295・297～304）

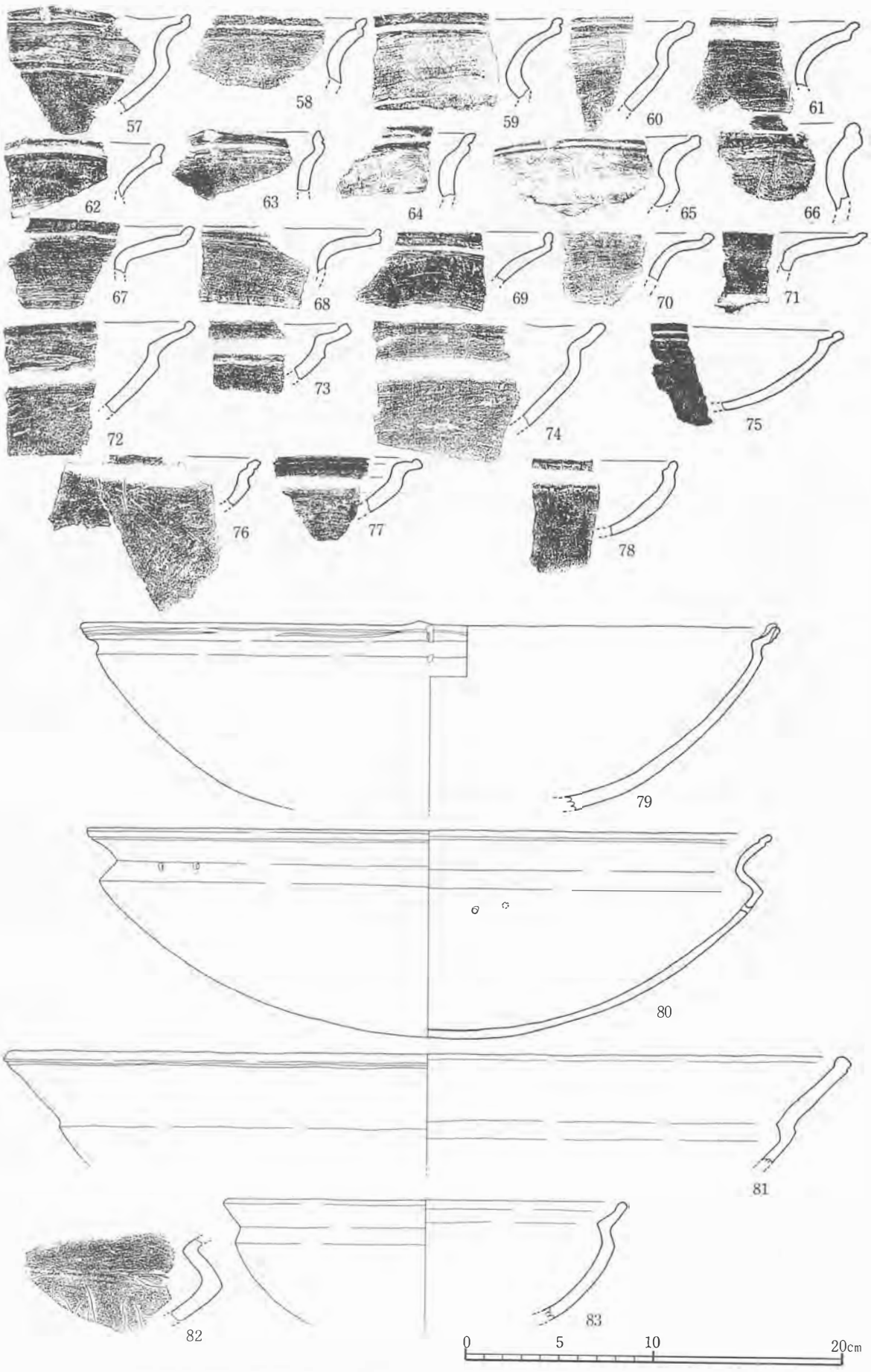
はっきりした上底から、わずかに上底気味になるものまで様々である。269～275までは浅鉢形ＩＡ類の底部の可能性がある。

Ⅱ類（296・305～316・326・327）

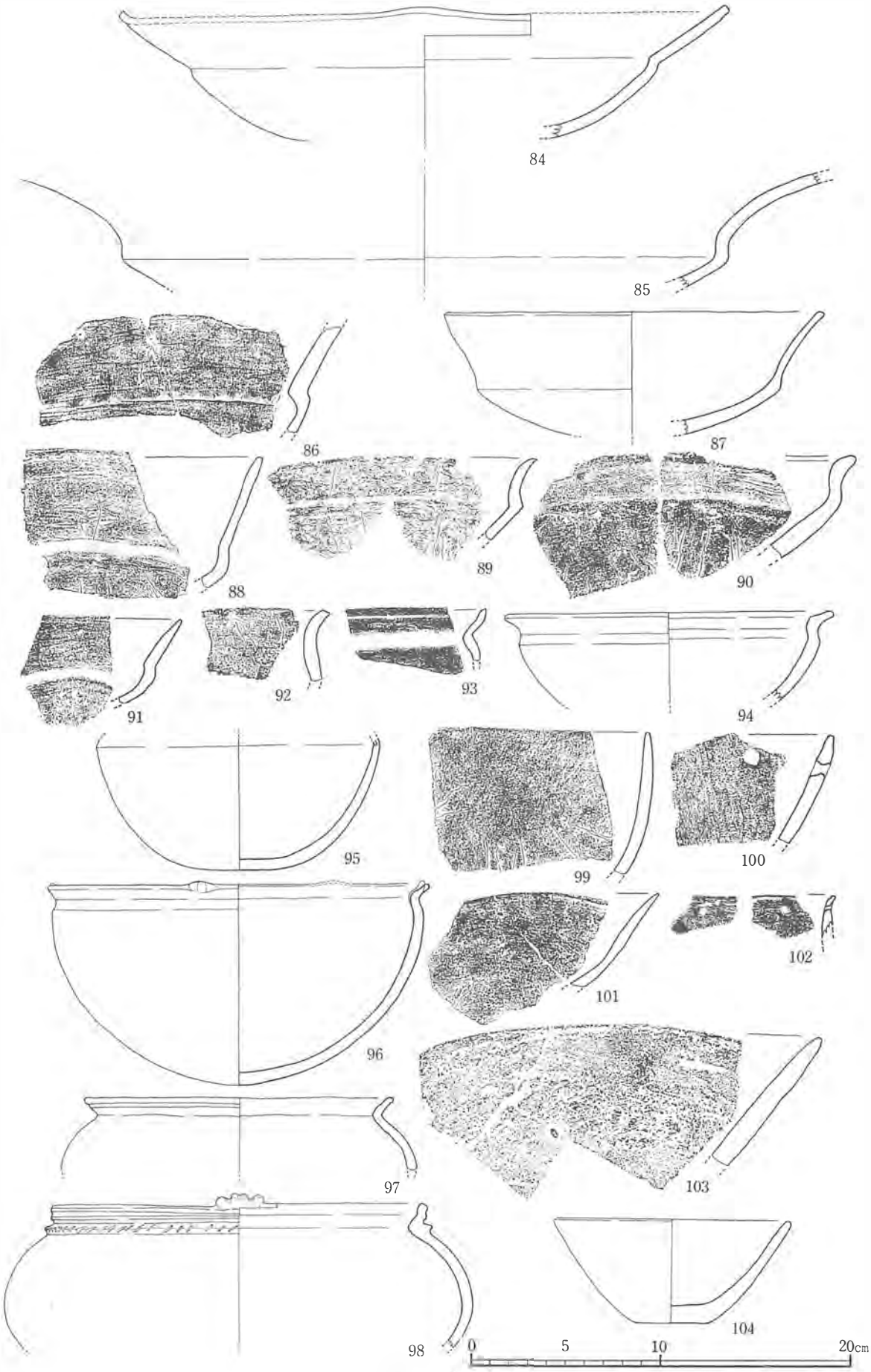
305～316の内器面は底部と胴部の境はなだらかで



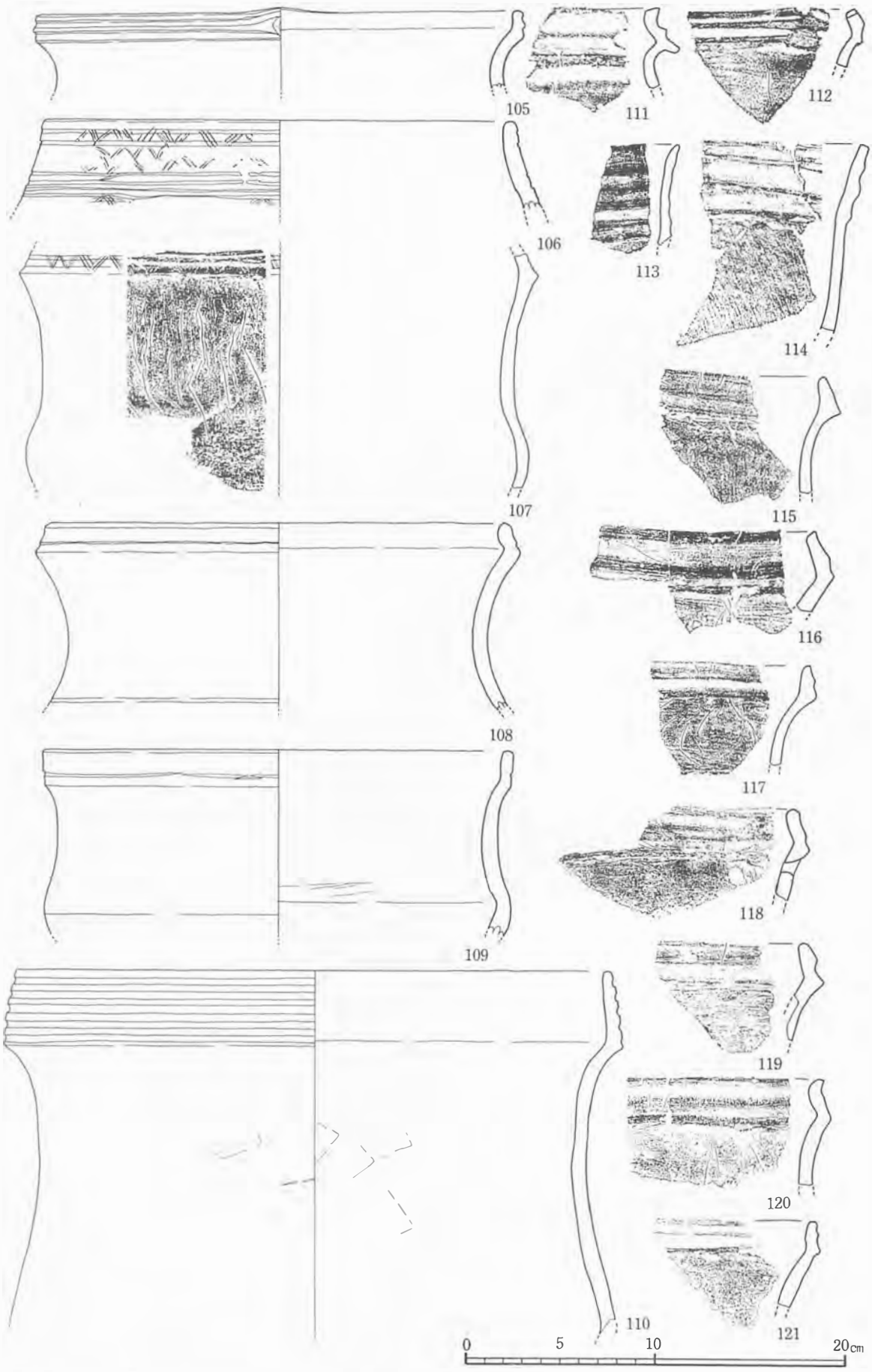
第38図　縄文式土器実測図



第39図　縄文式土器実測図

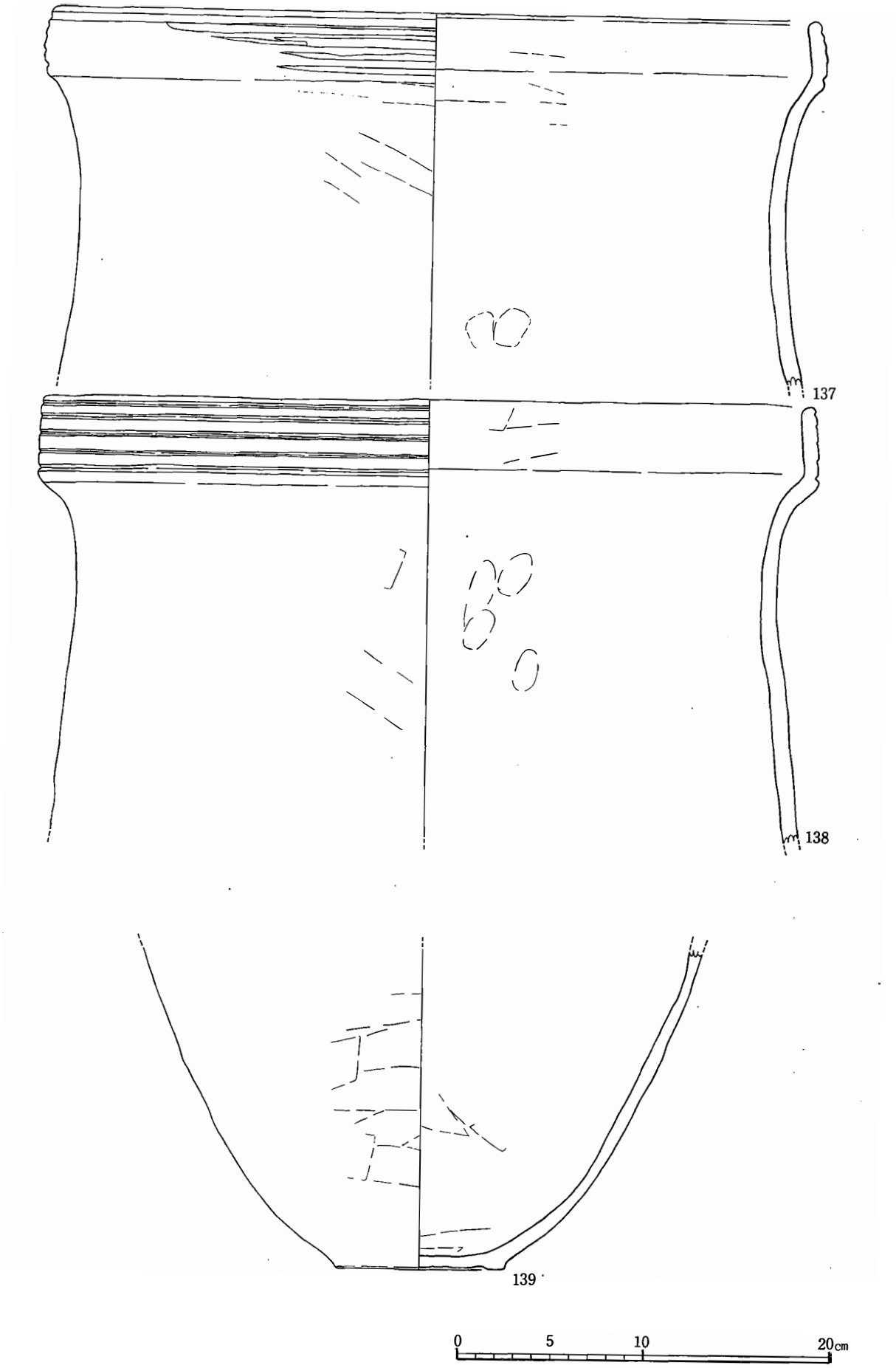


第40図　縄文式土器実測図

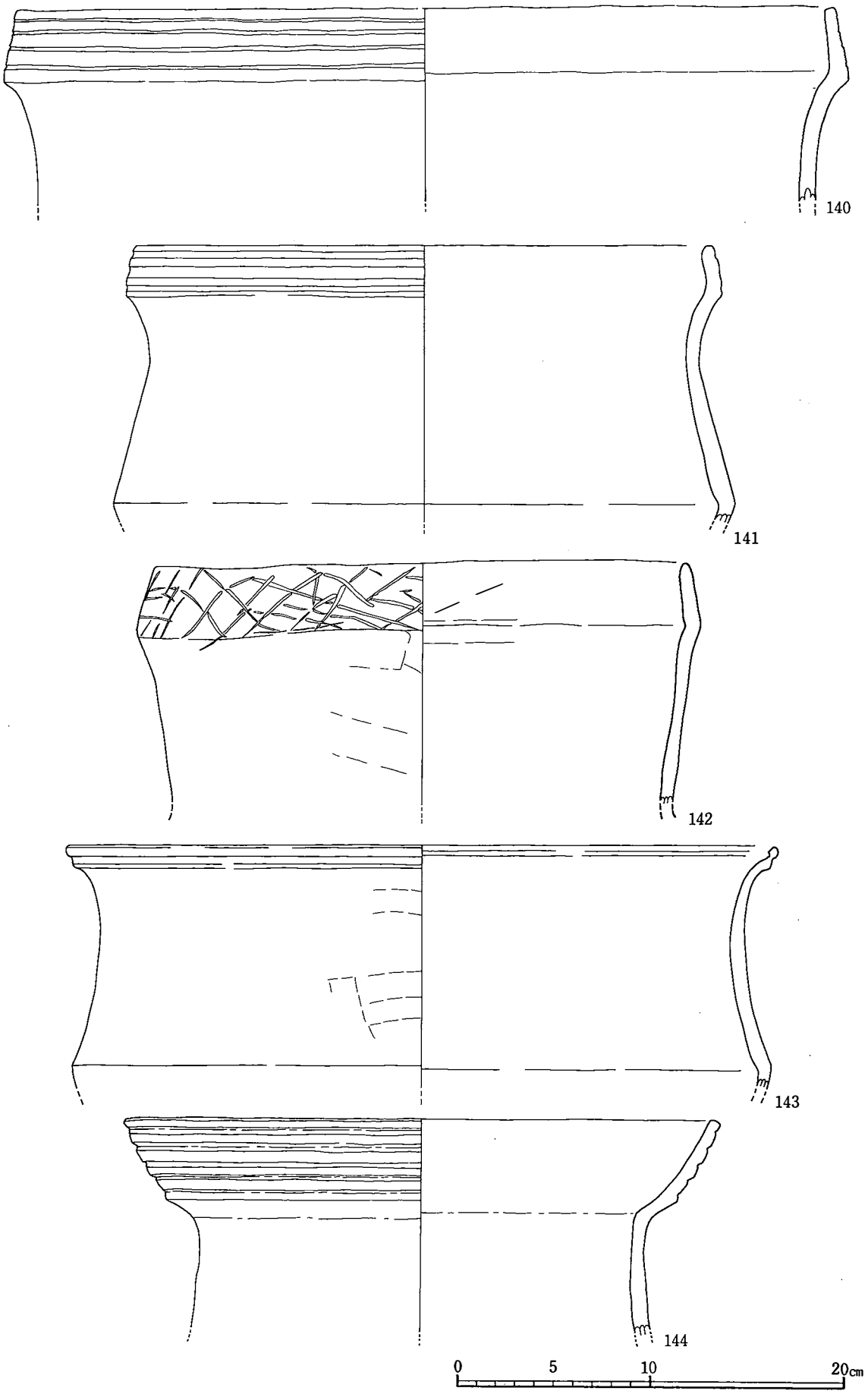


第41図　縄文式土器実測図

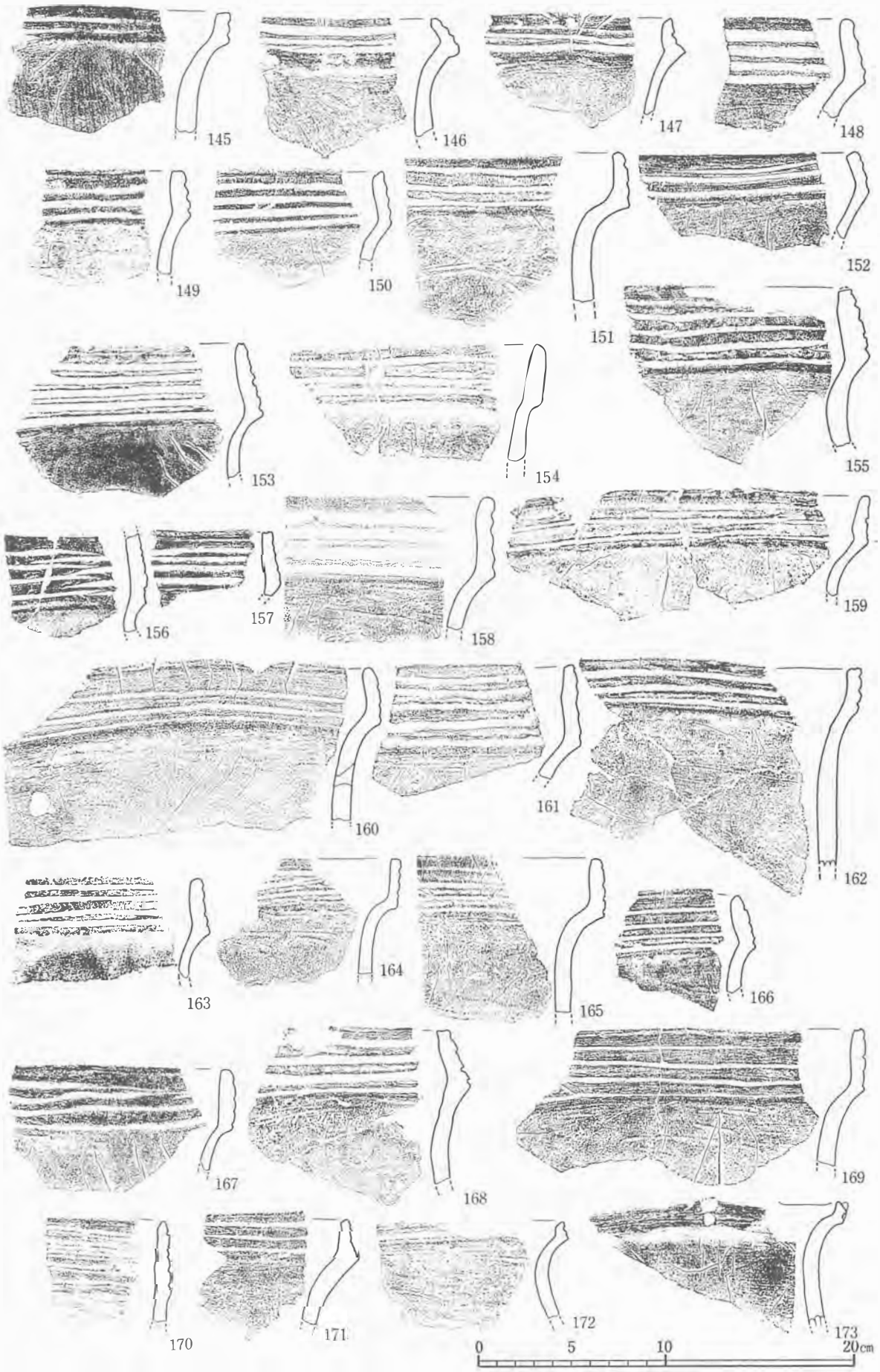
第42図　縄文式土器実測図



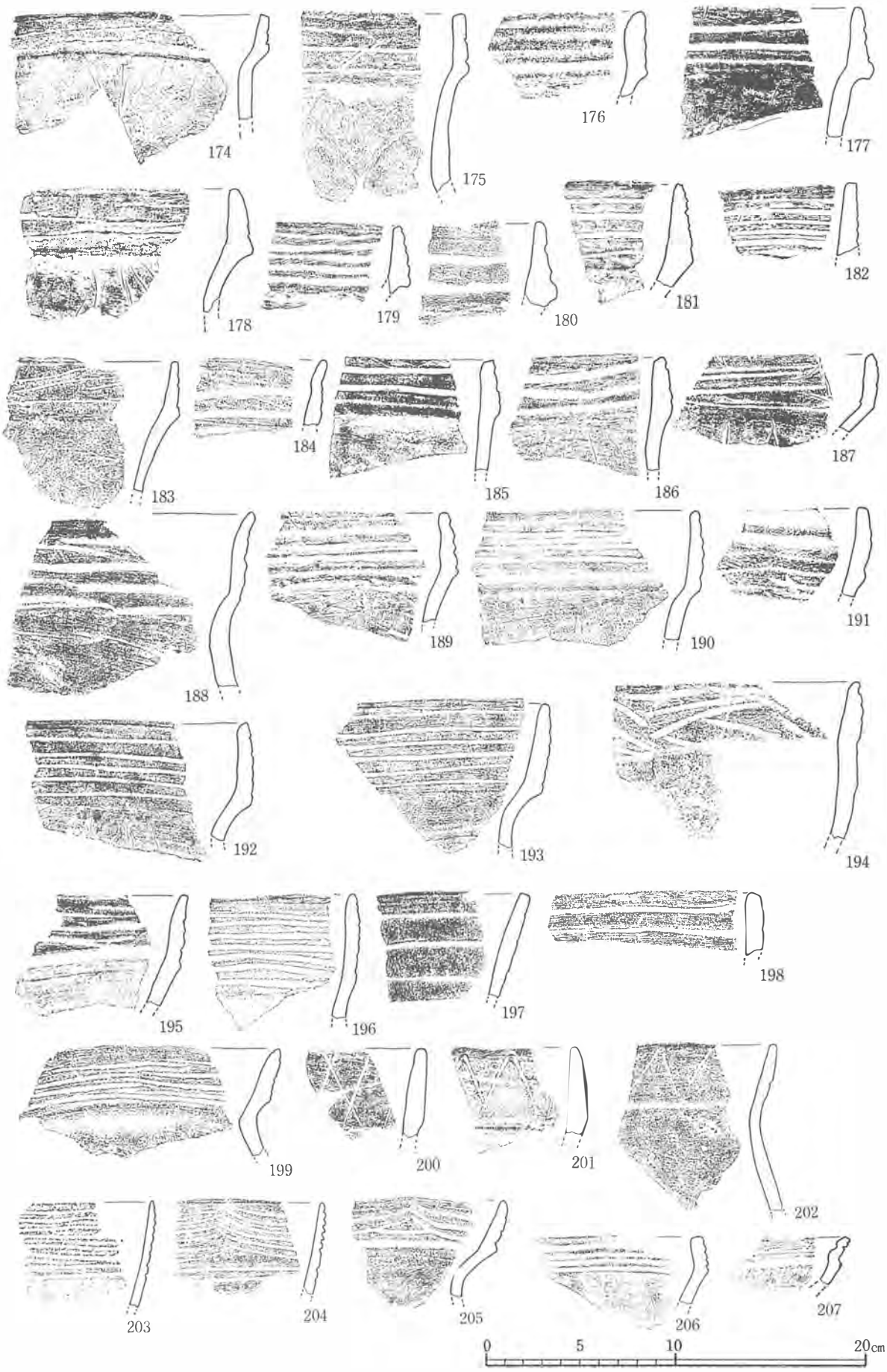
第43図　縄文式土器実測図



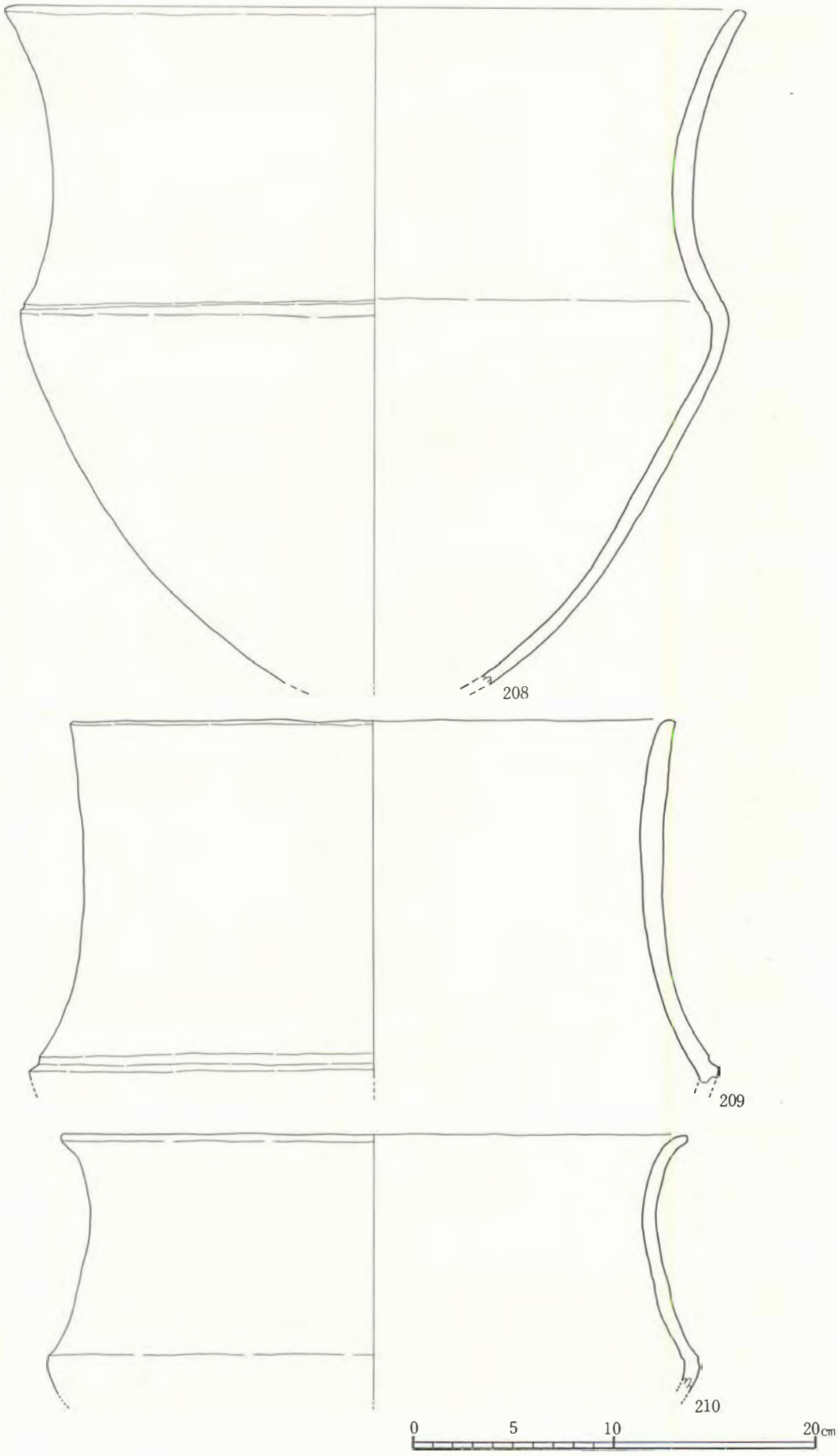
第44図　縄文式土器実測図



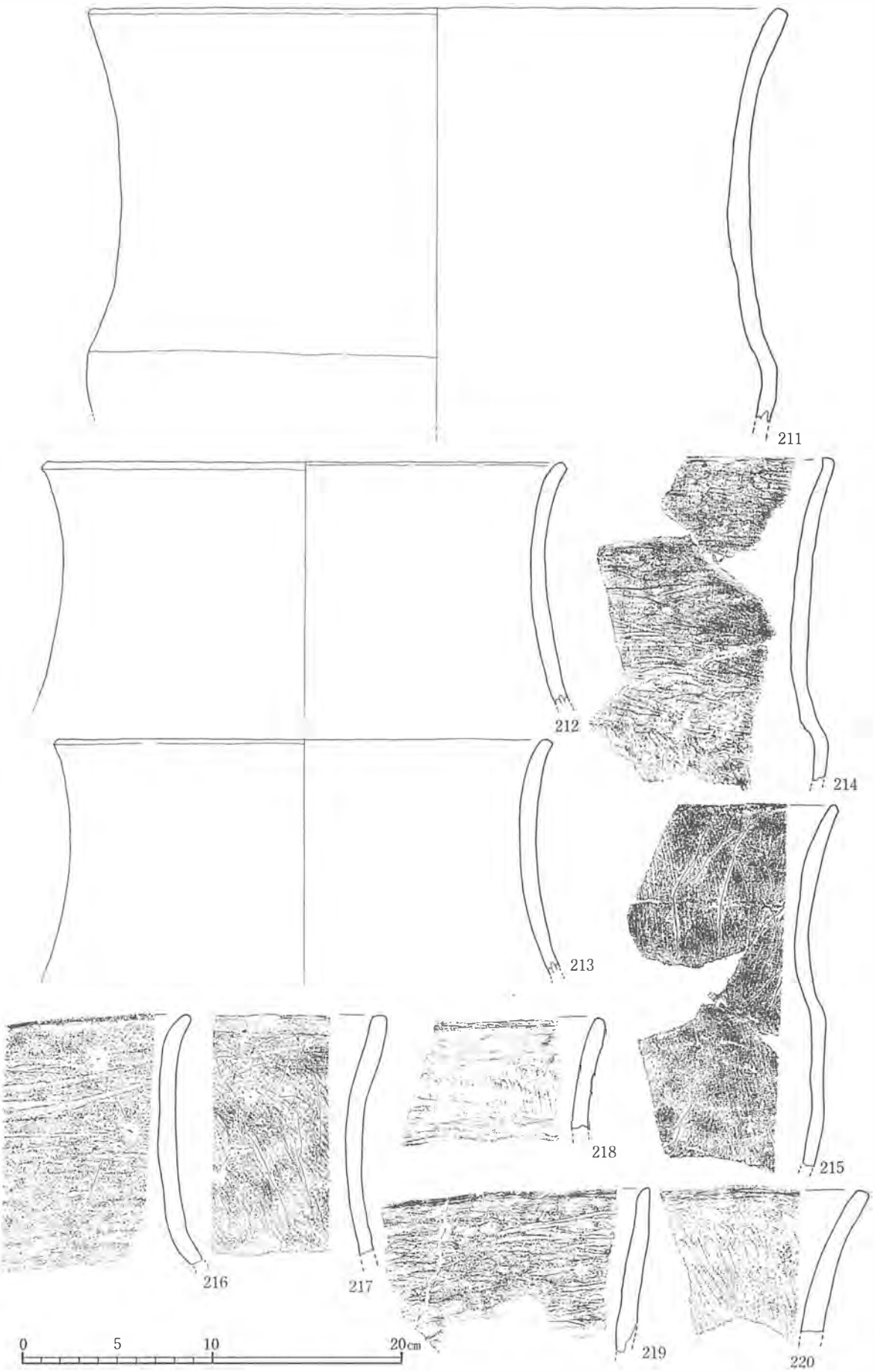
第45図　縄文式土器実測図



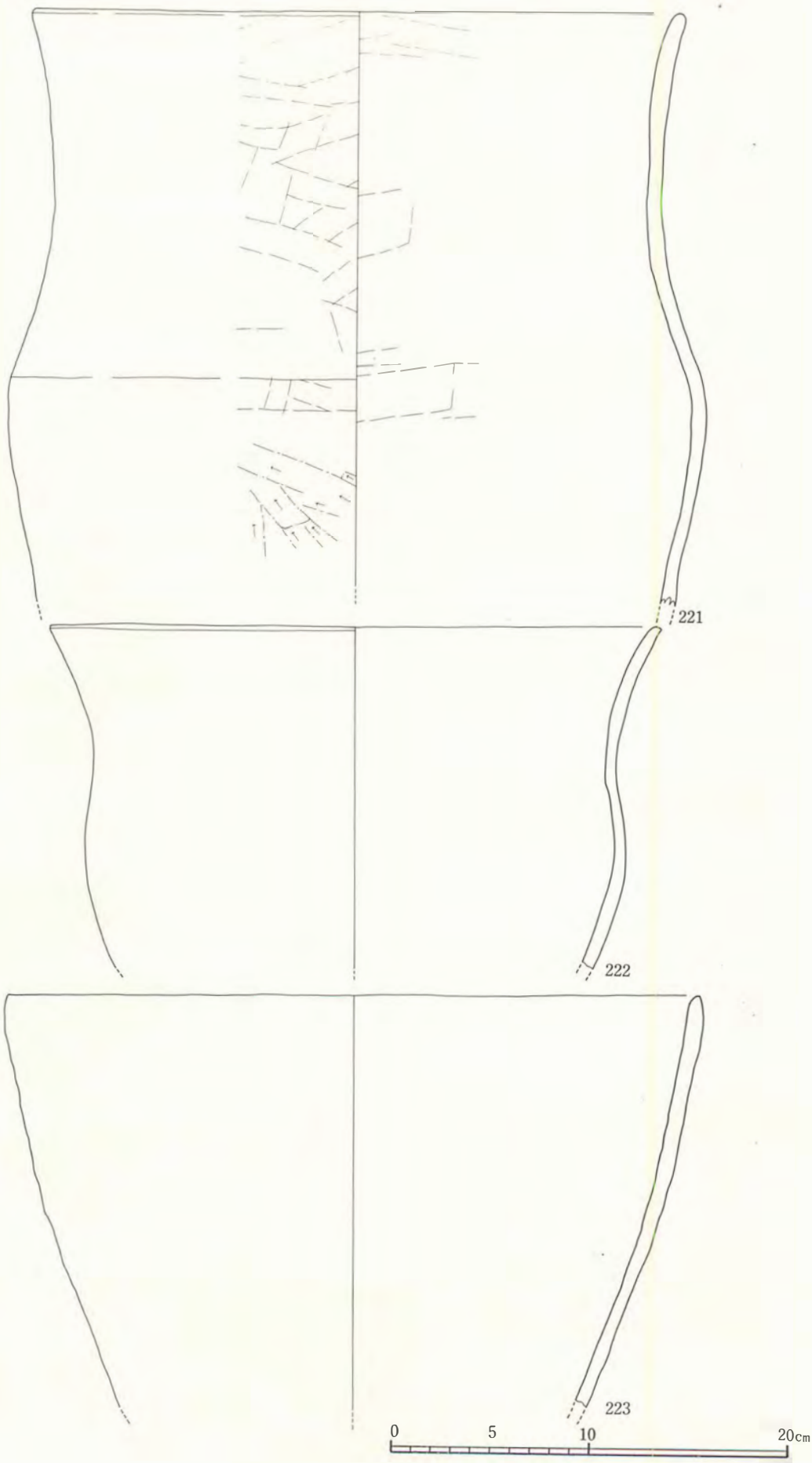
第46図　縄文式土器実測図



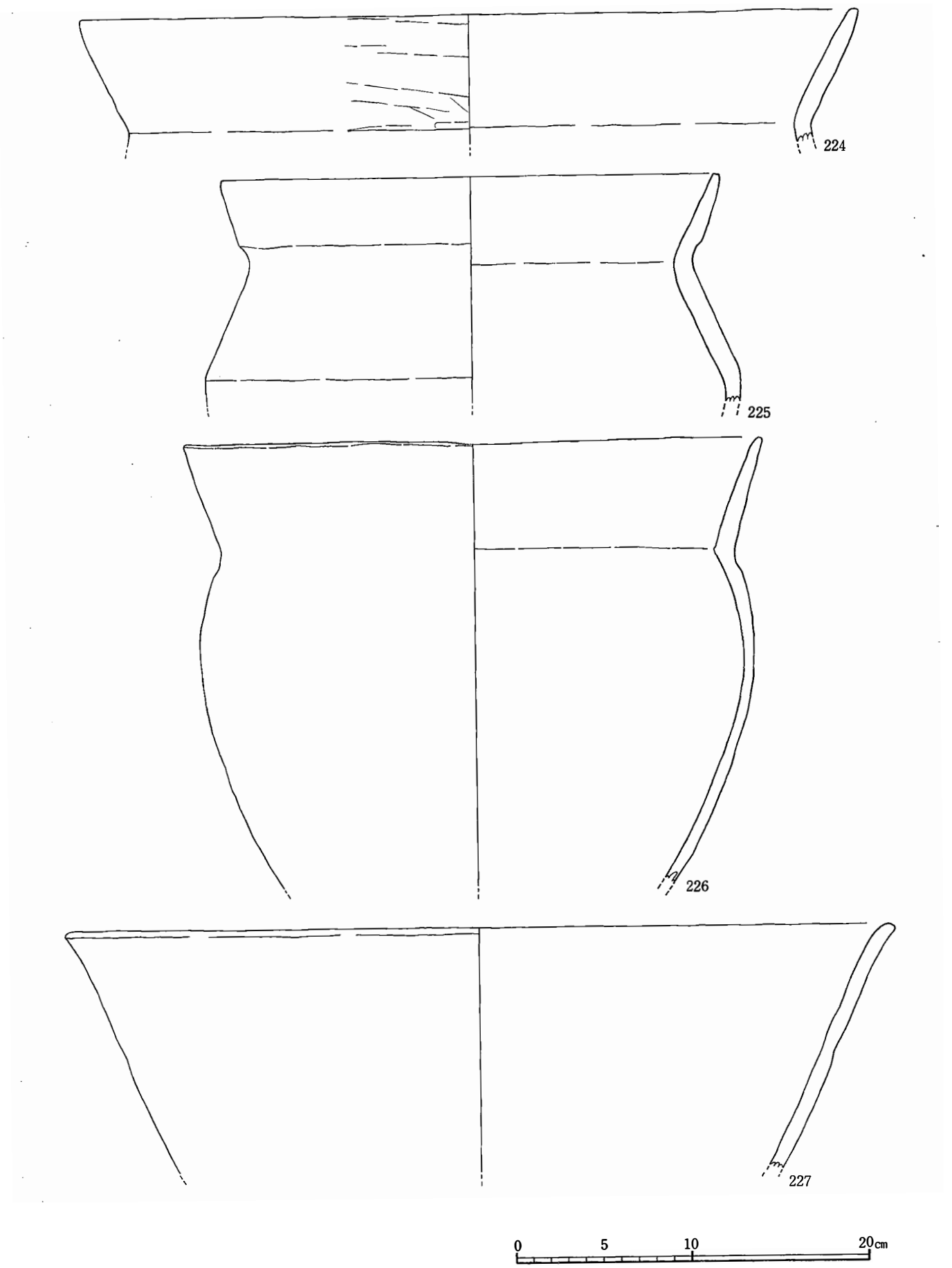
第47図　縄文式土器実測図



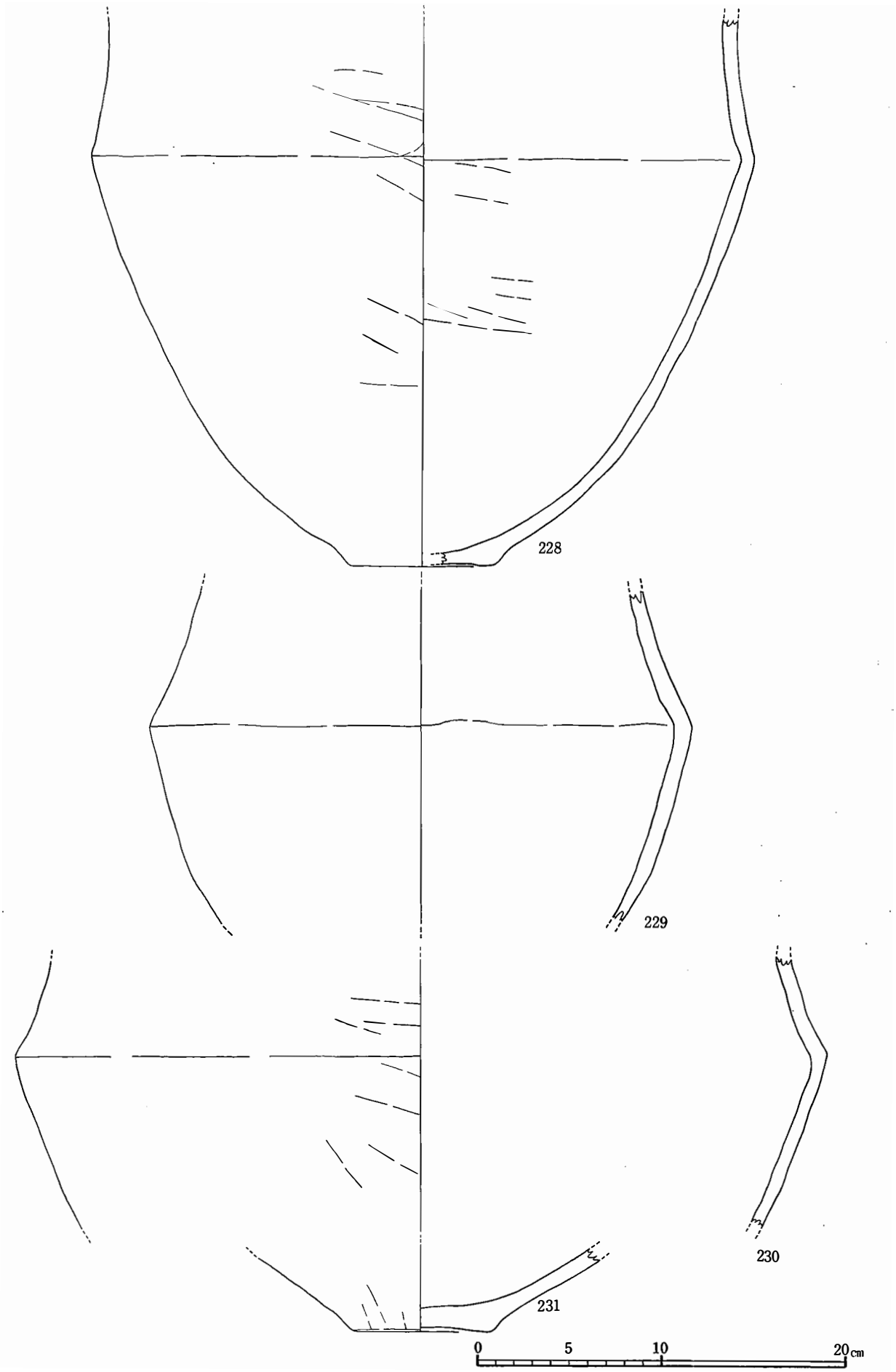
第48図　縄文式土器実測図



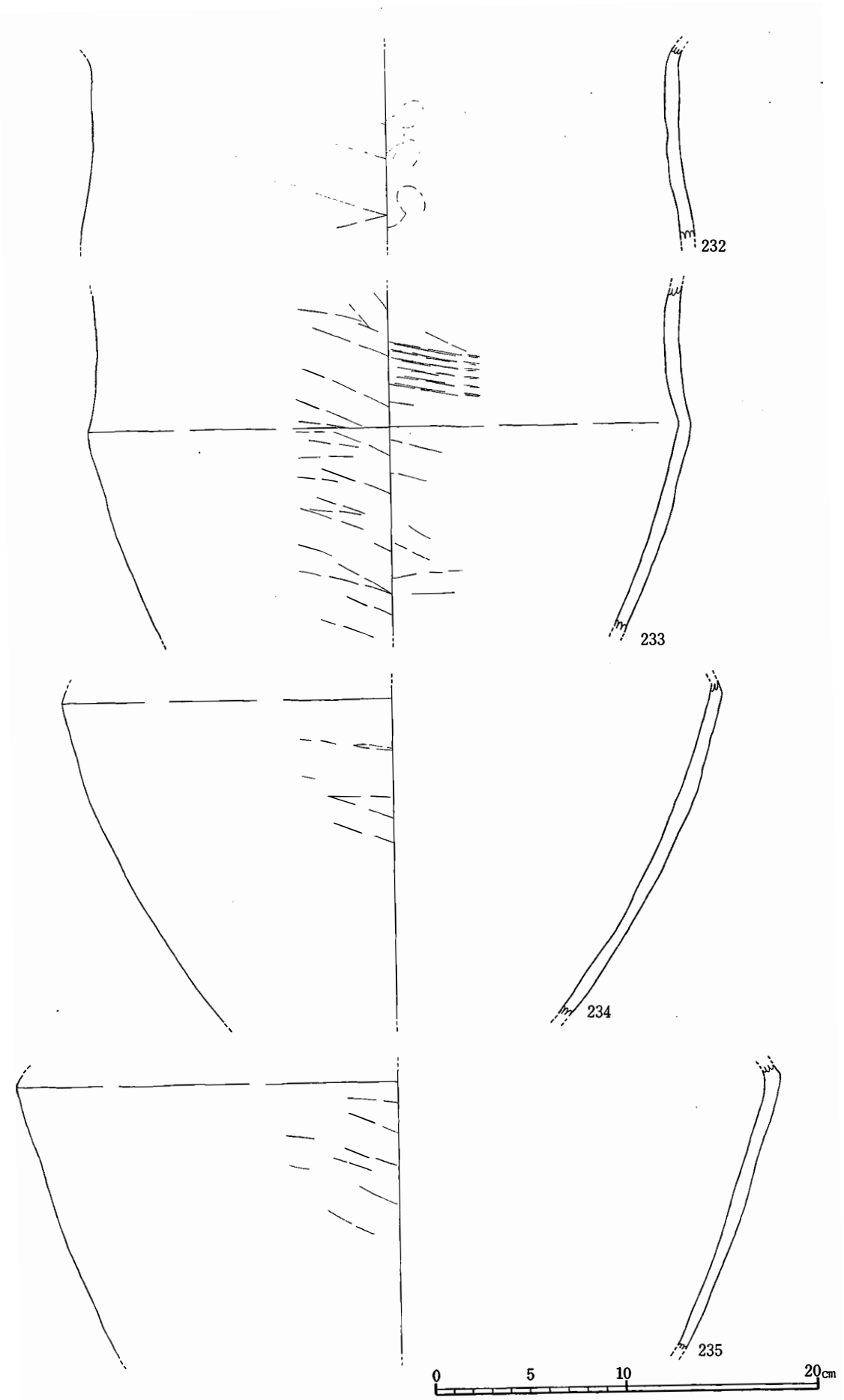
第49図　縄文式土器実測図



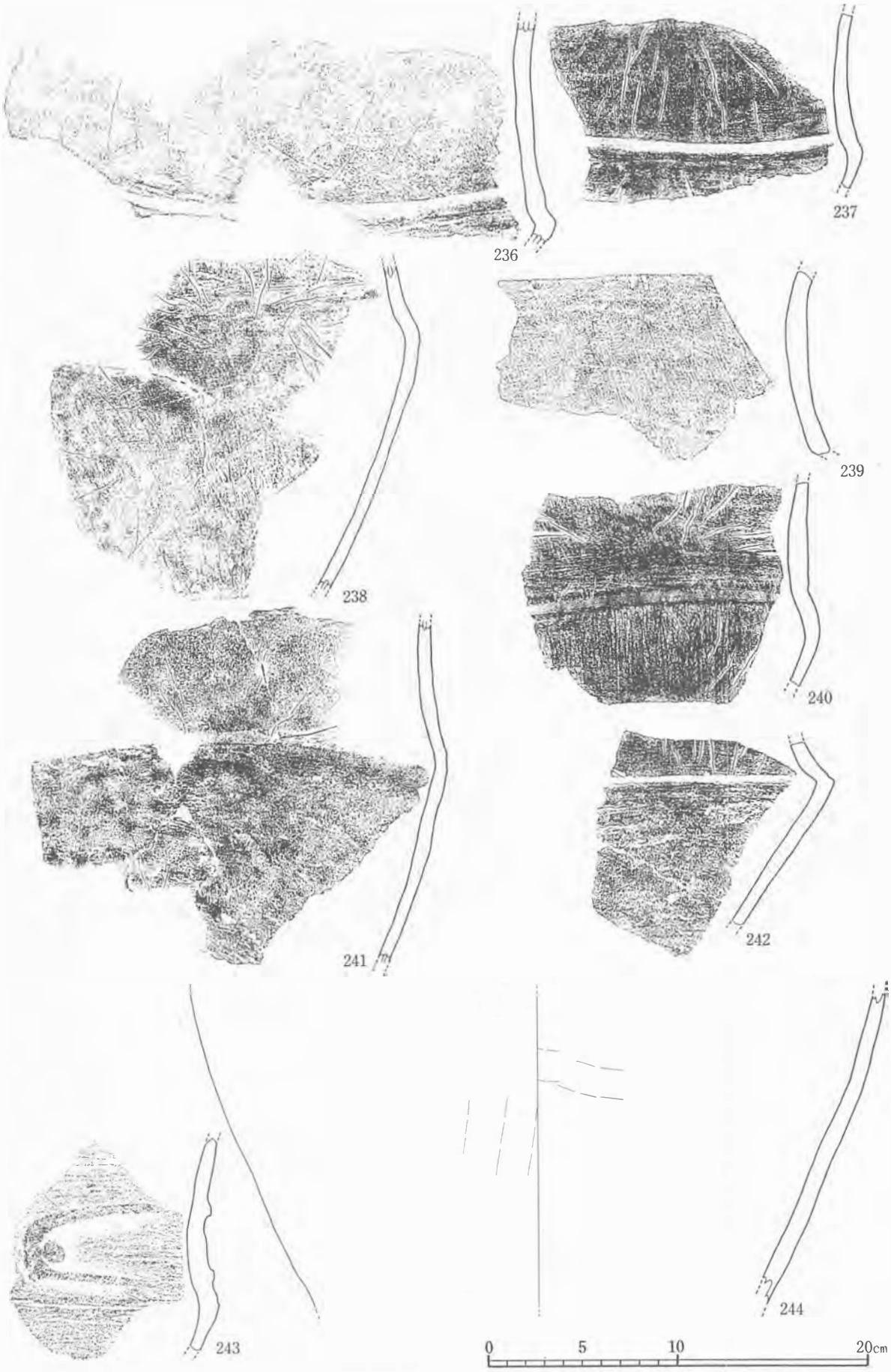
第50図　縄文式土器実測図



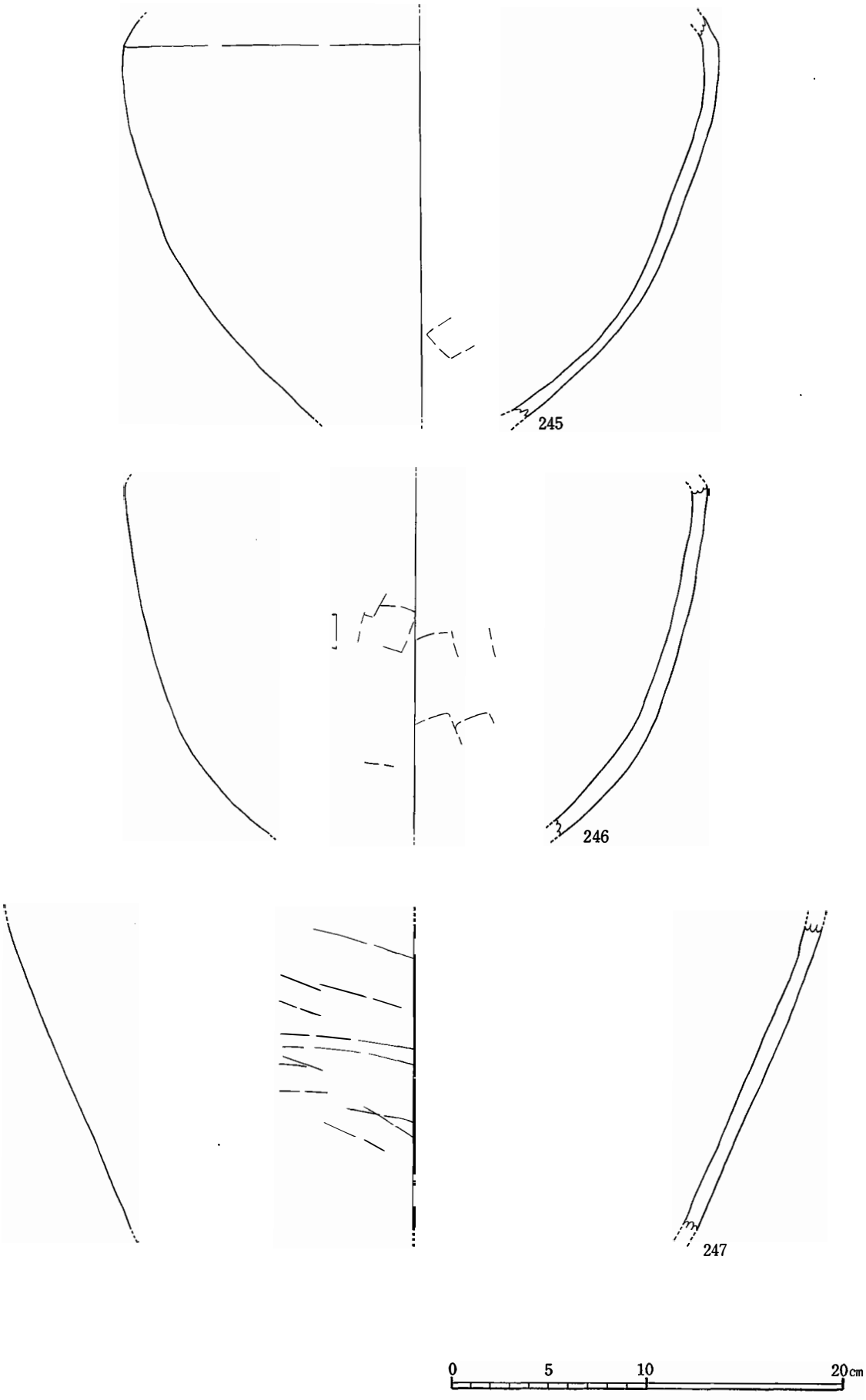
第51図　縄文式土器実測図



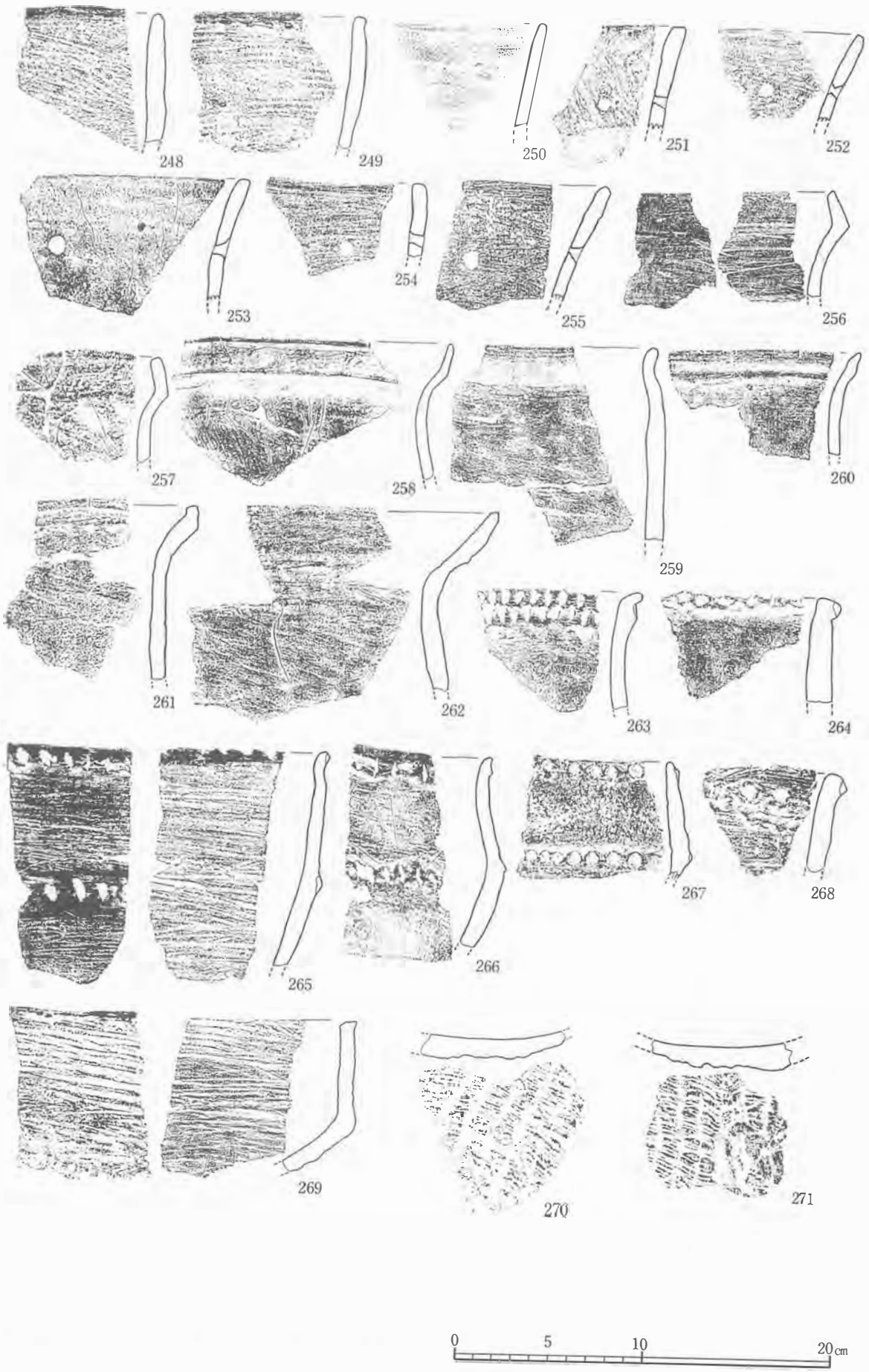
第52図　縄文式土器実測図



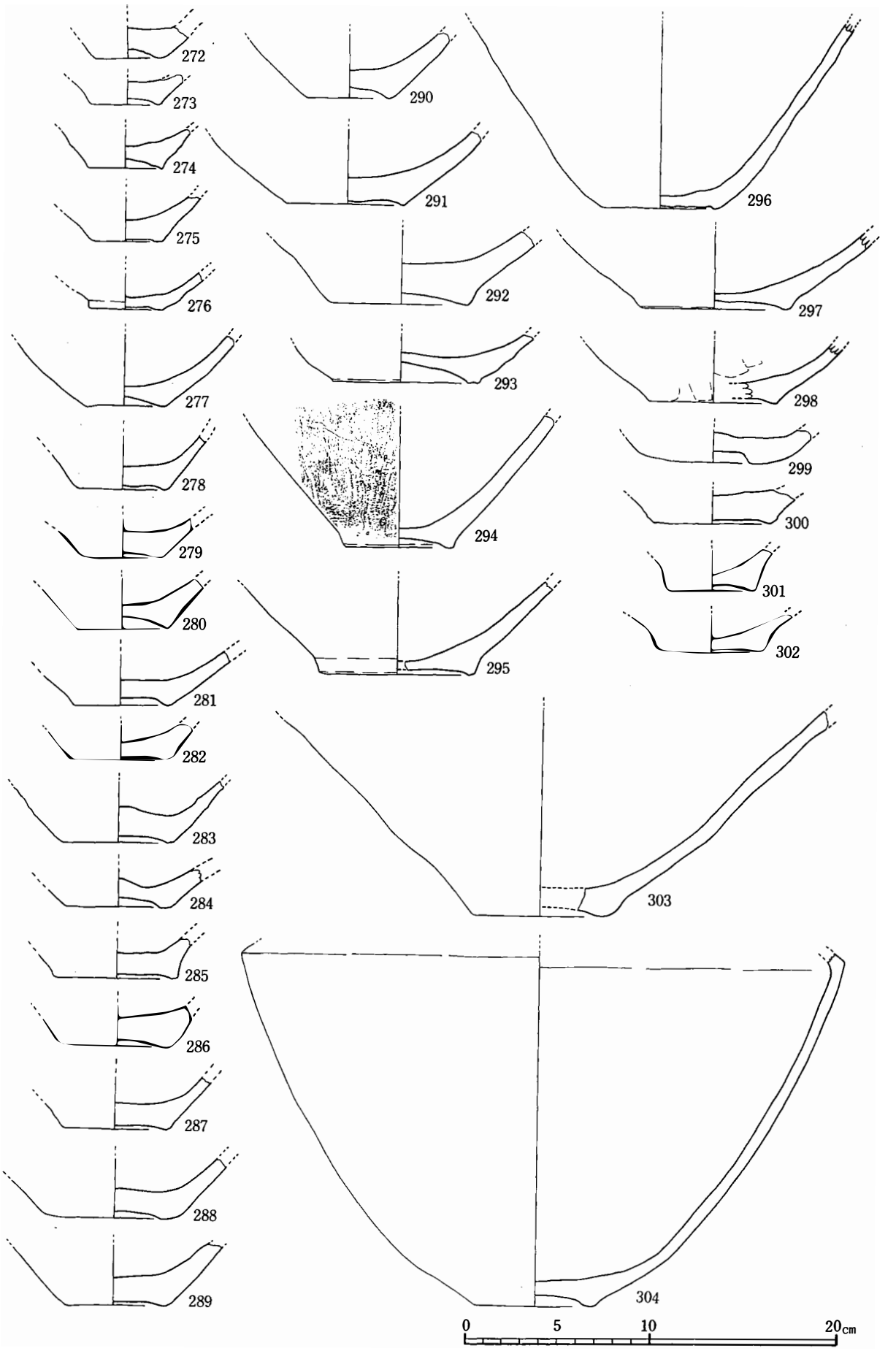
第53図　縄文式土器実測図



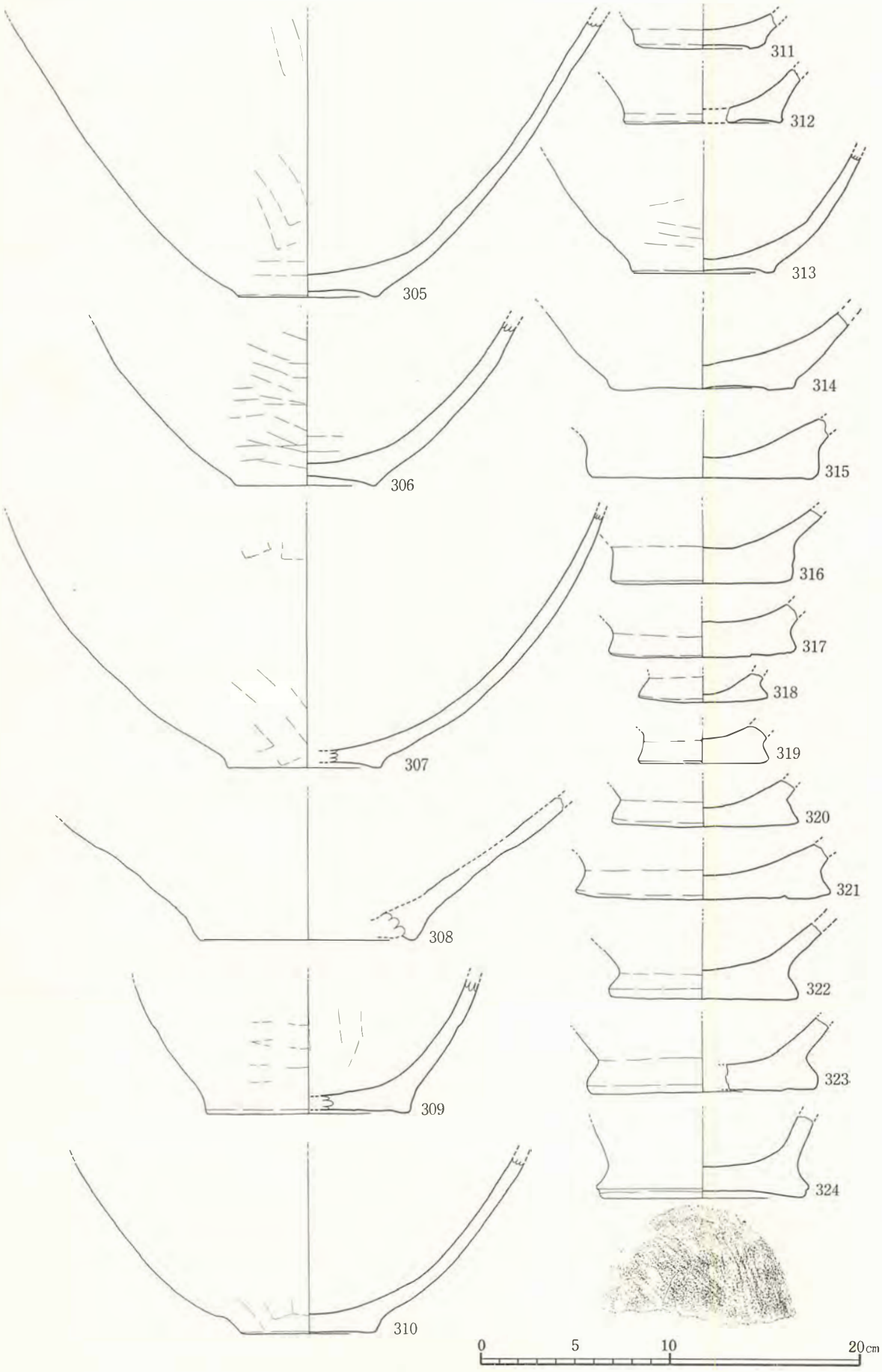
第54図　縄文式土器実測図



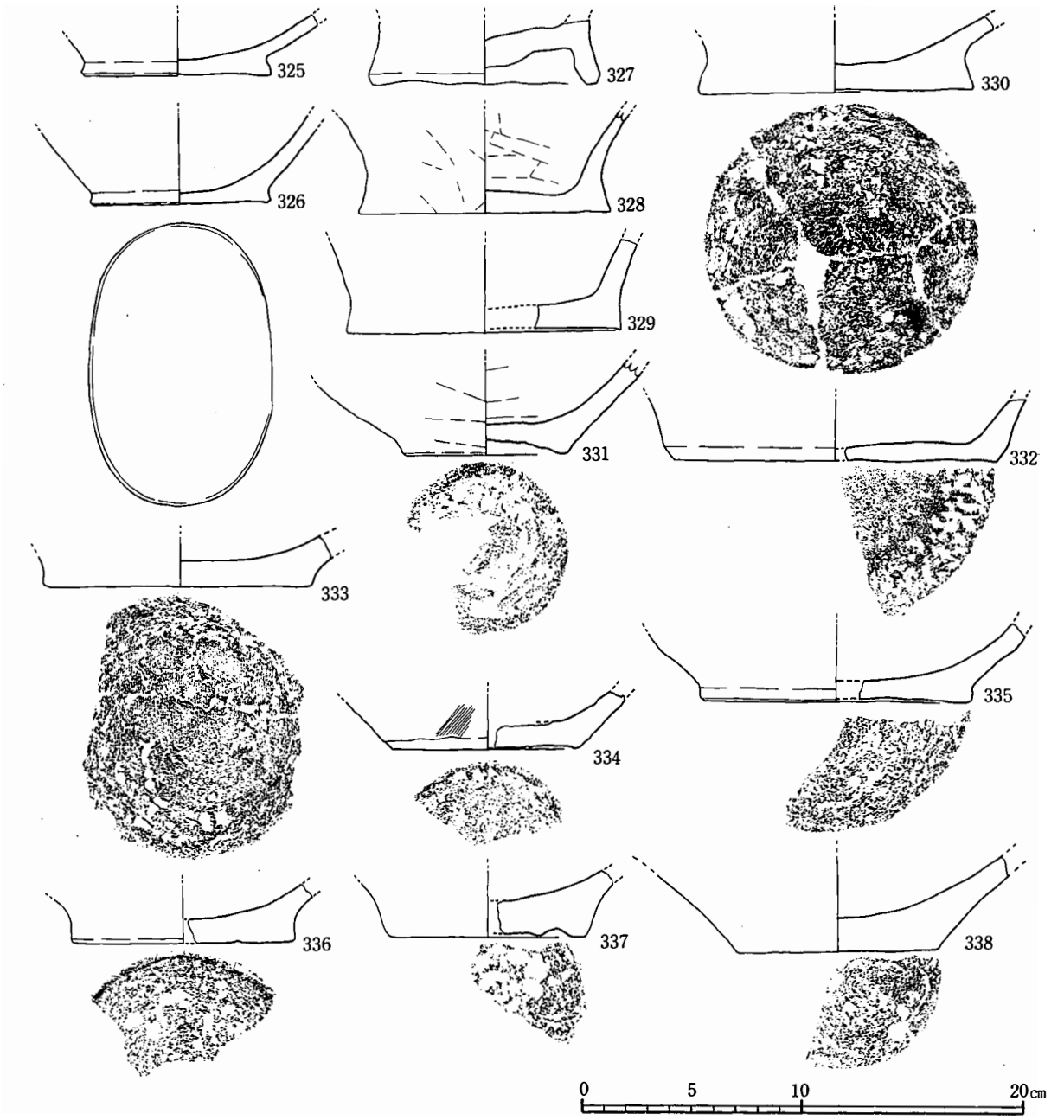
第55図　縄文式土器実測図



第56図　縄文式土器実測図



第57図　縄文式土器実測図



第58図　縄文式土器実測図

不明瞭である。また310・314～316などは胴部と底部の境が明瞭になってきて円盤状に近いものになってくる。

Ⅲ類（317～323・325）

325は他に比して器壁が薄い。

Ⅳ類（324・326）

いずれも底部断面形は円盤状を呈すが326は器壁が薄い。324は短軸10.6㎝を、326は長軸12.7㎝、短軸8.3㎝を測る。

Ⅴ類（330～338）

いずれも底部の外面に鯨の脊椎骨などの圧痕のあるものである。

Ⅵ類（327・328・329）

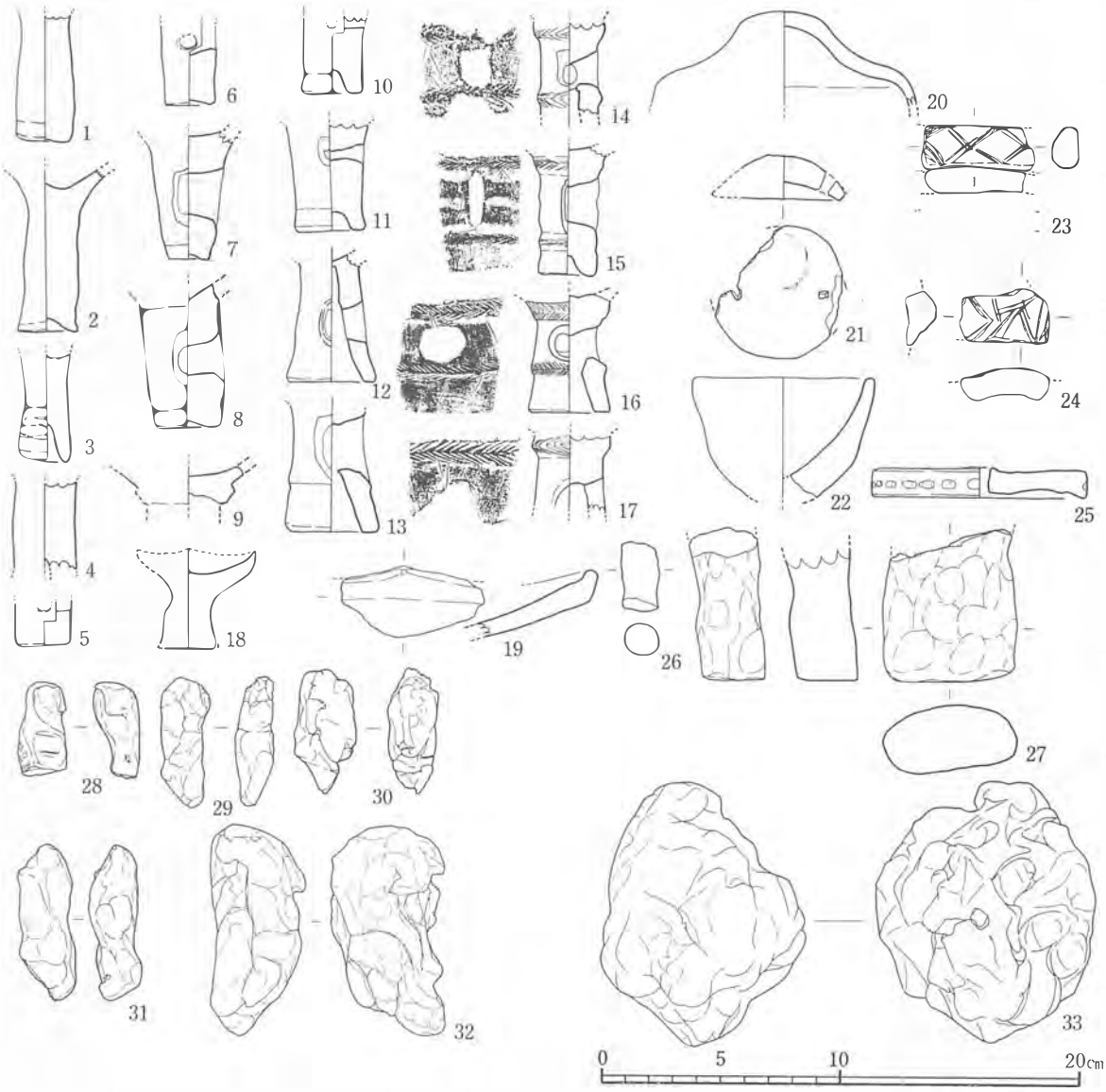
327は上底というより脚が付いたものである。328・329は完全な平底でほぼ垂直気味に立ち上がる。

高坏形土器（第59図１～17）

17点が出土した。破損しておりその全形を知ることはできない。分布は６を除きＧ８杭からＧ４杭にかけて帯状に分布する。

Ⅰ類　透かしを持たず、脚が棒状のもの（１）。

Ⅱ類　透かしを持たず脚が上底になっているもの（２・３）。



第59図　縄文式土器・土製品等実測図

Ⅲ類　形状はⅠ類と同様で透かしを持つ（５）。

Ⅳ類　形状はⅡ類と同様だが、透かしを持つもの（６～８・10・11）。

Ⅴ類　透かしを持ち、脚が中空になるもの（12・13）。

Ⅵ類　Ⅴ類と同様だが、脚部に羽状文を施すもの（14～17）。

③不明土器・土製品等（第59図18～27）

18は高坏状のミニュチュア土器である。古墳時代のものより厚手であるために縄文時代の頁にいれたが、それ以上の積極的根拠はない。19は浅鉢形土器と思われる。内外面とも研磨されている。20・21は蓋と思われる。21は２対の穿孔が認められる。22は椀形土器である。23・24は帯状のもので、注口土器等に施される把手かもしれない。25は円形で中央に穿孔が認められ、円周部には押点が見られるもので、阿高系土器の口縁部に付く飾り状のものの可能性もあるが、不明である。26は棒状のもので、研磨してあり土偶の一部とも考えられる。27は棒状の土製品で十字形石器の模造品等が考えられるが、調整は雑である。

焼成粘土塊（第59図28～33）

出土点数は30点を越え、その分布はＧ15杭を中心とした地点、Ｄ16杭周辺、Ｇ７杭を中心とした地点に認められる。特にＧ15杭を中心とした地点に顕著である。いずれも縄文時代後期・晩期の土器が集中する箇所である。その形状・大きさは様々で、紐状のもの（28～32）大きな塊（33）のものなどがある。

④　縄文時代の石器・石製品

打製石斧（第62～94図）

今回の調査で出土した打製石斧の総点数は200点を上回る。ただし後述するⅤ類・Ⅵ類に関してはその石斧としての認定が困難であり、さらに点数としては増大する可能性がある。その分布は縄文時代後期から晩期前半の土器の分布の集中する箇所と重複する（第60・61図）。

打製石斧はその形状、調整、大きさより４種に大別した。以下その特徴について記述する。

Ⅰ類（１～34）

従来から「短冊形」と呼ばれてきたもので、全体の形状は長方形に近い。その分布を見ると、縄文後期後半の土器の分布の密集する箇所、晩期前半の土器の密集する箇所どちらからもほぼ均等に出土する。欠損品のため全体の形状を明らかにできないが、長さに比して幅が広く大型のもの（19・30・31）、10㎝程度の小型のもの（８・11・32）がある。

Ⅱ類（35～54）

従来から「バチ形」と呼ばれてきたものである。その分布は、縄文後期後半の土器の分布の密集する箇所、晩期前半の土器の密集する箇所両方にほぼ均等に分布する。出土量の全体に占める割合は一番少ない。全体の形状は二等辺三角形に近いもの（43・47・49・51・53・54）と、刃部近くで急激に幅が広くなり「しゃもじ」状になるもの（36・37・38・39・41・46・48）がある。なかには短冊形との区別が困難なものもあった。

Ⅲ類（56～88）

石斧の側辺に抉りがあるもので、従来から「分銅形」と呼ばれてきたものである。その分布の中心は縄文後期後半の土器が多く分布する箇所で、Ｇ８杭～Ｇ４杭周辺に帯状に分布する。全体的に小型で薄手のものが多い。厚さは１㎝に満たないものが多く、特に70・71・76・77・82は厚さが５㎜前後と薄手である。また重量は20～100g前後であるが、そのうちの９割近くが50g以下のものである。

Ⅳ類（89～124）

従来から「円盤状石器」と呼ばれてきたもので全周に刃部がまわる。その分布は、縄文後期後半の土器の分布の密集する箇所、晩期前半の土器の密集する箇所両方にほぼ均等に分布する。大きさは直径７㎝前後の小型のもの（89・90・93・94・96～98・100・101・104～106）や、直径11㎝を越える大型のもの（92・108～110）など様々である。全体的に厚みのあるものが多いが、中には89・91～93のように厚さが1.5㎝以下のものもある。113は磨石の転用と思われる。

Ⅴ類（55・125～159）

全体の形状は楕円形もしくは長方形に近いもので、側辺に刃部をもつ。厚さはかなり薄く、石材に粘板岩等を多用している。55・148・149は基部に抉りをいれている。また159には穿穴が認められる。

Ⅵ類（160～184）

上記の分類に収まらなかった不明なものを一括した。

Ⅶ類（185）

形状がＹ字形を呈するものである。

磨製石斧（第97～99図）

総数61点が出土した。そのほとんどが半分以上欠けたものであり、その中で本来の姿が想定できるものを図化した。その分布の中心はＧ16杭を中心とした箇所とＧ６杭を中心とした箇所にある。とくにＧ16杭を中心とした箇所に集中し、後者はやや散在的である（第95・96図）。

形状、大きさ、厚みにより６類に分類できる。

Ⅰ類（１）

基部にいくに従い、細くなるもので、形状は二等辺三角形に近い。厚みが薄いものである。

Ⅱ類（４・14・16）

形状はⅠ類に近いが、厚みがあるもの。特に４は厚みをもつ。

Ⅲ類（２・３・５・７・８～11・17）

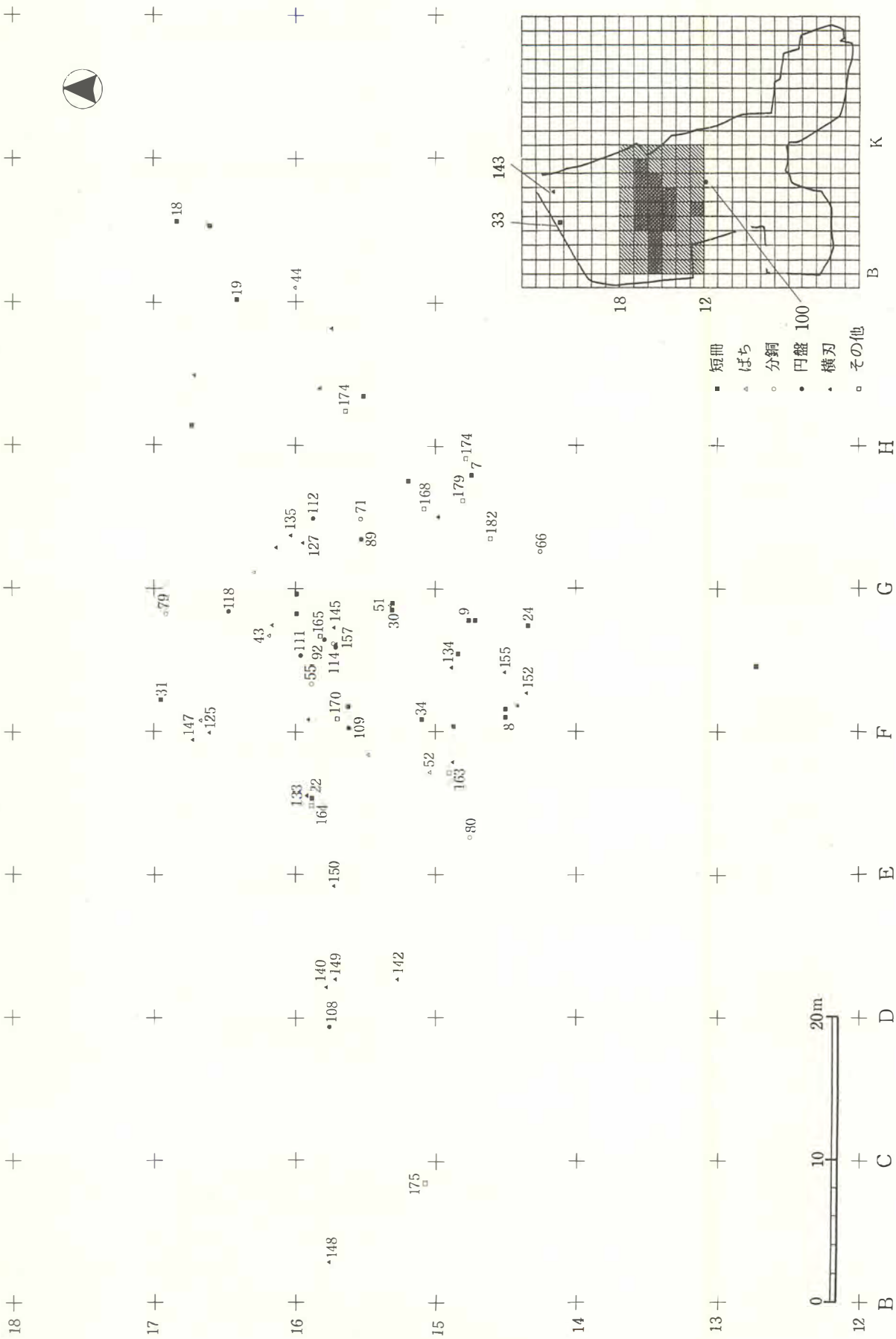
形状は長方形に近く断面形が楕円形を呈するもの。

Ⅳ類（６・12・13・20）

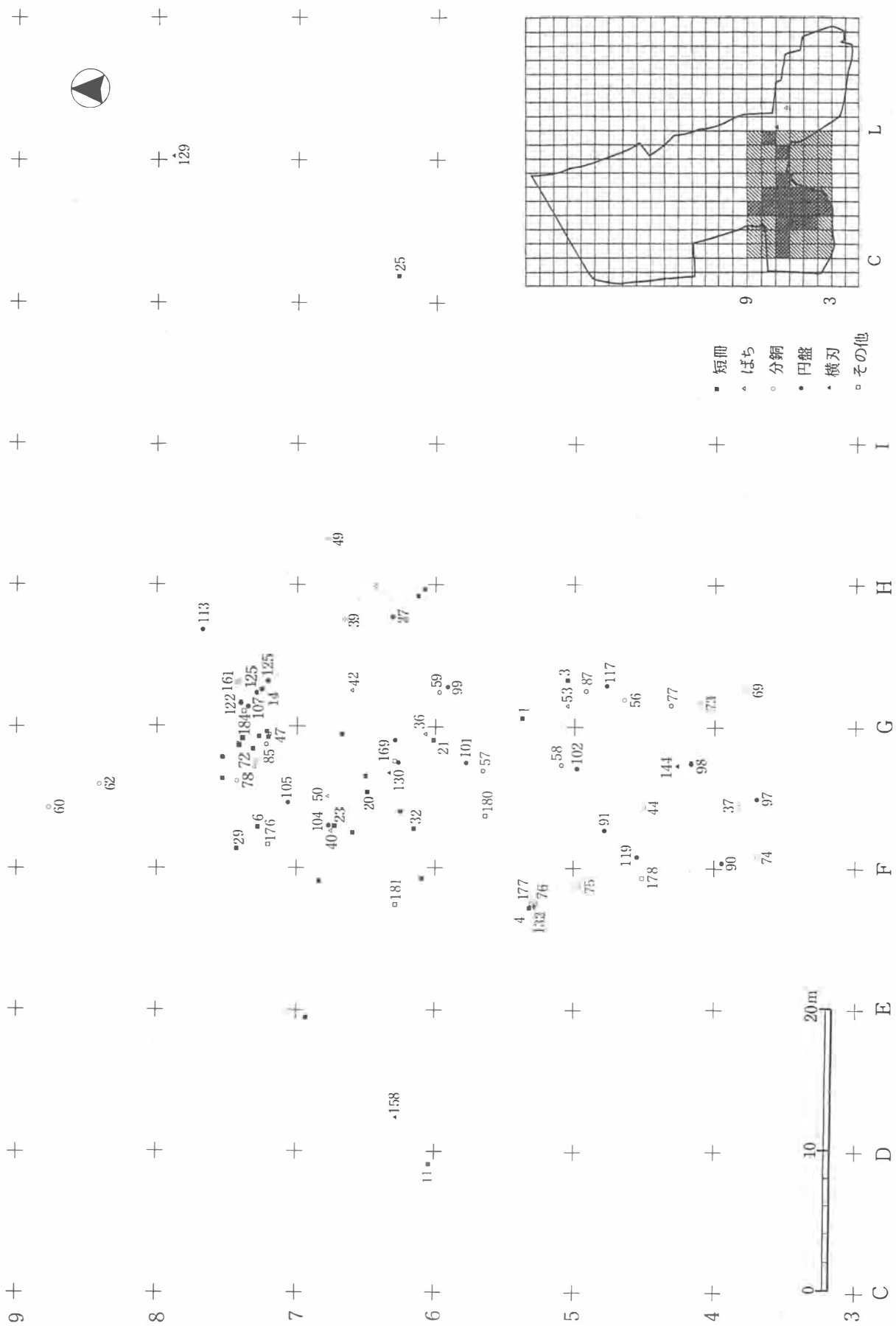
形状は長方形に近く断面形が楕円形を呈するもので、全長が９㎝以下の小型のもの。13・20は蛇紋岩製で丁寧な作りである。

Ⅴ類（15）

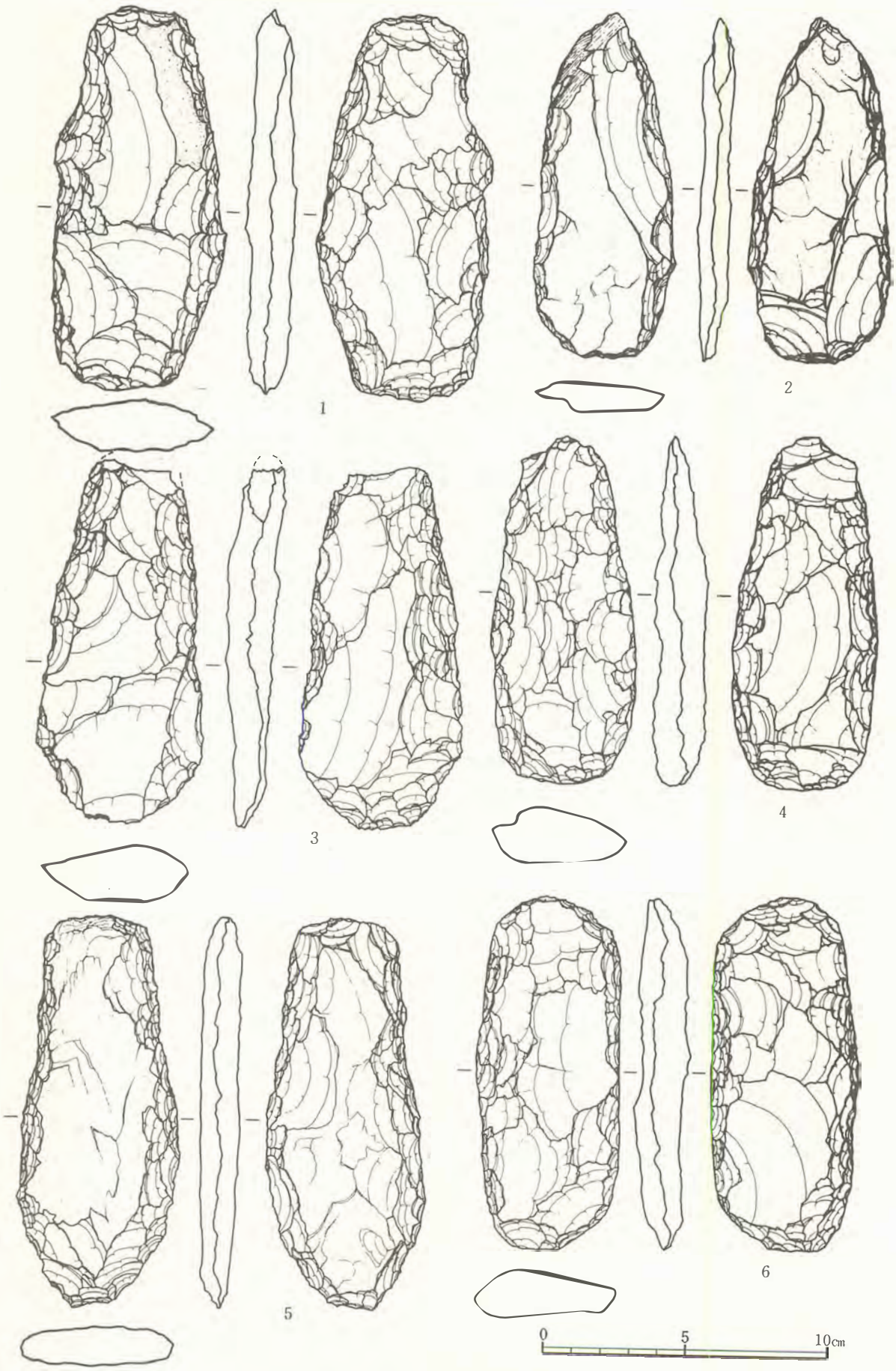
形状は長方形で断面形が方形を呈するもの。



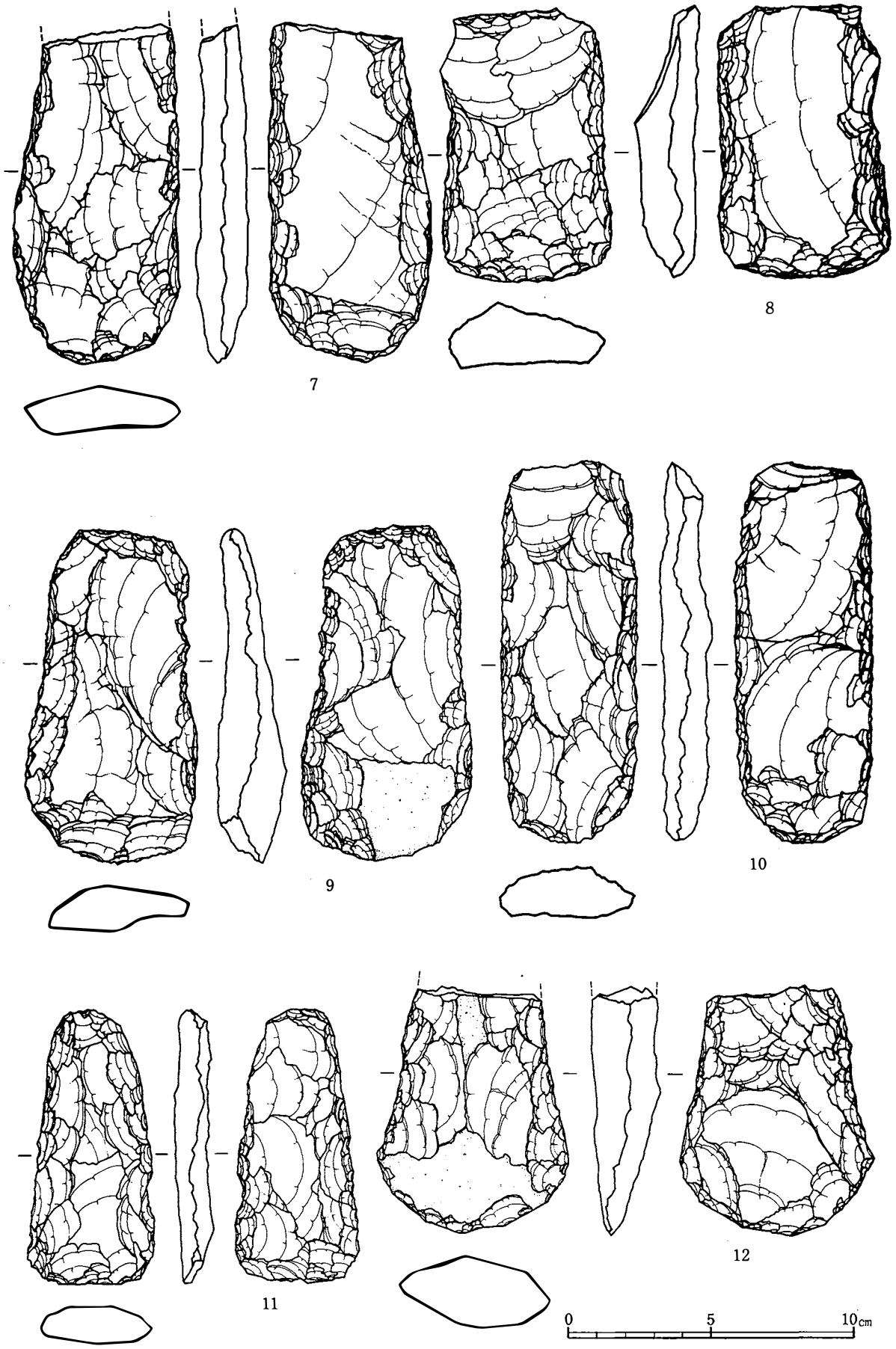
第60図　打製石斧分布図（１）



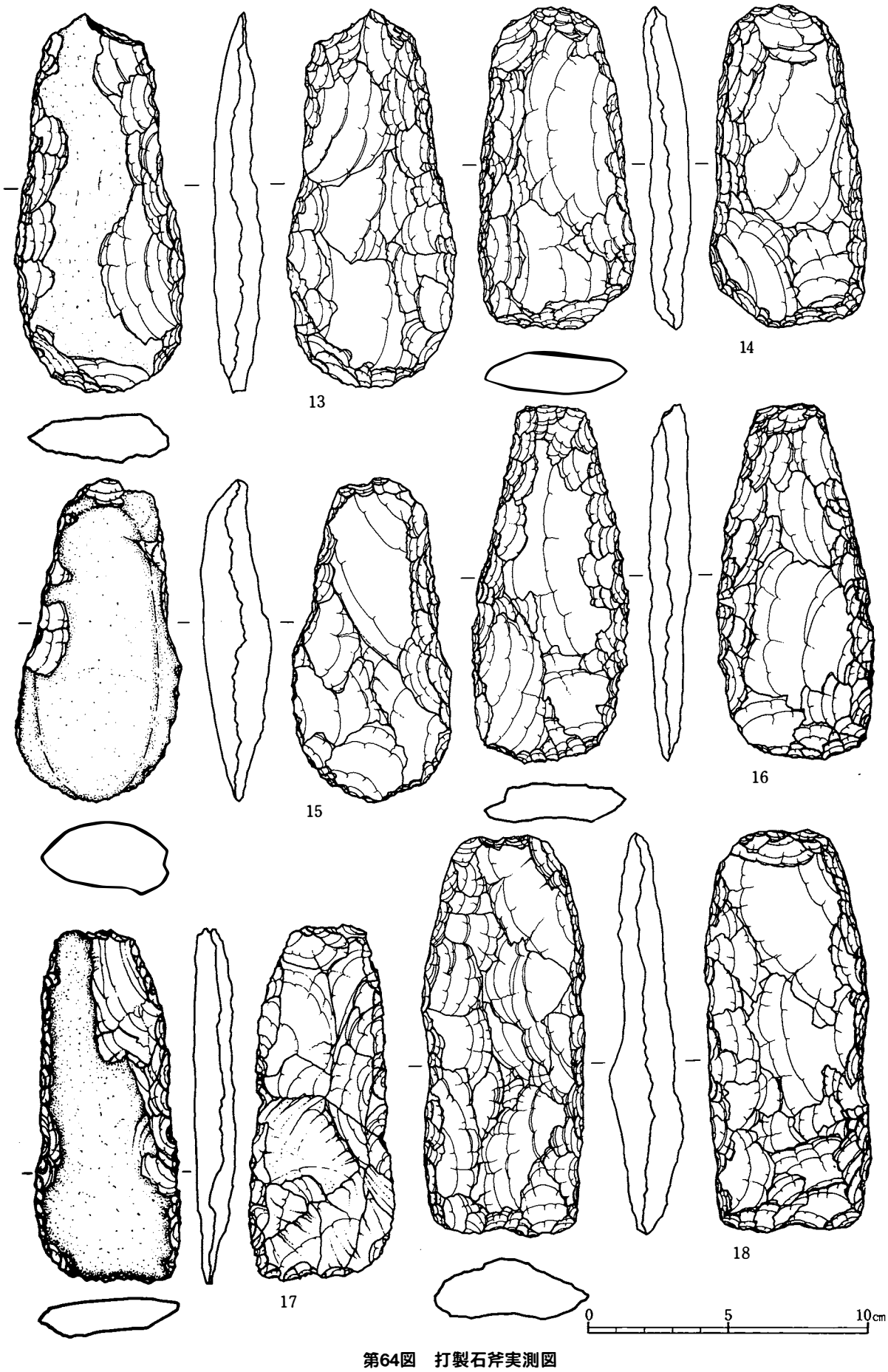
第61図　打製石斧分布図（２）



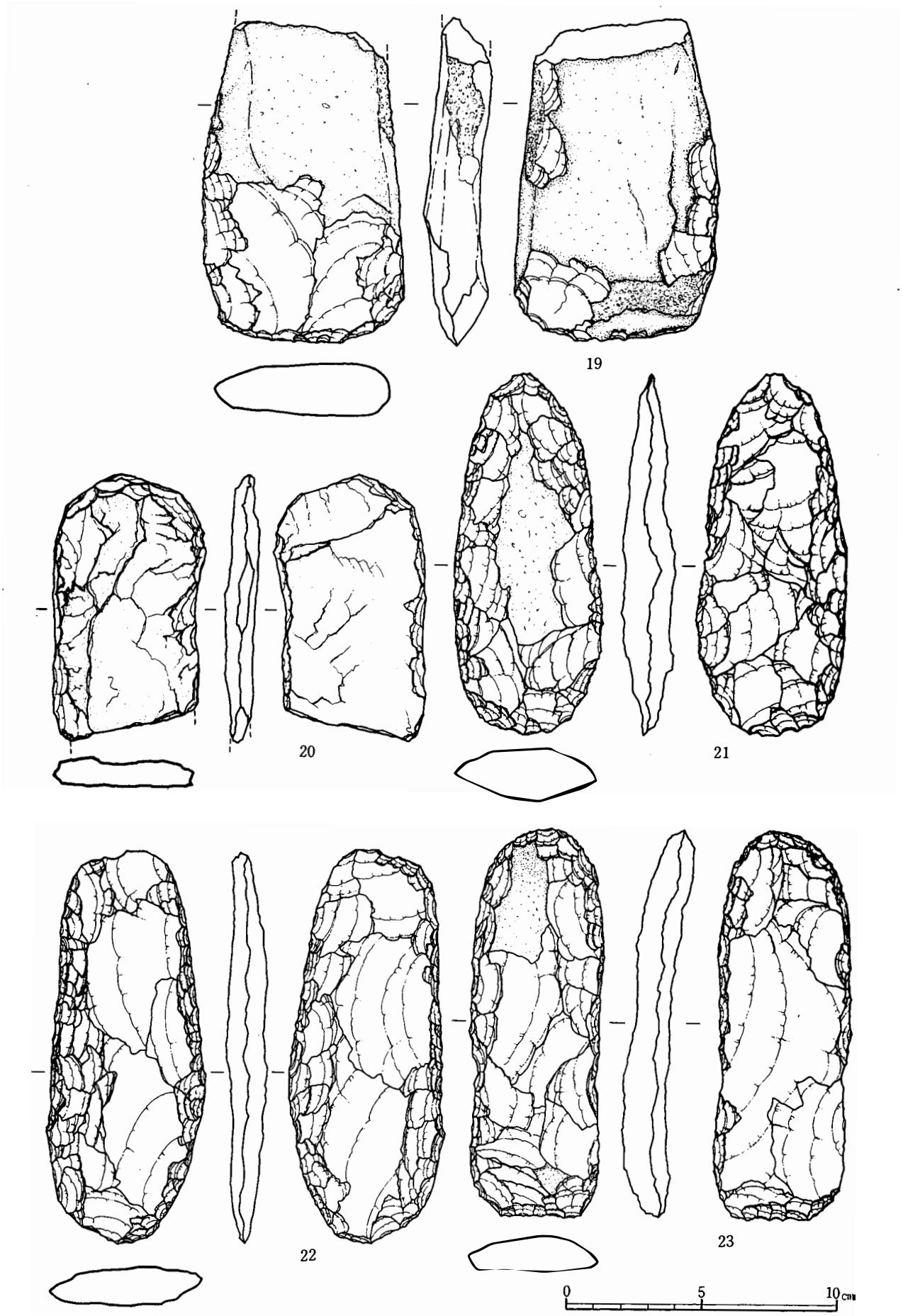
第62図　打製石斧実測図



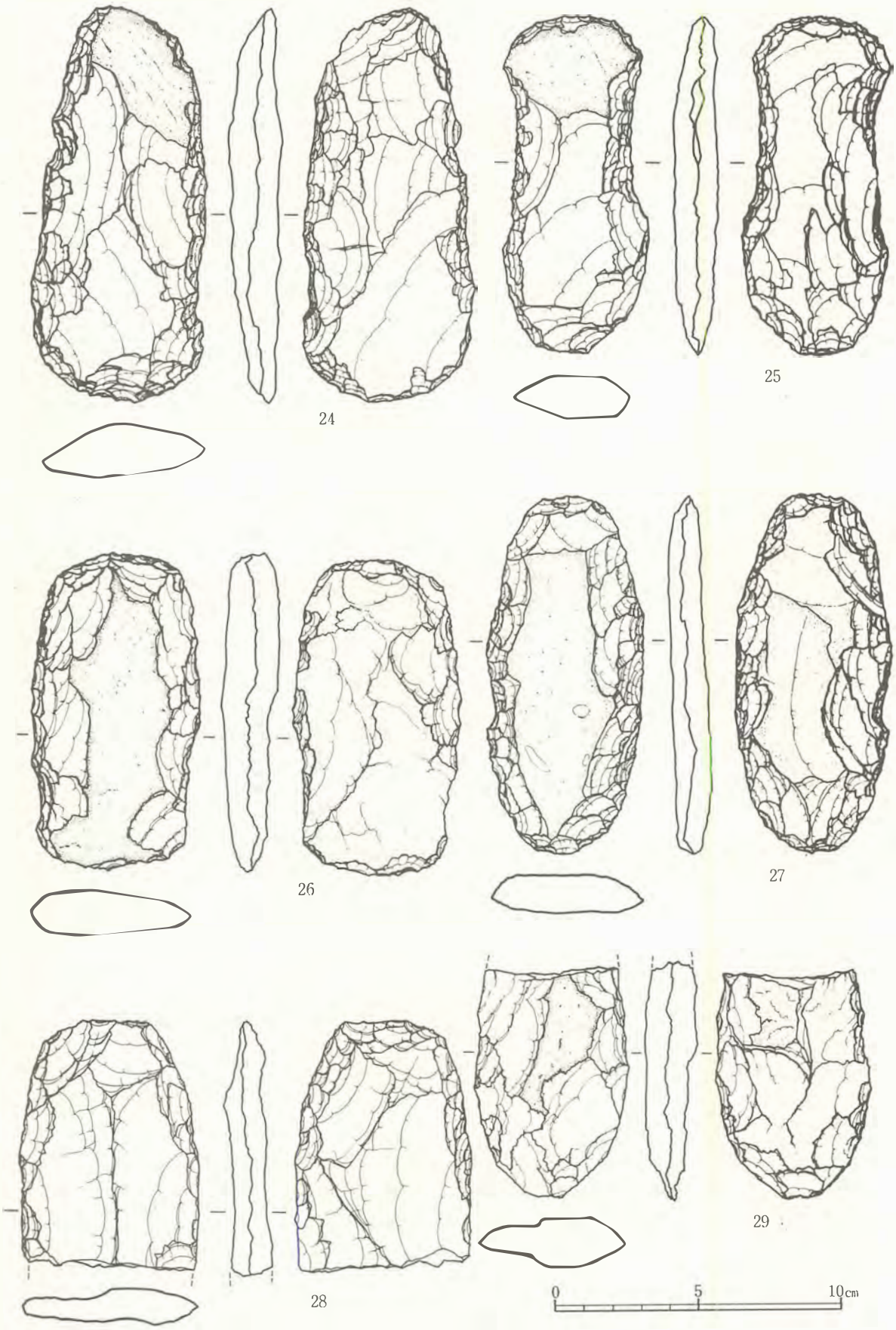
第63図　打製石斧実測図



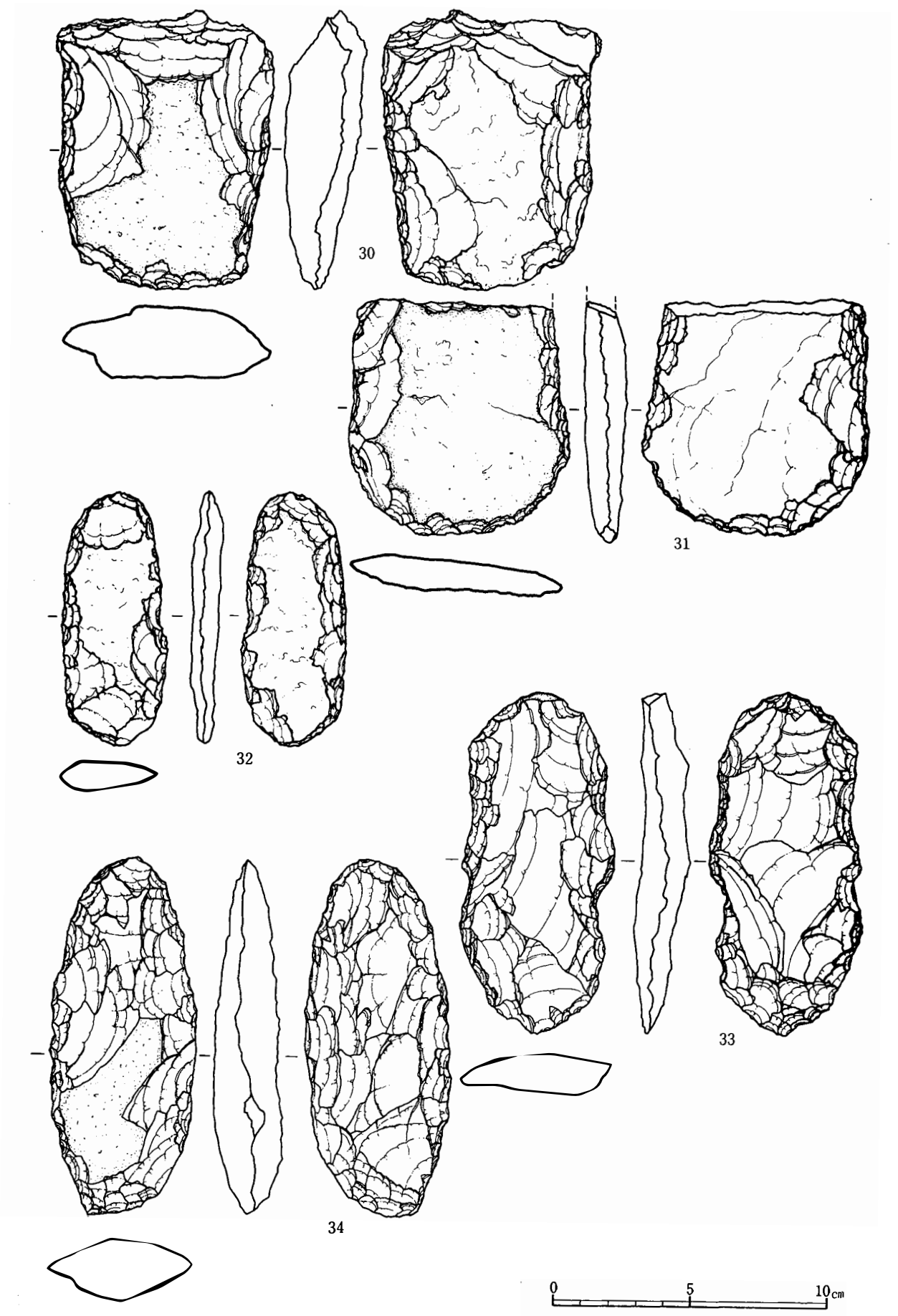
第64図　打製石斧実測図



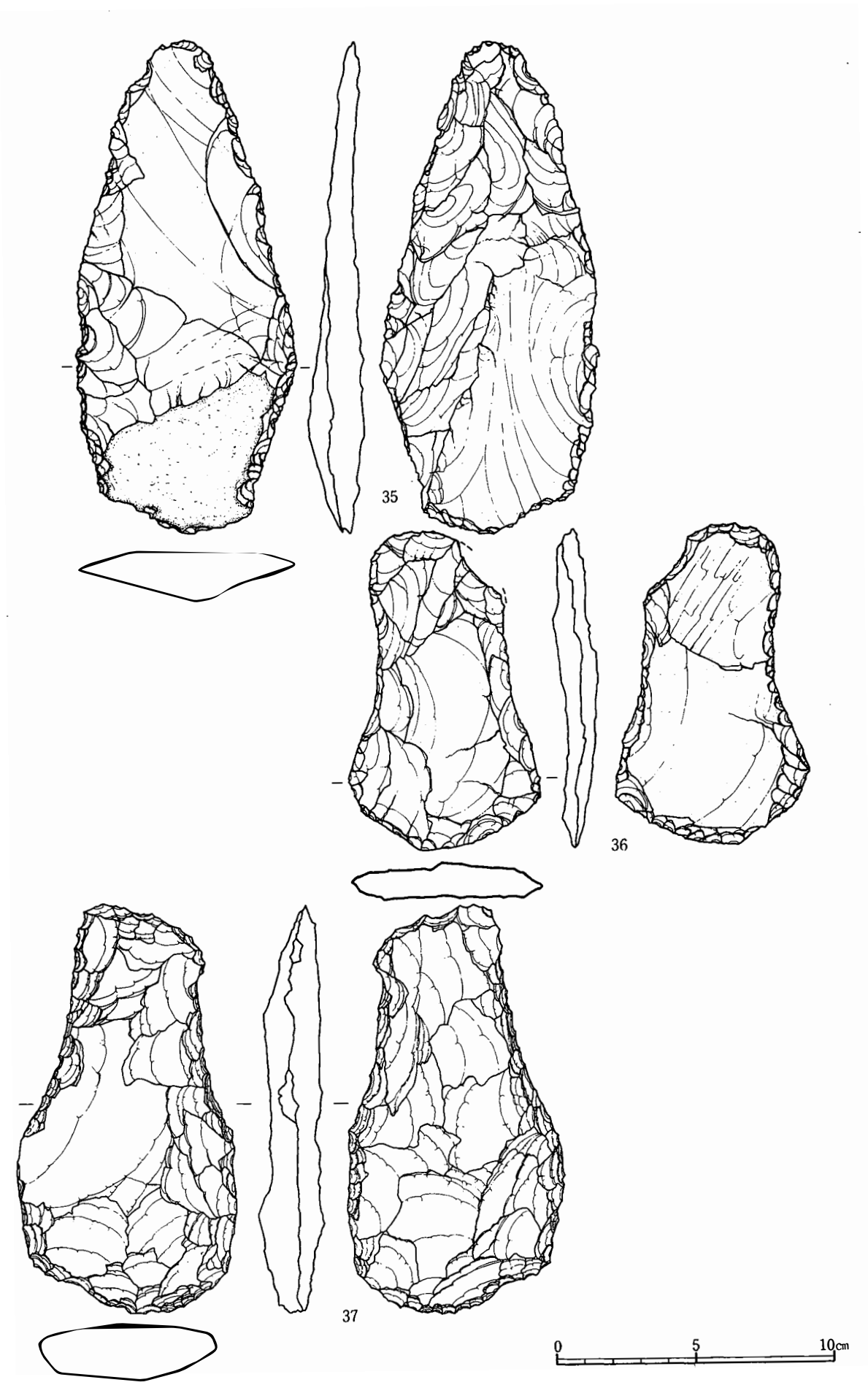
第65図　打製石斧実測図



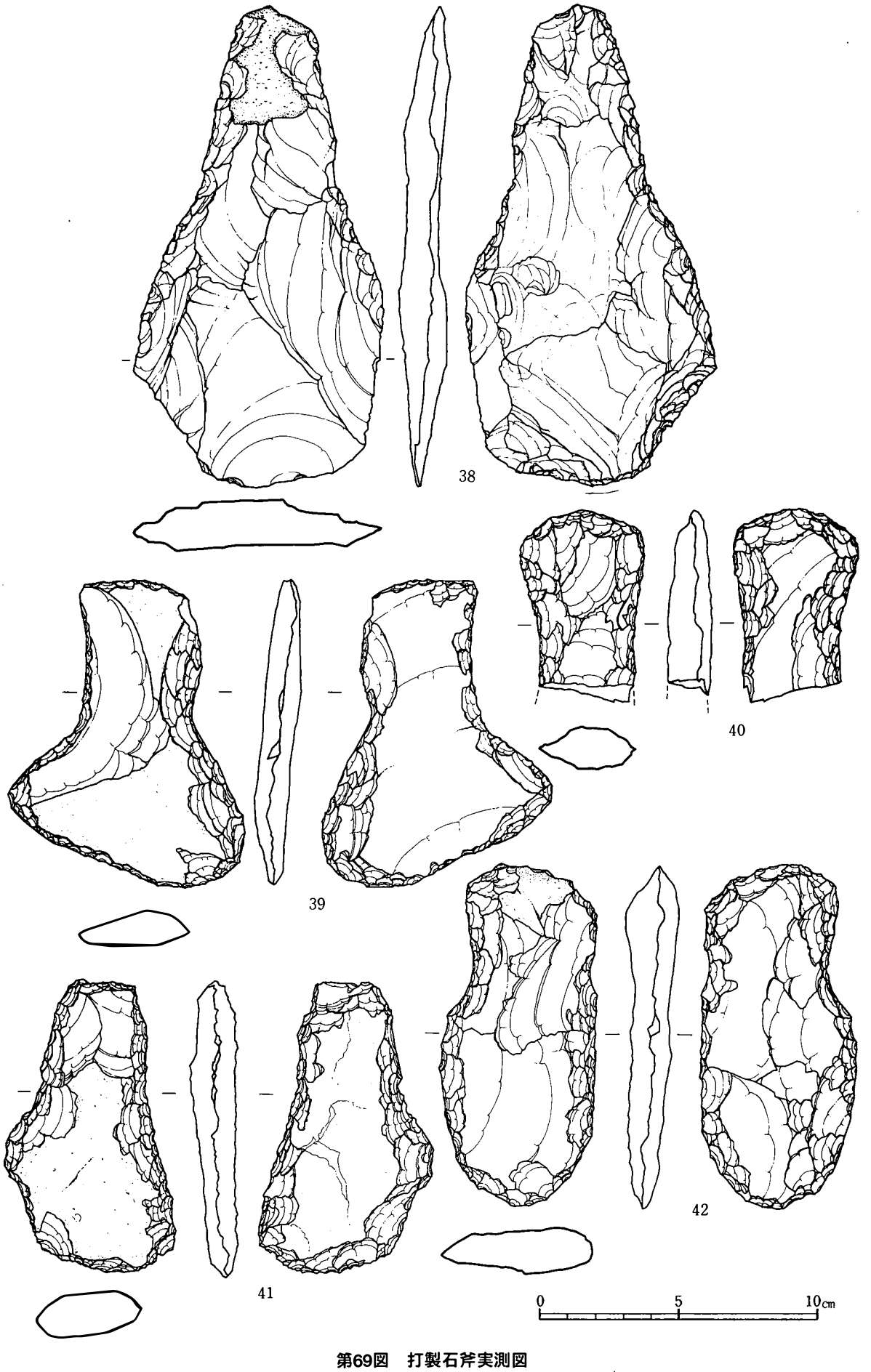
第66図　打製石斧実測図



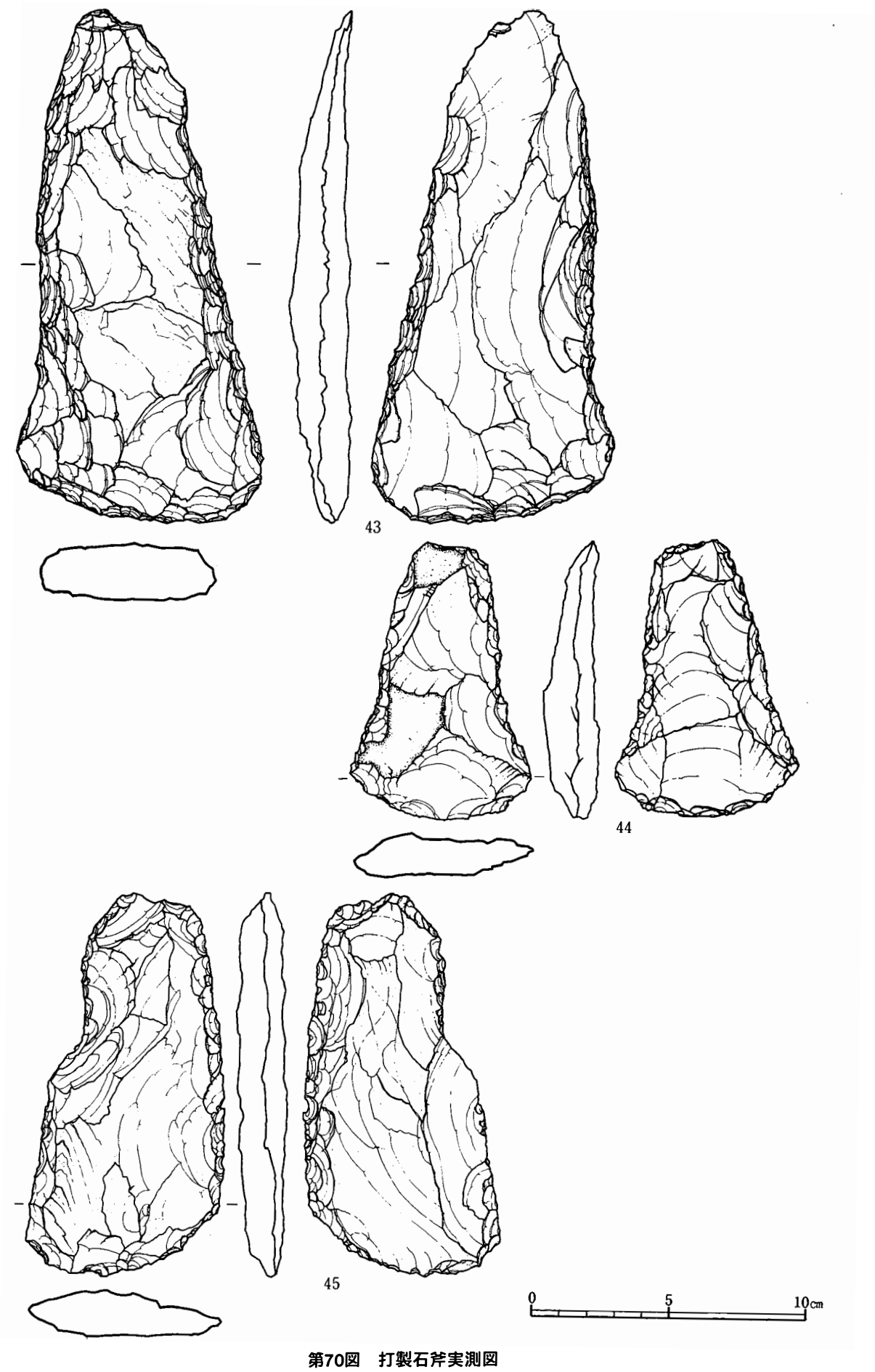
第67図　打製石斧実測図



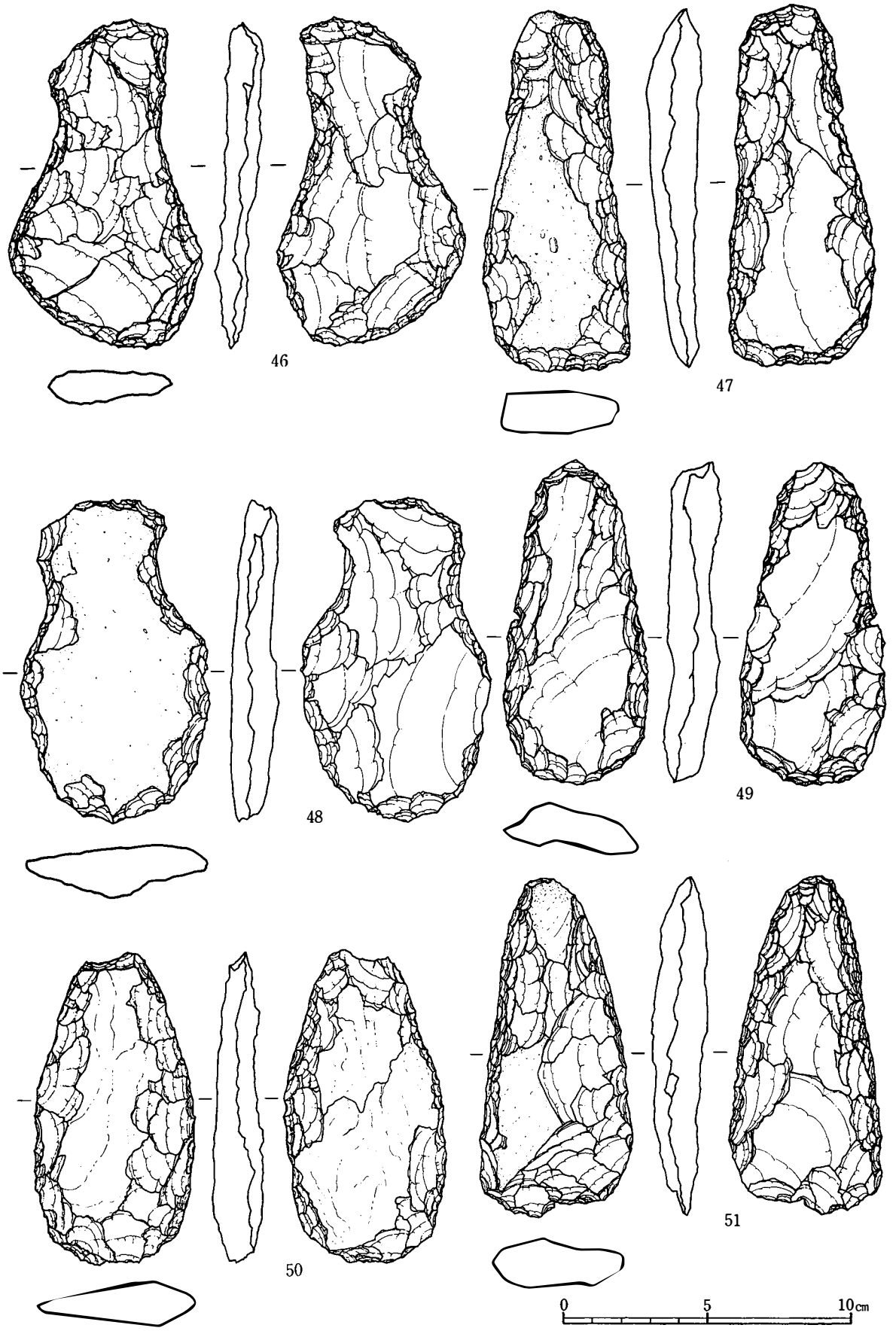
第68図　打製石斧実測図



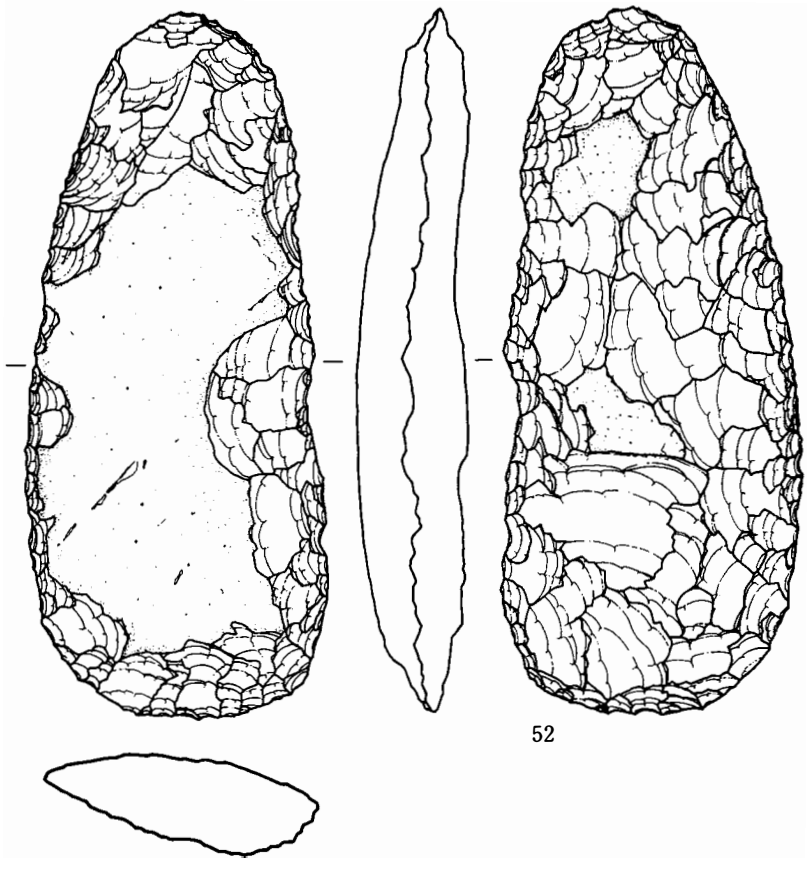
第69図　打製石斧実測図

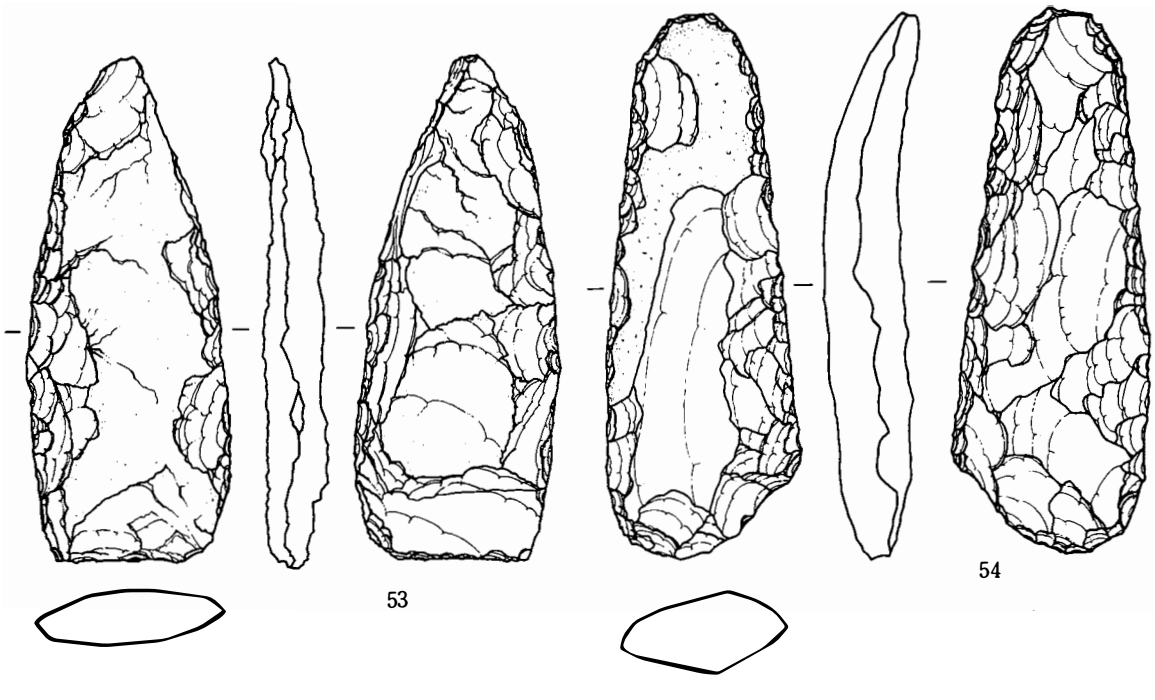


第70図　打製石斧実測図



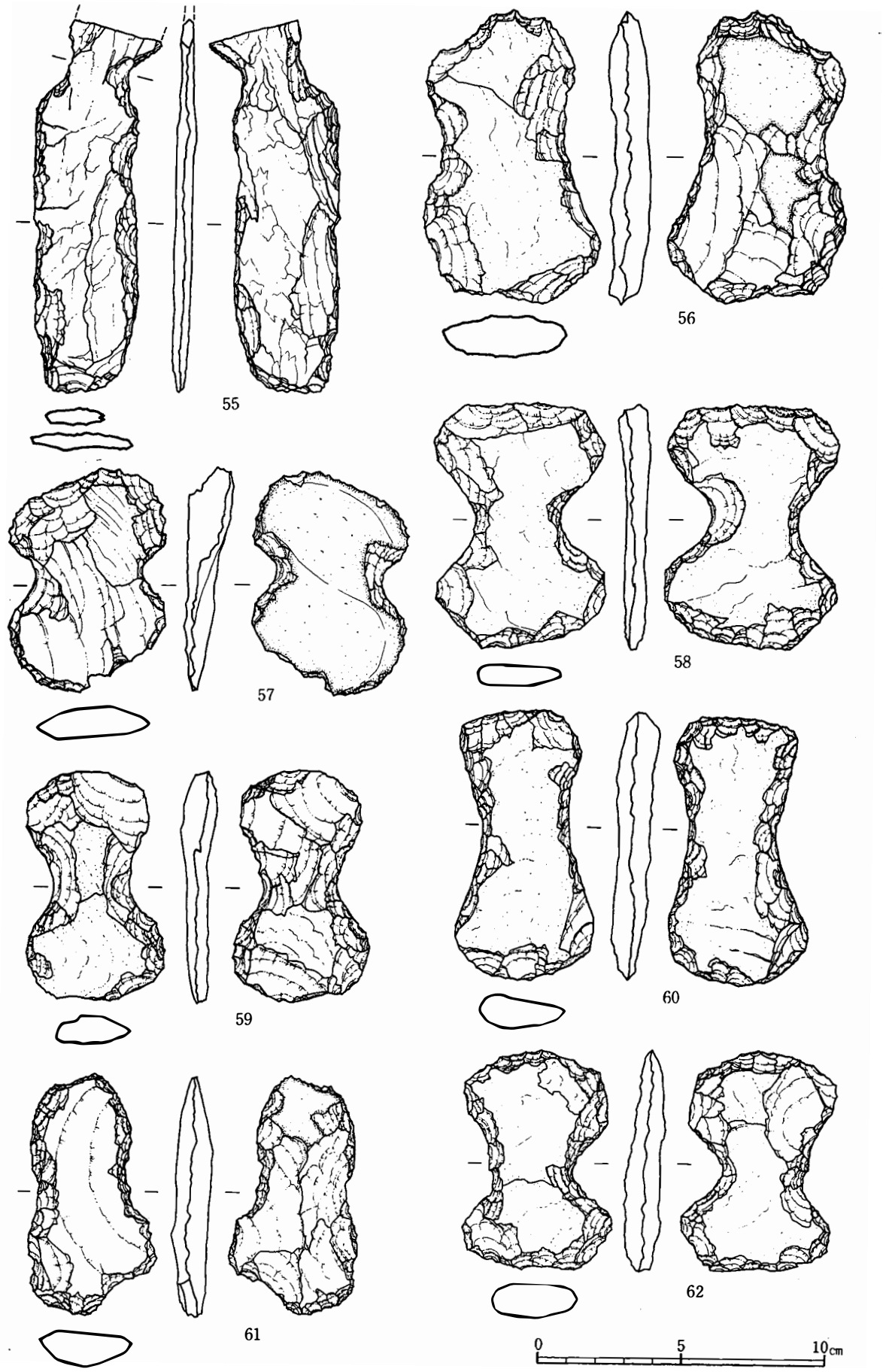
第71図　打製石斧実測図



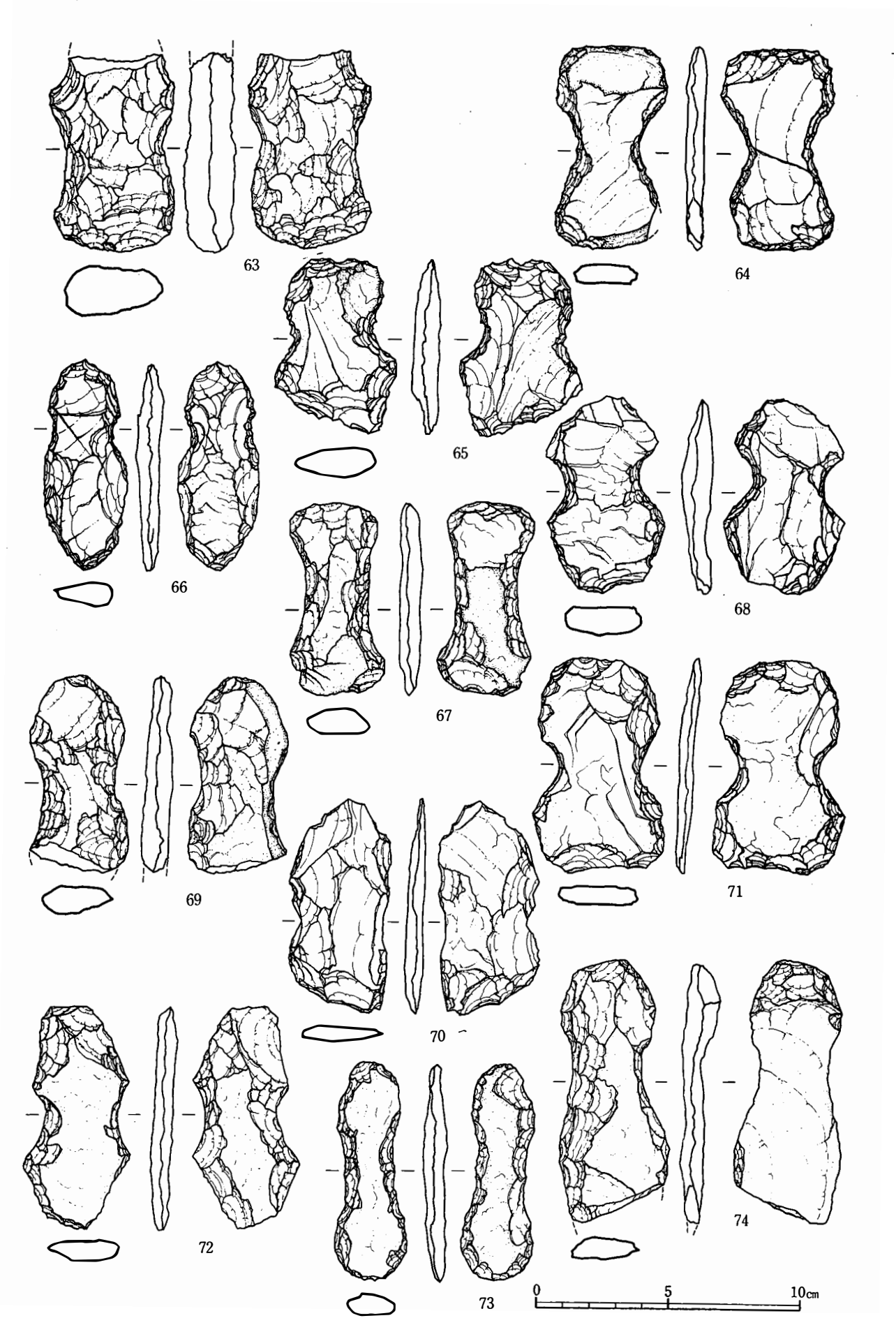


0　5　10cm

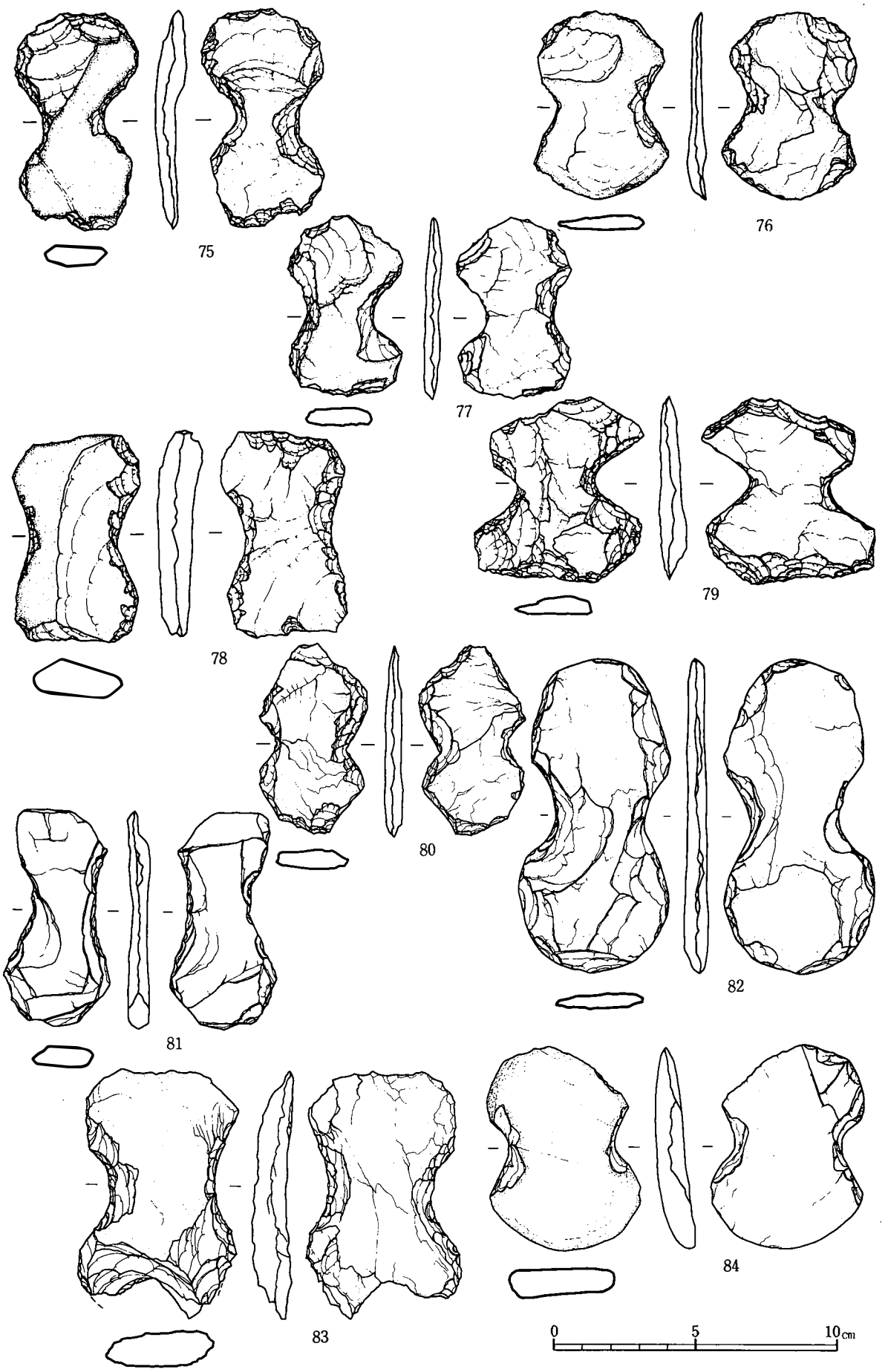
第72図　打製石斧実測図



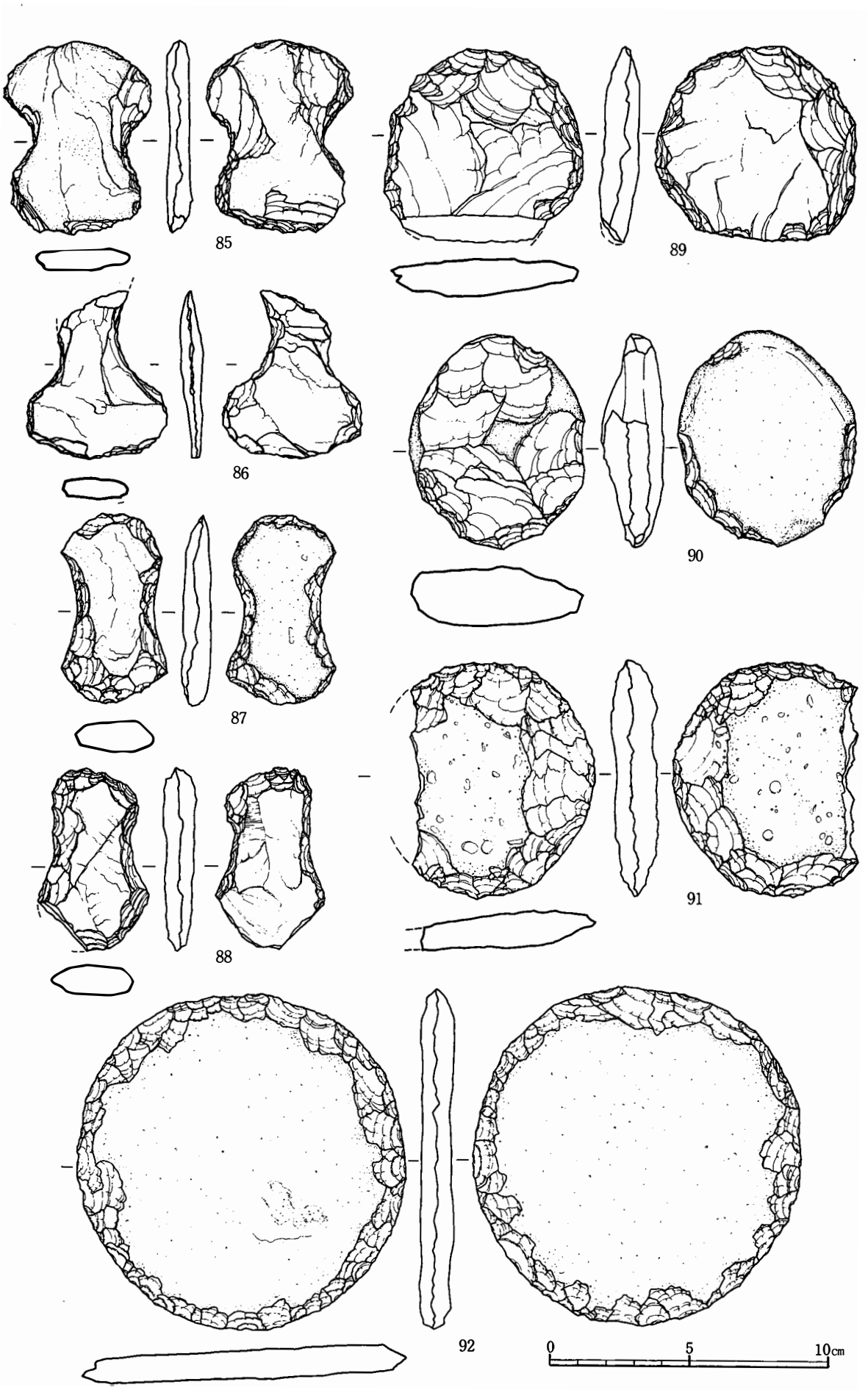
第73図　打製石斧実測図



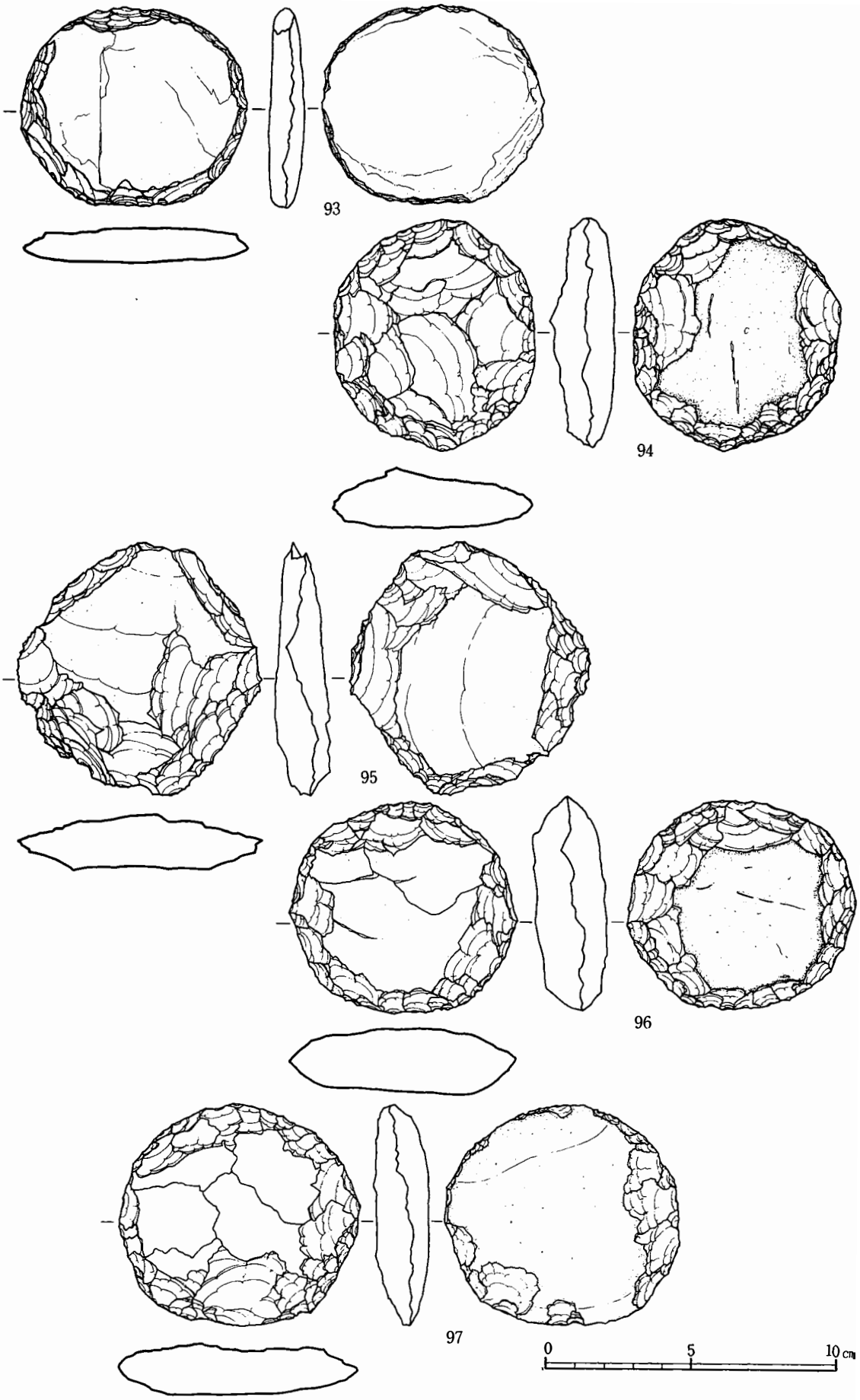
第74図　打製石斧実測図



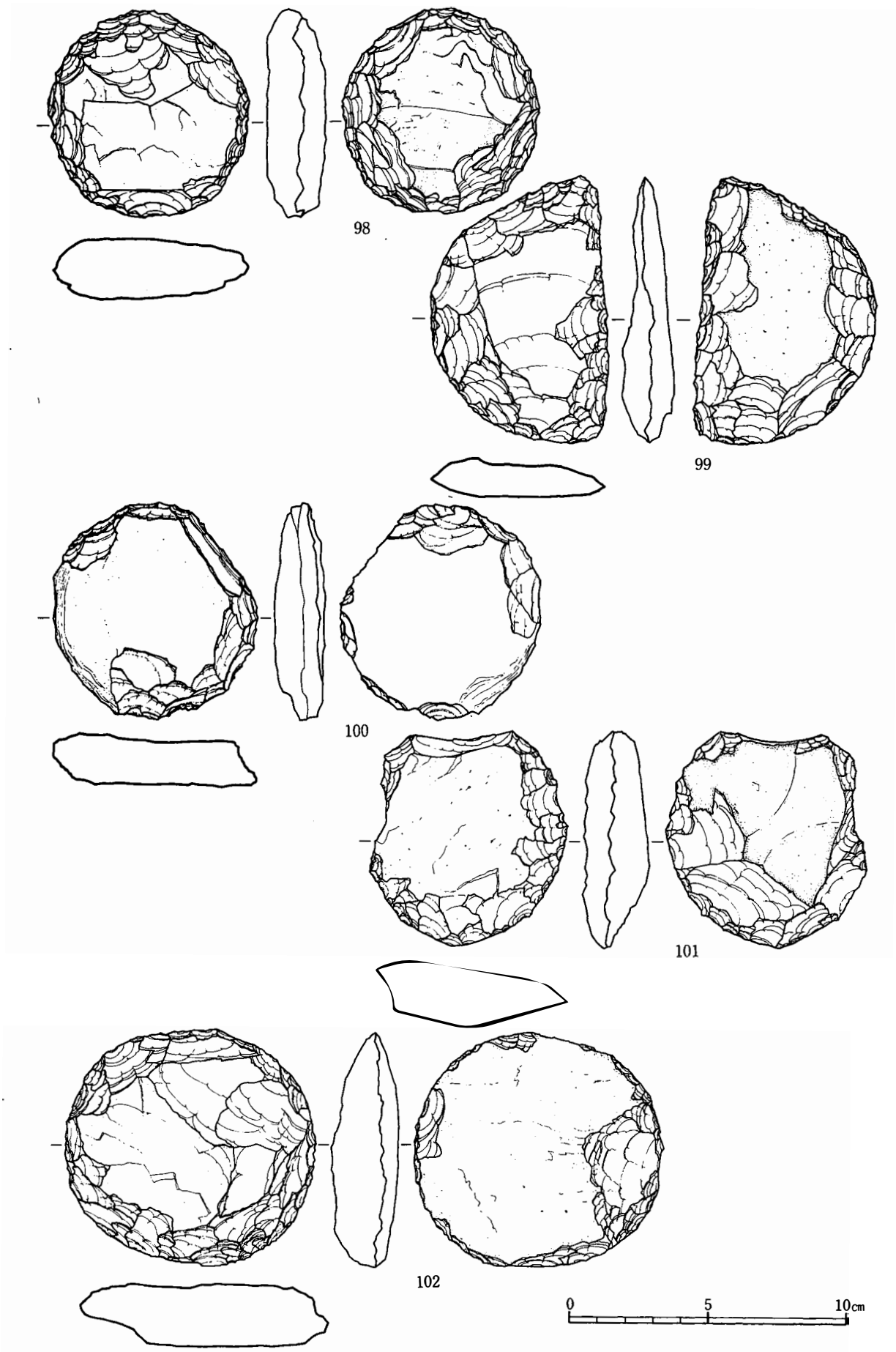
第75図　打製石斧実測図



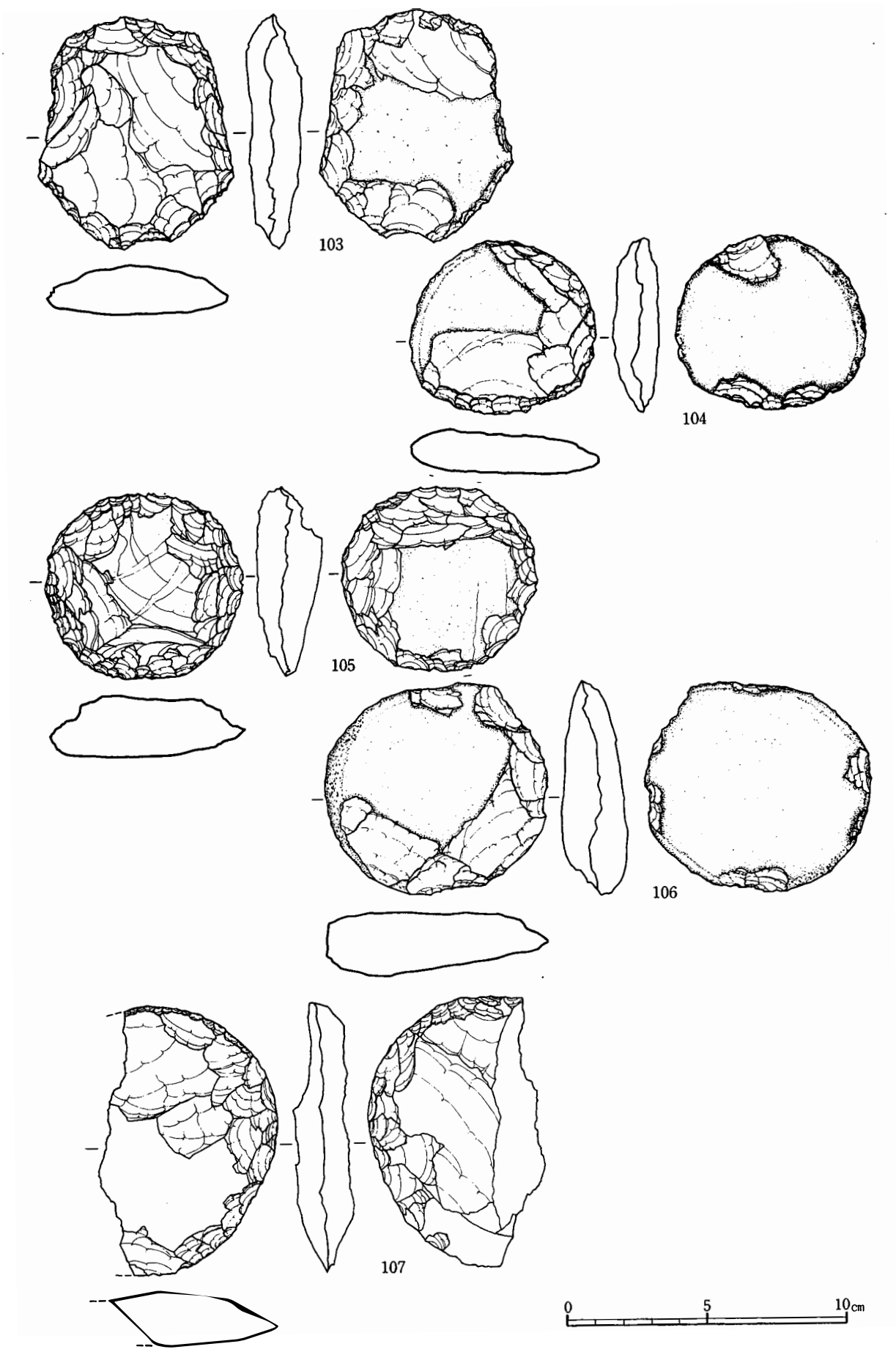
第76図　打製石斧実測図



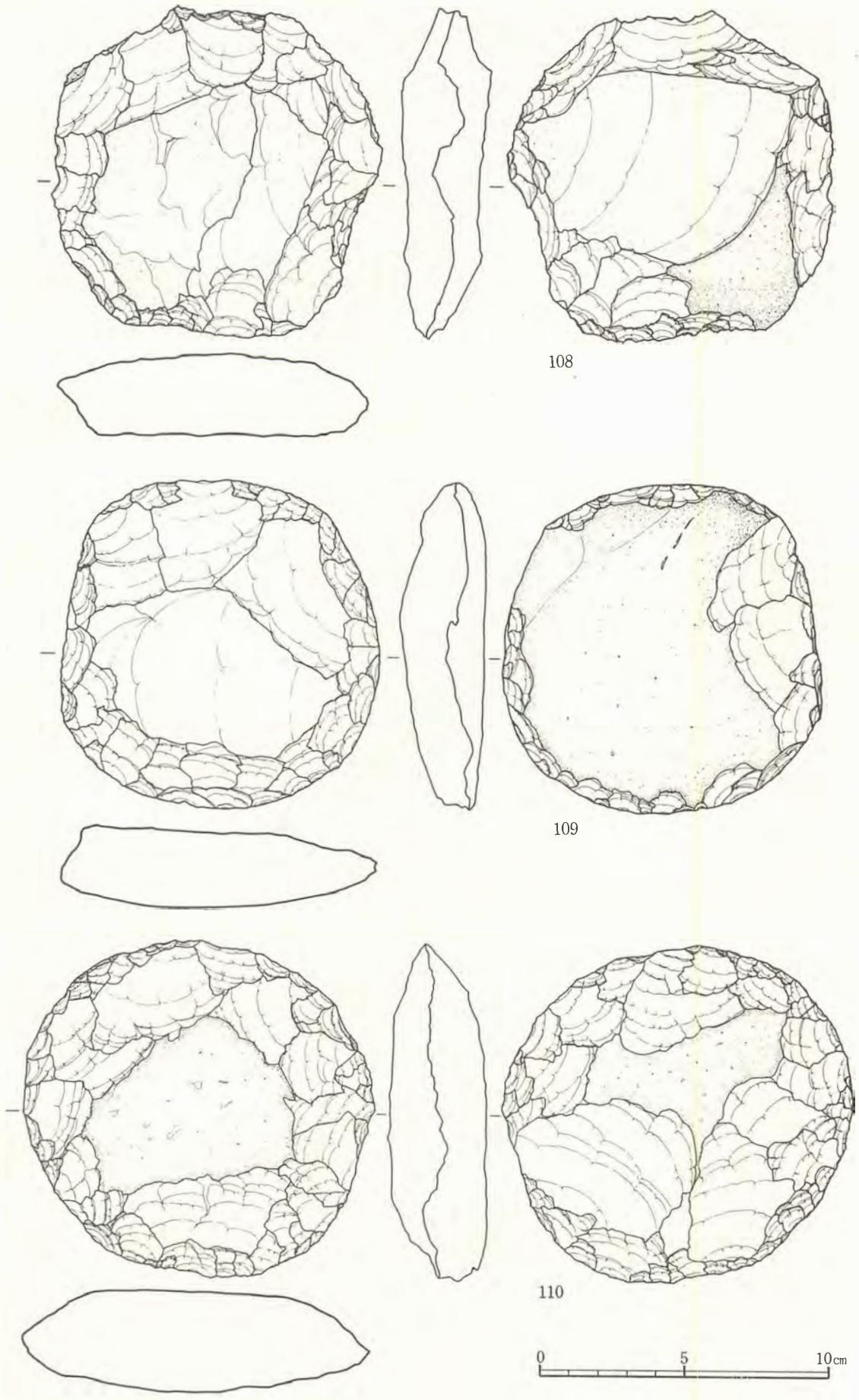
第77図　打製石斧実測図



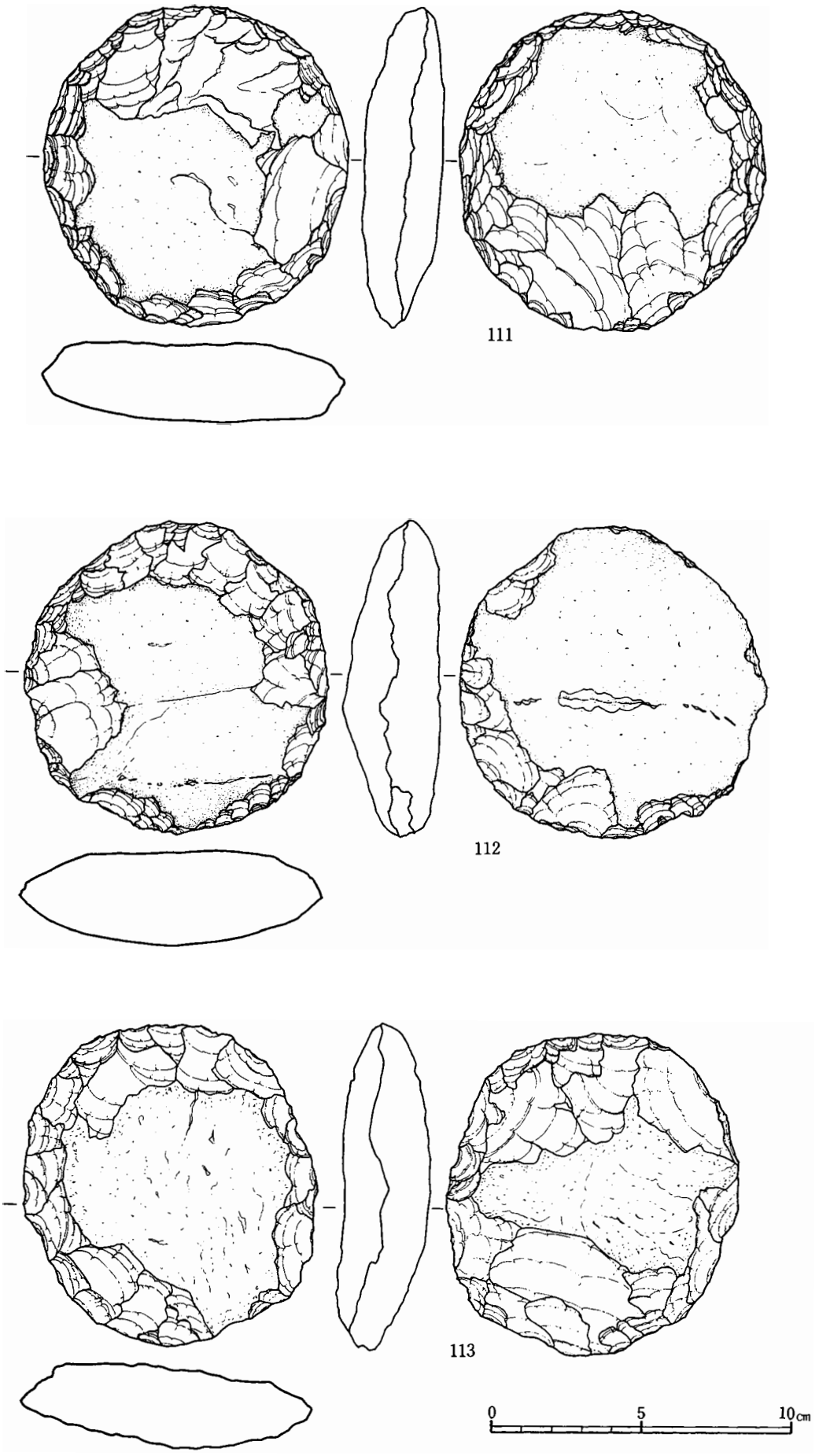
第78図　打製石斧実測図



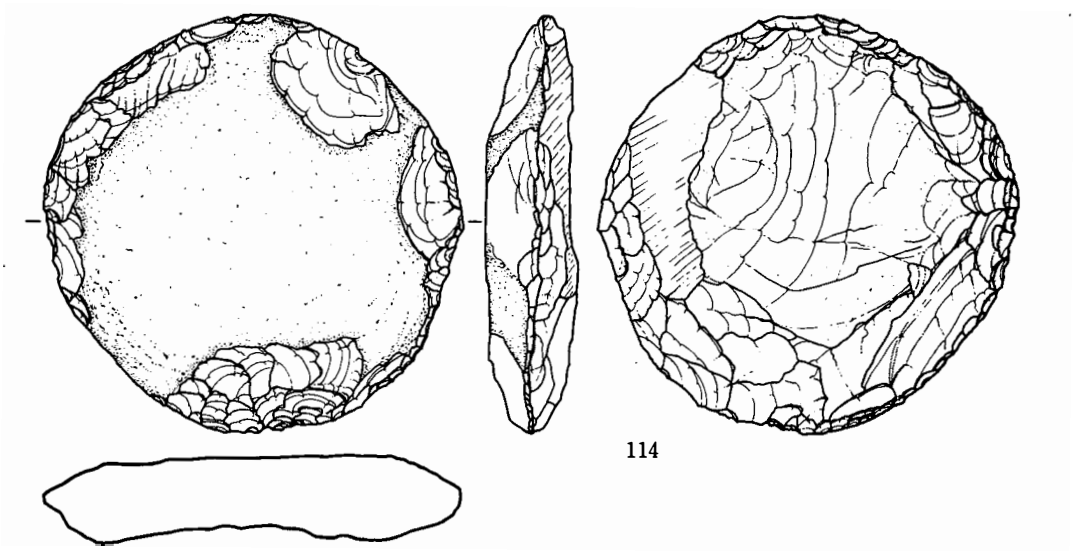
第79図　打製石斧実測図

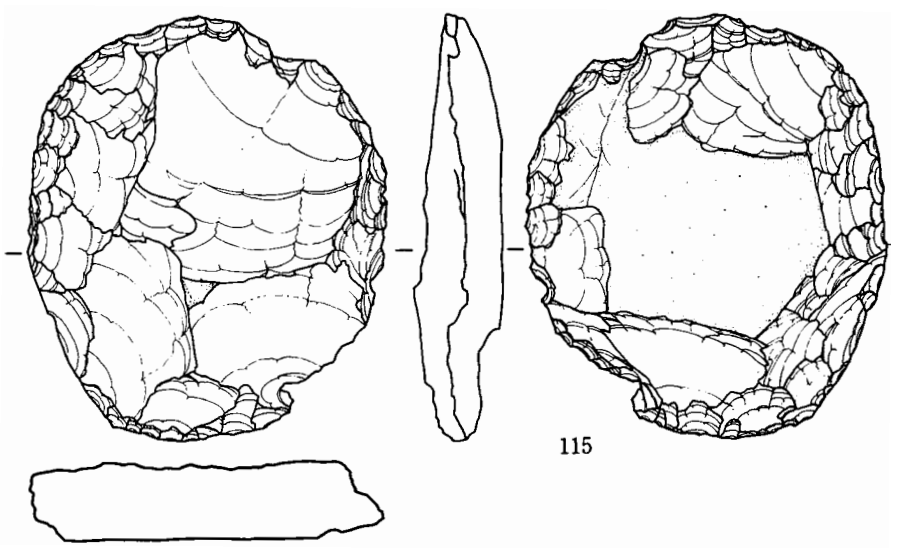


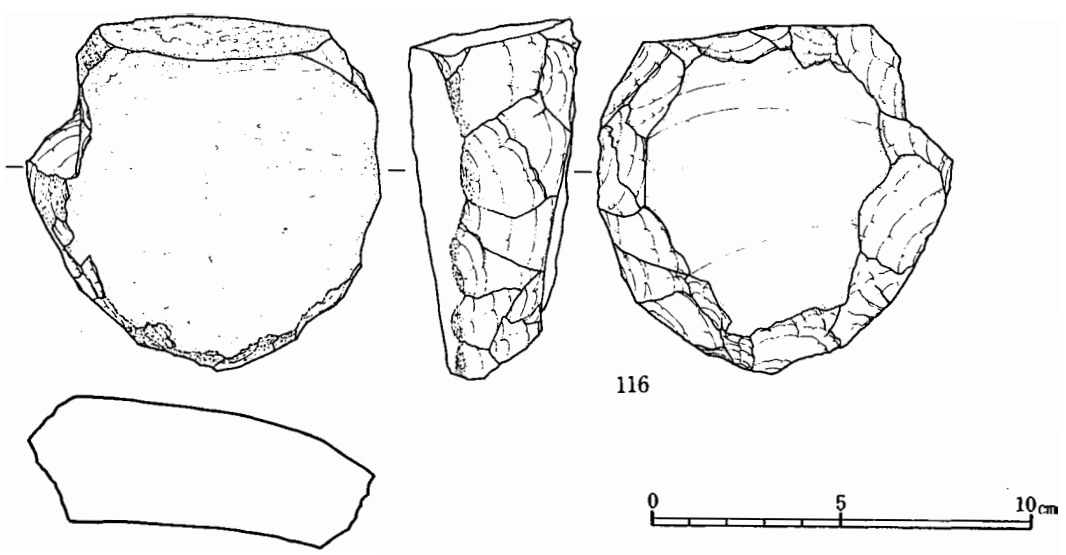
第80図　打製石斧実測図



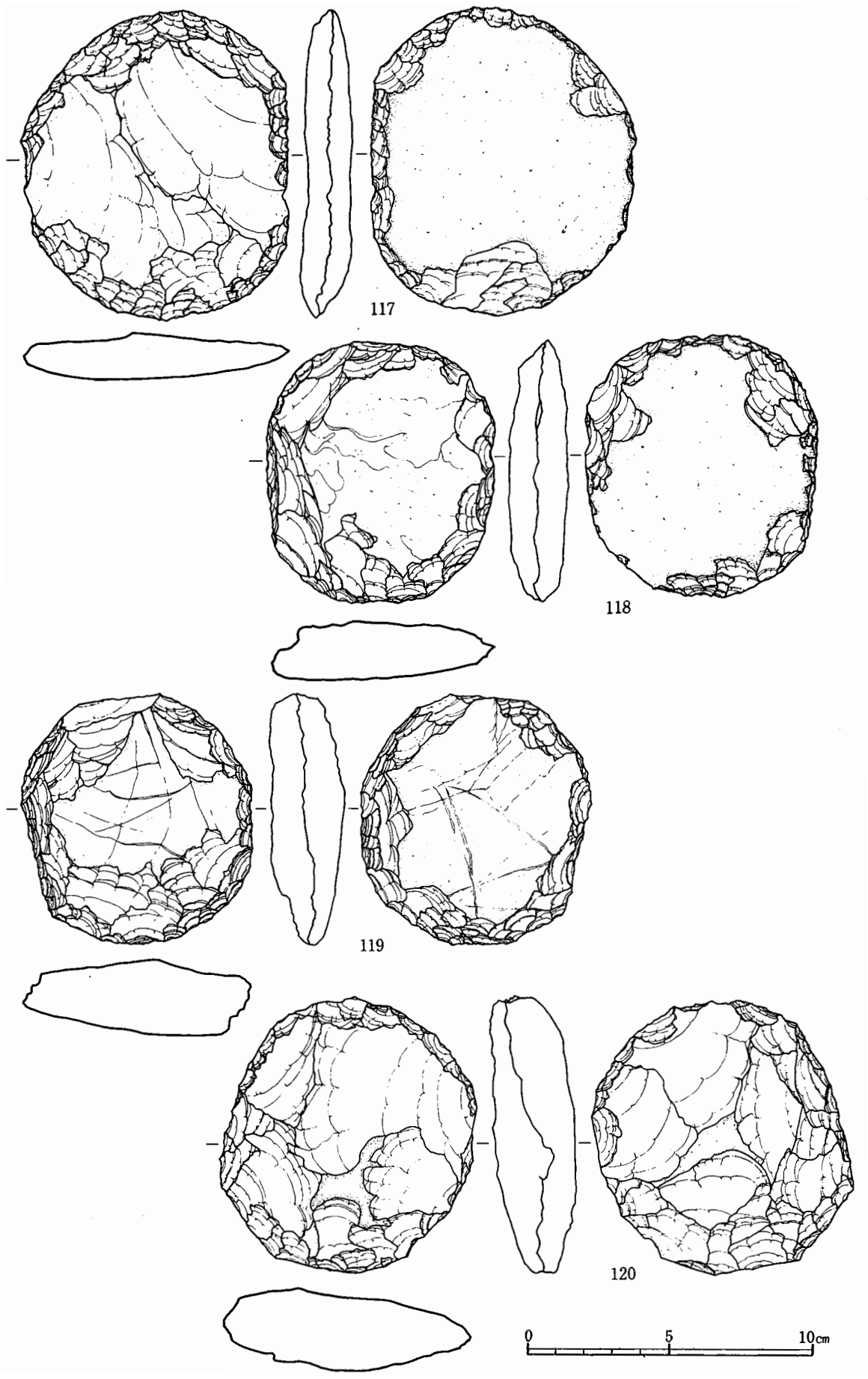
第81図　打製石斧実測図



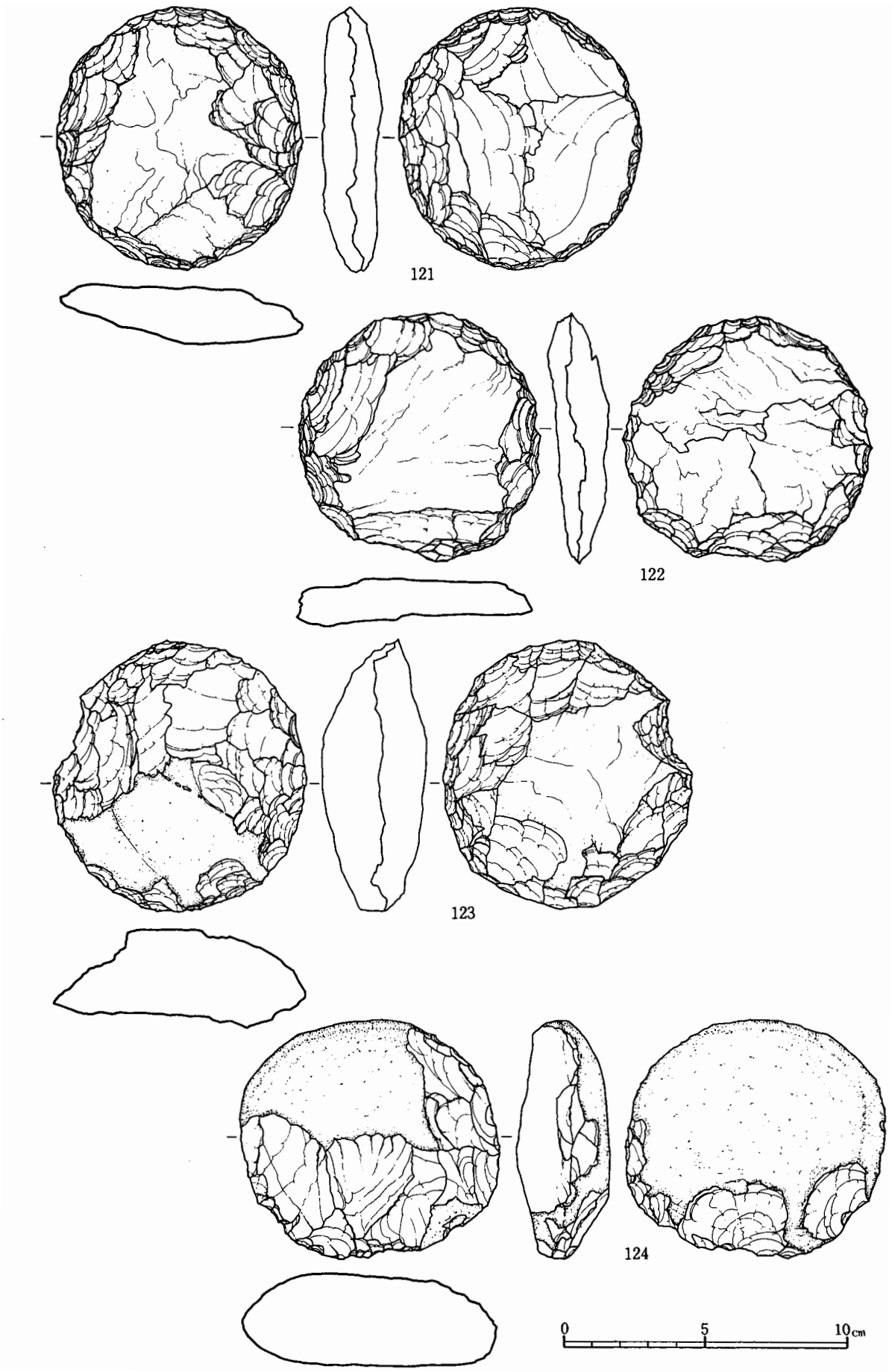




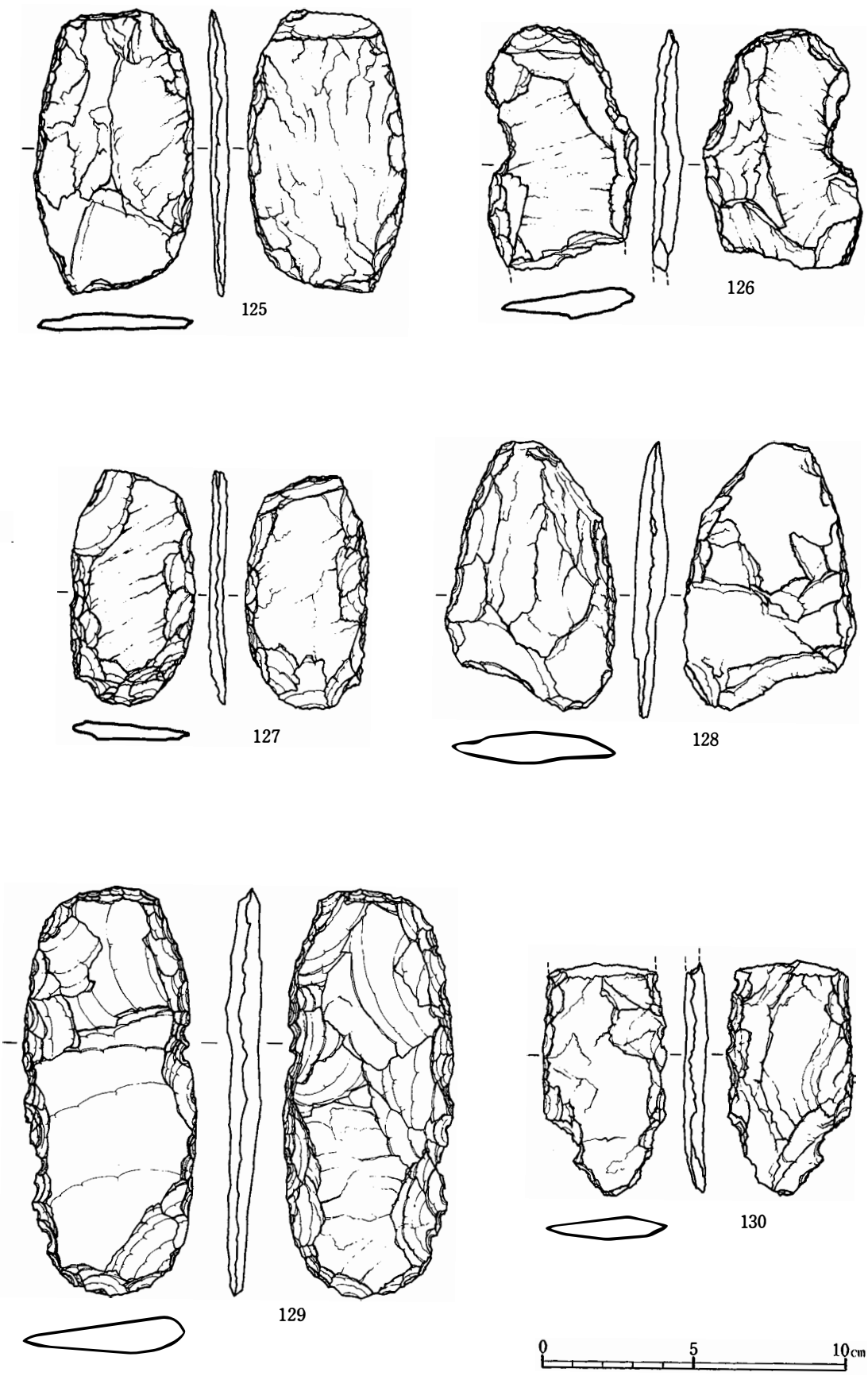
第82図　打製石斧実測図



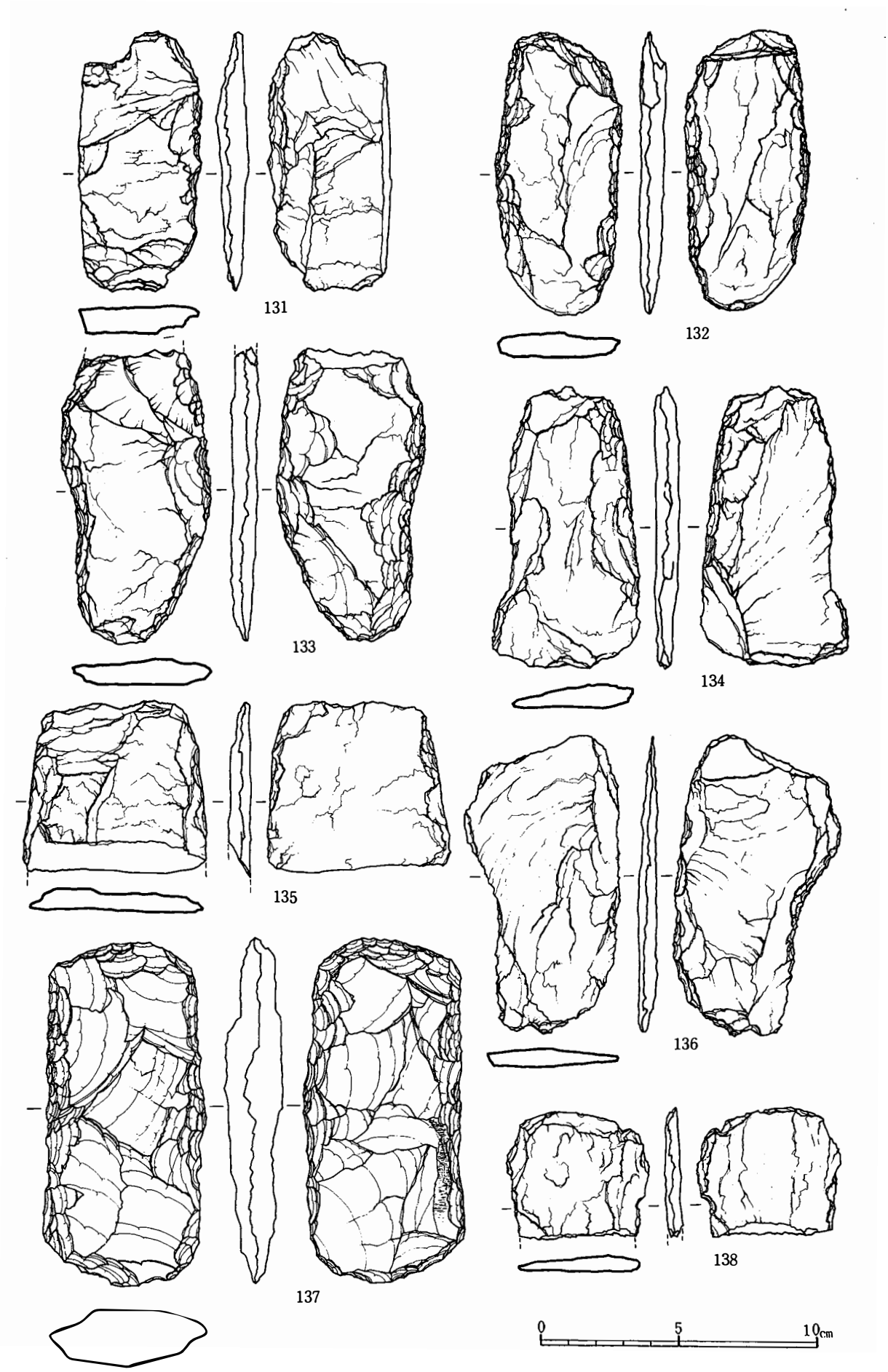
第83図　打製石斧実測図



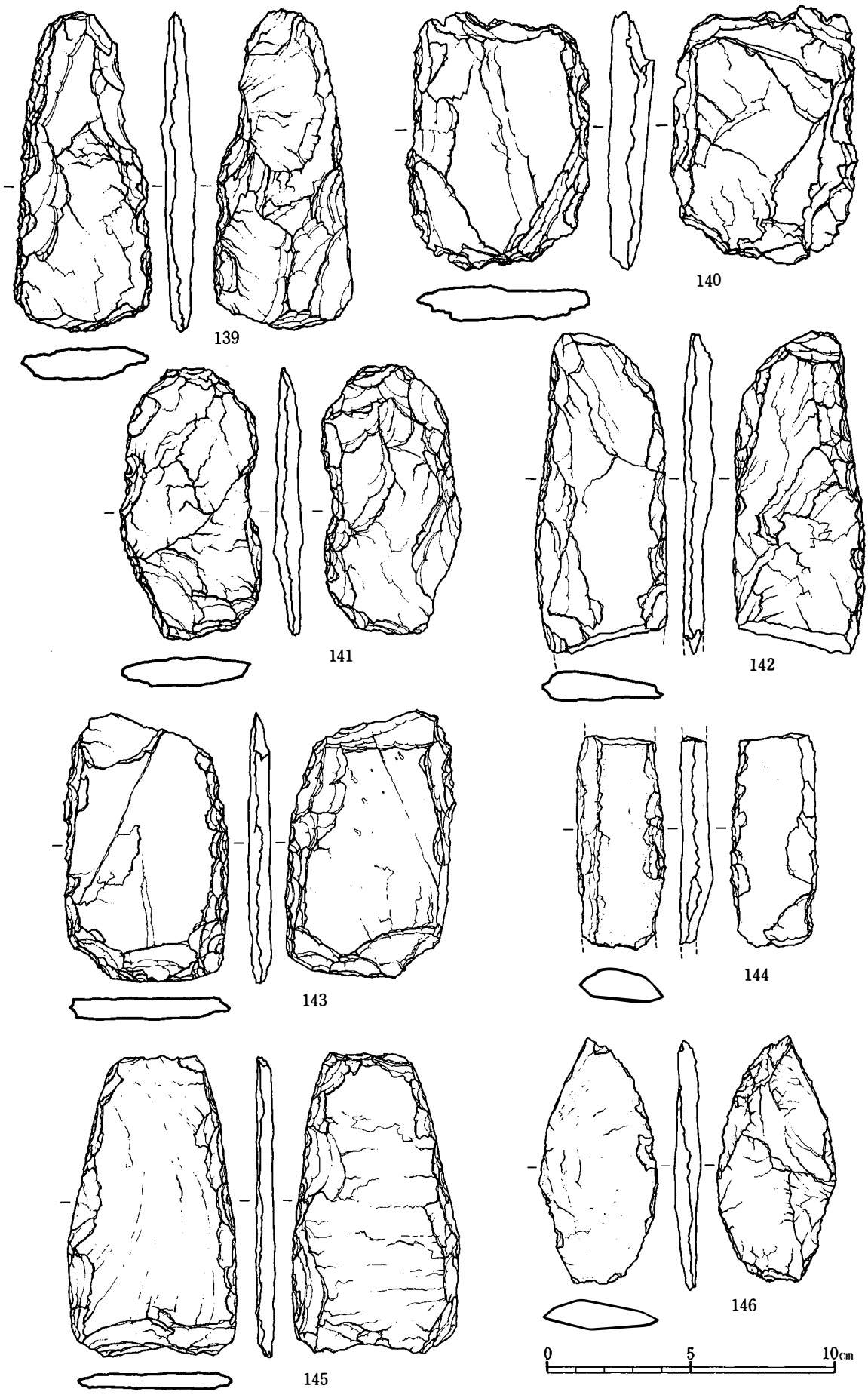
第84図　打製石斧実測図



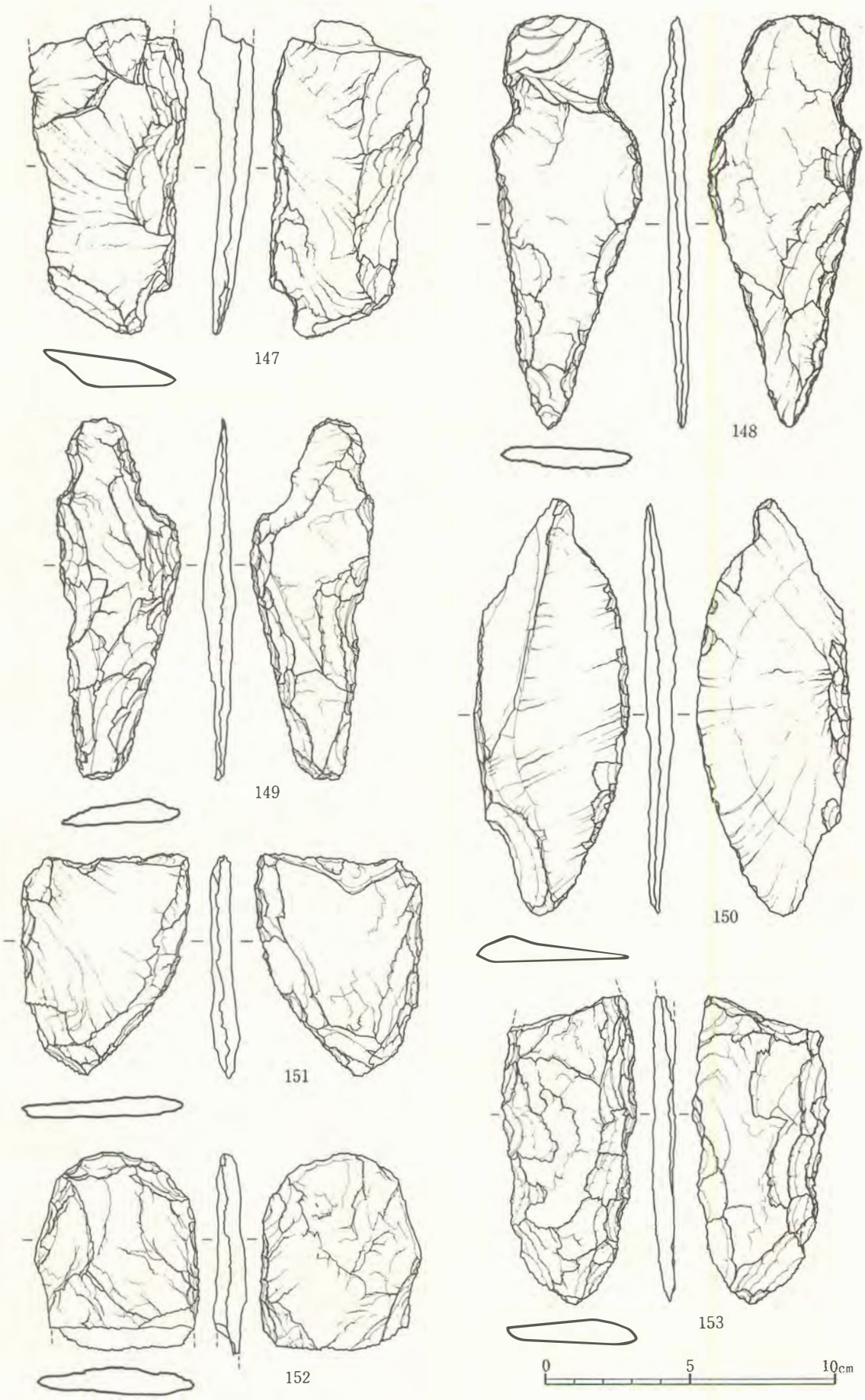
第85図　打製石斧実測図



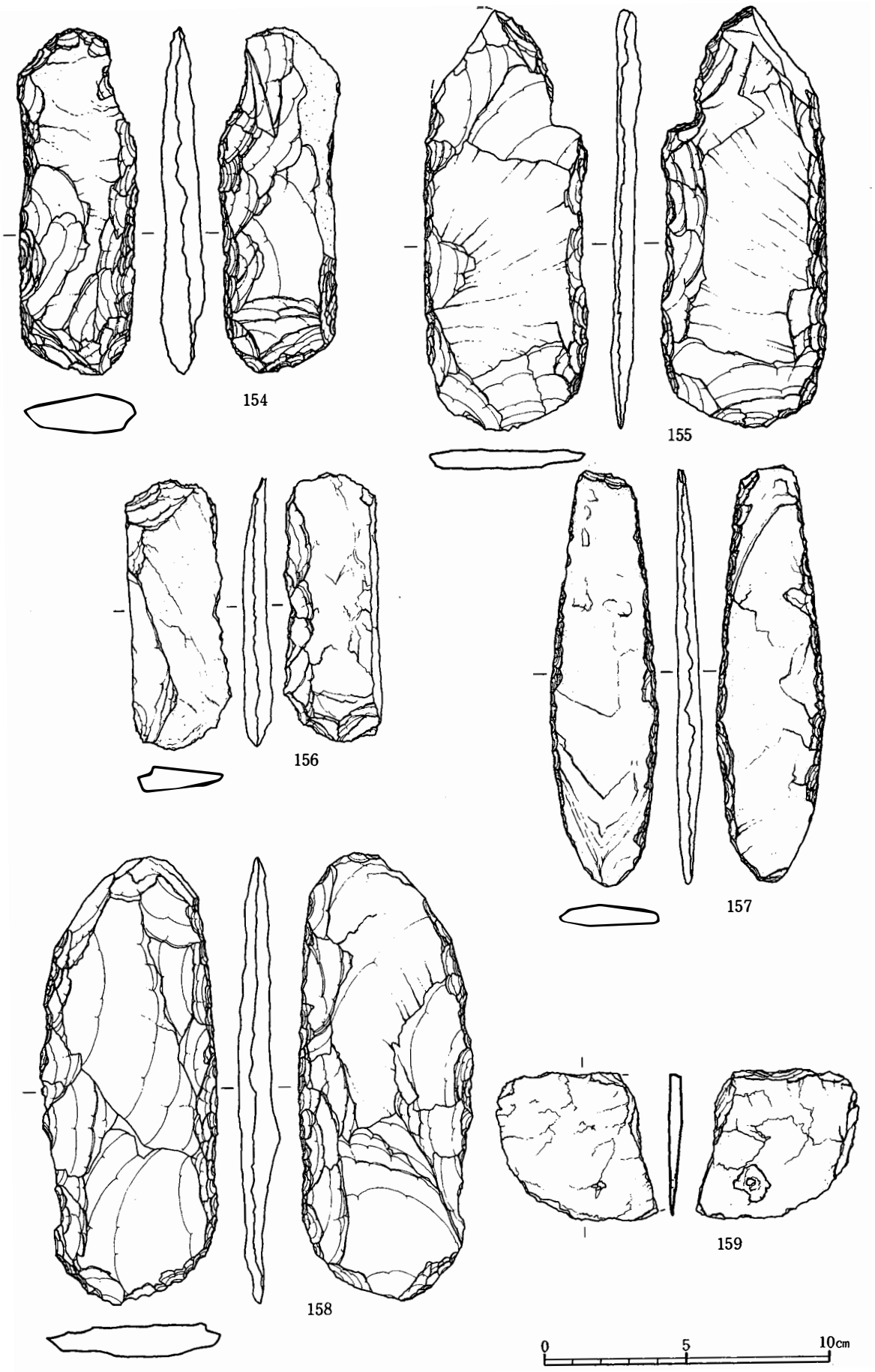
第86図　打製石斧実測図



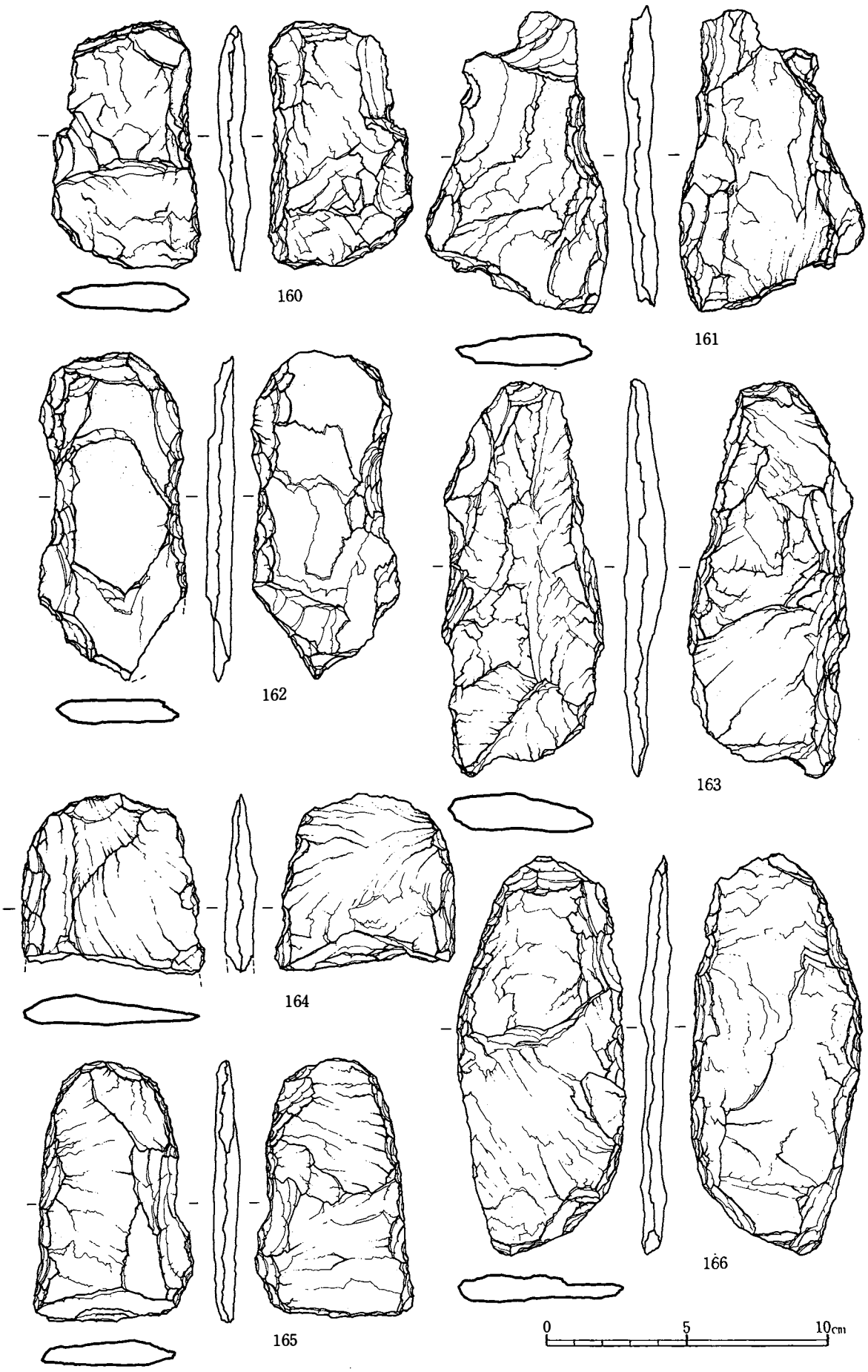
第87図　打製石斧実測図



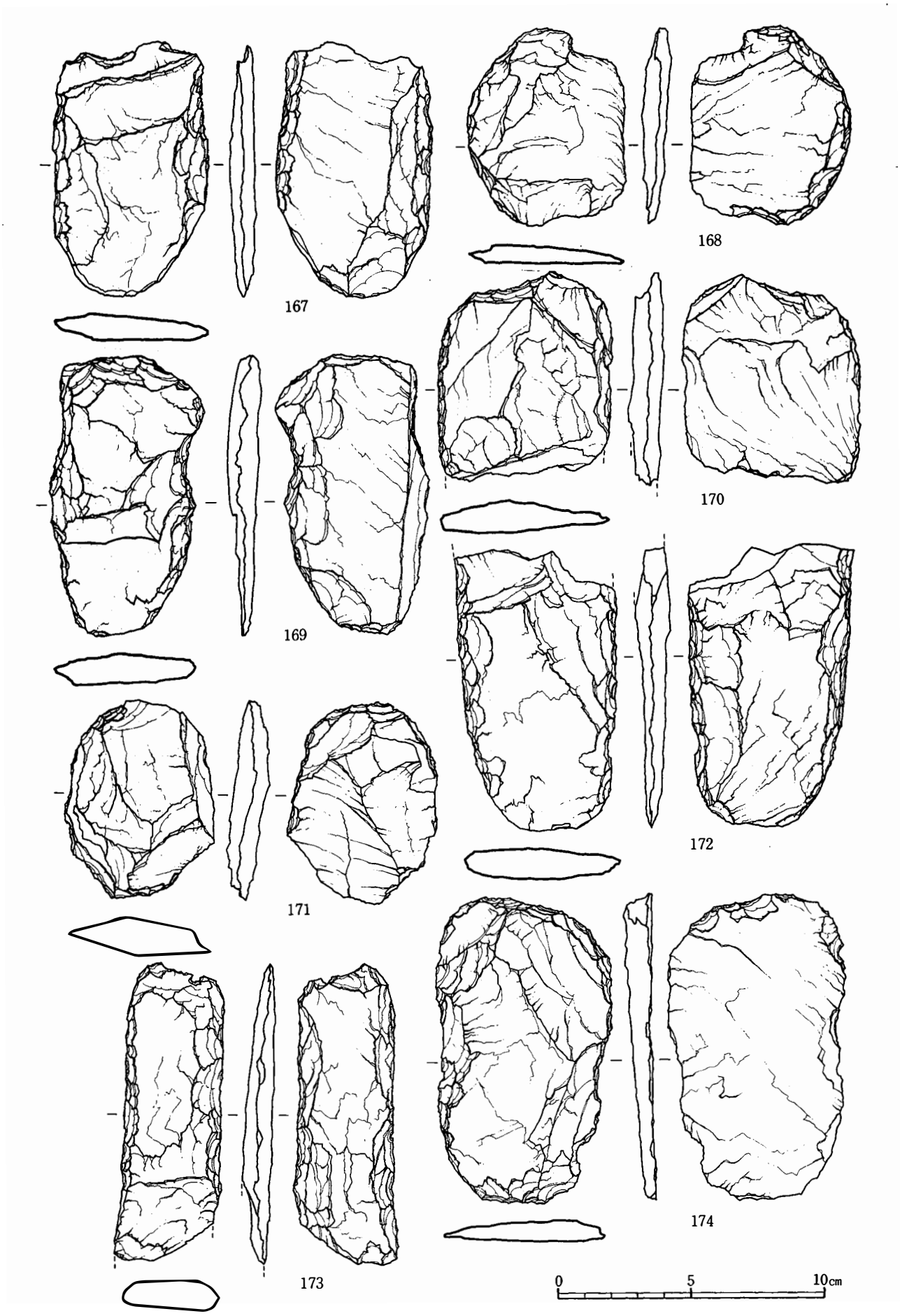
第88図　打製石斧実測図



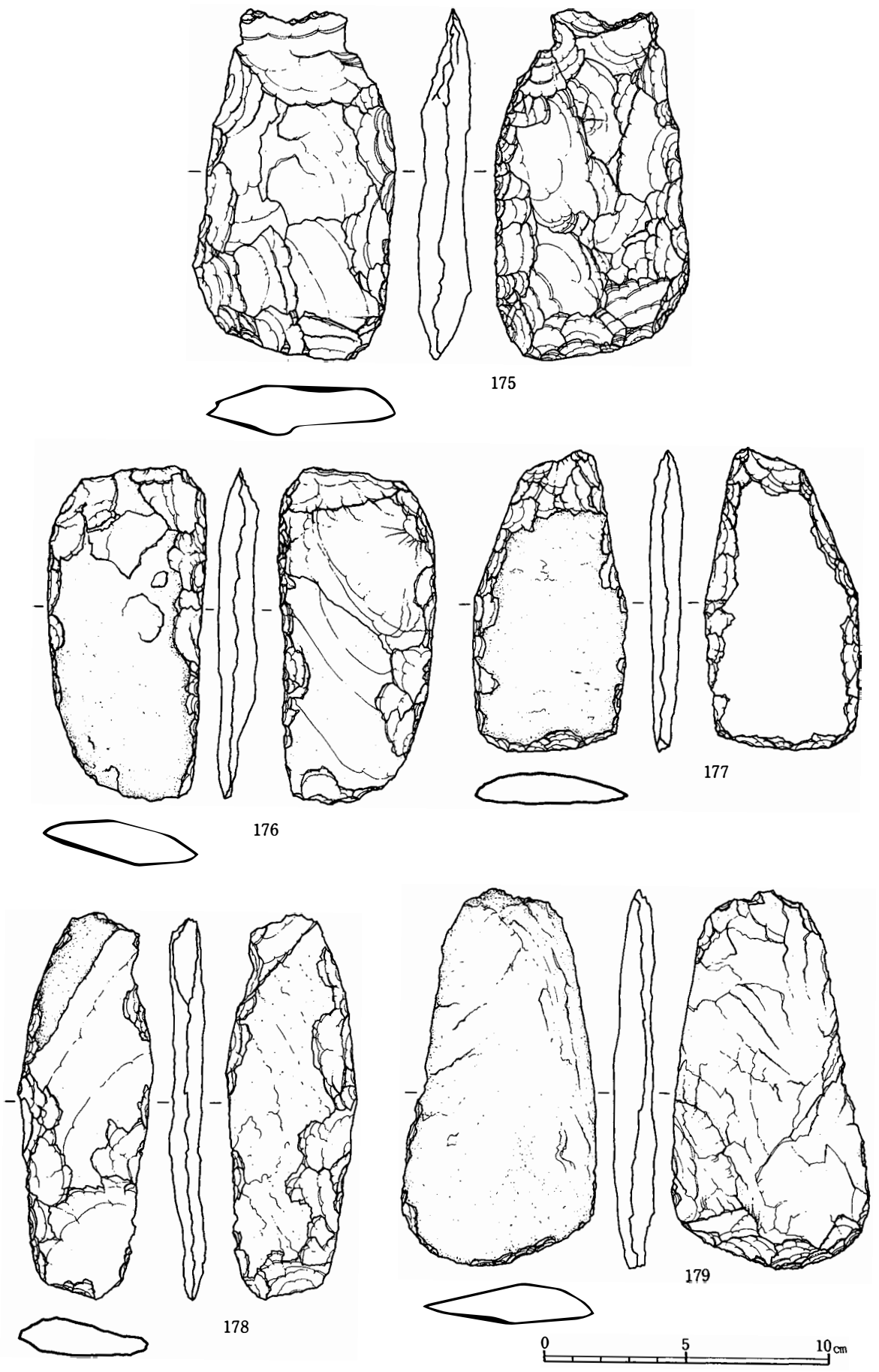
第89図　打製石斧実測図



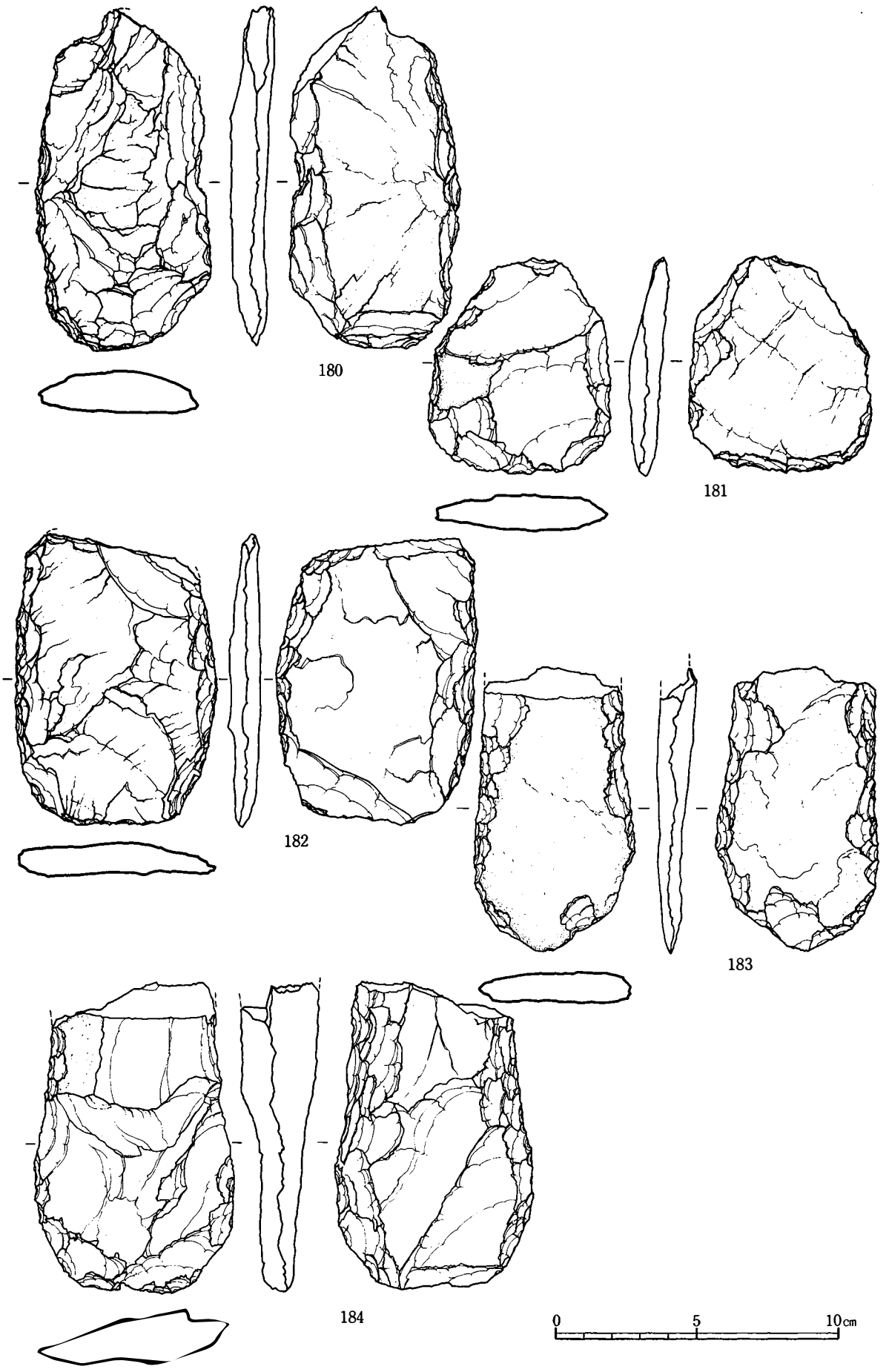
第90図　打製石斧実測図



第91図　打製石斧実測図



第92図　打製石斧実測図



第93図　打製石斧実測図

Ⅵ類（18）

形状は長方形に近く断面形が楕円形を呈するが、幅が短く細長いものである。

石鏃（第102～106図）

総数100点近くが出土した。その分布を見ると、縄文時代後期・晩期の土器が集中する箇所からの出土点数が多い（第100～101図）。

石鏃はその形状から、大きく２類に分類した。

Ⅰ類は正三角形、Ⅱ類は二等辺三角形のものである。さらにその基部の形状で平基のものをａ、わずかに抉れるものをｂ、三角形状に抉れるものをｃ、Ｕ字形状に幅が小さく抉れるものをｄ、またＵ字状に大きく抉れるものをｅとする。

Ⅰｂ類（１～２）

全体の形状が正三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はわずか抉れる程度である。

Ⅰｃ類（３～６）

全体の形状が正三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基は三角形状に抉れる。この類は両側辺は直線的になり、最大幅が脚部先端に来る。

Ⅰｄ類（７・８・10～19）

全体の形状が正三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はＵ字形状に抉れ、その幅が小さい。この類は最大幅が脚部よりやや上位に来るものが多い。脚部に最大幅が来るものは脚部先端が尖らず、水平になっている。

Ⅰｅ類（９）

全体の形状が正三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はＵ字状に大きく抉れる。

Ⅱａ類（20・21・31）

全体の形状が二等辺三角形をしている平基式の石鏃である。

Ⅱｂ類（22～30・32～39・41～44・46・48）

全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はわずかに抉れる程度である。

Ⅱｃ類（40・45・47・49～54・60～64・67～72・82～83・85）

全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態は三角形状に抉れる。この類は両側辺はほぼ直線的になり、最大幅が脚部先端に来るものが多い。

Ⅱｄ類（55～59・65・66・74～80・84・88～92）

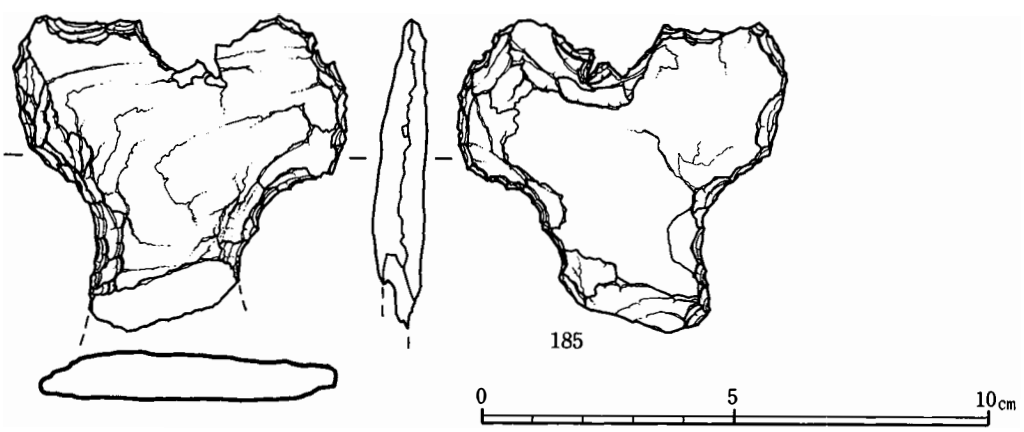
全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はＵ字形状に抉れ、その幅が小さい。この類は最大幅が脚部よりやや上位に来るものが多い。また脚部に最大幅が来るものは脚部先端が尖らず、水平になっているものが多い。

Ⅱｅ類（73・81・86・87）

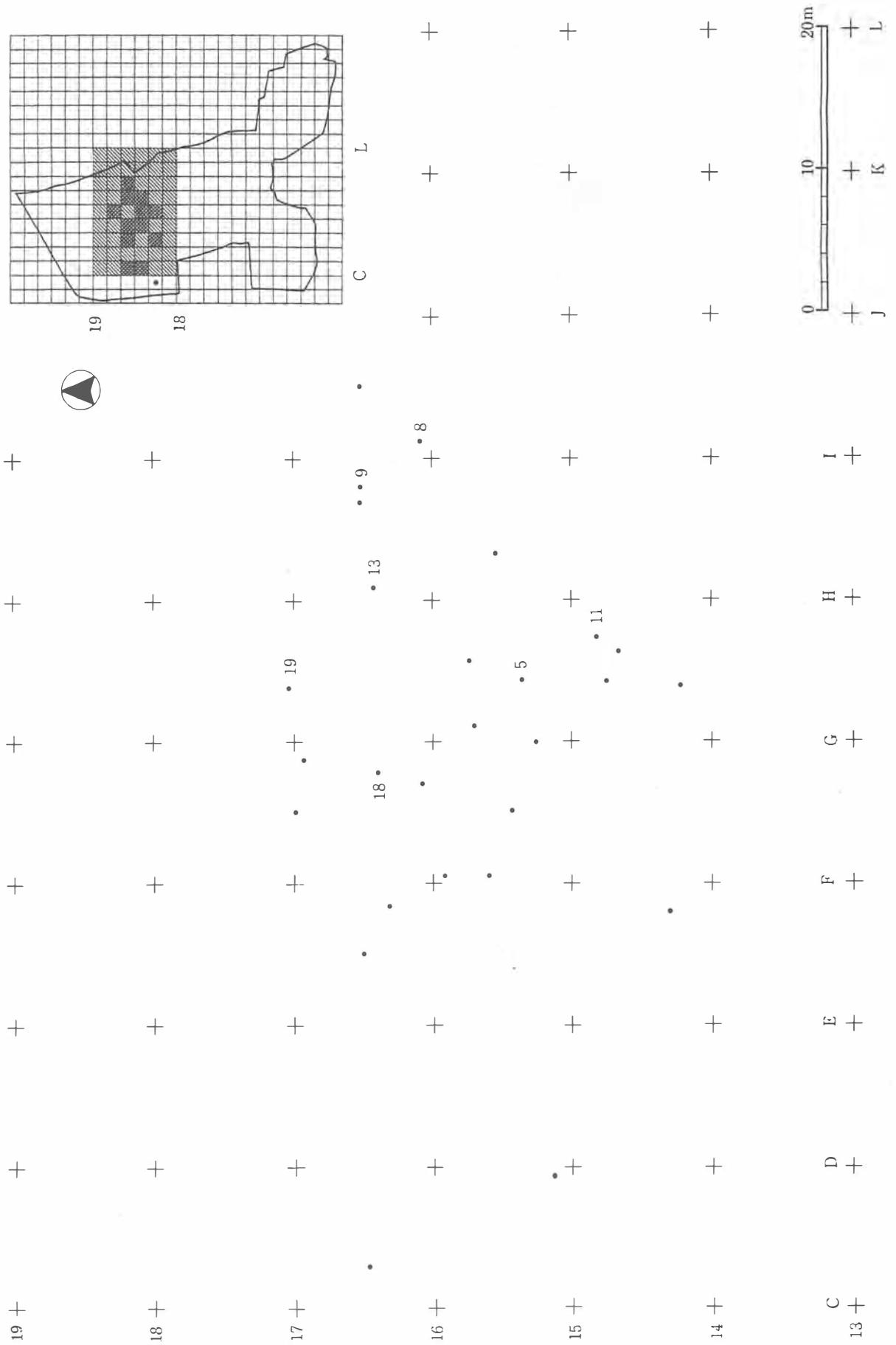
全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。凹基の状態はＵ字状に大きく抉れる。

尖頭状石器・石錐・削器・異形石器（第107図）

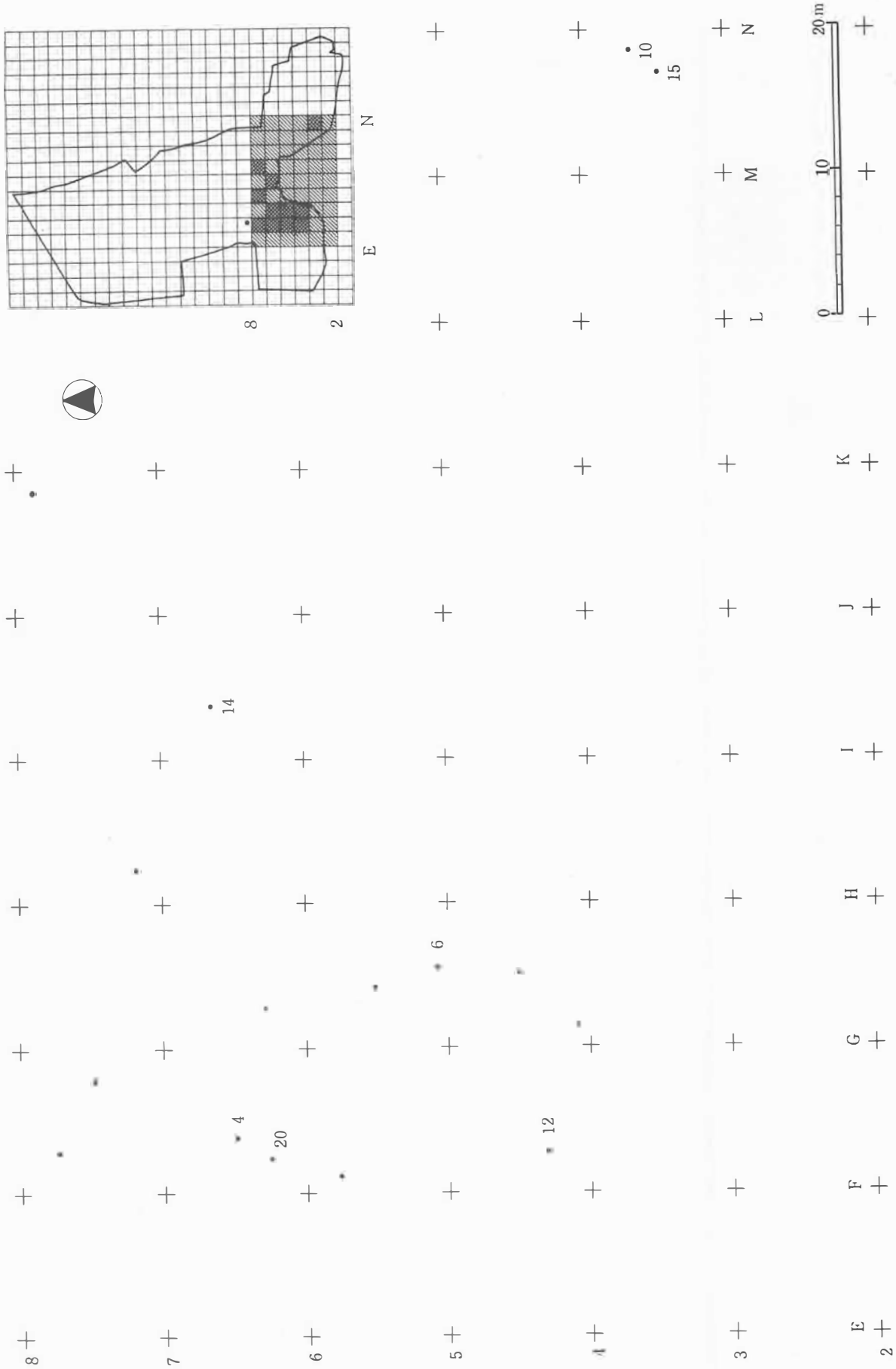
分布は10を除き遺跡の南側Ｇ区にある。縄文時代



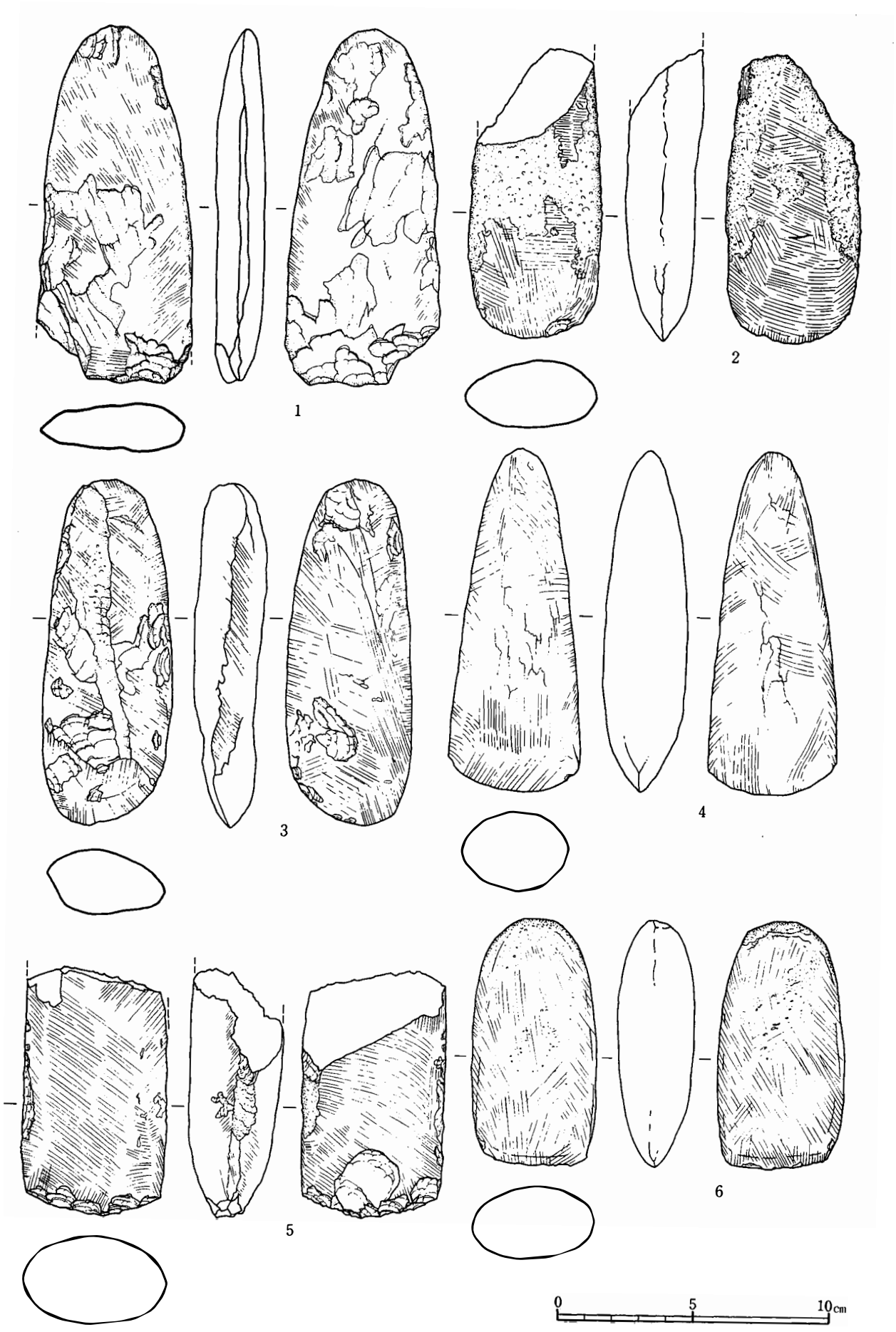
第94図　Ｙ字形石斧実測図



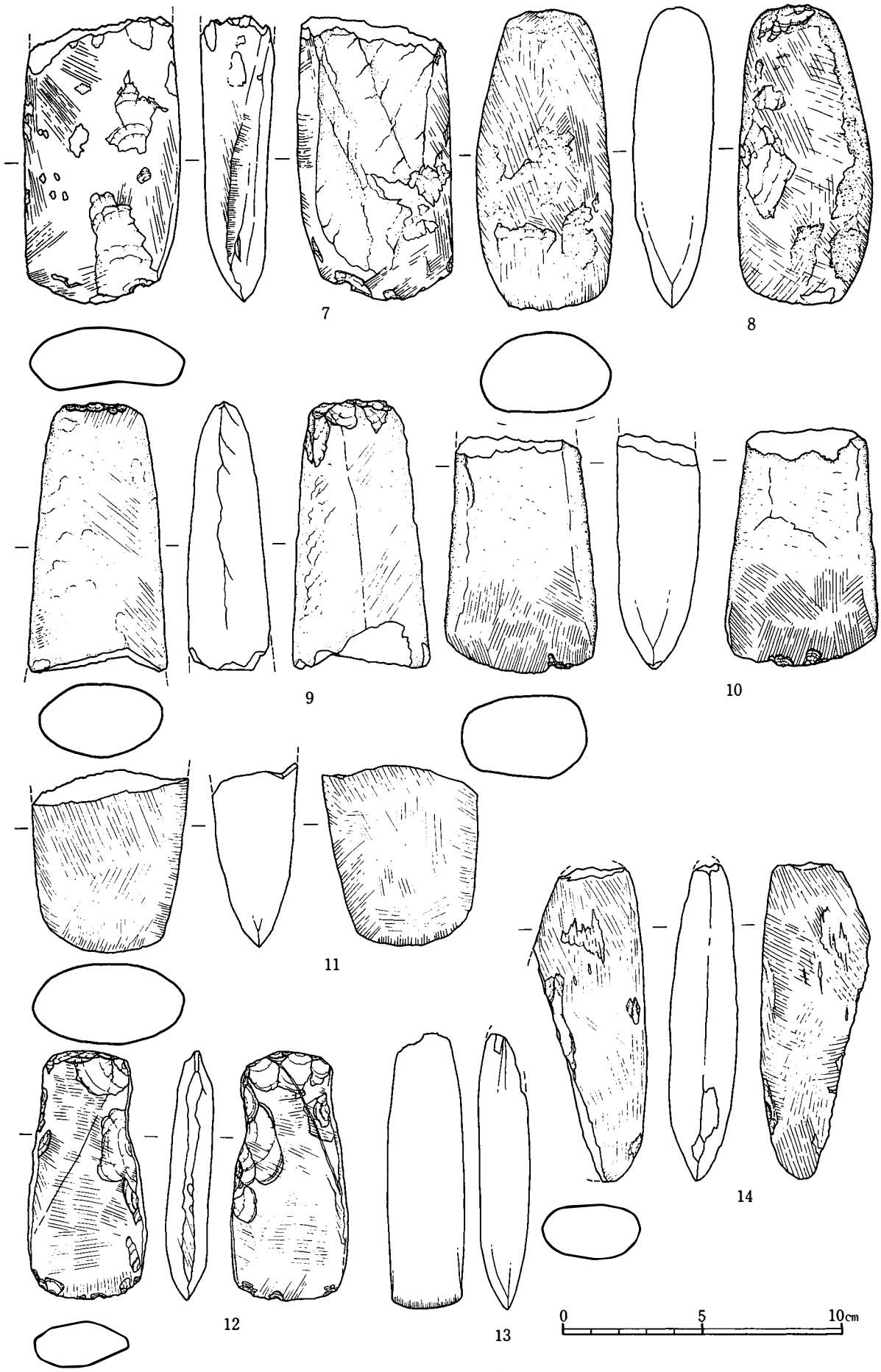
第95図　磨製石斧分布図（１）



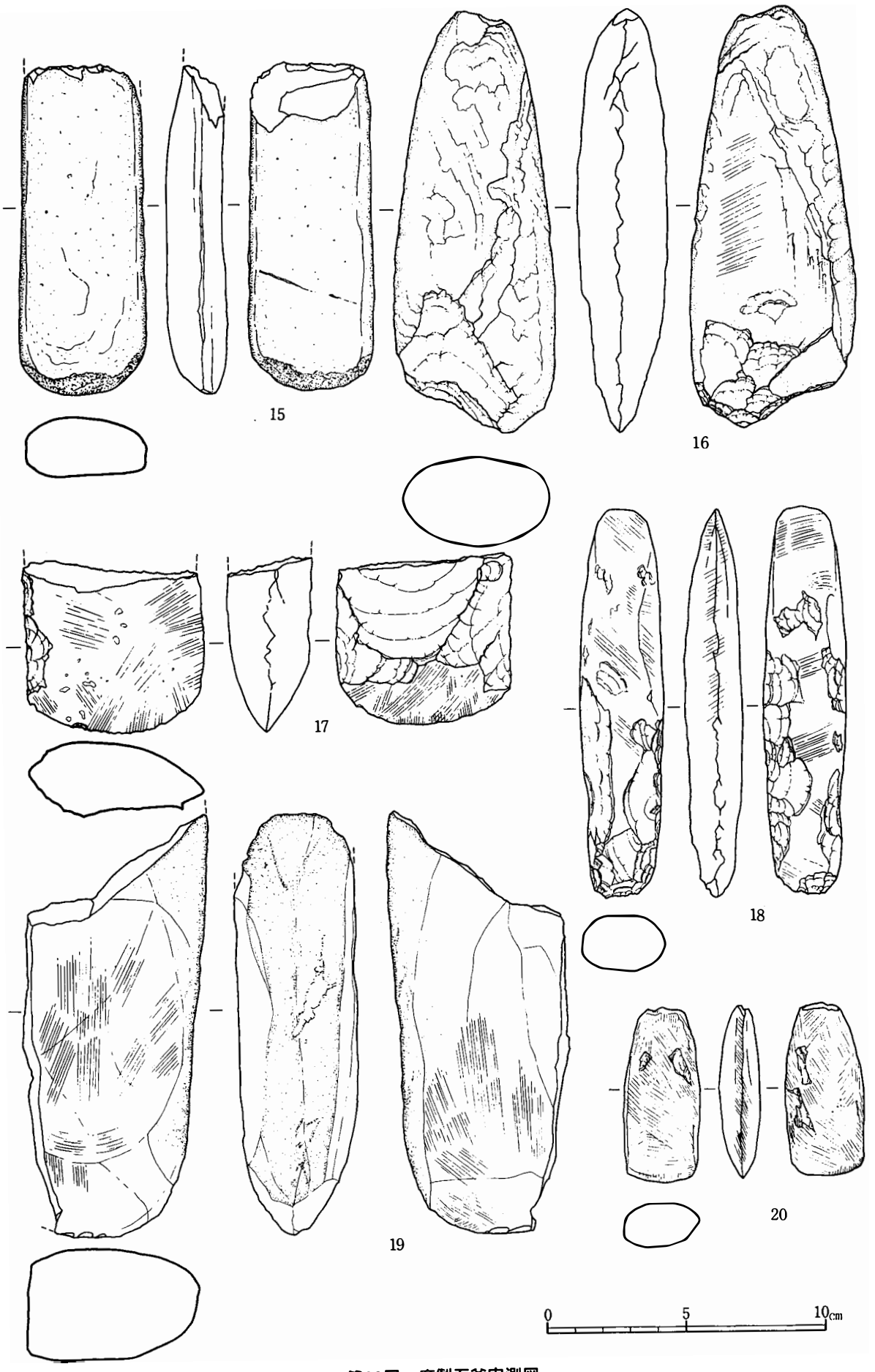
第96図　磨製石斧分布図（２）



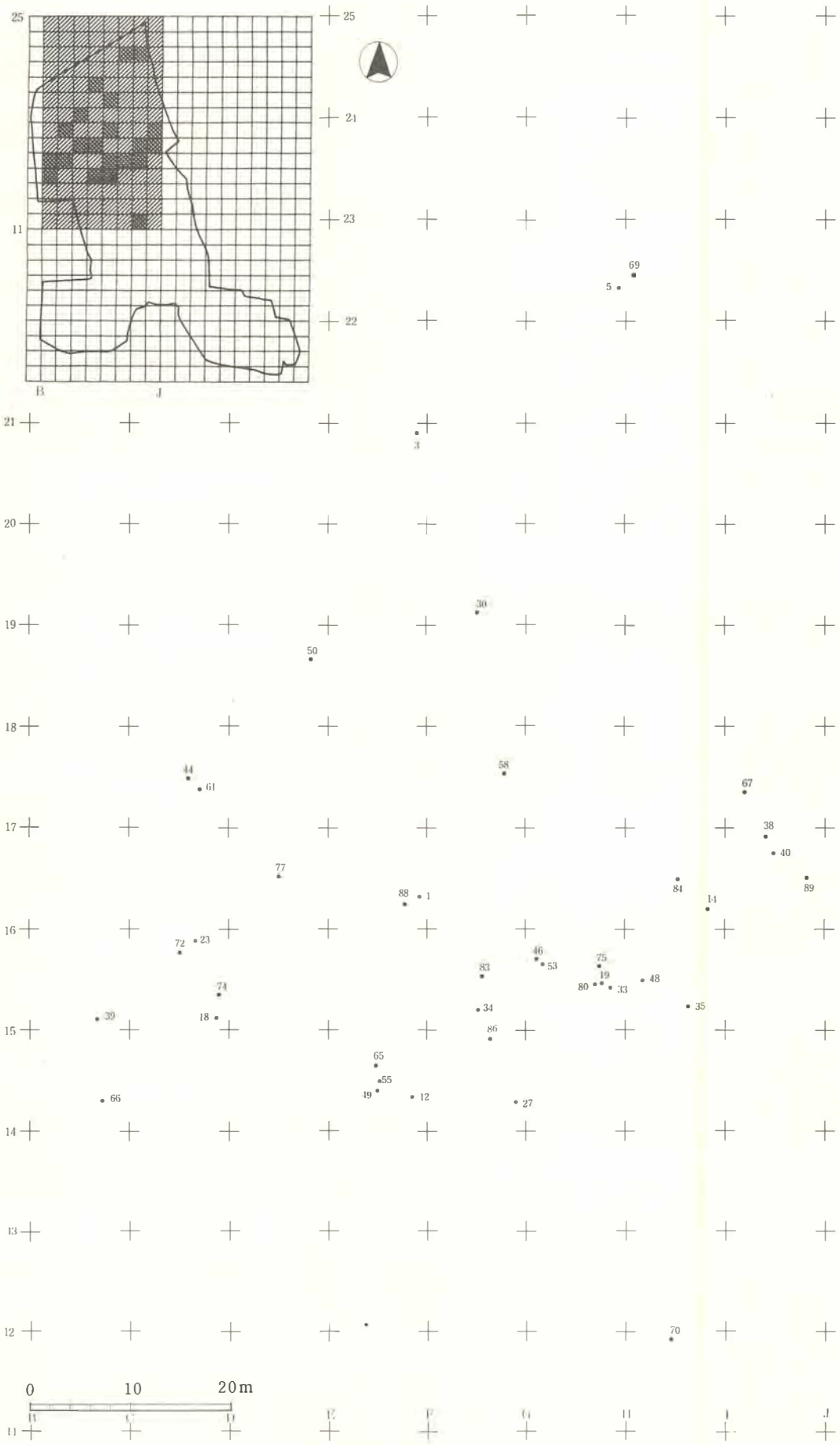
第97図　磨製石斧実測図



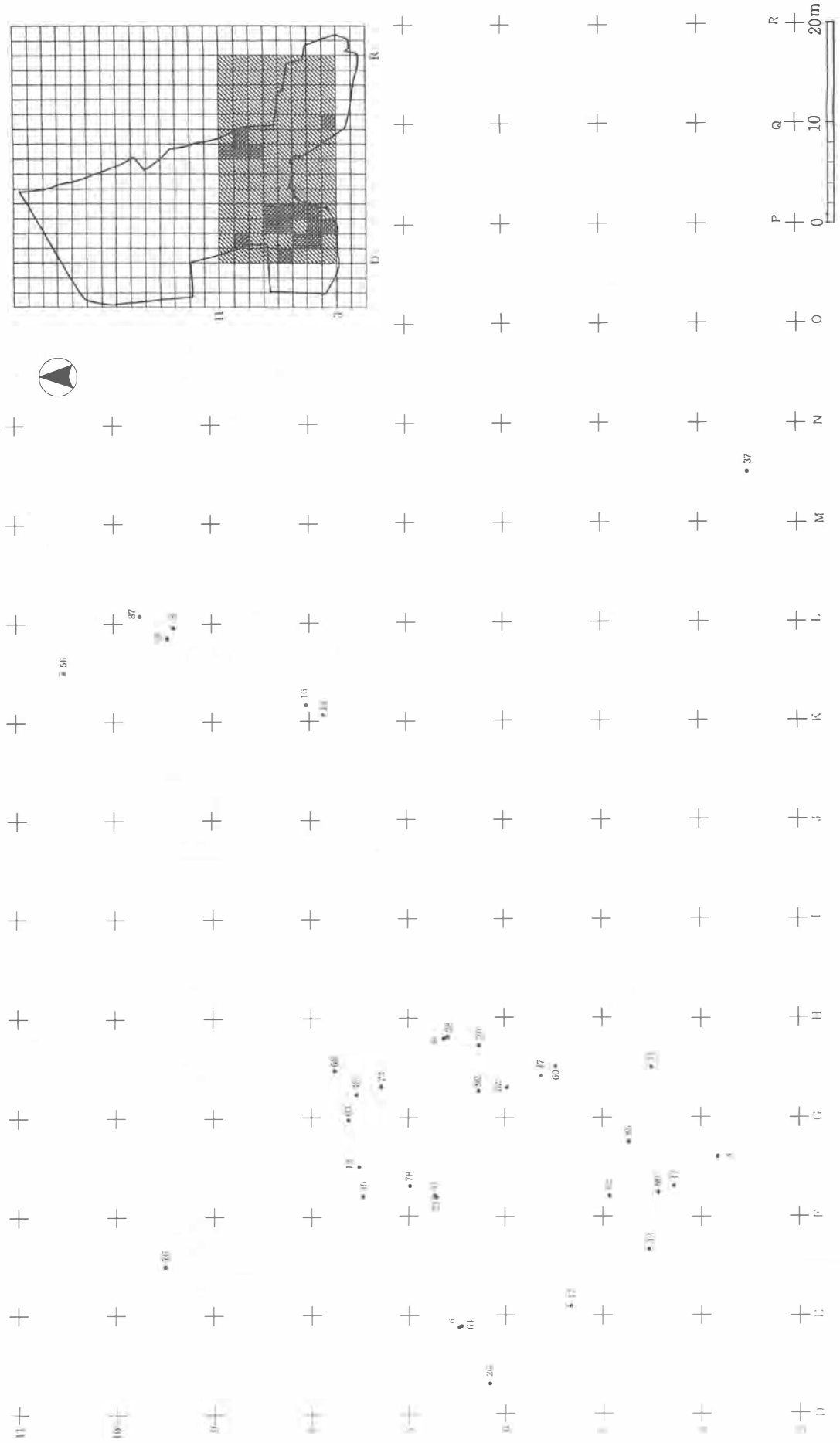
第98図　磨製石斧実測図



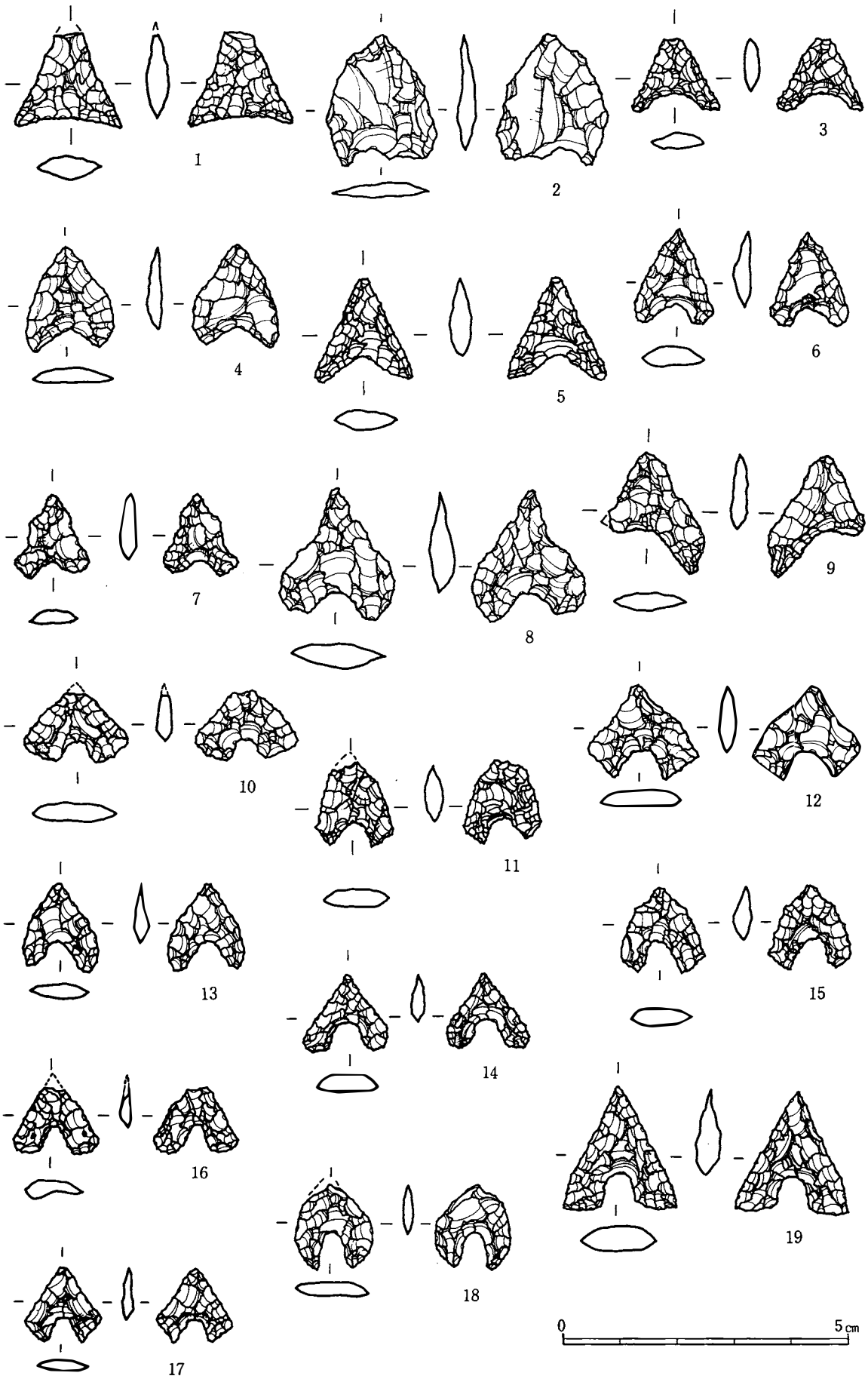
第99図　磨製石斧実測図



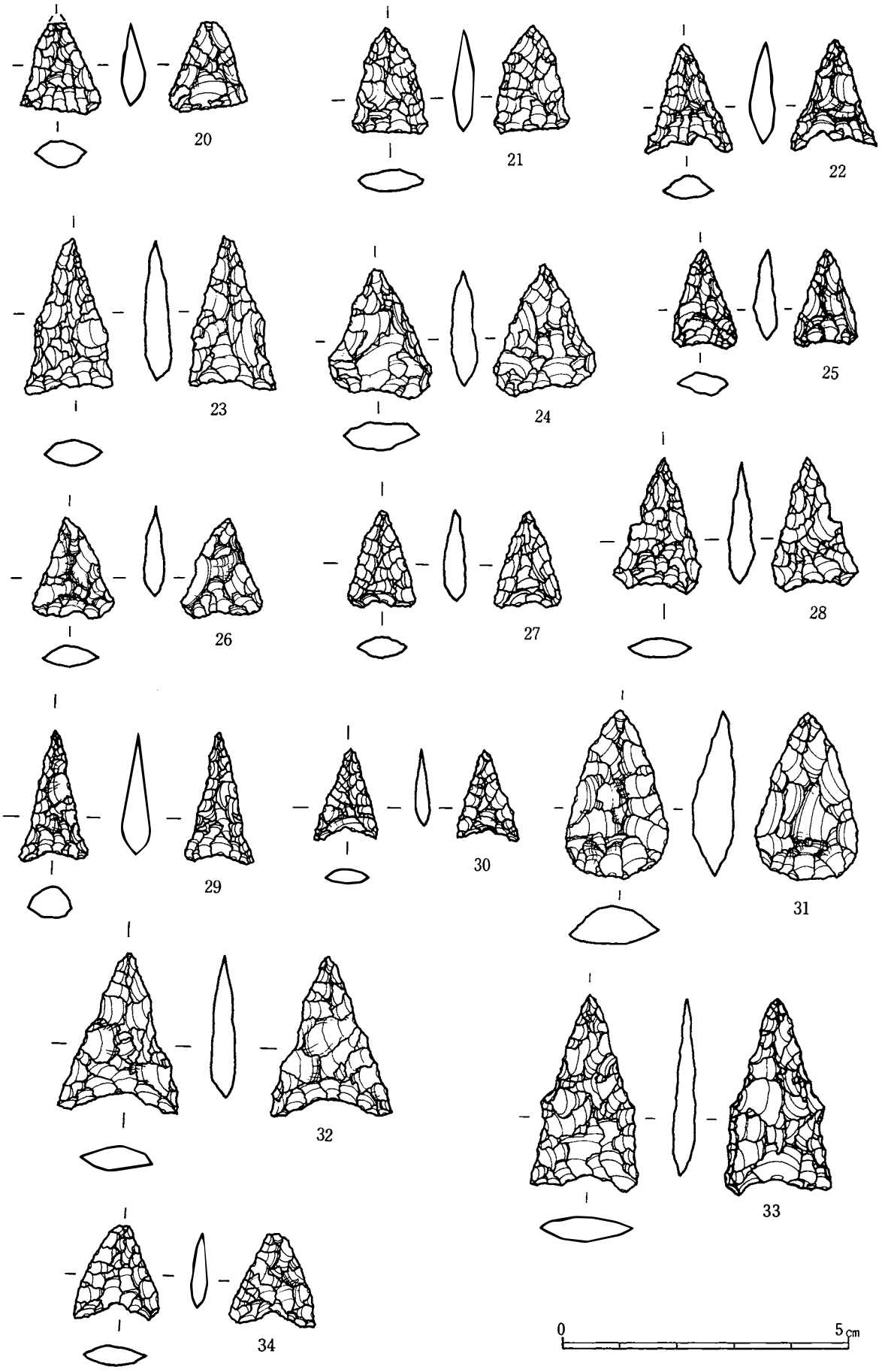
第100図　石鏃分布図（１）



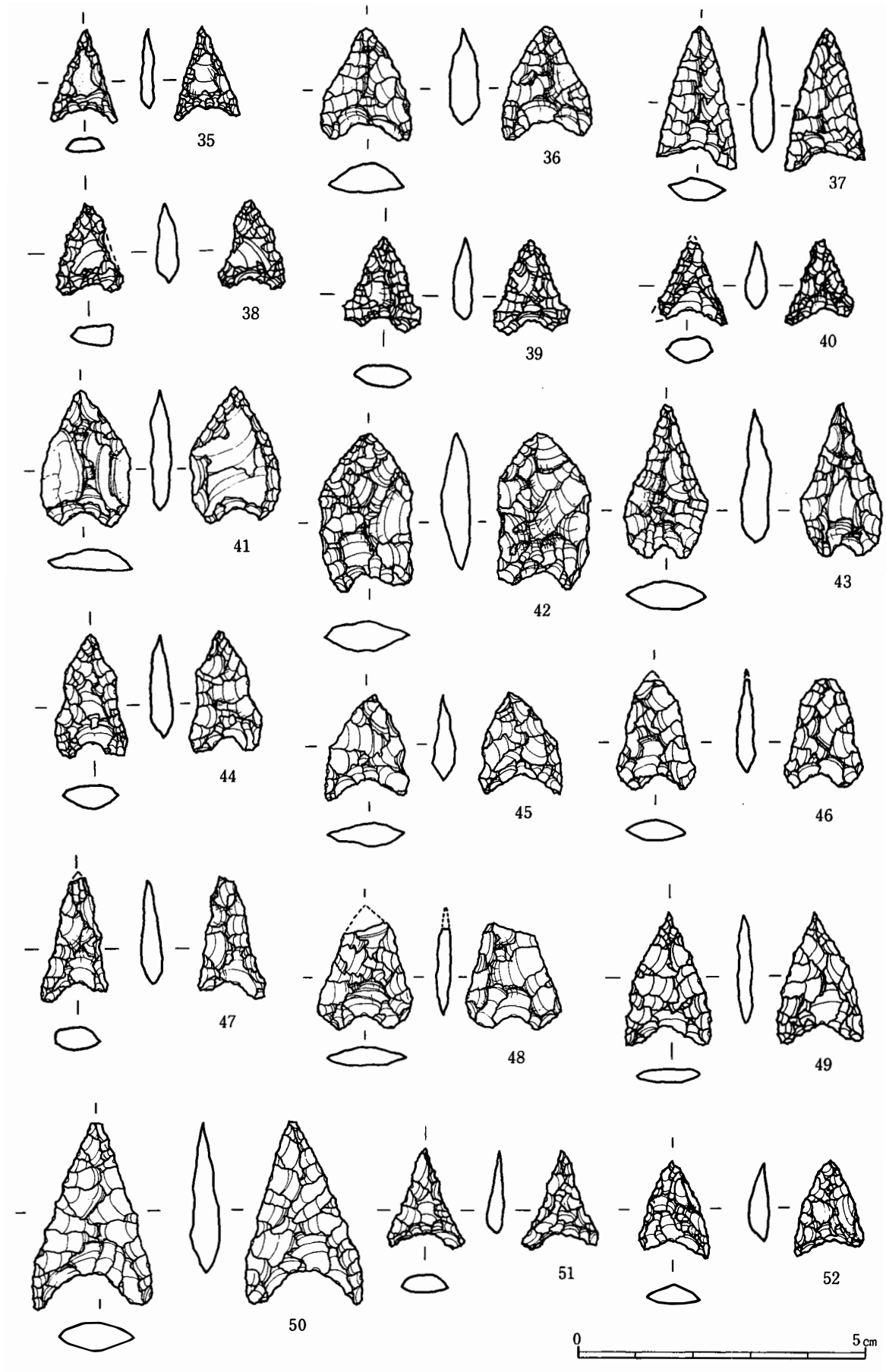
第101図　石鏃分布図（２）



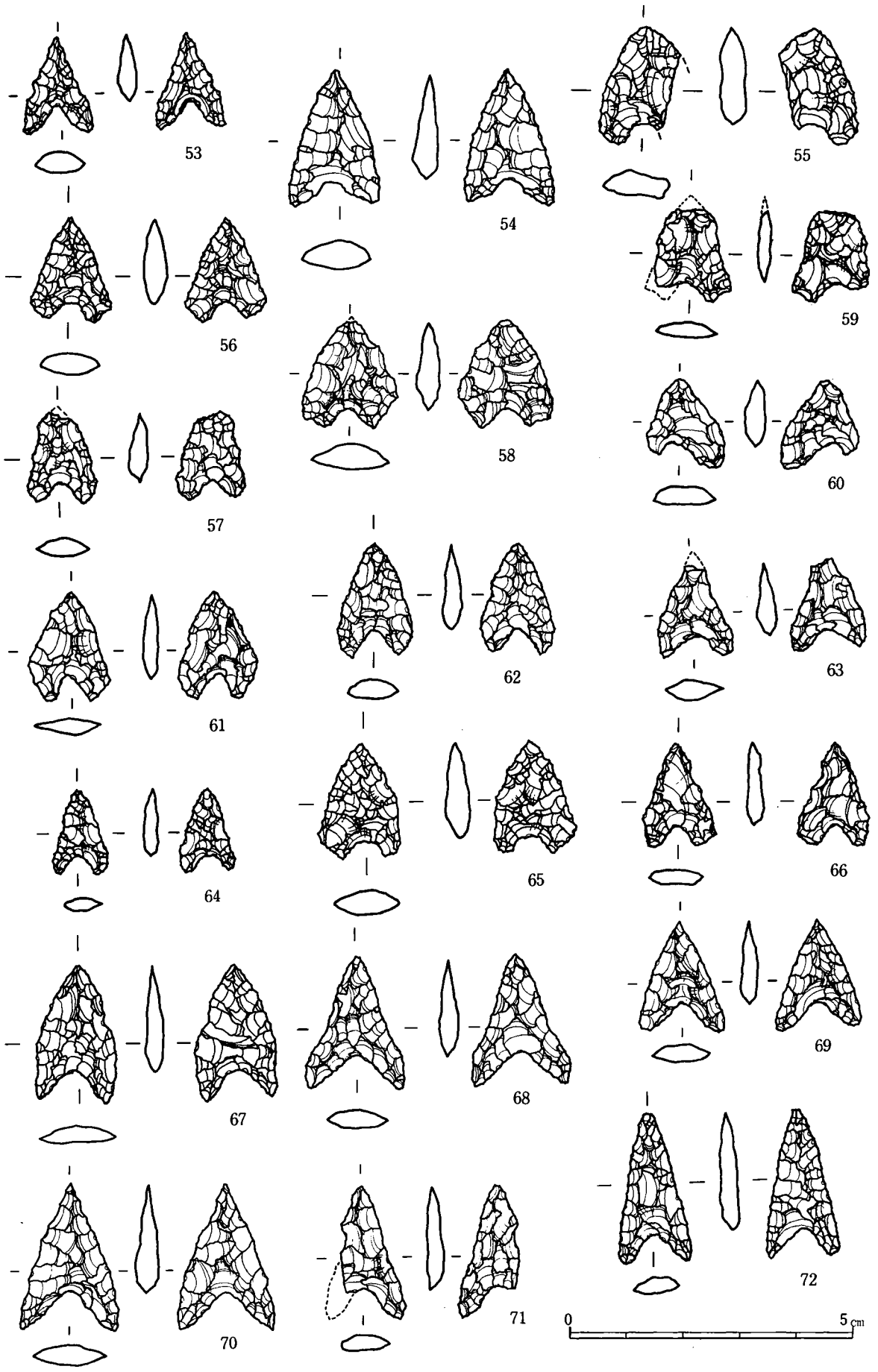
第102図　石鏃実測図



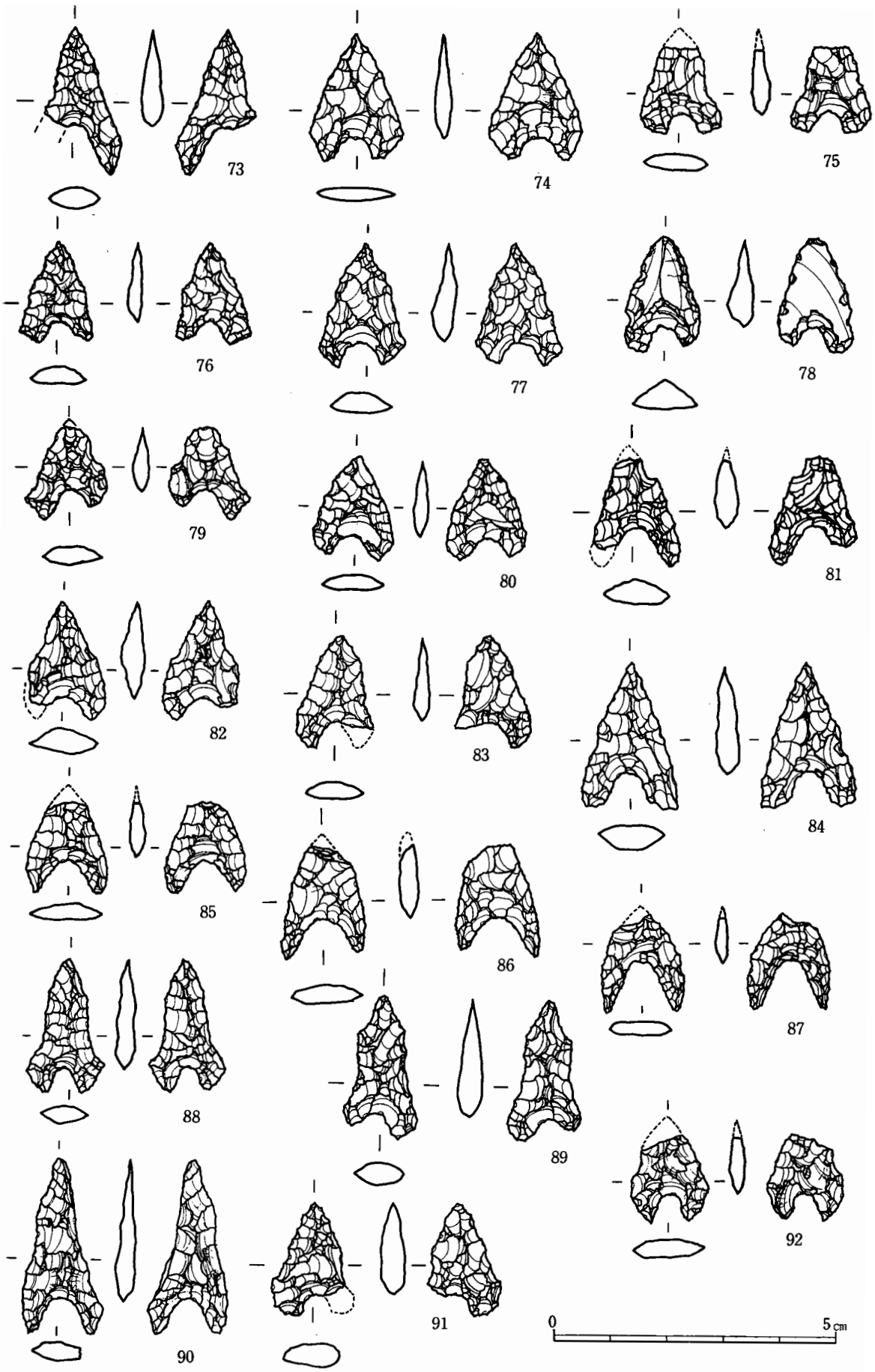
第103図　石鏃実測図



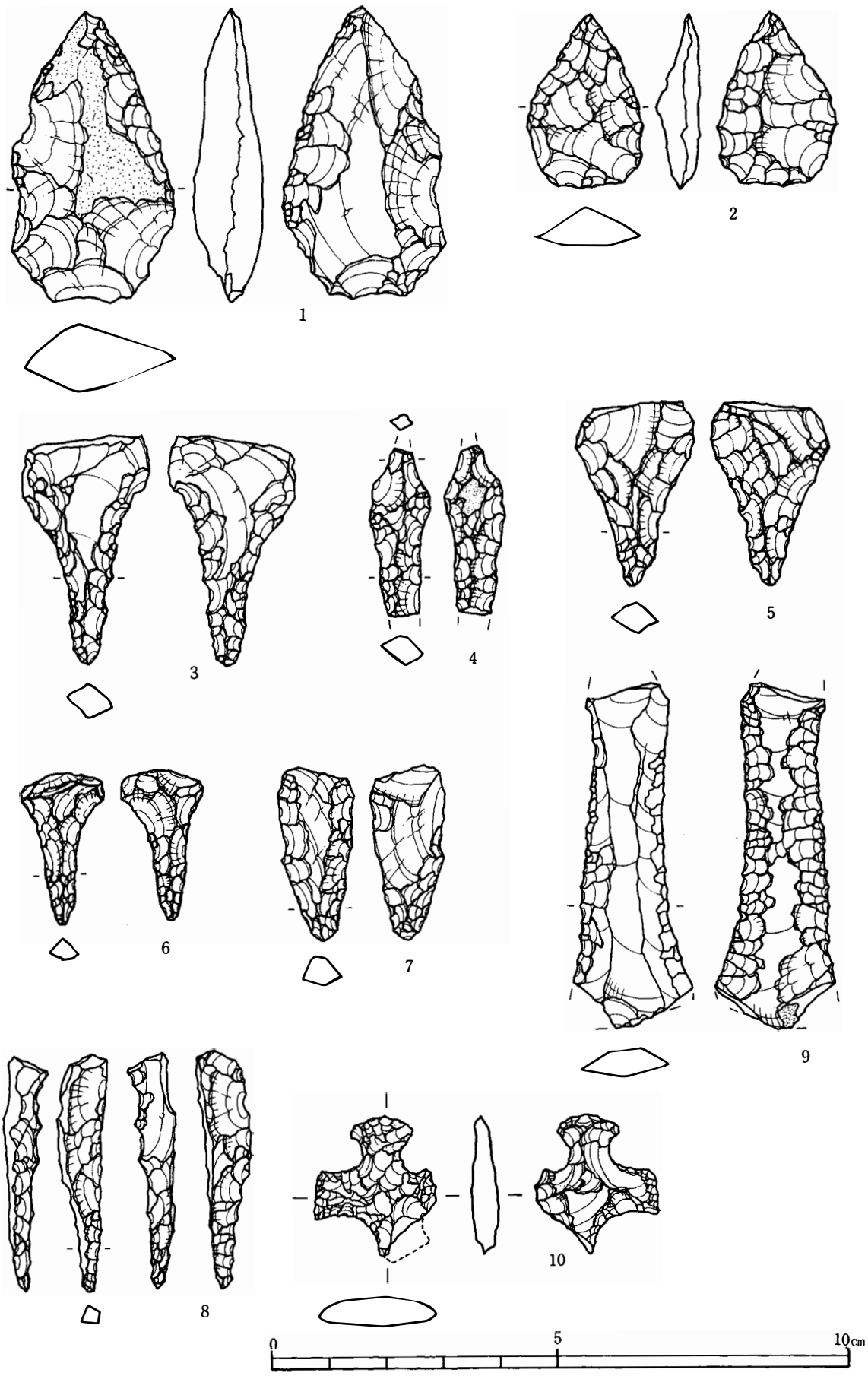
第104図　石鏃実測図



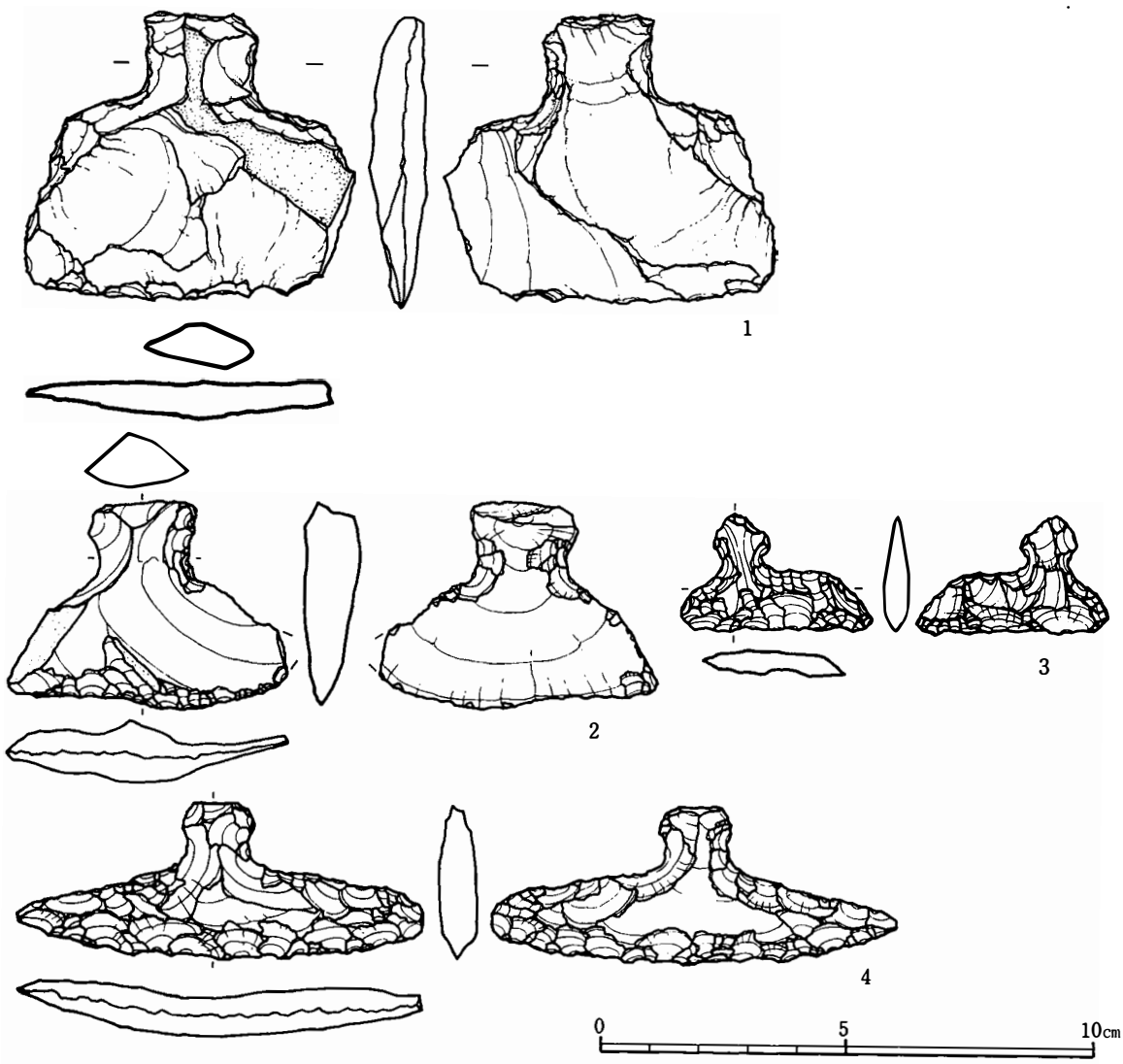
第105図　石鏃実測図



第106図　石鏃実測図



第107図　石錐等実測図



第108図　石匙実測図

後期の土器が多い箇所である

１・２は尖頭状石器である。また石錐（３～８）は６点が出土した。形状は３・５・６のように発達したつまみ部を持ったものと持たないものがある。削器としては９がある。10は小型で十字形を呈する。糸繰り形石器と呼ばれているものに類似する。

石匙（第108図）

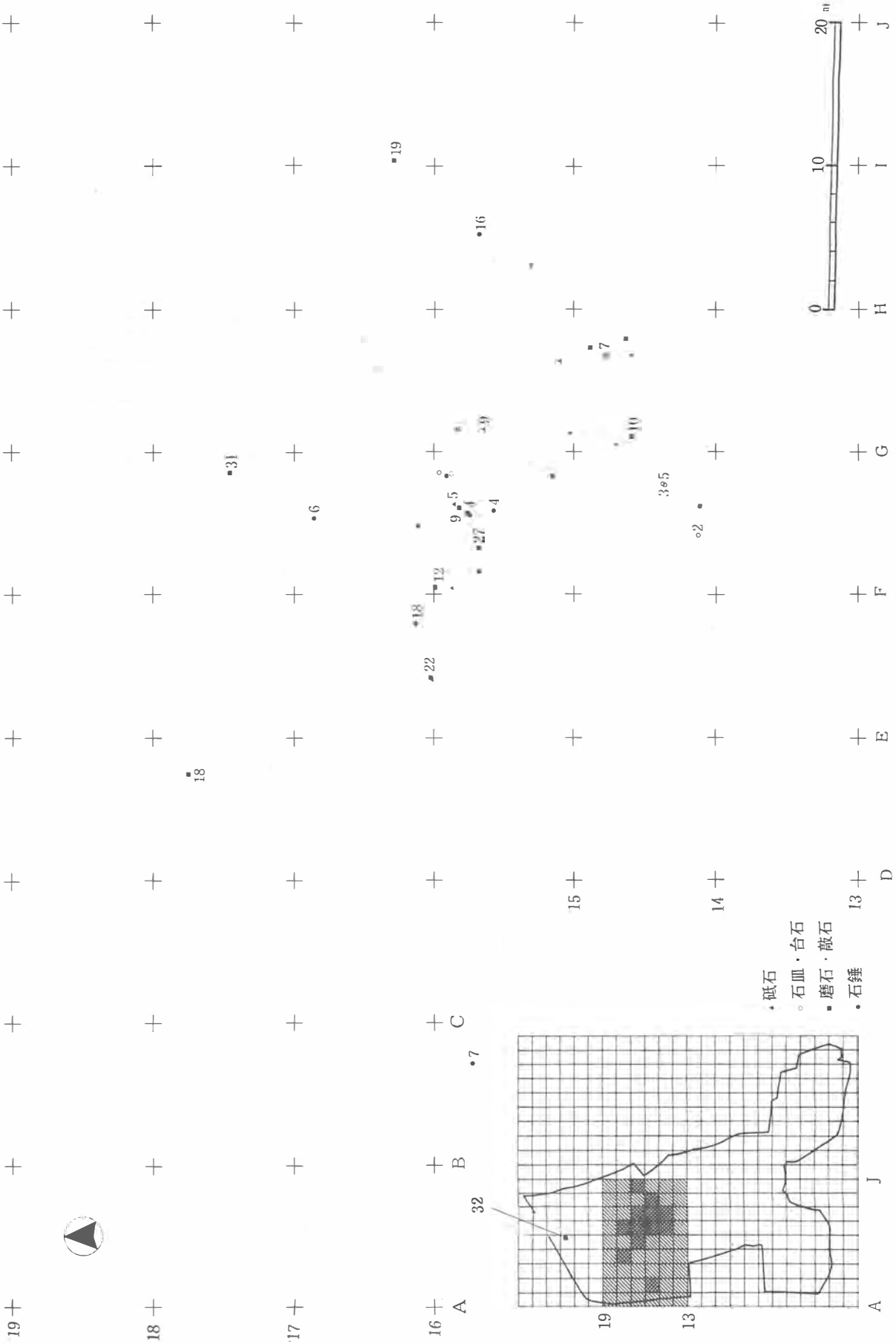
４点の出土であった。いずれも遺跡の北西よりで縄文晩期の土器が多く出土する箇所である。４点とも横型の石匙で、つまみ部をはっきり作り出している。

砥石（第111図）

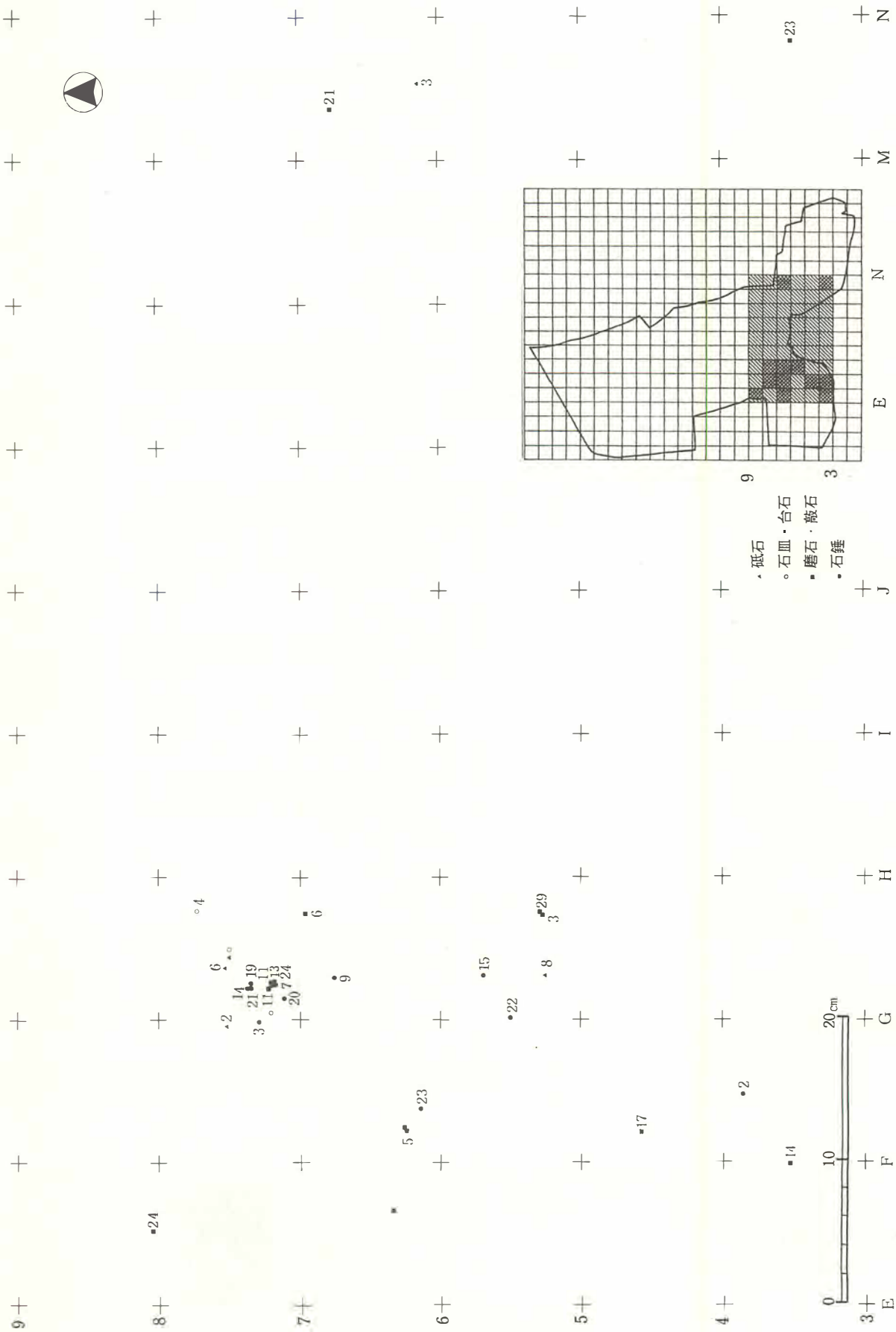
総数16点が出土し、その内の９点を図化した。分布は縄文時代の土器の集中する箇所からの出土が多いが、その時期については不明であり、弥生時代以降のものを含んでいると思われるが一括してこの貢で扱う。石材は６を除きいずれも砂岩である。幅が10cmを越える大型のもの（１・４・９）と、小型のものがある。１は幅１～２mmの条痕が数箇所認められ、火を受け一部赤変している。４・９は偏平で石皿との区別が明確でない。３は磨石・敲石との区分が明確ではないが、平面に赤色顔料が認められる。５・６は小型の長方形を呈するもので、５は穿穴しようとして途中でやめている。８は円形を呈し、両面に３条の深めの溝が見られる。全体的に火を受けたように赤く脆く、石材は砂岩でもかなり粗いものである。

石皿・台石（第112・113図１～５）

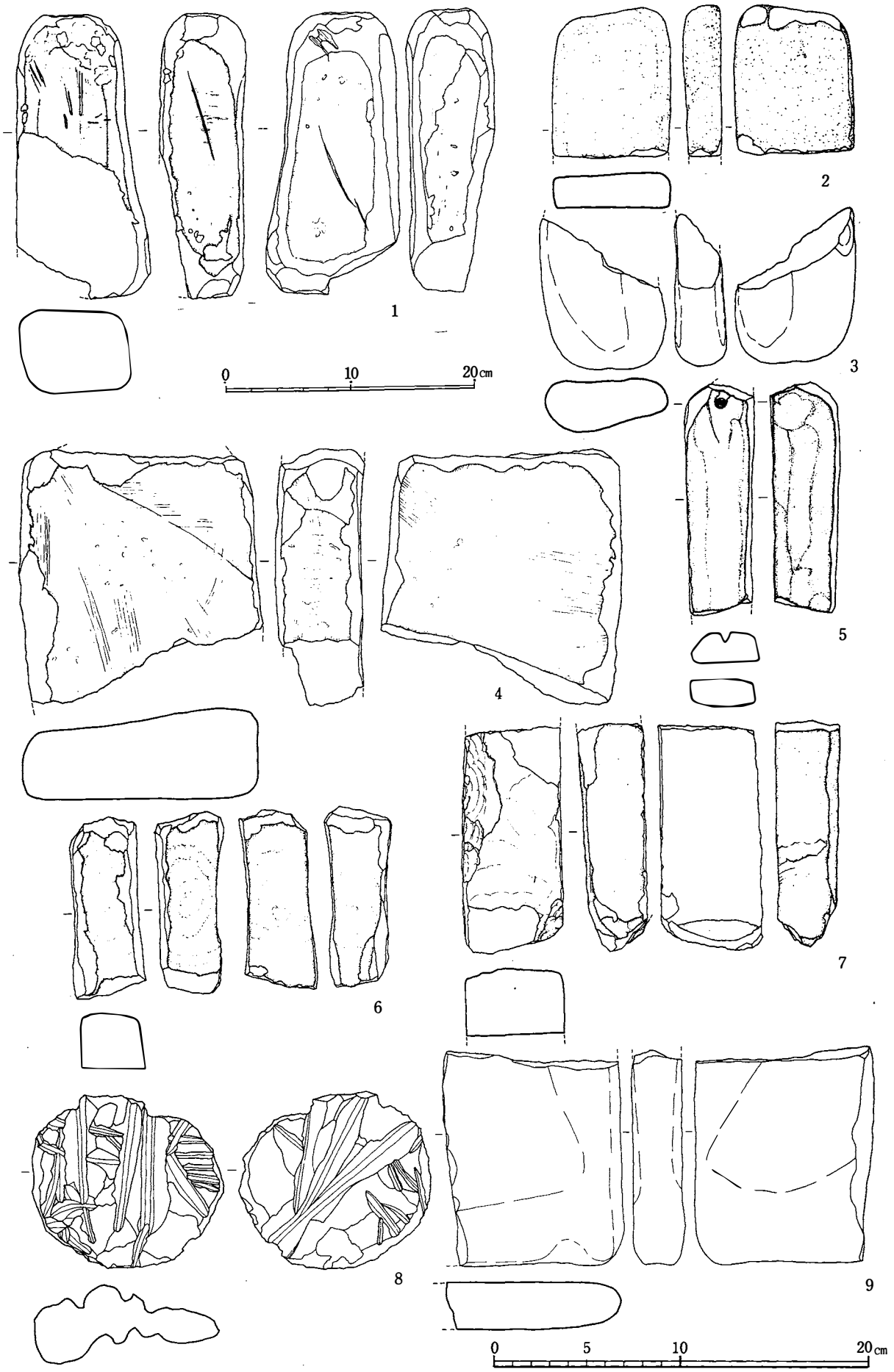
石皿・台石はそのほとんどが破片となっていた。その出土総数は少ないが、一つにはその確認が出来



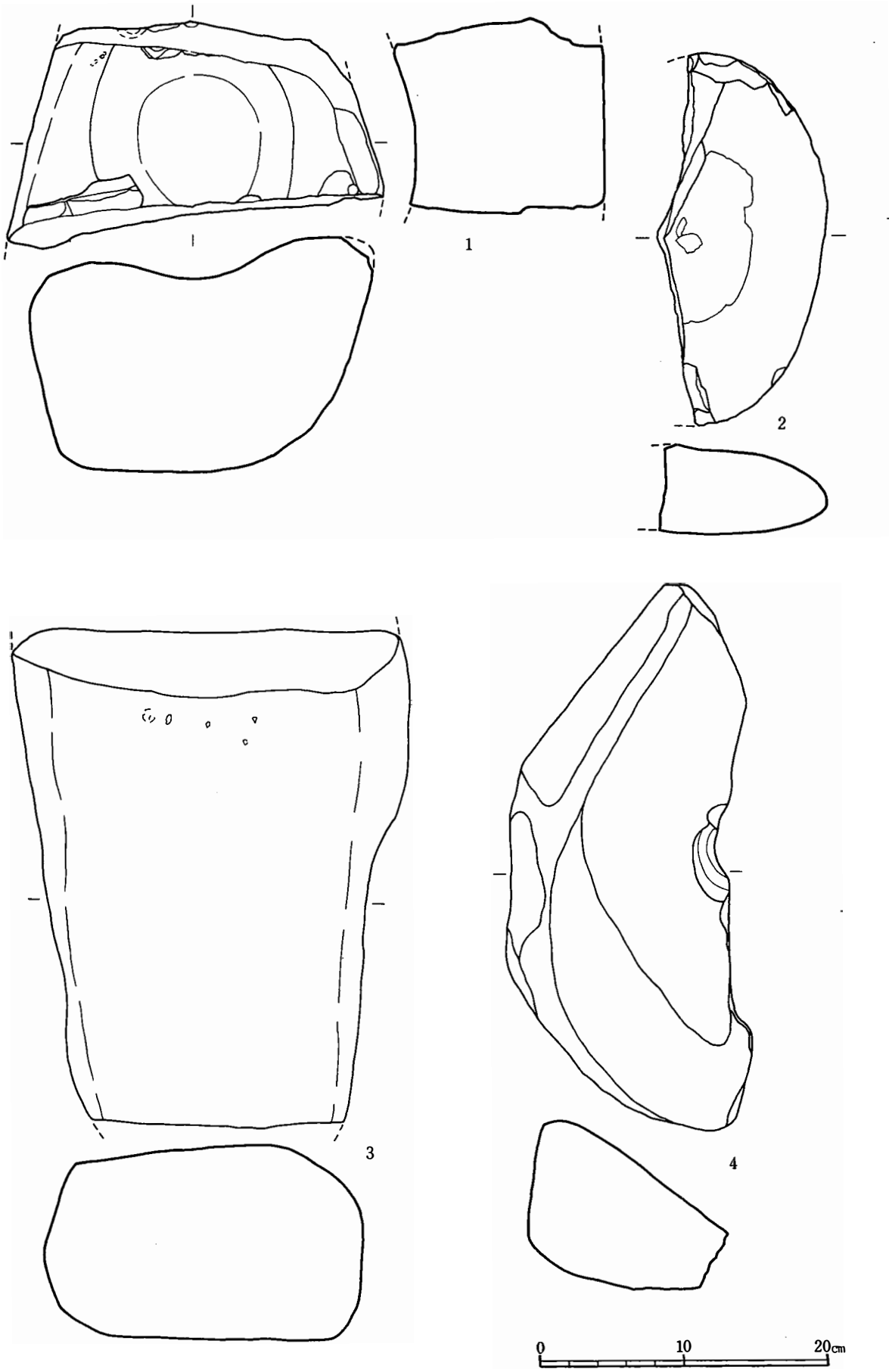
第109図　砥石・石皿・台石・磨石・敲石・石錘分布図
（1）



第110図　砥石・石皿・台石・磨石・敲石・石錘分布図
（２）



第111図　砥石実測図



第112図　石皿・台石実測図

ないような破片となっていることも考えられる。ここでは5点を図化した。G15杭を中心とした箇所に比較的多く見られた。石材は砂岩が多く認められ、かなり脆くなっており、その小破片が多く散在していた。くぼみが顕著なもの（1・4）とそうでないもの（2・3・5）がある。3・5は表面に磨痕のほかに敲打痕跡が残されている。

磨石・敲石（第114～119図1～33）

総数38点が出土した。その分布はやはり縄文時代後期・晩期にかけての土器の集中する箇所と重複する。しいていえば晩期の土器が集中する箇所の方が磨石・敲石の出土が集中し、他方はやや散在的である。

磨石・敲石はその形状から棒状のもの、円盤状のもの、球形のものに分けられる。

棒状の磨石・敲石（1・3・7・8・9・32）は端部に敲打痕跡ないし使用烈痕がある。

円盤状のものは敲打痕跡をもつもので、更にその中で側縁部のみに敲打痕跡をもつもの（2・4・6・12・16・18・20・21・22・23・28・30・31・33）、平面部にも認められるもの（5・10・11・13・15・25・27・29）、敲打痕跡の認められないもの（19）がある。その他風化や欠損のため不明なもの（17・26）がある。

球形のもの（14・24）は敲打痕跡が認められる。

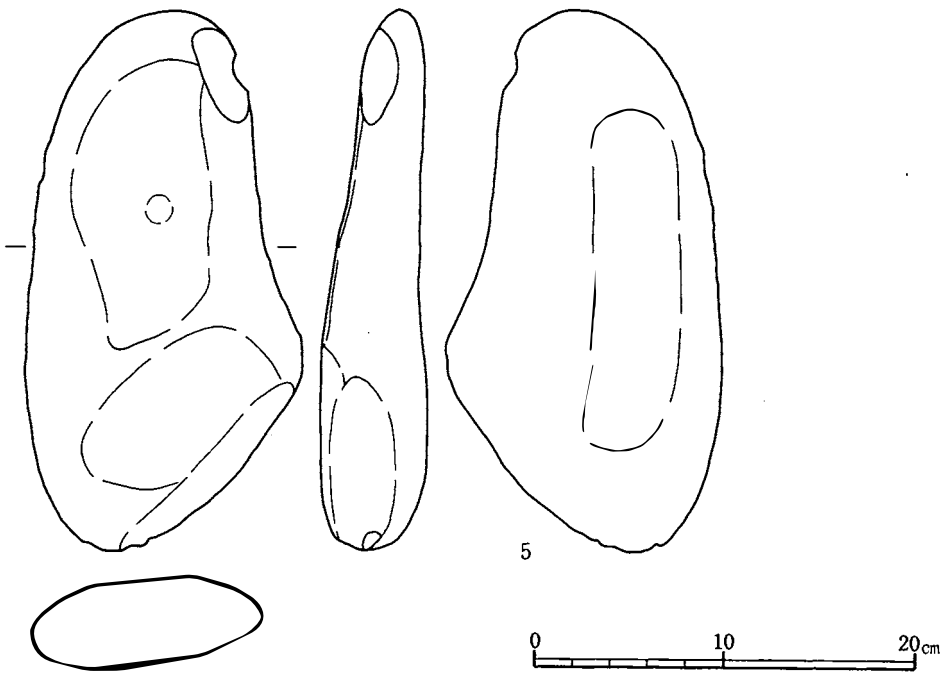
石錘(第120～123図1～24)

総数24点が出土した。その分布は縄文時代後期から晩期にかけての土器が集中する箇所からの出土が多く、特にH8グリッドにその集中をみる。すべて縄または網掛け用のくぼみを打ち欠いて作ったもので、「礫石錘」と呼ばれるものである。3・22は石斧として捉えたほうがいいのかも知れない。形状的には円形のものと楕円形のものがある。また重量は最小54gから最大330gまででばらつきがあるが、おおまかには100g以下のもの（1～6・8・9・15・18）と200gを越えるもの(13・14・17・19・20・23）がある。

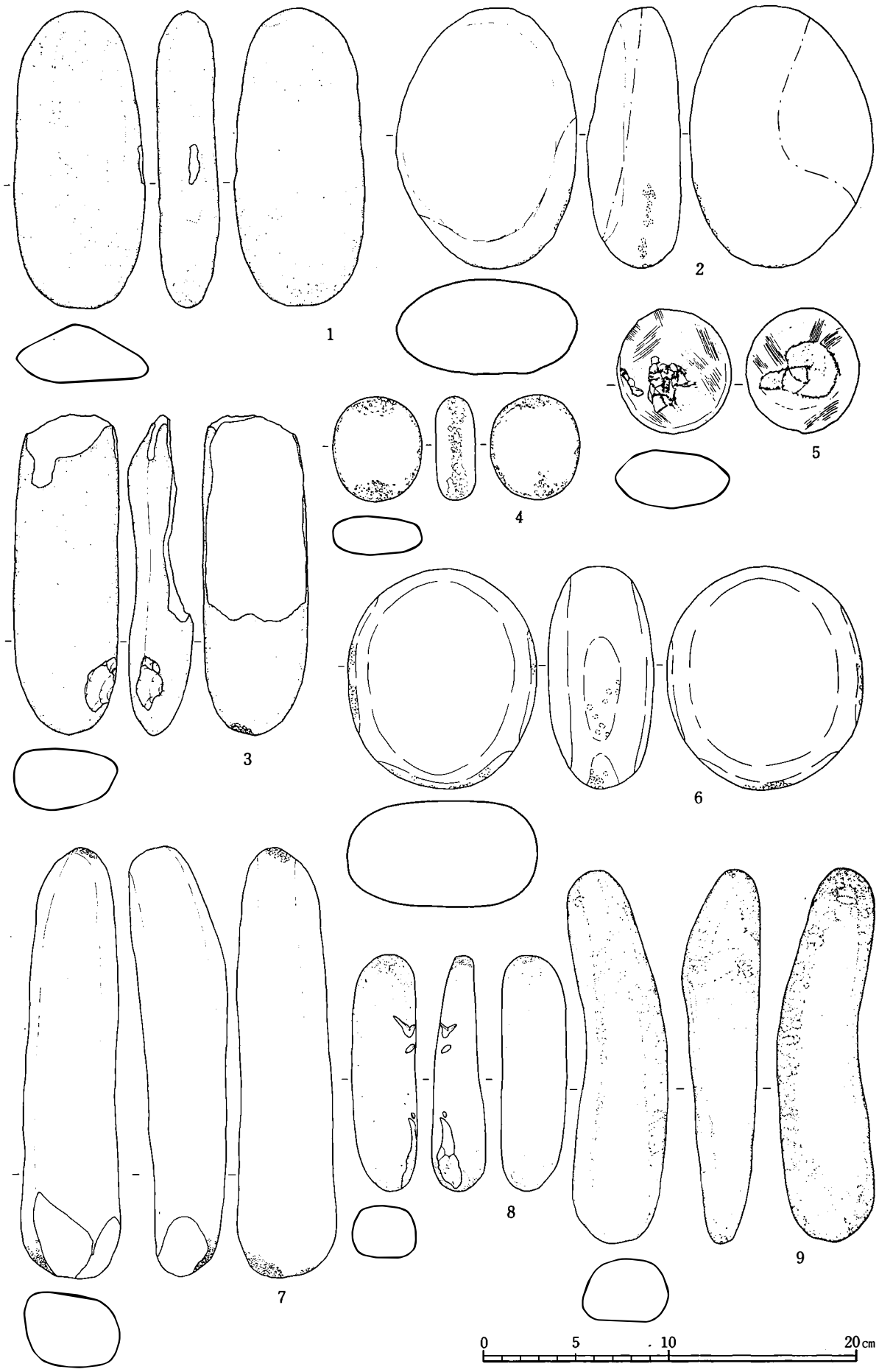
石製装飾具（第124図1～4）

1は玦状耳飾の破片で、全体の形状は不明であるが、円形で中央孔は6㎜程と推測される。上辺に補修孔が穿たれている。また中央孔上部の割れ口は研磨されており、ペンダント等に再利用されたものであろう。

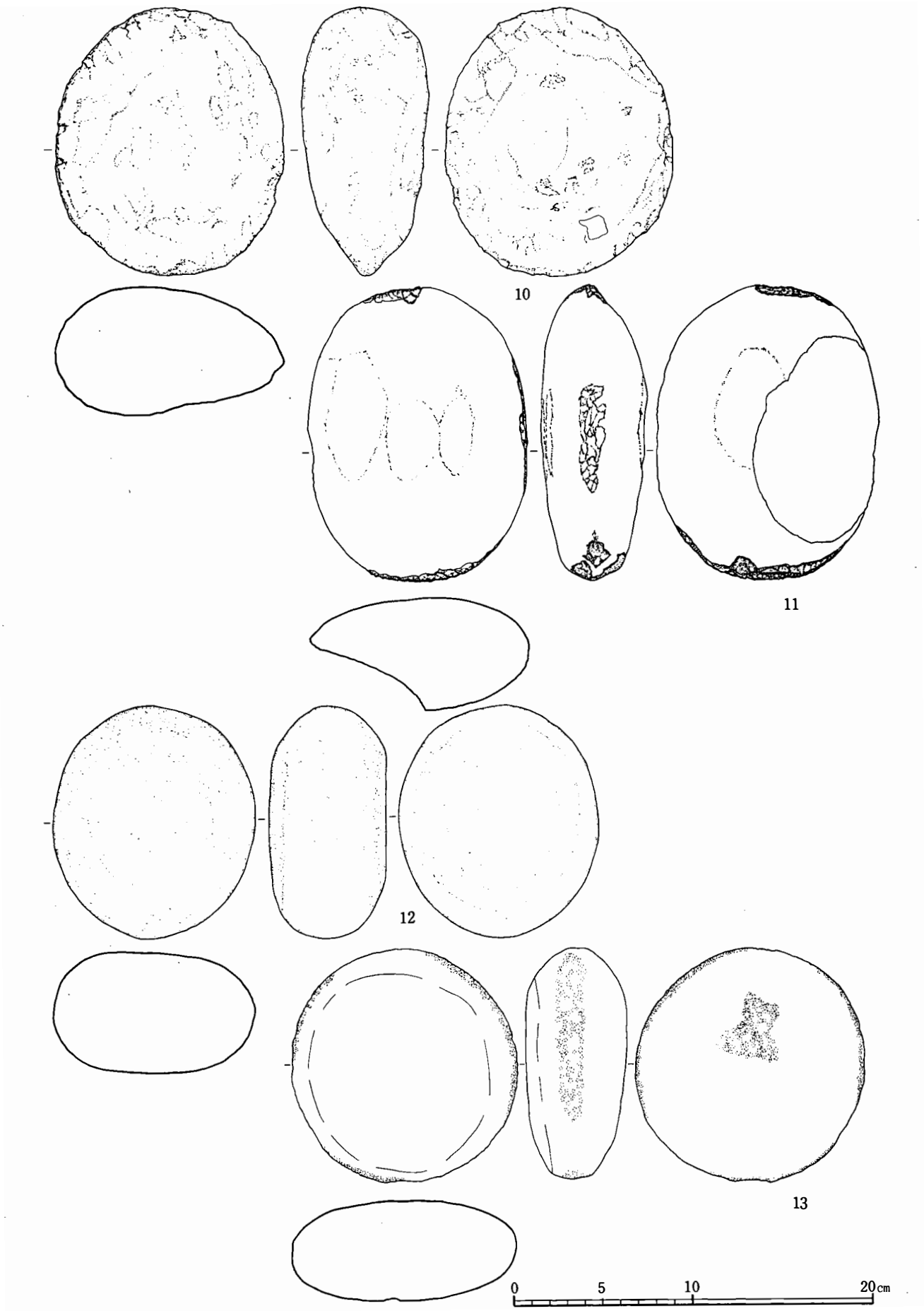
2・3は勾玉である。2は破損品で断面形は円形を呈す。3は表面採集資料であり、調査終了後整地された畑より耕作中に出土したもので厳密には客土



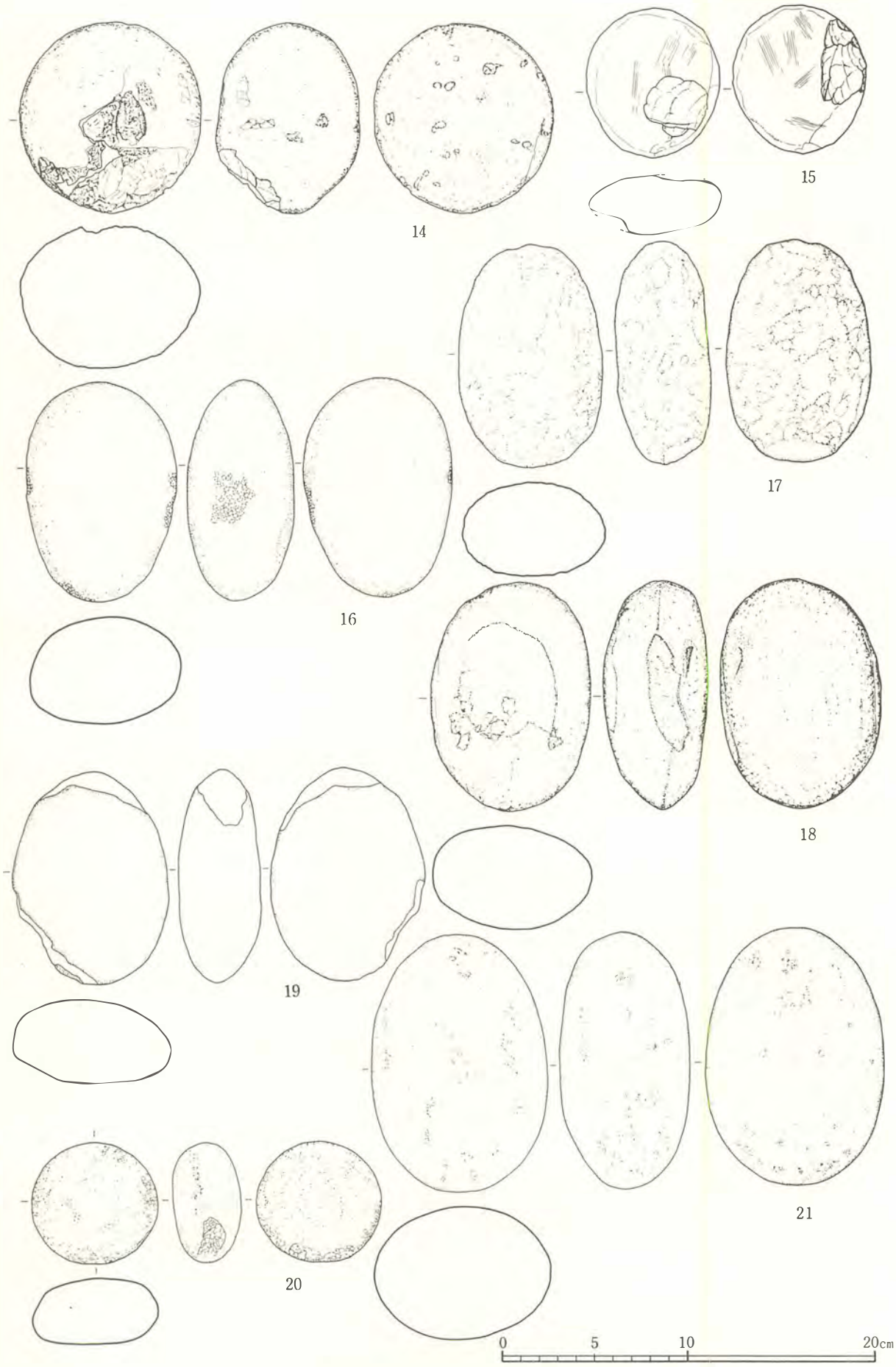
第113図　石皿・台石実測図



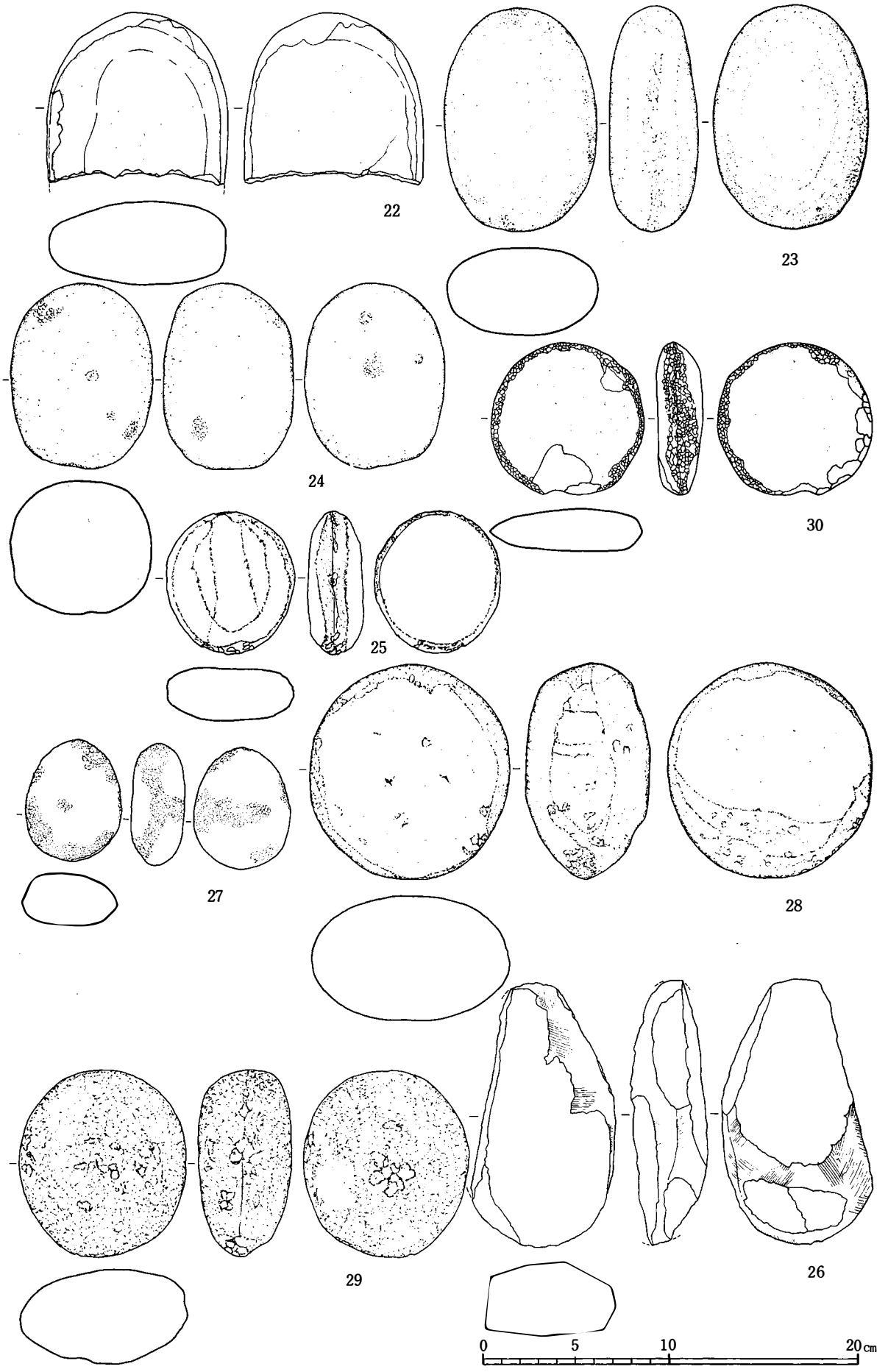
第114図　磨石・敲石実測図



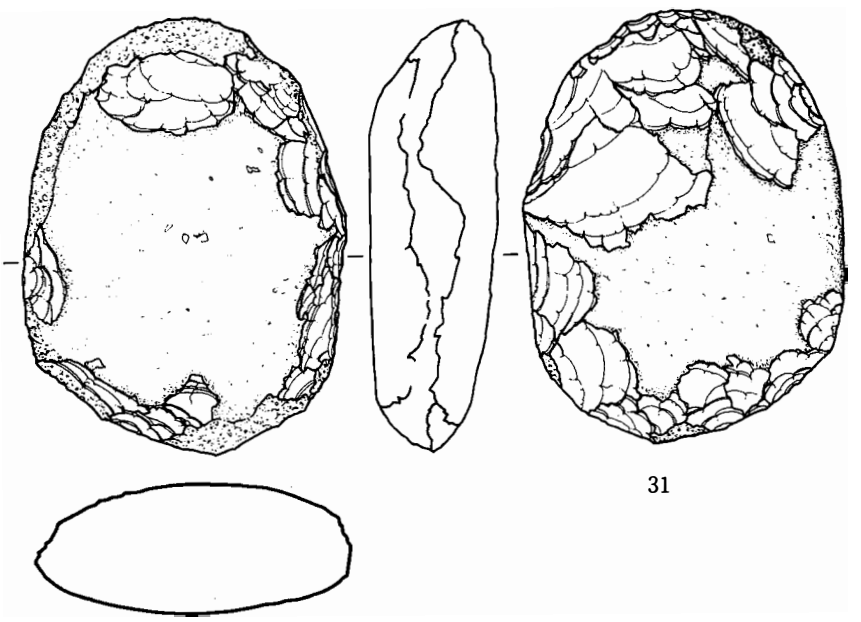
第115図　磨石・敲石実測図

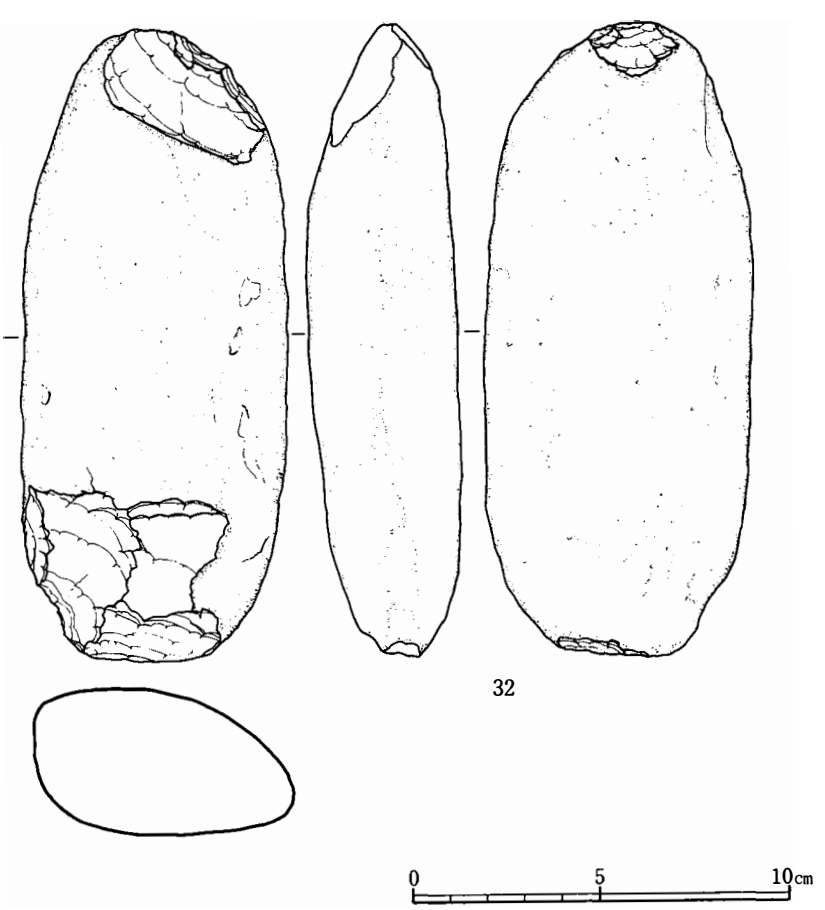


第116図　磨石・敲石実測図



第117図　磨石・敲石実測図





第118図　磨石・敲石実測図

の可能性もあり沖松遺跡より出土したものかどうかは不明であるが、可能性としては高い。全体的に平べったい形をしている。４は硬玉製の小玉である。

不明石製品（第125図１・２）

１は形状的には玦状耳飾に類似するが、大型で重量は34ｇを量る。２は中央に径1.2㎜程度の孔をあけたものである。偏平で重さは16ｇを量る。

その他石剣・石刃と思われるものがG15グリッド内より出土している（第126図）。内反りのものと考えられる。

４．まとめ

沖松遺跡において、縄文時代のなかでその主体的な位置を占めるものは縄文時代後期後半から晩期前半である。ここでは、これまでに報告してきたものを簡単にまとめなおしておきたい。

縄文早期

出土遺物はすべて層位的に捕らえられたものではない。また調査区内に数十箇所のトレンチをいれたが第Ⅳ層からの出土はなかった。また玦状耳飾りや不明石製品は縄文早期に属する可能性が高い。これらの出土箇所は調査区の北（Ｂ区）もしくは南西部（Ｇ区）でいづれも削平を受けている箇所である。また集石遺構の存在を併せて考えると、縄文時代早期の中心は、現在は道路により遮断されているが遺跡の北西側の丘陵にあるものと考えられる。

縄文時代前期・中期

この時期にかけての資料は存在しない。これは人吉・球磨地方の全体的な傾向である。

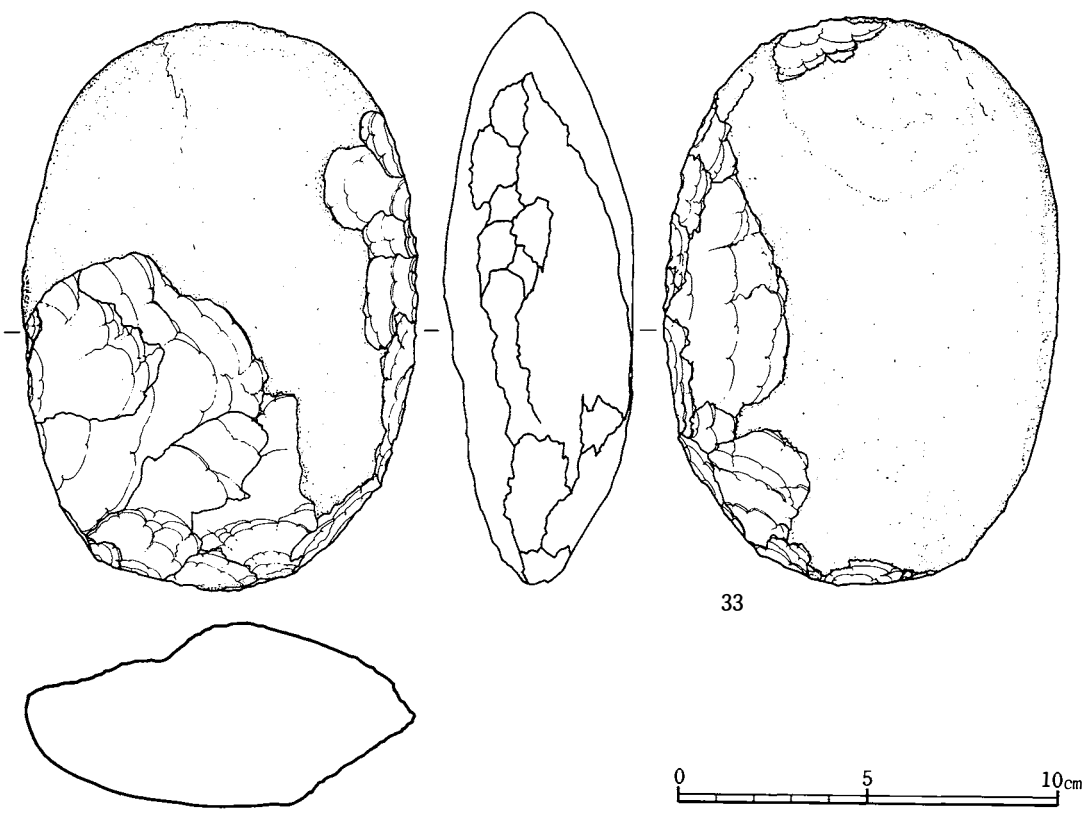
縄文時代後期前半

わずかではあるが、資料が検出されるようになる。阿高系様式の口縁部片（９・11）や底部の資料が認められる。また市来式土器（19・20・23・24）などの南九州の影響の強い土器が見られる。またわずかに磨消縄文系土器（26・27）も認められる。全体的には南九州の影響が強いと考えられる。

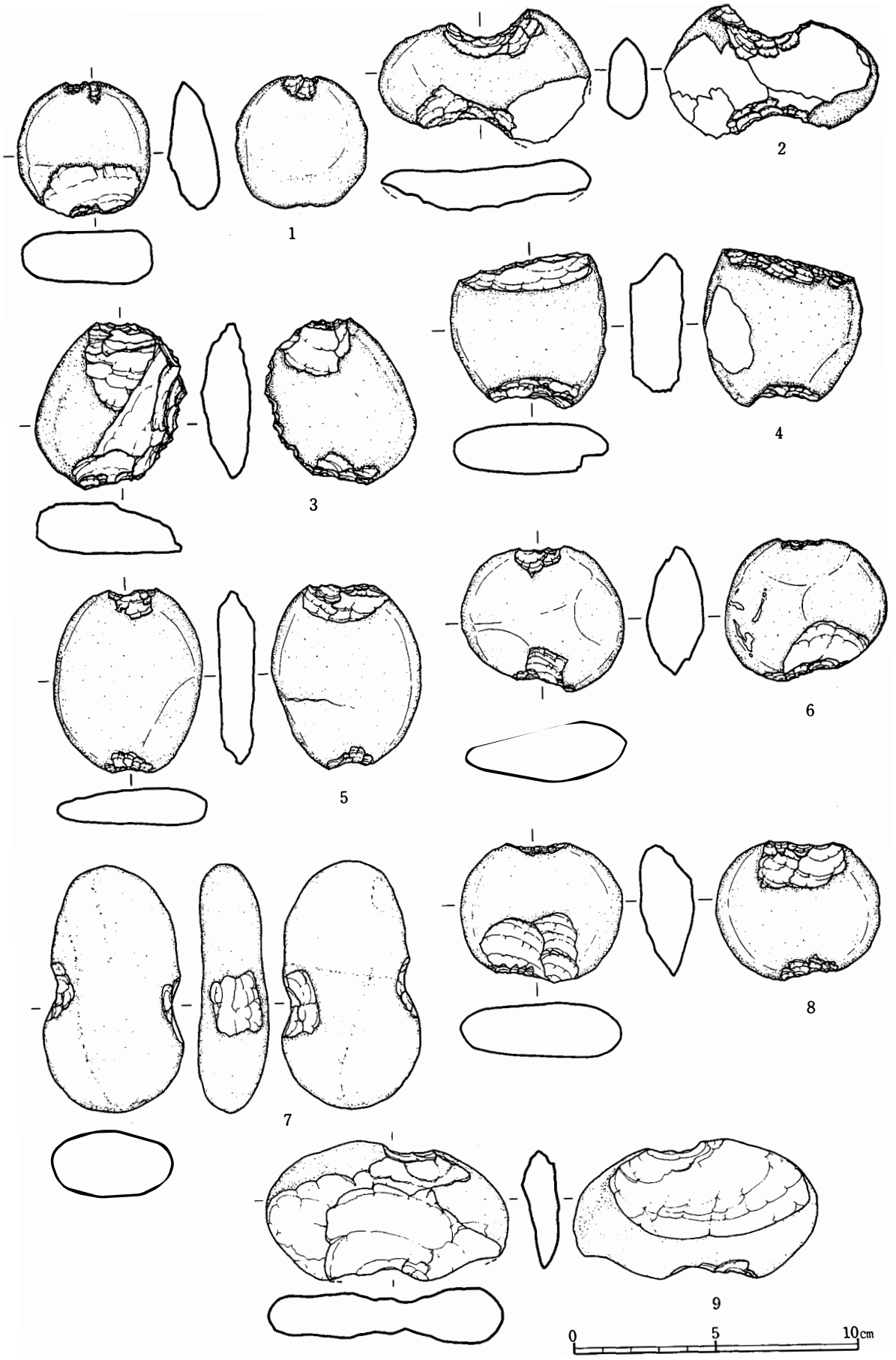
縄文時代後期後半から晩期前半

浅鉢形土器は大きく６類に分類される。

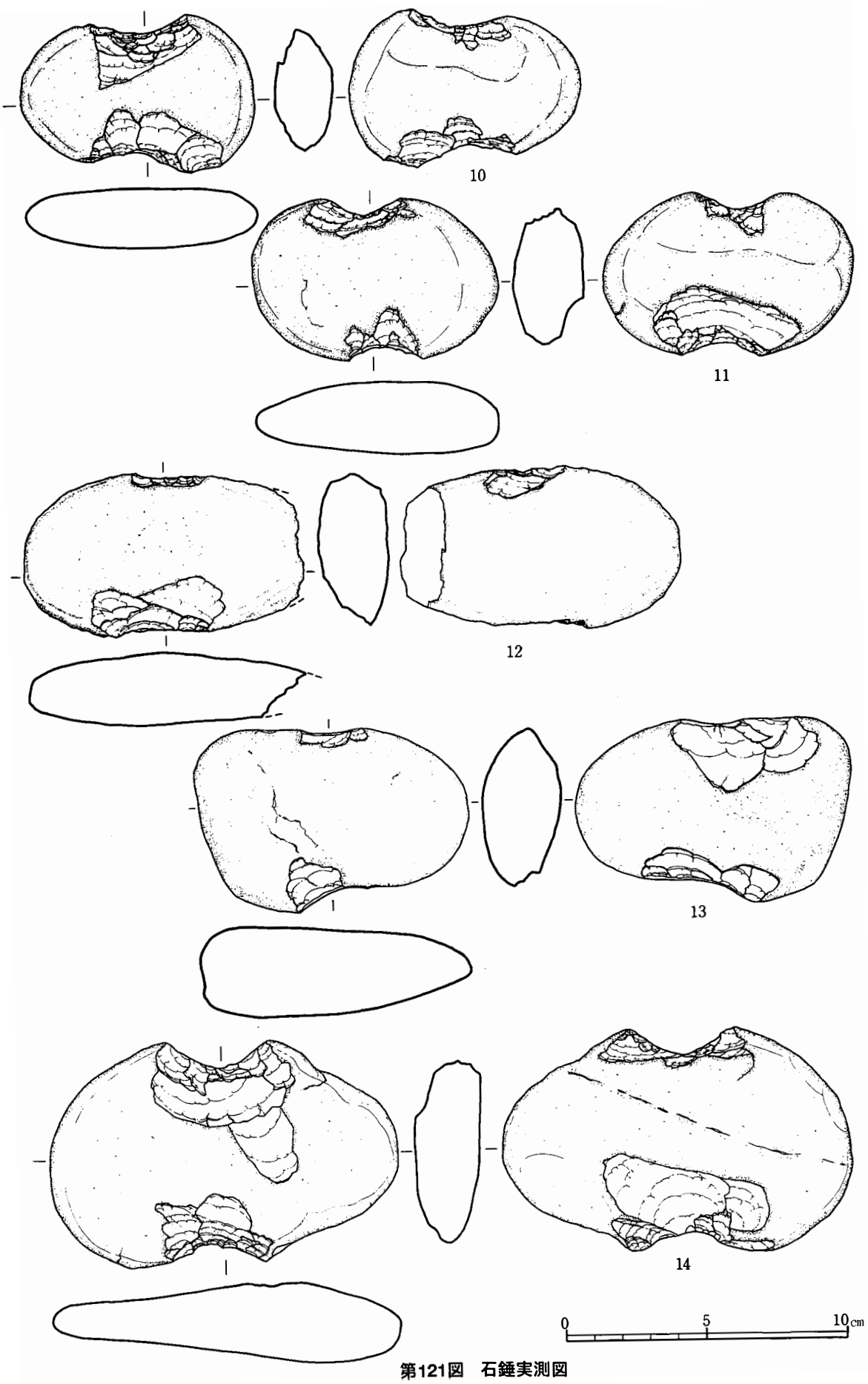
Ⅰ類は口縁帯に凹線を施すもので、体部から口縁部が屈折して立ち上がるもの（ａ）と体部のうえに



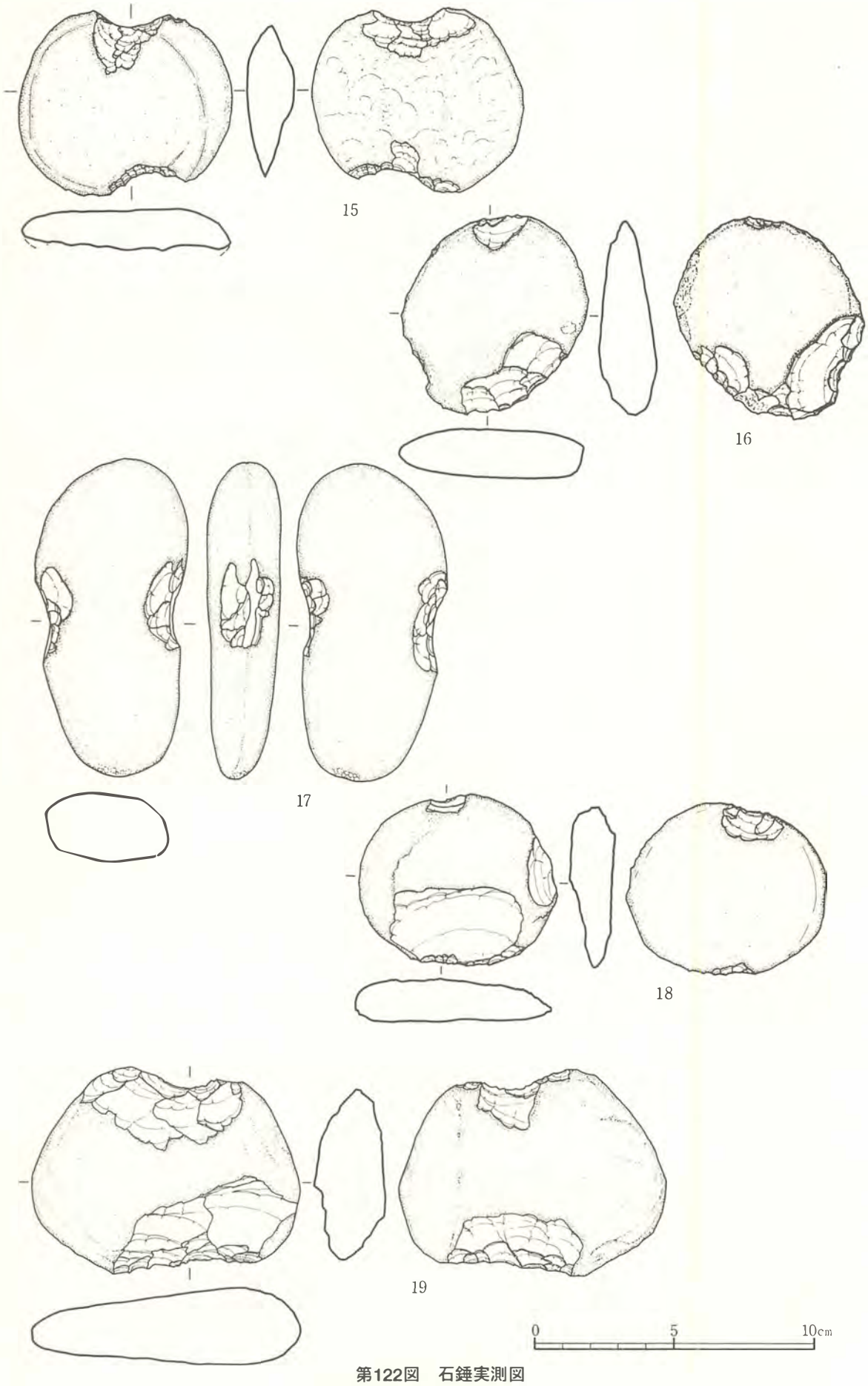
第119図　磨石・敲石実測図



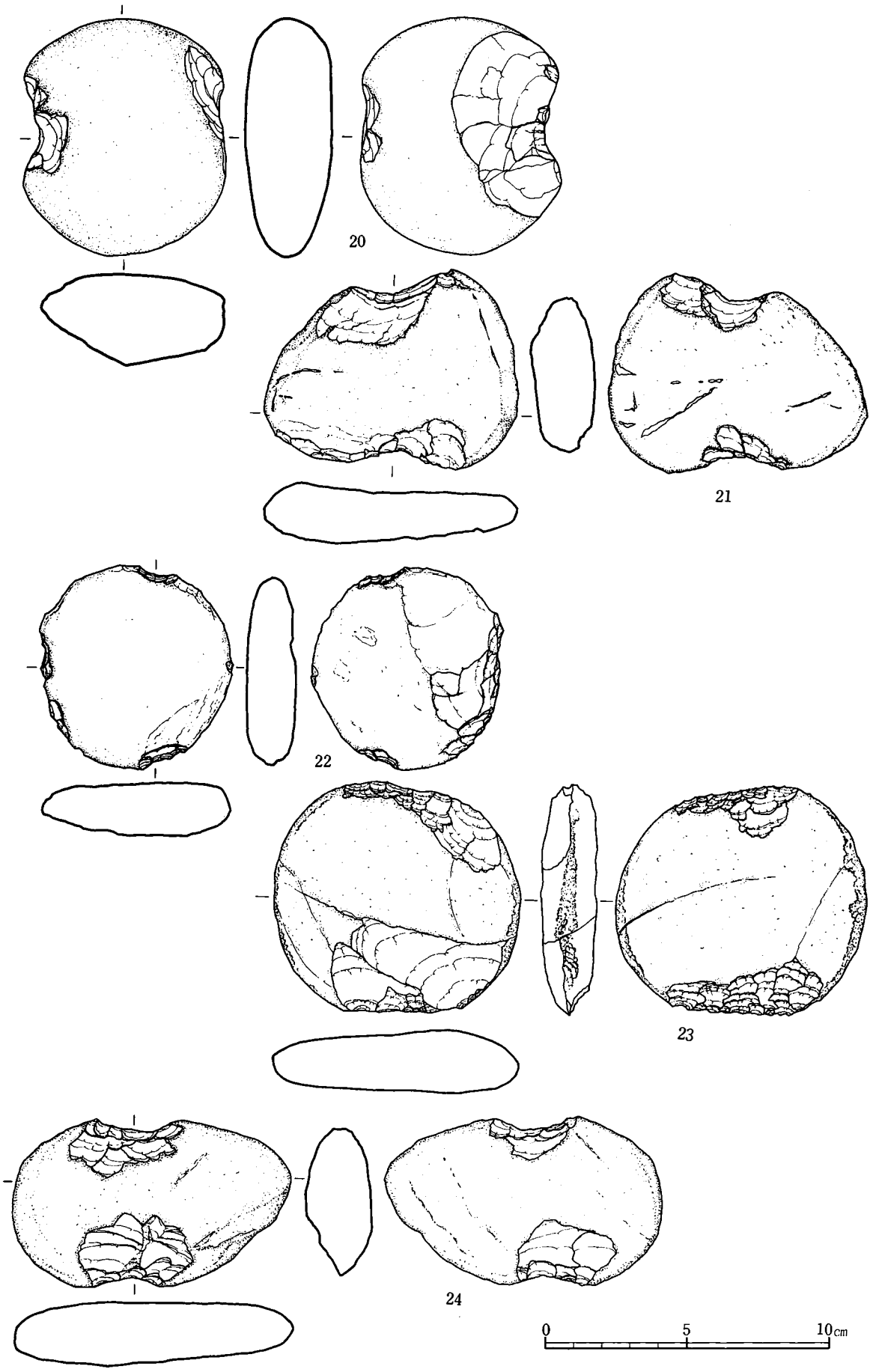
第120図　石錘実測図



第121図　石錘実測図



第122図　石錘実測図

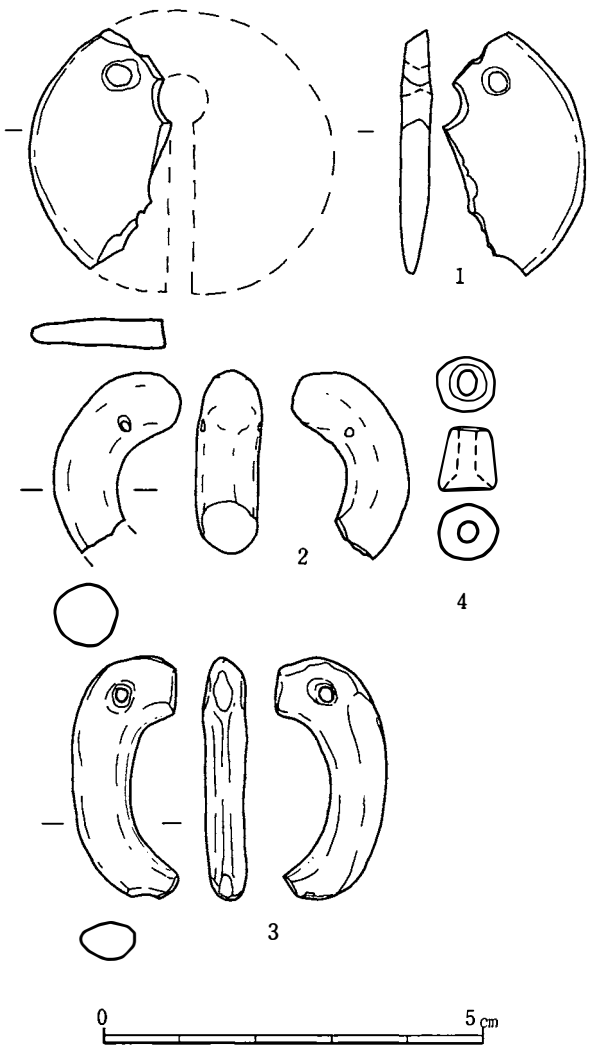


第123図　石錘実測図

湾曲する頸部があり、その頸部から口縁部が立ち上がるもの（ｂ）の２つに細分した。

Ⅱ類は口縁帯にやや太めの沈線を施すもので同じく２種に分類した。

Ⅲ類土器は上記Ⅱ類のｂと同じ器形のもので口縁帯の幅が狭くなり沈線を施すものをａ類、口縁部が形骸化し口縁内面が段状になったものをｂ類とした。ｃ類は口縁部がｂ類と同じかもしくはより形骸化したもので無文のものである。ｄ・ｅ類は内・外面の沈線により口縁部と頸部を区分しているものである。このⅢ類は頸部の変化が大きく、頸部が伸びるものはａ類の時点で既に認められる。また頸部が著しく短くなり頸部と体部の区分が不明瞭になるものがｃ類で認められる。



第124図　石製装身具実測図

Ⅳ類としたものは81を除き頸部が外に伸びるもので、頸部がそのまま口縁部となるもので、３種に分類した。

Ⅴ類は丸みを帯び器高の深い体部に短い口縁部が付くものである。体部と頸部、頸部と口縁部の区分が不明瞭である。２種に分類した。

その他Ⅵ類として椀等を一括した。

一方深鉢形土器は、胴部のうえに湾曲する頸部が付き、口縁部が湾曲して立ち上がるものをＡ類として、口縁帯に凹線の施文をするものをⅠ類、太い沈線の施文のものをⅡ類、沈線のものをⅢ類とした。

Ⅰ類は頸部の湾曲がしっかりしていて、その屈曲点が胴部近くにある。また胴部と頸部の境は膨らみを持つ。底部については資料がなく不明であるが上底を呈すものと推察される。

Ⅱ類も頸部の湾曲はしっかりしていて、その屈曲点は頸部中央付近にある。また胴部と頸部の境は僅かに膨らみをもつものと、段もしくは沈線を持つものがある。やはり底部については資料がなく不明であるが上底を呈すものと推察される。

Ⅲ類は頸部の湾曲が弱くなり、その屈曲点は口縁直下にあるものが多い。また胴部と頸部の境は僅かに膨らみを持つものも存在するが、明瞭な段や膨らみを持たず、稜線となっているものが多い。また胴部と頸部の境の稜線が弱くなり、胴部・頸部の境がやや不明瞭になるものも存在する。底部は僅かな上底・平底となる。

全体的器形を伺い知ることのできる資料が少ないため頸部と口縁部の形態に着目すれば、かなり主観的ではあるがａ～ｆまでの６種に細分できる。それは頸部と口縁部がはっきり区分できるものから不明瞭になっていく流れである。一方口縁帯の沈線も３条～７条のものまで、規則的なものから不規則なものまで様々である。そこでは沈線の少ないものの施文が規則的でしかも口縁部の立ち上がりははっきりしているという図式は完全には成立しない。ただそういった傾向はある程度は認められる。その他口縁帯の幅が著しく狭くなり頸部が形骸化したもの（ⅢＡｇ）や頸部から口縁部が外に大きく開くもの（ⅢＡｈ）などがある。

また頸部がそのまま口縁部となるもので無文のものをⅣB類とした。これらは胴部と頸部の境に段や沈線を有するものをa、膨らみをもつものをb、丸みを帯びるものをcとした。

V類は摺鉢形のもの、Ⅵ類は無文の外反する口縁をもつもの、Ⅶ類は口縁部を欠損するものでⅣB類のa～cの細分に、更に胴部と頸部の境に稜線をもつものをdとした。その他ⅧA類は口縁帯を有するが無文のものである。

その他底部は大きくは上底のもの、平底のもの、円盤貼付状のものに分類した。

それでは、深鉢形の埋設土器やある程度器形のわかる深鉢形土器について個々の特色を上記分類にあてはめると第2表の通りとなる。便宜的にⅢ類を古相のものをA、新相のものをDとする。またその中間的なものをB・Cとしておく。

埋設土器の中で不明なもの及びG区出土の19～22号やⅠ・Ⅱ類土器として分類したものを除くと、頸部の湾曲が弱く、その屈曲点が口縁直下にある。また頸部と胴部の境は稜線を持つもの、稜線が弱いものが存在する。底部は平底のものが多く、中には円盤状に近い底部のものも存在する。そのなかで第2表の1つの項目だけで土器の前後関係を決定できるような明確な基準は認められない。恐らく2表の項目すべてを比較検討して決めるべきものであろう。しかし頸部と胴部の境の稜線が弱いものや底部が円

第2表　縄文土器分類項目表

土器番号	施文		口縁部 a	口縁部 b	口縁部 d	口縁部 e	口縁部 c	口縁部 f	頸部				頸部・胴部境 c	頸部・胴部境 b	頸部・胴部境 a	頸部・胴部境 d	頸部・胴部境 e	胴張有無	底部				最大径	備考	
埋設 1																		○							
〃 2																		△		○					ⅢC？
〃 3											○					○		×							ⅢA
〃 4																		○			○				ⅢC？
〃 5											○					○		△	○						ⅢB？
〃 6	3○	↑			○						○					○		△					胴		ⅢA
〃 7	○	↑			○						○					○		×		○			胴		ⅢA
〃 8											○						○	×		○			口		ⅢC？
〃 9	4○	↑			○						○					○		○	○				(胴)	浅Ⅲa～b	ⅢA～B
〃 10	5×	↗					○				○						○	×		○			口	浅Ⅲa？	ⅢB
〃 11	4○	↑		○							○					○		△					胴	浅Ⅲb	ⅢA
〃 12																		△		○					
〃 13	4×	↑				○						○					○	○		○			胴		ⅢC
〃 14	4×	↗					○					○					○	△			○		胴		ⅢD
〃 15																	○	△				○			ⅢD
〃 16	5○	↖				○					○						○	×					(胴)		ⅢC
〃 17																	○	○							ⅢC
〃 18	4△	↑				○					○						○	○			○		(胴)	浅Ⅲe	ⅢC
〃 21									○					○				△		○			(口)	B類	Ⅰ～Ⅱ
106	○	↖	○						○					○											Ⅰ
108	1○	↖	○							○					○										Ⅱ
109	1○	↑				○				○				○											Ⅱ
110	5○	↖		○							○														Ⅱ～Ⅲ
129	5×	↑				○					○						○								ⅢB
138	5○	↑			○						○							△		○					ⅢB
141	3×	↖			○						○					○									ⅢA

・口縁部a～f、頸部・胴部境a～eは分類基準の文章を参照のこと。

・頸部◀は、屈曲点　　（　）は最大径が口縁、胴部と同じ径のもの

盤状に近いものは全体的に新しい様相を示すようである。

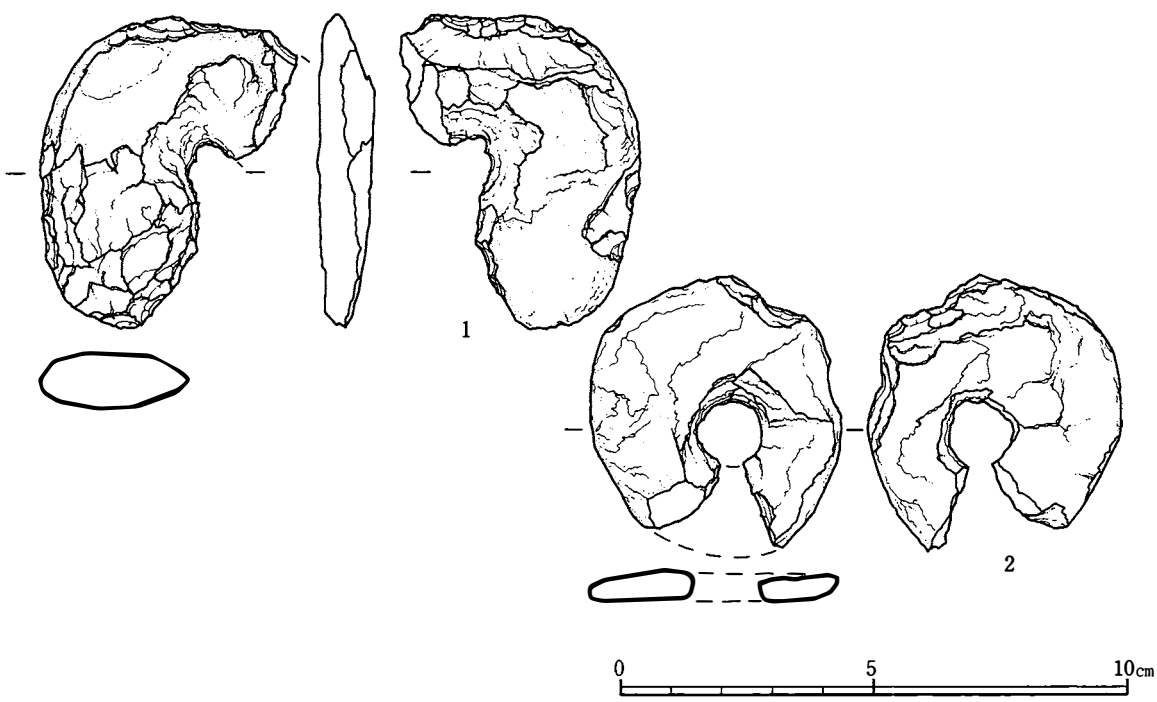
一方その分布で顕著なものは、浅鉢形土器Ⅰ・Ⅱ類や深鉢形土器ⅠＡ・ⅡＡ類、またⅣＢ類、Ⅶ類のａ～ｃはほとんどが調査区南側Ｇ区からの出土であるということである。特にⅣ類はすべてＧ区からの出土である。もちろん量的に少ないことにもよるのであろうが、図化していないものについても同様の傾向が顕著であった。

次に埋設土器についてであるが、その分布の中心は調査区北側にある。南側の埋設土器の20～22号はⅠ・Ⅱの時期に該当するものと思われる。北側の埋設土器のなかで、別表によりやや古い様相を持つ埋設土器は６・７・11号であろう。それ以外にも３・５・９・10号もやや古い様相を示す。逆に新しい様相を示すものとして14・15号があり、他に４・13・16～18号が存在する。また２・８号もどちらかと言えば新しい様相を示すものかもしれない。それは古相の埋設土器を囲むように新相の埋設土器が存在するようである。

また９～11・18号埋設土器の深鉢形土器と浅鉢形土器の関係は９号埋設土器（深鉢形土器Ａ～Ｂ・浅鉢形土器Ⅲａ～ｂ）、10号埋設土器（深鉢形土器Ｂ・浅鉢形土器Ⅲａ）、11号埋設土器（深鉢形土器Ａ・浅鉢形土器Ⅲｂ）、18号埋設土器（深鉢形土器Ｃ・浅鉢形土器Ⅲｅ）となり、深鉢形土器のＡ→Ｂへの推移と浅鉢形土器のａ→ｂへの推移は完全には連動しないようである。しかし９・10・11号の浅鉢形土器の口縁部形態はごく僅かな違いであり、いづれも沈線は浅くそれほどの時期差があるとは思われない。

しかし大概的には深鉢形土器Ａ・Ｂ→Ｃ・Ｄへの推移と浅鉢形土器Ⅲａ・Ⅲｂ類→Ⅲｅ類への推移は連動していることが認められる。

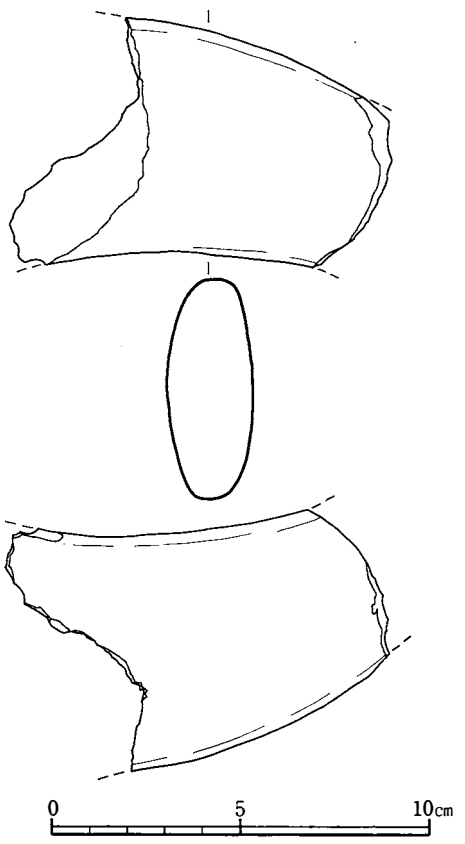
石器の組成は、前述したようにすでに破片となって認識できない石皿や、打製石斧として認定していいか判断に迷うものがあり、また時間的制約より二次加工ある不定形石器・使用痕ある剥片などについてまで検討できていないこと、早期・後期・晩期と時期的に幅があることよりその正確さには疑問符が付く。便宜的に調査区の北側（Ｄ・Ｅ区）より出土した石器と南側（Ｇ区）より出土した石器とにわけてそれぞれの石器組成比率をみると、主なものとし



第125図　不明石製品実測図

て北側では打製石斧（50%）、磨製石斧（６%）、石鏃（24%）、磨石・敲石（9.4%）、石皿（1.4%）、石錘（４%）であり、南側では打製石斧（54%）、磨製石斧（３%）、石鏃（17.5%）、磨石・敲石（6.8%）、石皿（３%）、石錘（8.4%）で両地区とも打製石斧が群を抜いて多い。その他の構成もほとんど変わらないが、その中で石錘は南側に多く認められる。また打製石斧の分類ごとに比較した場合、その割合をみると短冊形・バチ形・分銅形は南側（G区）に多く、円盤形はほぼ同じ位で、Ｖ類とした縁片に刃部をもつものは北側（Ｄ・Ｅ区）に多い。

その他この遺跡内で土器の製作を行ったことを証明する焼成粘土塊が出土している。また呪術・祭祀に関連した道具と推察されている石剣・石刀も出土



第126図　石剣・石刀実測図

している。しかしながら集落に関しては全く不明であると言わざる得ない。しかし住居の可能性として１号・４号住居状遺構などがあり、人吉市中堂遺跡のように埋設土器を取り囲むような状態で集落が形成されていたのかも知れない。

晩期後半

刻目突帯文土器の時期であるが、その遺物量は急激に減少する。また分布も点在的である。

第４節　弥生時代の遺物（第127図）

確実な弥生時代の遺構は調査では確認できなかった。遺物量も極端に少なかった。

１・２は脚台部片である。沖松遺跡では古墳時代の土器にも少数ながら脚が付くものが存在するが、それは底部が厚かったり、脚が極端に短く上底状を呈するものであり、１・２とは趣を異にするもので、弥生時代の土器として取り扱ったが、古墳時代の初頭の可能性もある。

３～６は重弧文土器（免田式土器）の胴部片である。

遺物量は少ないものの周辺に弥生時代に遺跡が存在することを示している。

第５節　古墳時代の遺構と遺物

１．竪穴式住居跡

分　布（第128図）

竪穴式住居跡は27基検出した。ただしその中には全く遺物が出土しない住居跡（７号・13号竪穴式住居跡）や削平により深さが数㎝程しか残存していない住居跡がある。しかも削平された住居跡から出土する遺物には縄文式土器片や奈良・平安時代の土師器・須恵器片が交じっており、削平の関係でその遺物の出土状態はほとんどが床面直上になってしまうものがあった。これらのものは厳密には古墳時代の住居とは断定できないが、出土遺物の主体を占めるものが古墳時代のものであること、住居跡の切り合いや住居跡の構造より古墳時代のものに含めた。しかし７号・21号住居跡については疑問が残るが、他の時代の住居跡とする積極的根拠も乏しく古墳時代の住居に含めた。

住居跡はその分布状況から３群に分けることが可能であり、調査区北側と南東側及び南西側に認められる。特に南東側に集中する。平面形はすべて方形である。以下個々の住居跡について解説する。

１号竪穴式住居跡（第129図）

調査区の北東側Ｉ23グリッドにある住居跡である。調査区の最高所に位置する。住居の平面形態は方形で、長軸８ｍ・短軸７ｍ50㎝を測る。壁高は、東西壁で最高45㎝を測った。今回検出した住居跡の中で最大の大きさのものである。床面は中央部に硬化面が認められるが、途中で不明瞭となる。また壁の立ち上がりも北東側で特に不明瞭となる。住居跡の北西側に焼土が見られたが、後世の土坑により壊されている。柱穴は３個が検出されたが、主柱穴となるものは不明である。

出土遺物も多く甕形土器・壷形土器・高坏などがある。またミニチュア土器も出土している。その他図化していないが須恵器の甕片が１点出土しているが後世の柱穴からの出土である。

２号竪穴式住居跡（第130図）

Ｈ21グリッド及びＧ21グリッドにある住居跡である。住居の平面形態は方形で、長軸５ｍ25㎝・短軸４ｍ80㎝を測る。壁高は、東西壁で最高37㎝を測った。床面の硬化は弱く、焼土は認められなかった。柱穴は４個検出されたが、主柱穴となるものは不明である。

出土遺物は他の住居跡と比べると極少量である。

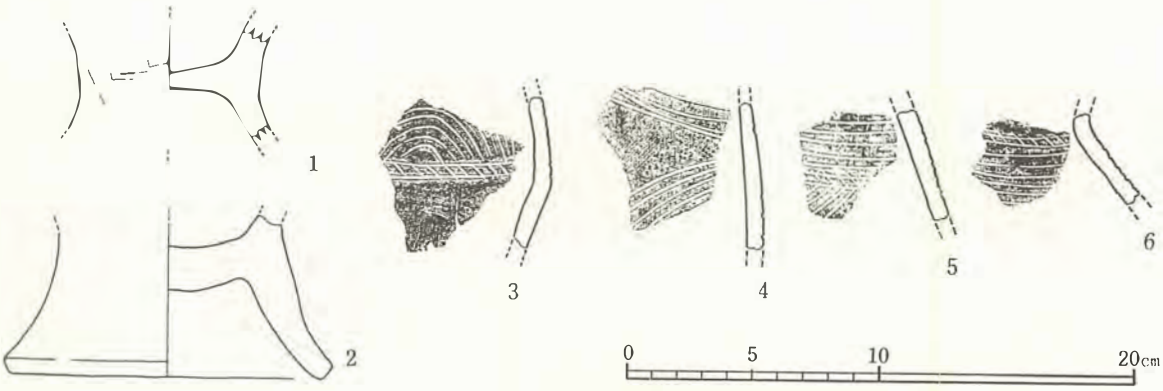
３号竪穴式住居跡（第130図）

Ｆ22・Ｇ22グリッドにまたがってある住居跡で、南西隅部分が４号竪穴式住居跡により破壊されている。住居の平面形態は方形で、長軸６ｍ８㎝・短軸５ｍ90㎝を測る。壁高は南北壁で最高20㎝を測った。

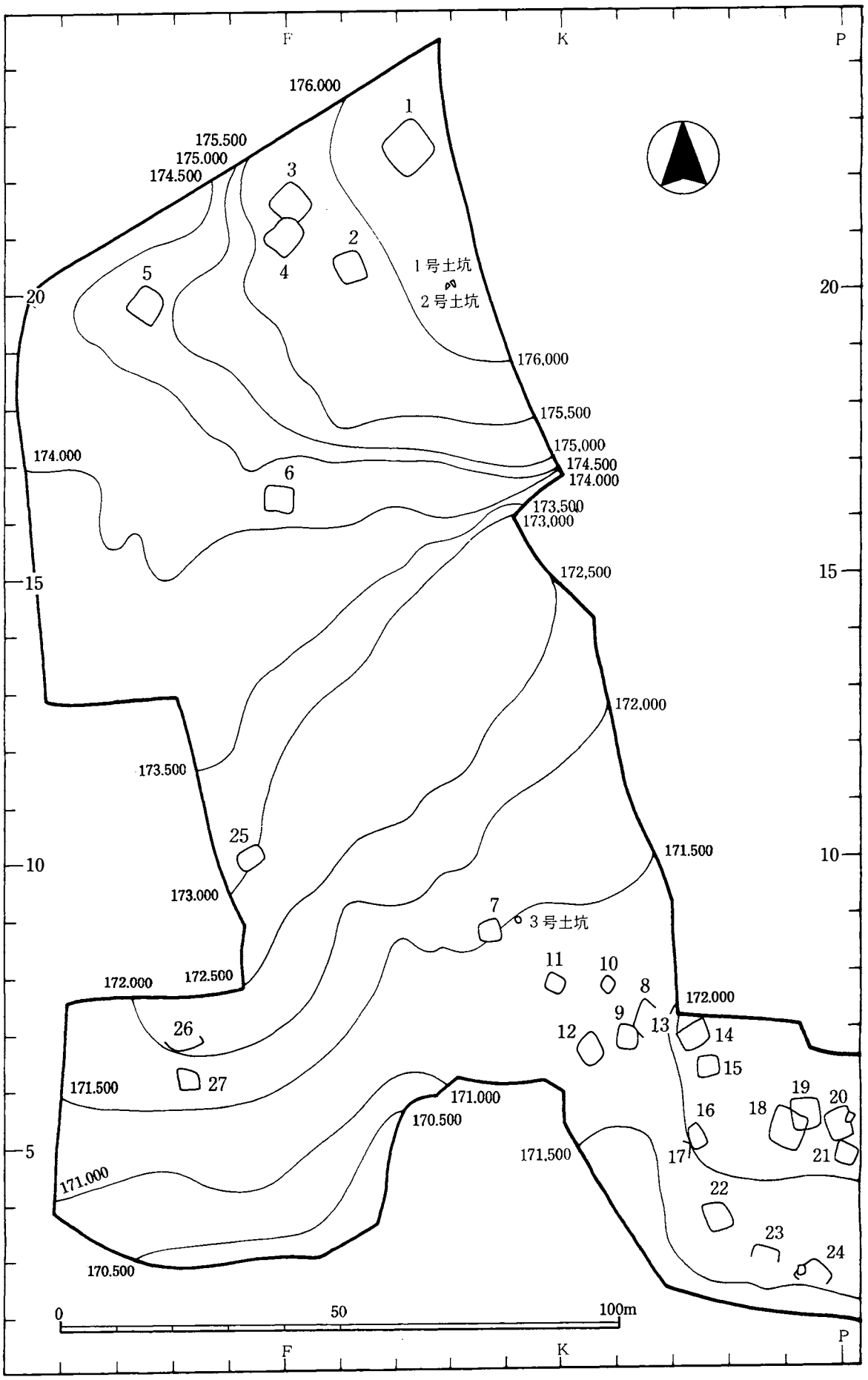
床面は、ほぼ全範囲にわたり硬化面が認められた。焼土が住居跡の西側寄りで認められた。その平面形態は70㎝×20㎝の不整な楕円形に近い形状を呈す。その厚さは１㎝程度である。また炭化物が住居内の中央部寄りで検出された。

柱穴は４個が検出され、4本柱の構造が想定される。また貯蔵穴は南側に位置している。

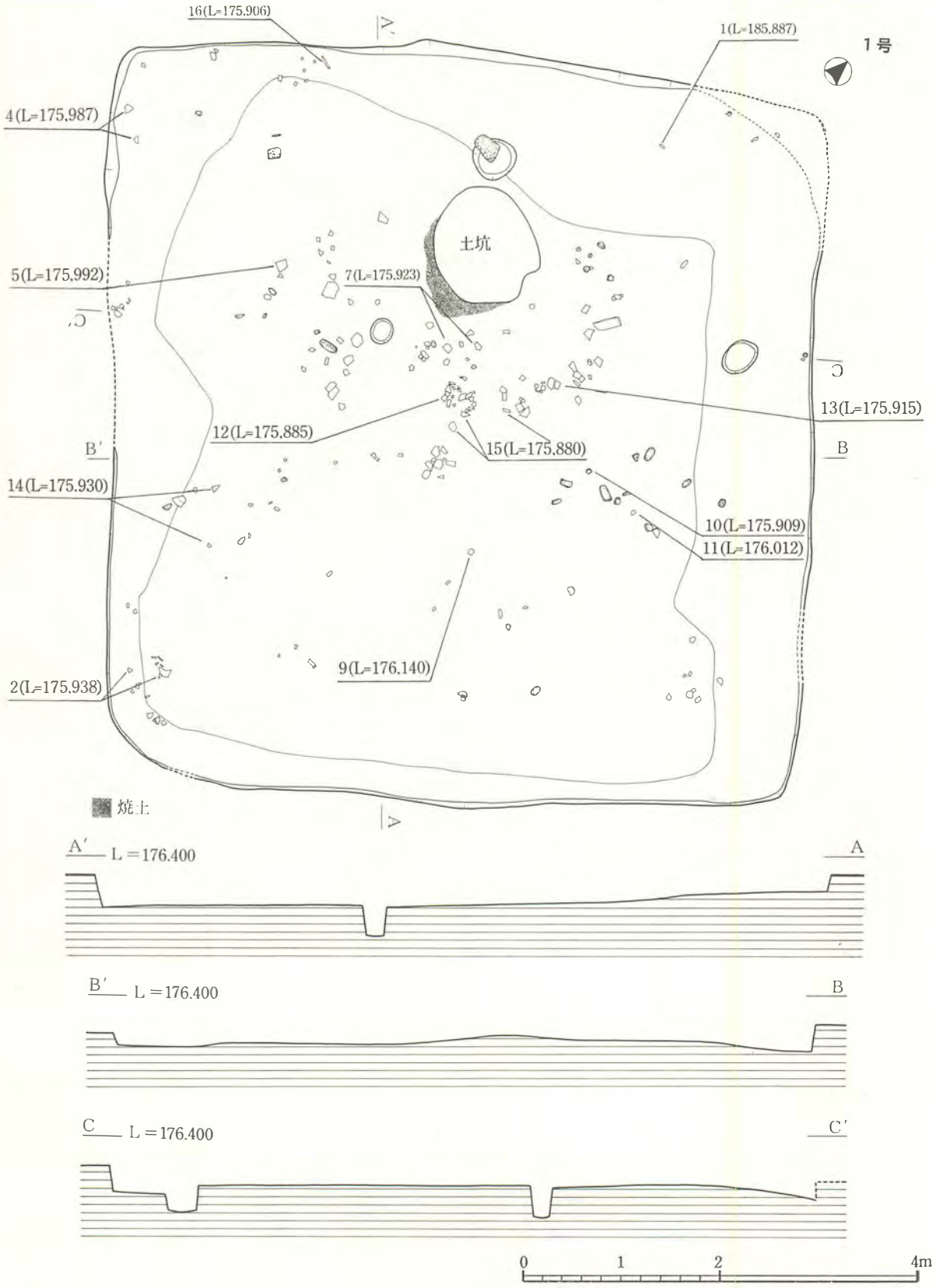
遺物の分布は、貯蔵穴・炉周辺に集中が見られる。



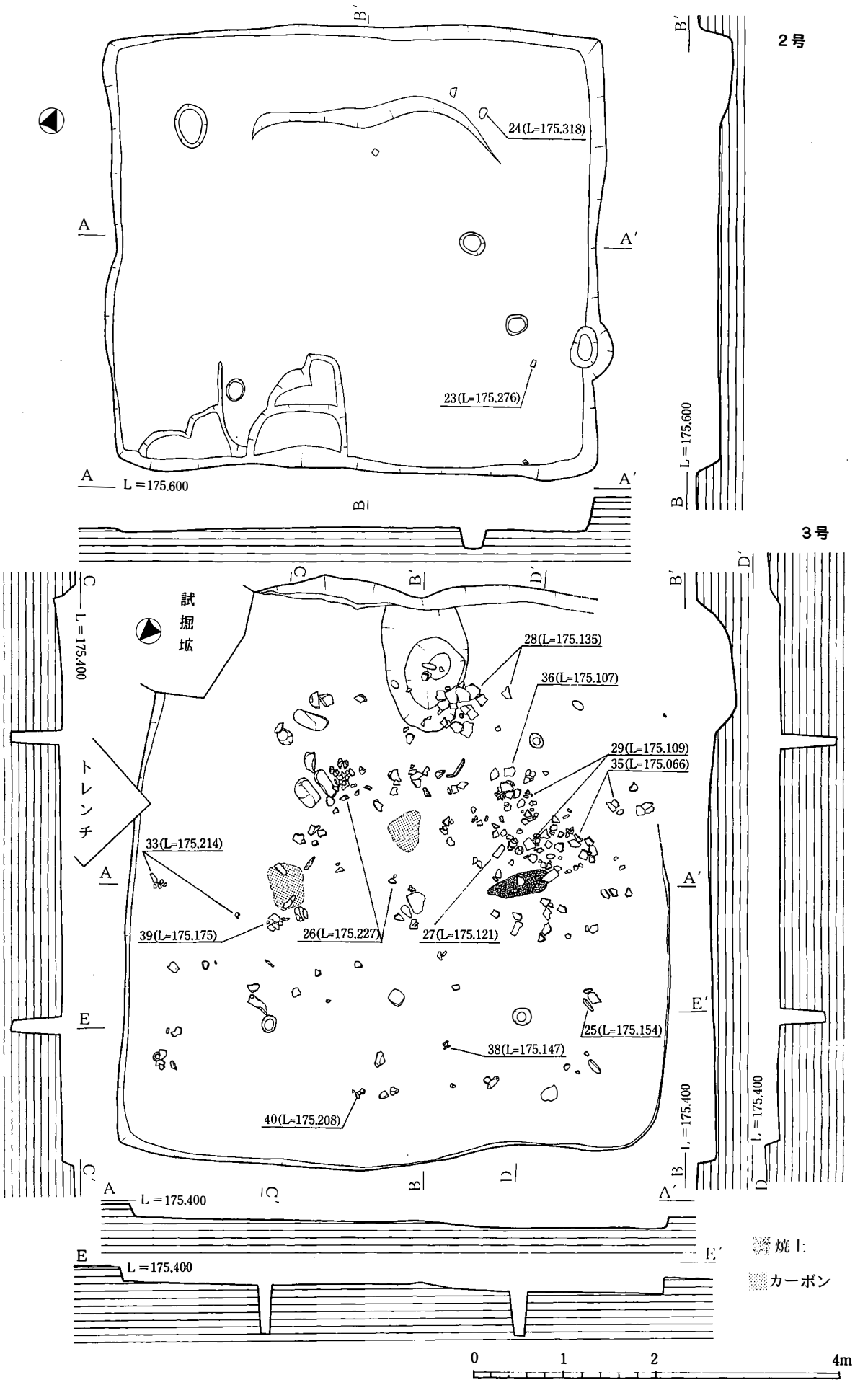
第127図　弥生式土器実測図



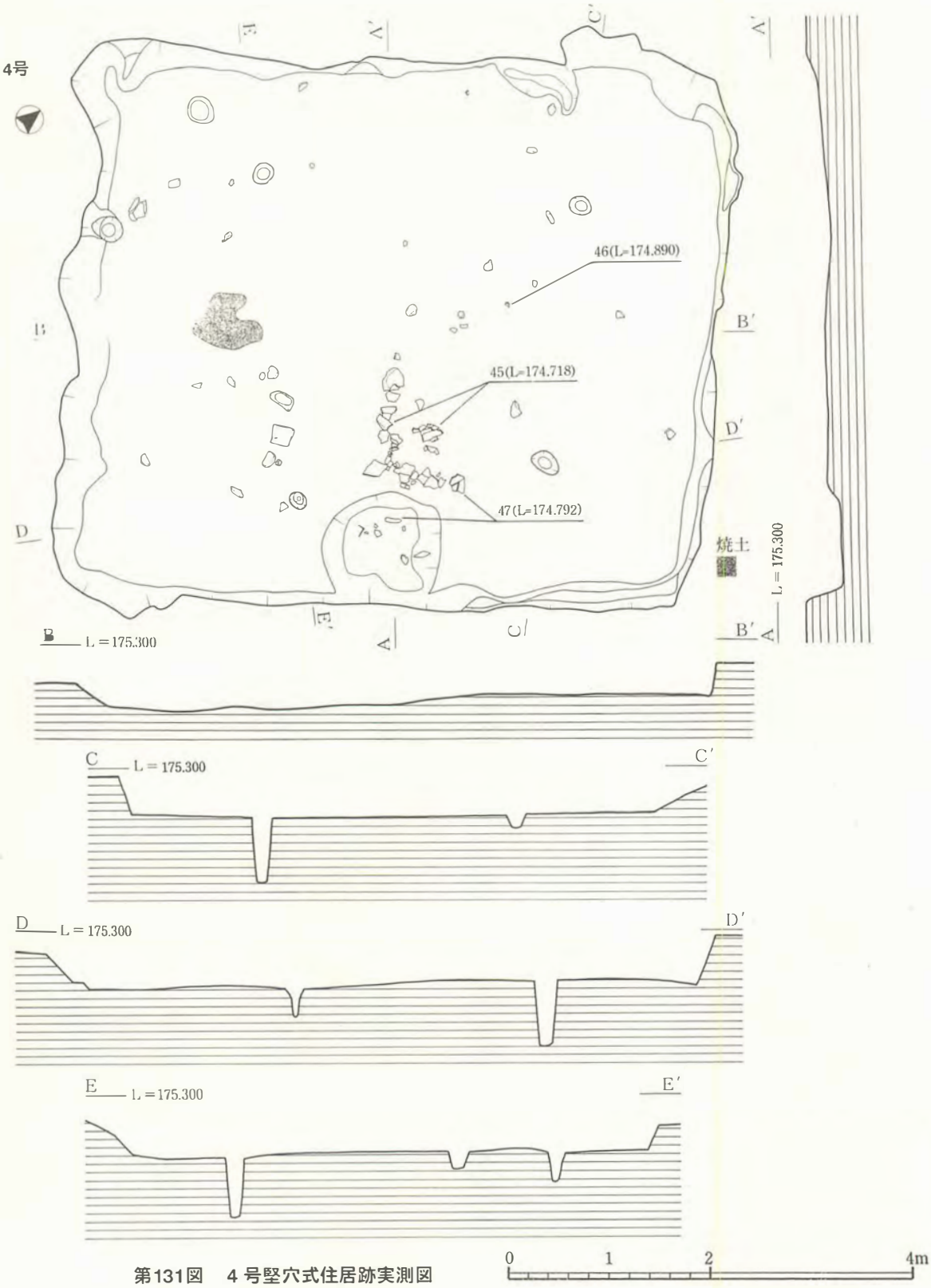
第128図　古墳時代遺構配置図



第129図　１号竪穴式住居跡実測図



第130図　2・3号竪穴式住居跡実測図



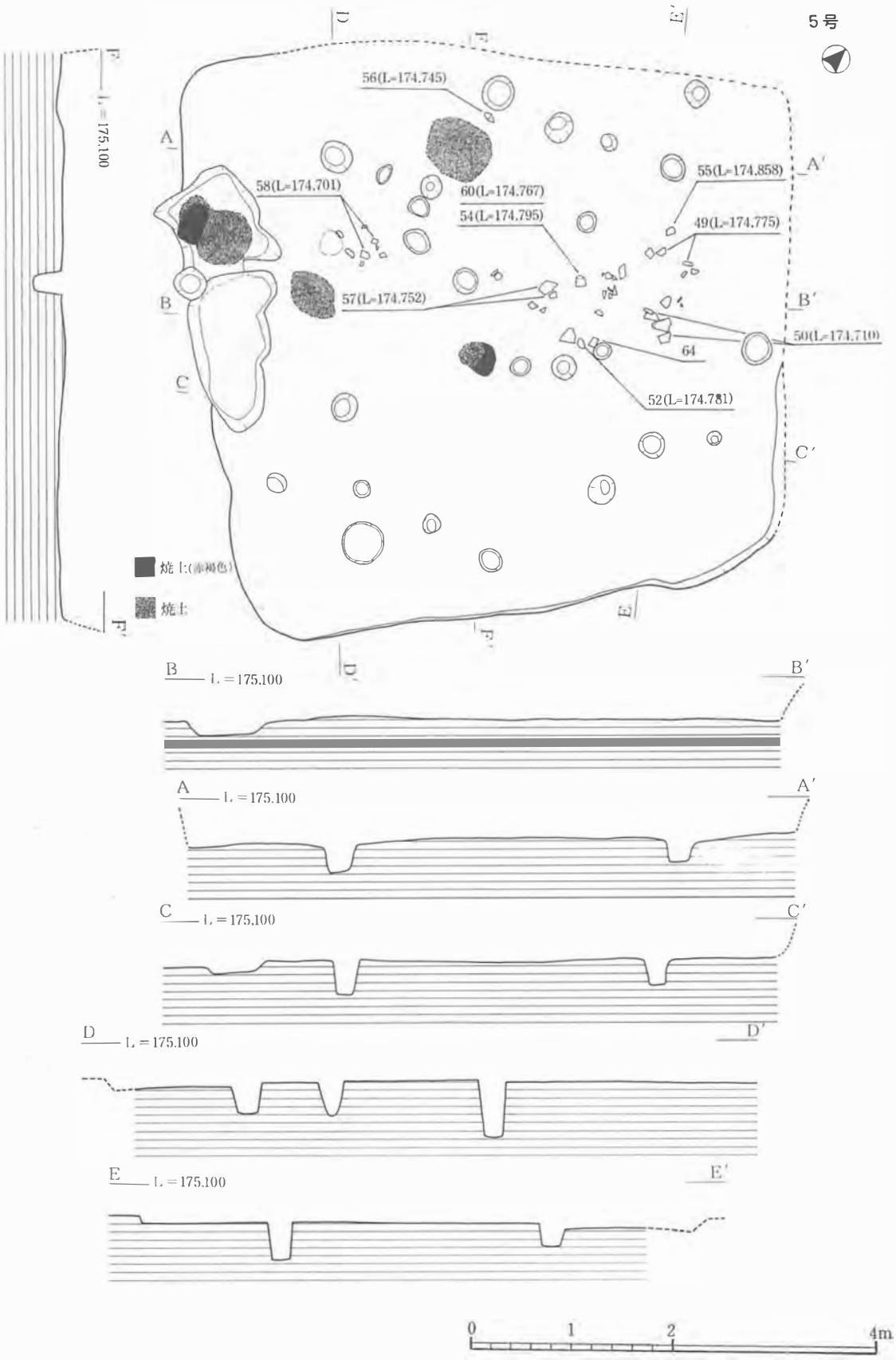
第131図　４号竪穴式住居跡実測図

土器のほか火をうけて割れたと考えられる石皿が出土した。

４号竪穴式住居跡（第131図）

住居の平面形態は方形で、長軸６ｍ30㎝・短軸５ｍ34㎝を測る。壁高は、南北壁で最高40㎝を測った。床面は、ほぼ全範囲にわたり硬化面が認められた。焼土が住居跡の南西側に認められる。その平面形態は70㎝×60㎝の不整形を呈す。厚さは１㎝程度である。

住居跡に伴う柱穴は６個が検出されたが、主柱穴となるものは４個で、４本柱の構造が想定される。また貯蔵穴は南側に位置する。



第132図　5号竪穴式住居跡実測図

遺物は、貯蔵穴周辺に集中して甕・壷・高坏が出土した。

５号竪穴式住居跡（第132図)

調査区の北東側Ｄ20グリッドにある住居跡である。住居の平面形態は削平がひどく不明瞭だが、方形と推定され、長軸５ｍ90cm・短軸５ｍ57cmを測る。壁高は、東西壁で最高20cmを測った。

床面は中央部に硬化面が認められるが、途中で不明瞭となる。焼土は４箇所が確認されたが、住居跡の西側のものは後世の土坑に伴うものであり、住居跡に伴うものは中央に設けられたものも含めて３箇所と考えられる。焼土は厚さ１cm前後で、その平面形態は円形を呈す。

柱穴は22個が検出されたが、主柱穴となるものは４個で、４本柱の構造が想定される。

遺物は住居跡中央部に集中して出土した。

６号竪穴式住居跡（第133図)

Ｆ17・Ｇ17グリッドにまたがり位置する住居跡。

住居の平面形態は方形で、長軸４ｍ88cm・短軸４ｍ18cmを測る。壁高は、東西壁で最高60cmを測った。

床面は、東壁側を除きほぼ全範囲にわたり硬化面が認められた。南西部に一段盛り上がった部分が認められた。焼土は住居跡内の北西側に認められた。その平面形態は45cm×30cm程度の長方形を呈す。その厚さは１cm前後である。またその周辺に少量の炭化物が認められた。柱穴は３個検出されたが、主柱穴となるものは２個で、２本柱の構造が想定される。また南側壁の貯蔵穴状のものは後世のものである。

遺物は、北側部分の埋土の上層に集中して出土したが、多くは縄文晩期の土器片で流れ込みによるものと考えられ、この住居跡に伴うものは西柱穴周辺より数点が出土しているにすぎない。

７号竪穴式住居跡（第133図)

Ｊ９グリッド内に位置する住居跡である。削平され一部不明な所があるが、住居の平面形態は不整な方形で、長軸３ｍ90cm・短軸３ｍ70cmを測る。壁高は、最高10cmにも満たない状況であった。硬化面の発達も認められなかった。住居内中央に焼土が存在するが、厚さは１cmにも満たない。

柱穴は５個検出されたが、主柱穴となるものは４個で、４本柱の構造が想定される。また１点の遺物も出土しなかった。

８号竪穴式住居跡（第134図)

Ｍ８・Ｍ９グリッドにまたがって位置する住居跡、東側は里道により削平され、南西部は９号竪穴式住居跡により破壊されている。住居の平面形態は方形で、現況で長軸４ｍ95cm・短軸２ｍ40cm程を測る。壁高は最高５cm程度である。

床面は、ほぼ全範囲にわたり硬化面が認められた。焼土が住居跡の中央に認められる。その平面形態は105cm×70cmの不整な楕円形を呈し、その厚さは１cm程度である。

柱穴は５個検出されたが主柱穴となるものは２個であるが、北西に片寄っていることから本来は４本柱の構造であるとおもわれる。

遺物は住居跡中央部を中心として甕形土器の小破片等が出土した。全体の出土量は少ない。

９号竪穴式住居跡（第134図)

一部北東隅が８号竪穴式住居跡と重複している住居跡である。住居の平面形態は方形で、長軸３ｍ84cm・短軸３ｍ73cm程を測る。壁高は、東側壁で最高23cmを測った。

床面は、ほぼ全範囲にわたり硬化面が認められた。焼土が住居跡の中央部に認められる。その平面形態は35cm前後の円形を呈す。

柱穴は３個、焼土を挟み南北に検出されたが、主柱穴となるものは２個で、２本柱の構造が想定される。遺物は、高坏や須恵器の坏が出土したが、少量であった。

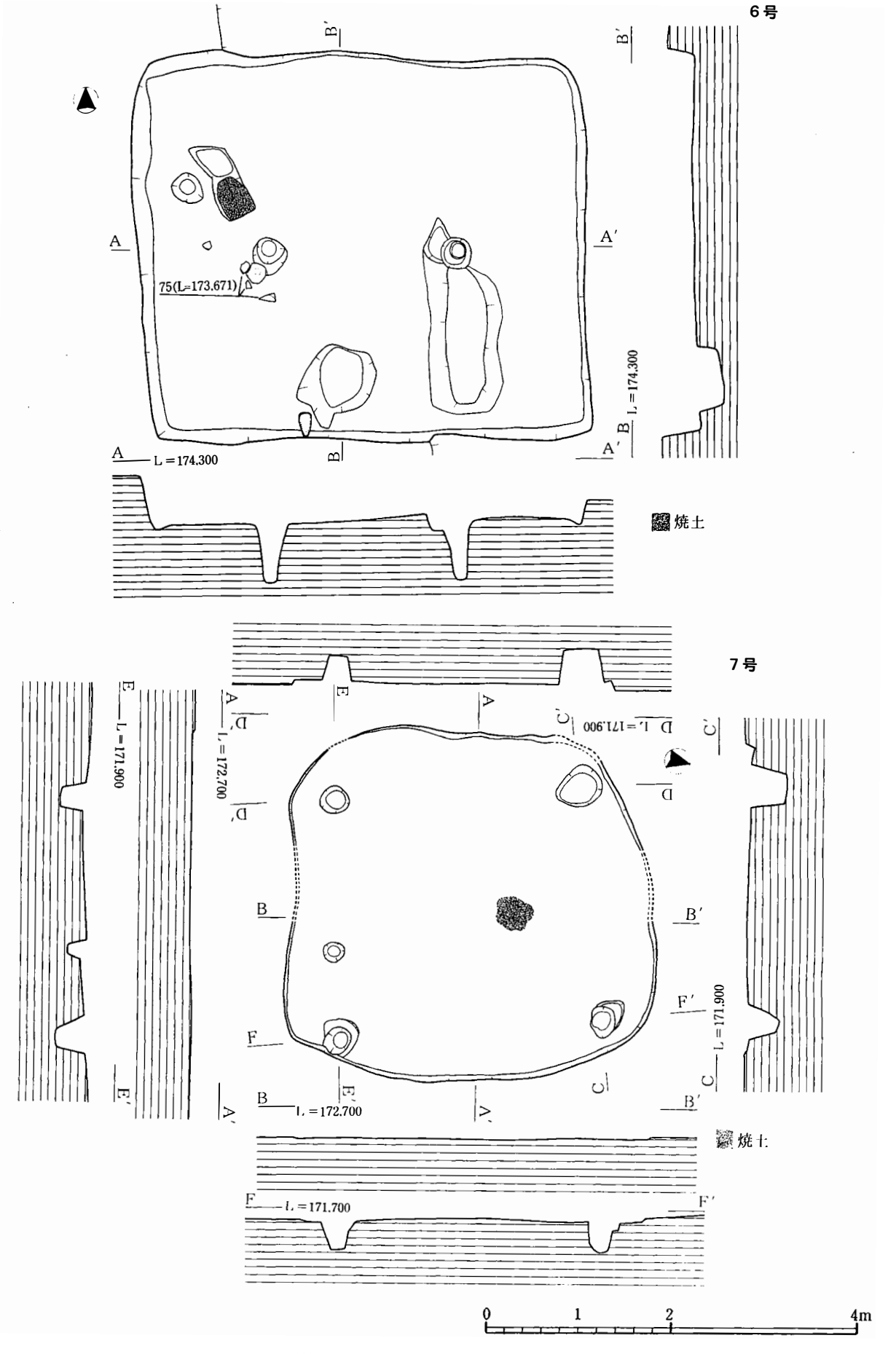
10号竪穴式住居跡（第135図）

Ｌ８グリッドに位置する住居跡である。住居の平面形態は方形で、長軸２ｍ20cm・短軸２ｍ13cm程を測る。検出された住居跡のなかでは最も小規模であり、住居跡と断定していいか若干疑問が残る。壁高は東側壁で最高30cm程を測った。

床面は、ほぼ全範囲にわたり硬化面が認められたが、焼土は埋土中にブロック状に認められた。

柱穴は２個検出されたが、後世のもので住居跡に伴うものではない。

遺物は甕形土器・高坏などが出土した。



第133図　6・7号竪穴式住居跡実測図

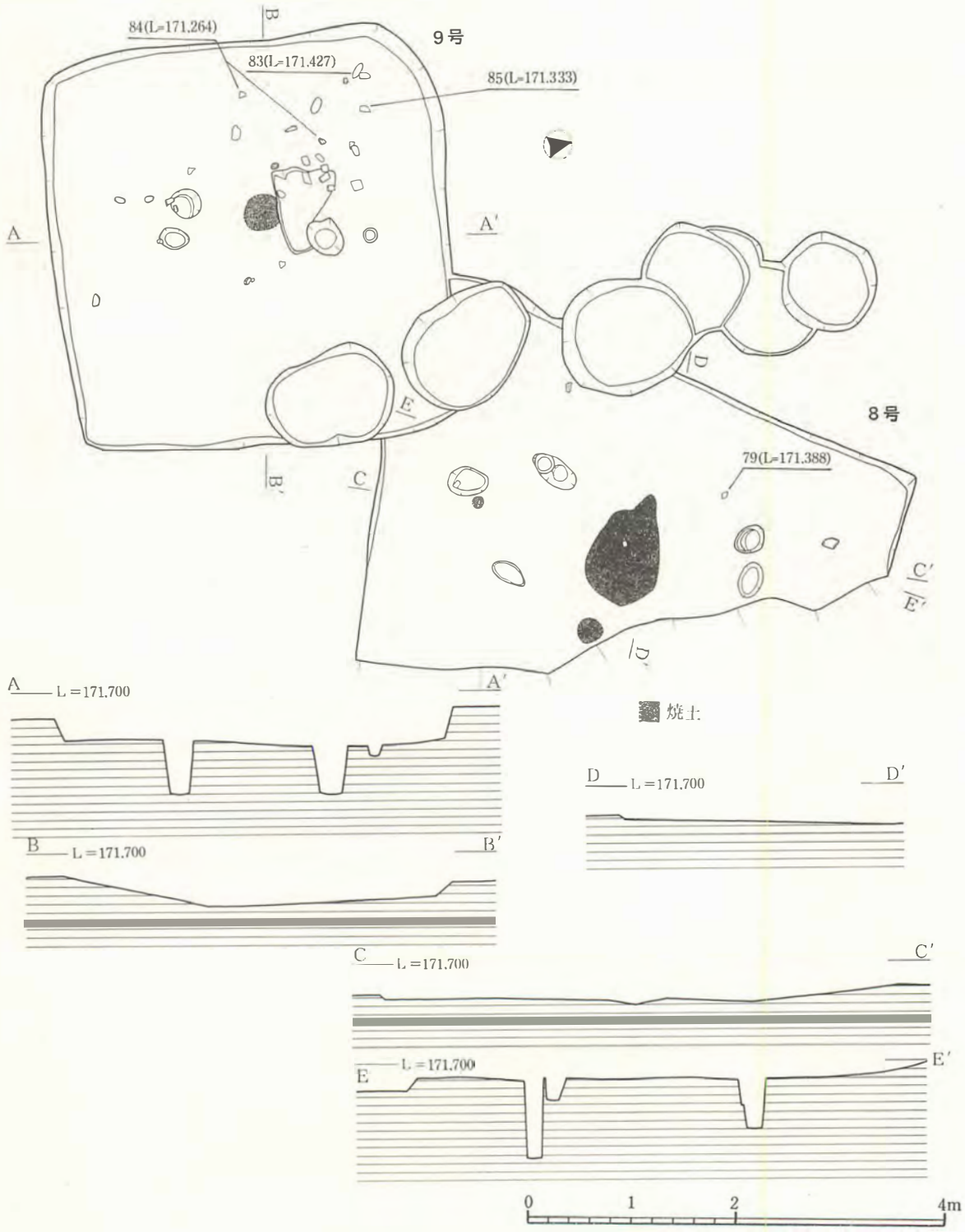
11号竪穴式住居跡（第135図)

Ｋ８・Ｌ８グリッドにまたがって位置する住居跡住居の平面形態は方形で、長軸３ｍ60cm・短軸３ｍ35cm程を測る。壁高は、北側壁で最高19cm程を測った。

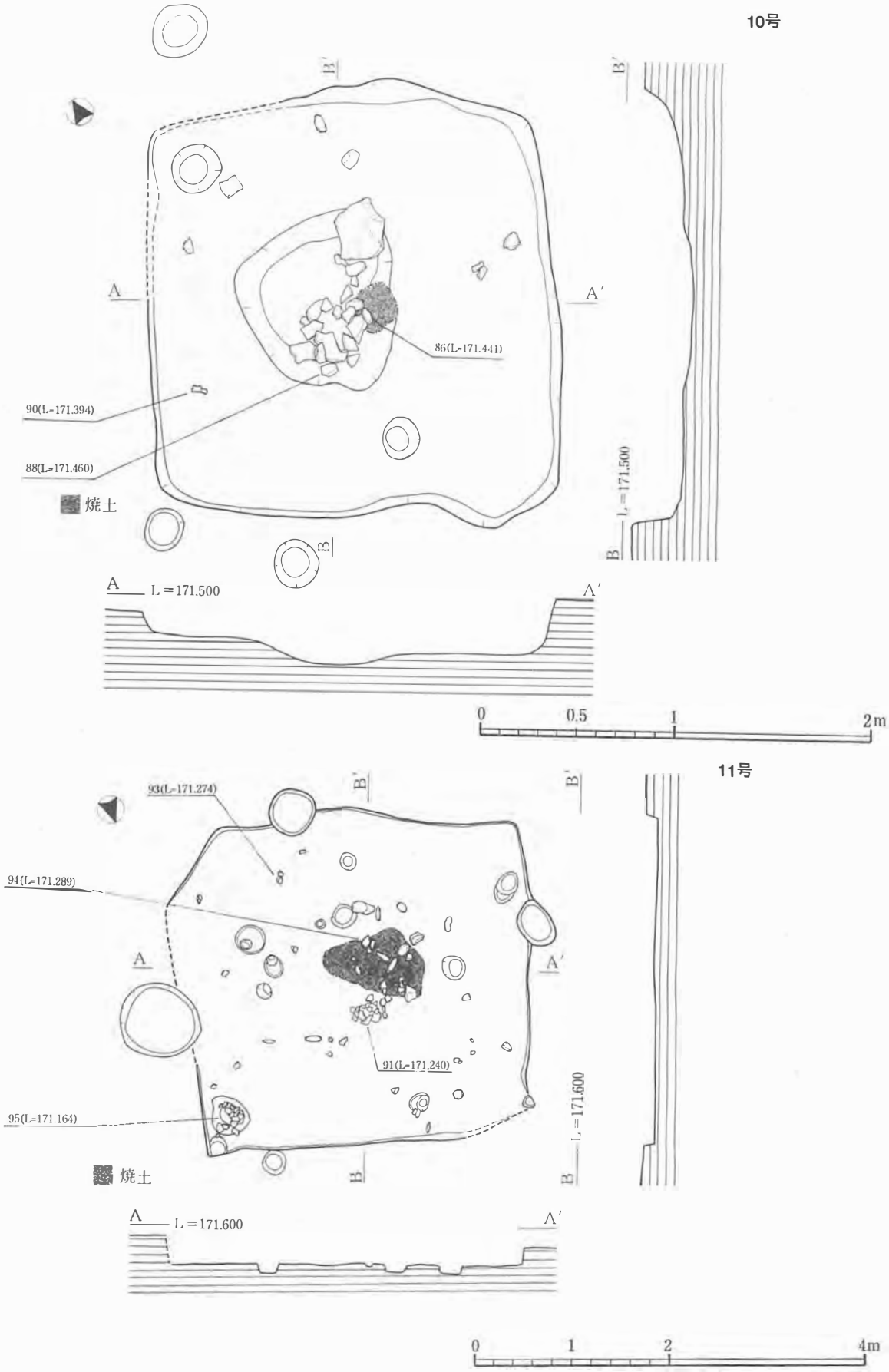
床面はほぼ全範囲にわたり硬化面が認められた。焼土が住居跡の中央に認められる。その平面形態は105cm×68cmの不整な楕円形を呈す。焼土の範囲内に25cm前後の円形の浅い掘り込みが見られる。後述するような埋甕炉の可能性もある。

柱穴は数多く検出されたが主柱穴となるものは不明であるし、いずれも浅い掘り込みである。

遺物は住居跡中央部を中心として甕形土器・高坏などが出土した。



第134図　８・９号竪穴式住居跡実測図



第135図　10・11号竪穴式住居跡実測図

12号竪穴式住居跡（第136図）

Ｌ７グリッドに位置する住居跡。住居の平面形態は方形で、長軸４ｍ65cm・短軸４ｍ45cmを測る。壁高は、最高で45cmを測った。

床面には、ほぼ全範囲にわたり硬化面が認められたが、焼土は認められなかった。しかし住居跡の中央に甕形土器の底部が埋められており、埋甕炉と考えられる。土器の内面全面に黒く煤が付着していた。柱穴は17個検出されたが主柱穴となるものは不明である。

遺物は、上記の甕形土器以外に須恵器の蓋や石鏃等が出土したが、床面よりかなり浮いた状態での出土である。

13号竪穴式住居跡（第137図）

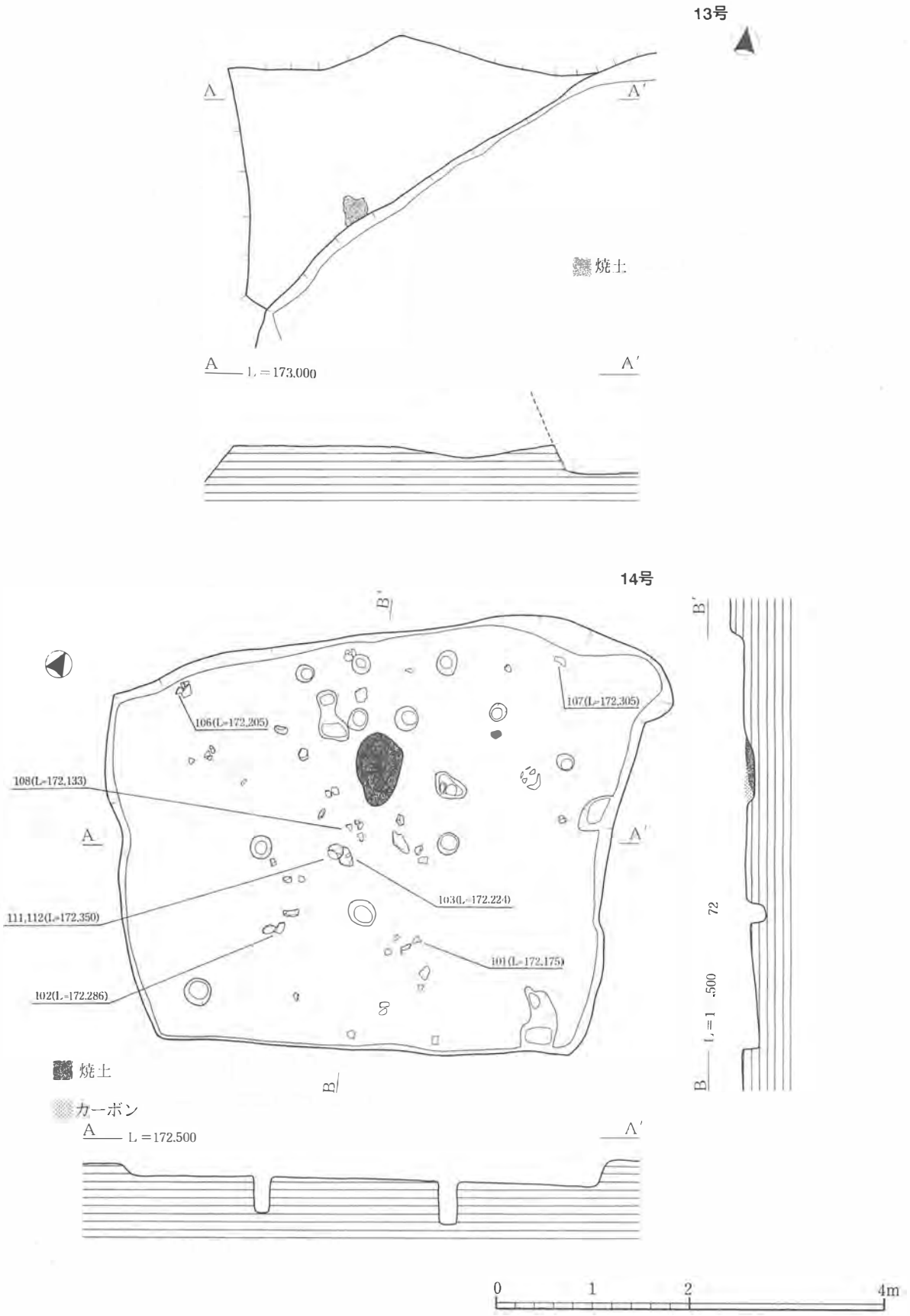
Ｎ７グリッドに位置する住居跡。西側は里道により削平され、南側は14号竪穴式住居跡により切られ、北側も削平をうけ辛うじて床面の一部が残っている程度である。床面は、ほぼ全範囲にわたり硬化面が認められた。14号住居跡側に焼土が認められる。柱穴は確認できていない。

遺物は土器の細片が極少量出土したが、図化に耐えるものはなかった。

14号竪穴式住居跡（第137図）

南側壁が12号竪穴式住居跡と重複する住居跡。住居の平面形態は方形と考えられるが東側壁の立ち上がりは不明瞭である。長軸５ｍ５cm・短軸４ｍ25cm程を測る。壁高は最高で25cm程を測った。

第136図　12号竪穴式住居跡実測図



第137図　13・14号竪穴式住居跡実測図

床面は、中央部に硬化面が認められるが、特に東壁側で不明瞭となる。焼土は住居跡中央部よりやや北側に認められ、浅い掘り込みをもつ。その掘り込みは50cm×35cm程の楕円形で深さ約11cmを測る。

柱穴は数多く検出されたが主柱穴となるものは２個で、２本柱の構造が想定される。

遺物は、壷形土器・甕形土器・高坏の他に須恵器の蓋も出土した。須恵器は床面よりかなり浮いた状態の出土である。

15号竪穴式住居跡（第138図）

14号竪穴式住居跡のすぐ南側に位置する住居跡。住居の平面形態は長方形で、長軸４m35cm・短軸３m10cm程度を測る。壁高は最高で20cm程を測った。

床面は、ほぼ全範囲にわたり硬化面が認められた。焼土は、住居跡の中央部やや西寄りで検出した。わずかに浅い掘り込みをもち、その平面形態は70cm×40cm程の不整な楕円形を呈し、深さ７cm程度東側に行くにつれ浅くなる。柱穴は６個検出されたが主柱穴となるものは不明である。

遺物は、壷形土器・甕形土器・高坏・須恵器などが出土した。

16号竪穴式住居跡（第138図）

Ｎ６・Ｎ５グリッドにまたがって位置する住居跡。西側は里道及び17号竪穴式住居跡により削平されているが、住居の平面形態は一辺４m40cm程度の方形を呈する。壁高は最高で20cmを測った。

床面は、ほぼ全範囲にわたり硬化面が認められた。焼土が住居跡の中央よりやや南西側に認められる。浅い掘り込みをもつ。その平面形態は75cm×50cm程度の不整な楕円形を呈し、深さは12cm程である。

柱穴は数多く検出されたが主柱穴となるものは焼土を挟みほぼ南北に２個であり、本来２本柱の構造であることが想定される。

遺物は住居跡中央部を中心として甕形土器の口縁部や底部片などが出土した。

17号竪穴式住居跡（第138図）

16号竪穴式住居跡と重複する住居跡である。住居の平面形態は削平をうけ東側壁がわずかに残存する程度で不明である。壁高は最高で30cmを測った。

床面には、硬化面は認められたが、柱穴については不明である。

遺物は甕形土器片や須恵器坏が出土した。

18号竪穴式住居跡（第139図）

Ｏ５杭周辺に位置する住居跡。住居の平面形態は方形で、長軸５m95cm・短軸５m75cmを測る。全体的に削平を受けてるため壁高は最高で15cm程度である。

床面は中央部分には硬化面が認められたが四隅は微量の炭化物混じりでかなり柔らかい。焼土は住居跡の中央で検出した。その中央部分には径30cm前後の浅い穴があり黒く硬化しており、土器を埋めていたことを伺わせる。焼土の範囲は１m×40cm前後の不整形をする。

柱穴は数多く検出されたが主柱穴となるものは４個であり、４本柱の構造である。

遺物は甕形土器・高坏などが出土した。

19号竪穴式住居跡（第140図）

南西側が18号竪穴式住居跡に切られている住居跡であるが、床面が18号竪穴式住居跡の床面より深かったおかげで、全体形を伺い知ることができた。住居の平面形態は方形であり、長軸５m30cm・短軸５mを測る。全体的に削平を受け壁高は最高で25cm程度である。

床面は中央部に硬化面が認められるが、途中で不明瞭となる。焼土は住居跡中央部よりやや南側に認められ、わずかに浅い掘り込みをもつ。それは30cm×15cm程度で、深さ５cm程度の楕円形をなす。

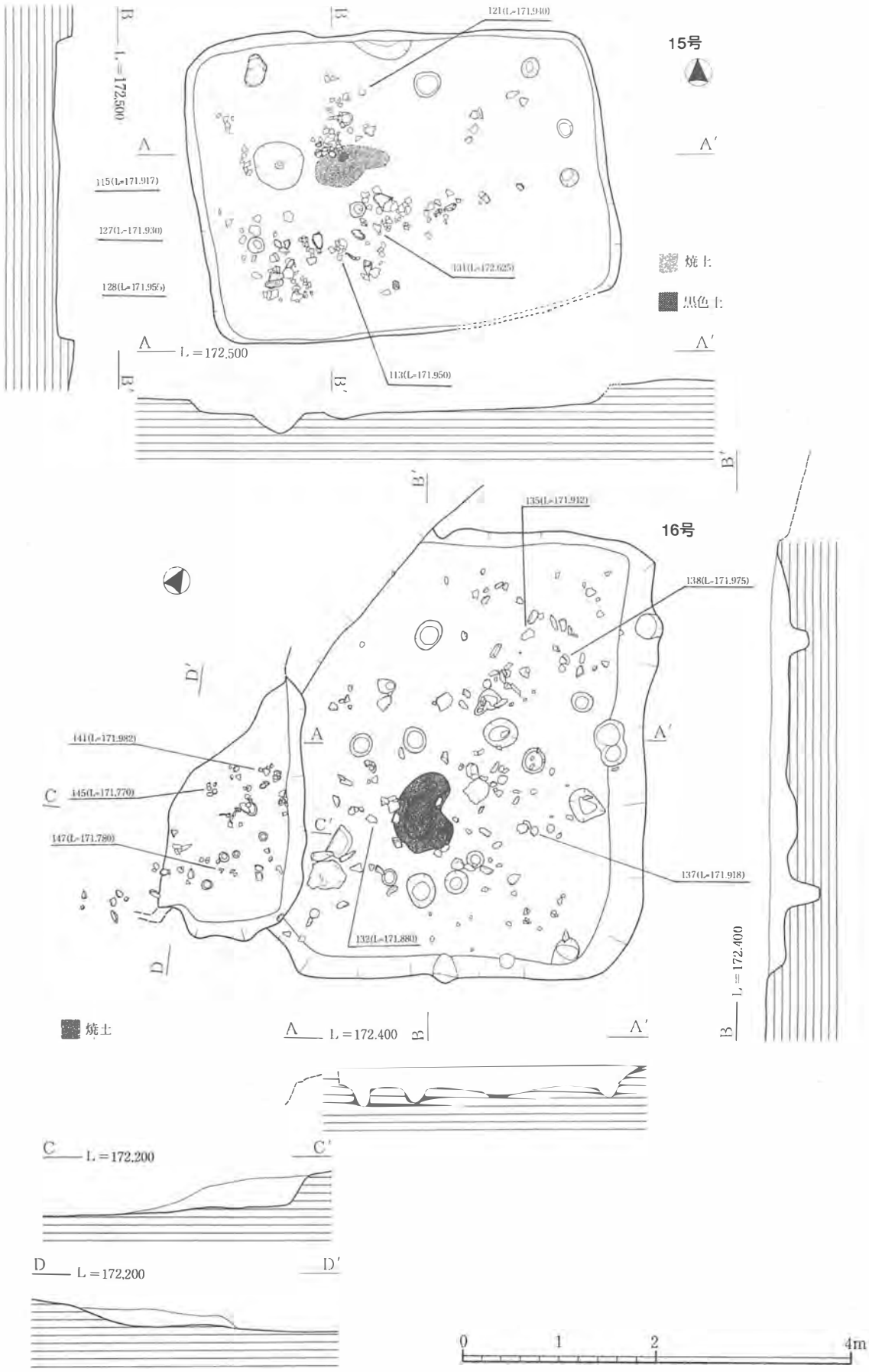
柱穴は11個検出されたが主柱穴となるものは４個で４本柱の構造である。

遺物は甕形土器などが出土した。

20号竪穴式住居跡（第141図）

Ｐ５杭周辺に位置する住居跡で一部を土坑により破壊されている。住居の平面形態は全体的に削平を受けており、南東側の平面形態は不明瞭であるが、方形プランと考えられ、長軸４m70cm・短軸４m40cmを測る。壁高は最高で15cm程度である。

床面も、樹根等で破壊されてる部分が多いが中央部分には硬化面が認められた。焼土は、住居跡の中央で２箇所検出した。その一方には径15cm・深さ10cm程度の浅い穴があり黒く硬化しており、土器を据



第138図　15・16・17号竪穴式住居跡実測図

えてたことを伺わせる。柱穴は数多く検出されたが主柱穴となるものは４個であり、４本柱の構造であると想定される。

遺物の出土量は少なかった。

21号竪穴式住居跡（第141図）

20号竪穴式住居跡の南側に位置する住居跡である。住居の平面形態は方形である。長軸３ｍ70cm・短軸３ｍ40cm程を測る。壁高は最高で30cm程度である。

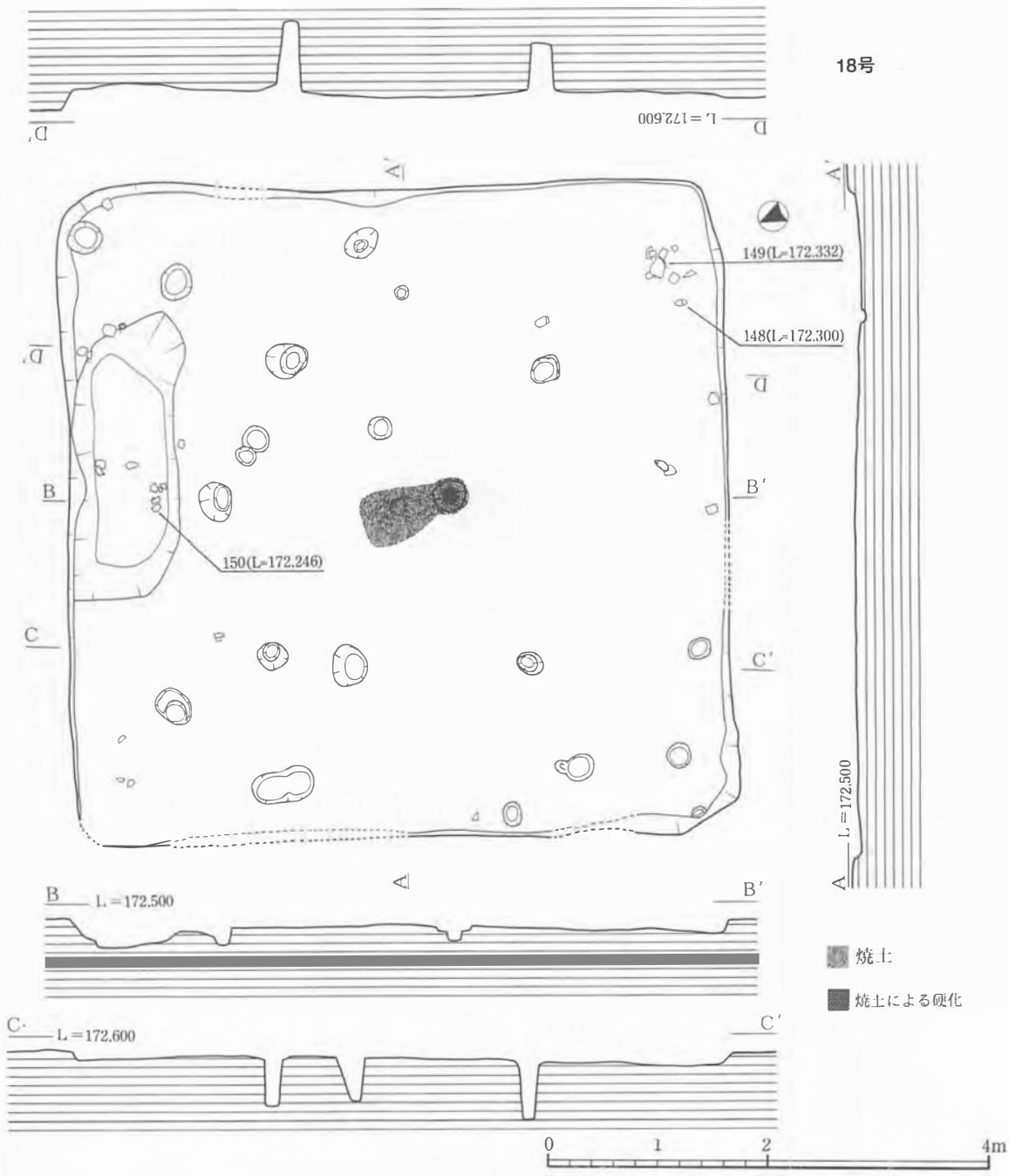
床面は、中央部に硬化面が認められるが、途中で不明瞭となる。焼土は住居跡中央部に認められるが、後世の穴により破壊されているが、60cm×45cm程の楕円形の浅い掘り込みをもつ。深さは約10cm程度である。

柱穴は10個検出されたが主柱穴となるものは不明である。

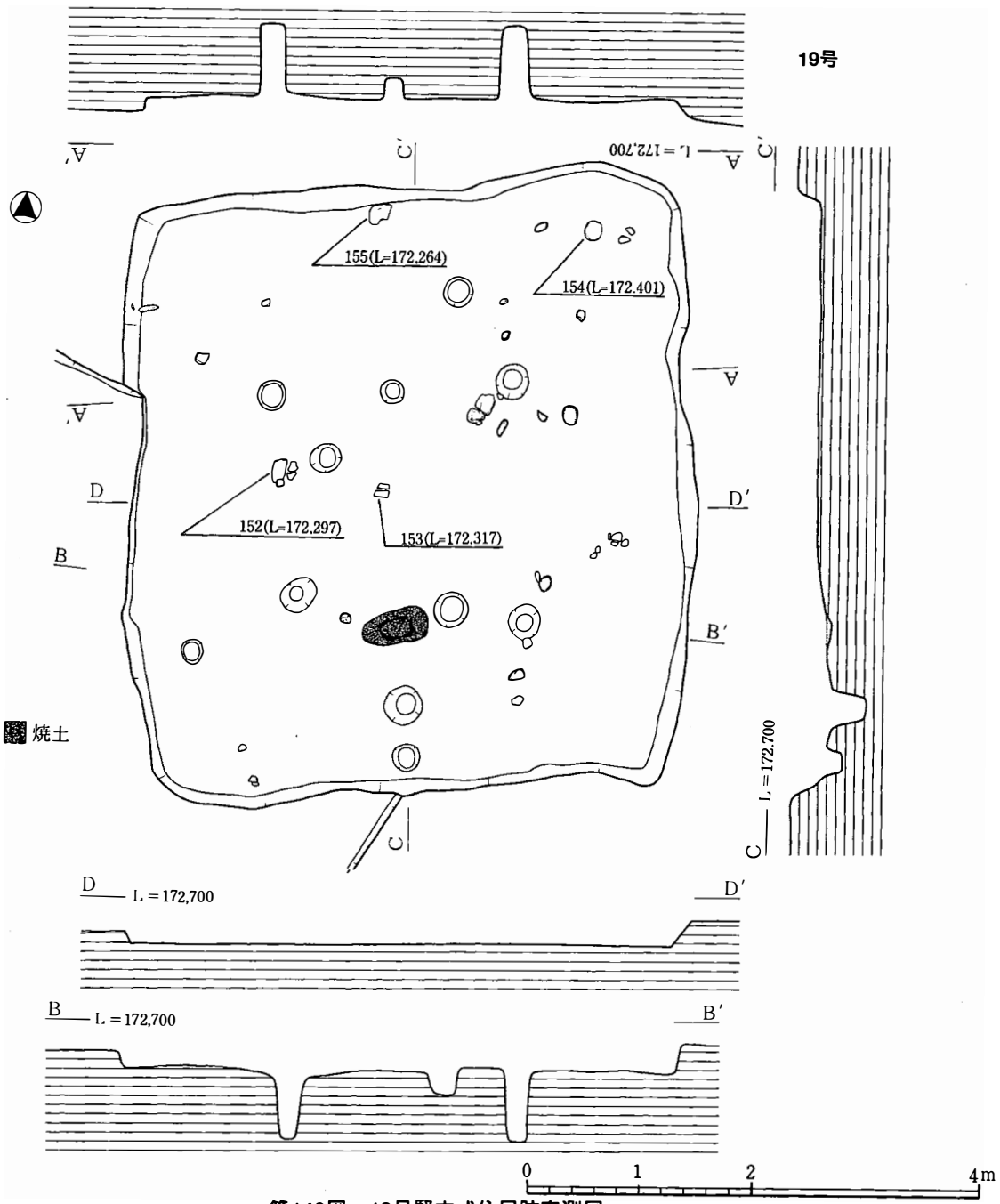
遺物の出土量は極わずかであった。

22号竪穴式居跡（第142図）

Ｎ４杭周辺に位置する住居跡。住居の平面形態は方形だが、削平が著しく西側壁はわずかに壁が立ち上がる程度で不明瞭であった。長軸５ｍ・短軸４ｍ



第139図　18号竪穴式住居跡実測図



第140図　19号竪穴式住居跡実測図

90cm程を測る。また壁高は最高で25cm程度である。

床面中央部分には硬化面が認められた。また住居内のほぼ中央北寄りに径１ｍ・深さ15cmほどの浅い掘り込みを検出した。下層に黄色みを帯びた焼土が、上層には赤みを帯びた焼土が堆積していた。また上層の焼土は掘り込み部分以外にも広がっている。その他数箇所に焼土及び炭化物が認められる。炉に伴う焼土は下層のもので、上層の焼土は焼失時のものではないかと考えられる。一方住居内の南東部には深さが最高で10cm程度の細長い溝状の掘り込みが、断続的に壁際に巡る。しかし北西部分には認められなかった。

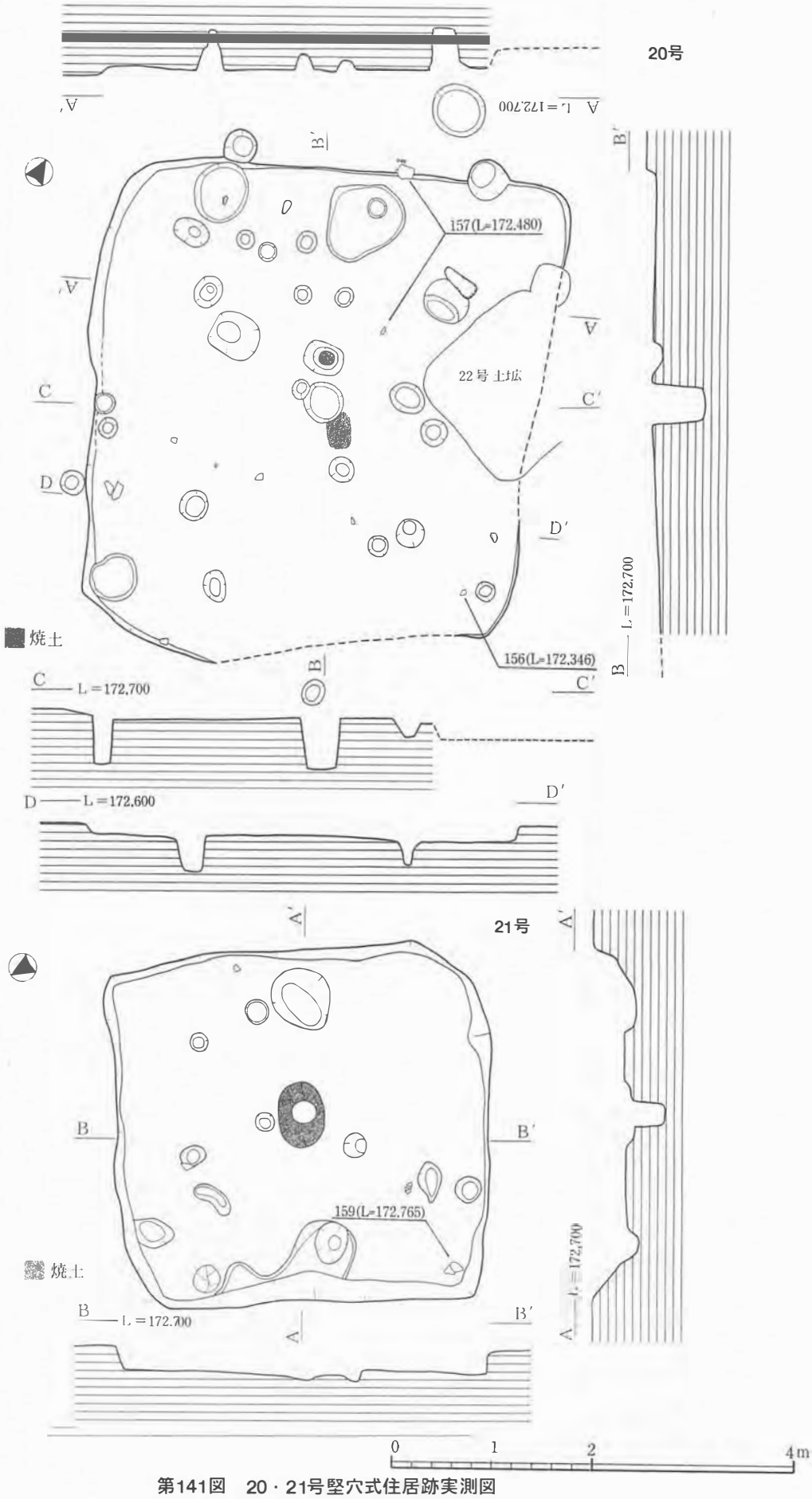
柱穴は数個が検出されたが主柱穴となるものは４個であり、４本柱の構造であると想定される。

遺物は甕形土器等が出土したが、その多くは細片であった。

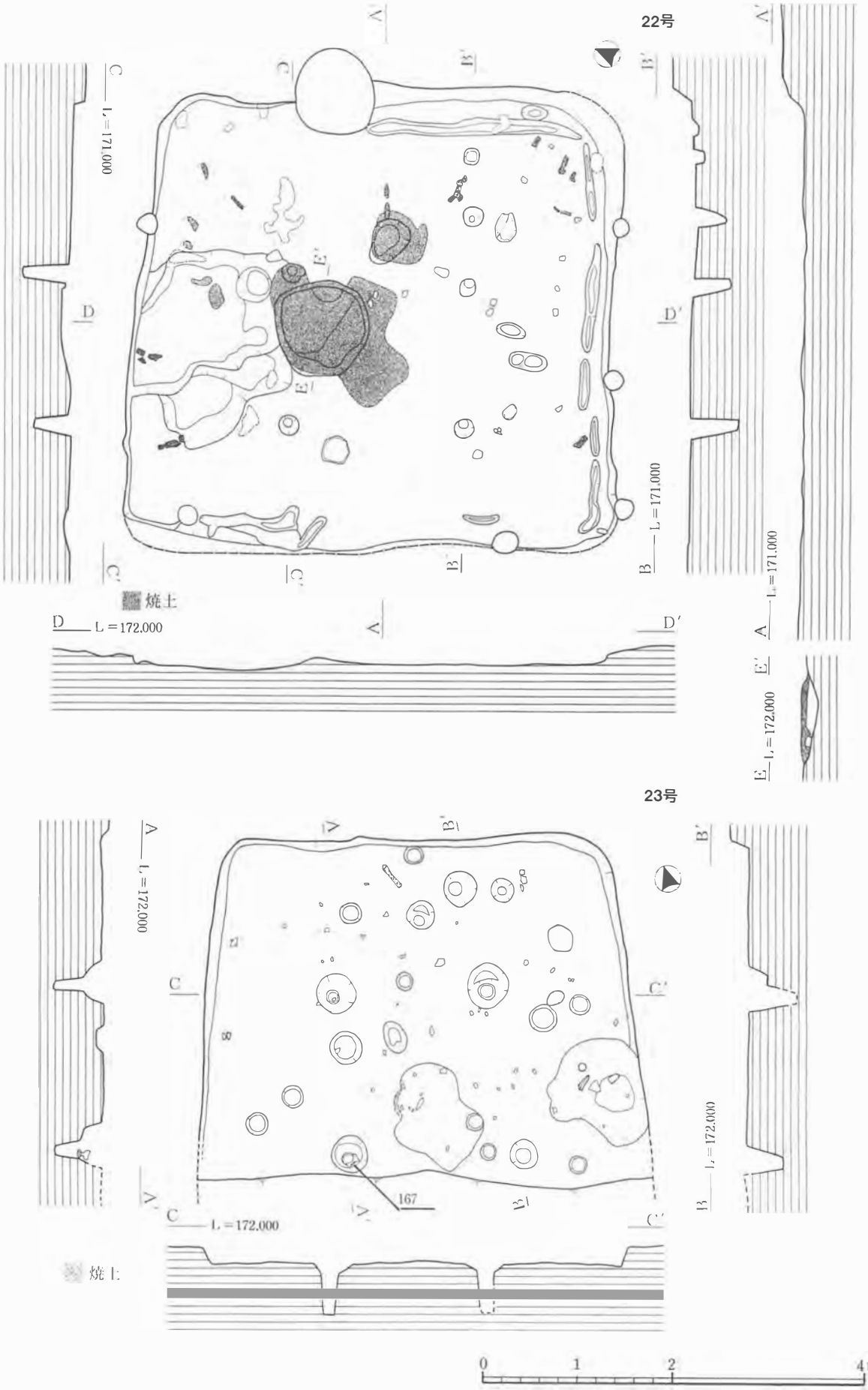
23号竪穴式住居跡（第142図）

Ｏ３・Ｏ４グリッドにまたがって位置する住居跡。南側が削平されているが、住居の平面形態は１辺が４ｍ50cm程度の方形であると推察される。また壁高は最高で23cm程度である。

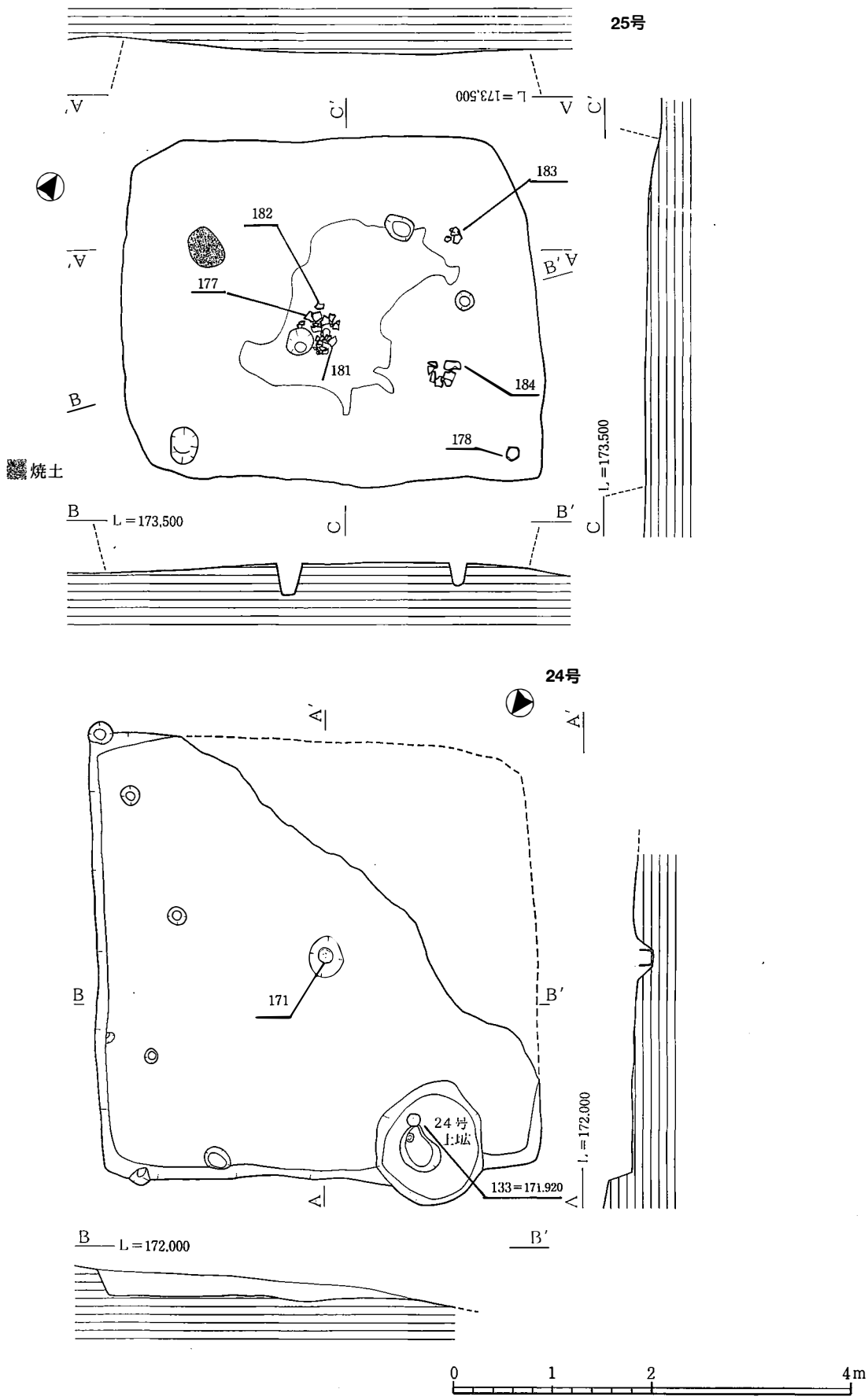
床面は、ほぼ全面に硬化面が認められた。焼土を



第141図　20・21号竪穴式住居跡実測図



第142図　22・23号竪穴式住居跡実測図



第143図　24・25号竪穴式住居跡実測図

住居内の中央付近で検出した。しかし後世の浅い掘り込みにより削平を受けているためその平面形態等は不明である。

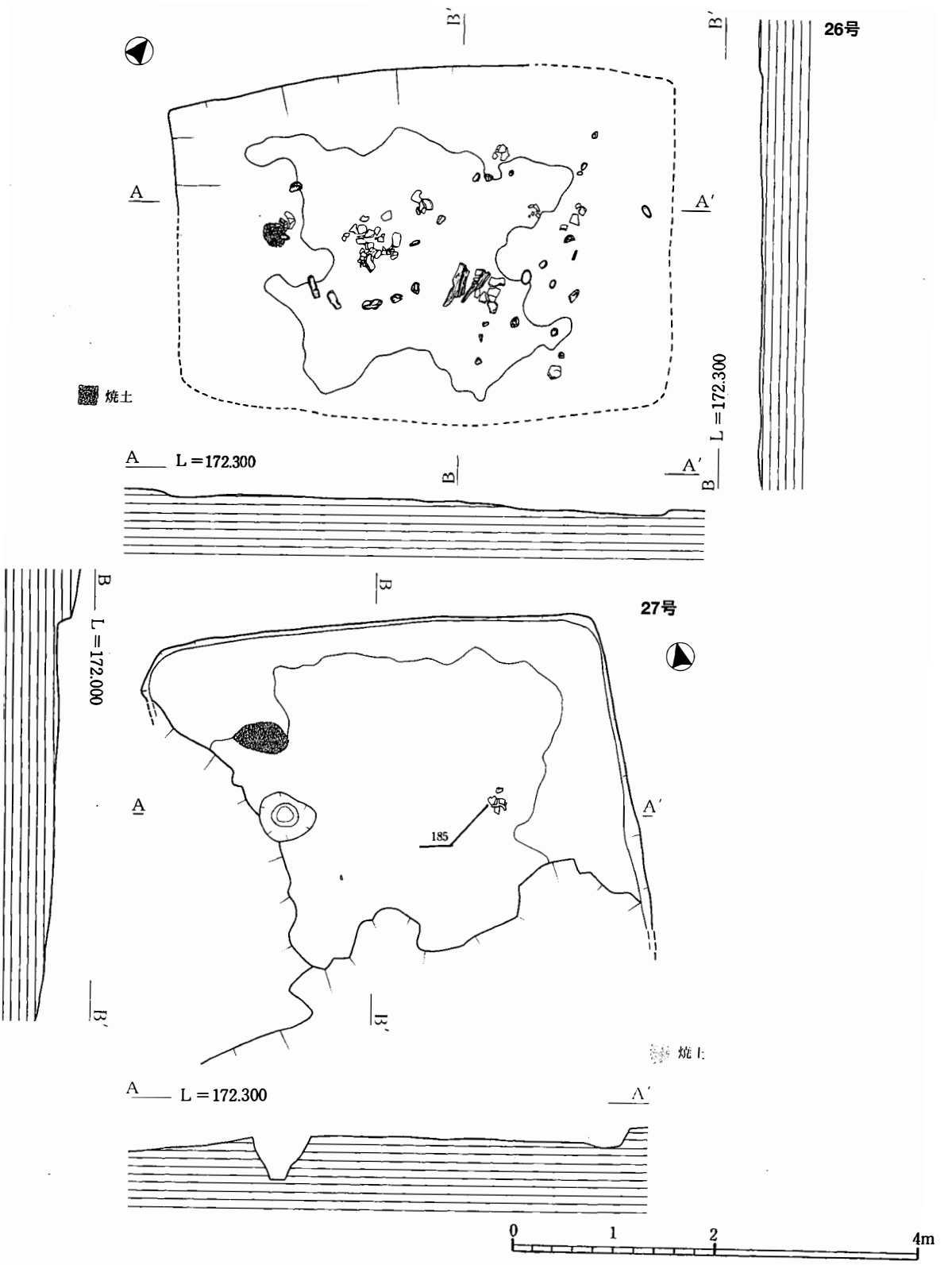
柱穴は数多く検出されたが主柱穴となるものは4個であり、４本柱の構造であると推定される。

遺物は、須恵器高坏が柱穴の中から出土している。

24号竪穴式住居跡（第143図)

Ｐ３グリッドに位置する住居跡で、南側は削平され、北西側は土坑により破壊されている。一辺が４ｍ40㎝程度の方形プランを呈する。また壁高は、最高で15㎝程度である。

床面はほぼ全面に硬化面が認められたが、焼土は



第144図　26・27号竪穴式住居跡実測図

認められなかった。しかし住居跡の中央に甕形土器の底部が埋められており、埋甕炉と考えられる。土器の内面は全面に煤が付着していた。柱穴は数個が検出されたが主柱穴となるものは不明である。

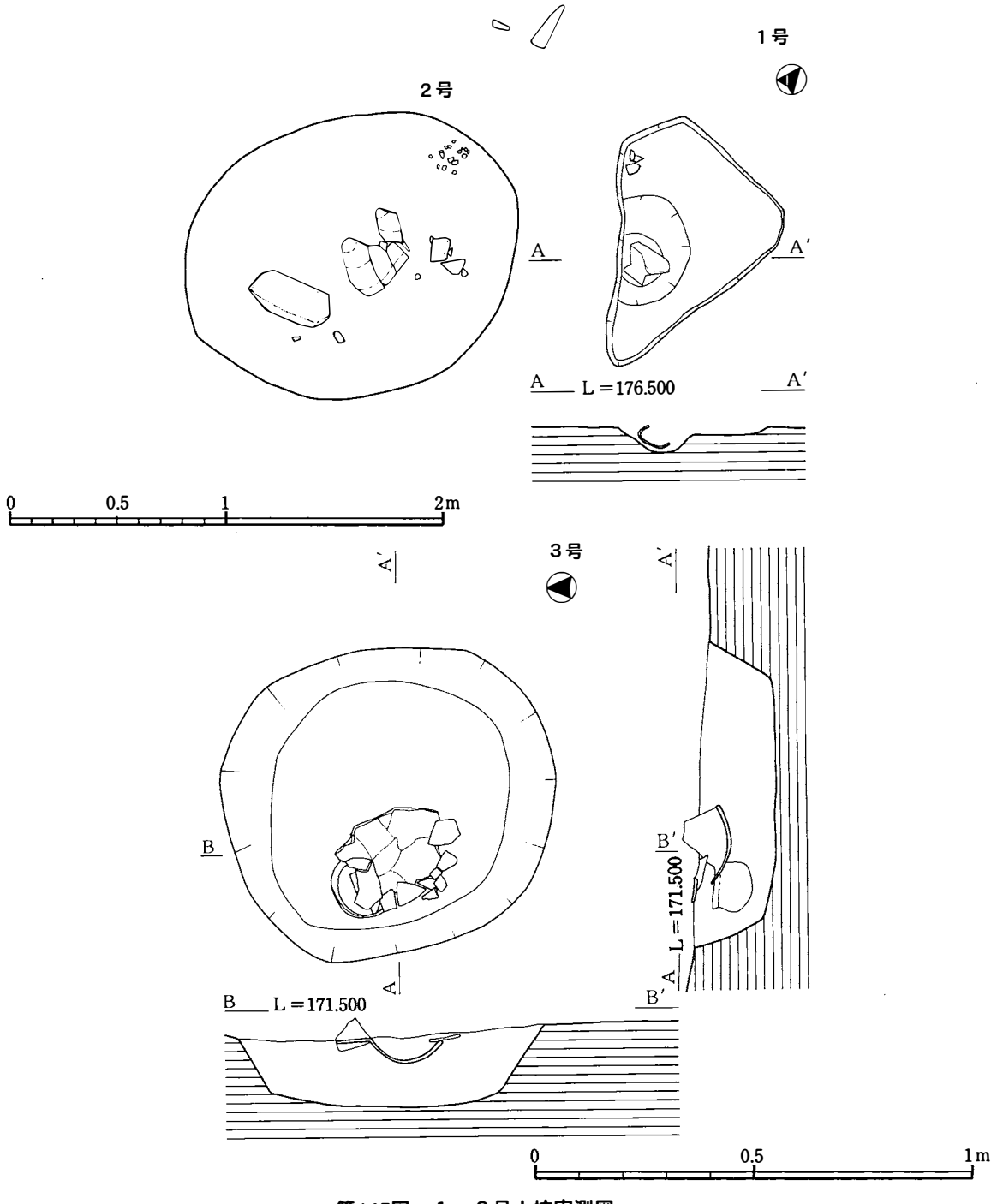
遺物の出土量は少ない。

25号竪穴式住居跡（第143図）

Ｆ10・Ｆ11グリッドにまたがって位置する住居跡。全体的に削平を受けており、床面らしい硬い部分が存在した。しかしその範囲は不明瞭である。また焼土も認められ、柱穴の一部も確認され、多量の土器が出土していることから住居跡であることは確かであるが、平面形態については不明瞭な点があることを記しておきたい。

26号竪穴式住居跡（第144図）

Ｄ７グリッド周辺に位置する住居跡。全体的に削平を受けているが、床面らしい堅い部分が存在した。しかしその範囲は不明瞭である。また焼土や炭化物が認められ、柱穴の一部も確認され、わずかながら



第145図　１～３号土坑実測図

ではあるが土器が出土していることから住居跡であることは確かであるが、平面形態については不明瞭な点がある。

出土遺物としては、小型丸底壷の小破片が出土したが、整理中に筆者の不手際で紛失してしまった。

27号竪穴式住居跡（第144図）

Ｅ７グリッドに位置する住居跡。南西側が削平されている。住居の平面形態は一辺が４ｍ50cm程度の方形を呈する。また壁高は最高で17cm程度である。床面は中央部分に硬化面が認められた。焼土は、住居内北西隅で検出した。その平面形態は50cm×30cm程度の楕円形を呈す。厚さは１cm前後である。また数箇所に微量だが炭化物が認められた。柱穴は１個のみの検出で、その構造は不明である。

遺物は脚台付きの鉢などが出土した。

２．竪穴式住居跡出土の遺物

①　土器

１号竪穴式住居跡（第146・147図１～22）

１～７は甕形土器である。１は頸部にほとんどくびれをもたず、口縁部は直立気味に立ち上がる。２は頸部にくびれを持ち、口縁部は外反する。最大径は口縁部にある。３も頸部がくびれ、口縁部がわずかに外反する。頸部に突帯をもつが刻目を有しない。４～７は頸部に刻目突帯を持つものである。頸部のくびれがほとんど認められないもの（４）、くびれるもの（５）、くびれないもの（６）がある。７は６と同一個体と考えられる。

９～11は小型壷である。完形品がなく全形を知ることができないが、球形の胴部に大きく外反する口縁部を持つと考えられる。

12～15は壷である。12は口縁部が二重口縁気味になる。13は球形の胴部から口縁が直線的に外反する。最大径は胴部中位にある。15は球形の胴部にゆるやかに外反する口縁部が付く。

16は高坏の脚部、17はミニチュア土器である。18～22は底部片である。上げ底のもの（18）、平底（19・20）、わずかに丸みを帯びた凸レンズ状のもの（21・22）がある。

２号竪穴式住居跡（第147図23・24）

いずれも甕形土器である。24は頸部にくびれを持ち、口縁部は直線的に外反する。最大径は口縁部にある。

３号竪穴式住居跡（第148～151図25～44）

25は鉢形土器で口縁部がわずかに外反する。

26～28・30～32・35～37は甕形土器である。26～28は頸部にほとんどくびれを持たず、また胴部に張りを持たないもので、いずれも頸部に刻目突帯を有する。27は口縁部が外反する。また底部は突出気味の平底になる可能性が高い。28は平底となる。いずれも最大径は口縁部にある。一方35～37は頸部に刻目突帯を持たないもので、頸部にくびれを持ち、口縁部は直線的に外反する。最大径は35は胴部に、36は口縁部にある。また36の底部は丸みを帯びた凸レンズ状になる。

29・33・34は壷形土器である。29は球形の胴部で、頸部に刻目突帯を有す。33・34はやや小型のもので球形の胴部に、33は二重口縁気味の口縁が外反する。34は口縁部が内湾する。

41・42は平底で甕形土器の底部であると思われる。

38～40は高坏である。38・40は脚部の裾部が広がるものである。39は脚部が「ハ」の字状に広がる。坏部は、明瞭な稜線を持たず椀状になる。43・44はいずれも破片で全形を知ることが出来ないが、43は壷形土器になると思われ、肩の張る胴部にわずかに外反する口縁部がつく。44は直口する口縁部が付く。

４号竪穴式住居跡（第151図45～47）

45は甕形土器で、頸部がわずかにくびれ、口縁部が外反する。頸部に刻目突帯をもつ。底部は尖り気味の平底である。最大径は口縁部にある。

46はやや小型の壷で球形の胴部に外反する口縁部が付く。

47は高坏で、坏部は口縁部に向かって直線的に外に延びるもので坏部下位に屈折部がある。脚部は裾部が屈折して広がるものである。

５号竪穴式住居跡（第152～154図48～74）

48～57・61は甕形土器である。頸部に刻目突帯を持つもの（48～55）と持たないもの（56・61）がある。刻目突帯をもつものは、頸部のくびれが弱いも

のが多く、くびれがほとんど認められず、口縁部がわずかに外反するもの（48・52・54・55）と口縁部が直立気味に立ち上がるもの（51・53）がある。その他頸部がわずかにくびれ、口縁部が外反するもの（49・50）がある。50は底部がやや丸みを帯びた凸レンズ状のものになる。

一方刻目突帯を有しないものも、頸部のくびれがほとんど認められず、口縁部がわずかに外反するもの（56）と頸部がくびれ口縁部がわずかに外反するもの（57・61）がある。

60・68～74は胴部及び底部片である。底部は平底のもの（71～73）・丸底（74）と短い脚が付くもの（68）がある。

58・59・62・63・64は壷形土器である。58・59は球形の胴部を持つもので、58は短く外反する口縁部をもつ。62は器形が不明だが、頸部に刻目突帯をもつ。63は二重口縁を持つ。64は小型の壷である。

65～67は高坏で、いずれも脚部のみである。65・66は「ハ」の字状に脚が開く。67は裾部で屈折して広がるものである。

６号竪穴式住居跡（第155図75～78）

75は底部から胴部にかけて残存する甕形土器で、底部は尖り気味の丸底である。76は脚部片で直線的に大きく外に開く。77・78は高坏の脚部で裾部で屈折して広がるものである。

８号竪穴式住居跡（第155図79・80）

ともに口縁部片で、79は椀形土器。80は刻目突帯をもつ甕形土器である。

９号竪穴式住居跡（第155図81～85）

81は甕形土器片、82・83は高坏の脚部の上位部分である。84は須恵器の坏身である。立ち上がりは内傾気味に立ち上り、端部は内傾するが、明確な段は認められない。底部外面部分に回転ヘラ削りを施す。焼成は悪く、全体的にシャープでない。85も須恵器の甕の口縁部片である。

10号竪穴式住居跡（第155図86～90）

86・87は甕形土器で頸部がくびれ、口縁部が弱く外反する。87は口縁が短く最大径は胴部にある。

88は須恵器の蓋と思われる。口縁端部は外傾するものの明瞭な段は認められない　天井部付近にわずかに回転ヘラ削りが認められる。89・90は高坏の脚部である。すべての土器が床面より浮いた状態であった。

11号竪穴式住居跡（第156図91～95）

91・94・95は甕形土器の胴部から底部にかけてのものである。91は丸底気味で、94は上底、95は平底を呈す。93は高坏の脚部片である。

12号竪穴式住居跡（第156図96～100）

96は甕形土器の胴部片。97・100は底部片で、97は平底で埋甕炉として使用されていたものと考えられる。内面全体に煤が付着しており、外器面はかなり脆くなっている。100は尖り気味の丸底である。98・99は須恵器の蓋である。98は歪みがひどく、偏平なつまみを有す。天井部に回転ヘラ削りの痕跡が認められる。99はナデ調整を施す。口縁部先端をつまみ出す。97以外は床面からかなり浮いた状態での出土である。

14号竪穴式住居跡（第156図101～112）

101～103は壷形土器で101は口縁部が外反する。102は口縁部が内湾気味に丸味をもって立ち上がる。

104・105は甕形土器の刻目突帯の部分である。

106～108は高坏で、106は本来台付鉢と呼んだほうが良いのかもしれないが、坏部は口縁部に向かいやや丸みをもち、大きく外に開く、坏部下位に明瞭な稜線は認められない。107の坏部は口縁部に向かって、直線気味に開く、坏部下位に明瞭な稜線を持つ。108は脚部で「ハ」の字状に脚が開く。

111・112は須恵器蓋で、偏平で雑な造りである。111はしっかりしたつまみが付く。口縁部先端はわずかにつまみ出されている。錦町下り山７・８号窯跡出土のものに類似する。111・112は流れ込みの可能性が高い。

15号竪穴式住居跡（第157図113～131）

113～115は壷形土器で、球形の胴部に、短くわずかに外反する口縁部が付く。113は頸部に刻目突帯を有す。

116～119は甕形土器の口縁部片及び胴部片である。刻目突帯はやや幅が広く格子状の文様を施すものもある（116・117）

120は須恵器の甕で、肩部が張る特殊な器形を呈

す。肩部と内面に自然釉が認められる。体部外面には上下２本の沈線によって区画した箇所に刺突文を施す。他の須恵器と比較すると丁寧な作りであるが、施文はやや粗い。121は平底の鉢、122・123は丸底の椀。124・125は高坏の脚部で「ハ」の字状に脚が開くものであるが、脚内面は上位で屈折し稜線を有す。126～128は底部で、126は円盤状の底部、127は丸底気味の底部、128は平底を呈す。129～131は脚部であるが、脚が短くやや小型のものであろう。

16号竪穴式住居跡（第158図132～139）

132～134は甕形土器の口縁部片で頸部に全くくびれがなく直行するもので、刻目突帯を有す。135～139は底部片で、135は丸底、136はやや上底気味の平底、137は丸みを帯びた凸レンズ状の平底、138は低い脚が付く、また139は丸みを帯びた平底を呈す。

17号竪穴式住居跡（第158図140～147）

146は須恵器の坏身である。立ち上がりは内傾し、端部は丸みを帯びる。147は須恵器の小型壷であるが、瑞の可能性もある。頸部外面に波状文を施し、また体部外面には上下２本の沈線により区画した箇所に刺突文を施す。その他は頸部に刻目突帯を有する口縁及び胴部片である。頸部にくびれを持たないもの（141・143～145）と壷になると考えられるもの（140）があるがいづれも小破片のために詳細は不明である。

18号竪穴式住居跡（第158図148～150）

148は甕形土器の口縁部片で頸部のくびれが全く認められないもので、刻目突帯を有す。149・150は高坏で、149は台付鉢と呼ぶべきものかもしれないが、坏部下部にわずかに稜線を持ち、口縁は直線的に立ち上がる。150は高坏の脚部で、裾部で屈折して広がるものと考えられる。

19号竪穴式住居跡（第158図151～155）

151は高坏の脚。152は壷の胴部。153は頸部にくびれをもち、口縁部はわずかに外反する。154は尖り気味の丸底、155は突出気味の平底を呈す。

20号竪穴式住居跡（第159図156～157）

156は刻目突帯を有すが、縄文時代のものである。157は丸底の椀である。

21号竪穴式住居跡（第159図158・159）

158は平底の胴部片、159は甕形土器の口縁部片で頸部にくびれを持たない。

22号竪穴式住居跡（第159図160～166）

160・161は甕形土器の口縁部片で、160は頸部に全くくびれをもたない。161は頸部にわずかにくびれをもち、口縁部は直立気味に立ち上がる。162は椀か。163は壷形土器の口縁部片で短い口縁部が直立気味に立ち上がる。164は須恵器の壷で瑞になる可能性が高い。球形の体部に文様は施さず、カキメ調整のみとなる。165・166は底部片で平底を呈す。

23号竪穴式住居跡（第159図167・168）

いずれも須恵器で167は有蓋高坏である。脚部は透かしを持たず、ラッパ状に外反する。坏部の立ち上がりは短く内傾し端部は丸みを有す。168は坏身である。立ち上がりは短く内傾し端部は丸みを有すと思われる。

24号竪穴式住居跡（第159図169～172）

170、171は甕形土器の胴部片で、170は幅の広い刻目突帯を有す。172は平底を呈す。

25号竪穴式住居跡（第160・161図173～184）

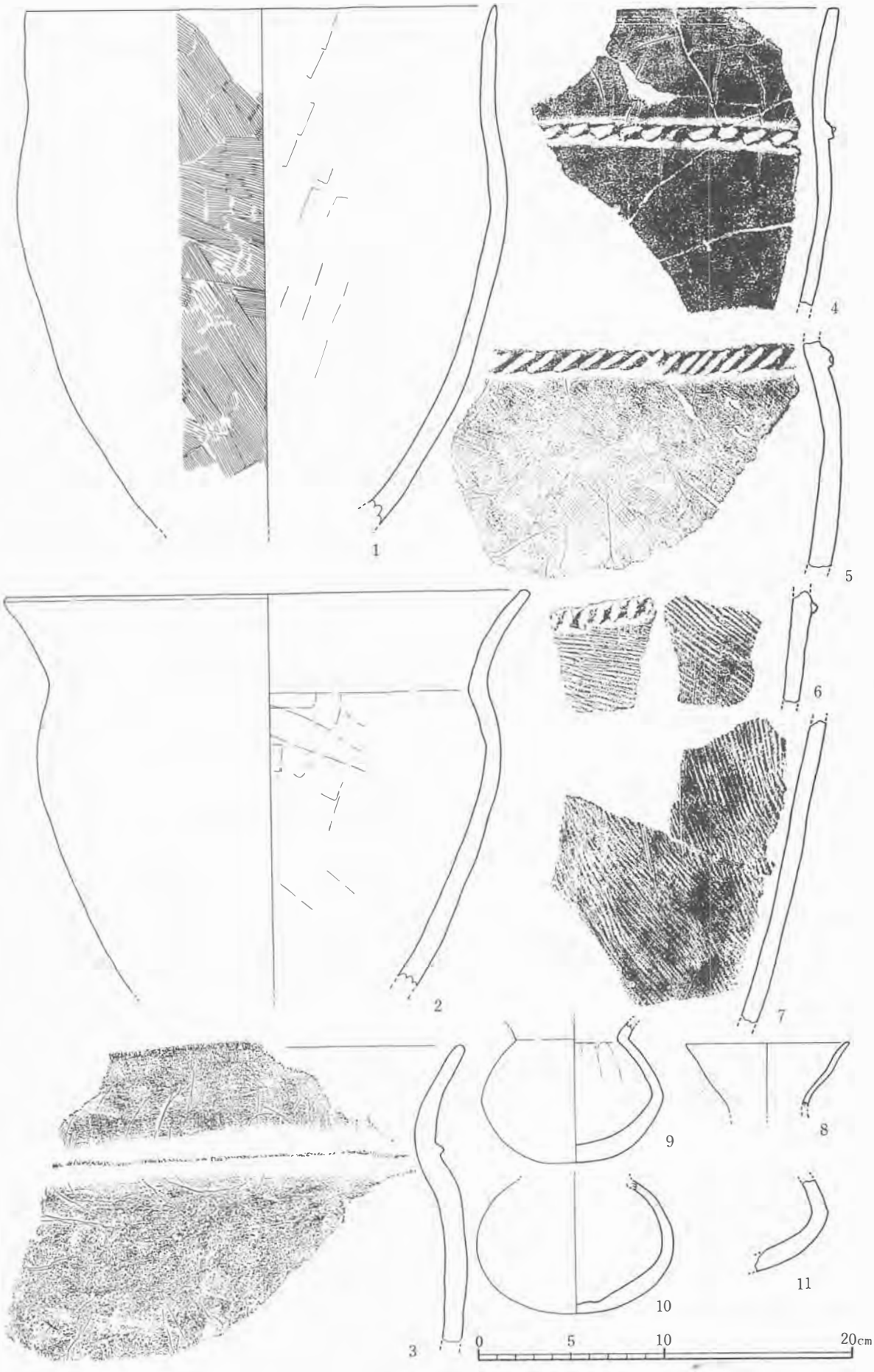
173は球形の胴部に二重口縁をもつ。174・175は口縁部片で頸部にくびれをもつ。176は小型の壷。177は倒卵形の胴部で頸部にくびれを有す。179～182は高坏である。179・180は坏部下位はほぼ水平に延びる。脚部は「ハ」の字状に大きく開くものと思われる。181は坏部は口縁部に向かって、直線気味に開き、坏部下位に明瞭な稜線を持つ。脚部は裾部で屈折して広がるものである。182は坏部は口縁部に向かって、直線気味に開き、坏部下位に稜線を持たない。183・184は甕形土器である。183の頸部はわずかにくびれを持ち、直立気味に口縁部が立ち上がる。一方184は刻目突帯を有す。頸部にくびれを持たず、口縁部がわずかに外反する。

27号竪穴式住居跡（第161図185）

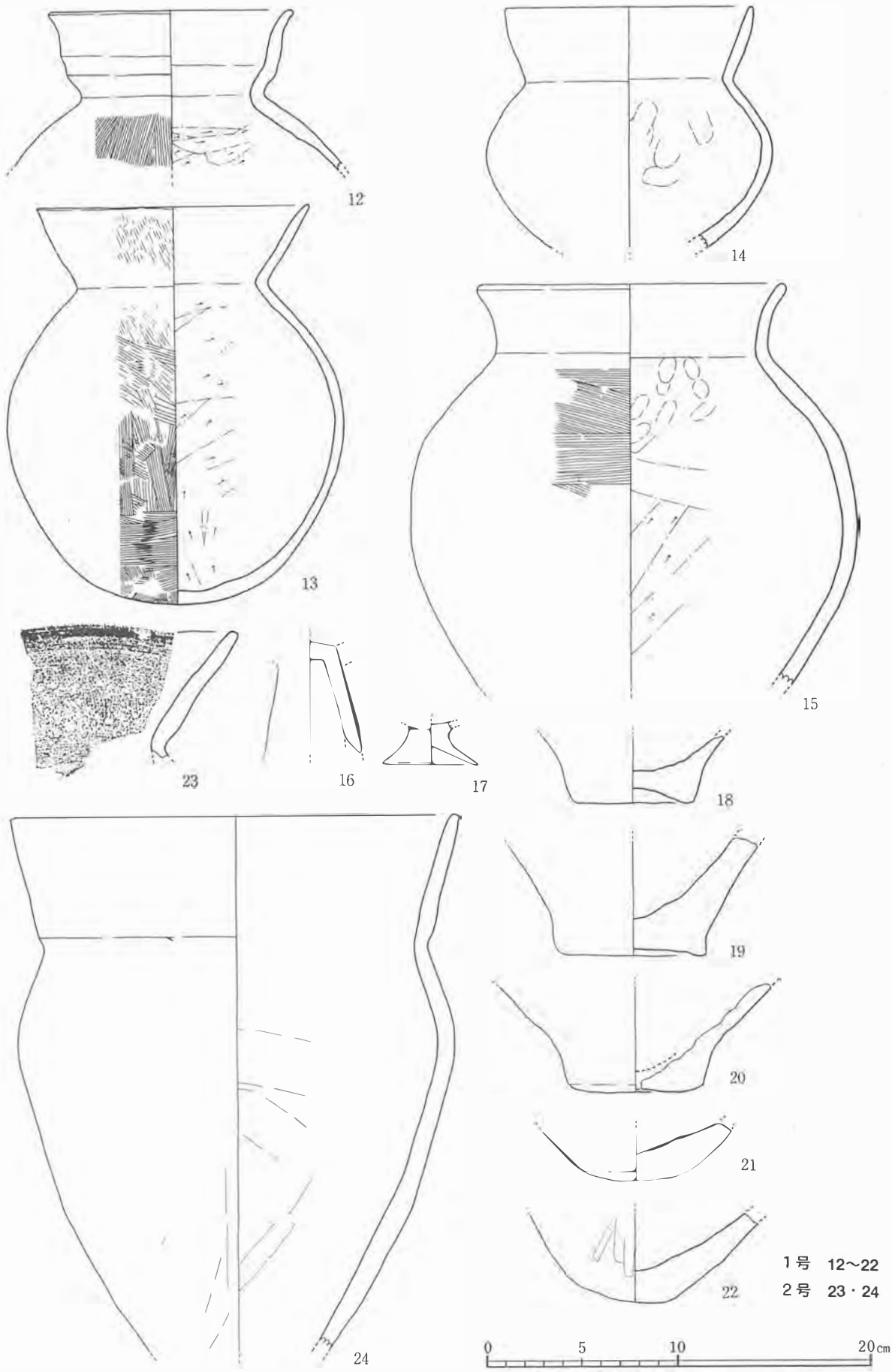
185は器高が低く、口縁部径と器高の比率がほぼ同じ割合である。低い脚が付く。

②　鉄鏃（第163図）

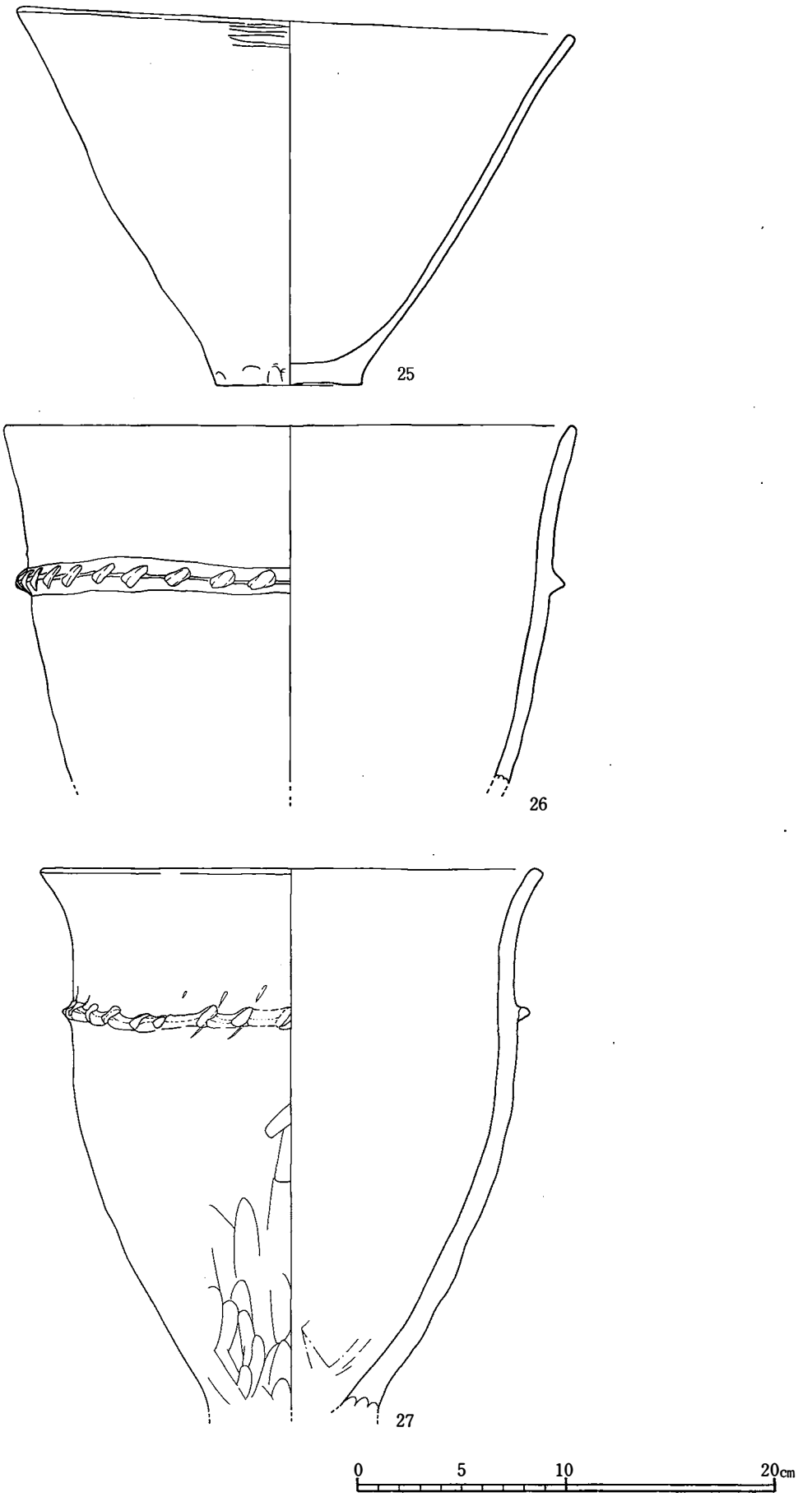
鉄鏃は、図化した以外に３号・４号・27号竪穴式住居跡からも出土している、いずれも鉄鏃と思われ



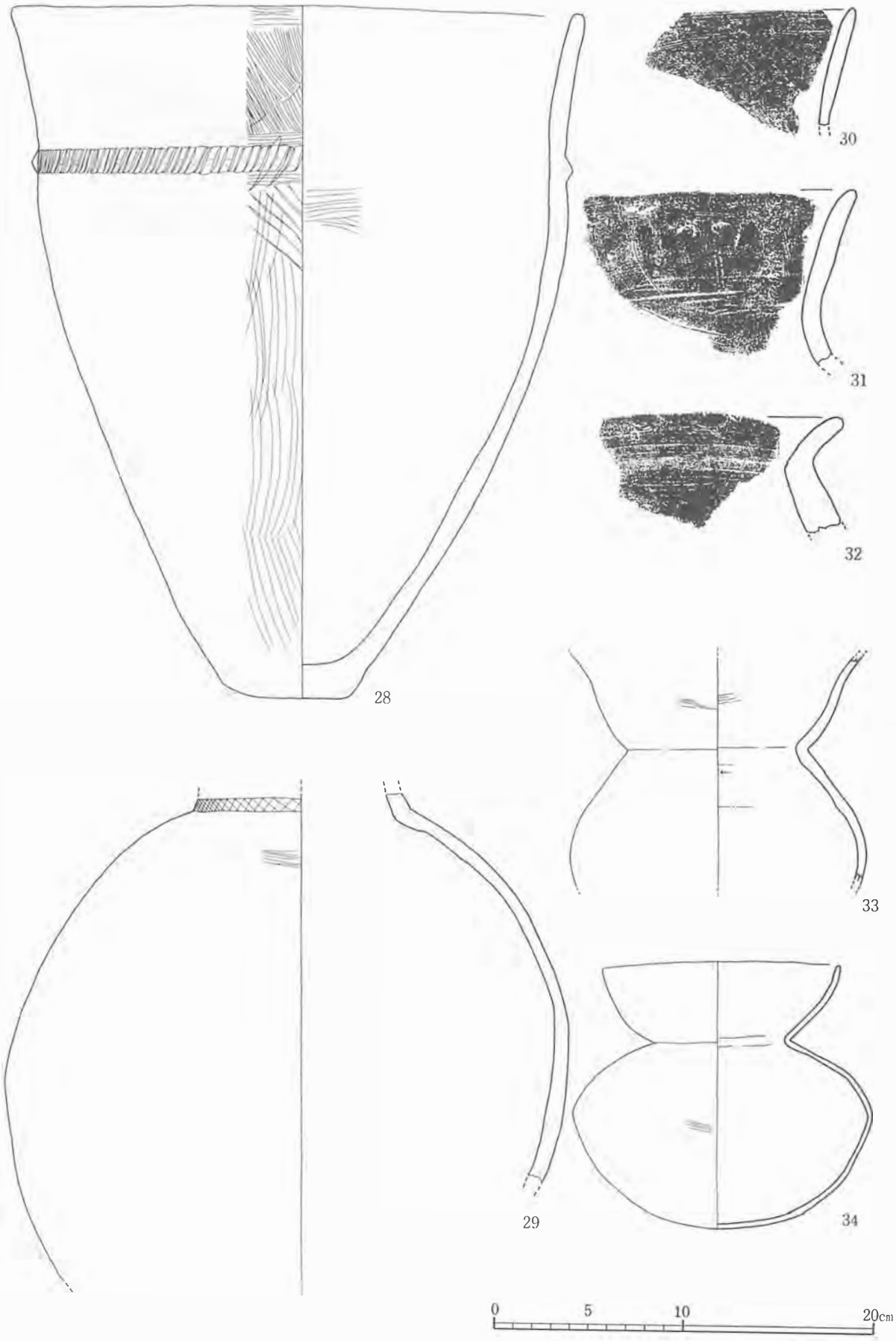
第146図　１号竪穴式住居跡出土土器実測図



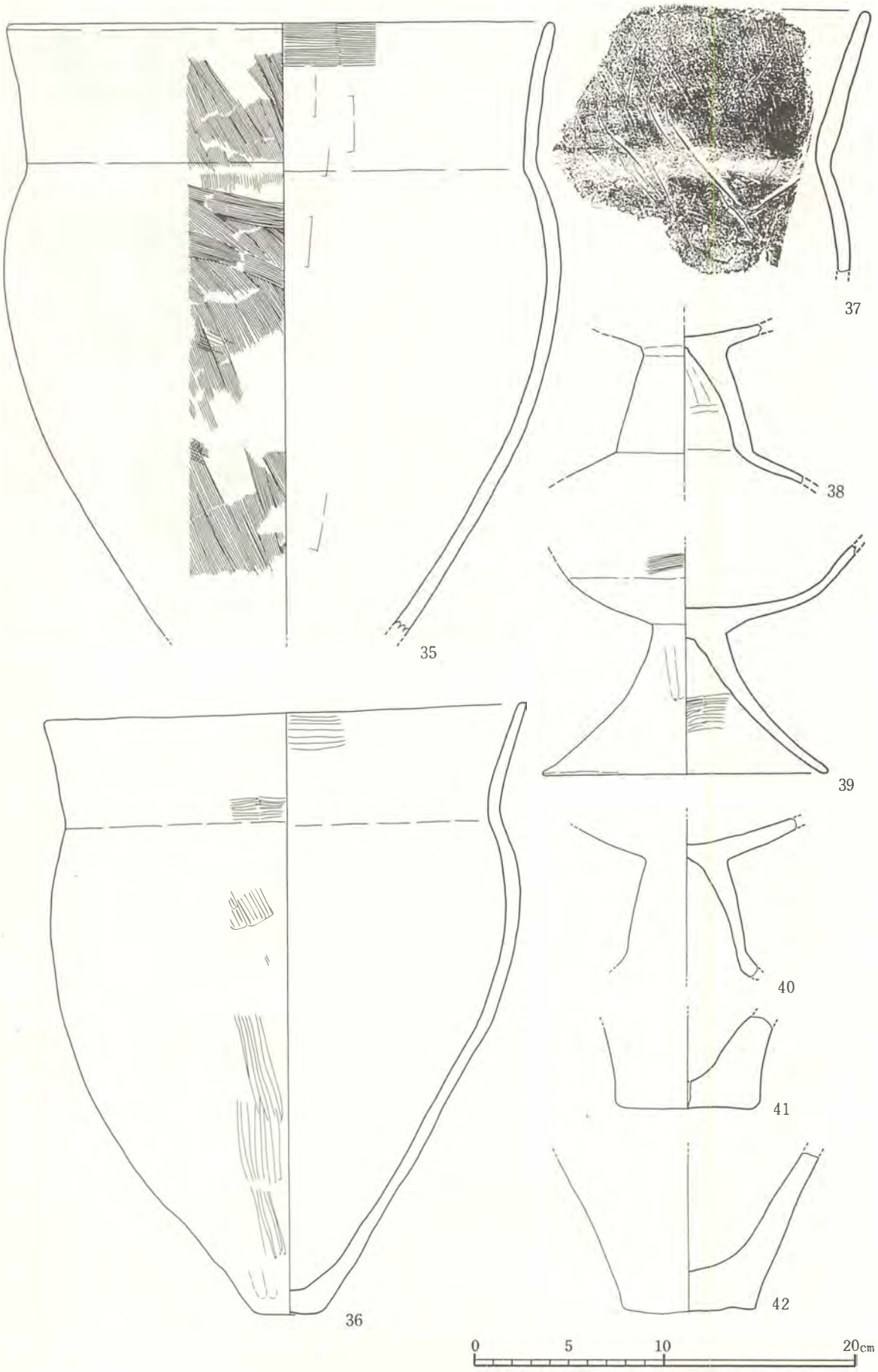
第147図　1・2号竪穴式住居跡出土土器実測図



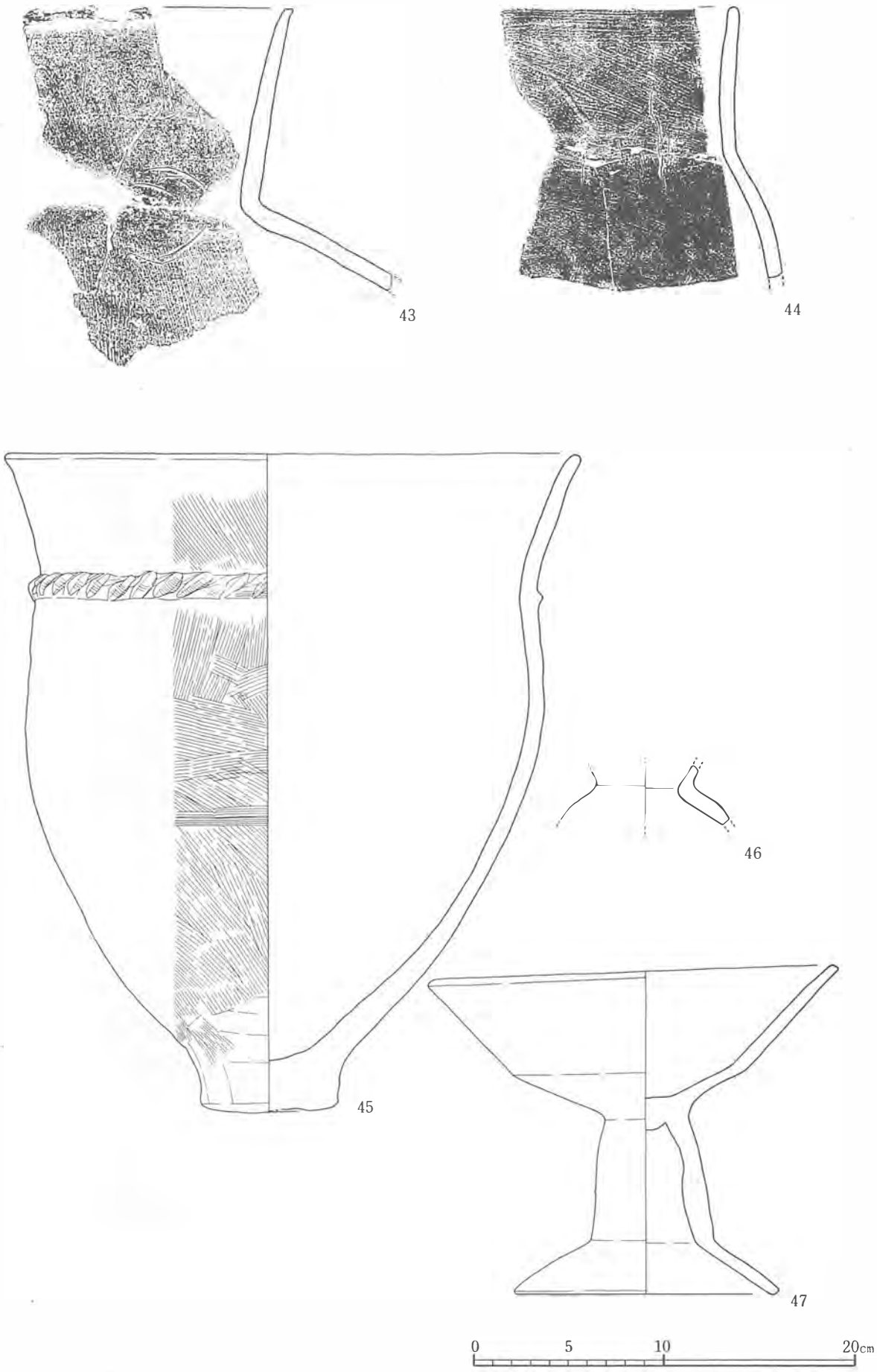
第148図　３号堅穴式住居跡出土土器実測図



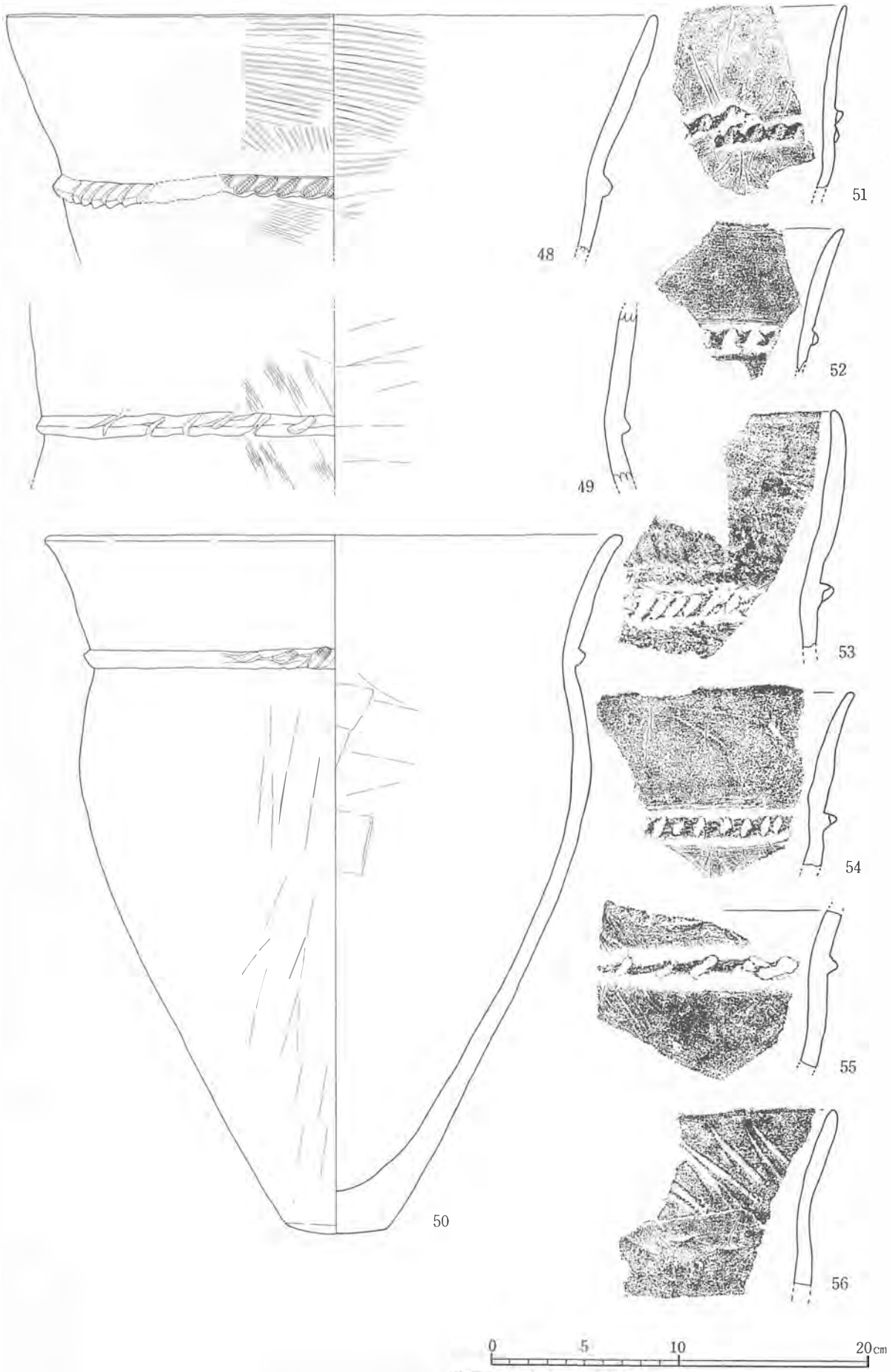
第149図　３号竪穴式住居跡出土土器実測図



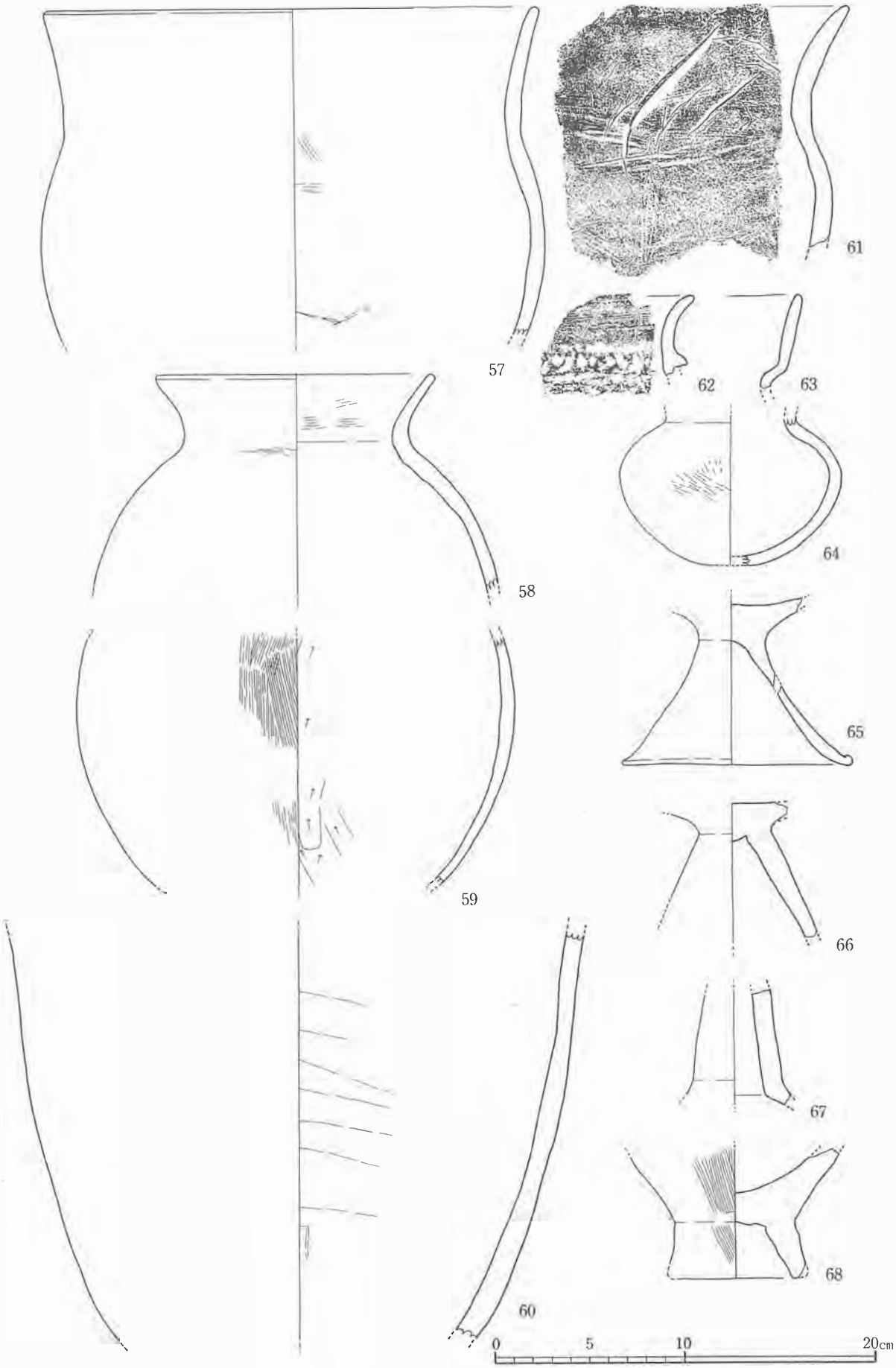
第150図　３号竪穴式住居跡出土土器実測図



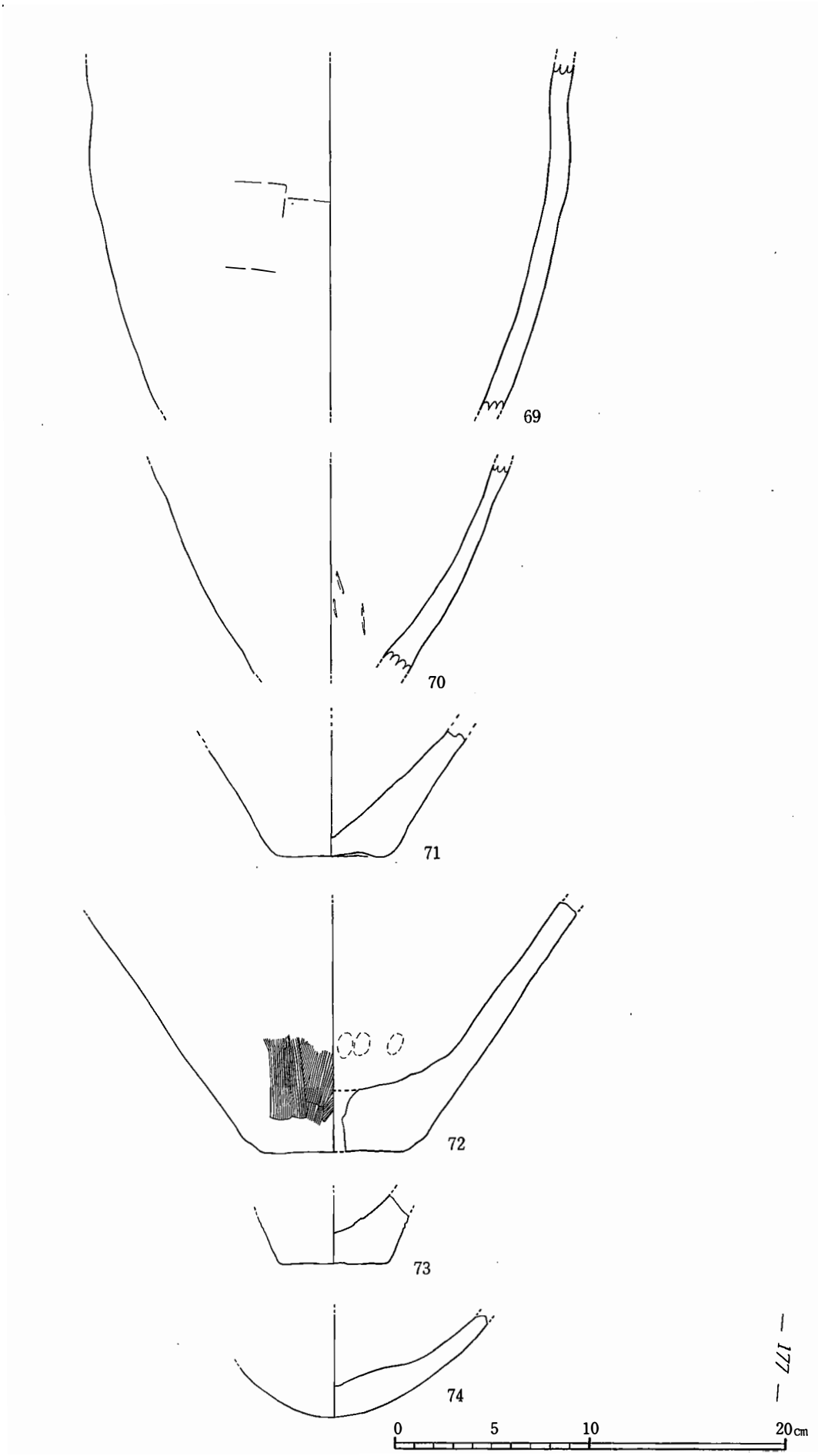
第151図　４号竪穴式住居跡出土土器実測図



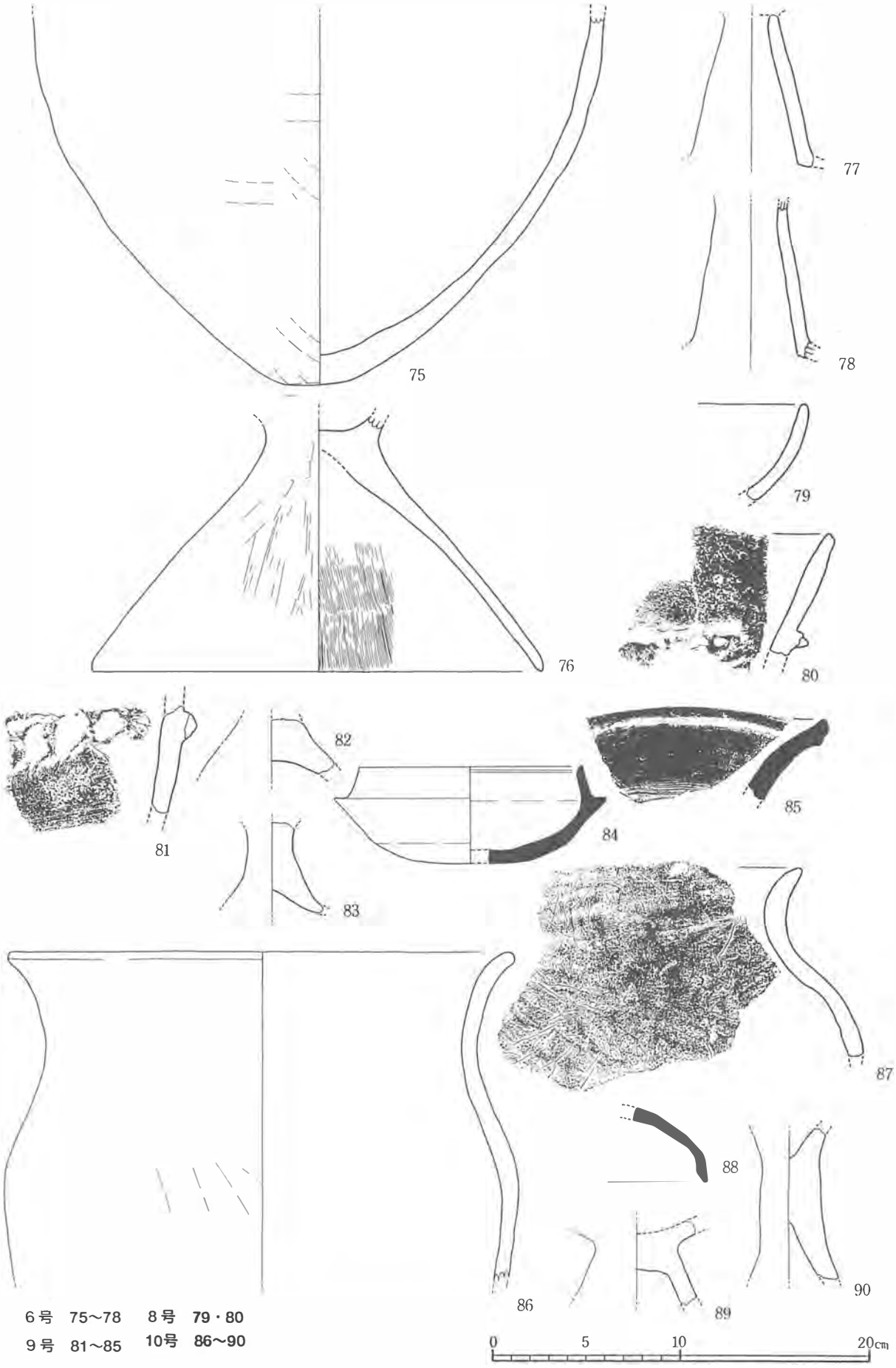
第152図　５号竪穴式住居跡出土土器実測図



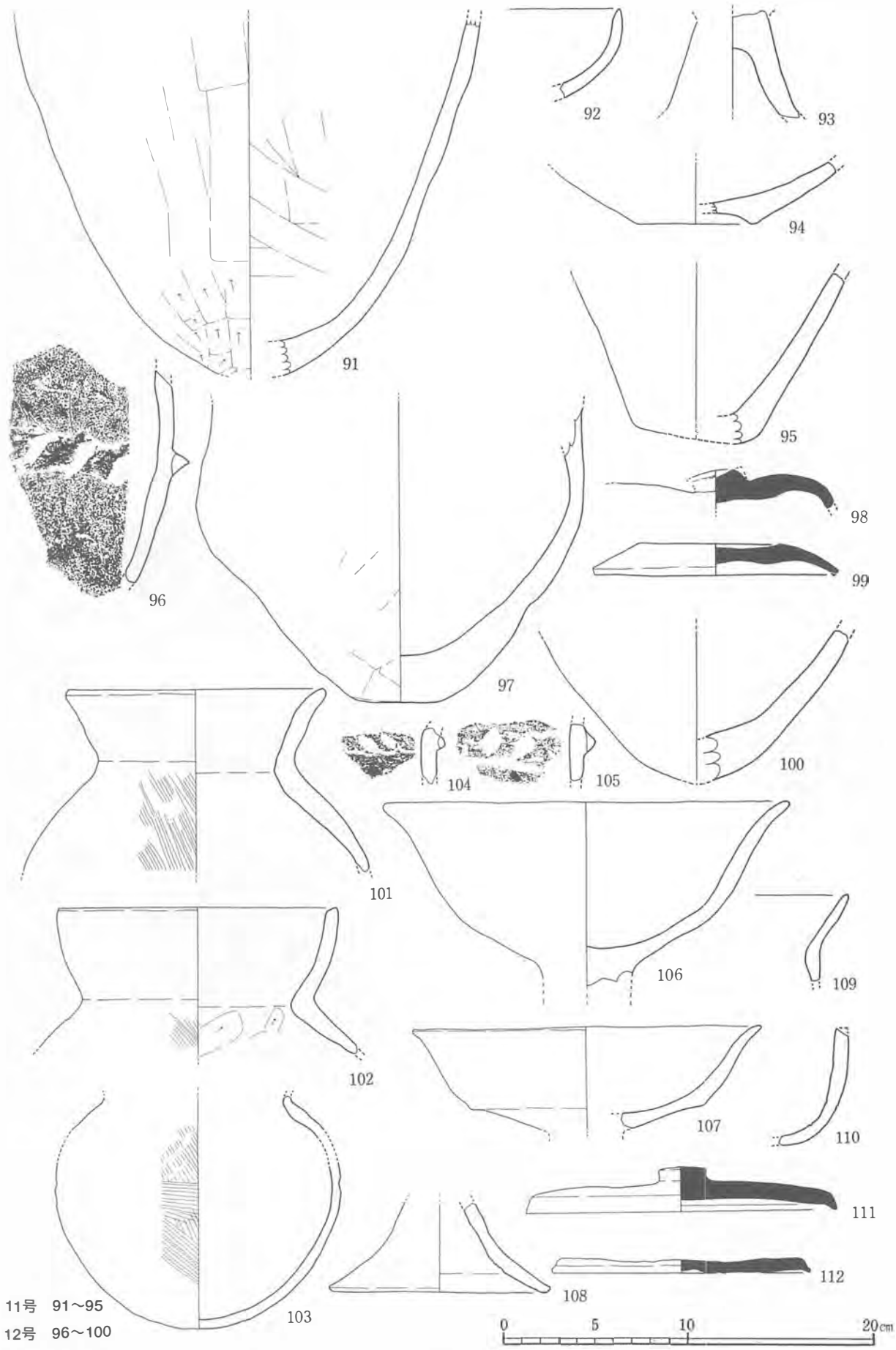
第153図　５号竪穴式住居跡出土土器実測図



第154図　５号竪穴式住居跡出土土器実測図

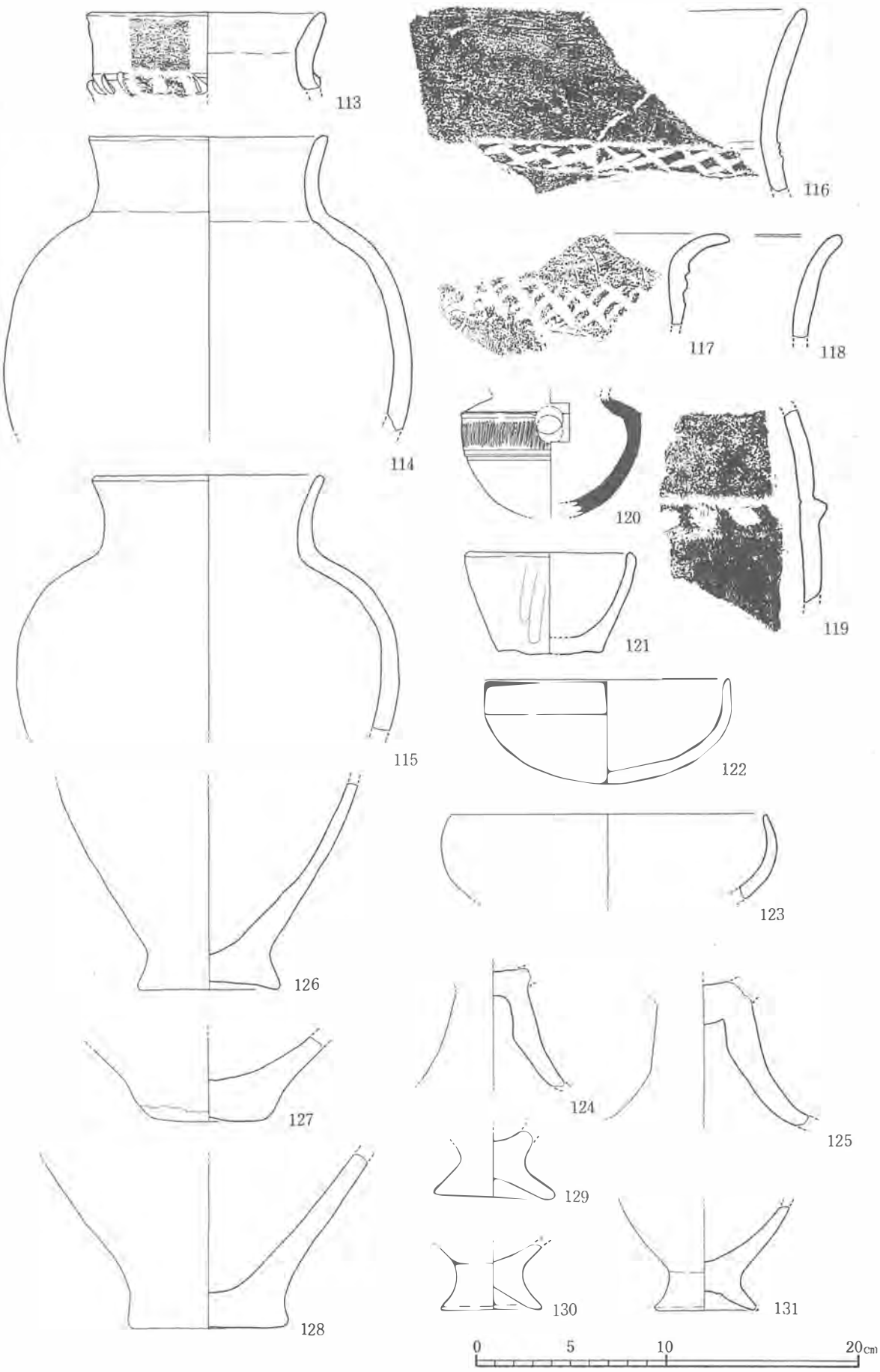


第155図　6・8・9・10号竪穴式住居跡出土土器実測図

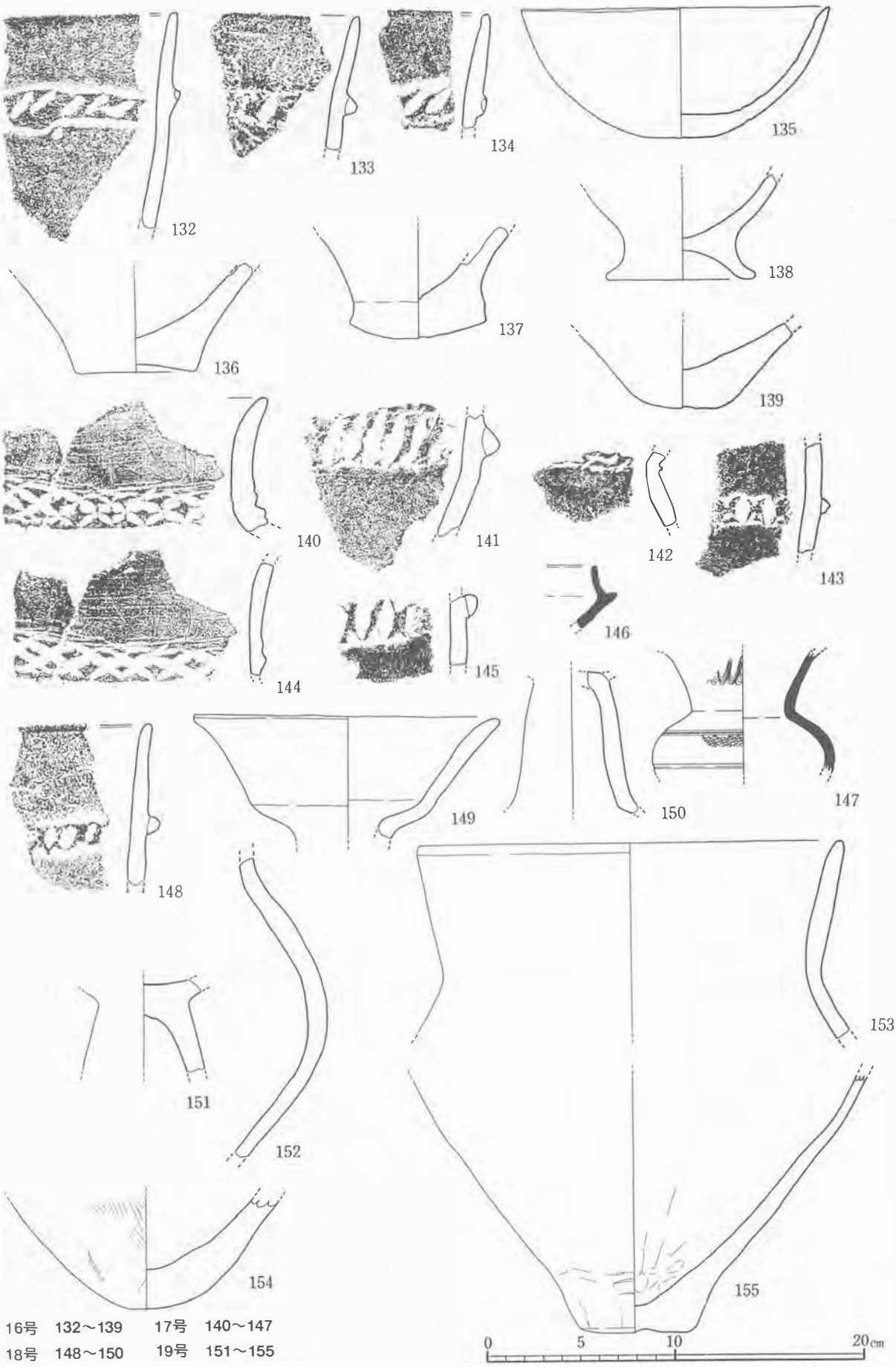


11号　91～95
12号　96～100
14号　101～112

第156図　11・12・14号竪穴式住居跡出土土器 実測図

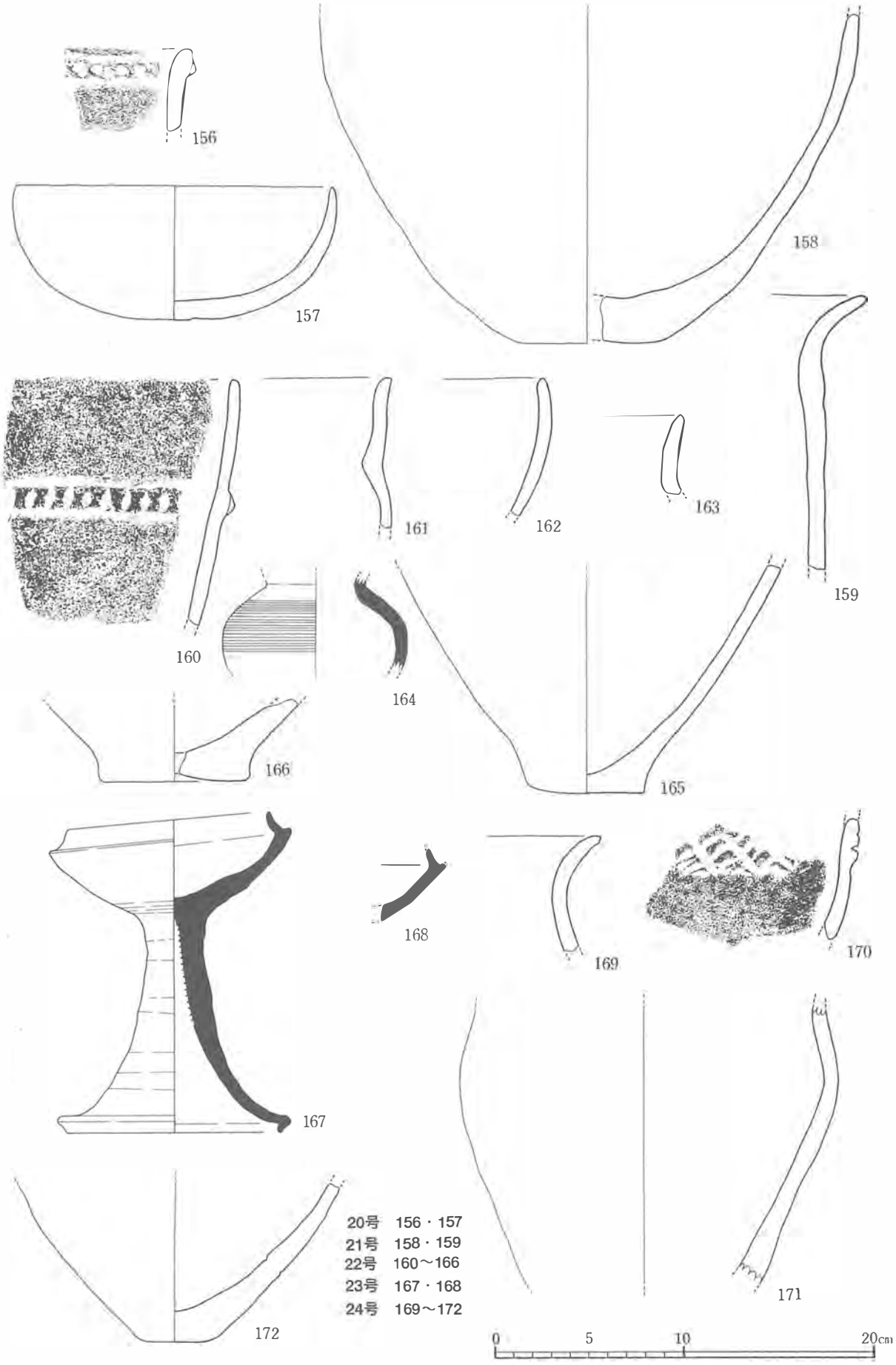


第157図　15号竪穴式住居跡出土土器実測図

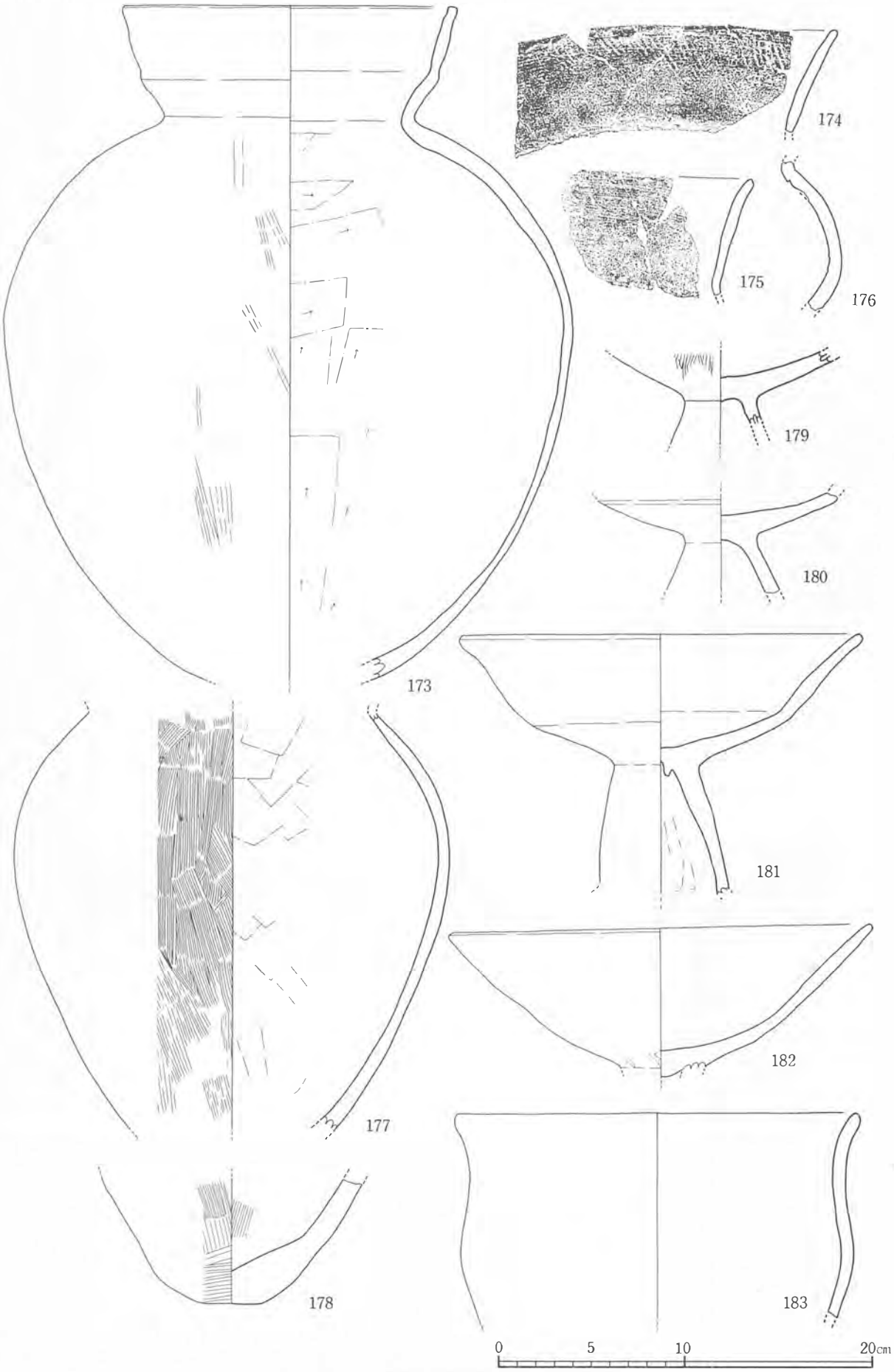


16号　132～139　　17号　140～147
18号　148～150　　19号　151～155

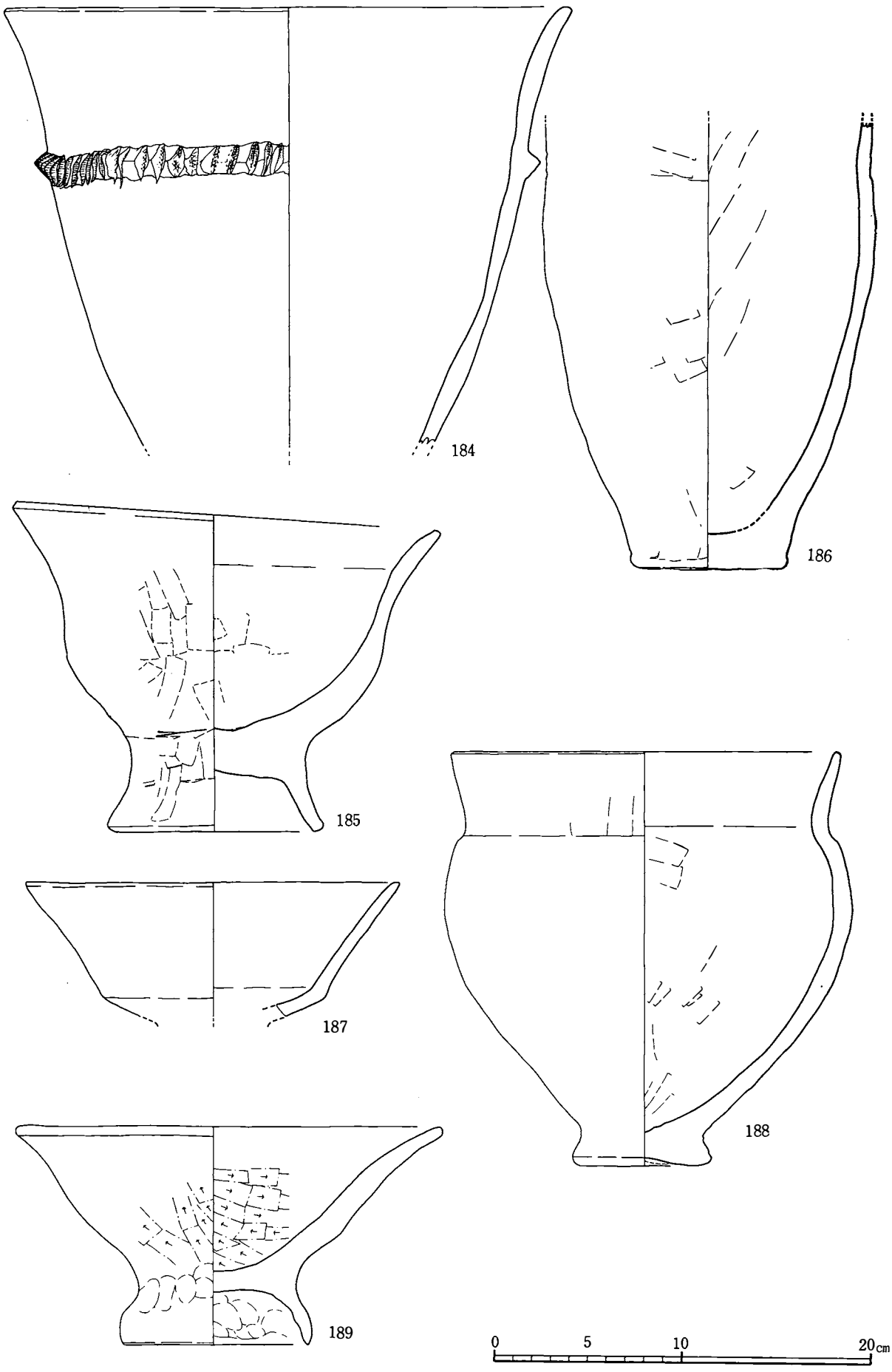
第158図　16～19号竪穴式住居跡出土土器実測図



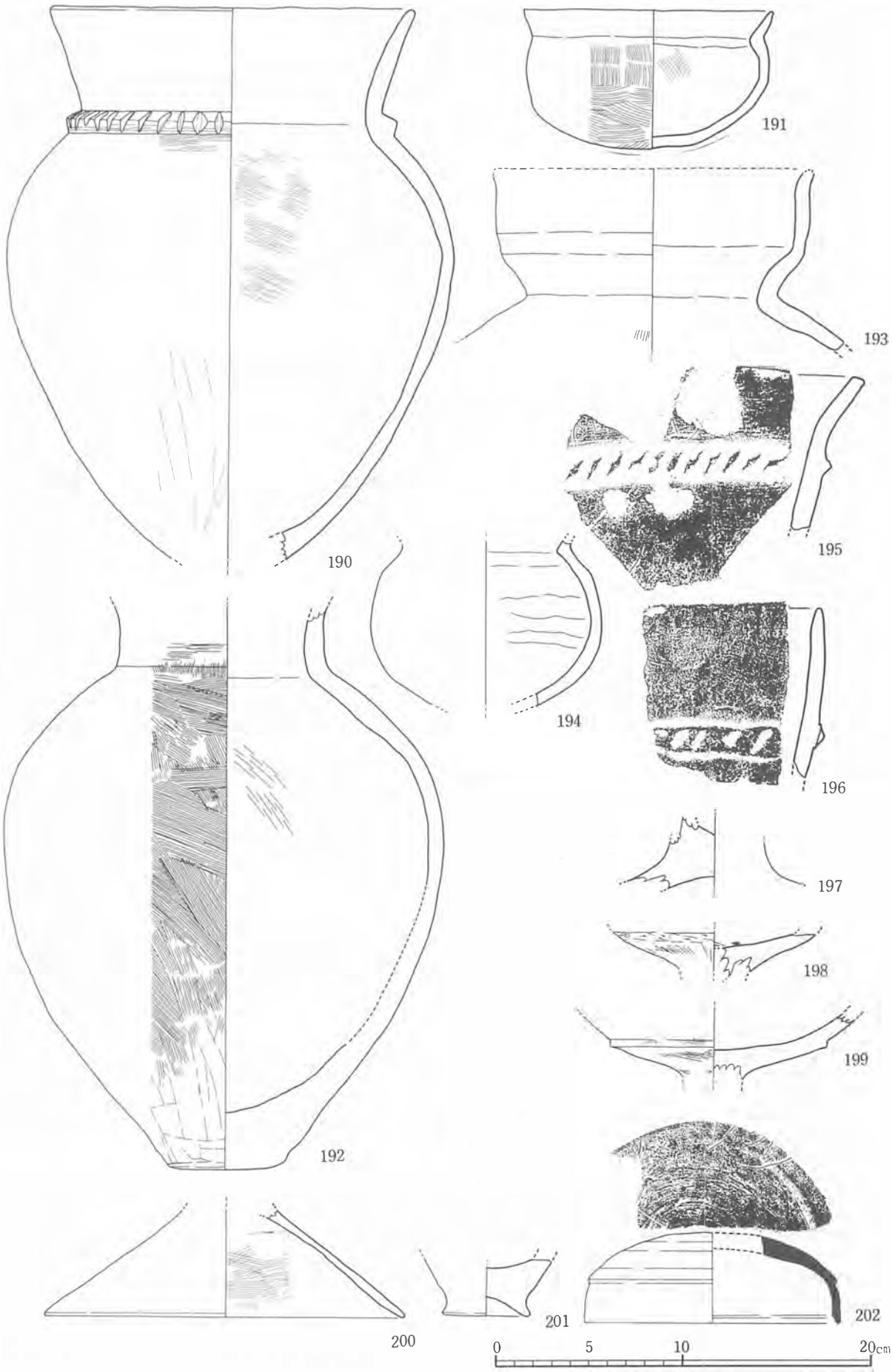
第159図　20～24号竪穴式住居跡出土土器実測図



第160図　25号竪穴式住居跡出土土器実測図



第161図　27号竪穴式住居跡等出土土器実測図



第162図　遺構外出土土器実測図

るが、残存状況は悪い。

1～5はいずれも鉄鏃で、1号（1）・9号（2）・18号（3）・19号（4）・24号（5）竪穴式住居跡出土のものである。1は1号竪穴式住居跡出土のもので有茎柳葉式の鉄鏃であり、身部の断面形はレンズ状、茎部の断面形は長方形を呈する。2は9号竪穴式住居跡出土の有茎三角式の鉄鏃で関部は内湾する。身部の断面形はレンズ状、茎部の断面形は長方形を呈する。3は18号竪穴式住居跡出土の小型の鉄鏃で、圭頭斧箭式の鉄鏃で身部の断面形は本来薄いレンズ状を呈するものと思われるが、錆びのために厚く丸みをもったように見える。茎部の断面形は正方形を呈する。4は19号竪穴式住居跡・5は24号竪穴式住居跡出土のもので、茎部分のみ残存する。

③　石製品（第164図～第166図）

1は3号竪穴式住居跡出土の石皿で火を受けて数点に割れた状態で出土した。窪みは見られず、敲打痕跡のみ認められる。2は4号竪穴式住居跡出土のもので、窪みが顕著である。3は22号竪穴式住居跡出土のものである。窪みは2に比べると顕著ではないが、わずかに認められる。4・5は12号竪穴式住居跡出土の石皿で、4・5ともに窪みが認められる。特に5は両面に窪みが認められる。縄文時代の石皿とほとんど同じものである。第166図の不明石製品は、3号竪穴式住居出土。

3．土坑（第145図）

1号土坑

J21グリッド内に位置する。平面形態は不整な三角形を呈し、2段に掘り込まれている。1段目の深さは7㎝前後で、最大の深さは22㎝を測る。脚台付の鉢が出土した。

2号土坑

1号土坑のすぐ南西側のI21グリッド内に位置する。自然なごく浅い落ち込みと考えられる。出土遺物としては甕形土器がある。

3号土坑

K9グリッドに位置する土坑で、その平面形態は、75㎝×72㎝の楕円形を呈する。深さは64㎝程度で、埋土は単層である。また床面は比較的平坦である。

椀・甕形土器が出土した。

4．土坑出土の遺物

1号土坑（第161図189）

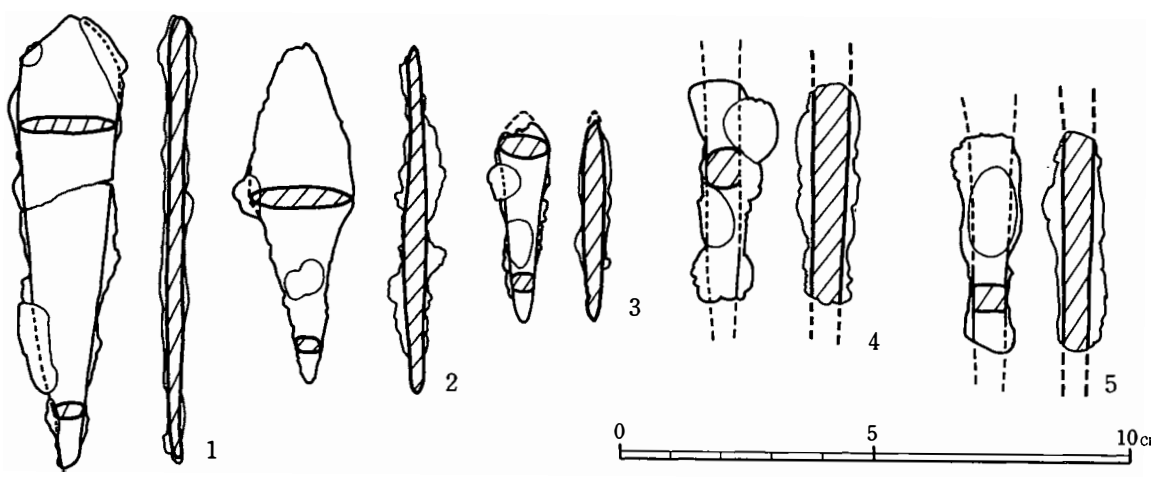
脚付きの鉢で、口径に比して器高が低い。

2号土坑(第161図187・188)

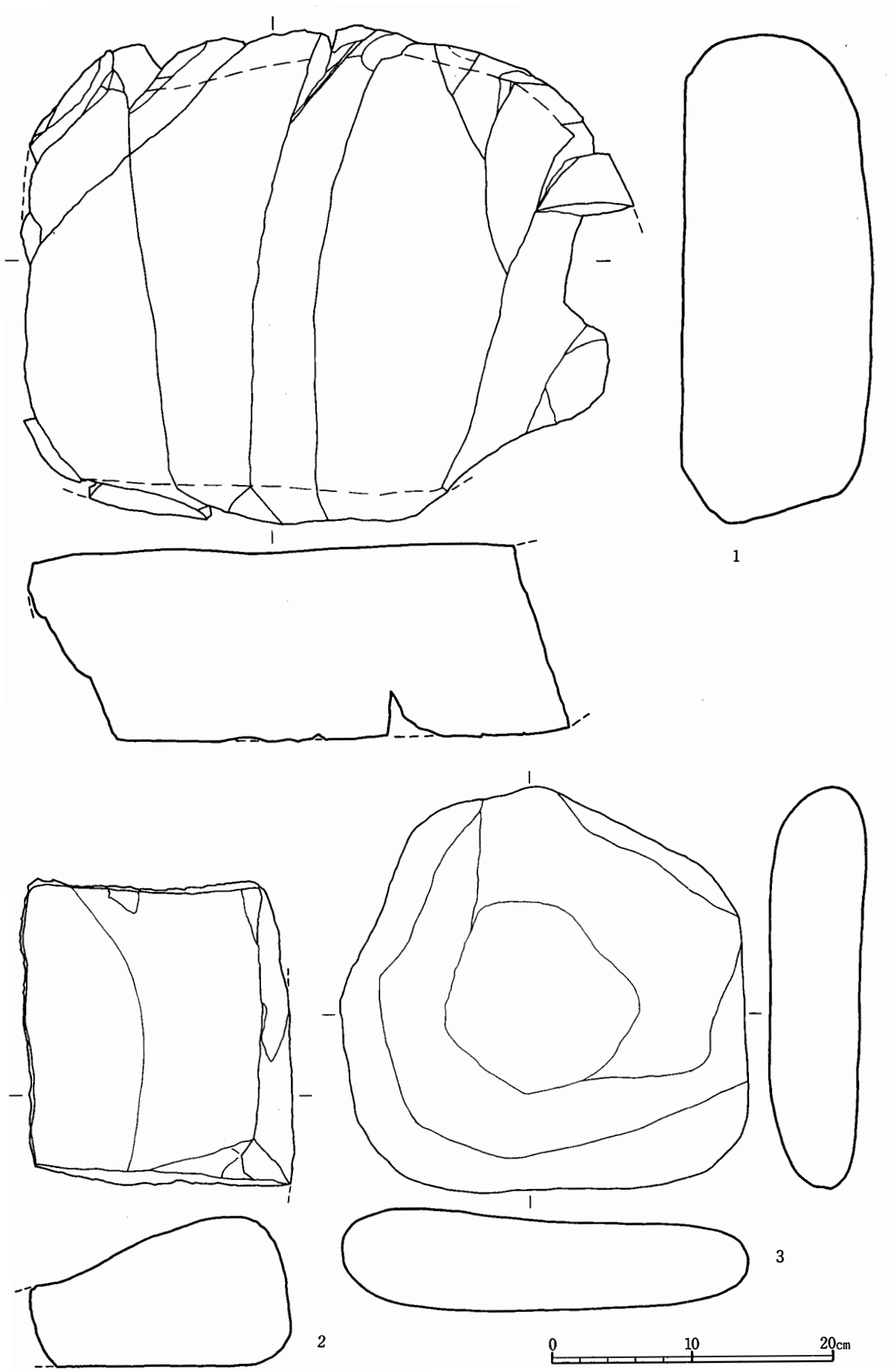
187は高坏の坏部で口縁部に向かい直線的に開く。坏部下位に明瞭な屈曲を持つ。188は器高の低い甕形土器で、口縁部径と器高の比率がほぼ同じである。わずかにくびれを持つ頸部から直立気味に口縁部が開く。底部は円盤状を呈す。

3号土坑(第162図190・191)

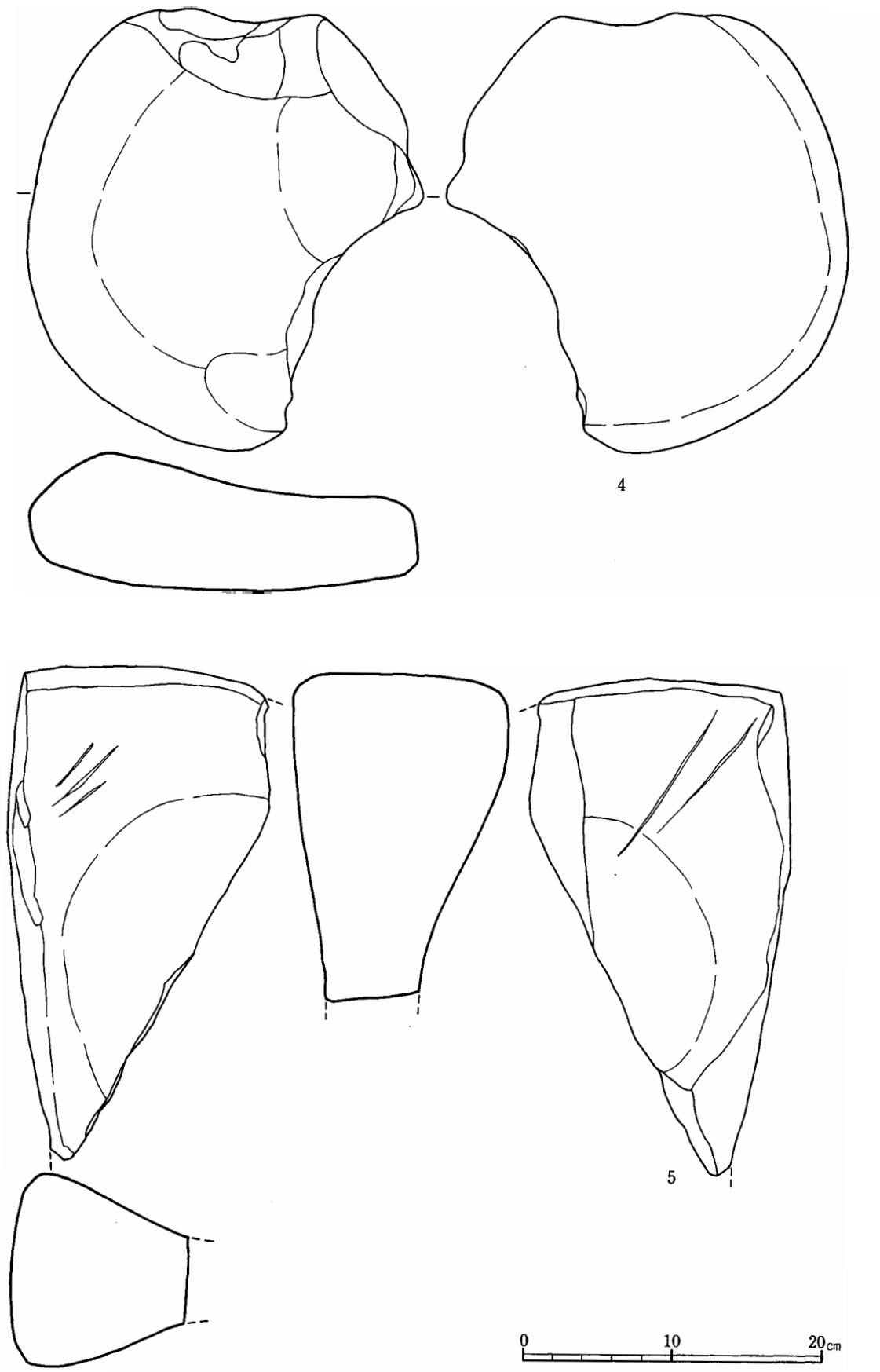
190は倒卵形の胴部より口縁部が外反して立ち上がるもので、頸部に刻目突帯を有す。191は小型の椀で、半球形の体部に外反する短い口縁部がつく。



第163図　竪穴式住居跡出土鉄製品実測図



第164図　竪穴式住居跡出土石皿実測図



第165図　竪穴式住居跡出土石皿実測図

５．遺構外出土の遺物

①　土器（第161・162図186・192～202）

186は甕形土器の胴部で、底部は平底で、器高に比して胴部径が小さく、張りがなく、ずん胴形となる。192は壷形土器の胴部である。卵形の胴部よりわずかに外反する口縁部が付くと思われる。193は壷形土器の口縁部で二重口縁になる。194は小型の壷で、球形の胴部から口縁部が外反すると考えられる。195・196は甕形土器の口縁部で、刻目突帯を有し、頸部にくびれを持たないものである。197～200は高坏である。201は底部で上底状の短い脚である。202は須恵器の蓋坏でわずかに稜が認められる。天井部外面に回転ヘラ削り調整が認められる。口縁端部は段を有す。

②　装飾品（第167図）

１点管玉がＦ区より出土している。

６．まとめ

古墳時代も沖松遺跡の主体的な位置を占めるものの一つである。これまでに報告してきたことを、簡単に整理してみたい。

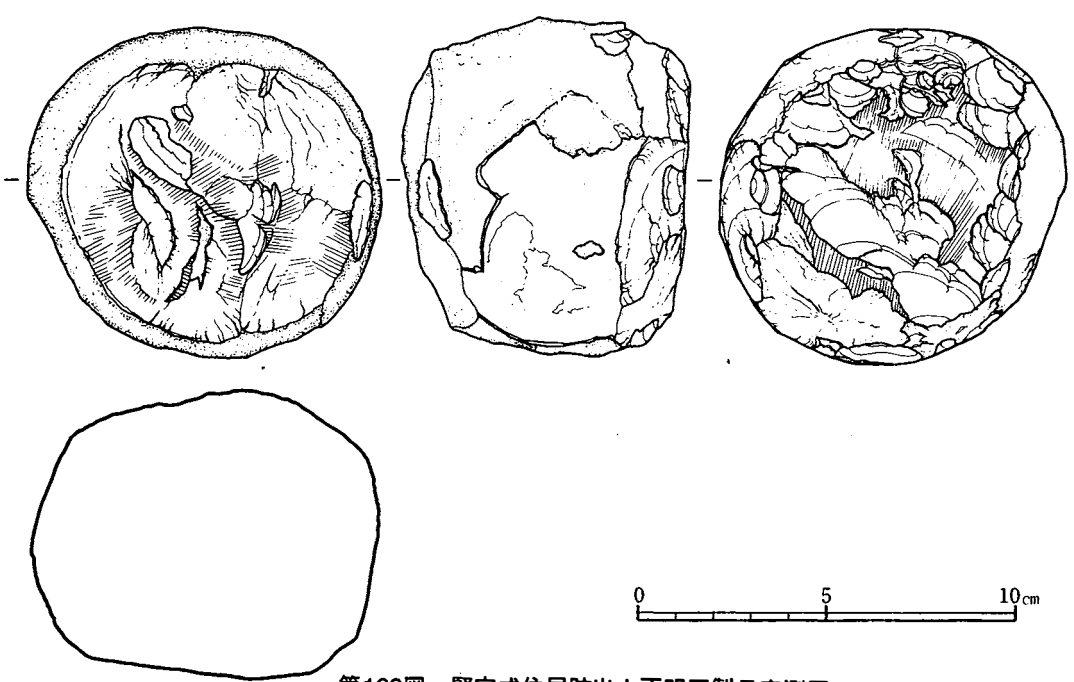
まず住居構造についてであるが、27基の竪穴式住居跡が発見された。その住居跡の構造について整理する。

まず炉の構造に注目すると、０類：焼土の痕跡も認められないもの（２・10号）。Ⅰ類：焼土だけが認められるもの（１・３～９・13・25～27号）。Ⅱ類：浅い掘り込みをもつもの（14～16・19・22号）。Ⅲ類：埋甕炉を有すもの（11・12・18・20・24号）がある。Ⅳ類：焼土は認められるが後世の土坑などにより破壊され不明なもので、Ⅱ類かⅢ類の可能性があるもの（21・23号）。

次に住居の大きさであるが、（LL）一辺が７ｍ越えるもの（１号）。（L）一辺が６ｍ程度のもの（３～５・18号）。（M）一辺が4.4～６ｍ未満のもの（２・６・８・12・14・16・19・20・22～24号）。その中でも２・19・22号住居跡は他に比べ大きい。（S）一辺が４ｍ以下のものである。（７・９～11・21号）。その中でも10号は極端に小さい。（F）その他長方形を呈すもの（15・25号）である。

また柱構造であるが、不明なものが多いが２本柱構造のもの（６・９・14・16号）と４本柱構造のもの（３～５・７・８・18～20・22・23号）がある。

一方住居跡の築造時期の前後関係は切り合いにより、３号（ＩＬ４）→４号（ＩＬ４）、８号（ＩＭ４）→９号（ＩＳ２）、13号（？）→14号（ⅡＭ２）、



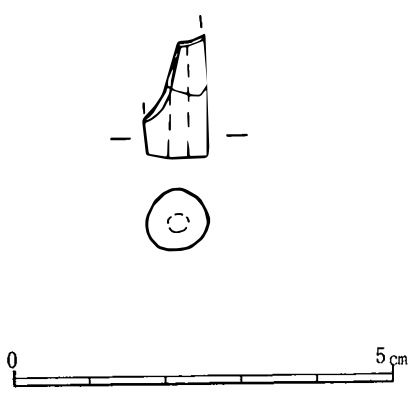
第166図　竪穴式住居跡出土不明石製品実測図

17号（？）→16号（ⅡＭ２）、19号（ⅡＭ４）→18号（ⅢＬ４）となる。

次に竪穴式住居跡出土の土器についてであるが、その主体をなす甕・壷・高坏・須恵器を中心として概観する。またその年代的位置付けは、非常に地域色の強い土器で南九州で一般に「成川式」と呼称されている土器に類似するものであり、人吉・球磨地方で調査例が少ないことより、鹿児島・宮崎の編年を参考とする。その他中部九州では緑川流域の土師器の編年を、須恵器は陶邑編年を参考とする。ただし住居跡の削平の関係もあるのだろうが土器片が少量しか出土しない住居跡との格差がありすぎて、住居跡同士の土器の比較ができにくい。しかも多量の土器を出土する住居跡では、形態的に前後すると考えられるような土器が一緒に出土する。削平を受けている住居跡で出土遺物量が少ないもの程流れ込みの可能性が高い。また年代決定の資料となる須恵器が出土する住居跡にはほとんど他の土器が出土していない。以上のような状況から住居跡の年代的位置付けははなはだ不確定なものとなる。

甕

甕は突帯を有するもの（Ⅰ）と有しないもの（Ⅱ）の大きく２種に大別される。それぞれ頸部のくびれの状態により、頸部がくびれるもの（Ａ）とくびれないもの（Ｂ）の２種に、更に口縁部が緩やかに外反するもの（ａ）と直線的に外反するもの（ｂ）とに分けられる。さらに胴部下半や底部形態により更に細分は可能である。



第167図　古墳時代装身具実測図

甕ⅠＡａ類（50）

頸部に刻目突帯を有し、頸部がくびれ、口縁部がゆるやかに外反するものである。５号竪穴式住居跡出土の50は、胴部が張らず、底部がやや丸みを帯びた平底となる。

甕ⅠＡｂ類（45・48・116）

口縁部が直線的に外反するものである。４号竪穴式住居跡出土の45は胴部が張り底部が尖り気味の平底を呈す。その他口縁部のみで、またＸ字状の刻み目ではあるが15号竪穴式住居跡出土の116も含まれると思われる。

またａ、ｂの細分はできないが５・49もこの類に該当する。

甕ⅠＢａ類（27・54・55・184）

頸部のくびれがほとんど見られないもので、口縁部が緩やかに外反するものである。３号竪穴式住居跡出土の27は底部が尖り気味の平底と推察される。

甕ⅠＢｂ類（26・28）

やはり頸部のくびれがほとんど見られないもので、口縁部が直線的に外反するものである。３号竪穴式住居跡出土の28は底部は平底を呈す。その他小破片ばかりで全体形を伺い知るものがないためＢｂ類に一括したが、頸部のくびれが全く認められず、実質的には頸部と呼べる箇所が無いもので、直行するものが存在する（ｂ′；132～134・148・160）。

以上４種類に細分したが、全体としては小破片が多くその全体形を伺い知る資料が少ないが、ＩＢｂ類がその主体を占めると考えられる。その他のものは極少量である。口縁・頸部の形態はＩＢｂ′類は多々良友博氏によるⅦ期に、Ａａ・Ａｂ・Ｂａ類はⅥ期に類似する。

甕ⅡＡａ類（２・61・86・183）

刻目突帯を有しないもので、頸部がくびれ、口縁部が緩やかに外反するものである。１号竪穴式住居跡出土の２は最大径を口縁部に有する。その他は口縁径と胴部径がほぼ等しく、胴部最大径も２に比べ下位に来る。

甕ⅡＡｂ（24・36）

口縁部が直線的に外反するものである。２号竪穴

式住居跡出土の24は口縁部を僅かに肥厚させる。また36は僅かに尖り気味の平底を呈す。

甕ⅡＢ類（１・56）

頸部にほとんどくびれを持たないもので、口縁部が僅かに外反するもの（ⅡＢａ；56）、垂直気味に立ち上がるもの（ⅡＢｂ；１）がある。

甕Ⅱ類も４種に細分したが、出土点数は少量である。また胴部下半を欠損する資料が多いため分類に不確実な点が多い。調査区南側の住居跡の遺物出土量が少量なことにも起因するのかも知れないが、北側の住居跡にその出土点数が多い。主体をなすものはＡ類である。鹿児島県において類似しているものとしてはＶ期のものに近い。

壷

壷も刻目突帯を有するもの（Ⅰ類）と有しないもの（Ⅱ類）が存在する。さらにその胴部の最大径及びその形状などにより細分した。

壷Ⅰ類（29・62・113・140・190）

頸部に刻目突帯を有するものである。量的には少量で、全体の器形を伺い知ることのできる資料がないことより、一括する。また突帯部の文様が甕に比べ幅が広く種類も多い。

29はほぼ球形の胴部で、頸部に極薄い突帯を貼り付けＸ字状の施文を施す。また口縁部形態もくの字状に近いもの（113）、緩やかに外反するもの（62）直立気味に外反するもの（140）などがある。

その他土坑出土のもので倒卵形の胴部で、口縁部が直線的に外反するものがある（190）。

壷ⅡＡ類（９・10・11・46・64）

胴部の最大径が10cm前後のもので、偏平な球形の胴部を持つもの。いづれも口縁部が欠損しているが恐らく口縁径が胴部径を上回らないものと思われる。この類は野田拓治氏による沈目Ⅱ期より出現し、塚原Ⅱ期頃に顕著となるもので実年代は４世紀末から５世紀前半頃であると思われる。

壷ⅡＢ類（14、34、176）

胴部の最大径が15cm前後のもので、偏平な球形の胴部を持つもの。34は他に比べ器壁が薄く口縁部は内湾する。この類も口縁径が胴部径を上回らないものと思われる。

壷ⅡＣ類（13・103）

胴部の最大径が15～20cm前後のもので、球形の胴部をもつ。いづれも器壁が薄い。13は口縁部が直線的にくの字状に外反する。

壷ⅡＤ類（15・58・59・101・102・114・115）

胴部の最大径が20～25cm前後のものである。口縁部形態により、前記の13に比べ緩やかではあるが、58のようにくの字状に外反するもの（ａ）、114・115のように直立気味に外反するもの（ｃ）、15・101のようにその中間形態のもの（ｂ）、また102のように内湾するもの（ｄ）に細分される。

壷ⅡＥ類（177）

やはり胴部の最大径が20～25cm前後のもので、倒卵形を呈する。

壷ⅡＦ類（12・33・173）

二重口縁状のものである。この類も４世紀末から５世紀前半頃までの時期に比定できると考える。

高坏

高坏も全体の資料を伺い知ることのできる資料は少なく、坏部の形態及び脚部の形態に分けて分類せざる得ない。

坏部は体部から屈折して口縁部が立ち上がるもの（Ⅰ類）と稜線を持たず緩やかに立ち上がるもの（Ⅱ類）に分けられる。また口縁部の形態によりさらに細分する。

Ⅰａ類　口縁部が外反するもの（107・181）

Ⅰｂ類　口縁部が直線的に外反するもの（47）

Ⅱａ類　明確な稜線をもたず椀状になるもの（39）

Ⅱｂ類　明確な稜線を持たず、直線的に外反するもの（182）。

その他Ⅲ類として、器壁が厚く坏部の器高が深く緩やかに外反するもので、稜線をもつかどうか微妙なもの（106・149）がある。この類は丹塗が認められる。

脚部は裾部が「ハ」の字状に広がるもの（Ａ；39・65・108）と裾部が屈折して広がるもの（Ｂ）に分けられる。またＡ類は脚部内面に稜をもつもの（124・125）が存在する。またＢ類は脚上部ではそれほど開き気味でなく裾部で開くもの（ａ；47・67・77・78・150）と脚上部で既に開き気味になっ

ているもの（ｂ；38・40）がある。その他小破片で全体形が不明だが脚上部が中空にならないもの（82・83・90・93）も存在する。高坏は在地系のものと外来系のものに分かれると思われるが、小破片のためうまく分類できていない。

底部

甕・壷の区分は不明であるが、平底のもの（１類；28・41・42・45・71・73・95・128・155）、わずかに丸みを帯びた凸レンズ状のもの（２類；21・22・36・50・137・139）、丸底あるいは尖り気味の丸底（３類；74、75・91、100・135・154）、短い脚が付くもの（４類；126・129～131・138）がある。１類には45のような突出気味の平底のものが存在する（ａ）。４類には脚というより上げ底のもの（126）がある。また４類は小型の甕・鉢等に付随するものと思われる。

須恵器

出土量は少なく図化したもの８点以外には甕の胴部小破片が３点あるのみである。図化したものはそれぞれ陶邑編年に対応させると、９号住居跡出土の84はⅡ型式２段階頃、15号住居跡出土の120は該当できるものが見当たらないが、Ⅰ型式４・５段階頃に比定できるものではないかと考える。17号住居跡出土の146はⅡ型式３段階頃に、147は形態的にはⅠ型式段階の様相だが調整等には粗雑でそれほど溯るものではないようだ。22号住居跡出土の164は147より新しい様相を示す。23号住居跡出土のものはⅡ型式５段階頃に比定できる。

以上住居跡構造と土器の分類について整理したものが第３表である。これらのことより、①炉の構造がⅠ類のものは調査区北側及び南西部分の住居跡に集中する。②しかも北側の住居跡のものはその床面積が大きい。一方南東側のものは平均的なものかそれ以下のものである。③逆に炉構造がⅡ・Ⅲ類のものは調査区南東部のみに認められる。④Ⅱ類の住居跡の規模は平均的なものが多い。Ⅲ類の規模はＬ・Ｍ・Ｓのいずれも存在する。⑤また２本柱構造のものは（LL）・（Ｌ）及び（Ｍ）の中でも大きい住居跡には認められず、柱構造はその住居跡の面積との関係が強いようだ。⑥住居の切合だけからみれば柱構造・住居の大小は時期差ではないようだ。また炉構造は１例だけで確実なことは言えないがⅡ類→Ⅲ類への変換の可能性がある。またⅢ類の埋甕炉は宮崎県内に類例があり、いづれも６世紀後半～７世紀中ごろにかけてのものという。⑦ほとんどの住居跡は正方形に近いプランであるが、その中で15号・25号住居跡は長方形に近いプランを呈す。また26号住居跡もその可能性が高い。⑧削平の関係にもよるのであろうが、遺物出土量の多い住居はⅠ類の大型の住居跡（１・３・５号）及び長方形の住居跡（25号）である。これらのうち５・25号は削平を受けているにもかかわらず、出土量が多い。⑨土器個々についてみれば甕Ⅰ類でも先行すると思われるＡａ類・Ａｂ類・Ｂａ類を出土している住居跡は15号住居跡を除けば、北側（１・３～５号）と南西部の25号住居跡である。また壷Ⅱ類Ａ・Ｂとした小型のものも北側（１・３～５号）と南西部（25・26号）のみの出土である。壷Ⅱ類Ｆとした二重口縁を有するものも１・３・５・25号からの出土で南東部の住居跡からの出土はない。一方須恵器はそれ自体の出土量が少量ではあるが、須恵器を出土している住居跡はⅡ類に多く、調査区南東部に位置するものに限られる。⑩上記で述べた須恵器が住居跡に確実に伴うものと仮定すれば15号（ⅡＦ？）→9（ⅠＳ２）・17（？）・22号（ⅡＭ４）→23号（ⅣＭ４）の流れとなる。⑪また大半の住居跡で出土遺物中に突帯を有する土器片が確認できる。その突帯部の文様が北側の住居跡ではほぼ刻目だけなのに対し、南東側の住居跡ではわずかではあるが、その文様にバリエーションが認められる。

8(⑨)よりⅠ類の調査区北側に位置する大型住居跡（１・３・５号）や同じくⅠ類25号住居跡では遺物出土量が多いにもかかわらず、須恵器は出土していないことは、人吉・球磨地方において須恵器を伴う以前の段階頃の所産と考えられる。また４号や26号も上記に近い年代が推測される。これらは小型丸底壷・二重口縁を有す壷からは４世紀末から５世紀前半頃に、甕も多々良氏の編年ではⅥ類は５世紀代頃になると思われ、１・３～５・25・26号は４世紀末から５世紀代頃に比定できると考えられる。一方南

第３表 古墳時代竪穴式住居跡主要出土土器一覧

住居番号	住居構造	甕Ⅰ類				甕Ⅱ類				壺							高坏								底部				須恵器	備考 住居の切り合い等
		A		B		A		B		Ⅰ	Ⅱ						坏Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ	A		B		1	2	3	4		
		a	b	a	b	a	b	a	b		A	B	C	D	E	F	a	b	a	b		a	b	a	b						
1号	ⅠLL?	?		?		○	○		○		○	○	○	b		○								?		○	○	○			突帯無文有
2号	OM?						○																								
3号	ⅠL4			○	○		○			○		○				○			○			○		○	○	○	○				壺刻目x・鉢
4号	ⅠL4		○								?							○						○		○					3→4
5号	ⅠL4	○	○	○	○	○	○			○	○			a		○						○		○		○		○	○		刻目
6号	ⅠM2																					○						○	●		
7号	ⅠS4																														
8号	ⅠM4				○																										8→9
9号	ⅠS2				?																		●							○	
10号	OXs?					○																	●							△	いづれも流込可能性大
11号	ⅢS2																						?			○		○			
12号	ⅢM?				?																					○		○		△	
13号	Ⅰ?																														13→14
14号	ⅢM2				?								○	b d			○				○	○						○		△	
15号	ⅢF?		●		?					○				c									○			○			○	○	刻目x
16号	ⅢM2				b																					○	○	○	○		16→17
17号					?					○																				○	刻目x
18号	ⅢL4				b																										19→18
19号	ⅡM4						?							?									?			○		○			
20号	ⅢM4																														
21号	ⅣS2																									○					
22号	ⅡM4				b																					○				○	
23号	ⅣM4																													○	
24号	ⅢM?																									○					刻目x
25号	ⅠF?			○		?					○	○			○	○	○			○				○							
26号											?																				
27号	ⅠM?																														台付鉢

●；分類上その類にはいるが、やや異質なもの。
須恵器△は古墳時代のものではないもの。
罫線にまたがっているものはその所属がどちらか不明なもの。
？；可能性があるもの。

東側の住居跡は遺物量が少なく年代比定が困難だが、須恵器を伴う住居跡や甕ＩＢｂ′類の存在よりおおまかには６世紀代頃に比定できると思われる。ただし15号住居跡は５世紀代まで溯る可能性がある。また８号住居跡も南東側の住居のなかでは先行するものかも知れない。一方23号住居跡は７世紀初頭まで下るかも知れない。

このことより炉構造の大きな流れとしてはＩ類→Ⅱ類になることが認められる。しかし⑩のようにⅡ類→Ｉ類のような例もある。ただしこのことについては⑨や出土土器の様相からして調査区南東側の住居群そのものが全体的に新しいものと考えられ、南東側の住居群の中では一時的には併存していたものと理解している。Ｉ類の住居の中でもその規模が小さいものは後出するのかも知れない。またⅢ類の住居跡からの遺物が微量で時期を押さえる資料がないが、前述の住居跡の切合関係や宮崎県の例からⅡ類の住居跡より後出するものと推察している。しかし部分的にはⅡ類の住居跡と併存していたと思われる。その年代は、Ｉ類の住居が４世紀末頃から６世紀前半頃に、Ⅱ類が５世紀末から６世紀代、Ⅲ類が６世紀後半から７世紀初頭位に比定されるものではなかろうか。また調査区北側及び南西側の住居群は４世紀末から５世紀代に、調査区南東側の住居群は５世紀末より７世紀初頭位を考えている。

ただし４世紀末から５世紀頃とした１・３～５・25号住居跡のＩ類の甕は形態的にバリエーションがみられ、頸部がくびれるものから、僅かにくびれるもの、くびれないもの（Ａａ→Ａｂ→Ｂａ→Ｂｂ→Ｂｂ′）といった推移が考えられるが、それらの土器が同一住居内で出土したり、住居の切り合い（３号→４号）からは一概に言えないようである。

ただしそれは４号住居跡で不要になった土器類を廃棄した３号住居跡に破棄したものとも考えられる。また５世紀前半頃までは甕の形態にバリエーションをもち、６世紀代頃になると甕の形態は頸部が全くくびれず直行するものに斉一化され、代わりに突帯の文様にバリエーションをもつようになるといった解釈も成り立つであろう。いかんせん６世紀代とした住居跡の出土遺物が少量であり、特に突帯に刻目以外の文様を有するものの器形が不明なものが多過ぎる。

他に問題点として②の北側に巨大な住居跡が多いということについては十分な回答を用意できていない。ただ何の根拠も示せないが大型住居（北側）→長方形住居（南西部・15号）→中型住居（南東部）といった変換があるように思われる。また炉構造にしても球磨郡相良村の深水小園遺跡谷川地区の竪穴式住居跡ではいづれもⅡ類としたものである。その年代は報告者は須恵器が入る直前もしくは入って間もない頃とされており（坂田1994）それは沖松遺跡の調査区北側の住居跡頃の時期とも重複する可能性のある時期でもある。また時期は弥生時代後期から古墳時代初頭頃ではあるが錦町夏女遺跡でもⅡ類の住居跡が多く、この炉構造の変換は沖松遺跡に限ってのものかもしれない。人吉・球磨地方でこの時期の調査例が乏しく、さらなる類例の増加を待ちたい。

土坑について

確実な土坑は３号だけであると考えるが、その用途は不明である。

遺構外からの出土ではあるが高坏の脚を転用した鞴の羽口も出土している。しかしそのわりには、鉄製品は思いのほか少ない。それは高坏の脚を転用した時期はもう少し新しい時期なのかも知れない。また装身具類もほとんど発見されなかった。

第６節　奈良時代以降の遺構と遺物

分布（第168・189・190図）は大まかには、北に焼土を有する土坑群、中央に掘建柱建物跡、南東に土坑と中世の竪穴式住居跡等が認められる。一方遺構外出土の土器の分布に目をむけると、Ｆ15杭周辺、Ｇ８～Ｇ３杭周辺に分布する。これはほとんど縄文時代後期・晩期の土器分布と重複するが、いづれも縄文土器の集中部分より僅かに南に位置する。陶磁器の分布は点在的だがＧ８・６・５グリッド付近に僅かに集中する。

１．土　坑

22基の土坑が検出された。そのうち４号から９号までは不定の平面形を呈し、広い焼土面が認められるもので、土師器焼成遺構の可能性もあるが、土師器焼成遺構と認定できるまでには至らなかった。

４号土坑（第169図）

Ｅ18杭周辺に位置する。平面プランは長軸６ｍ・短軸４ｍ90cm程の不正な方形を呈する。当初南側に竈をもつ竪穴式住居跡と判断していたが、掘削が進むにつれ、北東部分が１段深くなることがわかった。短軸方向の断面を見ると、西壁から東に１ｍ50cm程行ったところで、30cm程度の段落ちとなる。その壁面にも焼土が認められる。また床面も一面焼土が広がっている。そして東にかけ緩やかに上昇し、東壁際の床面レベルは西壁側床面レベルと同程度である。一方長軸の断面を見ると、南より徐々に低くなる。その斜面には炭化物・焼土が多量に認められた。

遺物は土師器の坏・椀があるが、高台部分のみの出土が顕著であった。

５号土坑（第169図）

Ｆ18グリッド内に位置する土坑で、長軸１ｍ90cm・短軸１ｍ20cm程の不整な楕円形を呈する。床面は西に向かって傾斜しており、中央には掘り込みが認められる。全面に焼土が認められ、西側は硬化している。出土遺物としては、土師器坏・椀などがある。

６号土坑（第170図）

Ｅ17杭周辺に位置する土坑で、その平面形は長軸２ｍ25cm・短軸１ｍの不正な楕円形を呈す。床面は北東側にやや傾斜しており、北東側には焼土が広がっていた。また白粘土状の硬化面も一部見られ、それを剥ぐと焼土が見られる。

出土遺物は北東側に集中している。３基の土坑が切り合っている可能性もあったが、はっきりと確認できなかった。

７号土坑（第177図）

Ｇ18杭周辺に位置する２基の土坑で、その平面形態はいずれも歪で床面も平坦でない。西側土坑は１ｍ65cm×１ｍ12cm程度の不整形を呈す。床面は東から西に向かい傾斜する。南北方向の断面では中央に高まりが認められ、その部分に焼土が存在する。ただし北側部分は掘り過ぎの可能性が高く本来は１ｍ20cm×90cm程の楕円形であると推察される。遺物は土師器片が出土したが極少量である。一方東側の土坑は２ｍ20cm程度の不整形な円形を呈す。数箇所に後世の穴が見受けられる。西壁側は斜面となって床へ続く。斜面となった壁面の一部に焼土が見られる。遺物は東側に多く見られ、土師器坏・椀等が出土した。この２つの土坑の関係は明らかではないが、一連のものとして考えている。

８号土坑（第171図）

Ｇ18グリッド内に位置する土坑で、その平面形態は１ｍ55cm×１ｍ程度の不整な円形を呈する。深さは20cm程で、壁の立ち上がりはなだらかである。中央に焼土帯をもつ。

９号土坑（第171図）

８号土坑により一部破壊されており、その平面形は１ｍ10cm×90cm程度の楕円形である。深さは15cm程度である。床面中央から北側壁にかけて焼土が広がっている。

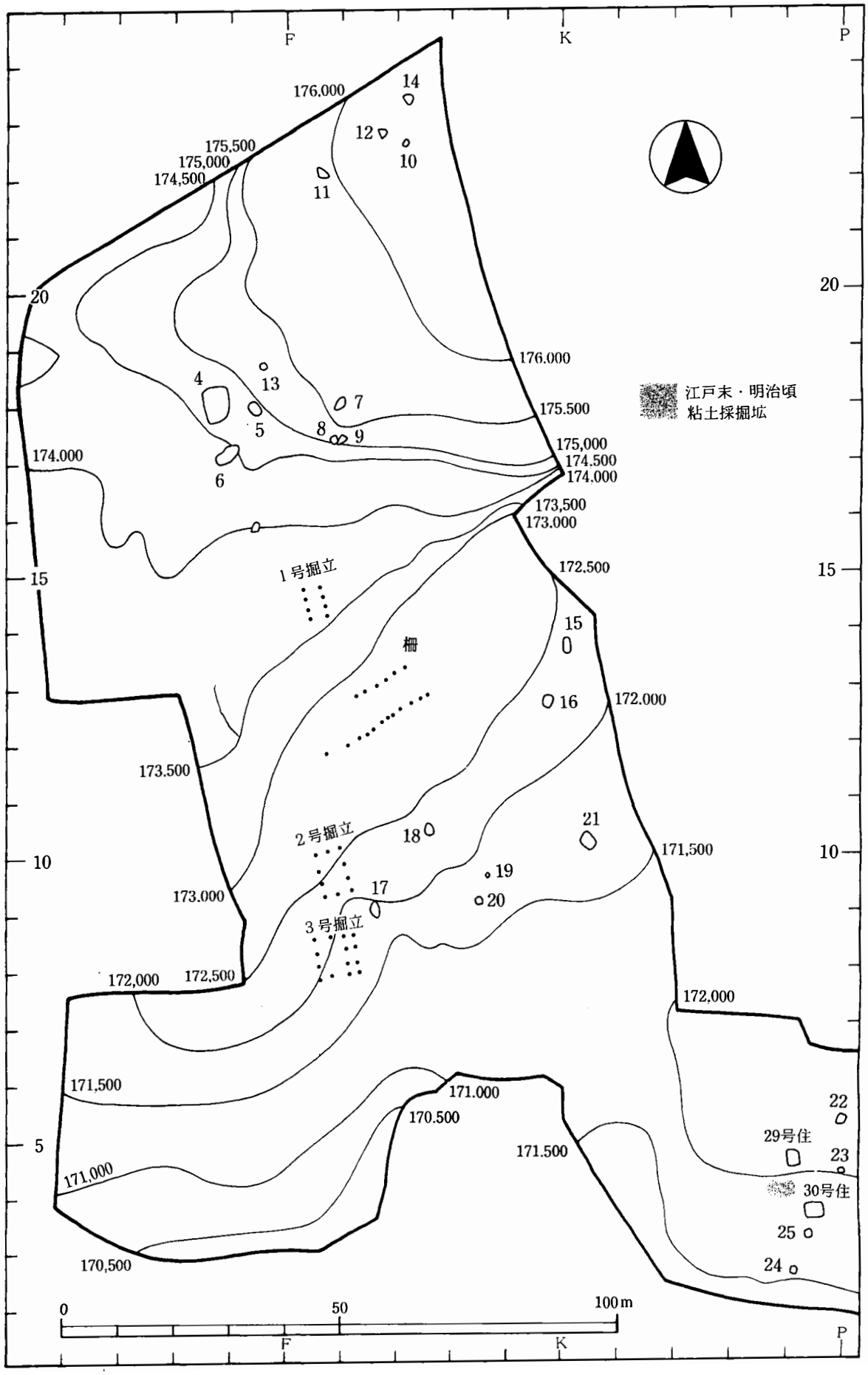
10号土坑（第172図）

Ｉ23グリッドに位置する土坑で、古墳時代の１号竪穴式住居跡内に位置する。その平面形態は、円形を呈している。その規模は、長軸１ｍ５cm・短軸95cm・深さ48cm程度である。床面は比較的平坦である。

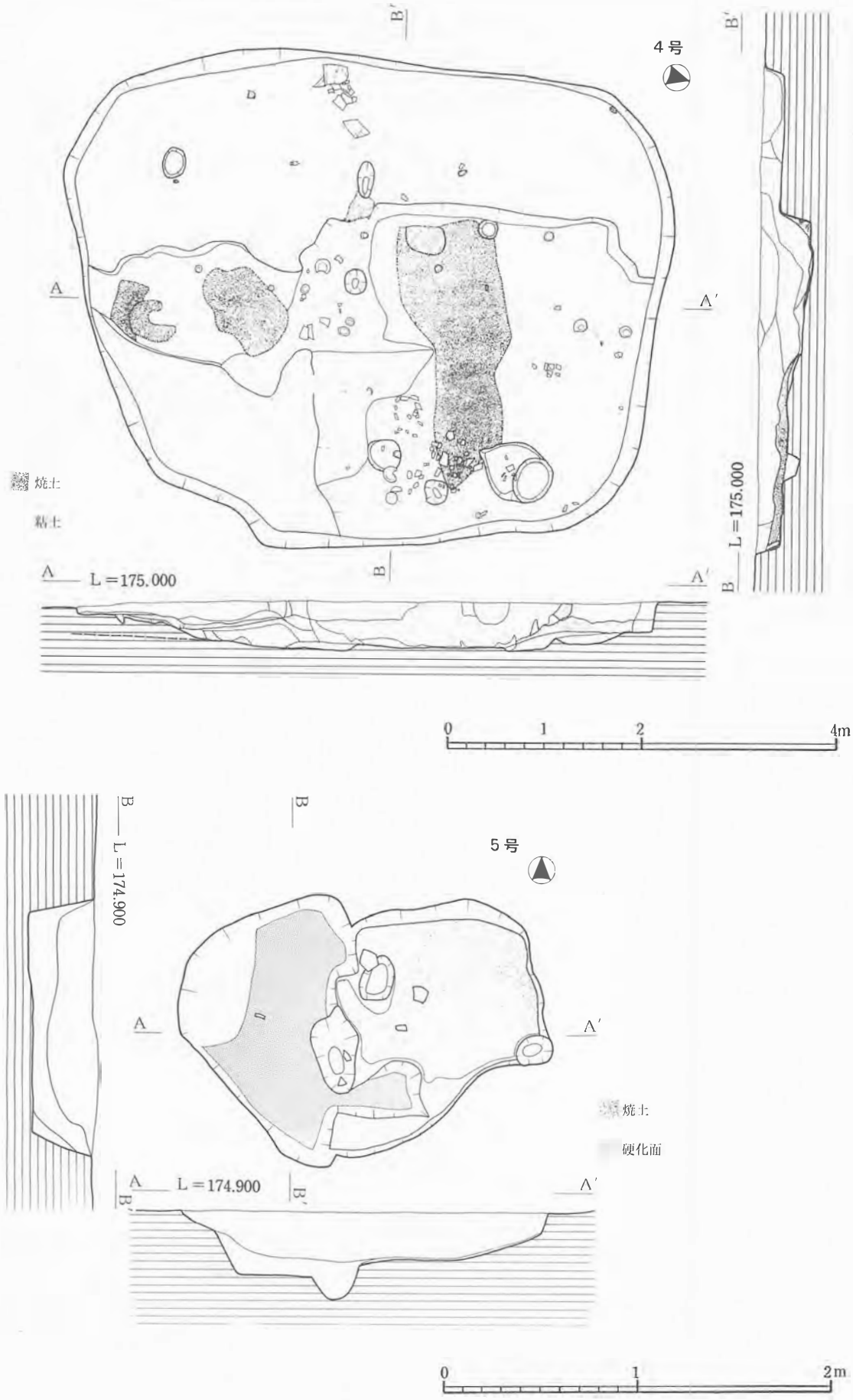
出土遺物としては、須恵器壺、土師器甕がある。

11号土坑（第172図）

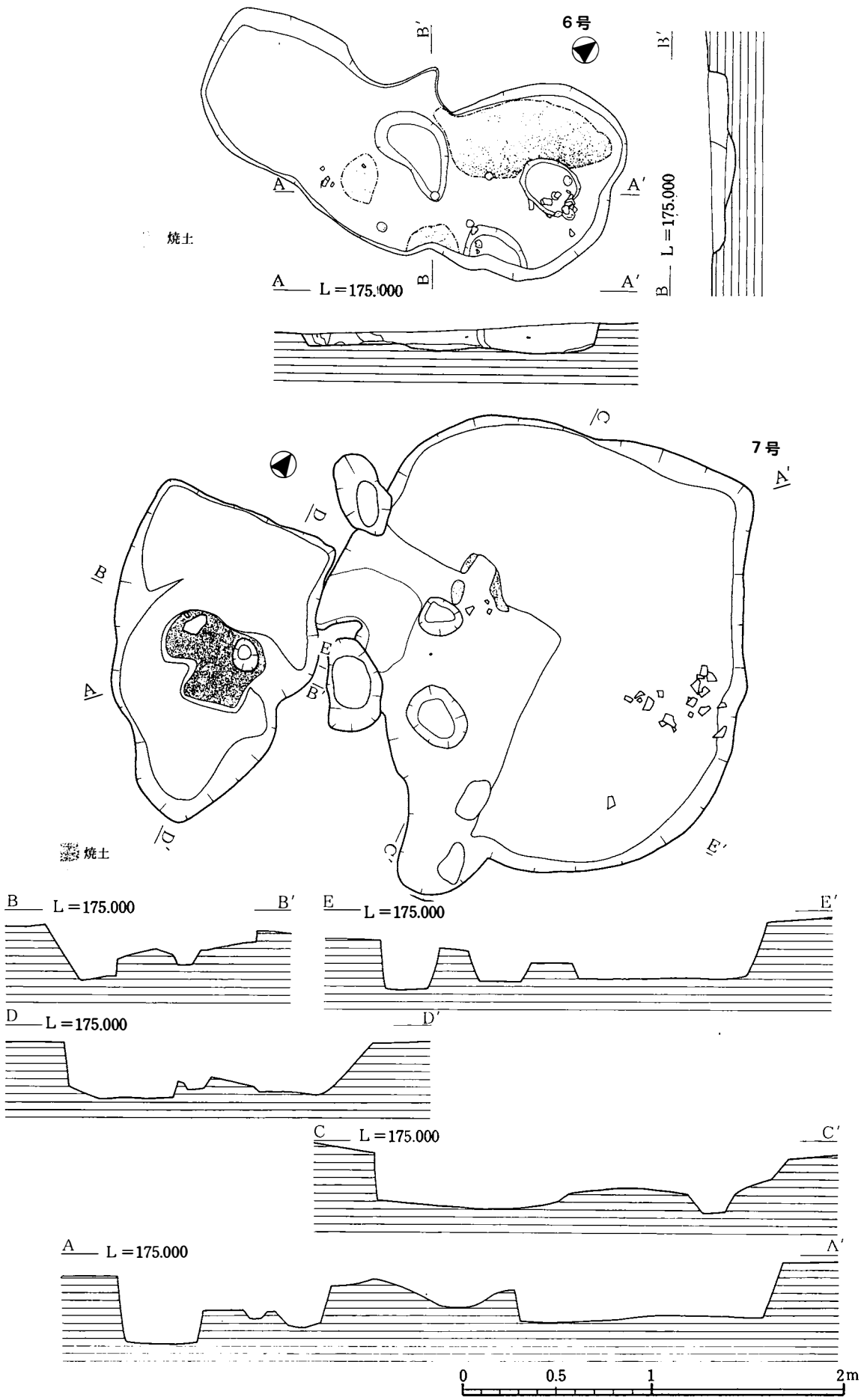
Ｇ23グリッドに位置する土坑で、その平面形態は、不整な楕円形を呈している。その規模は、長軸１ｍ



第168図　歴史時代遺構配置図



第169図　４・５号土坑実測図



第170図　6・7号土坑実測図

50cm・短軸１m15cm・深さ33cm前後である。埋土は単層でブロック状に粘土・木炭を含む。床面は平坦でしっかりしている。出土遺物としては、土師器甕・坏・黒色土器・紡錘車などがある。

12号土坑（第172図）

H23グリッドに位置する土坑で、その平面形態は、不整な円形を呈している。その規模は、径１m15cm・深さ43cm程度である。埋土は単層である。

出土遺物としては、土師器甕などがある。

13号土坑（第168図）

F19グリッドに位置する。１m30cm前後の円形を呈し、深さは約15cmである。出土遺物としては、土師器の取手付きの甕などがある。

14号土坑（第168図）

I24グリッドに位置する。1m前後のやや不正な円形を呈し、深さは約25cmである。出土遺物には土師器の甕がある。

15号土坑（第172図）

L14グリッドに位置する土坑で、後世の穴、樹根により一部破壊されている。その平面形態は、不整な楕円形を呈している。その規模は、長軸２m48cm・短軸１m51cm・深さ33cmである。埋土は単層である。また床面は比較的平坦である。

出土遺物としては、土師器皿・坏・高台付椀・黒色土器などがある。

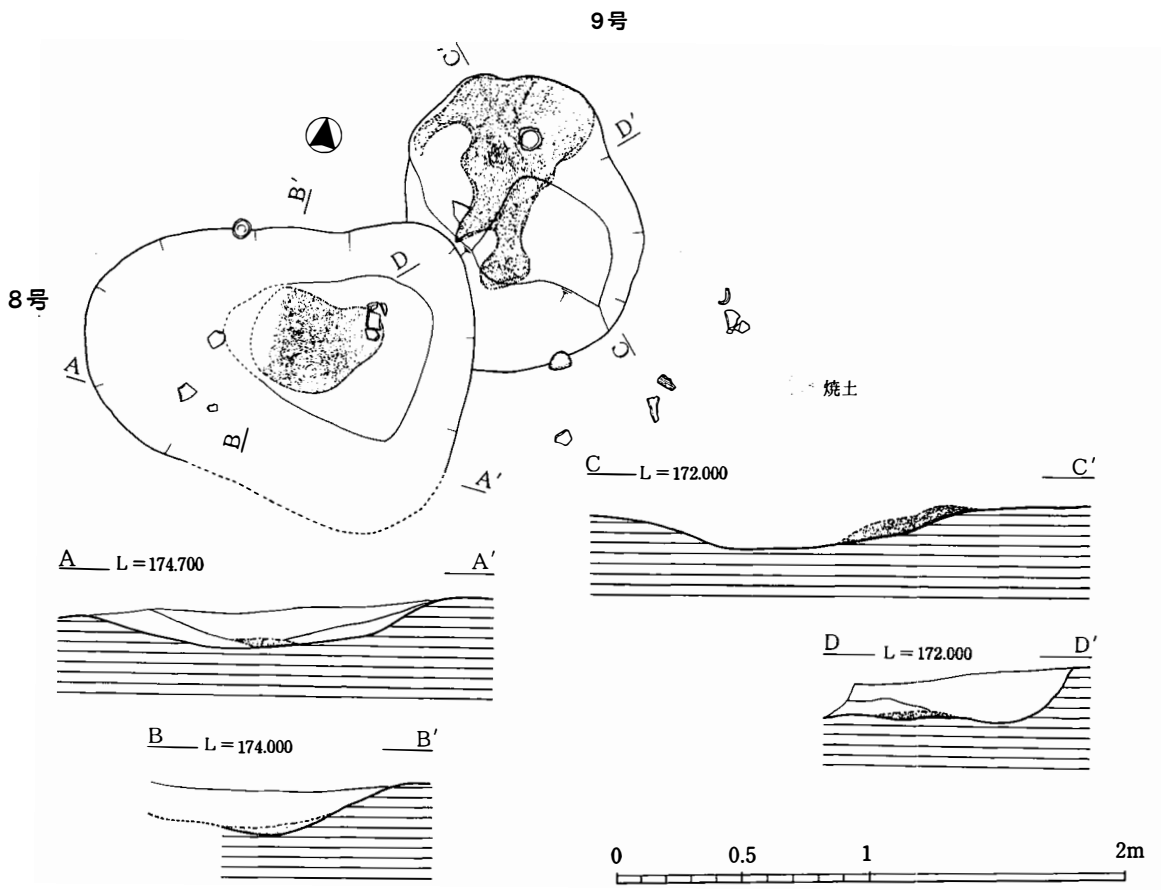
16号土坑（第173図）

K13グリッドに位置する土坑で、その平面形態は、円形を呈している。全体的に削平を受けているため、現状での規模は、径80cm・深さ６cm前後である。埋土は削平のため分層できなかった。床面は比較的平坦である。

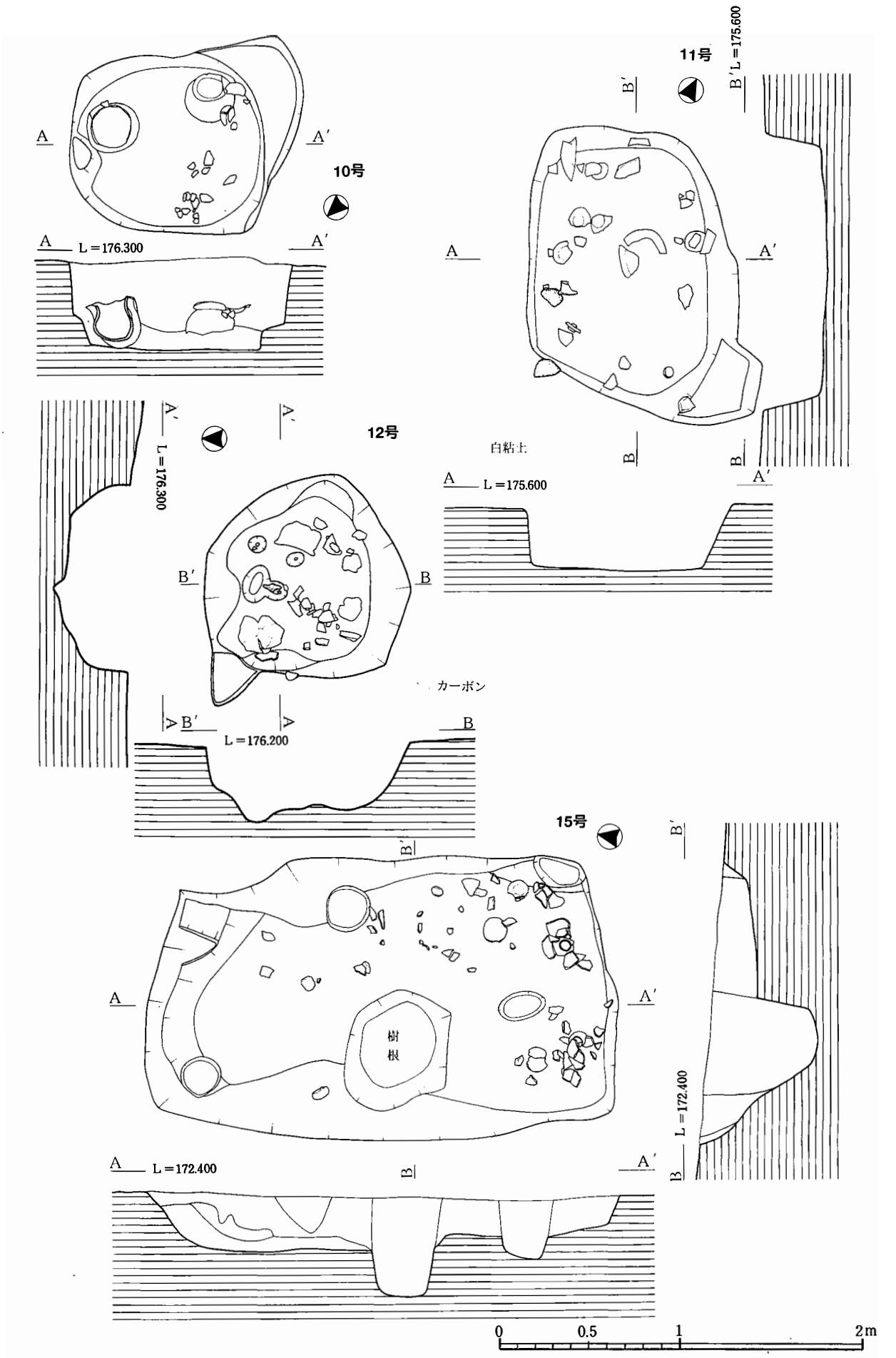
出土遺物としては、土師器坏などがある。

17号土坑（第173図）

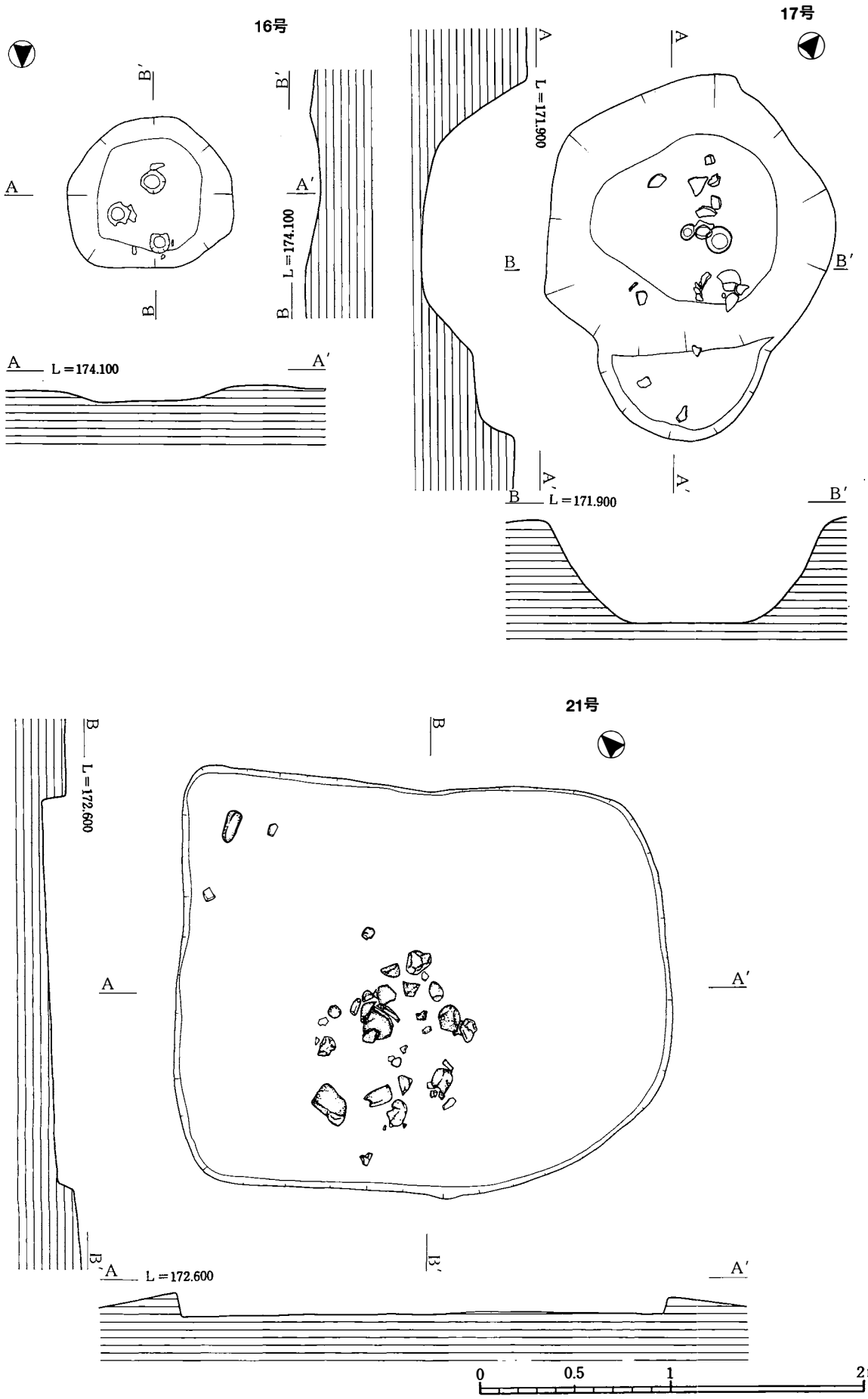
H９・10グリッドにまたがって位置する土坑で、その平面形態は、不整な円形を呈している。その規模は、長軸１m80cm・短軸１m50cm・深さ55cm程度である。埋土は単層である。東側は一段高くなるものの、床面は比較的平坦である。



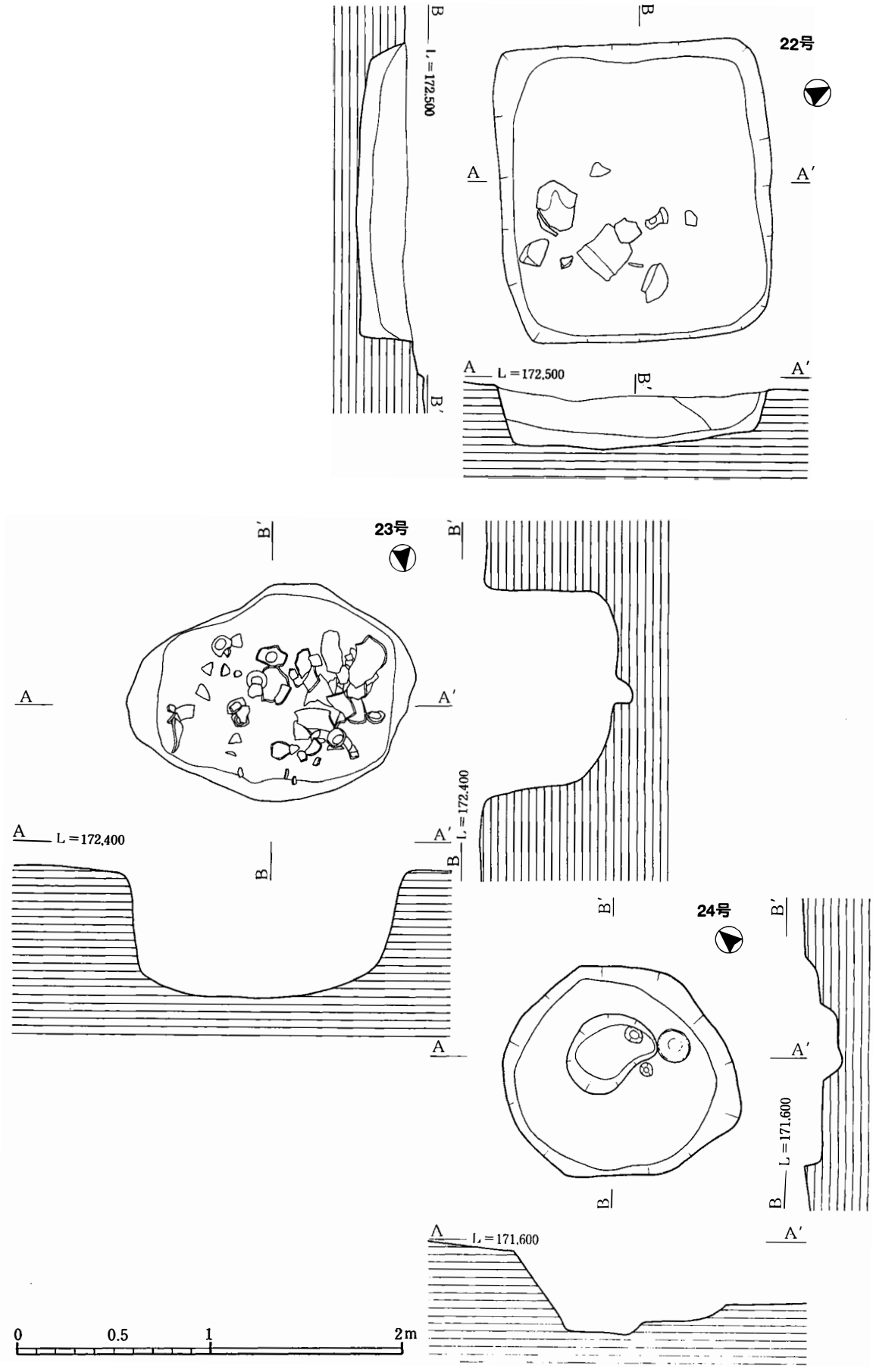
第171図　８・９号土坑実測図



第172図　10・11・12・15号土坑実測図



第173図　16・17・21号土坑実測図



第174図　22～24号土坑実測図

出土遺物としては、土師器椀・坏・黒色土器などがある。

18号土坑（第168図）

Ｉ10グリッド内に位置する土坑で、その平面形態は、不整な楕円形を呈している。その規模は、長軸１ｍ35cm・短軸70cm・深さ12cm程度である。埋土は単層である。床面は比較的平坦である。

19号土坑（第168図）

Ｊ10グリッド内に位置する土坑で、その平面形態は、不整な楕円形を呈している。その規模は、長軸88cm・短軸67cm・深さ30cm程度である。埋土は単層である。床面は比較的平坦である。

20号土坑（第168図）

19号土坑の南に位置する土坑で、その平面形態は楕円形を呈している。その規模は、長軸70cm・短軸50cm・深さ40cm程度である。埋土は単層である。床面は比較的平坦である。

出土遺物としては、須恵器の椀がある。

21号土坑（第173図）

Ｌ11グリッドに位置する土坑で、その平面形態は、ほぼ方形を呈している。その規模は、長軸２ｍ60cm・短軸２ｍ80cm・深さ10cm程度である。埋土は単層で床面は平坦である。

22号土坑（第174図）

Ｑ６グリッドに位置する土坑で、古墳時代の20号竪穴式住居跡を切っている。その平面形態は方形を呈している。その規模は、長軸１ｍ52cm・短軸１ｍ40cm・深さ39cm程度である。埋土は２層に分層できる。また床面は比較的平坦である。

須恵器の蓋・土師器甕などが出土している。須恵器蓋は20号竪穴式住居跡に伴うものかも知れない。

23号土坑（第174図）

Ｑ５グリッドに位置する土坑で、その平面形態は、不整な楕円形を呈している。その規模は、長軸１ｍ48cm・短軸１ｍ11cm・深さ65cmである。床面は比較的平坦であるが中央に径15cm・深さ10cm程度の掘り込みがある。

出土遺物としては、土師器甕・坏・黒色土器・須恵器甕などが多量であった。

24号土坑（第174図）

Ｐ２グリッドに位置する土坑で、古墳時代の24号竪穴式住居跡を切っている。その平面形態は方形を呈している。その規模は、長軸１ｍ23cm・短軸１ｍ９cm・深さ39cm程度である。土坑の床面に径50cm程度の浅い掘り込みが認められる。

須恵器の蓋が出土した。

25号土坑（第168図）

Ｐ３グリッド内に位置する土坑で、その平面形態は楕円形を呈している。床に焼土面が広がっていたが、削平がひどく詳細は不明である。

２．土坑出土の遺物（第175～181図）

土坑からの出土遺物の大半が土師器で、その中でも坏と椀が大部分を占める。ただし坏と椀の区分が難しいため、便宜的に高台の付かないものを坏・高台の付くものを椀とする。

第４号土坑（第175・176図１～46）

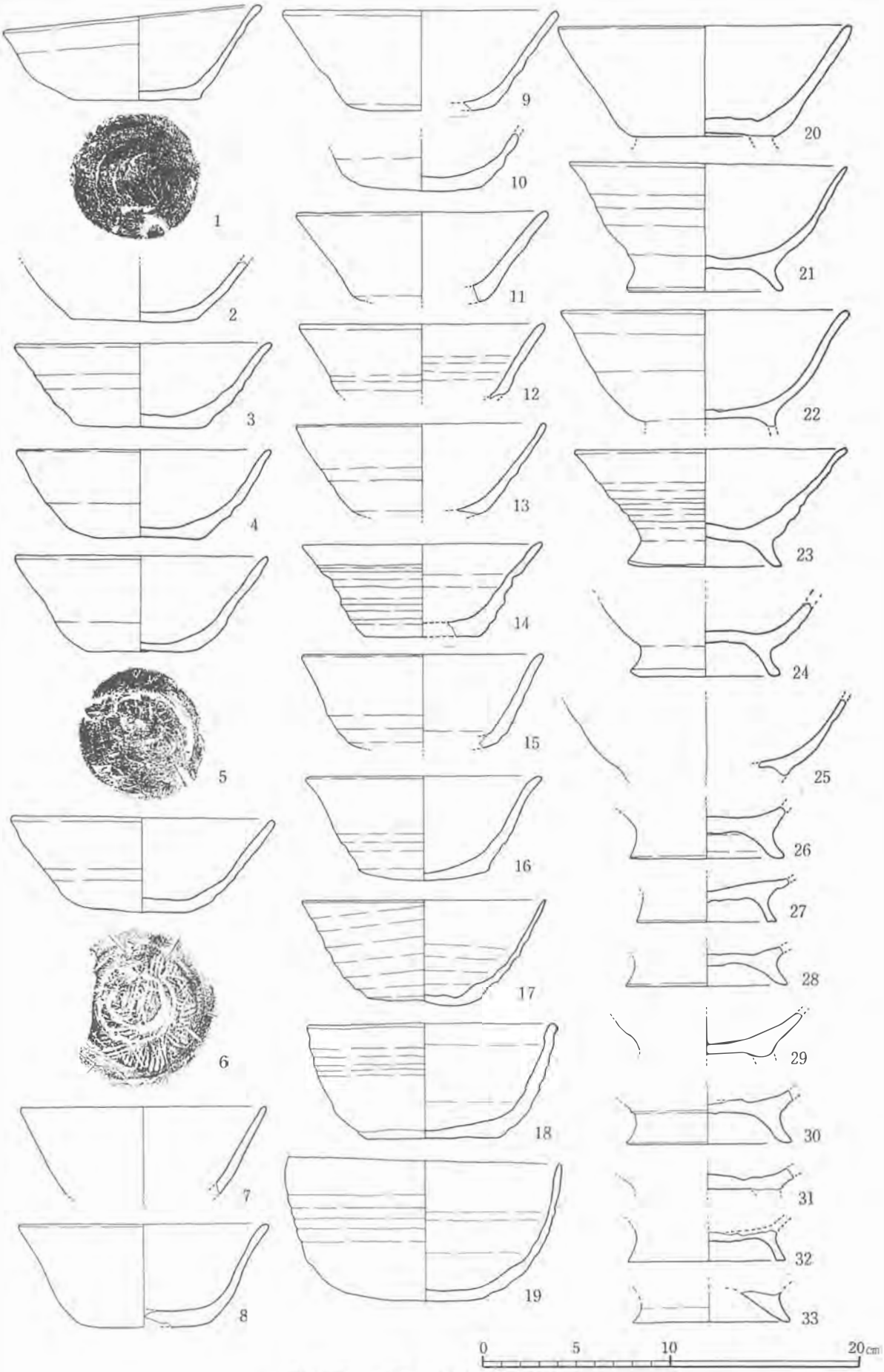
出土遺物としては須恵器片が１点のみで、他はすべて土師器片で、坏、椀、甕等が認められる。特に高台部分のみの出土が際立つ。しかし体部と接合出来たものは少量であった。

１～６・８～10・14・16～19までは坏である。その形状より３つに分類できる。

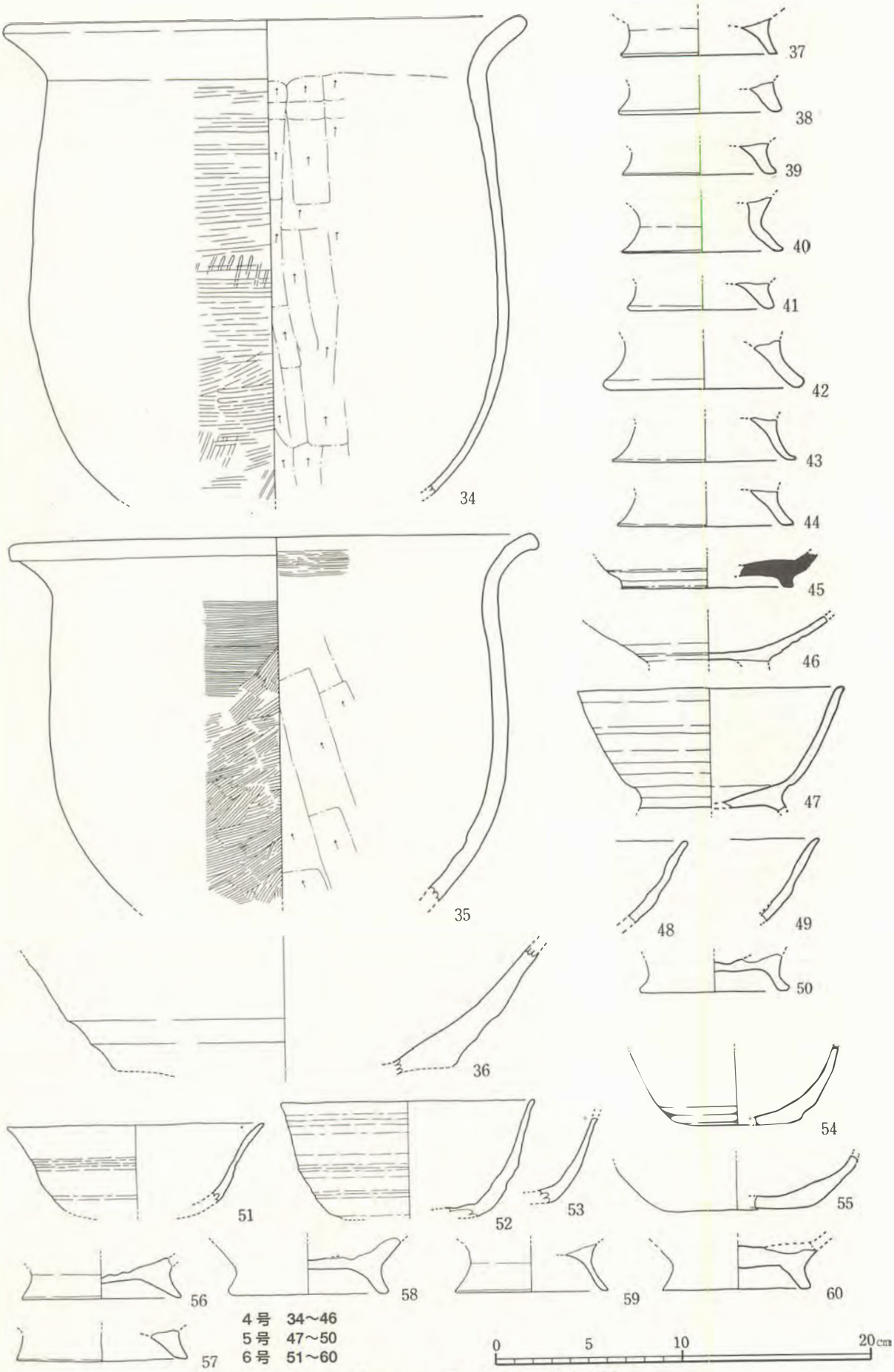
１～６・９・14・17は底部は平底で体部がほぼ直線的にたちあがるもので、口縁部はまっすぐか、先端がわずかに小さく開くもの（３・４）である。なかには底部がわずかに丸みをもつもの（５・６・17）もある。底部と体部の境は明瞭で、口径12.8～14.3cm・器高4.4～5.2cmで、平均口径13.4cm平均器高4.8cmである。底部は、回転ヘラ切り離しの後ナデを施すが、１・５・17は回転ヘラ切り離しの痕跡が認められる。６は底部外面に板目圧痕が認められる。また内器面はナデを施すが、内底にわずかに渦文がみられるものもある（３～６・17）。

８・16は器形的には上記と同様なものだが、口縁部がわずかに外反する。底部はわずかに丸みをもち、外底はナデを施す。８は口径13.9cm・16は口径が12.3cmで、器高は5.5cm前後のものである。

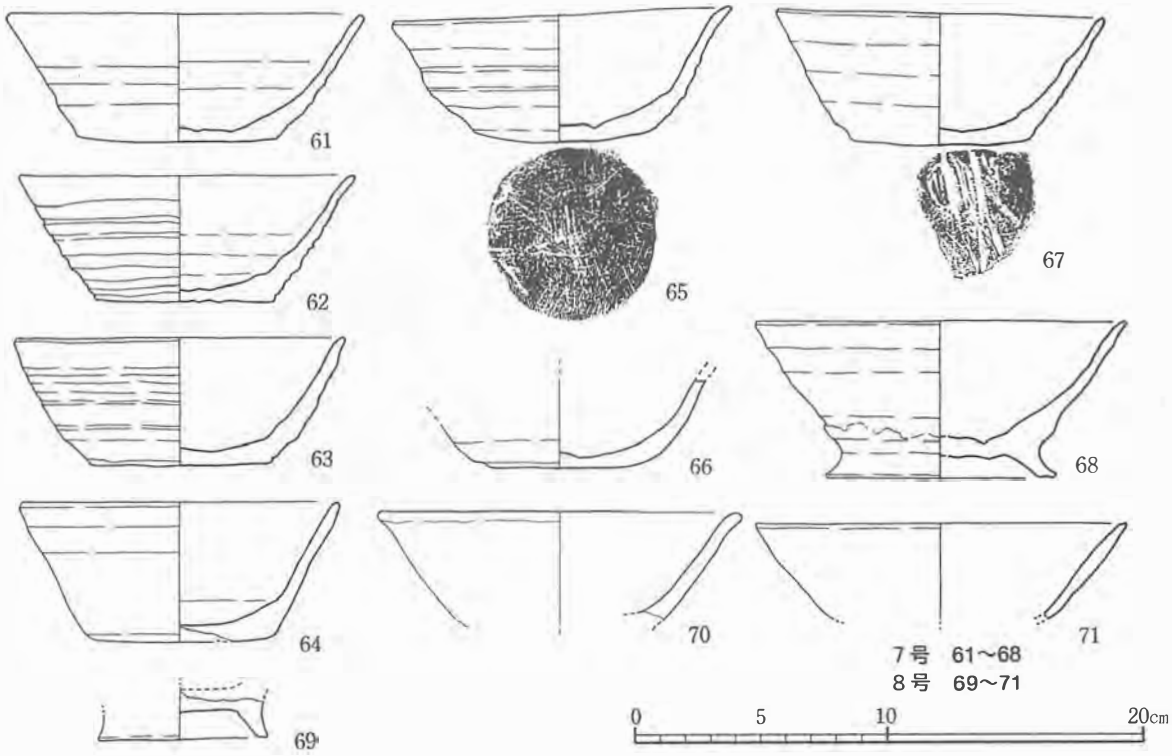
10・18・19は底部と体部の境は不明瞭で、丸みを



第175図　４号土坑出土土器実測図



第176図　４・５・６号土坑出土土器実測図



第177図　7・8号土坑出土土器実測図

帯び立ち上がるものである。19は底部も丸みを帯び、外器面体部下半に指頭圧痕が認められる。いずれも口径に比べて器高が高く、19は椀とすべきものかもしれない。

20～23は高台付き椀で口縁部がまっすぐ伸びるもの（20・21）とわずかに外反するもの（22・23）がある。口径14.1～15.1cm程度で、器高は高台部を除き4.8～5.7cm程度である。上記坏に比べて口径が大きい。

24～44・46は高台部のみであるが、高台は底部端より、やや外反気味に伸びる。またそのほとんどが、高台径は8～8.5cm程度であるが、42・43・46は9.5cm程度である。

その他7・11・12・15は底部を欠損しているもので、高台の有無は不明なものであるが口径の大きさからして高台は付かないものと推定される。口縁部まっすぐ伸びるもの（7）、口縁部がわずかに外反するもの（11～13・15）がある。いずれも口径13.1cm前後である。

34・35は甕である。34は楕円形の胴部に外反する口縁部が付く。胴部下半が張り、頸部がわずかにすぼまる。35も同様な器形であるが、胴部下半の張りは少なく、頸部もほとんどすぼまらない。口縁部は内外器面とも横ナデ、胴部外面はハケ調整、内面はヘラケズリである。

36は平底の鉢である。45は高台付の須恵器で、器体の上半部が欠損して、底部のみである。高台は低く断面形は四角形を呈する。

第5号土坑（第176図47～50）

須恵器片が1点出土しているのみで他は土師器である。

47は高台付椀で、体部は底部よりやや丸みをもって立ち上がる。口径14.1cm・器高は高台部を除くと6.2cmを測る。

第6号土坑(第176図51～60)

51・52・53は坏で底部はわずかに丸みをもつが、体部はほぼ直線気味に立ち上がる。口縁部先端がわずかに小さく開く程度である。底部と体部の境は不明瞭である。口径は13.5～13.6cmを測る。

54・55は器体の上半部が欠損して、形態が不明な底部のみのものである。55は底部はやや丸みを帯び、体部との境は不明瞭である。

56～60は土師器の高台部分である。高台径は7.8～9.0cmである。

第7号土坑(第177図61～68)

61～67は坏で口縁部の形態より2つに分けられる。

61～63・67は底部はほぼ平底で、体部はほぼ直線

気味に立ち上がる。底部と体部の境は明瞭である。口径12.6～13.9㎝・器高4.5～5.0㎝で、平均口径13.1㎝平均器高4.9㎝である。底部は、回転ヘラ切り離しの後ナデを施すが、62は回転ヘラ切り離しの痕跡が認められる。67は底部外面に板目圧痕が認められる。また内器面はナデを施すが、内底にわずかに渦文がみられる。

一方65は体部はまだ直線的であるが、底部近くにゆるい屈折部をもつ。口縁部がわずかに外反し、口径13.5㎝，器高4.9㎝を測る。底部はやや丸みを帯び、体部との境は不明瞭になる。底部は、ナデを施す。

その他66は器体の上半部が欠損して、形態が不明な底部のみのもので、底部と体部の境は不明瞭である。底部は回転ヘラ切り離しの痕跡が見られる。

68は高台付椀で、体部はほぼ直線的に立ち上がる。口径14.5㎝，高台を含め器高6.1㎝・高台径8.8㎝を測る。

第８号土坑（第177図69～71）

69は高台部のみのもので、高台径6.7㎝を測る。70・71は底部を欠損しているので、高台の有無は不明だが口径14～14.5㎝を測る。70は口縁部がわずかに外反する。

10号土坑（第178図72・73）

72は土師器甕で楕円形の胴部に外反する口縁部が付く。胴部の膨らみや頸部のくびれが認められない。外面ハケ調整、内面ヘラケズリを施す。

73は須恵器甕で球形の胴部に短く外反する口縁部が付く。体部外面に平行叩き、内面は同心円文の痕跡が認められる。

11号土坑（第178図74～84）

74は甕で、楕円形の胴部に外反する口縁部が付くもので、頸部がわずかにすぼまる。胴部外面はハケ調整、内面はヘラケズリである。

75～77・79～83は坏である。

75は底部から垂直気味に立ち上がるもので、底部に板目圧痕が認められる。口径11.5㎝・器高4.1㎝を測る。

76・77・79～81は底部から体部がほぼ直線気味に立ち上がる。底部と体部の境は明瞭である。口径12.5～13.4㎝程度で、76は器高3.8㎝と他に比べ低いが、他は4.5～4.9㎝程度である。79は底部に回転ヘラ切り離しの痕跡が認められる。

82は器形的には上記と同じものだが、口縁部がわずかに外反するものである。口径14.6㎝・器高5.5㎝でやや大形のものである。

78・83は底部が欠損するものである。78は口径14.3㎝、83は口径13.9㎝・器高は現状で6.1㎝を測る。

84は内面が黒色の土器で底部を欠損する。，口径14.7㎝・器高は現状で4.8㎝を測る.

12号土坑（第179図85～87）

85・86は甕で楕円形の胴部に外反する口縁部が付く。胴部下半に膨らみをもち、頸部がくびれる。外面ハケ調整、内面ヘラケズリを施す。

87は坏で平底の底部より、体部がほぼ直線的に立ち上がる。口縁部先端がわずかに小さく開く。口径14.8㎝・器高6.0㎝を測る。

13号土坑（第179図88・89）

88は甕で頸部のくびれがなく、外反する口縁部が付き、把手が付く。外面ハケ調整、内面ヘラケズリを施す。

89は坏の底部で丸みをもつ。

14号土坑（第179図90）

90は甕の口縁部片である。

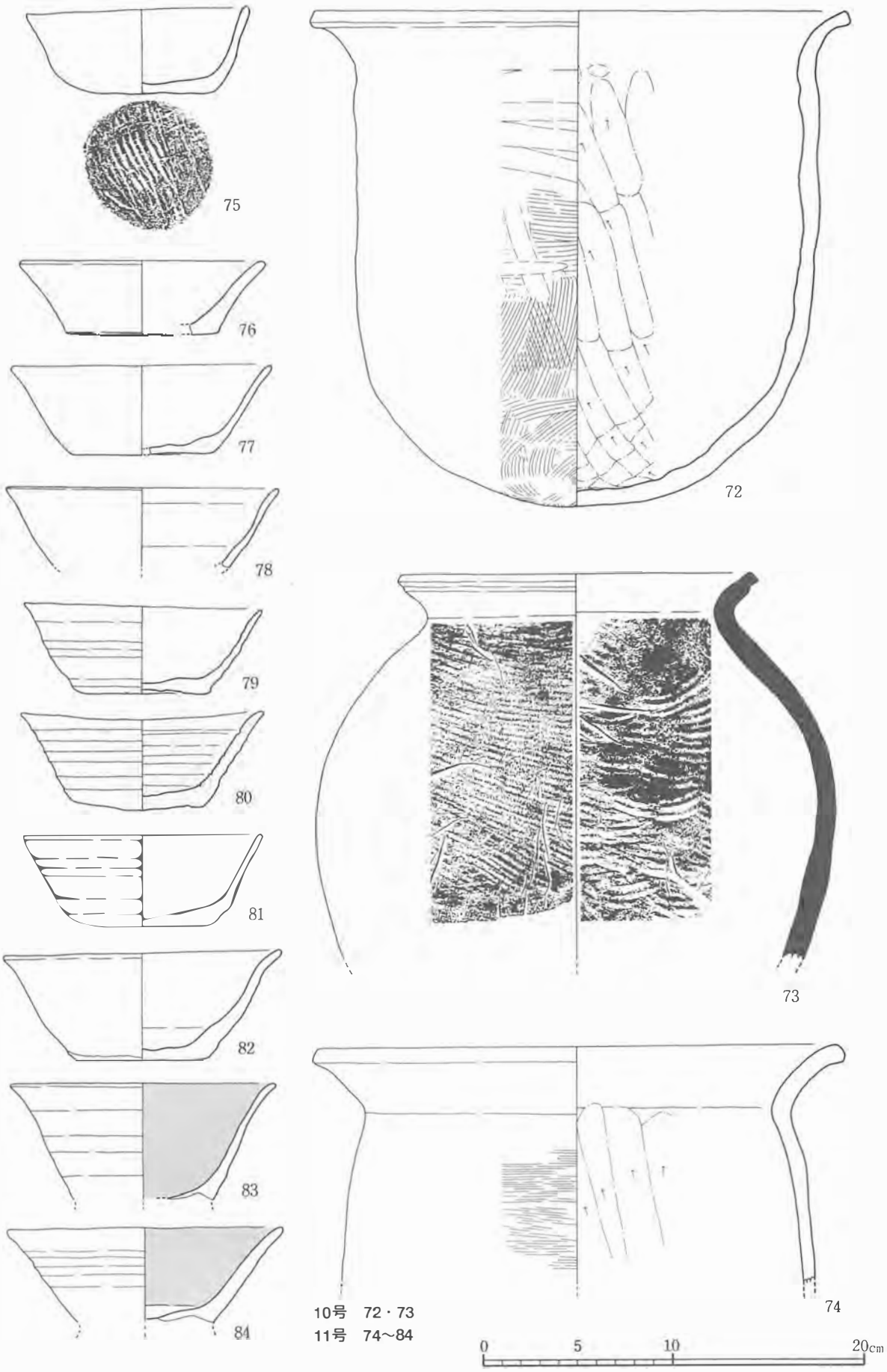
15号土坑（第179図91～102）

91・92は皿である。91は口径16.0㎝・器高2.25㎝、92は口径13.5㎝・器高2.1㎝を測る。底部は回転ヘラ切り離しの痕跡がわずかに認められる。

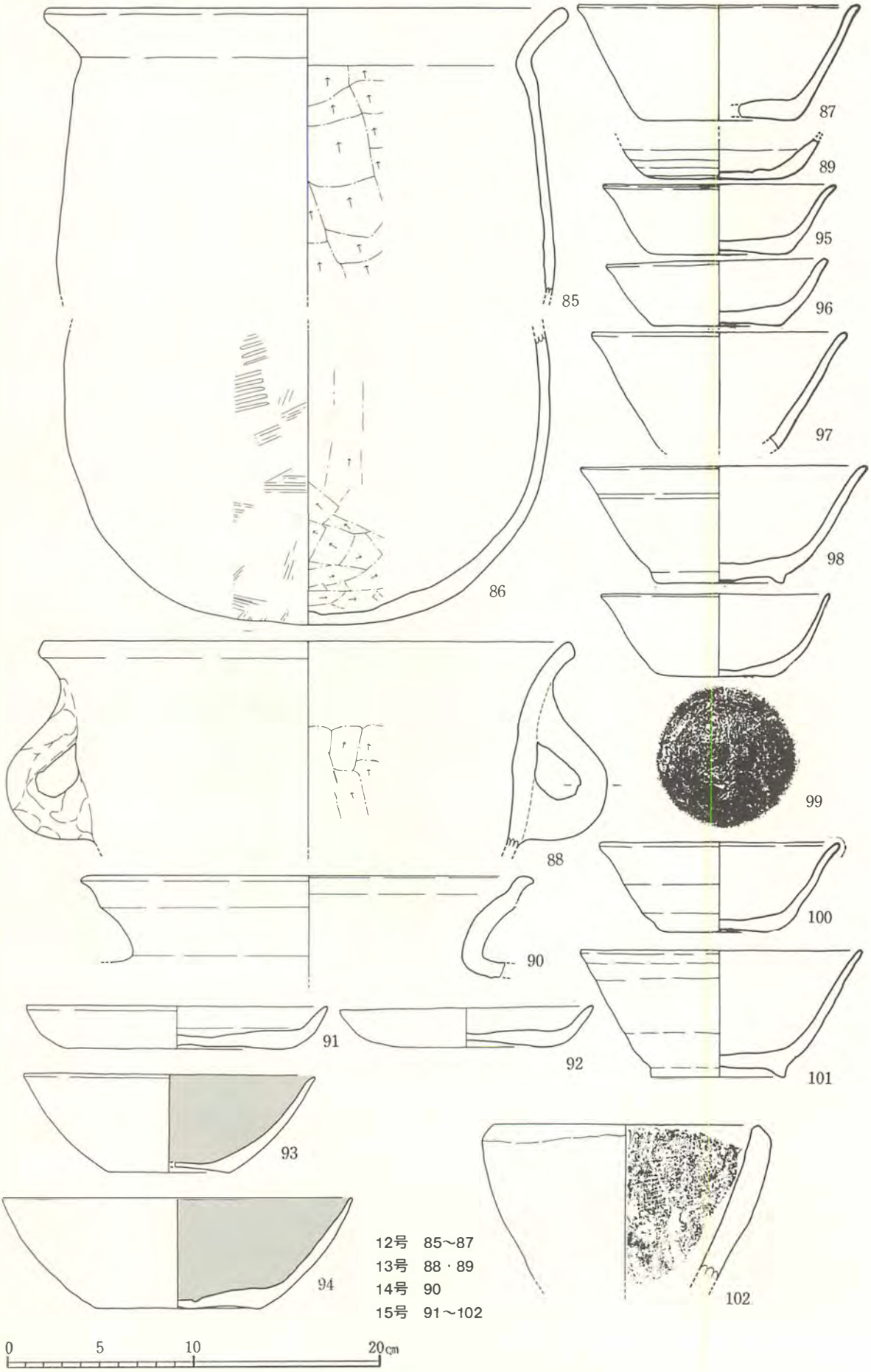
93・94は黒色土器で体部はやや丸みをもって立ち上がる。底部は平底で体部との境は明瞭である。93は口縁端部がわずかに開く。口径15.6㎝・器高5.2㎝を測る。94は口径17.8㎝・器高6.0㎝を測る。

95・96・99・100は坏である　体部はやや丸みをもって立ち上がる。口縁部はまっすぐなもの（96・99）と、先端がわずかに小さく開くもの（95・100）がある。口径は11.5～12.6㎝、器高は3.5㎝程度の低いもの（95・96）と4.8㎝程度のもの（99・100）がある。

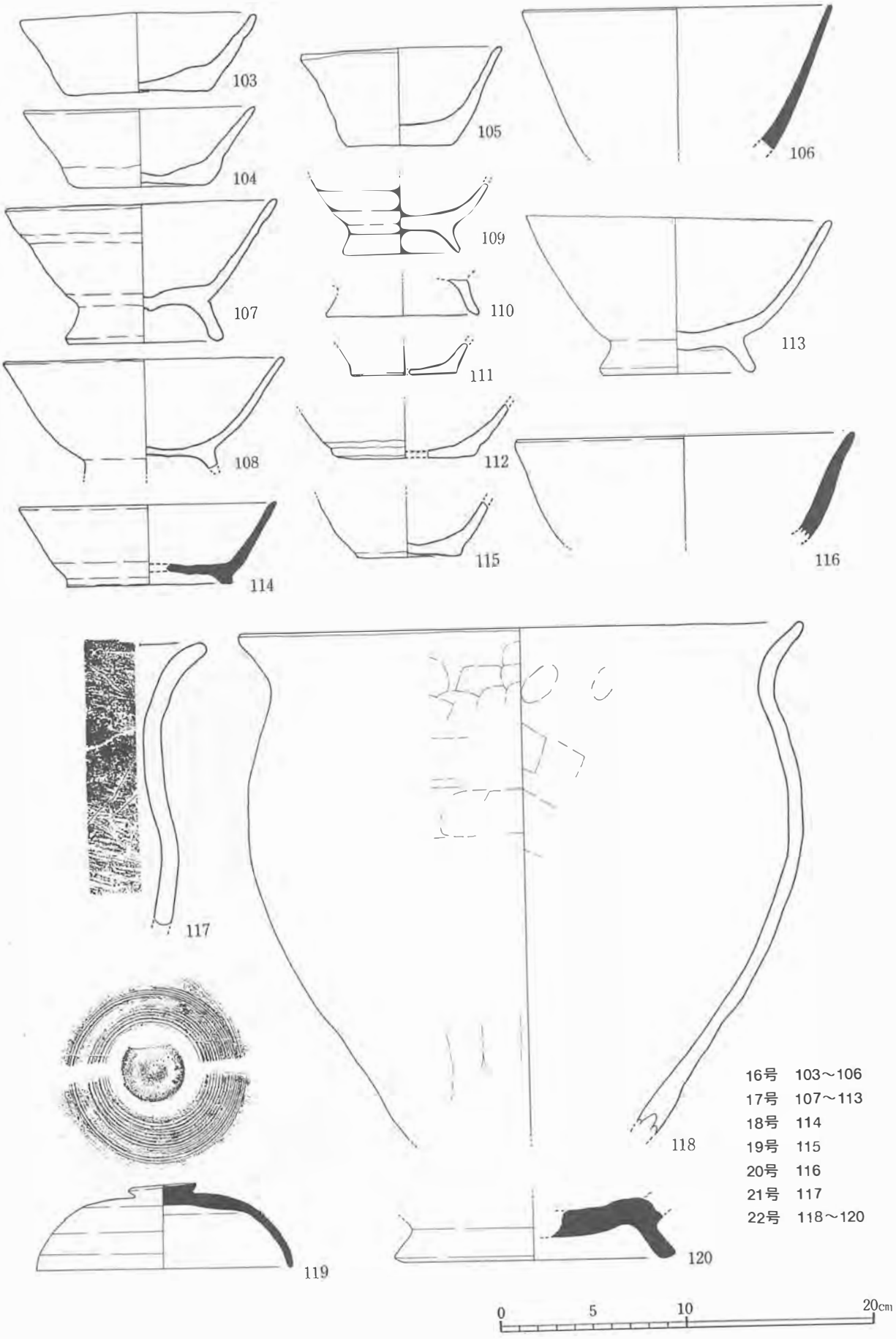
98・101は低い高台がつく椀で、体部はやや丸みをもって立ち上がる。口径14.6～14.7㎝・器高は高台を含めて6.1～6.7㎝である



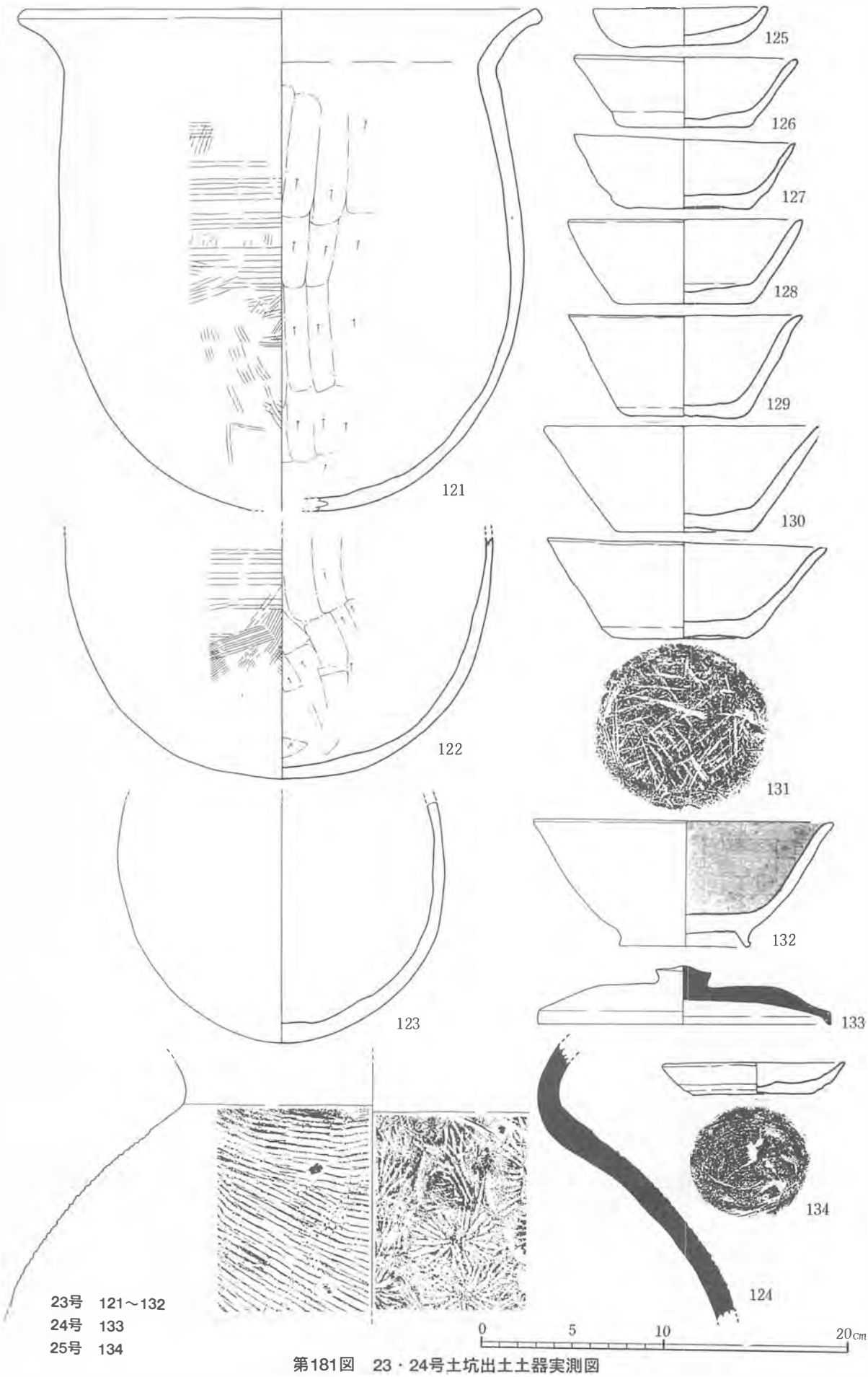
第178図　10・11号土坑出土土器実測図



第179図　12～15号土坑出土土器実測図



第180図　16～22号土坑出土土器実測図



23号　121～132
24号　133
25号　134

第181図　23・24号土坑出土土器実測図

その他97は底部を欠損するもので、小破片のため詳細は不明だが器高が高くなると考えられる。

102は布痕土器、塩焼壷等と呼称されているものである。底部を欠損するが、内面に布目痕が認められる。また外面は指頭痕跡が残る。軟質で色調は赤褐色を呈する。

16号土坑（第180図103～106）

103～105は坏で、体部はほぼ直線的に立ち上がり、体部と底部の境は明瞭である。口径に比べて器高の低いもの（103・104）と高いもの（105）の２種類がある。103・104は口径12.2～12.5㎝・器高5.5㎝、105は口径10.8㎝・器高6.1㎝を測る。

106は須恵器で口径16.4㎝を測る。口径のわりに器高が高く、器壁が薄い。

17号土坑（第180図107～113）

107・108・110は高台付き椀である。体部がほぼ直線的に立ち上がるもの（107）とやや丸みをもって立ち上がるもの（108）がある。口径は14.5～14.7㎝・器高は高台を除き5.2～5.5㎝を測る。107は高台を含め器高7.3㎝である。110は高台部分のみ残存する。

111・112は坏で、上部が欠損し口径は不明だが、底径は大・小２種類が存在する。

109・113は黒色土器である。内面黒色で、体部が丸みをもって立ち上がる。113は口径16.5㎝・器高8.3㎝を測る。

18号土坑（第180図114）

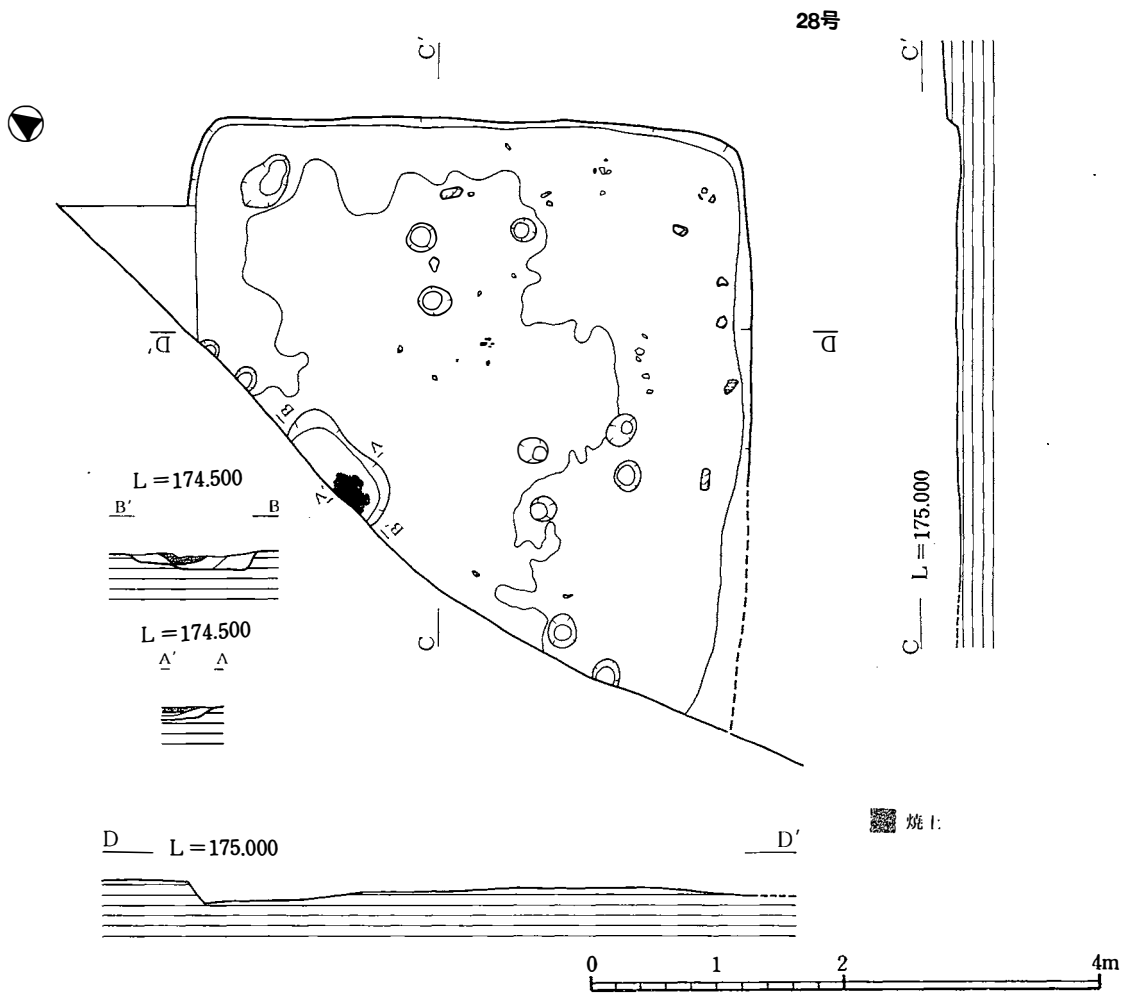
須恵器の高台付き坏で短い高台がつくものである。体部は比較的直線的に立ち上がる。

19号土坑（第180図115）

115は土師器坏である。底部のみ残存する。

20号土坑（第180図116）

116は須恵器の椀である。体部は丸みをもち口縁端部がわずかに外反する。



第182図　28号竪穴式住居跡実測図

21号土坑（第180図117）

117は土師器甕である。頸部の湾曲は弱い。

22号土坑（第180図118～120）

118は土師器甕で外反する口縁部に胴部が付く。胴部は上半が張り、底部に向かい急激にすぼまるものである。

119は須恵器坏蓋で身受けのかえりをもたないものである。天井部に平坦なしっかりとしたつまみを持つ。稜をもたず丸みを帯び、口縁端部には段が認められない。また天井部には回転ヘラ削り調整を施す。口径13.5cmを測る。120は須恵器の高台部分のみのものである。高台径は15.1cmを測る。

23号土坑（第181図121～132）

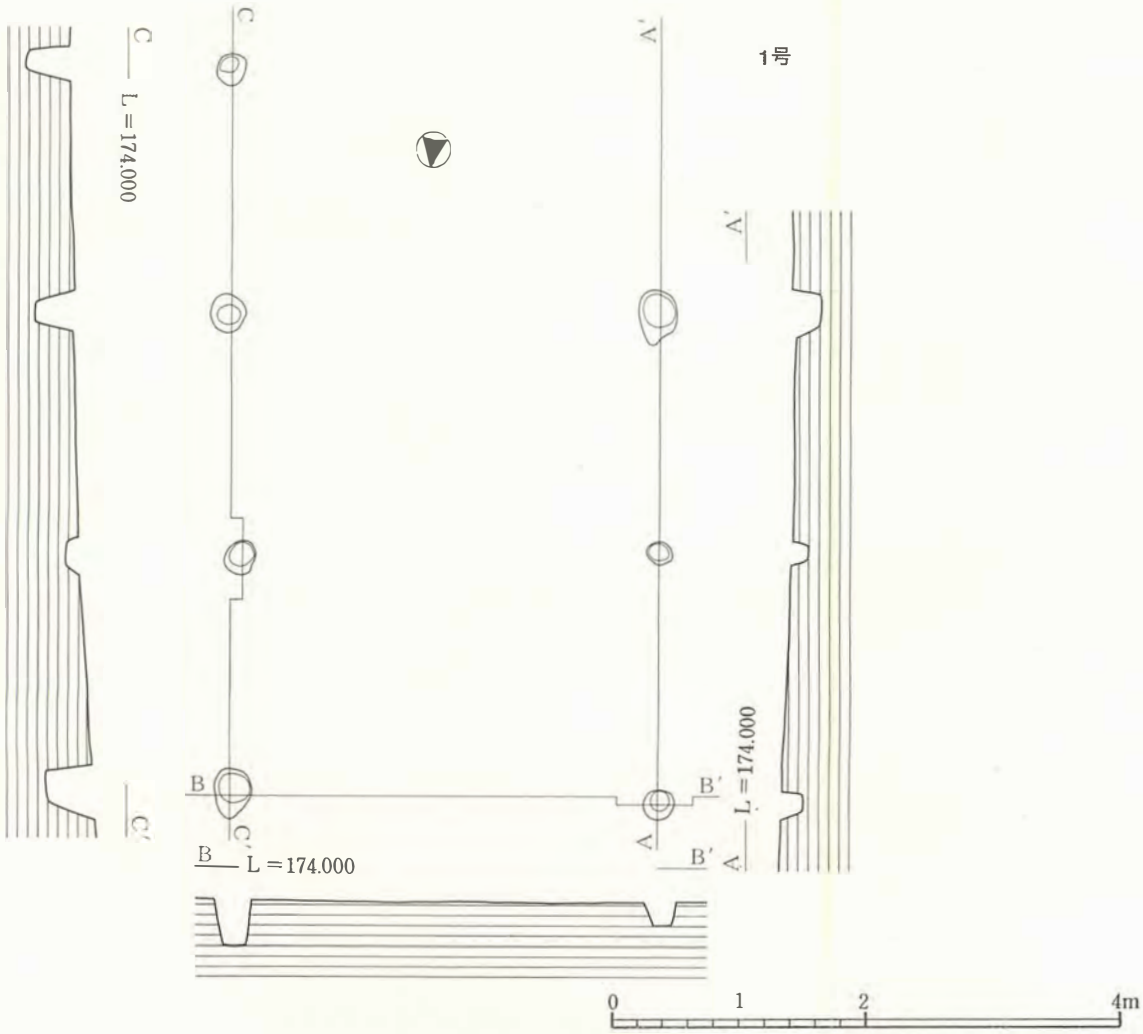
121～123は土師器の甕である。121は楕円形の胴部に外反する口縁部がつく。胴部下半が張り、頸部がすぼまる。122も同様な器形と思われる。いずれも外面はハケ調整、内面はヘラケズリである。123は球形の胴部であるが、器面が荒れ調整は不明である。

124は須恵器の甕である。球形の胴部に外反する口縁部が付くものであろう。胴部外面は平行叩き、内面上部は放射状の叩きが見られる。外面には焼成時に生じたと思われる径２cm前後の器壁が丸く膨らみひびわれたものが数箇所認められる。

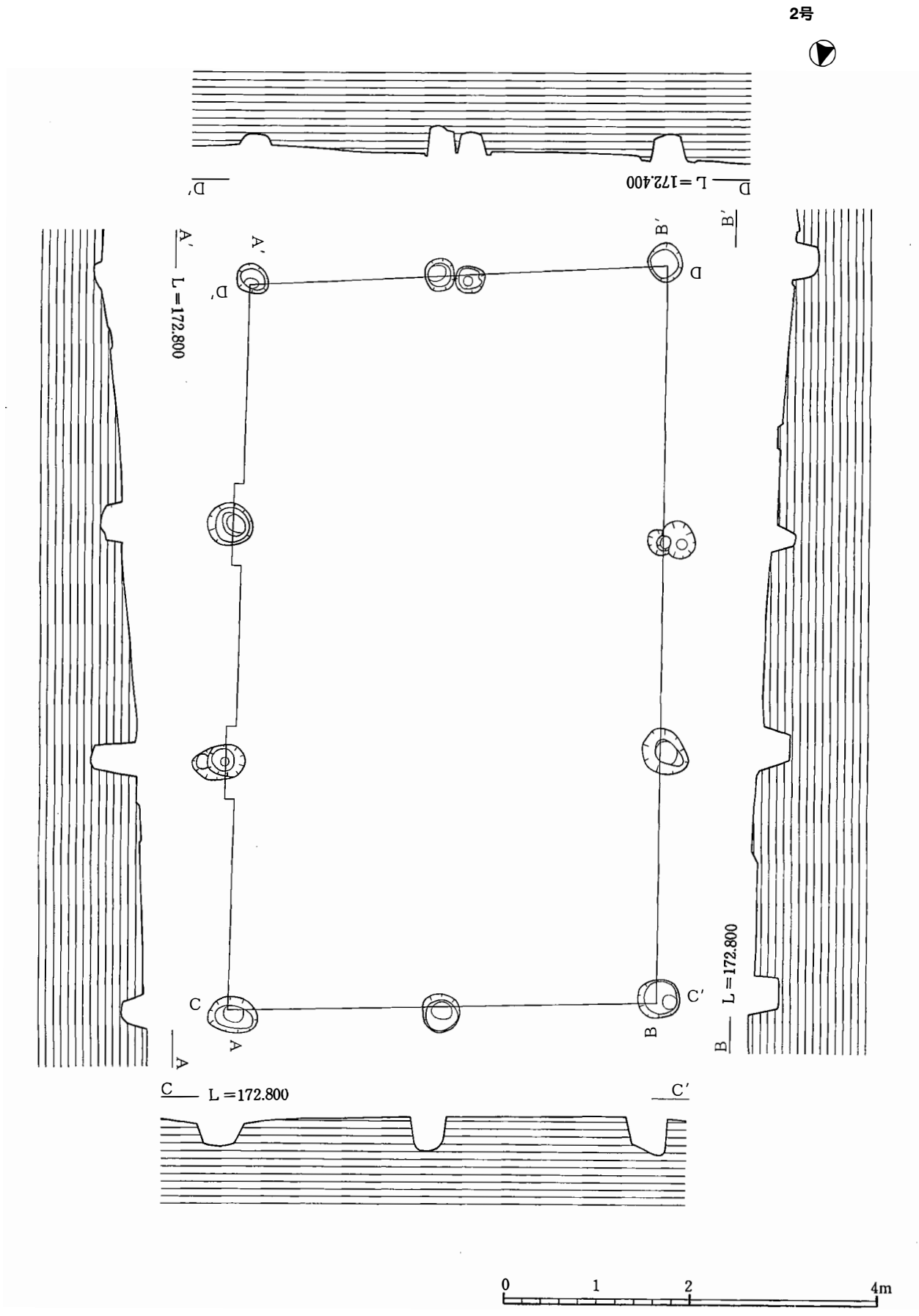
126～131は坏で、平底の底部から体部が直線的にたちあがるものである。また口縁端部がわずかに外に開くものが存在する（129・131）。器形の大小により大きく３種に分けられる。

口径12cm前後・器高3.7cmのもの（126・127）、口径12．6cm前後・器高4.5～5.4cmのもの（128・129）口径15cm前後・器高5.2～5.6cmのもの（130・131）の３種である。131は板目圧痕が認められる。

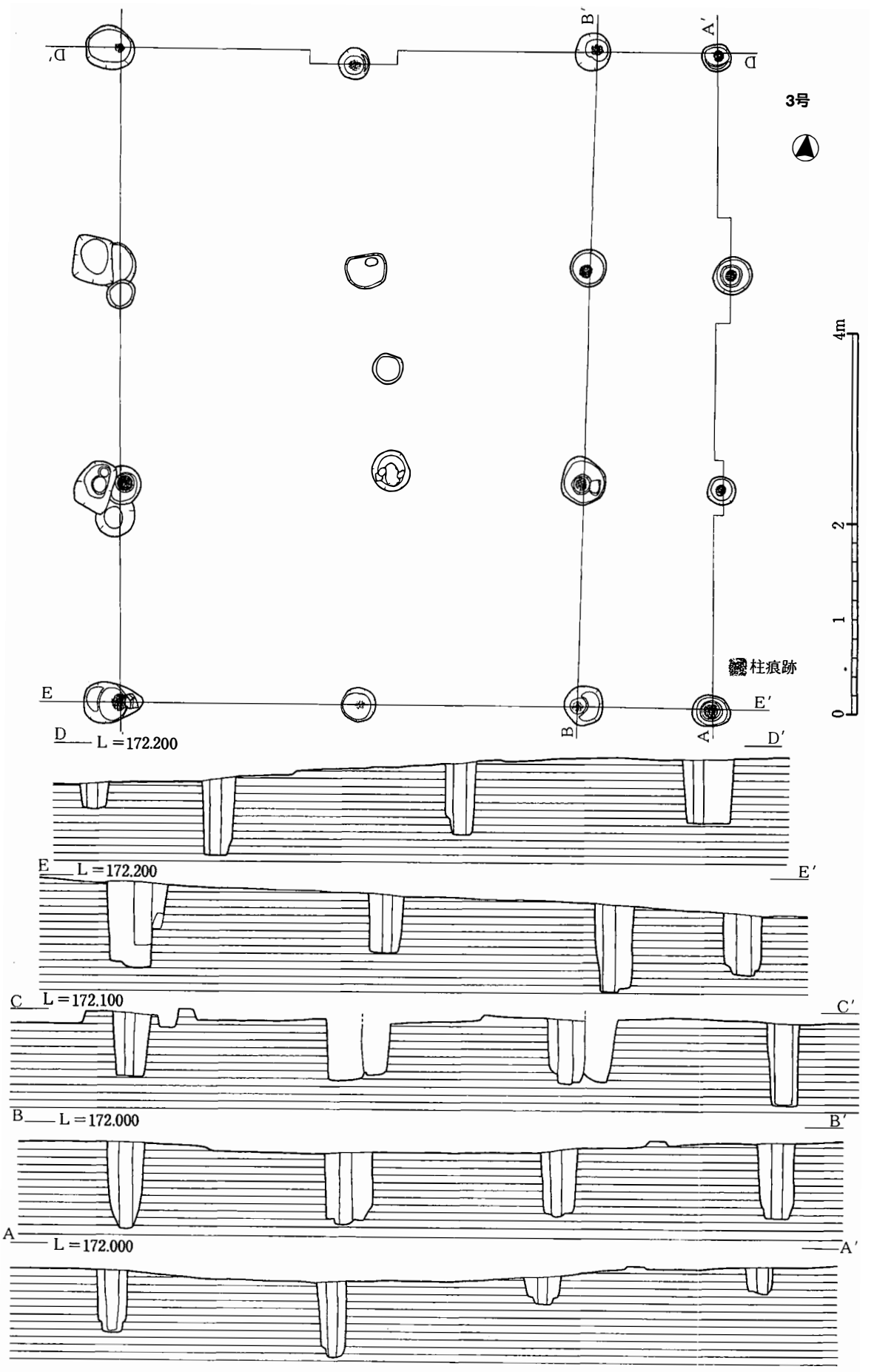
132は黒色土器である。内面黒色で体部は丸みをもち立ち上がる。口径16．4cm前後・器高6.8cmを測



第183図　１号掘立柱建物跡実測図



第184図　２号掘立柱建物跡実測図



第185図　３号掘立柱建物跡実測図

る。

24号土坑（第181図133）

133は須恵器坏蓋である。偏平でかえりをもたない。しっかりしたつまみをもつ。口縁端部を下方向に屈曲させている。回転ヘラ削りは認められない。口径15.7cmを図る。

25号土坑（第181図134）

134は土師器皿である。口径9.7cm・器高1.6cmを測る。

３．28号竪穴式住居跡とその出土遺物（第182図）

調査区北西端で検出された竪穴式住居跡である。西側は道路工事の際に破壊されている。１片が４ｍ44cm・深さ15cm程度の方形を呈すものと考えられる。しかし削平が著しく、南西側では平面形態そのものが不明瞭であった。床面は中央部分に硬化面が存在するが壁際では認められなくなる。焼土はやや中央よりやや北側に認められた。長軸１ｍ・深さ12cm程の楕円形の浅い掘り込みがあり、下層には灰褐色砂質層が、その上層に焼土が黒色砂質土に混る状態で存在する。また数箇所に柱穴と思われるものを検出したが、主柱穴となるものは不明であった。

出土遺物は極少量で土師器の坏などの小片が見られた。

28号竪穴式住居跡の出土遺物（第188図135）

135は坏である。底部はほぼ平底で、体部はほぼ直線気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外に開く。底部と体部の境は明瞭である。

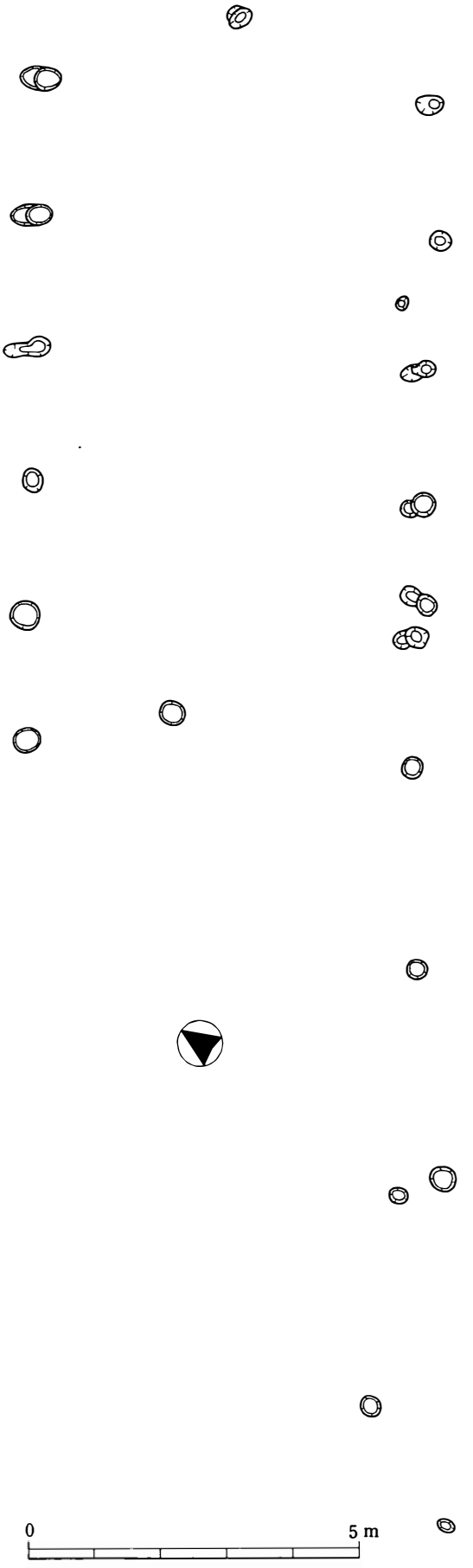
４．掘建柱建物跡とその出土遺物

掘建柱建物跡は３棟を数えた。

１号掘建柱建物跡（第183図）

Ｇ15グリッド内に位置する。南西端部の柱穴は土坑により破壊されているが、桁行３間・梁行１間の柱配置をしていると推察される。桁行方向は、Ｎ－15°－Ｅである。

西側桁行は現存で４ｍ14cmで、柱間は北より約１ｍ97cm・１ｍ76cmを測る。東側桁行は５ｍ96cmで、柱間は北より約１ｍ91cm・１ｍ87cm・１ｍ93cmを測る。



第186図　柵跡実測図

北側梁行は約３ｍ65cmで、柱間は約３ｍ10cmを測る。南側梁行は不明であるが、５・６号柱穴間で約３ｍ10cmを測る。

遺構検出面での柱穴の大きさは直径25～30cmで深さは40～10cm程である。地形は現状では南に向かって傾斜している。掘建柱建物建設当時も緩やかには南へ傾斜していたものとは考えられるが、その後かなりの削平を受けたと考えられる。

２号掘建柱建物跡（第184図）

Ｇ10杭周辺に位置する掘建柱建物。桁行３間、梁行２間の柱配置をしている。桁行方向は、Ｎ－11°－Ｅである。

西側桁行は約８ｍ20cmで、柱間は北より約２ｍ60cm・２ｍ32cm・２ｍ88cmを測る。東側桁行は約８ｍ15cmで、柱間は北より約２ｍ65cm・２ｍ49cm・２ｍ66cmを測る。

北側梁行は約５ｍ８cmで、柱間は西より約２ｍ38cm・２ｍ18cmを測る。南側梁行は約４ｍ80cmで、柱間は西より約２ｍ45cm・２ｍを測る。

遺構検出面での柱穴の大きさは、直径40～48cmで深さは55～12cm程度を測る。柱痕跡を残した柱穴は７箇所から検出された。直径は約10～15cmである。

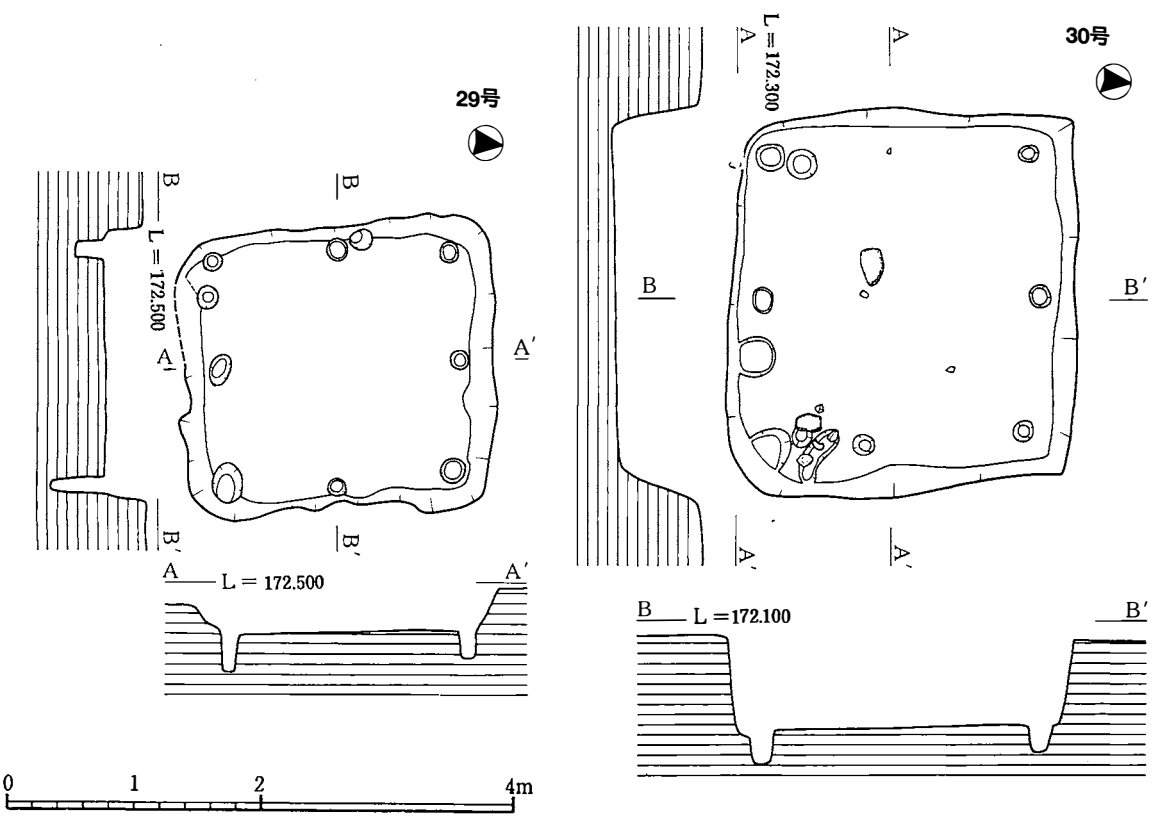
地形は現状では南に向かって傾斜している。掘建柱建物建設当時も緩やかには南へ傾斜していたものとは考えられるが、その後かなりの削平を受けたものと考えられる。

３号掘建柱建物跡（第185図）

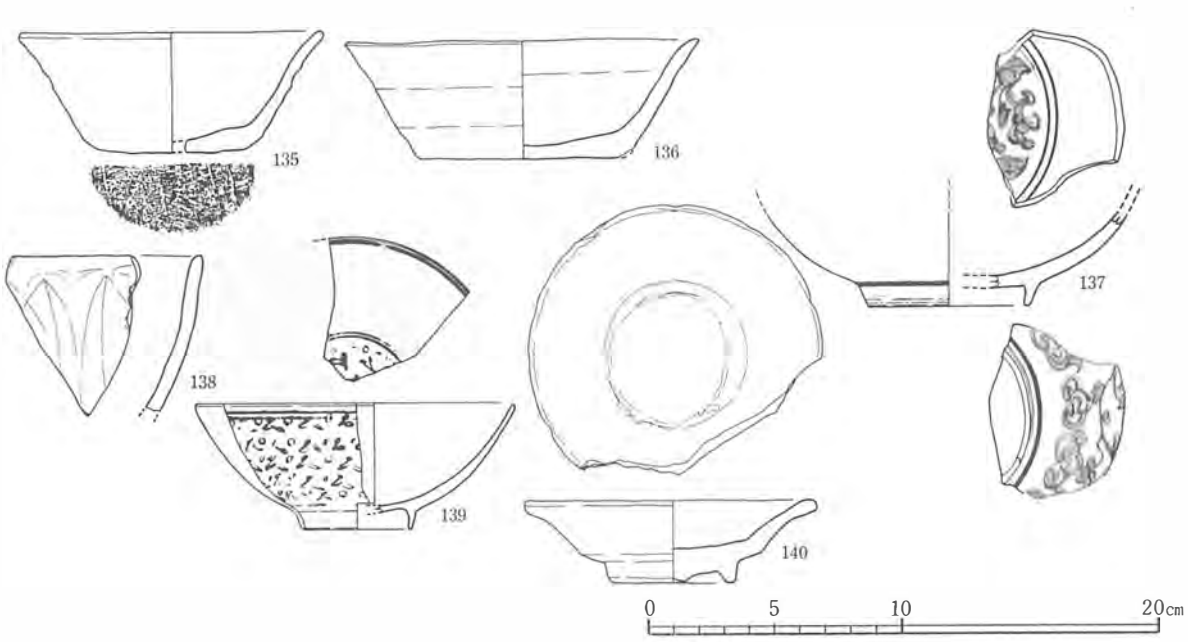
Ｇ８杭周辺に位置する掘建柱建物。桁行３間、梁行２間の柱配置で東側に庇を有するものと思われる。また総柱建物の可能性も考えられたが、中央の柱穴の並びが他の柱穴の並びに比べ不規則であることなどから総柱建物とは断定できなかった。桁行方向は、Ｎ－６°－Ｅである。西側桁行は約７ｍ40cmで、柱間は北より約２ｍ26cm・２ｍ38cm・２ｍ33cmを測る。東側桁行は７ｍ32cmで、柱間は北より約２ｍ28cm・２ｍ22cmを測る。一方庇と考えられるものの桁行は約７ｍ21cmで、柱間は北より約２ｍ22cm・２ｍ33cm・２ｍ31cmを測る。

北側梁行は５ｍ65cmで、柱間は西より約２ｍ70cm・２ｍ57cmを測る。南側梁行は約５ｍ60cmで、柱間は西より約２ｍ75cm・２ｍ43cmを測る。

柱穴は、多くが肩をもつもので、直径40～50cm・



第187図　29・30号竪穴式住居跡遺構実測図



第188図　遺構内出土遺物実測図

深さ27～90cmを測る。そこに直径13～14cmの柱痕跡が残されているものも見られた。柱穴内には柱痕跡の周りに白黄色粘土が見られるものや、礫を柱痕跡の周りに入れていた例も見られた。地形はかなりの削平を受けていると考えられる。現状では南に向かって傾斜している。また掘建柱建物建設当時も緩やかに南へ傾斜していたものと考えられる。

柵跡（第186図）

H13杭を中心とした箇所に位置する。A調査区・G調査区にまたがっていた。当初A調査区で北側の柱穴6個を検出した。ほぼ1列に並び、柱間隔も約1m70cm前後であったために、掘建柱建物跡の可能性があるとしてそれに対応するような柱穴を探したが、検出できなかった。一方1年以上時を経て、G調査区においても柱穴を多数検出した。その内の11個がほぼ1列に並ぶ。またそのうち東側の6個は柱穴間隔が1m80cm前後であり、A調査区で検出した柱穴群と対応する状況であった。A・G調査区いづれの柱穴の深さは30～40cm程度で基底部のレベルもほぼ同じである。ただし、A調査区の柱穴列とG調査区の柱穴列はその間隔が6m50cmもあり、その間に柱穴が認められないこと、また1～3号までの掘建柱建物跡が桁行方向がほぼ南北をとるのに対して、主軸がE－29°－Nをとることなどから建物跡とするより柵としてとらえたほうがいいと判断したものである。

掘建柱建物跡出土の遺物（第188図136）

2号掘建柱建物跡から土師器坏が出土している。口径14cm・器高4.6cmを測る。平底の底部から、体部が直線的に立ち上がるものである。

5．中世の竪穴式住居跡とその出土遺物

29号竪穴式住居跡（第187図）

P4グリッド内に位置する。その平面形は、長軸2m45cm・短軸2m15cmの方形を呈する。深さは最高で35cm程度である。床面は全体的に硬い。柱穴はすべて壁際から検出された。その径は15～20cmで、深さは20～40cmである。

30号竪穴式住居跡（第187図）

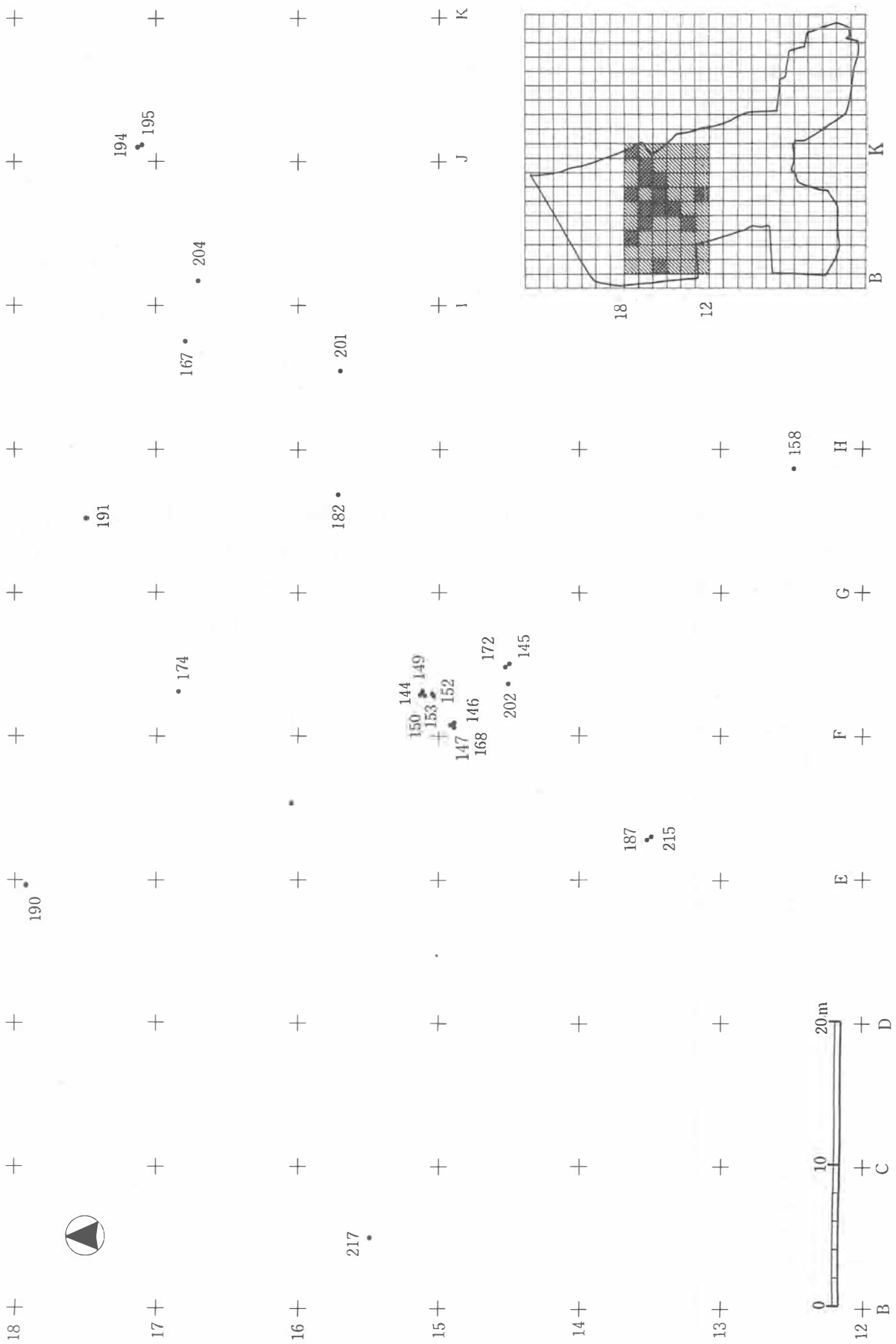
P5グリッド内に位置する。その平面形は、長軸3m5cm・短軸2m70cmの方形を呈する。深さは最高で70cm程度である。床面は全体的に硬い。柱穴はすべて壁際から検出された。その径は15～30cmで、深さは20～30cmである。

竪穴式住居跡出土の遺物

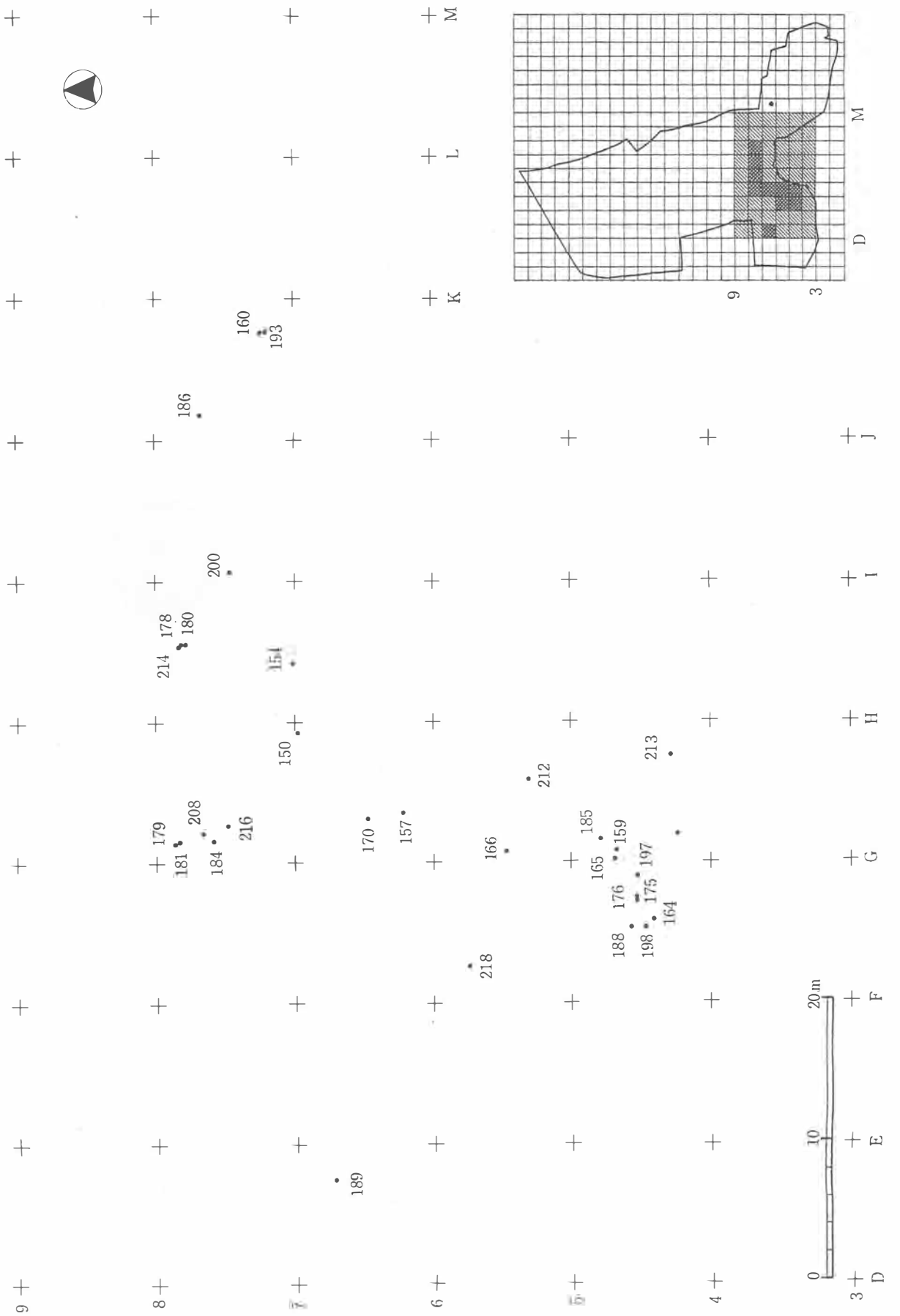
29号竪穴式住居跡出土の遺物としては、土錘（第197図）があるのみで、一方30号竪穴式住居跡出土の遺物としては青磁・染付片などがある。29号竪穴式住居跡の土錘は後で他の土錘と一括して記述する。

30号竪穴式住居跡出土の遺物（第188図137～140）

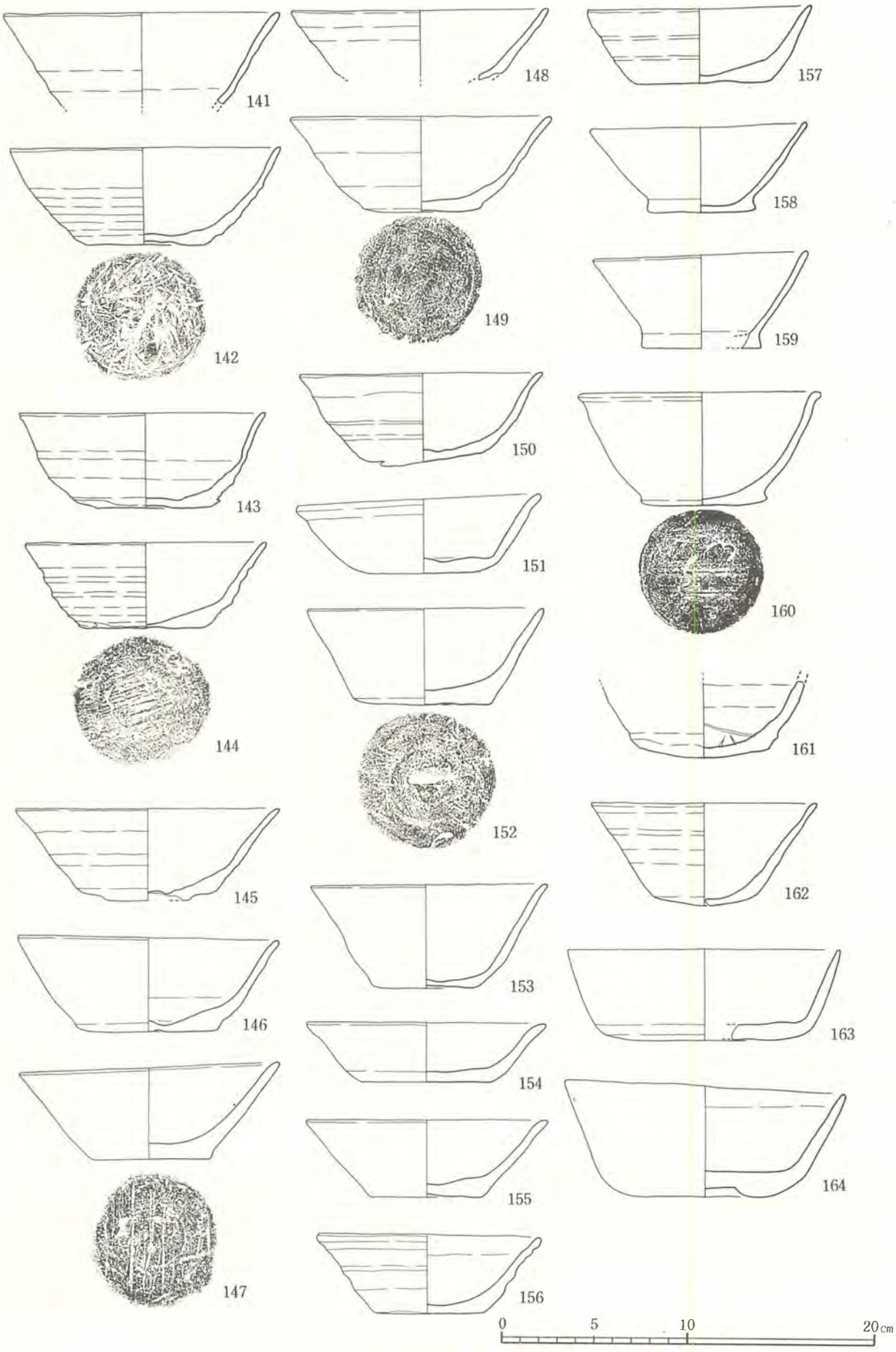
137・139は明代の染付で、137は内面見込部分と体部外面に唐草文を施す。139は内面見込部分と体



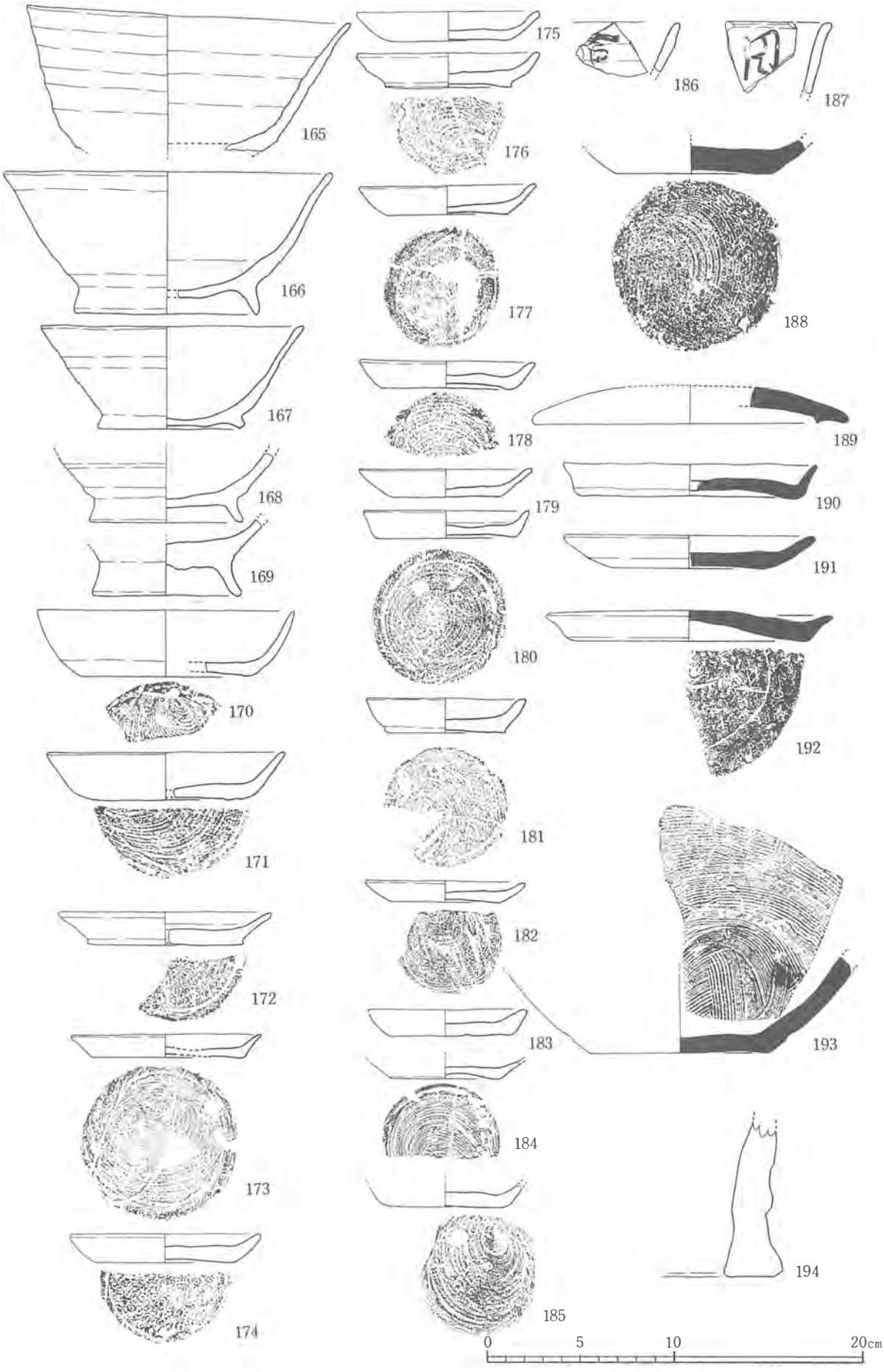
第189図　遺構外出土遺物分布図（１）



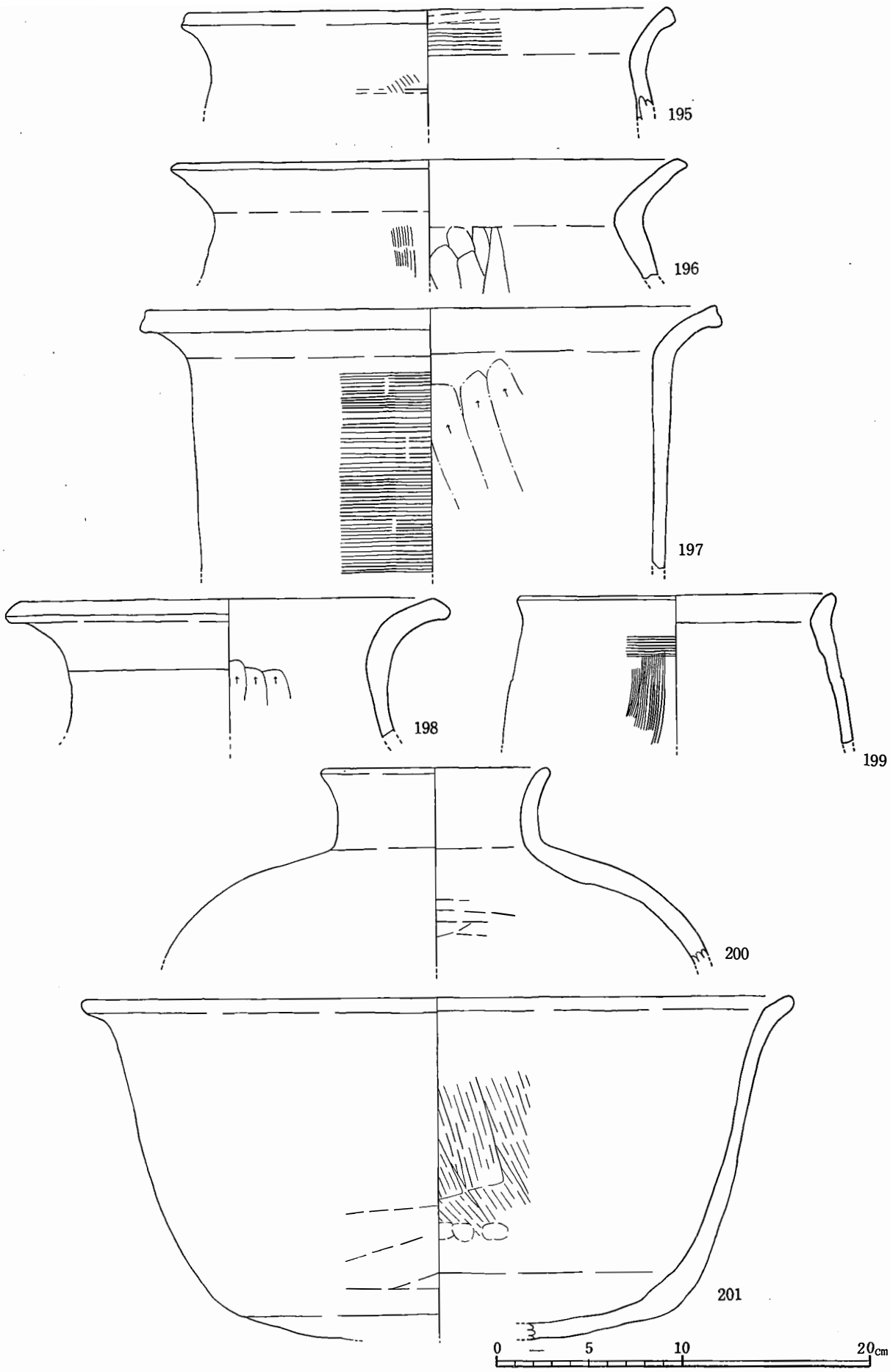
第190図　遺構外出土遺物分布図（２）



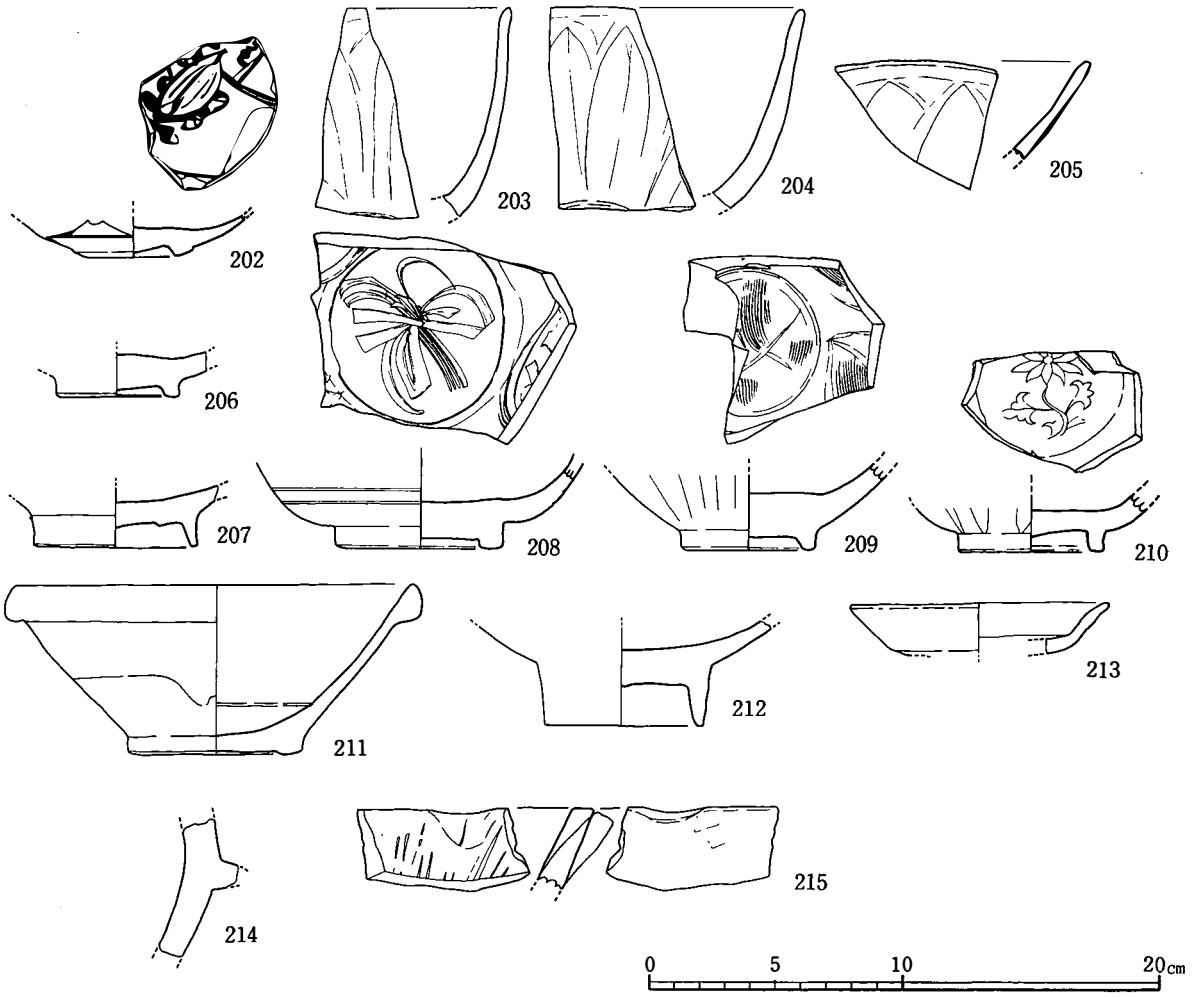
第191図　遺構外出土遺物実測図



第192図　遺構外出土遺物実測図



第193図　遺構外出土遺物実測図



第194図　遺構外出土遺物実測図

部外面に千鳥状の文様を施す。139は137に比べ発色が悪く、施文も粗雑である。138は龍泉窯系の青磁で外面に蓮弁の文様を有する。140もやはり龍泉窯系のもので、輪花を持つ。また内面見込部分の釉をかきとる。

以上の２基であるが、29号竪穴式住居跡からは時期を決定できるような遺物は出土していないが、その構造から同時期と判断した。また住居跡と記したが、古墳時代の住居跡と比較しても規模が小さく、果たして住居跡なのか疑問が残る。あるいは工房・倉庫の用途を考えたほうが良いのかもしれない。

６．包含層出土の土器（第191～194図）

141～147・149～157・162～164は高台を持たないものである。その法量により８種類に分けられる。

まず口径が12cm前後のもので器高が４cm前後のもの（156・157）と器高が5.5cmのものがある（162）前者は平底の底部から体部が直線気味に伸びるものである。後者は丸底気味の底部から体部が直線的に伸びる。

次に口径が13cm前後のものも器高の違いにより３種類に分けられる。器高3.15cmのもの（154）・器高4.2cm前後のもの（144・150・151・155）それと器高5.2cm前後のもの（143・152・153）が存在する。150はやや体部が丸みを帯びる。

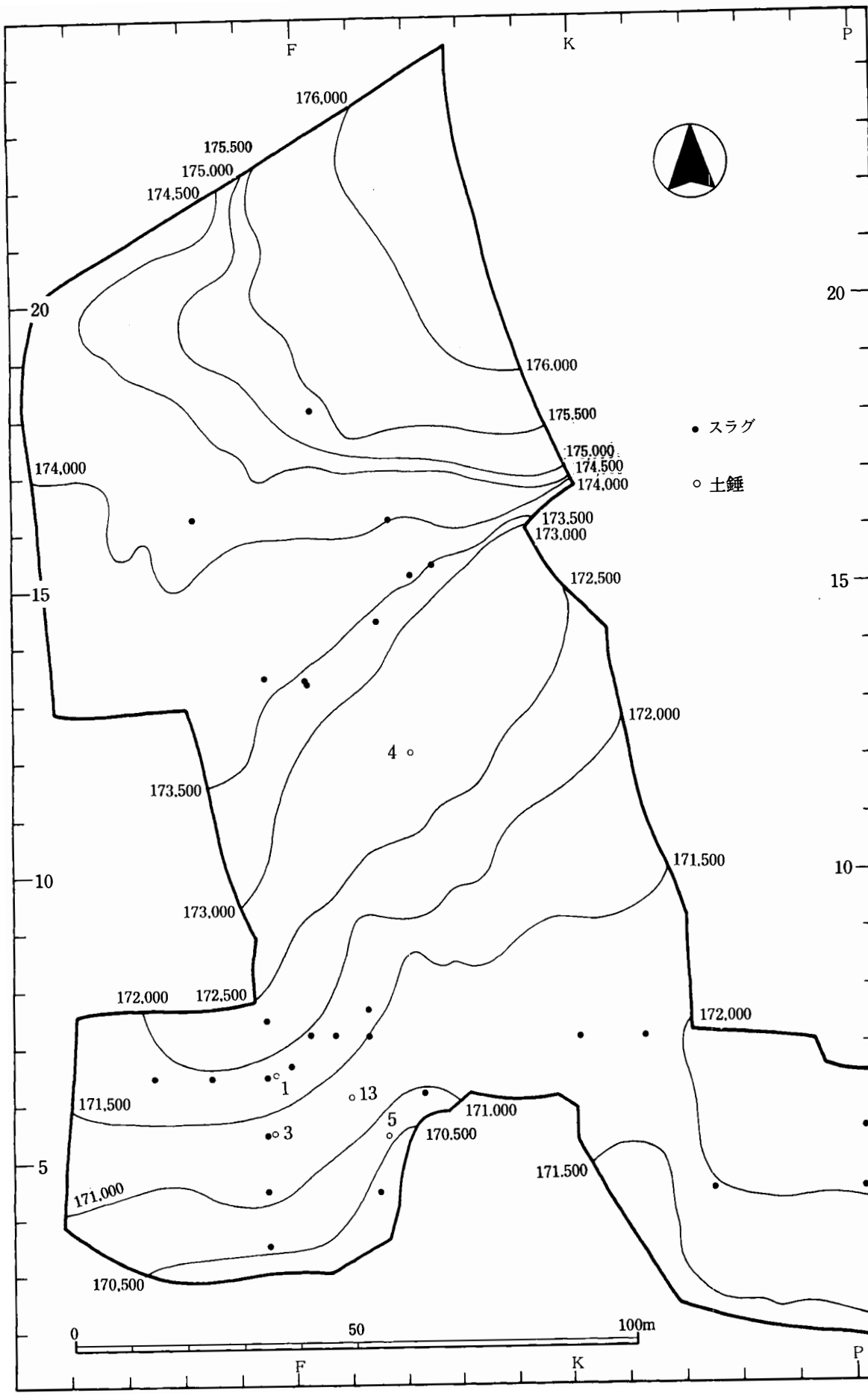
口径14cm前後のもので器高５cm前後のもの（142・145・146・147・149）がある。142は体部がわずかに丸みを帯びる。

そのほか口径15cmを超え、器高4.9cmのもの（163）と器高5.9cmのもの（164）がある。

158～160は底部が厚く円盤底状になるもので、宮崎地方に多く見られるものである。

口径11.4cm・器高4.5～4.9cmのもの（158・160）と口径12.9cm・器高5.9cmのもの（161）がある。161は体部が丸みをもち立ち上がる。口縁端部が外反する。

166～169は高台付きのものである。166は口径



第195図　スラグ等遺物分布図

17.4cm・器高7.4cm・高台径9.6cmを測り、全体的に丸みを帯びる。一方167も丸みを帯びるが、低い高台が付くものである。口径13.9cm・器高5.4cm・高台径7.6cmを測る。その他は高台部分のみである。

141・148・165はいずれも底部を欠損するものである。口径は141が14.7cm、148が13.7cm、165が17.2cmを測る。高台の有無は不明であるが、高台を有するものは口径が大きくなる傾向が認められることから165は高台を有すと思われる。

170～185は皿である。170・171は坏としたほうが良いのかも知れない。170は口径13.6cm・器高3.4cm、171は口径12.5cm・器高2.5cmを測る。両者ともに底部外面に回転糸切の痕跡が認められる。

172～185もやはり172を除き底部は回転糸切の痕跡が残る。172は口径11.3cm・器高1.7cmを測る。その他のものは口径は8.4～10cmで、器高は1.1～1.8cmのものである（173～183）。10cm代のものは173・174、9cm代のものとしては175～180、8cm代のものは181～183がある。

186・187は墨書土器でいずれも口縁部外面に書かれている。186は吉、187は円か？。

188～193は須恵器片である。188は底部片で、回転糸切の痕跡が認められる。189は蓋坏で偏平でかえりは短く形骸化したものとなる。その断面の形は三角形である。つまみの有無は不明である。粗く回転ヘラケズリを施す。190～192は皿で、191を除き形が歪で、調整も雑である。口径はそれぞれ13.4cm、13.3cm、15.2cmである。193は鉢で内面にカキメを施す。

194は移動式竈片であると考えられる。須恵村の別府遺跡でも移動式竈が出土している。

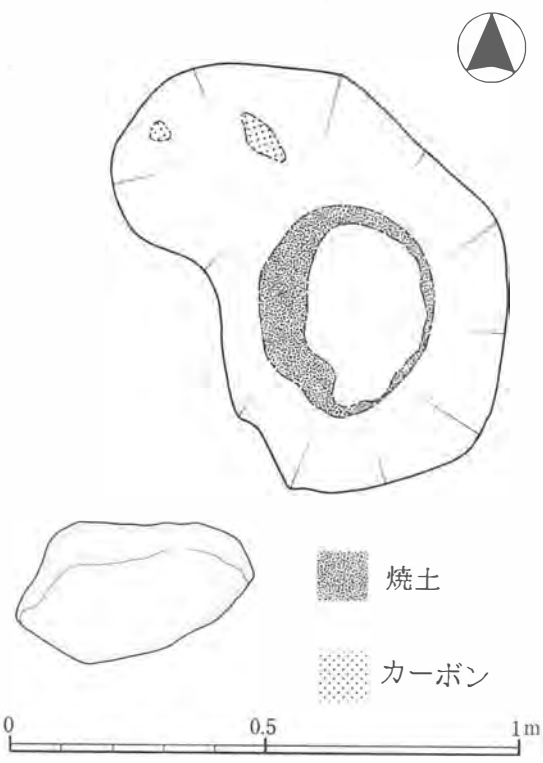
195～199は土師器の甕でいずれも胴部下半を欠損する、195は口縁部がゆるやかに外反する。196は強く外反し「く」の字状を呈す。一方197はほぼ垂直に立ち上がる胴部から外反する口縁部が付く。198は口縁部がなだらかに外反し、頸部内面には稜線をもたない。199は短い口縁部を有す。調整は外面ハケ、内面ケズリである。

200は壷で口縁部は短く上方向に伸び、端部でわずかに外反する。201は頸部のくびれがなく、短い口縁部を持つ。口縁端部付近で大きく外反する。調整は外面ハケ、内面ケズリである。

陶磁器

202は染付、203～210・213は龍泉窯系青磁片で、203～205は外面体部に蓮弁の文様を有する。205は縞をもたない。206・207は底部片で、206の高台は短く断面の形が四角形、297は細長い。208は内底見込みに草花文を有す。209は体部外面は細い蓮弁状の文様を、内底見込みに草花文を櫛状の施文具で描く。高台は短く断面の形が台形を呈す。210は内底見込みに花文様をスタンプする。211・212は白磁で、211は玉縁状の口縁を持ち、外面の体部下位と底部には施釉されていない。212は細く高い高台のもので全面に施釉され、畳付部は釉をカキ取る。

214は滑石製石鍋片である。体部はやや内湾し鍔を有する。外面に煤が付着する。215は片口の摺鉢である。

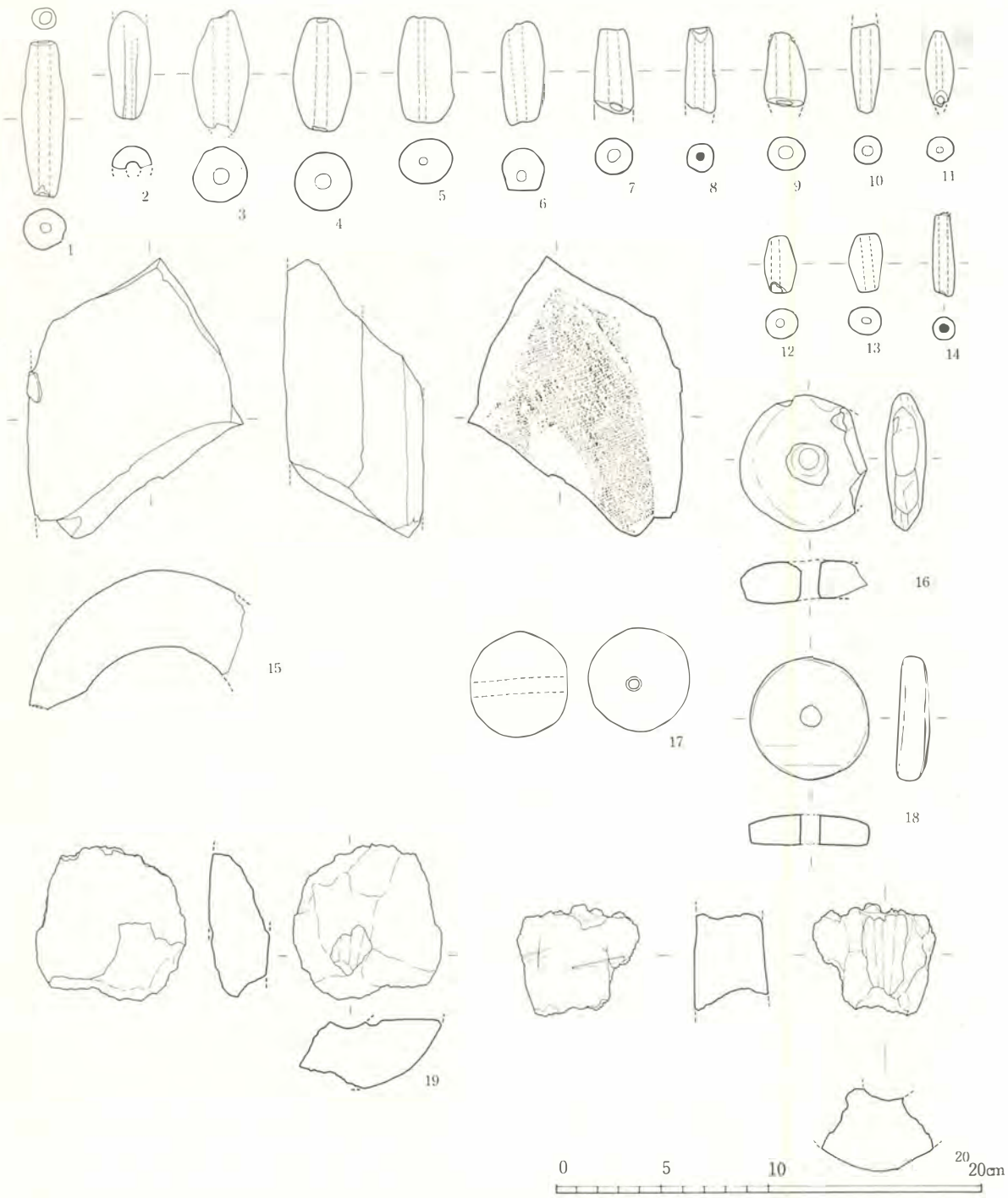


第196図　不明遺構実測図

7．その他の遺構と遺物

不明遺構（第196図）

E19グリッド内に位置する。長軸93cm・短軸57cm



第197図　歴史時代遺物実測図

前後の不正な楕円形を呈し、その深さは５㎝にも満たない。その浅い掘り込みの底に円周状に焼土が巡る。北側にはわずかに炭化物も認められた。またすぐそばに30～50㎝大の石が存在した。

可能性としては製鉄関係の遺構が考えられるが、周辺も含めて土の水洗等を行ったが、製鉄関係を示すようなものは検出されなかった。

しかし、遺跡全体に目を広げると、鞴の羽口やスラグが出土している。しかしその分布（第195図）は１号掘建柱建物跡の北東部、３号掘建柱建物跡の南西部に多く見られる。また調査区南東端の古墳時代の竪穴式住居跡や中世の29号・30号竪穴式住居跡などが存在する箇所にも認められる。一方鞴の羽口は出土数自体が少ないが、調査区南東端や南西端より出土している（第197図19・20）。

土錘（第197図１～14）

14点程出土している。いづれも管状のものである。その形状は細長いものと厚手のものの２種類がある。

重量は完形品ばかりではないので、やや不正確な面があるが、25ｇ以上のもの（１～５）、10～20ｇ位のもの（６～10）、それと５ｇ以下のもの（11～14）がある。一方孔の内径では５㎜前後のもの（１～７・９・10）と３㎜前後のもの（８・11～14）がある。この形態は弥生時代よりつい最近まで使用されていたもので、どの時期に該当するかが不明である。その中で２は中世の竪穴式住居跡からの出土である。それ以外に17は果たして土錘としていいものか不明だが球形のものがある。その重さは104ｇで直径4.8㎝を測る。孔の内径は5.5㎜を測るものがある。またその分布はG区に顕著である。これは縄文時代の石錘と同様な分布を示している。

15は丸瓦で内面に布目圧痕が認められる。

紡錘車(第197図16・18)

２点を図化した。16は直径5.5㎝を測り、中央に直径９㎜の孔を有す。18は11号土坑からの出土で直径6.3㎝を測り、中央に直径９㎜の孔を有す。

８．まとめ

奈良時代以降の遺構と遺物について記述してきたが、再度項目別に整理してみたい。

土坑

22基を検出した。そのうちの４号から９号までは、不定形のもので床面もしくは壁面に焼土が見られるものである。調査区の中央部よりやや北に寄った箇所に集中する。出土遺物の多くが土師器の坏及び高台付椀であり、それ以外に土師器甕などがわずかに認められるだけであり、他の土坑より器種が少ない。土師器焼成遺構の可能性が一番高いと考えるが断定できなかった。

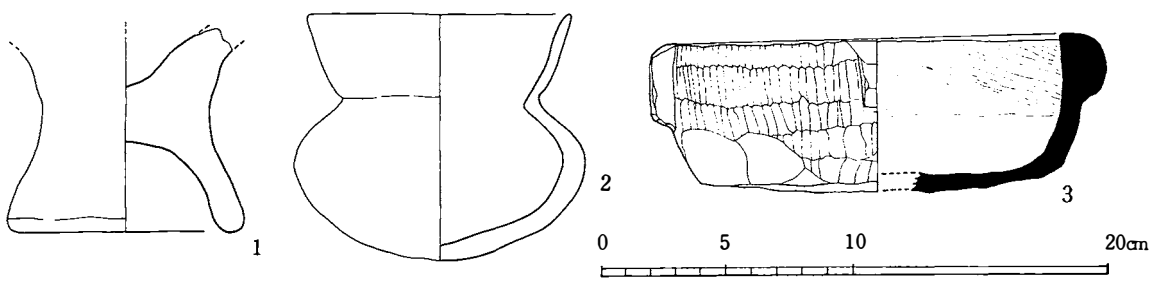
その他の土坑は、その平面プランが長方形に近いもの、円形に近い形のもの、正方形に近いものとがある。長方形のプランを呈すもの（11・15号土坑）は、土壙墓と考えられる。いづれも黒色土器が出土している。一方円形プランのもので深さも深く、遺物量が多い17・23号土坑についてであるが、17号については黒色土器なども出土し土壙墓の可能性もある。一方23号についてはその出土量の多さから土器捨て場の可能性を考えている。

また土坑に伴い出土した遺物は、土師器の年代からみて主体となるものは９世紀前半から中頃を中心としたものである。特に土師器焼成土坑の可能性のある４号～９号土坑から出土する土師器や、土壙墓と考えられる11・15・17号から出土する土師器がそれに該当する。またその中でもわずかながら前後関係が認められる。６号土坑と７号土坑の図化していないものも含めて７号土坑の高台と６号土坑の高台を比較すると７号土坑のものが形がシャープで、６号土坑の高台は丸みを帯びたものが多く、７号土坑の方が先行するものと考えられる。その間を埋めるものとして11・15～17・23号土坑の土師器が存在する。

それ以外に10号土坑の須恵器甕は８世紀頃、18号土坑の須恵器坏蓋は６世紀末頃、また24号土坑の須恵器坏蓋は下がり山７号窯跡のものと類似し９世紀代のものと考えられる。

掘建柱建物跡

３棟を検出した。３棟とも桁行方向がほぼ南北に近いものであることから、同時期のものと思われる。一方柵跡と考えられる遺構についても掘建柱建物跡の桁行方向と柵跡の主軸がほぼ垂直になることより



第198図　表面採集資料実測図

同時期の可能性が高い。その時期については土師器坏１点の出土であり、慎重にならざるを得ないが、ただ上記の土坑群に近接した年代が想定できるのではなかろうか。

竪穴式住居跡

28号竪穴式住居跡も出土遺物量が少なく年代を決定することが躊躇されるが、やはり上記に近い年代が考えられる。

29・30号竪穴式住居跡は30号で出土した陶磁器類より15～16世紀の時代と考えられる。しかし住居として使用されたかについては不明である。

その他の遺物

遺構外出土の土師器椀・坏についてはその多くが上記土坑出土のものと形態が類似し、９世紀代のものと考えられる。円盤状高台のもの（158・159）は10世紀前半代のものと推察される。また土師器皿は口径が９㎝代のもの（175～180）は12世紀前半代に、８㎝代のもの（181～183）は12世紀後半から13世紀に比定される。

また陶磁器類は龍泉窯系青磁の203～205はⅠ5b類で13世紀初頭から前半に、208はⅠ2～3類で12世紀中葉～後半に、209は０類で11世紀後半～12世紀前半に、210はⅠ5c類で13世紀初頭から前半にそれぞれ比定される。一方白磁は211はⅣ－1類、212はⅤ類にそれぞれ比定され、11世紀後半から12世紀代頃のものと思われる。

またそれ以外に注目されるのがスラグである。鞴の羽口も出土し、なんらかの製鉄関連の遺構があったことを示唆している。

第７節　表面採集資料（第198図）

１は調査区外の北西側の畑で採集した脚部分である。弥生時代のものと考えられる。２はＡ区の第Ⅰ層中より出土した小型丸底壷である。器面が荒れ、調整等は不明であるが、古墳時代のものであろう。口径10.4㎝・器高9.6㎝を測る。３は荒木勝氏所有の滑石製石鍋で、調査区内のＡ区とＣ区の境付近より発掘調査以前に畑の耕作中に出土したものである。また実測図は人吉市教育委員会の鶴嶋俊彦氏より提供を受けた。今回そのご好意により掲載を許可させて下さった。やや丸みを帯びた２対の方形の耳を有するもので、体部はわずかに内湾する。外面には煤の付着が認められる。口径16.5㎝・器高6.1㎝を測る。

第Ⅳ章　自然科学的分析

熊本県沖松遺跡の自然科学分析

古環境研究所

Ⅰ．沖松遺跡のテフラ

1．はじめに

熊本県南部に位置する人吉盆地には，南九州地方の姶良カルデラ、阿多カルデラ、加久藤カルデラさらに中九州地方の阿蘇カルデラなどから噴出した多くの大規模火砕流堆積物が厚く堆積している。またこれらのほかにも降下テフラ層が認められる。これらのテフラ層（降下火山砕屑物）を過去の時間および空間の指標として利用することで、遺物包含層の堆積年代や遺構の構築年代を知ることができる。このように噴出年代が明らかな示標テフラを鍵層として編年を行うテフロクロノロジー（火山灰編年学）は、大量のテフラを噴出する火山が多く分布する日本列島の考古学や地質学の分野において、最も有効な編年方法として盛んに利用されている。沖松遺跡の発掘調査でも火山灰土の良好な土層断面が認められた。そこで、野外地質調査とテフラ検出分析さらにテフラ組成分析を行い、示標テフラの層序を明らかにすることを試みた。

2．土層層序（第119図）

（1）第２トレンチ

地質調査の対象とした地点は、第２トレンチ、第５トレンチ、第４トレンチの３地点である。第２トレンチでは沖松遺跡の土壌のうち比較的下位の土層をよく観察することができた。ここでは下位より黄灰色ローム層（層厚15cm以上）、暗褐色粘質ローム層（層厚16cm）、成層したテフラ層（6'層、層厚93cm）、褐灰色土（層厚６cm）、褐色土（層厚15cm）、作土（層厚32cm）の連続が認められた（図１）。

これらのうち成層したテフラ層は、下位より黄色細粒火山灰（層厚５cm）、遊離結晶に富む灰白色粗粒火山灰層（層厚２cm）、逆級化構造が認められる黄橙色火砕流堆積物（層厚79cm）から構成されている。火砕流堆積物の下部（層厚14cm）はとくに細粒で火山ガラスに富む。また最大径24mmの黄色軽石と最大径２mmの石質岩片が含まれている。

（2）第５トレンチ

ここではローム層の上位の土層をよく観察することができた。本地点では第２トレンチの成層したテフラ層（6'層、層厚２cm以上）の上位に、下位より褐灰色砂質ローム層（６層、層厚22cm）、暗褐色土（５層下部、層厚20cm）、下位より若干明るい暗褐色土（５層上部、層厚17cm）、黒褐色土（４層、層厚37cm）、黄色細粒火山灰層（3'層、層厚0.5cm）、暗褐色作土（層厚32cm）の連続が認められた（図２）。

（3）第４トレンチ

ここでは第２トレンチの最下位のローム層（層厚21cm）の上位に、下位より暗褐色ローム層（層厚18cm）、褐色ローム層（６層、層厚39cm）、黒褐色土（４層、層厚37cm）、黄色細粒火山灰層（3'層、層厚３cm）、暗褐色作土（層厚42cm）の連続が認められた（図３）。

3．テフラ検出分析

（1）分析試料と方法

野外において認められたテフラの粒子の特徴を記載するため、また肉眼で認めることのできないローム層やその上位の土層中のテフラの有無を確かめるためにテフラ検出分析を行った。分析では基本的に５cmごとに採取された試料のうち、第２トレンチの３点、第５トレンチの６点そして第４トレンチの１点の合計10点を選定して分析の対象とした。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

1）試料15gを秤量。

2）超音波洗浄装置により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

（2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表4に示す。第2トレンチの試料番号1には、最大径24.0㎜の黄色軽石が含まれている。軽石は繊維束状によく発泡している。また最大径2.1㎜の石質岩片も含まれている。この試料には、火山ガラスも非常に多く含まれている。火山ガラスの多くは平板状のいわゆるバブル型ガラスで、繊維束状に発泡した軽石型ガラスが少量認められる。色調は透明で、褐色のものもごく少量含まれている。試料番号5ではごく少量の火山ガラスが認められるのみで、テフラの降灰層準を示唆するようなものではない。火山ガラスはバブル型ガラスのほか少量の繊維束状に発泡したものが認められる。色調は無色透明で、褐色のものも少量含まれている。試料番号7には、最大径1.8㎜のスポンジ状に発泡した軽石が多く含まれている。この試料には火山ガラスも比較的多く含まれており、スポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型に富む。ほかに少量のバブル型ガラスも認められる。火山ガラスの色調は無色透明である。

第5トレンチのいずれの試料にも火山ガラスが多く含まれており、とくに顕著なテフラの降灰層準を示す試料は認められなかった。含まれる火山ガラスはバブル型に富み、繊維束状に発泡した軽石型ガラスも少量認められる。色調は無色透明で、褐色を呈するものがごく少量認められる。

第4トレンチの試料番号1には、火山ガラスがとくに多く含まれれている。含まれる火山ガラスはバブル型に富み、繊維束状に発泡した軽石型ガラスも少量認められる。色調は無色透明で、褐色を呈するものも比較的多く認められる。

4．テフラ組成分析

（1）分析試料と方法

テフラ層が認められた第2トレンチの試料番号1および第4トレンチの試料番号1の2試料について、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行い、鉱物組成上の特徴を記載することにした。テフラ組成分析の手順は次の通りである

1）テフラ検出分析処理済み試料について、分析篩を用いて1／4～1／8㎜の粒子を篩別。

2）偏光顕微鏡下で250粒子を同定し、火山ガラス比を求める。

3）さらに偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を同定し、重鉱物組成を求める。

（2）分析結果

テフラ組成をダイヤグラムにして表4に、その内訳を表5および表6に示す。第2トレンチの試料番号1には、透明で平板状のいわゆるバブル型火山ガラスが特に多く含まれている（92.8%）。淡褐色を呈するガラスは非常に少ない（0.8%）。ほかに繊維束状に発泡した軽石型火山ガラスも少量（2.8%）含まれている。一方重鉱物では斜方輝石（62.8%）が多く含まれており、ほかに磁鉄鉱（24.0%）、単斜輝石（7.6%）、角閃石（3.6%）などが含まれている。

第4トレンチの試料番号1にも透明のバブル型火山ガラスが多く含まれている。（66.0%）。ほか淡褐色や褐色のバブル型火山ガラス（7.2%、2.0%）も認められる。さらに繊維束状に発泡した軽石型火山ガラスも少量（4.0%）含まれている。一方重鉱物では磁鉄鉱（48.8%）のほか、斜方輝石（30.0%）と単斜輝石（16.8%）などが多く含まれている。

5．考察ー示標テフラとの同定

沖松遺跡の土層断面において成層したテフラ層（6′層）と、黄色の細粒火山灰層（3′層）の2層のテフラ層が検出された。6′層のうちとくに最上部の火砕流堆積物は、層相や透明のバブル型火山ガラスに富むこと、さらに斜方輝石や単斜輝石のほかに角閃石が含まれる重鉱物組成上の特徴などから、約2.1-2.5万年前に姶良カルデラから噴出した姶良－入戸火砕流堆積物（A-Ito, 荒牧, 1969, 町田・新井, 1976, 町田・新井, 1992）に同定される。その下部の遊離結晶に富む灰白色粗粒火山灰層は、層相からこの火砕流の一部でGround Layerの可能性が大きい。

6′層最下部の軽石や火山ガラスを多く含む細粒火山灰層は、層位から入戸火砕流に先行して姶良カルデラから噴出した姶良－大隅降下軽石層（A-Os）

か、または姶良－妻屋火砕流堆積物（A-Tm，いずれも荒牧, 1969, 町田・新井, 1976, 町田・新井, 1992）の灰かぐら起源の降下テフラ層に由来する可能性が大きいと考えられる。この細粒火山灰層は宮崎県北部や中国四国地方さらに近畿地方でも確認されており、この細粒火山灰の存在はこれらの地域においてその上位に堆積する入戸火砕流の噴出と同時に放出された厚い広域テフラ、姶良Tn火山灰（AT, 町田・新井，1976）の一次堆積か否かの判断材料として非常に有効である（早田，未公表資料）。現段階でこの火山灰層の起源を確定することは困難であるが、野外地質調査を広域に行うことでその起源を明らかにすることが可能である。

3′層の細粒火山灰層は、層相やバブル型ガラスに富み無色透明のほか比較的多くの褐色ガラスが含まれる特徴、さらに斜方輝石や単斜輝石に富む重鉱物組成上の特徴などから、約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 町田・新井，1978）に同定される。なおさらに同定の精度を向上させるために、屈折率の測定を行うと良い。

6．小結

沖松遺跡において地質調査とテフラ検出分析さらにテフラ組成分析を合わせて行った結果、入戸火砕流堆積物（A-Ito，約2.1-2.5万年前）と鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前）が検出された。なお今回の調査では検出されなかったが、人吉盆地には約1.1万年前に桜島火山から噴出した桜島－薩摩テフラ（Sz-S，町田ほか，1984，町田・新井，1992）をはじめとする示標テフラがほかに検出される可能性もある。人吉盆地には、さらに詳細な編年学的研究の展開できる可能性が秘められている。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

荒牧重雄（1969）鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物．地質雑誌，75，p.425-442.

小野晃司・松本柾夫・宮久三千年・寺岡易司・神戸信伸（1977）竹田地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１図幅），地質調査所，156p.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－　科学，46, p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰　第四紀研究，17，p.143-163.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス，東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・百瀬　貢（1985）阿蘇４火山灰－分布の広域性と後期更新世指標層としての意義－．火山，30，p.49-70.

表4　沖松遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
第2トレンチ	1	＋＋＋	黄	24.0	＋＋＋＋	bw＞pm	透明，褐
	5	－	－	－	＋	bw＞pm	透明，褐
	7	＋＋＋	黄白	1.8	＋＋	pm	透明，
第5トレンチ	1	－	－	－	＋＋＋	bw＞pm	透明，褐
	3	－	－	－	＋＋＋	bw＞pm	透明，褐
	5	－	－	－	＋＋＋	bw＞pm	透明，褐
	7	－	－	－	＋＋＋	bw＞pm	透明，褐
	9	－	－	－	＋＋＋	bw＞pm	透明，褐
	11	－	－	－	＋＋＋	bw＞pm	透明，褐
第4トレンチ	1	－	－	－	＋＋＋＋	bw＞pm	透明，褐

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋＋：とくに多い，＋＋：中程度，＋：少ない，－：認められない．最大径の単位は㎜　bw：バブル型，pm：軽石型．

表5　沖松遺跡の火山ガラス分析結果

地点	試料	bw（透明）	bw（淡褐色）	bw（褐色）	md	pm	その他	合　計
2Tr	1	232	2	0	1	7	8	250
4Tr	1	165	18	5	1	10	51	250

数字は粒数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型．

表6　沖松遺跡の重鉱物組成分析結果

地点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合　計
2Tr	1	0	157	19	9	0	60	5	250
4Tr	1	0	75	42	2	2	122	7	250

数字は粒数．ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石，bi：黒雲母，mt：磁鉄鉱．

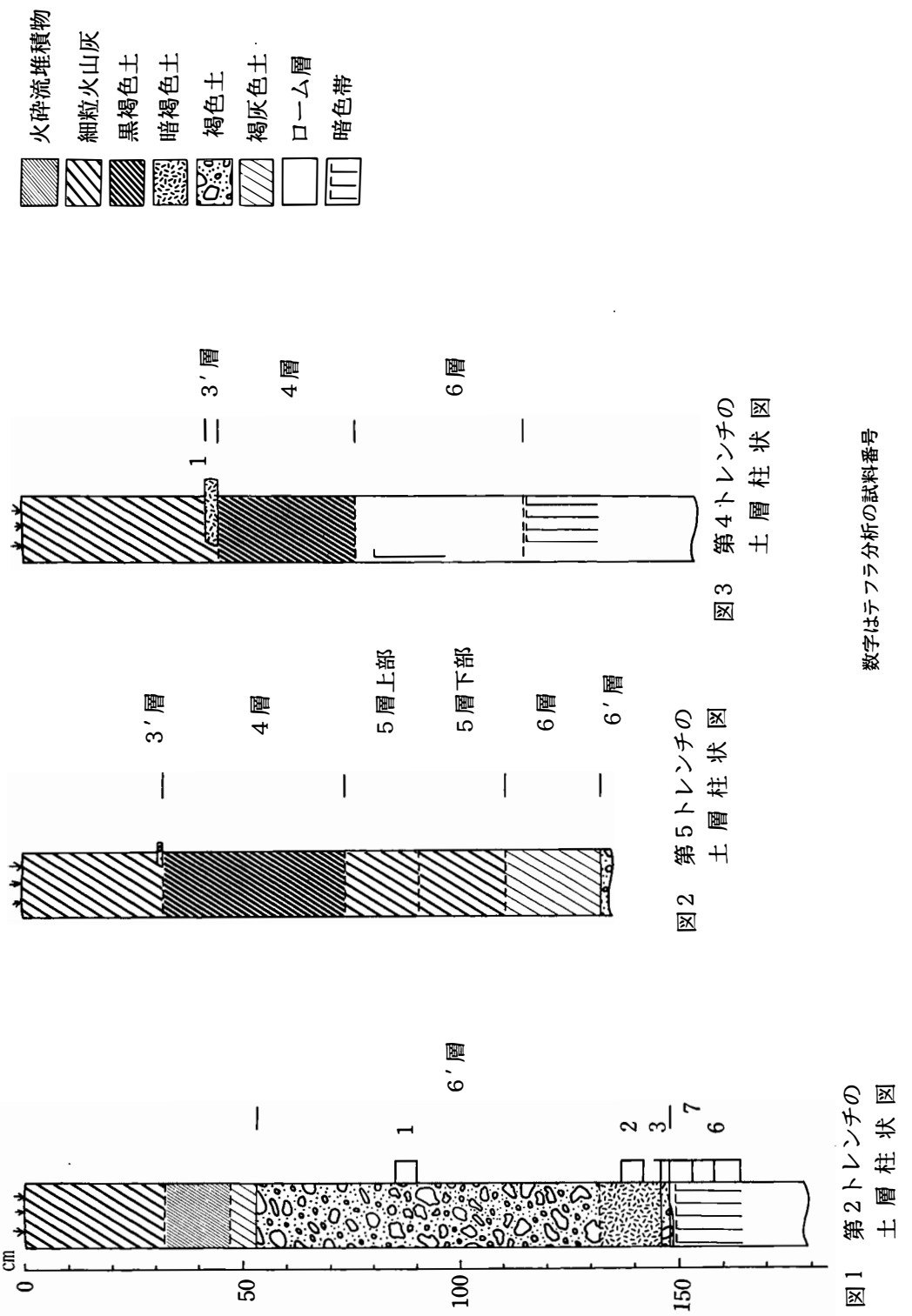


図1　第2トレンチの土層柱状図

図2　第5トレンチの土層柱状図

図3　第4トレンチの土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

第199図　2・4・5トレンチ柱状図

II．沖松遺跡の植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。この微化石は植物により様々な形態的特徴を持っていることから、土壌中から検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生環境を復元することができる（杉山，1987）。

ここでは、沖松遺跡の試料について植物珪酸体分析を実施し、イネ科栽培植物の検討および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

2．試料

対象とした地点は、第２トレンチ、第５トレンチ、第４トレンチの３地点である。分析試料は、第２トレンチの６′層直下層（試料16、18）、第５トレンチの６層（試料14）と５層（試料8、11）、第４トレンチの４層（試料４、５）と現耕作土（試料１、３）の計９点である。採取層準の詳細については１．沖松遺跡のテフラを参照されたい。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料の絶乾（105℃・24時間）

２）試料約１gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02 g）

電子分析天秤により１万分の１gの精度で秤量

３）電気炉灰化法による脱有機物処理

４）超音波による分散（300W·42KHz·10分間）

５）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

６）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各種物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、

イネ、オオムギ族（穎の表皮細胞）、キビ族（ヒエ属など）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属やチガ（種実重は1.03）、8.40、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

4．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表７、表８および第200・201図に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、オオムギ族（穎の表皮細胞）、キビ族（ヒエ属など）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属也チガヤ属など）、シバ属、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類のタケ亜科、表皮毛起源、棒状珪酸体、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科-シイ属、マンサク科-イスノキ属、クスノキ科（バリバリノキ？）、ブナ科？、その他

5．イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめ、オオムギ族（ムギ類が含まれる）、キビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、トウモロコシ属、ジュズダマ属（ハトムギが

含まれる）などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネ、オオムギ族、キビ族が検出された。

イネは、現在の耕作土（試料1、３）で検出された。密度は試料１で21,600個/g、試料２で17,300個/gと高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを大きく上回っている。したがって、これらの層準の時期には稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

オオムギ族（頴の表皮細胞）は、現耕作土上部（試料１）で検出された。密度は700個/gと低い値である。オオムギ族については標本の検討が十分とは言えないが、ここで検出されたのはムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井，1989）である。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

キビ族は、現耕作土上部（試料１）で検出された。密度は700個/gと低い値である。同族にはヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点ではこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを完全に識別するには至っていない（杉山ほか, 1988）。したがって、ここでヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草に由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等賭したものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

６．植物珪酸体群集と古植生

第２トレンチの６′層直下層（試料16、18）、第５トレンチの６層（試料14）、５層下部（試料11）、５層上部（試料８）、第４トレンチの４層（試料４、５）、現耕作土（試料１、３）について分析を行った。

その結果、６′層（入戸火砕流堆積物、約2.1-2.5万年前）の直下層（試料16、18）では、クマザサ属型が比較的多く検出され、棒状珪酸体も多く検出された。また、試料18では樹木（ブナ科？）に由来する植物珪酸体も検出された。

６層（試料14）では、クマザサ属型や棒状珪酸体が比較的多く検出され、ウシクサ族型なども少量検出された。ナイフ形石器包含層の５層下部（試料11）およびその上位の５層上部（試料８）では、６層とほぼ同様の結果であるが、植物珪酸体総数が増加傾向を示しており、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）も少量検出された。

４層（縄文時代早期の押型文土器包含層、試料４、５）では、クマザサ属型やウシクサ族型、棒状珪酸体が比較的多く検出され、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）やヨシ属なども少量検出された。

現耕作土（試料１、３）では、前述のようにイネが多量に検出された。４層まで優勢であったクマザサ属型はほとんど見られなくなり、かわってネザサ節型やウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）が増加している。また、現耕作土上部（試料１）では前述のようにオオムギ族やキビ族が検出され、シバ属やメダケ節型、マダケ属型も見られた。さらに、ブナ科-シイ属、マンサク科-イスノキ属、クスノキ科（バリバリノキ？）などの照葉樹に由来する植物珪酸体も検出された。樹木についてはイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する場合には、他の分類群よりも過大に評価する必要がある。

おもな分類群について植物珪酸体密度から給源植物の生産量を推定したところ、４層より下位ではクマザサ属型（おもにクマザサ属）がおおむね卓越しており、現耕作土ではイネが圧倒的に卓越していることが分かる（表８）。

以上の結果から、沖松遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

入戸火砕流堆積物（約2.1-2.5万年前）直下層の堆積当時は、クマザサ属を主体とするイネ科植生であったものと考えられる。クマザサ属は比較的寒冷なところに生育していることから、当時は比較的寒冷な気候条件であったものと推定される。また、クマザサ属は森林の林床でも生育できることから、ブナ科などの落葉樹の下草としてクマザサ属が分布して

いた可能性も考えられる。

入戸火砕流堆積物の直上層（６層）、ナイフ形石器包含層（５層下部）とその直上層（５層上部）でも、クマザサ属を主体とするイネ科植生が継続されていたと考えられるが、５層ではススキ属やチガヤ属なども小量見られたものと考えられる。ススキ属やチガヤ属は森林の林床では生育しにくいことから、５層の堆積当時は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた部分もあったものと考えられる。

縄文時代早期の押型文土器包含層（４層、約6,300年前とされる鬼界アカホヤ火山灰層直下）の堆積当時は、クマザサ属を主体としてススキ属やチガヤ属、ヨシ属なども見られるイネ科植生であったものと推定される。ヨシ属は比較的湿潤なところに生育していることから、当時の遺跡周辺には湿地的な部分も見られたものと推定される。

現耕作土では、おもに稲作が行われていたものと考えられ、比較的最近になってムギ類やキビ族（ヒエ？）なども栽培されるようになったものと推定される。なお、遺跡周辺などではススキ属やチガヤ属、ネザサ節が見られ、比較的最近になってシバ属やマダケ属、メダケ節なども見られるようになったものと考えられる。マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高いが、これらの植物が現れるのは比較的最近のことと考えられる。

また、ブナ科-シイ属、マンサク科-イスノキ属、クスノキ科（バリバリノキ？）などの照葉樹も比較的最近になって見られるようになったものと推定される。花粉分析の結果によると、九州の太平洋沿岸部では鬼界アカホヤ火山灰（約6,300年前）の堆積以前には、シイ林を中心とする照葉樹林が成立していたとされている（松下, 1992)。しかし、本遺跡では鬼界アカホヤ火山灰より下位では照葉樹に由来する植物珪酸体はまったく検出されず、シイ属やイスノキ属などの照葉樹が出現するのは、ようやく現耕作土上部の時期になってからである。

このように、内陸部や台地部では沿岸部よりもかなり遅れて照葉樹林が拡大した可能性が考えられる。今後、周辺地域で同様の検討を行うことにより、照葉樹林の存在や分布拡大の様相が解明されるものと期待される。

参考文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第２号：p.27-37.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号：p.70-83.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20：p.81-92.

杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村、ＦＰ直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析．日本第四紀学会要旨集，19：p.94-95.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9：p.15-29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（３）－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定－．考古学と自然科学，12：p.29-41.

近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第２報）－双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について－．帯広畜産大学研究報，12：p.217-229.

松下まり子（1992）日本列島太平洋岸における完新世の照葉樹林発達史．第四紀研究，31（５）：p.375-387.

表７　熊本県、沖松遺跡の植物珪酸体分析結果

分　類　群	No.1	3	4	5	8	11	14	16	18
イネ科									
イネ	216	173							
オオムギ族（頴の表皮細胞）	7								
キビ族（ヒエ属など）	7								
ヨシ属		8	7	16					
ウシクサ族（ススキ属など）	22	120	22	21	7	6			
シバ属	15								
キビ族型			22		7			8	
ウシクサ族型	89	83	65	85	29	19	14		51
ウシクサ族型（大型）	7								
タケ亜科									
ネザサ節型	52	98						15	
クマザサ属型	15	23	109	107	93	38	48	129	44
メダケ節型	7								
マダケ節型	37								
未分類等	134	128	51	21	36	45	21	38	15
その他のイネ科									
表皮毛起源	119	120	29	32	57	57	7	61	51
棒状珪酸体	468	293	159	262	287	197	104	327	102
茎部起源	7	8							
未分類等	602	495	355	353	251	255	159	380	248
樹木起源									
ブナ科－シイ属	7								
クスノキ科（バリバリノキ?）	22								
マンサク科－イスノキ属	15								
ブナ科？	7	15	22	11					15
植物珪酸体総数	1858	1561	840	908	767	618	353	958	524

表８　沖松遺跡における主な分類群の推定生産量

分　類　群	No.1	3	4	5	8	11	14	16	18
イネ科									
イネ	6.34	5.07							
キビ族（ヒエ属など）	0.62								
ヨシ属		0.47	0.46	1.01					
ウシクサ族（ススキ属など）	0.28	1.49	0.27	0.26	0.09	0.08			
タケ亜科									
ネザサ節型	0.25	0.47						0.07	
クマザサ属型	0.11	0.17	0.81	0.80	0.70	0.29	0.36	0.97	0.33

※表１の価に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数をかけて算出。
換算係数は、イネが2.94、キビ族（ヒエ属）が8.40、ヨシ属が6.31、ウシクサ族（ススキ属）が1.24ネザサ節が0.48、クマザサ属が0.75である（単位は10万分の1g）。

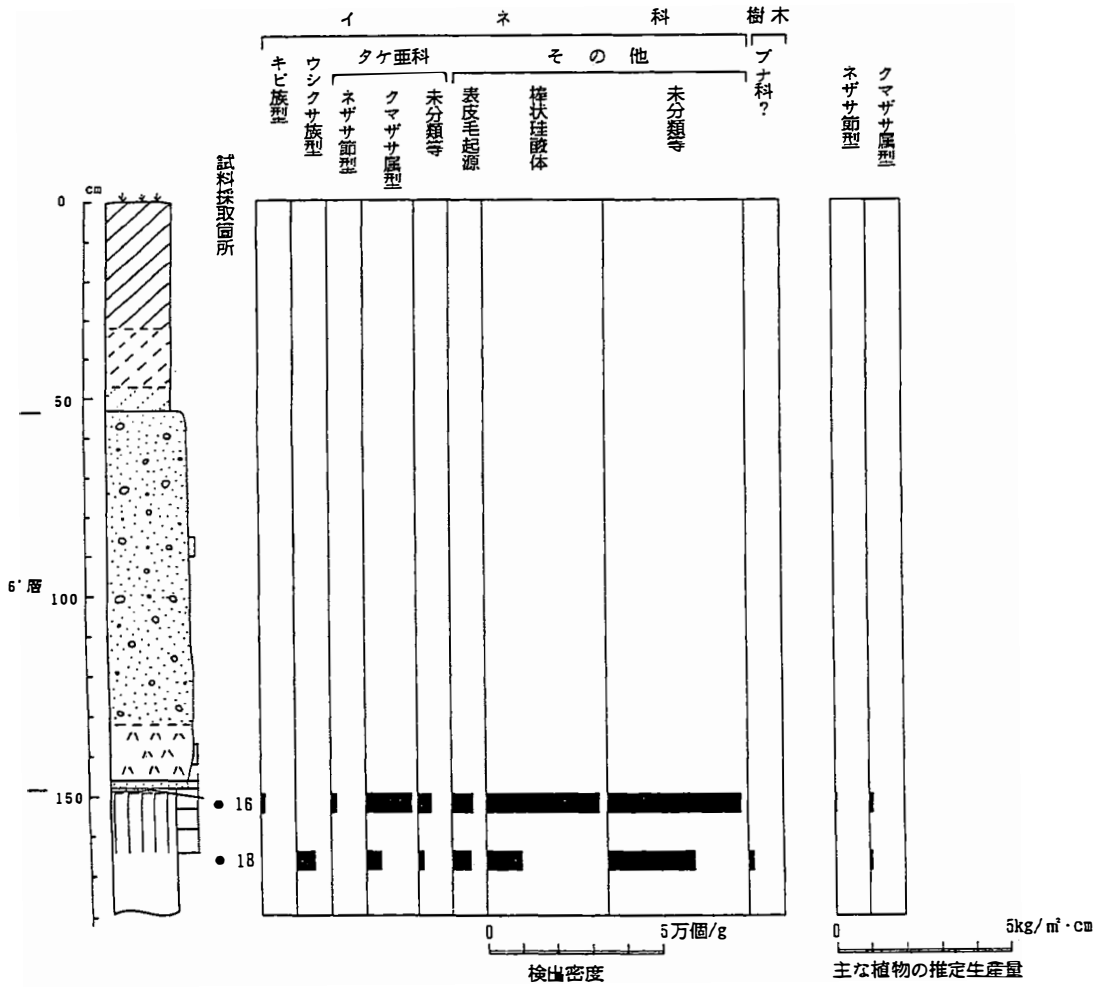


図1　沖松遺跡第2トレンチにおける植物珪酸体分析結果

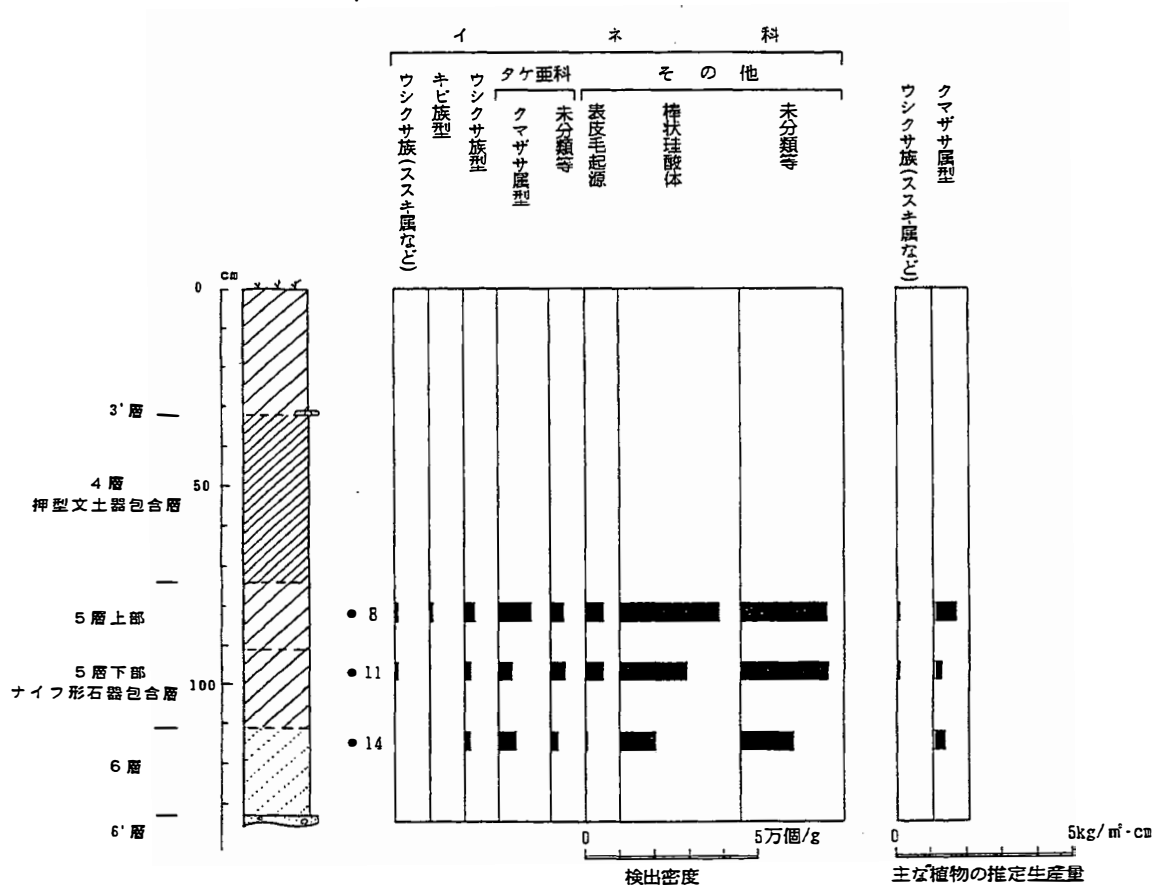


図2　沖松遺跡第5トレンチにおける植物珪酸体分析結果

第200図　自然科学的分析関係

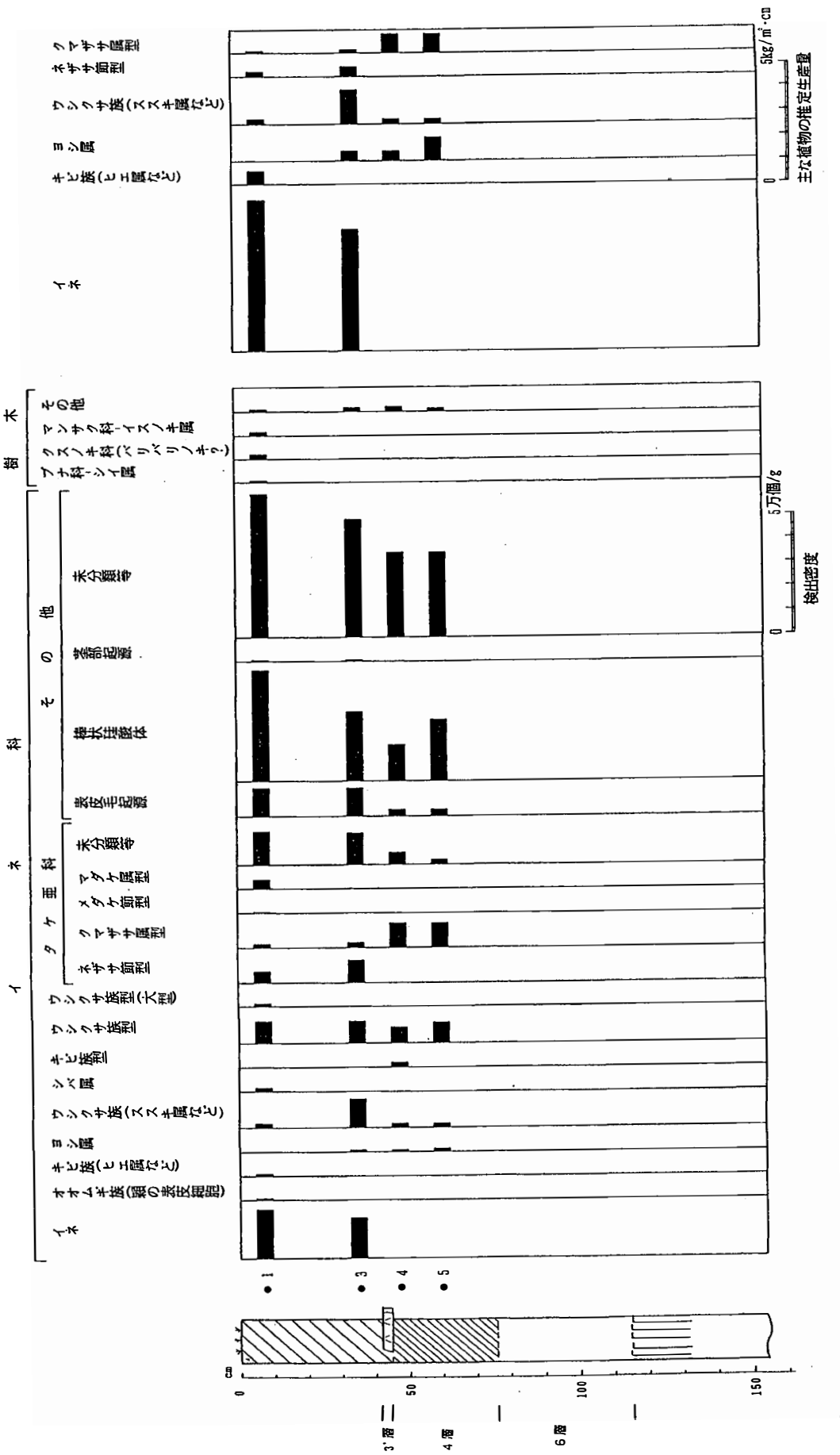


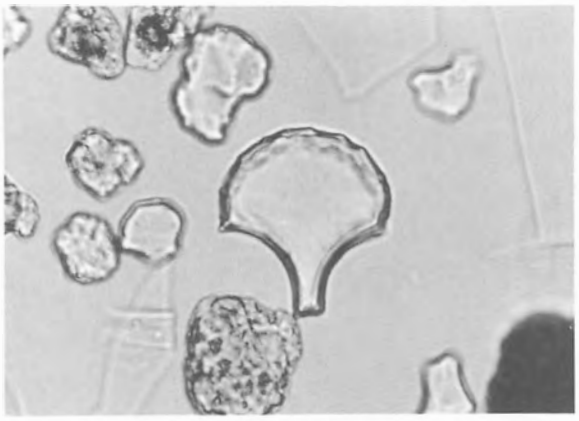
図3　沖松遺跡第4トレンチにおける植物珪酸体分析結果

第201図　自然科学的分析関係

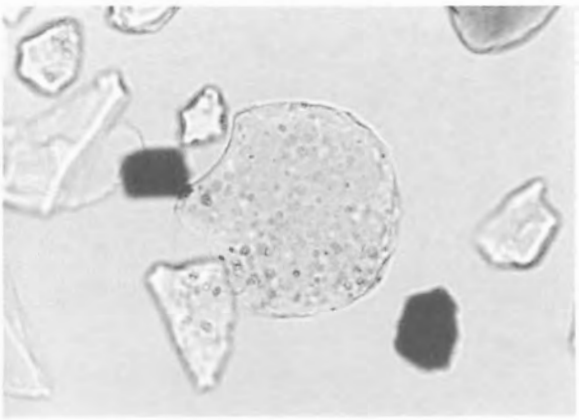
植物珪酸体の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

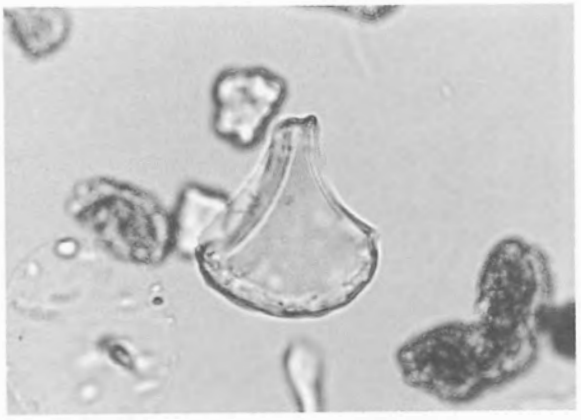
No.	分　類　群	地点
1	イネ	1
2	イネ	1
3	イネ	1
4	ヨシ属	4
5	ウシクサ族（ススキ属など）	1
6	ウシクサ族（ススキ属など）	1
7	ネザサ節型	1
8	クマザサ属型	1
9	マダケ節型	1
10	表皮毛起源	1
11	棒状珪酸体	1
12	クスノキ科(バリバリノキ?)	1



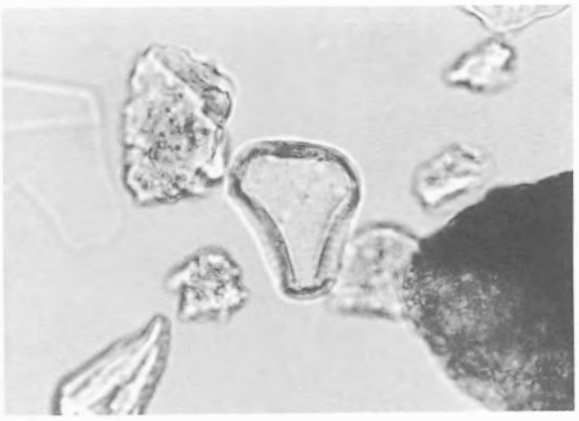
1



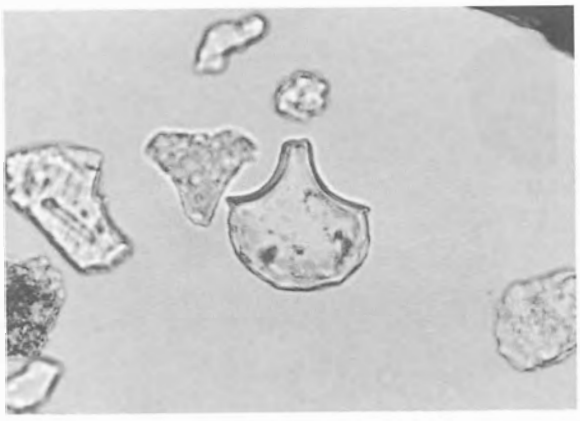
4



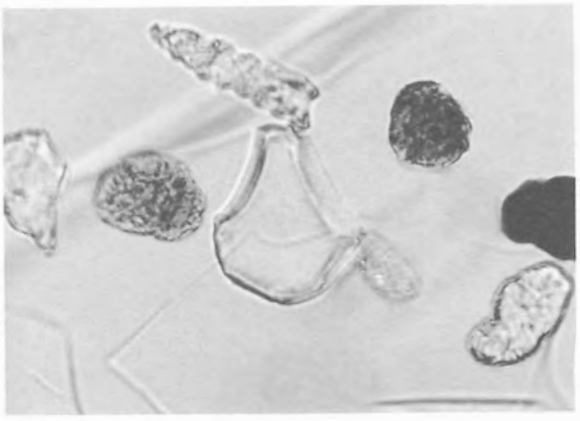
2



5



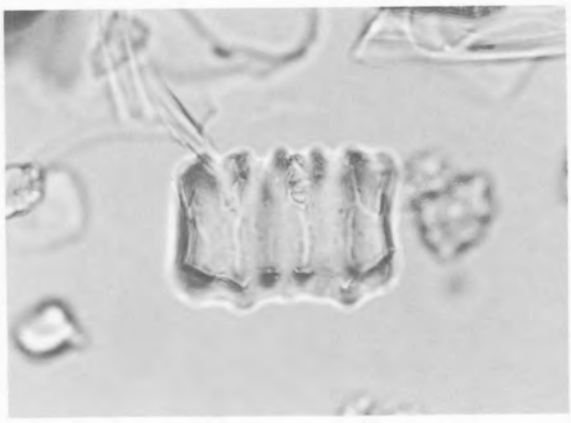
3



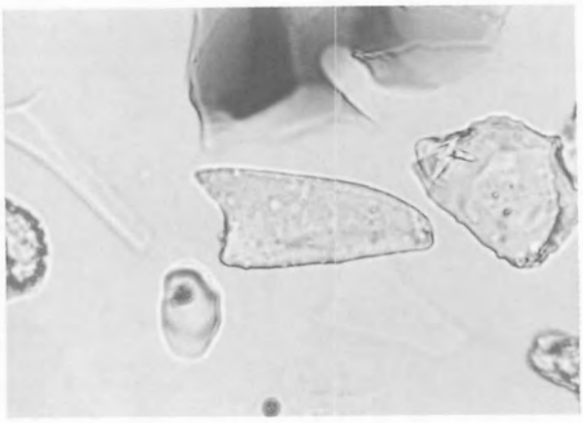
6

0　50　100μm

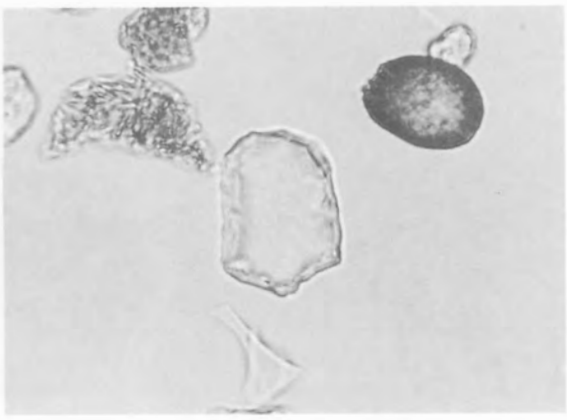
植物珪酸体の顕微鏡写真（１）



7

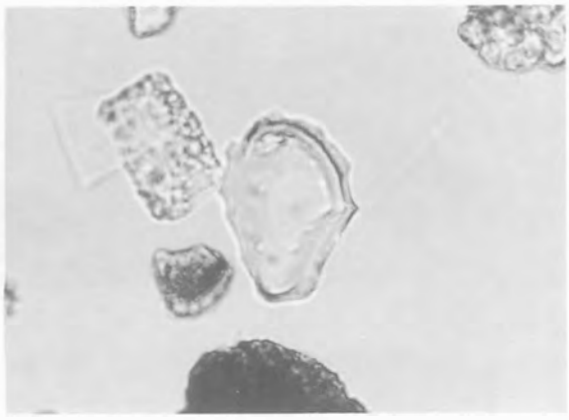


10



8

11



9

12

0 50 100 μm

植物珪酸体の顕微鏡写真（２）

第Ⅴ章　総　　括

第１節　縄文時代早期の調査について

１．集石遺構について

６基を検出したが、そのうちの５基が縄文時代早期に属するものと考えられる。いづれも調査区北側Ｆ20グリッドを中心とした箇所で検出した。明確な掘り込みを持つもの（２・３・５号）と、持たないもの（１・４号）とに分類される。火を受けた痕跡は明確ではないが微細な炭化物が見られる。１～３・５号と近接しており、さらに西側に集石が存在する可能性があるが、西側は段落ちとなりすでに第Ⅳ層も削平されている状態であった。

２．遺物について

縄文時代早期に属する土器はわずか９点であった。原位置を押さえられるものが少ないが、その内の４点が集石を検出したＢ調査区出土である。その他４点は調査区南西部のＧ７グリッド周辺である。また早期に属すると思われる玦状耳飾・不明石製品もＢ区・Ｇ区からの出土である。

３．まとめ

上記のような状況に加え、数十本のトレンチを設定して掘削したが、第Ⅳ層から縄文早期土器の出土は認められなかったことを考えあわせると、つまり縄文時代早期の中心は今回の調査区にはなかったと考えられ、調査区よりやや北側及び西側に存在するものと考えられる。

第２節　縄文時代後期から晩期の遺構と遺物

１．縄文時代後期前半の土器

この時期に関する資料もそれほど多いものではないが、阿高系の土器・鯨脊椎骨痕跡を有する土器の底部などの資料や、市来系の土器などが存在する。またわずかに鐘崎式・太郎迫式土器などの資料も見受けられる。全体的には南九州の影響が強かったことが伺える。

２．縄文時代後期後半から晩期の土器について

わずかに三万田式土器も見られるが、沖松遺跡においてその主体をなすものは次の鳥井原式からである。残念ながら、層位的な区分が出来なかったので、土器の形式変化で見て行くことにする。

この時期に関する土器編年は小林久雄氏・乙益重隆氏・賀川光夫氏や富田紘一氏・島津義昭氏など多くの研究者によりなされている。それによると中九州の晩期前半期までの土器編年は鳥井原式→御領式→天城式→古閑式→（黒川式相当・松添式相当）となる。これらは多くの研究者が認めることであるが、型式の細分や晩期の開始時期をどこに求めるか等については、諸説がある。

以下各土器型式について特に富田氏・島津氏（①～㉑）の研究を参考にしてその特徴を筆者なりに簡単にまとめ、沖松遺跡の当該期の資料との対比を試みるものである。

鳥井原式土器

①口縁部に幅の広い凹線の施文をするものを特徴とする。なかには凹線に沿って細線羽状文を付加するものもある。

②浅鉢形土器は体部から口縁部が屈折して立ち上がるものや、体部の上に内湾する頸部があり、その頸部から口縁部が屈折して立ち上がるものなどがある。

③一方深鉢形土器は胴部の上に内湾する頸部があり、口縁部は屈折して立ち上がるものや胴部に内湾する頸部が付き、その外縁が外反してそのまま口縁部となるものがあり、いづれも胴部が小さく膨らむ。その他に口縁部から胴部がややふくらみをもちながらそのまま底部に移行するものなどが認められる。

御領式土器

器形やその組み合わせは鳥井原式と同様である。ただ施文が幅広の沈線に変化し、２本の線間が段状になる（④）。⑤深鉢形土器の胴部の膨らみがほと

んどなくなり、小さく丸みを残す。

天城式土器

器形は御領式を継承したもので、深鉢、浅鉢、鉢からなる。

深鉢形土器は口縁帯を持たないもの、口縁帯を持つが無文のもの及び２～３本の沈線をもつものがある（⑥）。また胴部の器面調整が粗いものが多い。胴部と頸部との境にはまだ界線が残るものがある（⑦）。胴部の最上段に最大形をもつ（⑧）。

浅鉢形土器は口縁部が幅狭になり１～２本の沈線を施文する。またバリエーションが生じる一方で体部から口縁部が屈折して立ち上がるものが姿を消す（⑨）。

古閑式

黒川式直前の土器である。深鉢形土器は口縁の沈線が４～７本と数が増し、その沈線は部分により数が異なったり、その幅に広狭があったり、より粗雑化してくる（⑩）。また胴部と頸部との境の段が消滅し、頸部の湾曲は頸部上部で強調されるものが多い（⑪）。頸部に蝶ネクタイ状の粘土帯の貼付けがある（⑫）。

浅鉢形土器は内湾する口縁は少なくなり、直口か外反するするものが多くなる（⑬）。また口縁帯の著しく短くなるものが出現する（⑭）。丸底の体部から朝顔状に開き、口縁が波状をなす滋賀里式土器との関連の深い浅鉢が伴う（⑮）。また器高が深くなるなど機能の分化が認められる（⑯）。

甕形土器が出現する（⑰）。組織痕文土器が伴出する。

黒川式土器

中部九州ではこの期に該当する型式名が無いことより、便宜的に南部九州の型式名である黒川式を使用する。

甕形土器は肩部が屈曲するもので、口縁部にリボン状あるいは鱗状の突起を持つ。また肩部段部に蝶ネクタイ状の符文を配するものも見られる（⑱）。器面に条痕が認められるものが多い（⑲）。底部は平底で底面縁部が張り出す。いわゆる円盤貼付状の厚い平底である（⑳）。

一方浅鉢形土器は精製品で多種多様化が挙げられる（㉑）。また組織痕文土器が伴出する。

ただしこれは南部九州の特色であり、果たして中部でも同様の特色を持つものか不明である。一方古森政次氏は「ワクド石遺跡」の報告書の中で、従来の古閑式土器の新相を黒川式相当とされている。

以上であるが、深鉢形土器は口縁帯を巡る凹線が沈線へ変化し、その数も２、３条のものから３～６条に増加し、粗雑化してくる。また胴部の張りが弱くなり、頸部の屈曲も弱くなり、直線化する。また底部は小さな上底から円盤貼付状の厚い平底になる。また甕と呼ぶべき器種が出現してくる。

一方浅鉢形土器では口縁帯が小さくなり、深鉢同様凹線が１条の沈線へと変化する。また椀形の胴部に小さな口縁部を持つ類の出現など器種の多様化の傾向が認められる。

それでは沖松遺跡についての土器の変化を見て行くことにしよう。

沖松Ⅰ期

口縁帯に凹線を施すものである。

浅鉢形土器はⅠ類とした、体部から口縁部が屈折して立ち上がるもの（ａ）と体部のうえに湾曲する頸部があり、更にその頸部から口縁部が立ち上がるもの（ｂ）がある。

深鉢形土器はⅠＡ類とした頸部の湾曲がしっかりしていて、その屈曲点が頸部の下位近くにあり、胴部と頸部の境は膨らみを持つもの、及びⅣＢ類とした頸部がそのまま口縁部となる無文のもののなかで膨らみをもつもの（ｂ）や丸みを帯びるもの（ｃ）が該当する。更に口縁部を欠損するⅦ類としたもののｂ・ｃもこれに含まる。しかしいづれもｃ類の丸みを帯びるものについては確証がない。

その他高坏形土器もこの時期に該当すると思われる。

沖松Ⅱ期

浅鉢形土器Ⅱ類、深鉢形土器ⅡＡ類があげられる。いづれも口縁帯にやや太めの沈線を施すものである。

浅鉢形土器は上記と同じくａ・ｂの２種に分類される。

深鉢形土器はやはり頸部の湾曲はしっかりしていて、その屈曲点は頸部中央付近にある。また胴部と頸部の境は僅に膨らみをもつものと、段もしくは沈

線を持つものがある。口縁帯には１～３条の太い沈線を施す。

その他ⅣＢ類とした頸部がそのまま口縁部となるもので胴部と頸部の境に段や沈線を有するもの（ａ）や口縁部を欠損する胴部片のⅦ類ａもこの時期に該当すると思われる。

上記２期の土器はその分布の中心が調査区南側のＧ区にあり、底部については不明だがＧ区出土のものは上底のものが主流となることより、上底になると考えられる。

沖松Ⅲ期

浅鉢形土器Ⅲ・Ⅳ類、深鉢形土器ⅢＡ類などが該当する。

浅鉢形土器Ⅲ類は上記Ⅱ類のｂと同じ器形のもので口縁帯の幅が狭くなり沈線をほどこすもの（ａ類）・口縁部が形骸化し口縁内面が段状になったもの（ｂ類）・口縁部がｂ類と同じかもしくはより形骸化したもので無文のもの（ｃ類）・内・外面の沈線により口縁部と頸部を区分しているもの（ｄ・ｅ類）がある。この浅鉢型土器Ⅲ類は頸部の変化が大きく、頸部が伸びるものはａ類の時点で既に認められる。また頸部が著しく短くなり頸部と体部の区分が不明瞭になるものがｃ類で認められる。

一方Ⅳ類としたものは頸部が外に伸びるもので、頸部がそのまま口縁部となるものである。

深鉢形土器Ⅲ類は頸部の湾曲が弱く、その屈曲点は口縁直下にあるものが多い。また胴部と頸部の境は多くは稜線となる。また胴部と頸部の境の稜線が弱くなり、胴部・頸部の境がやや不明瞭になるものも存在する。底部は僅な上底・平底となる。口縁帯の沈線も３条～７条のものまで、規則的なものから不規則なものまで様々である。

その他口縁帯の幅が著しく狭くなり頸部が形骸化したもの（ⅢＡｇ）や頸部から口縁部が外に大きく開くもの（ⅢＡｈ）などがある。またⅦ類とした口縁部を欠損する胴部片のもので胴部と頸部の境に稜線をもつｄ類が該当する。

このⅢ期には頸部がそのまま口縁部になるⅣＢ類の明確なものが認められない。

この期は細分が可能であり、まず浅鉢形Ⅲ類土器は形態的には口縁帯の幅が狭くなり沈線をほどこすもの（ａ類）から口縁部が形骸化し口縁内面が段状になったもの（ｂ類）に、次いでｃ類の口縁部がより形骸化した無文のものへ、更に内・外面の沈線により口縁部と頸部を区分しているもの（ｄ・ｅ）へ、器高の浅いものから器高が深く体部・頸部・口縁部が不明瞭なものへと変化すると思われるが、この類は器種にバラエティに富むため一概には言い切れない。

埋設土器の深鉢形土器と浅鉢形土器のセット関係でとらえられるものにおいても深鉢形土器の形態変化と浅鉢形土器の形態変化が細かい部分では連動しないことが伺われた。

深鉢形土器についてその形態変化は、まず口縁帯の沈線の数が３～６条に増加し施文が粗雑化してくる。それに口縁部と頸部の区分が明瞭でなくなる。頸部も湾曲が弱くなりその屈曲点は口縁直下にあるものが多くなり、直線化の傾向が認められる。また胴部と頸部の境は稜線となっており、更にその稜線も弱くなり、胴部・頸部の境がやや不明瞭になるものも存在する。底部は僅な上底から平底そして円盤状の底部に近いものとなる。

しかし縄文時代のまとめの頁で述べたように、１つの項目だけで土器の前後関係を決定できるような明確な基準は認められない。事実３条の沈線のものでも、かなり施文の粗雑なものが存在したり、逆に５条の沈線でもしっかりとした施文及び器面調整のものなども存在する。その変化は漸次的変化のためはっきりと線引きするのが難しい。恐らく第２表に挙げた項目すべてを比較検討して決めるべきものであろう。しかし頸部と胴部の境の稜線が弱いものや底部が円盤状に近いものは新しい様相を示すようであり、それらは口縁帯の施文も粗雑なものが多い。

沖松Ⅳ期

この期に該当するものは少量である。

浅鉢形土器Ⅴ類とした丸みを帯び器高の深い体部に短い口縁部が付くものである。

一方深鉢形土器では明確なものが認められない。しいて挙げれば、小破片のため詳細が不明なⅧＢ類として一括した中の器面に条痕が認められるもので

あろう。底部ではⅢ類とした円盤貼付状の厚い平底のものが挙げられる。

沖松Ⅴ期

Ⅸ類とした刻目突帯文土器が該当する。また上記の底部Ⅲ類のものは、この期にも含まれる。

その他上記にいずれにも該当しなかったものとして浅鉢形土器の椀等を一括したⅥ類と深鉢形土器ⅣＡ類の外来系としたもの、Ⅴ類の摺鉢形のもの、Ⅵ類の無文で外反する口縁をもつもの、ⅢＡ類の口縁帯をもつが無文のものがある。

いづれも少量で一括したもので、その所属時期は不明だがその分布よりその時期をある程度推測できる。浅鉢形土器Ⅵ類は104は沖松Ⅰ・Ⅱ期に、99～101・103はⅢ・Ⅳ期に、該当するのではと推察される。一方深鉢形土器はⅣＡ類は沖松Ⅲ期に、Ⅴ類の223は沖松Ⅰ・Ⅱ期に、227はⅢ・Ⅳ期に、Ⅵ類は沖松Ⅲ期に、ⅦＡ類は256はⅠ・Ⅱ期に、他はⅢ期に該当すると思われる。

それでは沖松遺跡の各期と土器形式を比較してみる。

まず沖松Ⅰ期は鳥井原式に該当する。次ぎのⅡ期以降については、当初Ⅱ期を御領式に、Ⅲ期を天城式及び古閑式に相当すると考えていた。しかし以下の理由や筆者の土器形式の認識不足により時期比定が出来なくなった。

まずⅡ期を御領式に対応させた場合、そこには若干の違いが見られる。その一つとして深鉢形土器のⅢＡ類の口縁帯の沈線の太さが一般に御領式と呼称されてるものに比べ細い点である。更にⅣ・Ⅶｂ類の頸部と胴部の境が段または沈線となる点である。

また次の沖松Ⅲ期の土器を天城式及び古閑式の特徴と対比した場合まず⑥・⑩の口縁帯の沈線の本数であるが２～３本のものは埋設土器19例中１例であり図化した口縁部の小破片も含めても２割程度である。しかもかなり粗雑なものが認められる。その本数は４～５本のものがほとんどである。

次の⑦・⑪の頸部と胴部の界線についてであるが、完形品が少ないこともあるが、埋設土器で界線の例は存在せず稜線となる。またⅣ・Ⅶ類の胴部片で界線が残るものはすべてＧ区よりの出土のもので分布域が大きく異なるために界線はないものと推察でき、すべて古閑式の⑪に該当する。⑧の最大径についても13例中９例が胴部上段に最大径をもちその形態は様々である。⑫の粘土帯貼付けについては図化していないが１点だけ蝶ネクタイ状の粘土帯の貼付け部分のみが存在するが、ほとんど認められない。⑨については浅鉢形Ⅲａ類が該当するものであろう。⑬⑩の内湾する口縁は少なくなり、直口か外反するするものが多くなるというのは浅鉢形Ⅲｂ類の一部が該当しよう。また⑭の著しく短い口縁部の出現は浅鉢形Ⅲｃ類の一部が、⑮については浅鉢形Ⅳａ類が、⑯の器高が深くなるものがⅣｂ・ｃなどが該当しよう。以上浅鉢形土器についてはある程度天城式の項目にも該当するものがあるが、深鉢形土器については古閑式の特徴に該当するものが多い。逆に天城式の特徴として挙げられた⑥・⑦の２～３条の沈線や界線は、沖松Ⅱ期の深鉢形ⅡＡ類やⅣＢ類のものが該当する。

ただしこれは地域性とも考えられる。人吉市中堂遺跡において天城式とされている深鉢形土器にも界線のあるものは存在しないようであるし、頸部の湾曲もそれほど強いものはないようではある。

以上の理由で御領式・天城式・古閑式をそれぞれ沖松Ⅱ・Ⅲ（古相・新相）期に比定することが躊躇される。

次のⅣ期が黒川式に該当すると思われる。果たして南九州の特徴を当てはめていいのか疑問が残るが、⑱については前述したとおり認められない。浅鉢形土器Ⅴｂ類に突起が認められるだけである。⑲の器面に条痕が認められるものとしてⅧＢ類の口縁部片の中にわずかに認められるが小破片のため詳細が不明である。⑳の円盤貼付状の厚い平底は底部Ⅲ類において認められる。

沖松遺跡において鳥井原式から刻目突帯文土器の時期までほぼまんべんなく認められるが、主流となるのは鳥井原式～古閑式までで、その中でも沖松Ⅲ期にその中心があることは確かであろう。

埋設土器についても別表に示したとおり、その中心となるものは沖松Ⅲ期である。しかしその中でも古相のものと新相のものが存在し、古相のものの外

側に新相の埋設土器が位置するようである。

また埋設土器の掘り込みのレベルについては、削平の関係で確実なことは言えないが、その検出面レベルには同時期の土器片が多く散在していたという印象がある。そのなかで９・10・13号埋設土器は同時期の土器片がほとんど出土しなくなるレベル面で検出している。可能性としては竪穴式住居内の床面より掘り込んだもの、他の埋設土器より先行する時期のもの、もしくは用途の違いなどが考えられるが、いづれも確証に乏しい。

３．縄文時代の集落について

埋設土器の存在や焼成粘土塊の存在さらには石剣・石刀の存在から縄文時代後期後半から晩期前半に人々がこの地で生活をしていたことは確実である。現時点で可能性のあるものは１号住居状遺構や４号住居状遺構位である。それはそれぞれ沖松Ⅲ期・Ⅱ期に比定される。しかし確実な住居跡が検出されていないことは、単に住居跡を探しきれなかっただけなのか、生活の本拠と墓地？や土器作りの場所とは地点を異にするのか全く不明と言わざるをえない。人吉市中堂遺跡の場合は中央に広場があり、そこに埋設土器が存在し、その広場を囲むように住居跡があった。一方現在熊本県教育委員会が調査を継続中の熊本市石の本遺跡では、縄文晩期前半期の住居跡や埋設土器が多数検出されており、その状況は住居に近接した箇所に埋設土器が存在するという。これは中堂遺跡の様相とはまた違ったものであり、今後の資料の増加を待ちたい。

第３節　弥生時代の調査について

弥生時代の資料は極めて少ない。縄文時代晩期後半より遺物が減少し、その後弥生時代後期になるまで空白の期間がある。短絡的に考えるなら、稲作の導入により、球磨川等の流域の低湿地帯に移動したのではなかろうか。その後古墳時代になり稲作技術の発達に伴い遺跡の東側の低地でも生産できるようになったのか、或いは畑作等他の生産基盤を重視するようになり、この地での営みが再開されたのではなかろうか。

第４節　古墳時代の調査について

１．住居跡の年代について

沖松遺跡では27基の竪穴式住居跡が存在する。もちろんこれらがすべて同時期に存在したわけではない。残念ながら住居跡の切り合い関係が少なく、またかなり削平されている住居跡が多く、多くの遺物が流れ込みの可能性があるために正確さを欠く。またかなり地域性の強い土器であり、この時期の住居跡の検出例が人吉・球磨地方では少ないこともあって、宮崎・鹿児島県の遺跡の編年等を参考に住居の存続期間を考えた。

その存続期間は４世紀末から７世紀初頭までの間約200年間であると推察される。

４世紀末及び５世紀代の集落は調査区の北側の竪穴式住居跡と南西側の竪穴式住居跡である。その後６世紀代のものは、南東側の竪穴式住居跡である。しかし調査区の北側は現在道路で切断されており更に北側の丘陵には住居跡の存在の可能性があるし、南西側の住居跡群でも26号の北に数件の住居跡の存在が考えられる。一方南東部の住居群も13号住居跡北側に数件の住居の存在を考慮しなければならない。ただしそれを考慮にいれても大幅な住居跡の増加はなさそうである。６世紀頃を境として集落の軒数がわずかではあるが増加する傾向が認められる。

２．住居構造について

住居跡は２本柱のものと、４本柱構造のものがあるが、それは時期差としてはとらえられなかった。

一方住居内の炉跡は、炉自体が存在しないもの、掘り込みを持たないもの、掘り込みを持つもの、土器を埋め込み、炉として使用しているものがあった。その変化は時期差としてとらえられる傾向がある。大まかには、５世紀代には掘り込みを持たないものが多く、次の６世紀代に掘り込みを持つ炉が多くなり、埋甕炉は６世紀後半以降に多く認められる。また炉を持たない住居跡は短期の使用であったのかもしれない。あるいは工房跡や集会所等他の機能を考

えたほうがいいのかもしれない。

３．まとめ

この集落の規模を人吉・球磨地方において平均的な集落と考えるか、もしくは小規模な集落と考えるかどうかは、人吉・球磨地方のこの時期の集落構造がもう少し明らかになるまで保留したい。出土遺物としては特に顕著なものは認めらず、この地域の拠点集落ではないことは確かであり、拠点集落は球磨川の南側の沖積地にあると思われる。

一方周辺の古墳との関係を考えてみたい。５世紀代のこの地域の墓制の実態はわかっていないが、地下式板石積石室墓から高塚古墳への過渡期と思われ、小規模な円墳では地下式板石積石室墓の影響が認められるような石室で、竪穴系横口式石室に似たような構造であると考えられるが、沖松遺跡の周辺にはそういった高塚古墳が現在のところ見当たらない。また地下式板石積石室墓・地下式横穴墓も現在のところ認められない。現在認められるのは横穴墓のみである。そのなかで23号住居跡の柱穴跡より出土した須恵器高坏は須恵村浜ノ上横穴墓群出土のものとほぼ同時期のものである。また沖松遺跡近くの石坂横穴墓では馬具・直刀・鉄鏃などが出土しており、その関連を伺わせる。しかしそれ以前については、古墳との関連を伺わせる資料がない。それは以下の可能性がある。①高塚古墳または地下式板石積石室墓・地下式横穴墓がまだ発見されていない。②この沖松遺跡の集落が人吉・球磨地域においても小規模な集落であり、その集落での首長の権力自体が強いものではないのか、もしくは首長と呼べるほどの階層も存在しなかった。③市房山裾野に位置する水上村の千人塚古墳群は74基もの小円墳が築造されており、鶴嶋氏が推察するように、周辺に生産基盤がないために原始信仰に関係するものであり、千人塚古墳群のような所に埋葬された（鶴嶋1995）。

しかし残念ながら明確な答えをもつものではなく、確証もないが①の可能性が高いように思える。それはごく小規模なものではないだろうか。

第５節　奈良時代以降の調査について

１．奈良時代

奈良時代に属するものとしては10号土坑などがあるが、その性格は不明である。

２．平安時代

平安時代に属するものは、特に９世紀代のものが顕著である。掘建柱建物跡が３棟検出した。また柵と考えられる柱穴も存在する。これらは出土遺物が１点の土師器だけだが、その方向が南北であることや、柵がそれにほぼ垂直に交わることより同時期の遺構と判断した。また柵の南側にしっかりとした２・３号掘建柱建物跡が存在し、柵の北側にやや柱穴が小さい簡易的な建物跡や土師器を焼成していた可能性のある土坑が存在する。そしてその東側に墓地が形成されている。また出土する土師器には煮炊き用の甕が少ないことなどより少くとも一般農民の集落ではないものと推察される。また３号掘建柱建物跡の南にも数多くのしっかりした柱穴跡が存在したが、残念ながら建物跡と判断できるような配置ではなかった。しかし削平を受けていることなどを考えあわせるとさらに掘建柱建物跡は増加しそうである。

その他特記すべきことは須恵器生産と関連することであるが、須恵器製品の不良品がかなり多く見られることである。これらは製品として出荷されるものからは除外されるだろう。つまりそういう不良品は生産地で使用されるものであろうということが考えられる。つまり周辺で須恵器生産を行っていたことが予想されるのである。事実沖松遺跡周辺には、その詳細は不明だが須恵器窯跡が推定されている須恵村上阿蘇遺跡が存在する。

歴史的環境の項でも述べたように須恵村を含めた免田町・上村・深田村の東端地域は「球玖郷」に比定されると言う説が有力である。

古代瓦が出土した免田町久鹿の前田遺跡や蔵骨器が発見されている免田町廻り迫遺跡・岡原村宇土谷遺跡・上村伊勢尾遺跡・翊登遺跡・東小原遺跡・西

小原遺跡や銅板墓誌が出土した黒田遺跡がある。

また生産遺跡としては須恵器の窯跡が発見されている上村上ノ原遺跡、瓦窯跡では深田村高山遺跡がある。この他窯跡が推定される遺跡に前述の須恵村上阿蘇遺跡・深田村上村狩所遺跡がある。

また須恵村内でも多くの奈良・平安時代の遺跡が見つかっている。やはり掘建柱建物跡１棟が検出され、多くの土師器・須恵器が出土した別府遺跡、越州窯系青磁・緑釉陶器の破片が副葬された土壙墓が発見された堂園遺跡や須恵器・土師器が発見されている山口遺跡・屯所遺跡・浜ノ上遺跡などがある。

一方須恵という地名は須恵器と関係している。球磨郡の中世文書には須恵氏がみえる。この須恵氏は球磨郡の須恵器生産を統括して、経済力をつけていった豪族と考えられている。熊本県教育委員会が平成５年より発掘調査を継続している深田村灰塚遺跡では、鎌倉初期の遺構として、掘建柱建物跡50基以上・竪穴式住居跡・井戸跡・柵跡・溝・土塁や副葬品として白磁を出土した土壙墓なども検出されている。12～13世紀頃の須恵氏の居館跡として注目されている（木崎1996）。

沖松遺跡も９世紀頃の須恵氏一族と何らかの関係がある建物跡と考えられる。

３．その他の遺構について

中世の遺構は、竪穴式住居跡が２基ある。球磨地方でも類例が人吉市天道ケ尾遺跡（鎌倉時代）、同原城跡（室町時代）でも検出されている。

その他時期は不明であるが注目されるのはスラグの多さである。また鞴の羽口も出土しており、製鉄関連の遺構の存在が伺える。

第６節　結び

沖松遺跡の下層から出土する粘土は城南町歴史民俗資料館の清田氏によれば土器づくりに適した粘土であるそうだ。また調査区Ｆ区において江戸末期から明治頃と考えられる粘土採掘坑も検出されている。これは土器を作るためのものではないが、良質な粘土が採れる証しであろう。焼成粘土塊の存在より縄文時代後期頃には既に沖松遺跡では土器作りを行っていたことが推定され、古墳時代は定かでないが、平安時代には土師器、そして近接した箇所では須恵器も生産していた可能性がある。ここでは狩猟・漁猟・農業といった生産基盤ばかりでなく、良質の粘土が採れるという利点を生かした土器作りも、その生産基盤においていたのではなかろうか。今報告までには間に合わなかったが、今後土器の胎土分析等の方法によってアプローチしていくことも必要であろう。

参考文献

木﨑康弘　1995　「原始」『須恵村誌』熊本県須恵村

鶴嶋俊彦　1995　「古代」『須恵村誌』熊本県須恵村

木﨑康弘　1987　『狸谷遺跡』熊本県教育委員会

和田好史　1993　『中堂遺跡』熊本県人吉市教育委員会

山田康弘　1995　「九州の埋設土器」『熊本大学文学部論叢（史学篇)』第49号

古森政次・島津義昭　1994　『ワクド石遺跡』熊本県教育委員会

本田満輝　1981　「市来式土器」『縄文文化の研究』４雄山閣

山崎純男・島津義昭　1981　「晩期の土器　九州」『縄文文化の研究』４雄山閣

島津義昭　1989　「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』　小学館

河北毅他　1986　『伊坂上原遺跡・石仏遺跡』熊本県教育委員会

賀川光夫・島津義昭・清田純一他　1980　『古保山・古閑・天城』熊本県教育委員会

富田紘一　1986　『戸坂遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会

丸山伸二・濱田彰久　1993　『大原天子遺跡』熊本県教育委員会

北郷泰道　1987　「集落論ノートー南九州の縄文晩期集落からー」『考古学研究』34巻１号　考古学研究会

富田紘一　1993　「熊本市上南部遺跡出土の焼成粘土塊について」『縄文時代』第４号　縄文時代文化研究会

園村辰美　1993　『夏女遺跡』熊本県教育委員会

椎葉文雄他　1985　『アンモン山遺跡』人吉市教育委員会

鶴嶋俊彦　1992　『荒毛遺跡』人吉市教育委員会

坂田和弘・古森政次　1994　『深水谷川遺跡』熊本県教育委員会

吉本正典・戸高真知子　1994　『野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡』宮崎県教育委員会

永友良典他　1988　『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第４集』宮崎県教育委員会

多々良友博　1981　「成川式土器の検討」『鹿児島考古』15　鹿児島県考古学会

中村直子　1987　「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号　鹿児島大学法文学部考古学研究室

吉本正典・松林豊樹　1995　「副葬品・供献品の編年ー土師編年を中心としてー」平成６年度宮崎考古学会県南地区例会資料集

石川悦雄　1990　「弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器編年にむけてー予察１　高坏ー」『宮崎県総合博物館研究紀要』

中村浩　1981　『和泉陶邑の研究』　柏書房

野田拓治　1982　「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古希記念　古文化論集』

網田龍生　1994　「奈良時代　肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会

網田龍生　1994　「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎的研究』Ｘ

美濃口雅朗　1994　「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎的研究』Ｘ

山本信夫　1995　「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

森田勉　1983　「塩焼壷考」『太宰府古文化論叢』吉川弘文館

森田勉　1983　「滑石製容器ー特に石鍋を中心としてー」『佛教芸術』148号　毎日新聞社

森田勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４集　九州歴史資料館

松本健郎他　1980　『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県教育委員会

木﨑康弘　1996　「第５章　奈良・平安時代と人々の暮らし」『相良村誌』　熊本県相良村

出土遺物観察表

挿図	番号	器種	残存部位	口径(cm)	器高(cm)	最大胴部(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	調整	備考
16	1	深鉢	体部下半	−	−	−	−	(内)キャメル色 (外)黄色	砂粒・角閃石・雲母	普通	(内)(外)工具ナデ	煤付着
	2	深鉢	体部下半	−	−	−	7.4	(内)小麦色 (外)黄色	砂粒・角閃石	普通	(内)(外)工具ナデ	煤付着
	3	深鉢	胴部	−	−	33.3	−	枯葉色	砂粒・角閃石	普通	(内)(外)工具ナデ	煤付着
17	4	深鉢	体中~底部	−	−	(46.1)	7.45	(内)黄褐色 (外)小麦色・焦茶色	砂粒・角閃石	普通	(内)ナデ・磨き (外)磨き	煤付着
	5	深鉢	体中~底部	−	−	32.2	6.0	小麦色	砂粒・赤褐色粒・角閃石	普通	(内)(外)ナデ	煤付着
18	6	深鉢	口縁~体下部	(25.7)	(27.6)	−	−	(内)焦茶色 (外)黄褐色~焦茶	砂粒・角閃石	普通	(内)(外)工具ナデ	煤付着
	7	深鉢	口縁部・ 体部~底部	−	(36.1)	(7.2)	−	(内)黄褐色 (外)小麦色-焦茶色	砂粒・角閃石・雲母	普通	(内)(外)工具ナデ	煤付着 底部穿孔
19	8	深鉢	口縁~体中部・ 体下~底部	−	−	−	−	黄褐色	砂粒・角閃石	普通	(内)(外)工具ナデ	
20	9	浅鉢		(35.2)	(12.9)	−	−	黄褐色-焦茶色	砂粒・赤褐色砂粒	良	(内)磨き・ナデ (外)ナデ	煤付着
	10	深鉢		(35.7)	(44.0)	(36.5)	−	(内)小麦色-焦茶色 (外)黄橙色-	砂粒・角閃石	良	(内)(外)工具ナデ	煤付着
21	11	浅鉢		(32.6)	(9.5)	−	−	黄褐色-焦茶色	砂粒・角閃石	良	(内)(外)ナデ・磨き	
	12	深鉢	胴~底部	32.4	39.8	−	6.2	枯葉色	砂粒・角閃石	良	(内)(外)工具ナデ	煤付着
22	13	浅鉢	口縁部・ 体部下部	(27.7)	8.1	−	−	暗褐色-焦茶色	砂粒	良	(内)(外)磨き	
	14	深鉢		30.6	−	−	−	焦茶~小麦色	砂粒・角閃石	良	(内)(外)工具ナデ	煤付着
	15	深鉢	体部下半	−	−	−	(7.9)	黄褐色-暗褐色	砂粒・角閃石	普通	(内)ナデ (外)工具ナデ	煤付着
23	16	深鉢	口縁~体部・ 底部	(41.0)	−	−	(9.6)	(内)レンガ色 (外)赤褐色	砂粒・雲母・角閃石	普通	(内)(外)工具ナデ	
24	17	深鉢	全体1/3	(37.8)	(41.6)	(40.6)	−	(内)茶褐色 (外)黄褐色	砂粒・角閃石	良	(内)(外)工具ナデ	煤付着
	18	深鉢	体部下半~底部	−	−	35.0	10.1	(内)灰黄褐色 (外)黄褐色	砂粒・雲母・角閃石	普通	(内)ナデ	煤付着
25	19	深鉢	口縁部・体部	(43.7)	−	(45.8)	−	灰黄褐色	砂粒	良	(内)ナデ (外)丁寧なナデ	
	20	深鉢	体中部	−	−	44.1	−	暗褐色	砂粒・角閃石	普通	(内)工具ナデ (外)削り後粗ナデ	煤付着
26	21	浅鉢	口縁部・体下部	42.6	16.5	−	−	焦茶色~暗茶褐色	砂粒	良	(内)(外)丁寧な磨き	
	22	深鉢		(38.2)	−	−	8.6	(内)灰黄褐色 (外)小麦色~焦茶色	砂粒	普通	(内)(外)工具ナデ	
27	23	浅鉢	全体3/4	(35.6)	13.4	−	−	(内)黄褐色 (外)枯葉色	砂粒・雲母・角閃石 穿孔	良	(内)(外)丁寧な磨き	煤付着
	24	深鉢		−	−	−	−	(内)淡黄褐色 (外)小麦色~灰褐色	微砂粒・角閃石	普通	(内)(外)工具ナデ後 一部ナデ	煤付着
	25	深鉢		(24.8)	25.7	(24.2)	5.9	(内)灰汁色 (外)栗色	角閃石・雲母	良	(内)(外)ナデ	煤付着
28	26	深鉢	体中~底部	−	−	−	9.4	(内)黄褐色 (外)暗褐色	砂粒	普通	(内)(外)工具ナデ	

出土遺物観察表

挿図	番号	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
37	1	茶褐色	角閃石・金雲母	やや良		B 2層 一括	
	2	淡褐色	雲母	不良		B 表	
	3	茶褐色	雲母・砂粒	不良		B 2層	
	4	茶褐色	粗砂粒	やや良		G-8 No.3	一部煤付着
	5	赤褐色	雲母・長石	やや不良		H-14 一括	
	6	茶褐色	粗砂粒	やや良		G	
	7	茶褐色	砂粒	やや良		G-7(4)	
	8	黄褐色	砂粒	普通	ナデ	G 515 No.195	
	9	褐色	粗砂粒	良		G-7(1)	
	10	茶褐色	粗砂粒	やや良		B I-17 2層 一括	(外)煤付着
	11	茶褐色	粗砂粒	やや不良	ヘラ	G-8(3)3	煤付着
	12	小麦色	砂粒・角閃石・雲母	普通	ナデ	G F-7 No.13	
	13	黄褐色	砂粒少	やや不良		G-8(4)	
	14	(内)小麦色 (外)黒褐色	砂粒・雲母・角閃石	普通	ナデ	G 2781,G-8(4)3	
	15	(内)黄褐色 (外)黒褐色	砂粒・雲母・角閃石	普通	ナデ	G F-6 2層 一括	
	16	(内)焦茶色~暗黄褐色 (外)焦茶色	砂粒・雲母・角閃石	普通	(内)ナデ (外)強ナデ後粗磨き	F-5(1)3(3-a) No.196	(外)煤付着
	17	(内)暗黄褐色 (外)焦茶色	砂粒・雲母・角閃石・小石・赤褐色砂粒	普通	(内)ナデ (外)磨き	F-5(3-a) No.193	
	18	褐色	砂粒	不良		G P28	
	19	(内)赤褐色 (外)暗褐色	粗砂粒	やや不良	(外)ナデ	G G-8(4) P27	
	20	茶褐色	砂粒	やや不良		G G-7(2)3	
	21	暗褐色	金雲母・砂粒少	不良		G G-8(3) P1	
	22	黒褐色	砂粒・角閃石・黒雲母	普通		G F-7	
	23	暗赤褐色	砂粒多	やや良	ナデ	G-8(4)3	
	24	淡褐色~黄褐色	砂粒少	普通	(内)削り (外)工具ナデ後ナデ	G 863,864	白色顔料
	25	淡褐色	砂粒少	やや不良		G-8(2)3	
	26	褐色	砂粒多・角閃石	やや良	磨き	G 353	
	27	褐色	砂粒多・角閃石・金雲母	やや良	(内)ナデ・磨き(外)磨き	G H-8(4)3	
	28	枯葉色~焦茶色	〃	良	(内・外)磨き	G-5(3)3	
	29	暗褐色	砂粒少	やや良	(内)ナデ (外)磨き	G F-7 No.87	
38	30	茶褐色	細砂粒	良		G-15 No.88	
	31	黒褐色	細砂粒	やや良	ヘラ研磨	G-8(3)a 3	
	32	褐色	細砂粒	やや良		G-8(3) P63	
	33	黒色	砂粒・金雲母	良		G	
	34	黒褐色	砂粒・金雲母	良	ヘラ研磨	G-8(3)	
	35	黄褐色	粗砂粒	やや良	ヘラ研磨	G69	
	36	黒褐色	砂粒多・角閃石	やや良	(内・外)磨き	G-8(3) P184	
	37	赤褐色	角閃石・細砂粒	良	磨き	G-7(2)3	
	38	黒褐色	砂粒少	良	磨き	F-7(3)3層	
	39	褐灰色	砂粒少	やや良		G-8(3)D-3	
	40	(内)明茶色 (外)赤褐色	砂粒	やや良	ヘラ研磨	G-8(3-1)	
	41	茶褐色	砂粒	やや良	ヘラ研磨	G 2000	
	42	褐色	砂粒多・金雲母	やや良	(内・外)磨き	G-8(3) P137	

挿図	番号	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
38	43	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良	ヘラ研磨	G-8 No.86	(内・外)煤付着
	44	暗茶褐色	砂粒少	やや良	ヘラ磨き	G 4328	
	45	茶褐色	金雲母・砂粒	良	ヘラ磨き	D 7T No.89	(内)煤付着
	46	淡褐色	砂粒	やや良	ヘラ磨き	D G-15	煤付着
	47	黒褐色	細砂粒	良	磨き	G DE-7 SX-1 P18	(外)煤付着
	48	茶褐色	細砂粒	やや良	磨き	DE-7 SX-1 P7	
	49	暗茶褐色	細砂粒	やや良	磨き	G 4314	
	50	茶褐色	細砂粒	良	磨き	G 1305	
	51	茶褐色	角閃石・金雲母	良	(内・外)横磨き	E D-16 No.23	赤彩
	52	黒褐色	粗砂粒・黒雲母・長石	良	(内・外)削り後磨き	D G-17 No.189	
	53	黒色	金雲母・角閃石・砂粒	良		I-16 No.63	
	54	(内)黒色 (外)暗黄褐色	粗砂粒	やや良		F-17(21)	
	55	(内)焦茶-枯葉色 (外)焦茶色	砂粒・角閃石	良	(内)磨き (外)削り後磨き	D H-15 3 No.380,515	
	56	焦茶色	砂粒・角閃石	良	(内・外)ヘラ磨き	D H-15(12)ﾍﾞﾙﾄ層3層一括,382	(外)煤付着
39	57	黄褐色	金雲母・石英	良		D H-17 No.31	(内・外)煤付着
	58	淡褐色	金雲母	やや良		D G-17(25)3層	煤付着
	59	淡褐色	金雲母・砂粒	良		D 7T No.10	
	60	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良		D G-15(20)	
	61	茶褐色	砂粒	良		D H-15 3層No.516	(内)煤付着・赤彩
	62	黒色	砂粒	やや良		D G-16 No.179	煤付着
	63	茶褐色	細砂粒	良		D SB1 NO.27	(内・外)煤付着
	64	淡茶褐色	金雲母・砂粒	良		G-15	(外)煤付着
	65	茶褐色	角閃石	やや良		F-16 埋6	(内・外)煤付着
	66	淡褐色	小石・金雲母・雲母・長石	やや不良		D G-16(21)	
	67	淡褐色	角閃石・砂粒	良		D SB1 No.34	
	68	茶褐色	粗砂粒	良	(内・外)磨き	D G-17(24)a	(内・外)煤付着
	69	黒色	角閃石	やや良		D H-15 3層 No.447	
	70	黒褐色	雲母・長石・砂粒少	良	(内・外)削り後磨き	D G-16(2) No.63	
	71	淡褐色	砂粒	やや良		G-15(9) 3層	(内・外)煤付着
	72	茶褐色	金雲母・角閃石・砂粒	やや良	ヘラ研磨	D F-15 3層 No.15	煤付着
	73	黒色	粗砂粒	良		D No.57	
	74	褐色	小石・金雲母・雲母・長石	良		G-17 No.243	
	75	黒褐色	角閃石・砂粒	良	(内・外)磨き	E D-16 No.37	
	76	黒色	砂粒	やや良		D H-16(16)	
	77	黒灰色	粗砂粒	良	(内・外)削り後磨き	H-15(2)	
	78	(内)灰褐色 (外)暗褐色	雲母・長石	やや良	(内・外)削り後磨き	I-16 No.60	
	79	(内)焦茶 (外)紫黒色	砂粒	良	(内・外)磨き	D F-16 19,23	
	80	枯葉色-灰黒色	砂粒・角閃石	良	(内)ナデ (外)ヘラ磨き	D H-15 3層 No.281, (9)3層一括	
	81	(内)灰黒色 (外)黄褐色-灰黒色	砂粒・赤褐色粒	良	(内・外)ヘラ磨き	D H-16(21)埋5	
	82	灰黒色	砂粒・角閃石・雲母	普通	(内)磨き一部ナデ (外)ヘラ磨き	D F-15	
	83	褐灰色	砂粒少	やや良	ナデ	D H-15 3層No.407,H-16No.279	
40	84	(内)憲房色 (外)枯葉色	砂粒・雲母	良	(内・外)磨き	D I-16 No.149	

出土遺物観察表

挿図	番号	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
40	85	(内)暗黄褐色 (外)枯葉色-焦茶色	砂粒・角閃石	良	(内・外)磨き	D H-15(3) 273,274,283	
	86	(内)黒褐色 (外)褐色	砂粒多	やや良	磨き	D I-16 No.38	
	87	灰褐色-灰黒色	砂粒	良	(内・外)ヘラ磨き	No.98	
	88	黒褐色	砂粒少・金雲母	やや良	磨き	D H-15 3層 No.250	
	89	茶褐色	砂粒・小石	やや良		G F-6 3層	(内・外)煤付着
	90	黄橙色	小石・金雲母・粗砂粒	やや不良		D H-16 3層 No.302	
	91	黄褐色	角閃石・砂粒	やや良		G-16(12)b	(内・外)煤付着
	92	黒色	砂粒	やや良		D G-16(25)a	煤付着
	93	黄褐色	細砂粒	良		G-16 No.79	煤付着
	94	墨色	砂粒	良	(内・外)ヘラ磨き	D 表採	
	95	暗灰褐色	砂粒・角閃石	良	(内・外)磨き	D F-16(11)b	
	96	琥珀色-焦茶色	砂粒・雲母・角閃石	良	(内・外)磨き	D G-16(4) No.128,134,149,150	(内・外)煤付着
	97	黒褐色	角閃石・金雲母	良	(内)横磨き (外)丁寧な磨き	E D-17(A) No.3	
	98	(内)焦茶色 (外)枯葉色-灰黒色	砂粒・角閃石・雲母	良	(内・外)ヘラ磨き	D H-15(9) No.55,276,279,291	
	99	暗褐色	砂粒多・金雲母	やや良	磨き	D I-16 3層	
	100	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良		D F-16 No.8	(外)煤付着,穿孔
	101	茶褐色	金雲母・砂粒	やや良	ヘラ研磨	D F-17(4)a	(外)煤付着,穿孔
	102	茶褐色	砂粒	良			
	103	(内)黄橙色 (外)暗褐色	小石・雲母	やや不良	(内)磨き	E E-17 No.4,5	
	104	黒褐色	粗砂粒	良		G 2788,2709	
41	105	小麦色	砂粒・雲母・角閃石		(内)工具ナデ (外)横ナデ	D H-16 No.328	
	106	暗褐色	砂粒・雲母・角閃石	良	ヘラ研磨	G 890,3617	
	107	暗褐色	砂粒・雲母・角閃石	良	ヘラ研磨	G 891,3616	
	108	暗褐色	砂粒	やや良	磨き	G F-7 No.35	
	109	(内)枯葉色 (外)灰黒色	砂粒・角閃石・雲母	良	(内・外)工具ナデ後ナデ	D H-15	
	110	(内)枯葉色 (外)黒色	砂粒・角閃石	良	(内・外)工具ナデ	D H-17 No.29,33	
	111	淡褐色	細砂粒	やや良		G-8(3)b	
	112	淡褐色	砂粒	やや良		G-8(3)	(内)煤付着
	113	黒褐色	細砂粒	良	ヘラ研磨	G-5(4)	
	114	暗褐色	金雲母・雲母・粗砂粒	やや不良	(内・外)削り後磨き	G	
	115	淡褐色	砂粒	やや良		G-8(3)b 3	
	116	淡褐色	金雲母	やや良	横ヘラ研磨	D E-13 No.26	(内・外)煤付着
	117	黄橙色	砂粒	やや良	(内・外)磨き	G F-6 2層	
	118	淡褐色	砂粒多	やや良	ナデ	G	
	119	(内)黒褐色 (外)茶褐色	砂粒	やや良	ヘラ研磨	F-6 1313	(内)煤付着
	120	黒褐色	粗砂粒	やや良		G 3897,2700	(内・外)煤付着
	121	茶褐色	砂粒・金雲母・角閃石	やや良	ヘラ研磨	G-8(3,1)	
42	122	茶褐色	角閃石	良	ヘラ研磨	G 2399	
	123	暗茶褐色	粗	やや良	ヘラ研磨	G-9 8	No.38
	124	暗茶褐色	角閃石・雲母・砂粒	良	ヘラ研磨	G-9 8	No.49

挿図	番号	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
42	125	褐色	角閃石・雲母・砂粒	やや良	ヘラ研磨	G	
	126	褐色	角閃石・雲母・砂粒	やや良	ヘラ研磨	G DE-7 SX-1 P41(外)磨き	
	127	暗茶褐色	砂粒・雲母	普通		G DE-7 SX-1 P7	
	128	茶褐色	金雲母	やや良	研磨	G 2-3層	
	129	(内)黄褐色 (外)焦茶色	砂粒・角閃石・金雲母	普通	(内・外)工具ナデ・ナデ	D H-17 No.39	(内)指頭圧痕
	130	茶褐色	砂粒	普通	ナデ	G E-7 P19	
	131	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良		G 4192	(内・外)煤付着
	132	茶褐色	細砂粒	やや良		G 2806	煤付着
	133	黒っぽい茶灰色	金雲母・黒雲母	良	(内・外)削り後磨き	G-8 No.15	
	134	茶褐色	砂粒・金雲母	やや良	ナデ	G-8(3) P280	(内)煤付着
	135	茶褐色	砂粒・長石	やや良	(内・外)磨き	G 2817	
	136	淡褐色	粗砂粒	やや良		G-5(2-a) 埋9	煤付着
43	137	淡褐色	砂粒・雲母・角閃石	普通	(内)工具ナデ後ナデ,指頭圧痕 (外)工具ナデ	H-16 No.312	
	138	小麦色	砂粒・角閃石	良	(内)工具ナデ (外)ナデ,指頭圧痕	H-15(3) 584,585,211	
	139	(内)小麦色~焦茶色 (外)黄褐色	砂粒・赤褐色砂粒・雲母	普通	(内・外)工具ナデ	D H-15(15)6 592,591,589,526	
44	140	淡褐色	砂粒	良	(内)工具ナデ (外)ナデ	H-15(14) 584,585	
	141	明橙色	砂粒・角閃石・赤褐色粒	良	(内)ナデ	D H-15 3層 No.304,534,537,	
	142	(内)小麦色~焦茶色 (外)黄褐色	砂粒・赤褐色砂粒・雲母	普通	(内・外)工具ナデ	587	
	143	(内)淡褐色 (外)灰黒色	砂粒・角閃石	良	(内)工具ナデ後ナデ (外)工具ナデ	D G-17 No.11	
	144	茶褐色	角閃石・石英	やや良	(外)ヘラ研磨	D H-16 No.269	
45	145	茶褐色	角閃石・石英	やや良	ヘラ研磨	G-8(3)3	
	146	淡褐色	砂粒・金雲母	やや良	(内・外)ヘラ研磨	G	
	147	淡褐色	砂粒	やや良	ヘラ研磨	F-7	
	148	褐色	砂粒	やや良		G-8 P8	
	149	黒褐色	砂粒少・金雲母	やや良	ナデ	D G-16 No.246	
	150	褐色	砂粒多	やや良	ナデ	G-8(3)a-3	
	151	茶褐色	砂粒	やや良	ナデ	D H-17 No.18	
	152	暗茶褐色	砂粒・金雲母	やや良	(内)ヘラ研磨	G-5(3)3	(外)煤付着
	153	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良		D H-16 No.16 No.160	(内・外)煤付着
	154	灰褐色	砂粒・長石	やや良	ナデ	D G-16(4) No.147	
	155	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良		G-15 No.89	(外)煤付着
	156	茶褐色	金雲母・砂粒	やや良		D 表	
	157	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良		G-15	(外)煤付着
	158	淡茶褐色	砂粒多	やや良	ナデ	D 表	
	159	褐色	砂粒多・金雲母・角閃石	やや良		D F-17(22)3層 一括,No.12	
	160	褐色	砂粒多・金雲母・角閃石	やや良	ナデ	D G-17 No.217	穿孔
	161	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良		D 表	(内・外)煤付着
	162	茶褐色	粗砂粒	やや良	横ヘラ研磨	G-17 No.146	
	163	茶褐色	砂粒	やや良		D H-16 No.331	
	164	淡褐色	砂粒	やや良		G F-7(2)2層	
	165	茶褐色	粗砂粒・赤茶粒	やや良	(内・外)ハケメ	E D-16 No.25	煤付着
	166	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良		G-17(10)	(内・外)煤付着

出土遺物観察表

挿図	番号	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
45	167	(内)暗灰褐色 (外)褐色	砂粒少・角閃石	やや良	磨き	D SB-1 No.5	
	168	(内)灰褐色 (外)淡褐色	粗砂粒	やや良	(内)横ハケメ	D-16(1) 埋6	(外)煤付着
	169	(内)灰色 (外)淡褐色	粗砂粒・雲母・長石	やや良		E D-16 No.38	
	170	淡褐色	角閃石・金雲母・砂粒	やや良		D F-17(21)	(内)煤付着
	171	褐色	砂粒少	やや良	ナデ	G-16(25)a	
	172	黄褐色	金雲母	良	(外)横ヘラ磨き	E D-17(B) No.43	(外)煤付着
	173	暗茶褐色	砂粒	やや良		G-17 No.4	
46	174	黒褐色	砂粒・金雲母・長石	やや良	(外)磨き	No.93,94	(外)煤付着
	175	淡黄褐色	金雲母・雲母・砂粒	やや不良		7263	(外)煤付着
	176	暗褐色	砂粒多・角閃石	不良	ナデ	G 3184	
	177	灰褐色	砂粒少	やや良	ナデ	D 表	
	178	黒褐色	砂粒・雲母	やや良	ナデ	D 表採	
	179	淡褐色	金雲母・角閃石	やや良	ナデ	D-17 No.75	
	180	茶褐色	砂粒・角閃石	やや不良	ナデ	D 7T No.80	
	181	黄褐色	角閃石・砂粒	やや良		D F-15 10T No.	(内)煤付着
	182	(内)褐灰色 (外)黒褐色	砂粒多	やや良	ナデ	F-15 10T No.3 6	
	183	暗黄灰色	砂粒密・長石	やや不良	(内)削り	D 表	
	184	淡褐色	砂粒	やや良		H-16	
	185	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良		D 表採	(外)煤付着
	186	茶褐色	細砂粒	やや良		D 表採	煤付着
	187	黄褐色	角閃石・砂粒	やや良		D SB	(内・外)煤付着
	188	茶褐色	角閃石・金雲母	やや良	ナデ	D H-16	
	189	茶褐色	角閃石・石英	やや良		D H-16 No.128	(外)煤付着
	190	暗褐色	砂粒少・角閃石	やや良	ナデ	D 7T No.14	
	191	暗褐色	砂粒少・角閃石	不良	ナデ	D 表採	
	192	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良		B SB3 4080	(内)煤付着
	193	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良	ナデ	D G-17 No.194	
	194	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良		E D-16 3層 No.21	煤付着
	195	淡褐色	砂粒・金雲母	やや良		G G-7 3層 NO.83	煤付着
	196	淡褐色	角閃石・金雲母	やや良		F-15 10T No.9	(外)煤付着
	197	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良		D H-17 No.10	
	198	黄褐色	角閃石・砂粒	やや良		D 表	
	199	茶褐色	金雲母	やや良		G-17 No.232	(内・外)煤付着
	200	淡褐色	長石・砂粒やや密	やや良	(内)削り後磨き	SB3	
	201	淡褐色	長石・黒雲母	やや不良		SB3 No.20	
	202	黒褐色	砂粒多・金雲母	やや良		D H-16 3層 No.67	
	203	茶褐色	角閃石	やや良	磨き	D H-15	
	204	黒褐色	砂粒多	やや良		D H-15 3層 No.46	
	205	黄褐色	角閃石・砂粒	やや良		SB6 No.1	(外)煤付着
	206	黒褐色	砂粒多・金雲母	やや良		D I-6 No.82	
	207	黒褐色	砂粒少・長石	良	研磨	D H-16 3層	赤彩・瀬戸内系?
47	208	(内)小麦色-焦茶色 (外)黄褐色	砂粒・雲母	普通	(内)工具ナデ後ナデ (外)工具ﾅﾃﾞ後磨き・ﾅﾃﾞ	G 2083	(内)煤付着
	209	褐色	砂粒多	やや良	(内・外)ナデ	G-8(1)3	
	210	暗茶褐色	粗	やや良		H-8 P47	
48	211	茶褐色	細砂粒	良	(内・外)工具ナデ後ナデ	G 2827	黒斑

挿図	番号	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
48	212	茶褐色	砂粒・雲母	やや良	(内・外)磨き	G 2699	
	213	茶褐色	砂粒・雲母	やや良	磨き	G-7(1)2~3,G-8 P7,G2702,3127	
	214	茶褐色	砂粒・角閃石	やや良	(内・外)横ヘラ研磨	G 368,871	煤付着
	215	淡褐色	砂粒・金雲母	やや良	縦ヘラ研磨	G 3703	(外)煤付着
	216	淡褐色	砂粒・金雲母	やや良	ナデ	G-8(1)	
	217	褐色	金雲母・雲母・長石・砂粒少・小石	良	(内・外)削り後磨き	G 3601,3608	
	218	(内)黄褐色 (外)暗褐色	砂粒・雲母	やや良	(内・外)削り後磨き	G 1622,3724	
	219	黄褐色	粗砂粒	やや良		F-7 No.54	(外)煤付着
	220	(内)褐色 (外)暗褐色	金雲母・雲母・粗砂粒	良	(内・外)削り後磨き	G 3603,3605	
49	221	(内)淡黄色~焦茶色 (外)黄褐色~焦茶~灰黒色	砂粒・角閃石・雲母・赤褐色粒	普通	(内・外)工具ナデ後ナデ (外)削り	G H-5(2) 埋7	(外)一部煤付着
	222	淡褐色	砂粒・金雲母・角閃石	やや良	ヨコナデ	G 2042	(内・外)煤付着
	223	(内)黄褐色 (外)暗褐色	小石・黒雲母	やや良		G-7 埋6	
50	224	(内)淡黄色 (外)焦茶色	砂粒・角閃石・赤褐色粒	普通	(内)ヨコナデ (外)工具ナデ後ナデ	E D-16(4) No.143	(外)煤付着
	225	(内)焦茶~枯葉色 (外)灰褐色~煉瓦色	砂粒・角閃石・雲母・小石	良	(内)工具ナデ (外)ナデ,細い条痕有り	No.15	(外)煤付着
	226	(内)淡褐色~灰黒色 (外)黄褐色~灰黒色	砂粒・角閃石	良	(内・外)工具ナデ後ナデ	B No.94	(外)煤付着
	227	(内)琥珀色~焦茶色 (外)暗茶色~焦茶色	砂粒	良	(内・外)ナデ	D H-17 No.11	
51	228	(内)小麦色~暗灰色 (外)小麦色~焦茶色	砂粒・小石・角閃石	普通	(内・外)工具ナデ	E E-7 埋7	
	229	(内)灰褐色~灰黒色 (外)焦茶~枯葉色	砂粒・雲母	良	(内・外)工具ナデ後ナデ	G-16	(外)煤付着
	230	(内)淡黄色 (外)黄褐色~焦茶色	砂粒・小石・角閃石	普通	(内・外)ナデ	E D-16(1) 埋6 No.11	
	231	(内)淡黄色 (外)黄褐色~焦茶色	砂粒・小石・角閃石	普通	(内)ナデ (外)工具ナデ後ナデ	No.141	(内)煤付着
52	232	(内)焦茶色 (外)黄褐色	砂粒・角閃石	良	(内)ナデ (外)工具ナデ	D F-16 埋6 No.2	
	233	(内)黄褐色 (外)黄褐色~灰黒色	砂粒・角閃石・雲母	良	(内)工具ナデ後ナデ (外)工具ナデ	E D-16 No.6,18	(外)煤付着
	234	淡黄橙色	砂粒・角閃石	良	(内)ナデ (外)工具ナデ後ナデ	D H-15 3層 No.127,210,302 164,584,一括	
	235	(内)淡橙色 (外)黄丹色	砂粒・角閃石	普通	(内)ナデ (外)工具ナデ後ナデ	D-16(1) No.22	
53	236	茶褐色	砂粒・角閃石	やや良	ナデ	G-8(1)3	
	237	黒褐色	砂粒	やや良	(内・外)ヘラ研磨	F-7 No.69	
	238	茶褐色	砂粒	やや良	(外)ヘラ研磨	G-8 No.23,24	
	239	茶褐色	砂粒・長石	やや良	(外)ヘラ研磨	G 2,3層 表土ハギ	
	240	淡褐色	砂粒・金雲母	やや良	(外)ヘラ研磨	G F-7 No.41	(内・外)煤付着
	241	茶褐色	砂粒・角閃石・雲母	良		E D-16 No.6,18	
	242	黄褐色	砂粒少	やや良		D I-16 3層 No.146	
	243	(内)暗褐色 (外)黒褐色	砂粒多・角閃石	不良		E D-20 SK1	

出土遺物観察表

挿図	番号	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
53	244	枯葉色-灰黒色	砂粒・雲母	普通	(内・外)工具ナデ後ナデ	G-15 埋4	(内・外)煤付着
54	245	(内)鳶色 (外)暗黄褐色-焦茶色	砂粒	良	(内・外)磨き (内)工具ナデ後磨き	G-5(3)5 埋11	(内)煤付着
	246	淡茶色-鼠色	砂粒	普通	(内・外)工具ナデ後ナデ	G-6 5 埋7	
	247	茶褐色	砂粒・角閃石	普通	(内・外)工具ナデ後ナデ	E D-16 No.24 27 28	
55	248	淡茶褐色	角閃石・石英・赤茶粒	やや良	(内)磨き・ナデ	E C-16 No.4	(外)煤付着
	249	(内)暗褐色 (外)黒褐色	砂粒少・角閃石	やや良	磨き	D G-16 No.67	
	250	(内)淡褐色 (外)黒褐色	長石・雲母	やや良		D G-15 No.18	
	251	茶褐色	砂粒・金雲母	やや良		G 2442	穿孔
	252	黒褐色	細砂粒	やや良		G 5013	(外)煤付着,穿孔
	253	黒褐色	砂粒	やや良		G 2483	(外)煤付着,穿孔
	254	暗褐色	砂粒	やや良		G 2676	穿孔
	255	黒褐色	砂粒・粗金雲母	やや良		G 2219	穿孔
	256	茶褐色	砂粒・金雲母	良	ヘラ研磨	G H-8(4)3	(外)煤付着
	257	暗褐色	砂粒・金雲母	不良		G-16 No.3	
	258	暗褐色	砂粒少	やや良	磨き	F-16(16)a	
	259	黄橙色	粗砂粒・長石	やや良		G-16(14)	
	260	黒色	砂粒	やや良		H-15(7)	
	261	淡褐色	金雲母・角閃石	やや良		D-16 No.218	(内・外)煤付着
	262	淡褐色	砂粒	やや良	(内)ナデ	G-16(9) No.304	(内・外)煤付着
	263	黒褐色	砂粒・角閃石	やや良		G-8(2)	
	264	黄褐色	砂粒	やや良		B S72	(内・外)煤付着
	265	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良		G 3741	
	266	赤褐色	雲母	不良		F-15 No.72	
	267	褐色	砂粒多・角閃石	やや良		E SD20 SK1	
	268	褐色	砂粒多・角閃石	やや良		D E-15	
	269	暗褐色	砂粒	やや良	(内)工具ナデ	B 2層一括	(外)条痕・組織痕
	270	褐色	砂粒・角閃石	良	不定方向ナデ	B 表採 組織痕	
	271	褐色	砂粒・角閃石	良		B 2層一括	
56	272	(内)茶褐色 (外)白橙色	雲母・小石	やや良		G 2502	
	273	黄橙色	雲母・砂粒多	やや良	(外)ナデ	G-5(1-a)	
	274	白橙色-明褐色	黒雲母・小石	やや良		G 1617	
	275	(内)暗褐色 (外)暗黄灰色	雲母・長石・砂粒	やや良		G 2153	
	276	黒灰色	雲母・砂粒少	やや不良	ナデ	G 2466	
	277	黒褐色	砂粒・金雲母・角閃石	やや良	丁寧なヘラ研磨	G 2381	(内・外)煤付着
	278	暗黄灰色	黒雲母・金雲母・ 長石・粗砂粒	やや良	丁寧な研磨	F-6(3)3	
	279	(内)黒色	黒雲母・長石	やや不良	(外)ヘラ研磨 (外)白っぽい黄灰色	G 539	
	280	(内)黒褐色 (外)褐色	砂粒・密	良	(外)ヘラ研磨	G 527	(内)煤付着
	281	黒色-黄灰色	長石・砂粒	(外)ヘラ研磨		G 2027	
	282	(内)黒色 (外)黄褐色	砂粒	やや不良	(外)ヘラ研磨	G 4278	(内)煤付着
	283	(内)黒色 (外)茶褐色	砂粒	やや良		G 3595	(内・外)煤付着

挿図	番号	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
56	284	(内)黒色 (外)黄褐色	砂粒密・金雲母・小石	やや不良	(外)ヘラ研磨	G 2191	
	285	(内)黒褐色 (外)白っぽい黄灰色	金雲母・雲母・砂粒	やや良		G 3135	
	286	暗赤褐色	砂粒・金雲母	良		G 3691	
	287	(内)暗赤褐色 (外)黒色~淡黄灰色	砂粒・金雲母	良	ヘラ研磨	G 2089	
	288	(内)灰色 (外)淡黄橙色	砂粒・長石・雲母・ 黒雲母・金雲母	やや良		G 2376	
	289	(内)黒褐色 (外)淡黄灰色	金雲母・長石・黒雲母	やや良	(外)ヘラ研磨	G 1312	
	290	(内)黒褐色 (外)明茶褐色	砂粒多	やや良		D H-15 No.518	
	291	(内)黒色 (外)淡褐色	金雲母・砂粒	やや良	ヘラ研磨	G 3159	(内)煤付着
	292	黄褐色	砂粒多・角閃石・金雲母	やや良		D H-17 No.15	
	293	(内)黒色 (外)黄褐色	金雲母・砂粒	やや良		G-17 No.14	
	294	(内)黒褐色 (外)茶褐色	雲母・小石	良		G-5(4)3 2004,2003	
	295	(内)黒色 (外)茶褐色	角閃石・砂粒	やや良	ヘラ研磨	G 2,3層	(内)煤付着
	296	茶褐色	〃	やや良		G 2001,2031,2032,2061	
	297	(内)枯葉色 (外)煉瓦色	砂粒	良	(内・外)ナデ	D H-17 No.36	
	298	黄褐色	砂粒・雲母・角閃石・小石	普通	(内・外)工具ナデ	D H-16 Pit24	
	299	褐色	〃	やや良	(内)ヘラ削り	G-5 1413	
	300	黄褐色	砂粒	やや良	(外)ヘラ研磨	G 4308	
	301	(内)黒色 (外)黄褐色	砂粒・角閃石	やや不良		G 4049	(内)煤付着
	302	(内)黒色 (外)黄褐色	粗砂粒	やや良		G 2246	(内)煤付着
	303	黄褐色	砂粒・金雲母	不良	粗いナデ	G 2457,2454	
	304	小麦色~焦茶色~灰黒色	砂粒	普通	(内・外)工具ナデ後磨き	G H-6 埋8	
57	305	(内)淡橙色~黒灰色 (外)淡橙色~黄褐色~焦茶色	砂粒・角閃石	普通	(内)ナデ (外)工具ナデ後ナデ	B 埋 No.99	(外)煤付着
	306	(内)小麦色~灰黒色 (外)小麦色~黄丹色	砂粒・角閃石 (外)工具ナデ	良	(内)工具ナデ後ナデ	E D-16(1) No.140	(内・外)煤付着
	307	淡茶色~黄褐色	砂粒	良	(内)ナデ (外)工具ナデ	D H-11 No.212	
	308	淡褐色	小石・長石・黒雲母	不良		C 埋1	
	309	焦茶色	砂粒・角閃石・赤褐色土	良	(内・外)工具ナデ後ナデ	D H-16 No.1	(内・外)煤付着
	310	淡茶色~淡橙色	砂粒・角閃石	良	(内・外)ナデ (外)工具ナデ	D H-15 No.164	
	311	茶褐色	砂粒	やや良		D F-15 10T No.11	
	312	茶褐色	角閃石・金雲母・砂粒	やや良		D G-17 No.60	
	313	(内)淡茶色~焦茶色 (外)小麦色	砂粒・角閃石・雲母・ 赤褐色粒	普通	(内・外)ナデ	D H-16 329	
	314	黄橙色	小石・砂粒	やや不良		D I-16 No.47	

出土遺物観察表

挿図	番号	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
57	315	(内)黒色 (外)黄褐色	金雲母・角閃石	やや不良		F-15 10T	
	316	黄褐色	金雲母・粗砂粒	やや良		D H-16 3層	(内)煤付着
	317	淡褐色	粗砂粒	やや良		G-15 3層 No.24	煤付着
	318	(内)黒色 (外)黄褐色	角閃石・砂粒	やや良		G-15 No.94	(外)煤付着
	319	(内)黒色 (外)茶褐色	角閃石・砂粒	やや良		7T No.27	
	320	淡褐色	角閃石・金雲母・砂粒	やや良	ナデ	G-16 No.259	
	321	淡褐色	角閃石・粗砂粒	やや良		F-15 3層 No.18	煤付着
	322	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良	(内・底)ヘラ削り (外)横ナデ	D-16 No.31	煤付着
	323	褐色	砂粒多・角閃石	やや良		G-16(2) No.56	
58	324	淡褐色	砂粒多・小石	やや良		D F-16 No.45	
	325	(内)黒色 (外)茶褐色	砂粒	やや良		G-16 3層 No.190	(外)煤付着
	326	茶褐色	砂粒多・雲母	やや良		F-15	
	327	褐色	砂粒多	やや良	(外)削り	G-7 3層 No.16	
	328	(内)煉瓦色 (外)枯葉色	砂粒	普通	(内・外)工具ナデ・ナデ	D H-16 No.180	
	329	茶褐色	砂粒・角閃石	やや良	ナデ	G 2,3層 表土ハギ	
	330	褐色	砂粒多・角閃石	不良	ナデ	A	
	331	(内)小麦色-黒褐色 (外)小麦色	砂粒・角閃石	良	(内)工具ナデ (外)工具ナデ後ナデ	F-16 No.12,163	黒斑
	332	茶褐色	粗砂粒	やや良		B 2層 一括	
	333	(内)黒色 (外)淡褐色	やや粗い砂粒・雲母	やや不良		B H-23 SK3	
	334	(内)黒色 (外)淡褐色	砂粒	やや不良		F-7 No.68	(内)煤付着
	335	(内)黒色 (外)淡褐色	角閃石	やや良		G-15 No.95	(外)煤付着
	336	(内)黒褐色 (外)褐色	砂粒多・金雲母	やや良	ナデ	D H-15 3層 No.473	
	337	褐色	砂粒多・小石	やや良		D H-15 3層	
	338	(内)灰色 (外)淡黄橙色	雲母・長石・砂粒・密	やや不良		D F-16 No.44	

挿図	番号	器　種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	旧登録番号
62	1	打製石斧(短冊)	13.3	6.1	1.8	172	安山岩	G 3566
	2	〃　〃	11.9	4.9	1.1	82	粘板岩?	G H-6 3
	3	〃　〃	(12.5)	5.8	1.95	160	安山岩	G 3583
	4	〃　〃	12.1	1.9	5.1	148	輝石安山岩	G F-6(3) 3
	5	〃　〃	13.7	5.7	1.4	156	緑色片岩	C 表採
	6	〃　〃	12.3	5.1	1.7	152	安山岩	G G-8(4) 3
63	7	〃　〃	(11.75)	5.8	1.65	144	安山岩	D H-15 3層 No.401
	8	〃　〃	9.4	6.0	2.3	134	安山岩	D G-15 3層 No.125
	9	〃　〃	11.6	6.0	1.6	164	輝石安山岩	D G-15 3層 No.72
	10	〃　〃	13.2	4.8	1.8	156	輝石安山岩	G F-6 全区
	11	〃　〃	9.5	4.9	1.3	71	安山岩	G D-7 SK-7
	12	〃　〃	(8.6)	6.85	2.5	154	輝石安山岩	F SB-08 埋土内一括
64	13	〃　〃	13.3	6.1	1.7	164	輝石安山岩	D H-17一括
	14	〃　〃	11.3	5.6	1.5	118	輝石安山岩	G H-8(4) 3
	15	〃　〃	11.4	5.9	2.5	168	輝石安山岩	F SX-1 埋土内一括
	16	〃　〃	12.5	5.6	1.4	118	安山岩	G 2-3層 表土ハギ
	17	〃　〃	12.5	5.2	1.3	104	輝石安山岩	G 2-3 表土ハギ
	18	〃　〃	14.1	5.9	2.0	226	輝石安山岩	B 2層 No.9
65	19	〃　〃	(11.75)	7.5	1.9	276	輝石安山岩	B 2層 No.26
	20	〃　〃	(9.7)	5.7	1.1	78	輝石安山岩	G G-7 p2
	21	〃　〃	13.2	5.5	2.0	146	安山岩	G 4025
	22	〃　〃	14.4	5.8	1.5	146	輝石安山岩	D F-16 No.72
	23	〃　〃	14.1	4.9	1.3	140	安山岩	G G-7(2) 2-3
66	24	〃　〃	13.5	6.0	1.85	182	安山岩	D G-15(3) 3層 一括
	25	〃　〃	11.55	5.0	1.5	114	輝石安山岩	C 10T No.1
	26	〃　〃	10.9	5.9	1.6	144	安山岩	B 2層 一括
	27	〃　〃	12.3	5.45	1.3	122	安山岩	G H-7 No.30
	28	〃　〃	(8.6)	6.25	1.3	88	安山岩	G 2-3
	29	〃　〃	(8.0)	5.4	1.7	89	安山岩	G 373
67	30	〃　〃	10.1	7.9	2.6	270	安山岩	D G-16 3層 No.93
	31	〃　〃	(8.6)	8.25	1.45	146	輝石安山岩	D G-17 No.74
	32	〃　〃	9.2	3.9	1.1	49	緑色片岩?	G 425
	33	〃　〃	12.35	5.6	1.5	134	安山岩	B SB-5 No.25
	34	〃　〃	12.9	5.3	2.3	168	輝石安山岩	D G-16,25 3層一括
68	35	〃　(ばち)	17.4	7.9	1.8	218	安山岩	D F-16 3層 一括
	36	〃　〃	11.3	6.9	1.3	120	安山岩	G 3059
	37	〃　〃	14.5	7.9	2.0	276	安山岩	G 2296
69	38	〃　〃	17.1	9.1	1.8	250	安山岩	G G-6 6 全3
	39	〃　〃	10.9	8.5	1.3	112	安山岩	G 707
	40	〃　〃	(6.85)	(4.45)	1.5	51	安山岩	G F-7(2) 2層 一括
	41	〃　〃	10.4	6.2	1.75	116	安山岩	B 2層 一括
	42	〃　〃	12.2	5.65	1.7	146	粘板岩	G 3217
70	43	〃　〃	18.25	8.85	2.0	350	安山岩	D G-17 No.226
	44	〃　〃	9.9	6.5	1.6	110	安山岩	G 1864
	45	〃　〃	13.7	7.1	1.7	220	安山岩	B 2層 No.56
71	46	〃　〃	11.3	6.65	1.1	98	安山岩	F SB07
	47	〃　〃	12.35	5.5	1.45	128	安山岩	G G-8(3) sI29
	48	〃　〃	11.15	6.5	1.8	142	安山岩	F SB-08 埋土内一括
	49	〃　〃	11.5	5.0	1.75	114	安山岩	G I-7(2) 3
	50	〃　〃	10.8	5.6	1.6	112	安山岩	G G-7(2-b)

出土遺物観察表

挿図	番号	器	種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	旧 登 録 番 号
71	51	打製石斧(ばち)		11.6	5.3	1.7	120	安山岩	D G-16 3層 No.91
72	52	〃	〃	18.2	7.9	2.6	446	安山岩	D F-16 No.13
	53	〃	〃	13.0	5.3	1.5	128	安山岩	G 4031
	54	〃	〃	14.1	5.1	2.1	174	安山岩	B SD-3 一括
73	55	〃	(横)	(12.8)	3.6	0.6	38	緑色片岩	D G-16(4) s110
	56	〃	(分銅)	10.1	6.0	1.3	108	輝石安山岩	G H-5(2) ｳﾒ7
	57	〃	〃	7.7	5.4	1.1	47	安山岩	G 1451
	58	〃	〃	8.45	6.0	0.75	48	安山岩?	G 3417
	59	〃	〃	7.9	4.8	0.9	42	安山岩	G H-6(2-a) 2~3
	60	〃	〃	9.3	4.8	1.2	63	安山岩	G 34
	61	〃	〃	8.3	4.4	1.2	50	安山岩	G F-7 3
	62	〃	〃	7.5	5.2	1.2	54	輝石安山岩	G No.31
74	63	〃	〃	(7.3)	4.6	1.8	78	安山岩	G H-8(4) 3
	64	〃	〃	7.5	4.15	0.7	31	緑色片岩?	G G-8(6~4)
	65	〃	〃	6.5	4.55	1.05	35	緑色片岩	G H-2~3
	66	〃	〃	7.7	3.05	0.9	24	粘板岩	D H-15(4) 3層
	67	〃	〃	7.2	3.55	0.95	29	安山岩?	D G-15(7) 3層 一括
	68	〃	〃	7.3	4.4	1.0	33	粘板岩	D I-16 3層No.137
	69	〃	〃	(7.2)	3.7	1.0	38	安山岩	G H-4(2) 3
	70	〃	〃	7.9	3.8	0.6	25	粘板岩	D F-16(8)a
	71	〃	〃	8.0	4.9	0.65	35	粘板岩	D H-16 No.490
	72	〃	〃	8.3	4.0	0.8	30	輝石安山岩	G G-8(3) 63
	73	〃	〃	8.1	2.75	0.8	22	安山岩	G 3749
	74	〃	〃	(9.8)	4.1	0.8	47	安山岩	G 4263
75	75	〃	〃	7.6	4.3	0.7	29	安山岩	G 2372
	76	〃	〃	4.7	6.5	0.5	20	粘板岩	G F-6(3) 3
	77	〃	〃	6.3	4.1	0.6	20	粘板岩	G 3752
	78	〃	〃	7.25	4.5	1.4	49	輝石安山岩	G G-8 No.15
	79	〃	〃	6.45	5.9	0.55	33	粘板岩	D G-17 No.248
	80	〃	〃	6.65	3.75	0.7	20	粘板岩	D F-15(2) 一括
	81	〃	〃	7.1	3.7	0.7	25	粘板岩	G 2,3層 清浄
	82	〃	〃	11.0	5.3	0.5	50	粘板岩	D G-16(7) No.265
	83	〃	〃	(8.6)	5.5	1.3	65	粘板岩	E 表土ハギ
	84	〃	〃	7.1	5.3	1.0	19	粘板岩	G I-17(20) 3層一括
76	85	〃	〃	6.8	5.2	0.75	37	緑色片岩?	G 2665
	86	〃	〃	5.9	4.9	0.7	19	粘板岩	G G-5(1)B 3
	87	〃	〃	6.7	3.8	1.1	36	安山岩	G 1762
	88	〃	〃	6.5	4.0	1.1	36	緑色片岩	G SB-2 Pit4
	89	〃	(円盤)	(6.8)	7.15	1.3	85	粘板岩	D H-16 No.475
	90	〃	〃	7.5	6.3	2.1	118	?	G 2307
	91	〃	〃	8.4	(6.7)	1.4	102	凝灰岩?	G G-5(2) 3
	92	〃	〃	11.9	11.75	1.2	252	輝石安山岩	D G-16 3層中 No.33
77	93	〃	〃	6.8	7.75	0.7	102	粘板岩?	D 表採
	94	〃	〃	7.85	7.0	2.1	138	輝石安山岩	C 表採
	95	〃	〃	8.55	8.4	1.9	148	安山岩	G 680
	96	〃	〃	7.15	7.9	2.25	180	輝石安山岩	G E-7(3) 2
	97	〃	〃	7.6	8.3	1.8	144	輝石安山岩	G G-4(2)B ?42-3
78	98	〃	〃	7.3	7.15	2.2	154	安山岩	G 4249
	99	〃	〃	9.4	6.4	1.4	108	輝石安山岩	G 1239
	100	〃	〃	7.7	7.3	1.8	136	輝石安山岩?	C 1T No.9

挿図	番号	器	種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石	材	旧 登 録 番 号
78	101	打製石斧(円盤)		7.7	7.1	2.3	152	安山岩		G G-6(1) 3
	102	〃	〃	8.4	8.9	2.3	234	粘板岩		G G-5(1-a)
79	103	〃	〃	8.2	6.9	1.7	124	安山岩		B 2層 一括
	104	〃	〃	6.1	6.7	1.6	85	輝石安山岩		G G-7(2) 2~3
	105	〃	〃	6.5	7.5	2.2	128	安山岩		G 2610
	106	〃	〃	7.4	8.0	2.3	182	安山岩		D H-16(9) 3層 一括
	107	〃	〃	9.5	(6.5)	2.0	120	安山岩		G 2951
80	108	〃	〃	11.2	11.4	2.8	454	輝石安山岩		E D-16 No.9
	109	〃	〃	11.2	11.0	2.8	458	輝石安山岩?		D G-16 3層 No.223
	110	〃	〃	11.5	12.2	3.5	590	輝石安山岩		D I-16 3層 No.4?
81	111	〃	〃	10.5	10.15	2.5	358	輝石安山岩		D G-16 No.419
	112	〃	〃	10.3	10.3	3.15	412	輝石安山岩		D H-16 No.329
	113	〃	〃	10.6	9.8	2.8	272	凝灰岩?		G 2876
82	114	〃	〃	10.7	11.0	2.2	338	輝石安山岩		D G-16 No.416
	115	〃	〃	11.0	9.4	2.0	252	安山岩		B 2層 一括
	116	〃	〃	9.2	9.3	3.9	464	砂岩		E 表土ハギ
83	117	〃	〃	10.6	9.3	1.6	210	安山岩		G H-5(2) 3 s2
	118	〃	〃	9.0	8.1	2.0	194	安山岩?		D G-17 No.159
	119	〃	〃	8.65	8.1	2.6	232	輝石安山岩		G 1892
	120	〃	〃	9.55	8.95	2.9	282	安山岩		C 集石1 No.1
84	121	〃	〃	9.1	8.6	2.1	202	粘板岩		G 3064
	122	〃	〃	8.7	8.6	1.7	160	緑色片岩		G H-8 3層 No.28
	123	〃	〃	9.4	8.85	3.5	328	安山岩		F SB-06 埋土内
	124	〃	〃	8.2	9.2	3.3	312	輝石安山岩		F SX-1 埋土内一括
85	125	〃	(横)	9.2	5.2	5.5	35	緑色片岩?		D F-17 No.45
	126	〃	〃	(7.9)	5.0	1.0	35	粘板岩		D F-16(18) 3層 一括
	127	〃	〃	7.7	4.1	0.6	24	粘板岩		D H-16 No.305
	128	〃	〃	8.8	5.65	1.1	55	粘板岩		D F-16 3層 一括
	129	〃	〃	13.3	5.75	1.2	102	粘板岩		C SB-6 No.2
	130	〃	〃	(7.6)	4.1	7.5	31	緑色片岩		G G-7(3) 3
86	131	〃	〃	9.2	4.4	1.0	48	粘板岩		G H-9 3 s6(?)5
	132	〃	〃	10.0	4.6	0.9	59	粘板岩		G F-6(3) 3
	133	〃	〃	(10.4)	5.3	0.9	69	粘板岩		D F-16 No.90
	134	〃	〃	10.0	5.3	0.85	54	粘板岩		D G-15 3層 No.41
	135	〃	〃	(6.15)	6.55	8.05	35	粘板岩		D H-17 No.37
	136	〃	〃	10.6	5.6	0.7	43	粘板岩		G 7(1) 3 短冊?
	137	〃	〃	12.25	5.9	2.1	174	?		D 表採
	138	〃	〃	(4.5)	5.1	0.6	16	粘板岩		C SB-2 一括
87	139	〃	〃	10.9	4.8	1.1	63	粘板岩		D G-17 3層上部 一括
	140	〃	〃	8.8	6.4	1.2	88	粘板岩		E E-16(2) 3層
	141	〃	〃	9.4	4.9	1.0	55	粘板岩		D G-15(17) 3層 一括
	142	〃	〃	(11.0)	4.5	1.05	57	粘板岩		E E-16(4)a ベルト
	143	〃	〃	9.25	5.7	0.7	64	粘板岩		B SK-3 一括
	144	〃	〃	(7.4)	3.0	1.1	38	粘板岩?		G G-5(3) 3
	145	〃	〃	10.35	5.65	0.65	61	粘板岩		D G-16(17) No.269
	146	〃	〃	8.5	4.1	1.0	34	粘板岩?		G 2,3層 表土ハギ
88	147	〃	〃	(10.65)	5.4	1.3	83	粘板岩?		D F-17 No.49
	148	〃	〃	14.0	5.15	0.8	56	粘板岩		E C-16(2) 3層
	149	〃	〃	12.3	4.2	0.9	42	粘板岩?		E E-16(2) 3層
	150	〃	〃	14.2	5.4	0.9	53	粘板岩?		E D-16 No.10

出土遺物観察表

挿図	番号	器	種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石	材	旧 登 録 番 号
88	151	打製石斧(横)		(7.6)	5.7	0.8	41	粘板岩		G 29(95)
	152	〃	〃	(6.8)	5.6	0.9	48	粘板岩?		D G-15(4)B 一括
	153	〃	〃	10.5	4.6	0.9	52	粘板岩?		G 2,3層 表土ハギ
89	154	〃	〃	11.9	4.15	1.4	83	粘板岩		G 2896
	155	〃	〃	14.45	5.75	0.7	90	粘板岩		D G-15 No.202
	156	〃	〃	9.3	3.4	0.9	35	石英片岩		G G-7
	157	〃	〃	14.3	3.7	7.5	55	粘板岩		D G-16 No.415
	158	〃	〃	15.45	6.1	1.15	146	粘板岩		G E-7(4) s3
	159	〃	〃	(5.15)	(5.6)	4.5	13	緑色片岩		G 2,3層表土ハギ
90	160	〃	(その他)	8.6	5.2	1.0	56	粘板岩		B 2層 No.46
	161	〃	〃	10.5	6.5	1.1	80	粘板岩		D G-17 No.145
	162	〃	〃	11.5	5.25	0.9	66	粘板岩		G 2-3層 表土ハギ時
	163	〃	〃	13.74	5.7	1.3	110	粘板岩		D F-15 3層 No.27
	164	〃	〃	(6.3)	6.5	1.0	43	粘板岩		D F-16 SK-34,2
	165	〃	〃	(9.2)	5.65	0.9	60	粘板岩		D G-16(2) No.61
	166	〃	〃	14.0	6.0	1.0	87	粘板岩		D I-16 一括
91	167	〃	〃	9.4	5.8	9.5	67	粘板岩		D G-16 3層 No.21
	168	〃	〃	7.3	5.9	0.8	42	粘板岩		D H-16 3層中 No.216
	169	〃	〃	10.3	5.9	1.1	86	粘板岩		G G-7(3) 3
	170	〃	〃	(7.6)	6.6	1.2	73	?		D G-16-10 3層
	171	〃	〃	7.3	5.6	1.4	56	粘板岩		D H-15(6)a
	172	〃	〃	(10.4)	6.15	1.2	94	粘板岩		D J-16 3層 No.139
	173	〃	〃	11.2	4.0	1.1	63	緑色片岩		B 2層 一括
	174	〃	〃	11.4	6.7	0.8	80	粘板岩		D I-16 3層 No.115
92	175	〃	〃	12.0	7.1	1.75	174	安山岩		E C-16 No.12
	176	〃	〃	11.5	5.5	1.5	106	?		G G-8 Pit24
	177	〃	〃	10.4	5.4	1.1	82	輝石安山岩		G F-6(3) 3
	178	〃	〃	13.35	4.6	1.3	80	安山岩		G 2357
	179	〃	〃	13.0	6.8	1.4	134	粘板岩		D H-15 3層 583
93	180	〃	〃	11.9	6.2	1.5	140	粘板岩		G 3343
	181	〃	〃	(10.8)	7.0	1.9	200	安山岩		G H-18 3層 No.31
	182	〃	〃	(10.2)	7.1	1.2	108	粘板岩		D H-15 3層 No.566
	183	〃	〃	(10.0)	5.7	1.1	89	輝石安山岩		F SB10 No.2
	184	〃	〃	7.5	6.5	1.2	67	安山岩		G F-7(3) 2層 一括
94	185	〃	(Y字)	(6.2)	(6.6)	0.95	40	緑色片岩		B I-17.18 2層 一括
97	1	磨製石斧		2.8	5.7	1.8	206	粘板岩?		D SB-1 No.35
	2	〃		(10.5)	4.9	2.45	190	輝石安山岩		D G-16 No.404
	3	〃		12.55	4.8	2.4	218	緑色片岩		D G-16 3層中 NO.236
	4	〃		12.4	4.9	2.9	242	輝石安山岩		G 4005
	5	〃		(9.1)	5.4	3.25	264	蛇紋岩?		D H-16 3層 No.65
	6	〃		8.95	4.6	2.75	176	安山岩		G 1108
98	7	〃		(10.0)	5.6	2.2	226	粘板岩?		G 表採
	8	〃		10.6	4.8	2.85	224	安山岩?		B 2層 No.43
	9	〃		(9.4)	5.0	2.65	204	輝石安山岩		B I-17内T
	10	〃		(8.4)	5.5	2.95	218	輝石安山岩		F SB-1 No.61
	11	〃		6.45	5.6	2.8	136	安山岩		D H-15 3層 No.603
	12	〃		8.8	4.2	1.65	89	粘板岩?		G G-5(4) 3
	13	〃		9.7	2.8	1.8	80	蛇紋岩		D 6T
	14	〃		(11.1)	(4.0)	1.9	164	石墨石英片岩		C Pit-No.382

挿図	番号	器　種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	旧登録番号
99	15	磨製石斧	11.7	4.55	2.05	214	粘板岩?	F SB-1 No.15
	16	〃	14.9	5.9	3.2	380	輝石安山岩	E D-16 No.22
	17	〃	(6.2)	6.5	2.7	146	輝石安山岩	
	18	〃	13.7	3.5	2.0	134	輝石安山岩	D G-17 No.270
	19	〃	(14.9)	(6.1)	4.0	605	粘板岩	F 表採
	20	〃	6.15	2.7	1.6	38	蛇紋岩	G 437
102	1	石鏃	1.6	1.9	0.4	8	チャート	D SB-1 上層一括
	2	〃	2.25	1.95	0.3	14	チャート	F SB-08
	3	〃	1.25	1.55	0.3	3	チャート	B SB6 No.1
	4	〃	1.8	1.5	0.25	6	チャート	G 4260
	5	〃	1.75	1.7	0.4	6	チャート	B SB01 37
	6	〃	1.6	1.4	0.35	5	チャート	G E-7 20
	7	〃	1.4	1.3	0.3	3	黒曜石	F 表土ハギ清掃時
	8	〃	2.3	2.05	0.4	14	チャート	G H-7 Pt11
	9	〃	2.1	1.7	0.3	6	チャート	C SB5 12
	10	〃	1.2	1.3	0.3	5	黒曜石	C SB6 1
	11	〃	1.5	1.4	0.3	4	黒曜石	B 一括
	12	〃	1.65	1.95	0.3	7	黒曜石	D F-15 10T11
	13	〃	1.55	1.45	0.3	4	チャート	G G-8 13
	14	〃	1.35	1.5	0.3	4	黒曜石	B 2層 33
	15	〃	1.45	1.5	0.3	4	黒曜石	E 表土ハギ
	16	〃	1.1	1.5	0.3	3	黒曜石	C 6T内
	17	〃	1.32	1.35	0.2	2	チャート	G 2537
	18	〃	1.5	1.4	0.25	4	チャート	E D-16 23
	19	〃	2.2	2.0	0.4	12	黒曜石	D H-16 508
103	20	〃	1.6	1.4	0.5	8	黒曜石(安?)	G H-7(3)3
	21	〃	1.85	1.4	0.4	7	黒曜石	G G-7 3層 158
	22	〃	1.9	1.55	0.4	6	黒曜石	D G-16 3層 12
	23	〃	2.7	1.6	0.45	15	チャート	E D-16 3
	24	〃	2.25	1.8	0.5	19	チャート	H 2-3
	25	〃	1.7	1.1	0.45	6	チャート	B 2層 48
	26	〃	1.75	1.45	0.4	6	黒曜石	G 5号住居跡 8
	27	〃	1.7	1.2	0.4	7	チャート	D G-15(16) 3層
	28	〃	2.35	1.55	0.35	10	チャート	G H-7 Pt11
	29	〃	2.3	1.2	0.5	7	黒曜石	SB01 27
	30	〃	1.6	1.1	0.25	3	黒曜石	B 2T3層
	31	〃	2.9	1.8	0.7	33	チャート	G H-5 3層
	32	〃	2.8	2.15	0.45	17	チャート	E SB01 23
	33	〃	3.4	1.9	0.4	25	チャート	D H-16 514
	34	〃	1.2	1.5	0.3	7	黒曜石	D 7T 8
104	35	〃	1.6	1.15	0.25	3	黒曜石	D I-16 3層 60
	36	〃	1.95	1.6	0.5	14	黒曜石	G No.370
	37	〃	2.45	1.4	0.4	9	チャート	F N-4表土ハギ後清掃時
	38	〃	1.5	1.2	0.4	6	チャート	B No.65
	39	〃	1.7	1.4	0.4	5	黒曜石	E C-16 19
	40	〃	1.4	1.2	0.4	4	黒曜石	B 2層 17
	41	〃	2.35	1.6	0.4	13	安山岩?	G G-5(4) 3
	42	〃	2.7	1.65	0.5	19	黒曜石	F 表土ハギ清掃時
	43	〃	2.6	1.45	0.5	15	黒曜石	G 2354

出土遺物観察表

挿図	番号	器　種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	旧登録番号
104	44	石鏃	2.1	1.3	0.4	9	黒曜石	E D-17(B) 39
	45	〃	1.8	1.5	0.4	9	チャート	G 4015
	46	〃	1.9	1.4	0.35	8	安山岩	D H-16(10) 3層
	47	〃	2.1	1.2	0.4	7	黒曜石	G 1183
	48	〃	1.85	1.7	0.3	9	チャート	D I-16 3層 79
	49	〃	2.3	1.5	2.5	6	チャート	D F-15 10T 1
	50	〃	3.2	2.1	0.5	21	チャート	B 8T 5
	51	〃	1.7	1.4	0.3	5	チャート	G G-7 3層 157
	52	〃	1.7	1.75	0.35	5	黒曜石	G H-6(2-a) 2-3
105	53	〃	1.65	1.2	0.4	4	チャート	D H-16 No.429
	54	〃	2.35	1.6	0.5	10	チャート	B SB3 1
	55	〃	2.0	1.4	0.5	11	黒曜石	D F-15 一括
	56	〃	1.85	1.95	0.4	7	チャート	C L-11 3層上面
	57	〃	1.6	1.2	0.35	5	黒曜石	B 下段西
	58	〃	1.9	1.7	0.5	10	黒曜石	D G-17 188
	59	〃	2.6	1.45	0.3	5	黒曜石	D F-13-b 4層 6
	60	〃	1.55	1.4	0.35	6	チャート	G H-6 3層
	61	〃	1.9	1.45	0.3	6	黒曜石	E D-17(B) 24
	62	〃	2.0	1.35	0.35	6	チャート	K-13 4層
	63	〃	1.6	1.3	0.35	6	チャート	G 157
	64	〃	1.5	1.0	0.25	2	黒曜石	G E-7 20
	65	〃	2.0	1.45	0.4	9	黒曜石	D 3層 F-15 62
	66	〃	1.8	1.3	0.3	5	黒曜石	E C-15 3層
	67	〃	2.4	1.45	0.3	9	チャート	B 66
	68	〃	2.3	1.8	0.3	8	チャート	G No.656
	69	〃	2.0	1.5	0.3	6	安山岩	B SB01 12
	70	〃	2.6	1.75	0.4	11	チャート	C 1T 11
	71	〃	2.4	1.65	0.3	6	チャート	C SB5 2
	72	〃	2.6	1.3	0.3	8	チャート	E D-16 6
106	73	〃	2.55	1.35	0.4	6	チャート	G H-8(4-1)3
	74	〃	2.2	1.7	0.21	8	チャート	E D-16 21
	75	〃	1.5	1.4	0.3	6	チャート	D H-16 350
	76	〃	1.8	1.3	0.3	4	黒曜石	G F-10 2
	77	〃	2.2	1.55	0.35	9	チャート	E E-17
	78	〃	2.0	1.35	0.5	10	チャート	G G-7(2-a)
	79	〃	1.6	1.5	0.32	5	黒曜石	D アカホヤ直上 2~3層
	80	〃	1.8	1.5	0.3	7	黒曜石	D H-16(12) 3層
	81	〃	1.9	1.5	0.4	7	黒曜石	G
	82	〃	2.1	1.4	0.45	8	チャート	G 1881
	83	〃	2.0	1.4	0.3	6	チャート?	D 7T 266
	84	〃	2.6	1.7	0.45	12	チャート	B I-17内T 2
	85	〃	1.6	1.45	0.3	6	チャート	G G-5(1) 3
	86	〃	1.95	1.5	0.32	9	黒曜石	D G-15 3層 29
	87	〃	1.7	1.45	0.2	4	チャート	C SB5 11
	88	〃	2.3	1.4	0.3	8	チャート	D F-16 15
	89	〃	2.45	1.35	0.4	9	チャート	B 63
	90	〃	3.1	1.45	0.35	10	チャート	G 4205
	91	〃	2.0	1.3	0.4	8	チャート	C SK65 P1(→S)
	92	〃	1.6	1.4	0.3	6	黒曜石	G H-7(4) 3層 一括

挿図	番号	器　種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	旧登録番号
107	1	尖頭状石器	5.0	2.8	1.2	13.8	チャート	G G-8(4) 2層一括
	2	〃	3.0	2.0	0.7	3.6	チャート	G H-8(4) 3層
	3	石錐	3.9	2.2	0.7	5.2	チャート	G G-6(1)3
	4	〃	2.85	1.05	0.6	1.8	チャート	G H-7 Pt29
	5	〃	3.15	2.0	0.85	4.6	チャート	G G-5(3)3
	6	〃	2.55	1.4	0.5	1.2	安山岩	G G-7(2-a)
	7	〃	2.95	1.3	0.5	2.3	チャート	G G-7(1) 2層 一括
	8	〃	4.1	0.9	0.7	2.5	チャート	G G-6 全区 3層一括
	9	削器	5.9	2.05	0.5	5.5	黒曜石	G G-5(3) 3
	10	〃	(2.4)	(2.2)	0.55	15.0	黒曜石	D H-15 3層 s354
108	1	石匙	5.8	6.7	0.9	35.0	安山岩	G 3077
	2	〃	4.2	5.65	1.1	17.8	チャート	D 表採
	3	〃	2.4	3.9	0.5	3.5	チャート	D G-16 3層 s185
	4	〃	3.2	8.3	0.8	14.8	安山岩	E D-17 3層 s1001
111	1	砥石	22.0	(10.6)	6.6	2205	砂岩	B H-13 集石2 No.1
	2	〃	(7.8)	6.2	1.8	172	砂岩	G G-8(1) 51
	3	〃	8.0	6.5	2.7	178	砂岩	F SX-1 埋土内一括
	4	〃	(13.4)	13.0	4.8	1250	砂岩	B Pit50
	5	〃	(12.1)	3.7	1.5	134	砂岩	D G-16(2) No.64
	6	〃	9.5	3.9	3.0	194	天草砥石	G 654
	7	〃	(11.85)	5.4	3.5	460	砂岩	D 表採
	8	〃	9.1	10.2	4.2	220	砂岩	D F-17 No.50
	9	〃	11.3	9.5	2.7	553	砂岩	D H-16 No.432
112	1	石皿・台石	(15.4)	26.3	16.1	8958	安山岩	G G-10 最上層
	2	〃	(25.2)	(11.8)	6.2	2240	安山岩	D G-15 3層 No.154
	3	〃	(17.1)	13.9	6.7	24100	粘板岩?	G-16(17) s665
	4	〃	37.3	17.0	11.8	5482	砂岩?	G 2877 (石皿No.2)
113	5	〃	27.9	14.5	5.6	2810	安山岩	D G-16(17) s665
114	1	磨石・敲石	15.5	6.9	3.0	466	輝石安山岩	H 2-3層
	2	〃	13.6	9.7	4.9	912	輝石安山岩	G 3住 s8
	3	〃	16.8	5.6	3.3	404	輝石安山岩	G 3511
	4	〃	5.5	4.8	2.0	83	安山岩	D 7T No.69
	5	〃	6.5	6.0	2.9	167	安山岩	G G-7(4) 3
	6	〃	11.5	10.1	5.6	1020	?	G H-7(1-a)
	7	〃	22.7	5.3	4.0	870	安山岩	D H-15 3層 No.235
	8	〃	12.4	3.5	2.7	198	輝石安山岩	B 2層 一括
	9	〃	19.6	5.1	3.3	496	輝石安山岩	D G-16 3層 No.10
115	10	〃	14.6	12.6	7.0	1758	砂岩?	D H-15 No.494
	11	〃	16.1	12.2	6.1	1551	安山岩?	G H-8(4) 3
	12	〃	12.7	11.2	6.5	1402	安山岩?	D G-16 No.418
	13	〃	12.8	12.6	5.5	1251	?	B 3層上面検出一括
116	14	〃	9.9	9.6	7.5	975	砂岩?	G 4373
	15	〃	7.9	7.0	3.1	192	粘板岩?	D G-17 一括
	16	〃	11.5	8.0	5.6	720	粘板岩	B 2層 一括
	17	〃	11.7	7.7	4.9	630	砂岩	G 1899
	18	〃	12.0	8.5	5.5	810	輝石安山岩	E E-17(1) 3層

出土遺物観察表

挿図	番号	器　種	たて(cm)	よこ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	旧登録番号
116	19	磨石·敲石	11.2	8.2	4.4	560	粘板岩	B 2層 No.34
	20	〃	6.4	6.7	3.5	184	輝石安山岩	G G-7(4) 3
	21	〃	13.5	9.5	7.0	1260	安山岩	F SB-12 埋土内 No.11
117	22	〃	(9.0)	9.6	4.4	565	安山岩?	G 3533
	23	〃	11.7	7.1	4.6	660	安山岩?	F SB-1 No.23
	24	〃	9.7	6.5	7.0	745	?	G F-9 Pit21 s1
	25	〃	7.5	6.8	2.8	216	?	D G-17 3層上部一括
	26	〃	3.9	(7.75)	(3.9)	550	輝石安山岩	D H-17 No.69
	27	〃	6.4	5.1	2.7	132	安山岩?	D G-16(9) No.304
	28	〃	11.3	10.8	6.5	1150	安山岩?	F O-5 トレンチ9一括
	29	〃	9.8	8.9	5.0	620	輝石安山岩	G 3508
	30	〃	7.9	8.1	2.2	232	安山岩	E E-17 一括
118	31	〃	14.8	10.4	4.8	980	安山岩	D G-14 No.1
	32	〃	16.4	7.1	3.9	610	輝石安山岩	B SB-5 No.16
119	33	〃	11.2	8.4	3.4	448	安山岩?	D G-17 No.158
120	1	石錘	4.4	4.5	1.8	54	輝石安山岩	C 表採
	2	〃	4.6	7.5	(1.6)	56	安山岩?	G 2293
	3	〃	5.8	5.3	1.7	66	輝石安山岩	G 329
	4	〃	5.4	5.45	1.7	82	輝石安山岩	D 7T No.140
	5	〃	6.25	5.25	1.3	69	輝石安山岩	B 2層 一括
	6	〃	5.0	5.7	2.1	72	安山岩	D G-17 No.34
	7	〃	8.5	4.9	2.3	134	輝石安山岩	E C-16(1) 3層
	8	〃	4.75	5.7	1.9	73	輝石安山岩	D 表採
	9	〃	4.9	8.5	1.9	75	?	G H-7(2) 3
121	10	〃	5.5	8.25	2.1	122	輝石安山岩	H 2~3
	11	〃	5.65	8.8	2.6	168	安山岩	G H-8(4) 3
	12	〃	5.3	(9.9)	2.6	198	安山岩?	C SB-2 No.3
	13	〃	6.4	9.7	3.2	236	安山岩	G H-8(4) 3
	14	〃	7.9	12.35	2.9	330	輝石安山岩	G 2899
122	15	〃	6.45	7.5	(1.5)	91	輝石安山岩	G 1223
	16	〃	7.0	6.6	1.7	104	輝石安山岩	D I-16 3層 No.133
	17	〃	11.1	5.4	2.6	222	輝石安山岩	G H-8(4) 3
	18	〃	6.0	7.0	1.5	88	?	D F-17 No.54
	19	〃	7.2	9.5	2.7	222	片岩?	G 679
123	20	〃	8.1	6.45	3.1	238	安山岩?	G 2913
	21	〃	6.9	9.0	2.1	180	?	G 2829
	22	〃	7.0	6.7	1.8	110	輝石安山岩	G 1209
	23	〃	7.9	8.7	2.2	210	輝石安山岩	G 415
	24	〃	5.9	9.8	2.2	174	輝石安山岩	G H-8(4) 3
124	1	石製装身具	—	—	—	3	蛇紋岩	G G-7(3-1)3
	2	〃	(2.35)	1.65	0.8	3	軟玉	C
	3	〃	3.1	1.4	0.5	3	?	表採
	4	〃	1.6	0.8	0.8	1	硬玉	C 6T
125	1	不明石製品	6.1	(5.1)	1.1	(34)	粘板岩	B 2層 No.41
	2	〃	5.3	4.95	0.6	(16)	緑色片岩	G 2·3層表土ハギ
126	1	石刃	—	—	—	168	?	D G-15 3層 No.28

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	最大胴部(cm)	底径(cm)	色　調	胎　土	焼成	旧登録番号	備　考
146	1	1号住	(25.0)	—	(26.2)	—	(内)小麦色 (外)黄土~枯葉色	砂粒・角閃石	普通	B SB1 50,74,92,93 79ベルト一括	
	2	〃	(27.7)	—	—	—	砂粒・角閃石	普通	B SB1	4,5,7,8	煤付着
	3	〃	—	—	—	—	褐色	砂粒・小石・雲母	やや良	B SB1 61	
	4	〃	—	—	—	—	黄褐色~暗褐色	小石・長石	やや良	B SB1 33	
	5	〃	—	—	—	—	(内)茶褐色 (外)黒褐色	砂粒・小石・角閃石	やや良	B SB1 45	
	6	〃	—	—	—	—	(内)暗褐色 (外)黒褐色	砂粒・金雲母	やや良	B SB1	
	7	〃	—	—	—	—	(内)暗褐色 (外)黒褐色	砂粒・金雲母	やや良	B SB1	
	8	〃	—	—	—	(8.8)	橙色	砂粒・角閃石	やや良	B SB1 110一括	
	9	〃	—	—	(9.7)	—	黄土色	砂粒・赤褐色砂粒	良	B SB1 24	
	10	〃	—	—	(7.0)	—		砂粒・角閃石		B SB1 73一括	
	11	〃	—	—	—	—	茶褐色	角閃石	やや良	B SB1 63	
147	12	〃	(12.4)	—	—	—	黄丹	砂粒・雲母	良	B SB1 74,77,98,122 B SB1 一括	
	13	〃	14.0	20.5	(17.6)	—	茶褐色	砂粒	普通	B SB1 69	
	4	〃	(12.6)	—	(14.9)	—	樺色	砂粒・角閃石	良	B SB1 13,16	
	15	〃	(15.6)	—	23.3	—	(内)琥珀色 (外)黄土色~琥珀色	砂粒・角閃石	良	B SB1 73,74,77,83, 86	
	16	〃	—	—	—	—	赤褐色	砂粒	良	B SB1	
	17	〃	—	—	—	(5.1)	焦茶	砂粒	良	B SB1 一括	
	18	〃	—	—	—	(6.2)	茶褐色	角閃石	やや不良	B SB1 一括	
	19	〃	—	—	—	7.3	茶褐色	砂粒・小石	不良	B SB1 11	
	20	〃	—	—	—	(7.0)	赤褐色	砂粒・角閃石	やや不良	B SB1 71	
	21	〃	—	—	—	—	淡褐色	砂粒・角閃石	やや不良	B SB1 18	
	22	〃	—	—	—	—	茶褐色~黒褐色	砂粒	やや良	B SB1 80	
	23	2号住	—	—	—	—	黄橙色	小石・金雲母	良	B SB2 2	
	24	〃	(23.0)	—	(22.8)	—	赤褐色~茶褐色	砂粒	良	B SB2 4,一括	
148	25	3号住	26.6	17.5	—	7.1	暗褐色	砂粒	やや良	B SB5 25	
	26	〃	(27.2)	—	—	—	黄褐色	砂粒・角閃石	良	B SB5 9,48,54	煤付着
	27	〃	23.4	—	—	—	褐色	雲母・角閃石・砂粒	良	B SB5	黒斑,煤付着
149	28	〃	30.1	35.9	—	6.5	茶褐色	砂粒	普通	B SB5 45,46	煤付着
	29	〃	—	—	(29.7)	—	白橙色	砂粒・小石	普通	B SB5 19,28,29,31,41	
	30	〃	—	—	—	—	茶褐色	角閃石・石英	やや良	B SB5 25	煤付着
	31	〃	—	—	—	—	(内)淡褐色 (外)灰褐色	小石	やや良	B SB5 13	
	32	〃	—	—	—	—	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良	B SB5 一括	
	33	〃	—	—	—	—	小麦色	砂粒・角閃石・赤褐色粒	普通	B SB5 1,6,一括	
	34	〃	12.4	14.0	15.6	—	赤褐色	砂粒	良	B SB5 一括	
150	35	〃	(23.8)	—	(29.3)	—	小麦色~焦茶色	砂粒	良	B SB5 20,21,26,28, 30,50,一括	
	36	〃	25.3	31.0	24.4	3.2	赤褐色	砂粒・角閃石	良	B SB5 26,27,28,29, 43,64	煤付着
	37	〃	—	—	—	—	褐色	砂粒・角閃石	やや良	B SB5 14	
	38	〃	—	—	—	—	淡赤褐色	砂粒	良	B SB5 11	
	39	〃	—	—	(14.8)	—	灰褐色	砂粒	良	B SB5 7	
	40	〃	—	—	—	—	黄橙色	砂粒・角閃石	不良	B SB5 8,9	
	41	〃	—	—	—	(7.2)	淡褐色	角閃石・砂粒	良	B SB5 4	煤付着

出土遺物観察表

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	最大胴部(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	旧登録番号	備考
150	42	〃	—	—	—	6.8	褐色	砂粒・角閃石	やや良	B SB5 52	
151	43	〃	—	—	—	—	淡茶褐色	砂粒多・角閃石	やや良	B SB5	
	44	〃	—	—	—	—	(内)黄橙色 (外)暗茶褐色	砂粒	良	B SB5	
	45	4号住	30.0	34.5	—	—	(内)黄丹~柿色 (外)小麦~焦茶色	砂粒・赤色砂粒 角閃石	良	B SB6 3~8,11,12, 一括,ベルト 28	
	46	〃	—	—	—	—	茶褐色	砂粒・角閃石	やや良	B SB6 24	
	47	〃	20.9	16.4~17.2	—	13.2		砂粒・赤褐色粒・角閃石	良	B SB6 1,12,14	黒斑
152	48	5号住	(34.7)	—	—	—	(内)琥珀色 (外)焦茶色	砂粒・角閃石	普通	E SB4 6,8,一括	
	49	〃	—	—	—	—	茶褐色~焦茶	砂粒・赤褐色粒・角閃石	普通	E SB4 55,57	黒斑
	50	〃	(30.6)	(37.0)	—	—	黄褐色~焦茶色	砂粒・角閃石・赤褐色粒	良	E SB4 23,42,44,91, 98,一括	
	51	〃	—	—	—	—	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良	E SB4 30	煤付着
	52	〃	—	—	—	—	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良	E SB4 24	煤付着
	53	〃	—	—	—	—	(内)淡褐色 (外)赤褐色	長石	やや良	E SB4 13 一括	煤付着
	54	〃	—	—	—	—	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良	E SB4 21	煤付着
	55	〃	—	—	—	—	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良	E SB4 59	煤付着
	56	〃	—	—	—	—	(内)黄褐~黒褐色 (外)茶褐色	長石・砂粒	やや良	E SB4 77	
153	57	〃	(25.8)	—	—	—	黄褐色	砂粒・角閃石	良	E SB4 20,一括	黒斑
	58	〃	14.5	—	—	—	橙色	砂粒	普通	E SB4 84,85,87~89	
	59	〃	—	—	—	—	柿色	砂粒・赤褐色粒	良	E SB4 99	煤付着
	60	〃	—	—	—	—	(内)黄丹 (外)小麦色~焦茶色	砂粒・角閃石	良	E SB4 38,40,66,一括 E SB4	煤付着
	61	〃	—	—	—	—	黄褐色	角閃石・砂粒	やや良	E SB4 7	
	62	〃	—	—	—	—	茶褐色	角閃石・砂粒	やや不良	E SB4 一括	
	63	〃	—	—	—	—	淡褐色	雲母・小石	やや良	E SB4 一括	
	64	〃	—	—	—	—	琥珀~煉瓦色	砂粒・角閃石・雲母	良	E SB4 一括	
	65	〃	—	—	—	(11.8)	茶褐色	砂粒	やや良	E SB4 98	
	66	〃	—	—	—	—	茶褐色	角閃石・石英	良	E SB4 31	
	67	〃	—	—	—	—	赤褐色	金雲母・砂粒	やや良	E SB4 109	
	68	〃	—	—	—	(6.7)	淡褐色	角閃石・砂粒	やや不良	E SB4 5	
154	69	〃	—	—	—	—	小麦色~鳶色	砂粒・角閃石・赤褐色粒	良	E SB4 一括	
	70	〃	—	—	—	—	小麦色	砂粒・角閃石・赤褐色粒	普通	E SB4 48,一括	
	71	〃	—	—	—	(5.4)	(内)淡褐色 (外)淡赤褐色	砂粒・雲母・長石 金雲母・砂粒	不良	E SB4 4	
	72	〃	—	—	—	(7.0)	黄褐色	角閃石・石英・金雲母	やや良	E SB4 41	
	73	〃	—	—	—	(5.5)	茶褐色	砂粒	やや不良	E SB4 一括	煤付着
	74	〃	—	—	—	—	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良	E SB4 29	
155	75	6号住	—	—	—	—	黄褐色	砂粒・角閃石	やや良	D SB1 76,84	黒斑
	76	〃	(23.9)	—	—	—	黄褐色	砂粒・雲母・角閃石	普通	D SB1 16,36~40,42, 52,57,一括	
	77	〃	—	—	—	(8.4)	淡赤褐色	砂粒	やや良	D SB1 73,74	
	78	〃	—	—	—	—	茶褐色	砂粒	〃	D SB1 93	
	79	8号住	—	—	—	—	淡褐色	砂粒	やや良	C SB3 4	
	80	〃	—	—	—	—	赤褐色	小石	不良	C SB3 一括	
	81	9号住	—	—	—	—	赤褐色	小石	不良	C SB2 一括	
	82	〃	—	—	—	—	赤茶褐色	砂粒	やや良	C SB2 一括	

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	最大胴部(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	旧登録番号	備考
155	83	〃	—	—	—	—	茶褐色	砂粒	不良	C SB2 6	
	84	〃	(12.0)	(5.1)	—	—	灰色	砂粒	良	C SB2 5,10 一括	
	85	〃	(21.0)	—	—	—	灰褐色	砂粒	良	C SB2 7	
	86	10号住	(26.4)	—	(27.4)	—	小麦色	砂粒	良	C SK55	
	87	〃	—	—	—	—	淡褐色	角閃石・石英・赤茶粒	やや良	C SK55 8	
	88	〃	—	—	—	—	灰色	砂粒・小石	良	C SK55 6	
	89	〃	—	—	—	—	茶褐色	砂粒	やや良	C SK55 8	
	90	〃	—	—	—	—	褐色	砂粒	やや良	C SK55 1	
156	91	11号住	—	—	—	—	小麦色	砂粒・赤褐色粒	普通	C SB6 12,17,一括	煤付着,黒斑
	92	〃	—	—	—	—	褐色	砂粒	やや良	C SB6 一括	赤色塗料
	93	〃	—	—	—	—	明茶褐色	砂粒	不良	C SB6 3	
	94	〃	—	—	—	—	褐色	砂粒	やや良	C SB6 6,14	
	95	〃	—	—	—	—	明茶褐色-暗褐色	砂粒・角閃石	やや良	C SB6 7,9	
	96	12号住	—	—	—	—	赤褐色	砂粒	やや不良	C SB1 1	
	97	〃	—	—	—	20.9	黄褐色	砂粒・角閃石	普通	C SB1	煤付着
	98	〃	—	—	—	—	濃灰色	砂粒	やや良	C SB1 1	
	99	〃	(13.0)	—	—	—	灰色	微細砂粒	良	C SB1 3	
	100	〃	—	—	—	—	淡赤褐色	砂粒	やや良	C SB1 4,9	
	101	14号住	(13.7)	—	—	—	淡赤褐色	粗砂粒・角閃石	〃	F SB12 24	
	102	〃	(14.85)	—	—	—	茶褐色	粗砂粒・雲母	〃	F SB12 19	
	103	〃	—	—	(15.4)	—	茶褐色	細砂粒	やや良	F SB12 16	煤付着
	104	〃	—	—	—	—	黄褐色	砂粒	やや良	F SB12 一括	
	105	〃	—	—	—	—	(内)褐色 (外)濃褐色	砂粒	不良	F SB12 一括	
	106	〃	(20.8)	—	—	—	淡褐色	小石・長石・雲母・金雲母	やや不良	F SB12 8,一括	
	107	〃	(18.6)	—	—	—	赤褐色	角閃石	やや良	F SB12 2	煤付着
	108	〃	—	—	—	(12.0)	茶褐色	細砂粒	やや良	F SB12 15	
	109	〃	—	—	—	—	茶褐色	石英・砂粒	やや良	F SB12 23	
	110	〃	—	—	—	—	淡褐色	角閃石・石英	やや良	F SB12 28	
	111	〃	16.6	2.4	—	—	淡灰色	砂粒少	やや良	F SB12 1	
	112	〃	(13.1)	—	—	—	淡灰色	砂粒少	やや良	F SB12	
157	113	15号住	12.4	—	—	—	赤褐色	砂粒多・角閃石	不良	F SB7	
	114	〃	(12.3)	—	—	—	赤褐色	石英・砂粒	やや良	F SB7	煤付着
	115	〃	(11.8)	—	(20.0)	—	黄褐色	砂粒	やや良	F SB7	76.96
	116	〃	—	—	—	—	茶褐色	砂粒	やや良	F SB7	94
	117	〃	—	—	—	—	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良	F SB7	31
	118	〃	—	—	—	—	(内)淡褐色 (外)暗褐色	砂粒・角閃石	やや良	F SB7	
	119	〃	—	—	—	—	赤褐色	角閃石・砂粒	やや良	F SB7 54	煤付着
	120	〃	—	—	(9.5)	—	暗灰色	砂粒	普通	F SB7 一括	
	121	〃	(8.3)	(5.3)	—	(5.4)	淡褐色	砂粒	やや良	F SB7 86	
	122	〃	(13.4)	5.4	—	—	茶褐色	砂粒	良	F SB7 一括	
	123	〃	—	—	—	—	黄褐色	砂粒・角閃石・黒雲母	普通	F SB7	赤色塗料
	124	〃	—	—	—	—	赤褐色	砂粒	やや良	F SB7 一括	
	125	〃	—	—	—	—	茶褐色	砂粒	やや良	F SB7 72	
	126	〃	—	—	—	(7.2)	茶褐色	砂粒少	やや良	F SB7 一括	
	127	〃	—	—	—	5.8	(内)暗茶褐色 (外)明茶褐色	砂粒	やや良	F SB7 75 F SB7	

出土遺物観察表

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	最大胴部(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	旧登録番号	備考
157	128	〃	—	—	—	4.0	(内)黄褐色 (外)黄橙色	砂粒	やや良	F SB7 73	
	129	〃	—	—	—	(5.5)	茶褐色	砂粒・金雲母	不良	F SB7 49	
	130	〃	—	—	—	(5.2)	黄褐色~煉瓦色	砂粒・小石	やや良	F SB7 一括	煤付着
	131	〃	—	—	—	5.0	赤褐色	石英・砂粒	やや不良	F SB7 20	
158	132	16号住	—	—	—	—	茶褐色	砂粒・小石	やや良	F SB6	
	133	〃	—	—	—	—	暗茶褐色	砂粒・雲母	やや不良	F SB6	
	134	〃	—	—	—	—	暗茶褐色	砂粒・小石	やや良	F SB6	
	135	〃	(16.2)	6.7	—	—	赤褐色	角閃石・石英・砂粒	やや良	F SB6 52	煤付着
	136	〃	—	—	—	(6.0)	赤褐色	砂粒	不良	F SB6 40	
	137	〃	—	—	—	7.2	赤褐色	角閃石・粗砂粒	やや良	F SB6 31	
	138	〃	—	—	—	(6.6)	茶色	砂粒	不良	F SB6 55	
	139	〃	—	—	—	4.1	黄褐色	角閃石・砂粒	やや良	F SB6 75	
	140	17号住	—	—	—	—	赤褐色	角閃石・砂粒	やや良	F SB5 一括	
	141	〃	—	—	—	—	淡茶褐色	砂粒・小石	やや良	F SB5 37	
	142	〃	—	—	—	—	赤褐色	角閃石・砂粒	やや良	F SB5 一括	
	143	〃	—	—	—	—	赤褐色	砂粒	やや良	F SB5 一括	
	144	〃	—	—	—	—	淡褐色	角閃石・砂粒	やや不良	F SB5 一括	
	145	〃	—	—	—	—	(内)黒褐色 (外)茶褐色	砂粒	やや良	F SB5 20	
	146	〃	—	—	—	—	灰色	砂粒	やや良	F SB5	
	147	〃	—	—	(9.6)	—	暗灰色	砂粒	普通	F SB5 12	
	148	18号住	—	—	—	—	(内)茶褐色 (外)褐色	砂粒	不良	F SB10 6	
	149	〃	16.2	—	—	—	暗茶褐色	砂粒	やや良	F SB10 一括	
	150	〃	—	—	—	—	赤褐色	砂粒	不良	F SB10 28	
	151	19号住	—	—	—	—	茶褐色	砂粒	やや良	F SB14	
	152	〃	—	—	(29.6)	—	暗褐色	砂粒・小石	やや良	F SB14 13	
	153	〃	(22.2)	—	—	—	褐色	砂粒	やや良	F SB14 12	
	154	〃	—	—	—	—	(内)黒褐色 (外)枯葉色	砂粒・角閃石	普通	F SB14	黒斑
	155	〃	—	—	—	5.2	枯葉色~焦茶色	砂粒・白色砂粒・角閃石	普通	F SB14	
159	156	20号住					黒褐色	砂粒・黒雲母・角閃石	普通	F SB13	
	157	〃	(16.6)	(7.0)	—	—	赤褐色	砂粒	不良	F SB13 1,2	
	158	21号住	—	—	—	(7.2)	暗褐色一部茶褐色	砂粒・小石・黒雲母	やや良	F SB9 10	
	159	〃	—	—	—	—	茶褐色	粗砂粒・角閃石	やや良	F SB9 1	煤付着
	160	22号住	—	—	—	—	(内)明茶褐色 (外)明褐色	砂粒	不良	F SB1 136	
	161	〃	—	—	—	—	(内)濃茶褐色 (外)褐色	砂粒	不良	F SB1 74	
	162	〃	—	—	—	—	茶褐色	粗砂粒	やや良	F SB1 54	
	163	〃	—	—	—	—	茶褐色	砂粒	やや良	F SB1 一括	煤付着
	164	〃	—	—	(9.8)	—	(内)灰汁色 (外)暗灰色	砂粒	普通	F SB1 ベルト内一括	
	165	〃	—	—	—	5.1	淡茶褐色	砂粒多・黒雲母	普通	F SB1 178	
	166	〃	—	—	—	—	淡茶褐色	砂粒多・小石	普通	F SB1 63	
	167	23号住	—	—	—	(6.0)	茶褐色	砂粒・角閃石	不良	F SB3 178	
	168	〃	—	—	—	—	濃灰色	砂粒	やや良	F SB3 一括	
	169	24号住	—	—	—	—	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良	F SB4 52	
	170	〃	—	—	—	—	黄橙色	砂粒・角閃石・黒雲母	普通	F SB4	

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	最大胴部(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	旧登録番号	備考
159	171	〃	—	—	—	—	黄褐色	砂粒・角閃石	普通	F SB4 61	煤付着
	172	〃	—	—	—	(4.0)	茶褐色	角閃石・石英・砂粒	やや良	F SB4 35	
160	173	25号住	(17.4)	—	(30.2)	—	赤褐色	砂粒・雲母	普通	G SB2 7,8	煤付着,黒斑
	174	〃	—	—	—	—	淡褐色	砂粒	やや良	G SB2 11	煤付着
	175	〃	—	—	—	—	淡褐色	砂粒	やや良	G SB2 一括	煤付着
	176	〃	—	—	—	—	茶褐色	砂粒	やや良	G SB2 一括	煤付着
	177	〃	—	—	—	—	黄褐色	砂粒・角閃石・赤褐色小石	普通	G SB2 No11,一括	黒斑
	178	〃	—	—	—	3.1	茶褐色	砂粒	やや良	G SB2 1	
	179	〃	—	—	—	—	赤褐色	砂粒・小石	やや良	G SB2 7	
	180	〃	—	—	—	—	黄橙色	砂粒	やや良	G SB2 3	
	181	〃	(21.3)	—	—	—	白橙色	砂粒・角閃石	良	G SB2 16一括	
	182	〃	22.4	—	—	—	淡褐色	砂粒	普通	G SB2 11,17,一括	黒斑
	183	〃	—	—	—	—	淡褐色	砂粒・黒雲母	やや良	G SB2 6	煤付着
161	184	〃	(29.9)	—	—	—	黄褐色	砂粒・角閃石・小石	普通	G SB2 2	
	185	27号住	22.2	17.4	—	10.6	黄褐色	砂粒・角閃石	良	G SB5	
	186		—	—	—	7.6	黄丹色	砂粒・角閃石	普通	F O-5 一括	
	187	2号土坑	(19.8)	—	—	—	淡褐色	砂粒	やや良	B SX1 4,5	
	188	〃	(20.0)	(21.7)	—	—	枯葉色	砂粒・角閃石	良	B SX1 2	煤付着,黒斑
	189	1号土坑	(22.5)	(11.5-11.8)	—	(9.75)	淡褐色	砂粒	普通	B SK8 1	
162	190	3号土坑	(19.0)	—	(23.8)	—	黄褐色-焦茶色	砂粒	良	C SK24 1,一括	煤付着,黒斑
	191	〃	13.2	7.2	—	—	橙色-赤色	砂粒	良	C SK24 2	
	192		—	—	(23.4)	—	樺色	砂粒・角閃石	良	D F-16 1	煤付着,黒斑
	193		—	—	—	—	淡茶褐色	砂粒	やや良	B I-17 一括	
	194		—	—	—	—	茶褐色	粗砂粒	やや良	G-15 34	煤付着
	195		—	—	—	—	黄褐色	細砂粒	やや良	G-8,9 15	煤付着
	196		—	—	—	—	淡茶褐色	砂粒	やや良	G-2 表土ハギ	
	197		—	—	—	—	淡褐色	砂粒・角閃石	良	G 1811	
	198		—	—	—	—	枯葉色	砂粒	良	D	
	199		—	—	—	—	黄褐色	砂粒	普通	B I-17,18 2層一括	
	200		—	—	—	19.0	淡黄褐色	砂粒・微細雲母	普通	G-4(2)	
	201		—	—	—	(4.5)	淡褐色	粗砂粒	やや不良	G 523	煤付着
	202		13.2	3.9	—	—	濃灰色	砂粒・小石	良	F 埋土内一括	

出土遺物観察表

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
175	1	4号土坑	13.4	4.4	6.5	明黄橙色	砂粒・赤茶粒	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り後ナデ	B SB4 9	
	2	〃	—	—	6.4	灰褐色	砂粒多	やや良	(外)ナデ (底)ヘラ切り後ナデ	B SB4 一括,54	
	3	〃	(13.3)	4.45	6.6	淡茶褐色	砂粒多	やや良	(外)ナデ	B SB4 一括	
	4	〃	(12.8)	—	—	黄橙色	砂粒多	やや良	(外)ナデ	B SB4 一括	
	5	〃	(13.2)	5.0	5.5	明黄橙色	砂粒・赤茶粒	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り	B SB4 14	
	6	〃	13.6	4.9	6.2	黄橙色	赤茶粒	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り・板圧痕	B SB4 一括	
	7	〃	(12.8)	—	—	褐色	砂粒多	やや良	ナデ	B SB4 一括	
	8	〃	(13.9)	(5.4)	(5.3)	淡茶褐色	砂粒少	やや良	(内)丁寧なナデ (外)ナデ	B SB4 一括	
	9	〃	14.3	(5.2)	(5.4)	黄橙色	砂粒少	やや良	(内・外)ナデ	B SB4 一括	
	10	〃	(15.1)	(5.7)	(7.2)	明褐色	赤茶粒	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り	B SB4 一括	
	11	〃	—	—	6.3	褐色	砂粒少	やや良	(外)ナデ (底)ヘラ切り	B SB4 一括	
	12	〃	(13.2)	(4.6)	—	淡褐色	砂粒多	やや良	ナデ		
	13	〃	(12.8)	—	—	茶褐色	砂粒多・赤茶色粒	やや良	ナデ	B SB4 一括	
	14	〃	13.1	—	—	橙色	砂粒多	やや良			
	15	〃	(12.8)	(4.8)	(6.2)	褐色	砂粒・粗	やや良		B SB4 一括	
	16	〃	(13.2)	4.7	5.5	淡茶褐色	砂粒多	やや良	(外)ナデ	B SB4 一括	
	17	〃	(12.3)	(5.6)	(6.8)	淡褐色	砂粒少・金雲母	やや良	ナデ	B SB4 15	
	18	〃	13.0	5.5	6.2	明褐色	砂粒	良	(外)ナデ	B SB4 一括	
	19	〃	(13.4)	6.0	(7.0)	淡褐色	長石	やや不良	(底)ヘラ切り後ナデ		
	20	〃	14.6	7.4	7.1	淡赤橙色	砂粒少	やや良	ナデ	B SB4 21	煤付着
	21	〃	14.5	6.65	7.8	黄褐色	赤茶色粒	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り後ナデ	B SB4 16	
	22	〃	15.1	—	—	黄褐色	砂粒少	良		B SB4	
	23	〃	14.1	6.1	8.1	白橙色	砂粒・赤茶粒	良	(内)ナデ ロクロ整形	B SB4 一括	
	24	〃	—	—	(7.2)	白っぽい褐色	砂粒	良		B SB4 29	
	25	〃	—	—	—	橙色	砂粒少	やや良	(外)ナデ	B SB4 一括	
	26	〃	—	—	(8.1)	褐色	砂粒少・金雲母	やや良	ナデ	B SB4 一括	
	27	〃	—	—	7.3	橙色	細砂粒・赤茶粒	やや良		B SB4 一括	
	28	〃	—	—	(8.5)	淡褐色	細砂粒	やや良	(底)回転ヘラ切り	B SB4 一括	
	29	〃	—	—	—	(内)黒色 (外)淡褐色	砂粒多	やや良	ナデ	B SB4 一括	黒色土器
	30	〃	—	—	8.7	淡褐色	細砂粒	やや良	(底)回転ヘラ切り	B SB4 13	
	31	〃	—	—	—	明褐色	砂粒少	やや良	ナデ一括 (底)ヘラ切り後・ナデ	B SB4	
	32	〃	—	—	(8.2)	黄橙色	砂粒・粗	やや良		B SB4 56	
	33	〃	—	—	(8.0)	淡黄橙色	砂粒・やや粗	やや不良		B SB4 一括	
176	34	〃	27.0	—	—	黄橙色-小麦色	砂粒・角閃石	良	(内)ヘラ削り (外)ハケメ・タタキ後ナデ	B SB4 3,4	煤付着
	35	〃	27.4	—	—	黄橙色-小麦色	砂粒・角閃石	良	(内)削り (外)横ナデ・ハケメ	B SB4 一括,38 B 42,45,51	(内・外)黒斑
	36	〃	—	—	—	小麦色	砂粒・赤褐色粒 角閃石	普通	(内)横ナデ・細工具痕 (外)横ナデ	B SB4 40,47,49	

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
176	37	〃	—	—	8.2	黄橙色	砂粒・やや粗	良		B SB4 一括	
	38	〃	—	—	8.5	黄褐色	細砂粒	やや良		B SB4 一括	(内)煤付着
	39	〃	—	—	8.2	淡褐色	細砂粒	やや良		B SB4 24	
	40	〃	—	—	8.6	明淡褐色	細砂粒	やや不良		B SB4 一括	
	41	〃	—	—	7.8	淡褐色	砂粒	やや良		B SB4 一括	
	42	〃	—	—	9.6	黄橙色	砂粒	やや良	(内・外)ナデ	B SB4 一括	
	43	〃	—	—	9.7	黄褐色	細砂粒	やや良		B SB4 30	
	44	〃	—	—	9.4	淡褐色	砂粒	やや良		B SB4 57	
	45	〃	—	—	(9.0)	灰白色	細砂粒	良		B SB4 一括	須恵器
	46	〃	—	—	(6.4)	黄褐色	細砂粒	やや良		B SB4 4	(外)煤付着
	47	5号土坑	(14.1)	—	—	黄橙色	砂粒・粗	やや良		B SK13 2,6	
	48	〃	—	—	—	黄橙色	小石・砂粒・粗	やや不良		B SK13 一括	
	49	〃	—	—	—	橙色	砂粒・赤茶粒	やや良		B SK13 一括	
	50	〃	—	—	7.6	褐色 (内底)黄橙色	細砂粒	やや良	ナデ	B SK13 1	
	51	6号土坑	(13.5)	(5.0)	—	淡褐色	砂粒少	良		B SK12 12 28 一括	
	52	〃	12.5-13.6	(6.2)	—	淡褐色	砂粒少	良		B SK12 27	
	53	〃	—	—	—	白っぽい淡褐色	砂粒少	やや良		B SK12	
	54	〃	—	—	(6.2)	明褐色	砂粒少	やや良	ナデ	B SK12 一括	
	55	〃	—	—	(6.5)	淡褐色	砂粒少・小石	不良	ナデ	B SK12 埋土ﾍﾞﾙﾄ内一括	
	56	〃	—	—	(8.4)	茶褐色	細砂粒	やや良		B SK12 一括,28	
	57	〃	—	—	(9.0)	淡褐色	細砂粒	やや良		B SK12 一括	
	58	〃	—	—	8.0	黄橙色	砂粒多	やや良	ナデ	B SK12 25	
	59	〃	—	—	(8.2)	淡褐色	砂粒	やや良		B SK12 一括	
	60	〃	—	—	7.8	黄橙色	砂粒粗	やや不良		B SK12 26,埋土ﾍﾞﾙﾄ内一括	
177	61	7号土坑	(13.6)	4.9	7.8	黄橙色	赤茶粒	やや良	(内・外)ナデ ロクロ整形	B SK14 4,5,23	
	62	〃	14.0	4.8	7.0	淡黄橙色	砂粒少	良	(内・外)ナデ	B SK14 7	
	63	〃	(12.8)	4.9	(7.1)	(内)橙色・黒灰色 (外)橙色	赤茶粒・砂粒	良	ロクロ整形後ナデ	B SK14 5,6	
	64	〃	13.4	4.8	7.1	赤橙色	赤茶粒・砂粒	良	横ナデ	B SK14 1,8,24	
	65	〃	13.3	4.9	7.1	黄褐色	砂粒	良	ナデ	B SK14	
	66	〃	—	—	5.9	黄橙色-灰色	砂粒・粗	やや良	(底)ヘラ切り後ナデ	B SK14 13	
	67	〃	12.7	5.05	(7.0)	橙色	赤茶粒	良	(内)ナデ,ロクロ整形	B SK14 9	
	68	〃	(14.3)	6.1	(8.8)	橙色	赤茶粒	良	(内)ナデ,ロクロ整形	B SK14 一括,3	
	69	8号土坑	—	—	6.6	黄褐色	細砂粒	やや良	ナデ	B SK23 1	
	70	〃	(14.0)	—	—	淡茶褐色	〃	不良	(外)ナデ	B SK23 5	
	71	〃	(14.5)	—	—	茶褐色	細砂粒	やや良		B SK23 2,3	
178	72	10号土坑	27.6	25.4	—	淡黄褐色	砂粒	良	(内)ヘラ削り (外)ハケメ・横ナデ	B SK1	
	73	〃	18.2	—	—	灰褐色-鉛色	砂粒・小石	良	(内・外)タタキ後ナデ	B SK1 部分的に自然釉	
	74	11号土坑	27.0	—	—	(内)黄橙色-焦茶色 (外)黄橙色-琥珀色	砂粒・赤褐色粒・角閃石	良	(内)ヘラ削り (外)ハケメ	B SK19	
	75	〃	11.5	4.1-4.4	6.8	淡黄褐色	砂粒少	やや良	(内・外)ナデ	B SK19 1	
	76	〃	(12.6)	(3.8)	(6.8)	褐色	砂粒多	やや良	(内・外)ナデ	B SK19 15	
	77	〃	(13.4)	(4.6)	(7.0)	黄白色	砂粒多	不良	ナデ	B SK19 19	
	78	〃	(14.3)	(4.1)	—	黄橙色	砂粒多	やや良	(内・外)ナデ	B SK19 26	
	79	〃	12.5	4.5	6.3	淡赤橙色	砂粒少・小石少	やや不良	(外)横ナデ (底)ヘラ切り	B SK19 8	
	80	〃	13.0	4.6	6.7	淡黄灰色	砂粒・やや密	良		B SK19 22	

出土遺物観察表

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
178	81	〃	(12.5)	(4.8)	6.9	淡灰色	雲母	良	(内)ナデ	B SK19 9	
	82	〃	(14.6)	5.8	7.0~7.5	白橙色	赤茶粒・砂粒	良	(内)ナデ (外)ロクロ整形後ナデ	B SK19 23	
	83	〃	(13.6)	(6.0)	(7.2)	黄橙色	砂粒多	やや良	(内・外)ナデ	B SK19 6,21	
	84	〃	(14.7)	—	—	(内)黒色 (外)淡灰褐色~灰褐色	砂粒粗	やや良		B SK19	
179	85	12号土坑	(27.4)	—	—	(内)淡黄褐色~ (外)淡褐色~	微砂粒・小石 角閃石	良	(内)ヘラ削り (外)横ナデ	B SK3 11	
	86	〃	—	—	—	淡黄褐色	砂粒・角閃石	良	(内)削り・ナデ (外)平行ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ後ハケメ	B SK3 17,18	煤付着
	87	〃	(14.8)	(6.0)	(7.8)	淡黄橙色	砂粒多・小石少	不良	ナデ	B SK3 7	
	88	13号土坑	(28.2)	—	—	淡褐色	砂粒	普通	(内)削り後ナデ (外)ナデ	B SK11	
	89	〃	—	—	(7.9)	黄橙色	砂粒粗	やや良	(底)回転ヘラ切り	B SK11 一括	
	90	14号土坑	(23.0)	—	—	灰褐色	砂粒少	やや良	(外)ナデ	B SK4	
	91	15号土坑									
	92	〃	13.5	2.05	7.8	浅黄色	砂粒多	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り	A SK1 39	
	93	〃	(15.6)	5.2	6.5	(内)白橙色 (外)黒褐色	砂粒・赤茶粒	良	(内・外)ナデ	A SK1 14	
	94	〃	(17.8)	6.0	9.0	(内)黒灰色 (外)黄橙色・黒灰色	赤茶砂粒	良	(内・外)ナデ	A SK1 16	
	95	〃	(12.2)	3.7	7.0	浅黄橙色	細砂粒多	やや良	(内・外)横ナデ	A SK1 30	
	96	〃	11.5	3.4	6.7	橙色	細砂粒多	良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り	A SK1 42	
	97	〃	13.4	—	—	白橙色	砂粒多	やや良	(内・外)ナデ	A SK1 24	
	98	〃	(14.6)	6.1	6.4	白灰色	砂粒多	やや良	ロクロ整形後ナデ	A SK1 17	
	99	〃	12.3	4.5	6.3	白灰色	砂粒	やや良	ナデ	A SK1	
	100	〃	(12.6)	4.7	5.8	白灰色	砂粒・赤茶粒	やや良	(内・外)横ナデ (底)ヘラ削り	A SK1 22	
	101	〃	(14.7)	6.7	7.1	暗灰色~白黄色	砂粒多	良	(内)ナデ (外)横・縦ナデ	A SK1 21	
	102	〃	(14.4)	—	—	明橙色	砂粒・小石	普通		A SK1	
180	103	16号土坑	12.4~12.6	3.8~4.2	7.4~7.9	淡黄橙色	砂粒少	やや良		A SK2 7	煤付着
	104	〃	(12.2)	4.0	6.9	白灰色	砂粒・赤茶粒	良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り	A SK2 4	
	105	〃	10.7~10.9	5.1	5.6	白橙色	赤茶粒・砂粒	良	(内・外)ナデ	A SK2 2	煤付着
	106	〃	(16.1)	—	—	明灰色	砂粒少	良		A SK2 5	須恵器
	107	17号土坑	14.4	7.3	7.9	白橙色	砂粒・赤茶粒	良	ロクロ整形後ナデ	G SK1 13	
	108	〃	(14.7)	—	—	淡褐色	細砂粒	やや良	(外)ロクロ整形後ナデ (底)回転ヘラ切り	G SK1	
	109	〃	—	—	(6.4)	(外)淡褐色 (内)黒色	細砂粒・赤茶粒少	やや良	(内・外)ナデ (底)回転ヘラ切り	G SK1 15	(内)煤付着
	110	〃	—	—	(8.2)	淡褐色	細砂粒・赤茶粒	良		G SK1 11	
	111	〃	—	—	(5.8)	淡褐色	砂粒・金雲母	やや良		G SK1 P3	
	112	〃	—	—	(7.3)	淡褐色	砂粒	やや不良	(外)ロクロ整形後ナデ (底)ナデ	G SK1 一括	
	113	〃	(16.5)	8.3	8.0	(内)黒色 (外)淡褐色	砂粒多	やや良		G SK1 6	黒色土器

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
180	114	18号土坑	(13.7)	(4.2)	(8.8)	淡灰色	砂粒	良	(内・外)ロクロ整形後ナデ (底)回転ヘラ削り	C SK10 C SK10 一括	
	115	19号土坑	—	—	5.5~6.0	白っぽい褐色	微砂粒・砂粒	やや不良	(内)ナデ(外)ﾛｸﾛ整形後ﾅﾃﾞ (底)板目圧痕	C SK15 一括	
	116	20号土坑	19.8	—	—	灰色	砂粒多	やや良	ナデ	C SK18 一括	
	117	21号土坑	—	—	—	(内)茶褐色 (外)暗褐色	砂粒多	やや良	(内)磨き (外)ナデ	C SK5 8	
	118	22号土坑	(30.0)	—	—	(内)枯葉色 (外)焦茶色~枯葉色	砂粒・角閃石	普通	(内・外) 工具ナデ後ナデ	F SK6 P5,P6	(外)煤付着
	119	〃	13.5	4.5	—	暗灰色	砂粒	良	(外)ヘラ削り	F SK6 P2	須恵器
	120	〃	—	—	(15.1)	暗灰色	砂粒	良	ナデ	F SK6	須恵器
181	121	23号土坑	27.7	—	—	(内)小麦色 (外)淡黄褐色	砂粒・赤褐色粒・角閃石	普通	(内)ヘラ削り (外)ハケメ後板ﾅﾃﾞ・横ﾅﾃﾞ	F SK7	(内)煤付着
	122	〃	—	—	—	淡褐色	砂粒・赤褐色砂粒・角閃石	普通	(内)削り (外)板ナデ後ハケメ後ナデ	F SK7 一括	
	123	〃	—	—	—	灰褐色	砂粒多・角閃石	やや良	(外)ナデ	F SK7 73,78,97,101,109,117,123,137	
	124	〃	—	—	—	(内)枯葉色~暗灰色 (外)明灰色~憲房色	砂粒	良	(内)タタキ・横ナデ (外) 平行タタキ	F SK7	自然釉
	125	〃	—	2.0	5.8	淡褐色	砂粒	不良		F SK7 一括	
	126	〃	11.9	3.7	6.7	淡黄橙色	砂粒少・赤茶粒	やや良	(外)ナデ (外)ヘラ切り後ナデ	F SK7 P55	
	127	〃	(12.0)	3.7	7.4	黄褐色	砂粒・粗	やや不良		F SK7 P18	
	128	〃	(12.5)	6.9	4.5	淡黄橙色	砂粒多	不良	(外)ナデ	F SK7 P3	
	129	〃	12.7	5.4	6.2	淡褐色	角閃石・粗砂粒	やや不良	(底)回転ヘラ切り	F SK7 P64	指痕,煤付着
	130	〃	(15.0)	5.65	(7.4)	淡褐色	砂粒少	やや良	(内・外)ナデ・磨き (底)ヘラ切り	F SK7 P5,6,54,62	
	131	〃	15.1	5.2	7.3	淡褐色	砂粒多	不良	(底)板目	F SK7 P96	歪
	132	〃	(16.3)	6.8	7.1	(内)黒色 (外)淡褐色	砂粒少・赤茶粒	不良	ナデ	F SK7	
	133	24号土坑	15.7	3.15	—	明灰色	砂粒多	やや良	(内・外)ナデ	F SK4 11	
	134	25号土坑	9.6~9.8	1.6~1.8	6.2~6.5	黄灰色	砂粒	やや不良	(内)ナデ (外)糸切り後ナデ	F SK1 1	
188	135	28号住	(12.1)	4.7	(6.0)	淡褐色	砂粒少	良	(底)板目	E SB1 P8	
	136	2号掘立	(14.0)	4.6	(8.4)	茶褐色	砂粒	やや良	(外)ロクロ整形後ナデ (底)回転ヘラ切り後ナデ	G 1号掘 P1	
	137	30号住	—	—	6.3	薄水色	白灰色	良		F SB2 2	
	138	〃	—	—	—	くすんだ灰緑色	暗白灰色	良		F SB2	
	139	〃	12.8	4.95	4.3	薄水色	白灰色	良		F SB2(F) 一括	
	140	〃	11.7	3.25	4.8	黄褐色	茶褐色	良		F SB2	
191	141		(14.7)	—	—	黄褐色	粗砂粒	やや良		D G-16(24) 2層	
	142		(14.4)	5.1	6.4	橙色	砂粒・赤茶粒	良	(内・外)ナデ (外)ロクロ整形(底)圧痕	D G-15 522	
	143		(13.1)	5.0	7.8	黄褐色	微砂粒	やや不良	(内・外)ロクロ整形 (底)ナデ	D G-15(5) 一括	
	144		(12.9)	4.1~4.5	6.6~7.2	黄褐色	微砂粒	やや不良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り・圧痕	D G-15(5) 一括	
	145		(14.0)	(4.85)	(4.6)	褐白色	微砂粒	やや良	ロクロ整形後ナデ	D G-16(24) 3層	
	146		14.0	5.0	7.4	黄橙色	砂粒多	やや良	(外)ナデ (底)ヘラ切り	D G-16(24)	

出土遺物観察表

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
191	147		13.5~13.7	4.8	6.3~6.9	明黄色	砂粒	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り・板目	G 784	
	148		(13.7)	—	—	黄褐色	粗砂粒・赤茶粒	やや良	(外)ロクロ整形後ナデ	G	
	149		(14.2)	(5.05)	(6.2)	淡黄橙色	砂粒少	やや良	ロクロ整形後ナデ	D G-16(25) 234	
	150		(13.1)	(4.6)	(6.4)	灰褐色	細砂粒・赤茶粒	やや良	(底)回転ヘラ切り	D G-16 3層 237	
	151		13.0	3.9	6.0	明褐色	砂粒多	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り	G 825,824	
	152		12.8	5.1	7.3	暗黄褐色	砂粒多	やや良	(底)ヘラ切り	G 2,3層	
	153		12.8	5.5	5.4	暗黄褐色	砂粒多	やや良		F SB7 53	
	154		(13.0)	3.15	7.0	白褐色	砂粒多	やや良	ナデ	G 777	
	155		(12.8)	4.15	(6.0)	黄橙色	砂粒・赤茶粒	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り	G H-13 Pit6	
	156		(1.19~12.1)	4.2	6.0~6.5	橙色	微砂粒多	良	(内)ナデ(外)ロクロ整形 (底)ナデ一部圧痕	G 3583	
	157		11.9	3.9	7.3	橙色	砂粒多・赤茶粒	不良	(底)ヘラ切り	C Pit299 1	
	158		11.4	4.5	5.7	薄赤橙色	砂粒少	やや良	(外・底)ナデ	B 2層 一括	
	159		11.4	4.85	6.3	淡白褐色	砂粒多	不良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り	B 2層 一括	
	160		(12.9)	5.9	6.6	暗褐色	砂粒多	やや良	(外)ナデ (底)ヘラ切り後板目	B 2層 一括	
	161		—	—	7.4	赤橙色	赤茶粒	良		G 1984,1986	
	162		(12.0)	(5.5)	(5.4)	淡褐色	砂粒・赤茶粒	やや良	(外)ロクロ整形	G 1813	
	163		(16.5)	4.85	(7.3)	淡赤褐色	砂粒・赤茶粒	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り	G 1274	
	164		15.1	5.9	8.0	(内)黒色	雲母・砂粒	やや不良	(内・外)ナデ (外)淡褐色~赤褐色	B I-17 3層 2	
192	165		(17.2)	—	—	淡橙色	赤茶粒	良	(内)ナデ (外)ロクロ整形後ナデ	D G-15(5) 一括	
	166		(17.4)	7.4	(9.6)	黄褐色	粗砂粒・赤茶粒	やや不良	(外)横ﾅﾃﾞ後縦ﾅﾃﾞ	G	
	167		(13.9)	5.4	7.6	黄褐色	小石・赤茶粒	やや良	(外)ロクロ整形後ナデ (底)回転ヘラ切り後ナデ	H-7 Pit2	(内・外)煤付着
	168		—	—	(8.0)	淡茶褐色	細砂粒	やや良	(外)ロクロ整形後ナデ (底)ヘラ切り	G 1681	
	169		—	—	(7.7)	黄褐色	微砂粒・赤茶粒	良	(外)ナデ (底)回転ヘラ切り後ナデ	D G-15 41	
	170		(13.6)	3.4	8.8	赤橙色	密	良	(内・外)ナデ (底)糸切り	B KL-13 2層一括	
	171		(12.5)	(2.5)	(7.8)	黄褐色-白橙色	砂粒	やや良	(底)回転糸切り	G-17 204	
	172		(10.2)	(1.8)	(8.1)	白褐色	砂粒	やや良		G 2218	
	173		10.0	1.2	(8.2)	(内)黄褐色 (外)灰褐色	細砂粒	良	(内)ナデ(外)横ナデ (底)回転糸切り	G 2217	
	174		(10.0)	(1.5)	(7.4)	褐白色	砂粒少	やや良	(内・外)ナデ (底)ヘラ切り	D T-7	
	175		9.8	1.55	6.5	明褐色	砂粒少	やや良	(内・外)ナデ (底)糸切り	G 818	
	176		(9.9)	(1.8)	(6.8)	赤褐色	砂粒・石英・赤茶粒	やや良	(内・外)ナデ (底)回転糸切り	H-8 Pit12 P1	
	177		9.6	1.5	(6.4)	灰褐色	砂粒	やや良	(内・外)ナデ (底)回転糸切り後ﾍﾗ削り	G 3028	
	178		(9.5)	1.4	(7.0)	赤褐色	粗砂粒	やや良	(底)回転糸切り	G H-8 Pit12	

挿図	番号	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	調整	旧登録番号	備考
192	179		9.3	1.5	5.8	茶褐色	細砂粒	やや良	ナデ	D H-16 203	
	180		9.0	1.45	7.3	黄橙色	砂粒少	やや良	(外)ナデ (底)糸切り	D F-17 3	
	181		8.6	1.85	6.5	淡赤橙-茶褐色	細砂粒	やや良	(内・外)ナデ (底)回転糸切り	G 662,663	
	182		(8.7)	1.15	(5.9)	白褐色	細砂粒	不良	(内・外)ナデ (底)糸切り	G 1623	
	183		(8.4)	1.4	6.6	赤褐色	金雲母・微砂粒	やや良		C 9T 1	
	184		—	—	5.9	白褐色	砂粒	やや良	(底)糸切り	D 12T一括	
	185		—	—	6.0	茶褐色	砂粒	やや良	(内)ナデ (外)糸切り	G 2173	
	186		—	—	—	褐白色	砂粒多	やや良	ナデ	G E-7(1)	
	187		—	—	—	黄橙色	砂粒多	やや良	ナデ	B SB4	
	188		—	—	8.2	灰色	粗砂粒	やや良	(底)糸切り	G H-18 Pit2	
	189		(16.4)	—	—	暗灰色	砂粒多	やや良	(外)ヘラ削り・ナデ	B 2層 一括	
	190		—	(1.6)	—	灰色	小石	良		C Pit299	
	191		(13.0)	(1.75)	(8.3)	濃灰色	砂粒少	やや良	ナデ	B 埋4 一括	
	192		(15.0)	(1.6)	(12.0)	濃灰色	砂粒多	やや良	ナデ	B 埋4 2層 一括	
	193		—	—	(9.5)	濃灰色	小石	やや良	(外)ナデ・粗い磨き		
	194		—	—	—	淡黄褐色	砂粒・角閃石	普通	(内・外)ナデ	G 2213	
193	195		(25.7)	—	—	黄褐色	砂粒・角閃石	良	(内)ハケメ・ナデ後磨き (外)横ナデ・ハケメ	G 4349	
	196		(26.8)	—	—	淡褐色	角閃石・砂粒	やや良	(内)横ナデ・ヘラ削り (外)横ﾅﾃﾞ・ハケメ後ﾅﾃﾞ	G 2,3層	(外)煤付着
	197		(30.4)	—	—	黄橙色-暗褐色	小石・長石・粗砂粒	良	(内)削り (外)ハケメ	C J-8 3層 1	煤付着
	198		(22.1)	—	—	淡褐色-褐色	小石・雲母・長石	やや良		B 2層 16	
	199		(16.6)	—	—	茶褐色	角閃石・砂粒	やや良		D G-15(14)B	(外)煤付着
	200		11.85	—	—	淡褐色	砂粒・角閃石	良	(内・外)ナデ (口縁)横ナデ	B I-7 3,4層一括 8-7 3層 6,2層 4	薄黒斑有
	201		37.6	—	—	(内)琥珀色 (外)琥珀色-暗褐色	砂粒・小石・角閃石・赤褐色粒	普通	(内)ハケメ後ナデ (外)工具ナデ後ナデ	B 2層 12	(外)煤付着
194	202		—	—	(3.6)	薄水色	白ユリ色	良	(底)削り,面とり	F SX1	染付
	203		—	—	—	淡緑灰色		良		G 2層 表土ハギ	
	204		—	—	—	淡灰緑色		良		G 2,3層表土ハギ	
	205		—	—	—	淡灰緑色	ねずみ色	良		G 660	
	206		—	—	(2.55)	淡緑灰色		良		G 2,3層	
	207		—	—	(5.85)	灰白色		良	(底)ヘラ切り	G 2,3層	
	208		—	—	5.6	モスグリーン	ねずみ色	良	(底)削り,面とり (外)陰刻	B 青磁	
	209		—	—	—	淡緑灰色	ねずみ色	良		G 3708	
	210		—	—	—	淡緑灰色	ねずみ色	良		G H-5	
	211		15.5	6.6	5.4	乳白色		やや良	(底)ヘラ切り,削り	G 817	
	212		—	—	(6.4)	灰白色		やや良	(底)ヘラ切り,ナデ	D G-14 12T	
	213		—	—	—	淡灰緑色	ねずみ色	良		H-8 Pit22	
	214		—	—	—	灰褐色		良		E C-16 1	(外)煤付着
	215		—	—	—	(内)黄褐色・明橙色(赤彩) (外)淡褐色	砂粒・赤褐色粒	普通	(内)摺り目 (外)ナデ	G-6(2)	(外)煤付着

報告書抄録

ふりがな	おきまついせき
書名	沖松遺跡
副書名	県営農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ号	第154集
編著者名	島津義昭・古城史雄
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	1996年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村ｺｰﾄﾞ	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
沖松遺跡	球磨郡須恵村字沖松	43508		199206 ～ 199403	20,000m²	農業関連

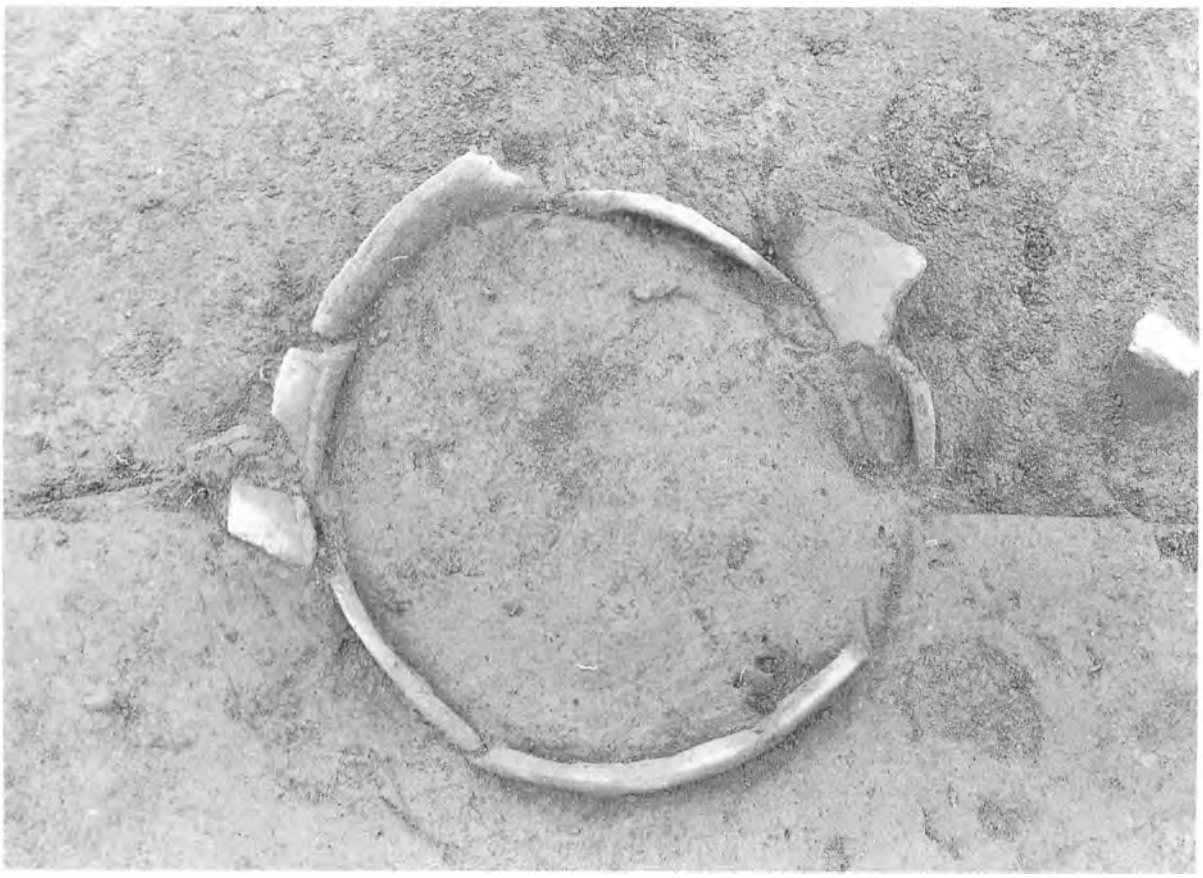
主な時代	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
縄文時代早期	集落	集石６基	押型文土器・Ｉ夫状耳飾り	住居跡の確認はできなかったものの、縄文時代後・晩期の大規模な集落が予想され、人吉球磨地方においては有数のものと思われる。 一方古墳時代の集落も、ある程度の規模を持つものとしては、人吉・球磨地方においては、夏女遺跡・深水尾園遺跡についで３例目。
縄文時代後期～晩期	集落	埋設土器22基	市来式土器・鳥井原式～古閑式土器等、焼成粘土塊打製石斧・磨製石斧・石鏃石剣・石刀片等	
古墳時代	集落	竪穴式住居跡27軒	土師器・須恵器・鉄鏃	
平安時代	集落	掘建柱建物跡３軒 土坑	土師器・須恵器	
中世	集落	竪穴式住居跡２軒	陶磁器	

図　　版

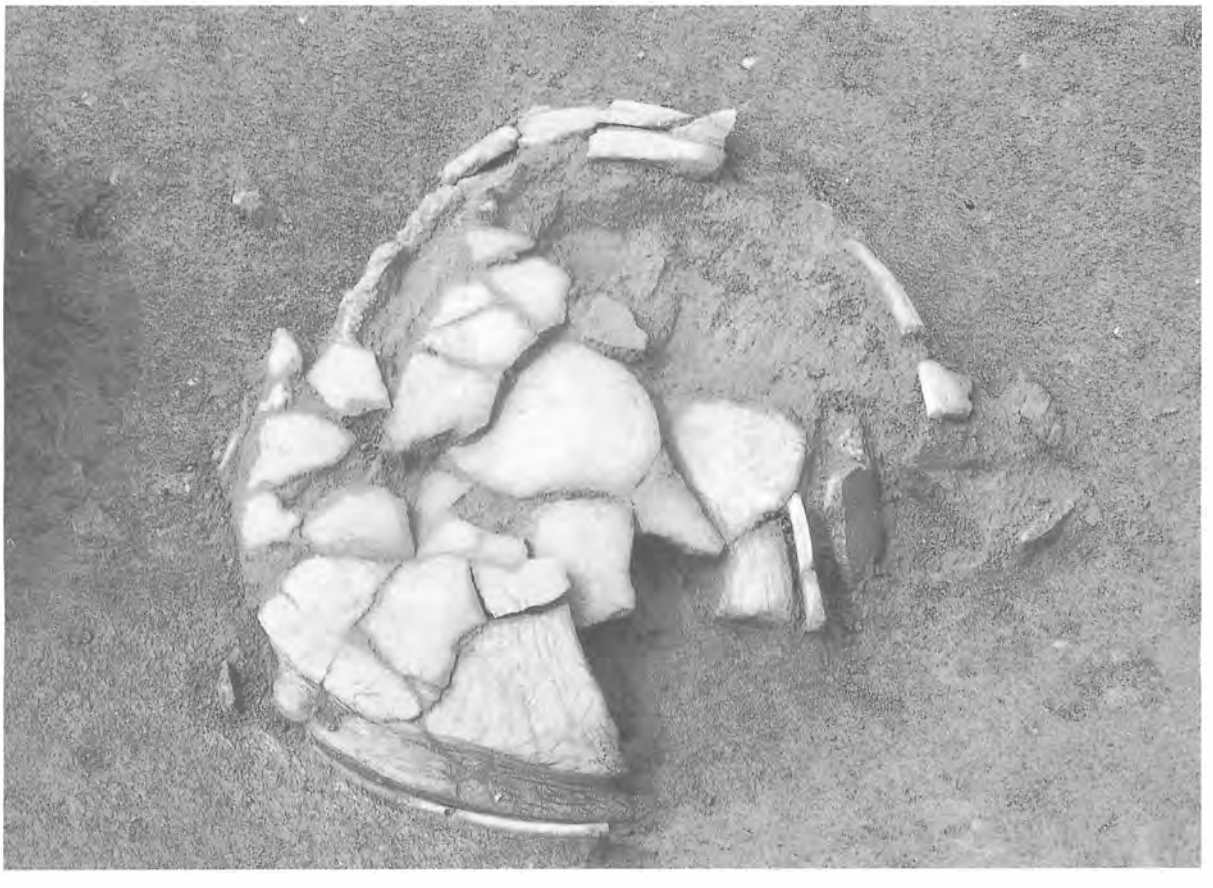
図版１　遺跡遠景　北より球磨川を望む　　調査前　　調査中

図版２　４・５号土坑　上；４号、下；５号

図版３　４・５号埋設土器　上；４号，下；５号



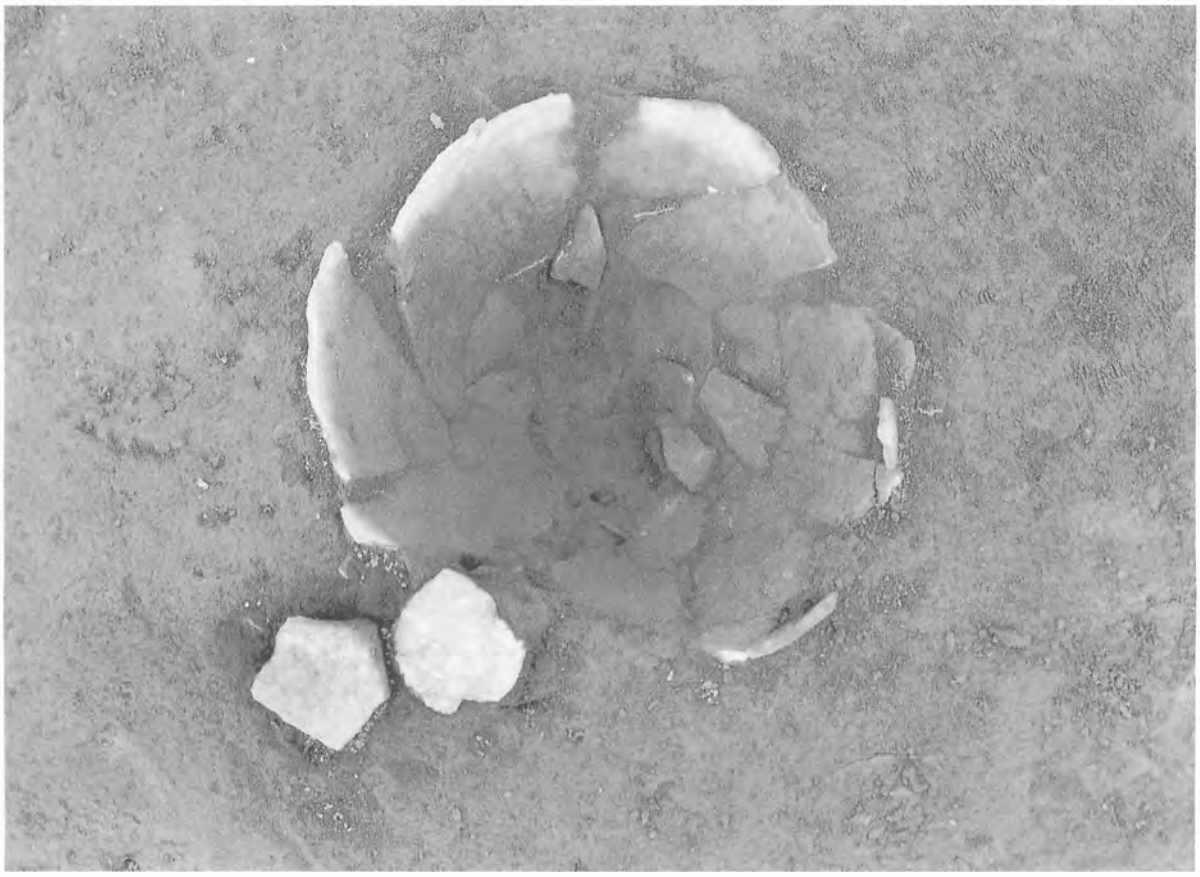
図版４　６・７号埋設土器　上；６号，下；７号



図版５　８・９号埋設土器　上；８号，下；９号

図版６　10・11号埋設土器　上；10号，下；11号

図版７　18・19号埋設土器　上；18号，下；19号



図版８　20・21号埋設土器　上；20号，下；21号

図版９　上；22号埋設土器，下；遺物検出状況

図版10　住居状遺構　上；１号　下；２号

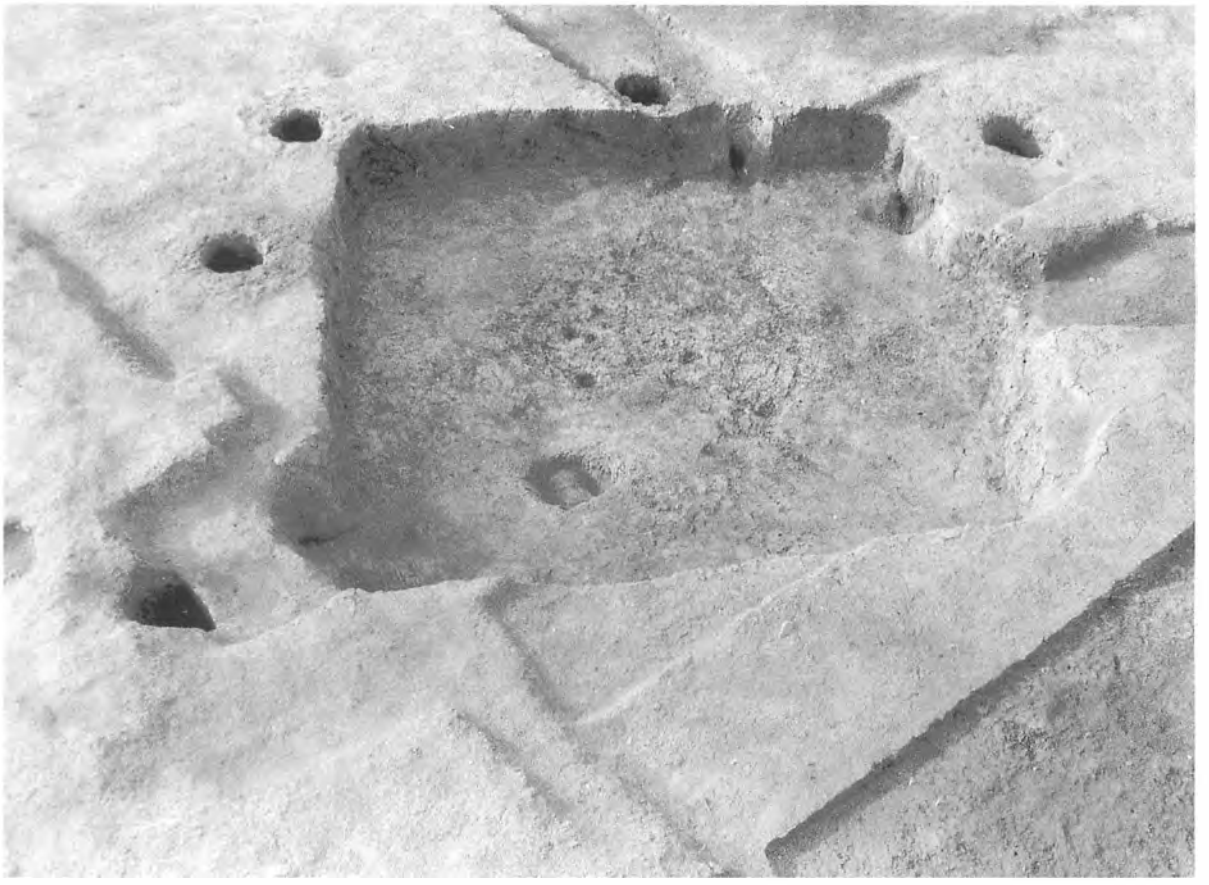
図版11　住居状遺構　上；３号　下；４号

図版12　上；7トレンチ遺物出土状況
下；1号竪穴式住居跡

図版13　竪穴式住居跡　上；２号　下；３号

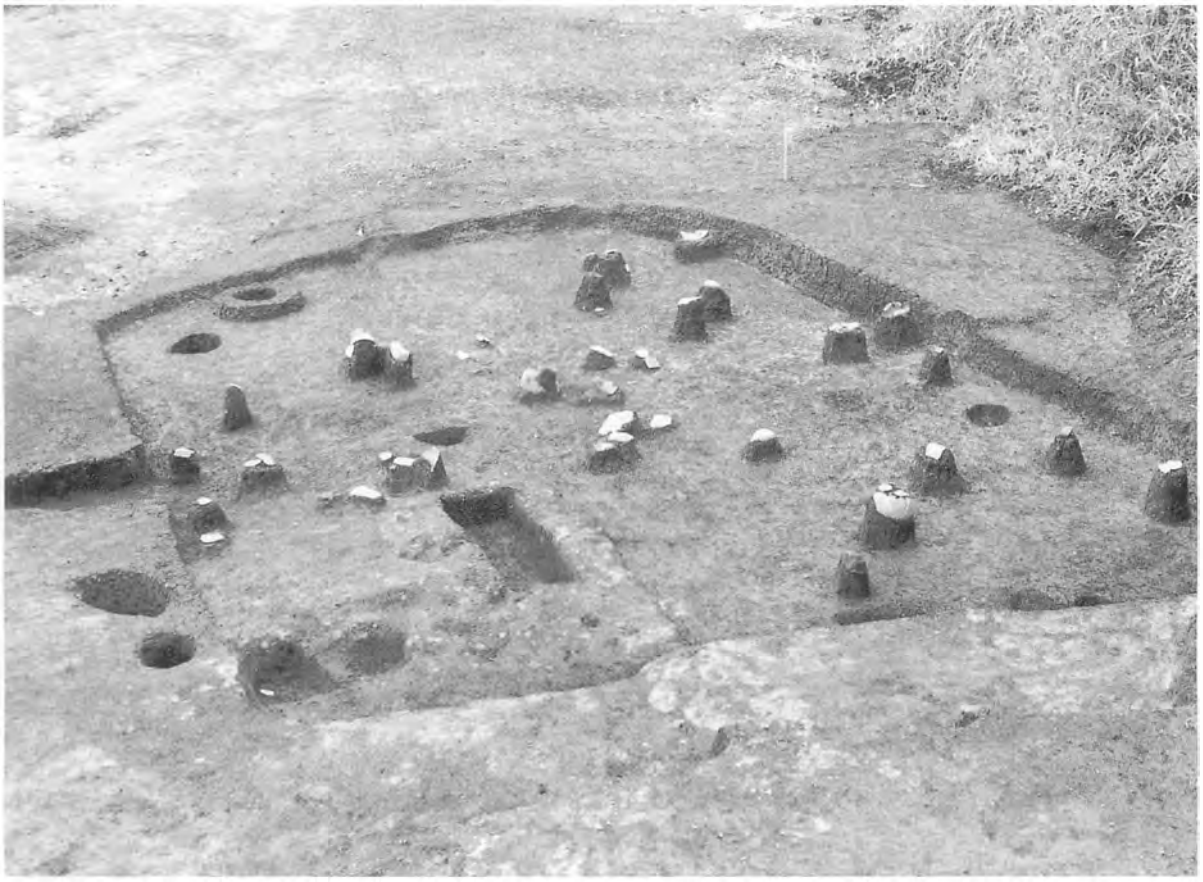
図版14　竪穴式住居跡　上；４号　下；６号

図版15　竪穴式住居跡　上；８号　下；９号

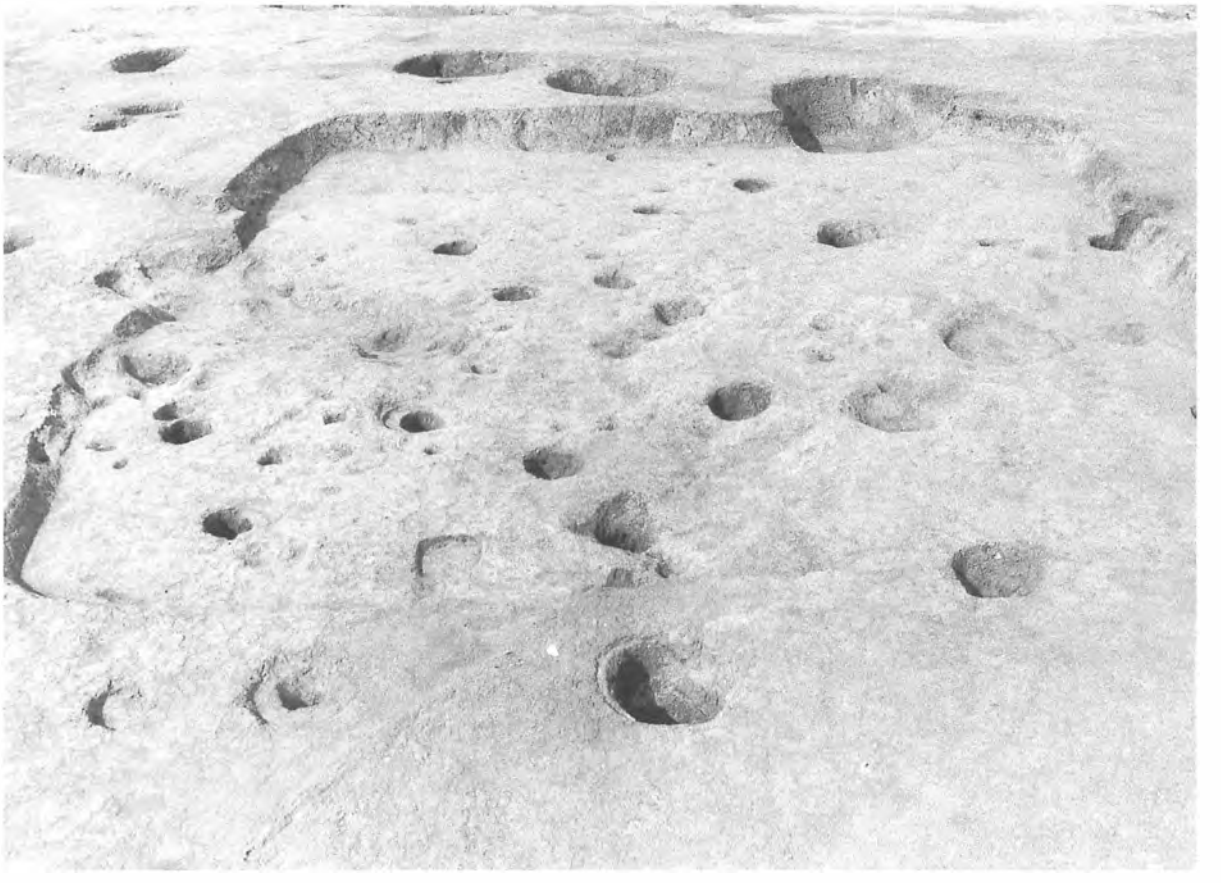


図版16　竪穴式住居跡　上；10号　下；11号

図版17　竪穴式住居跡　上；12号　下；12号埋甕炉



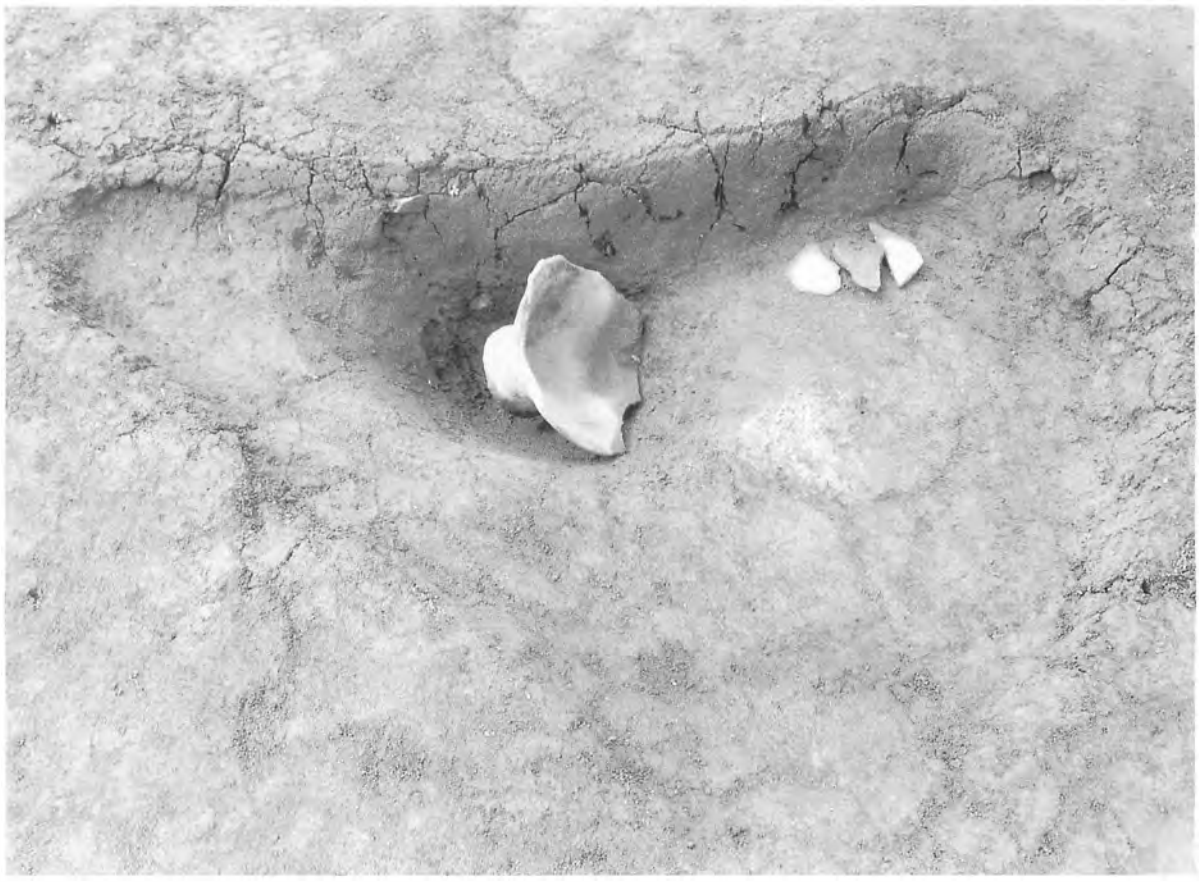
図版18　竪穴式住居跡　上；14号　下；15号



図版19　竪穴式住居跡　上；16号　下；19号

図版20　竪穴式住居跡　上；20号　下；21号

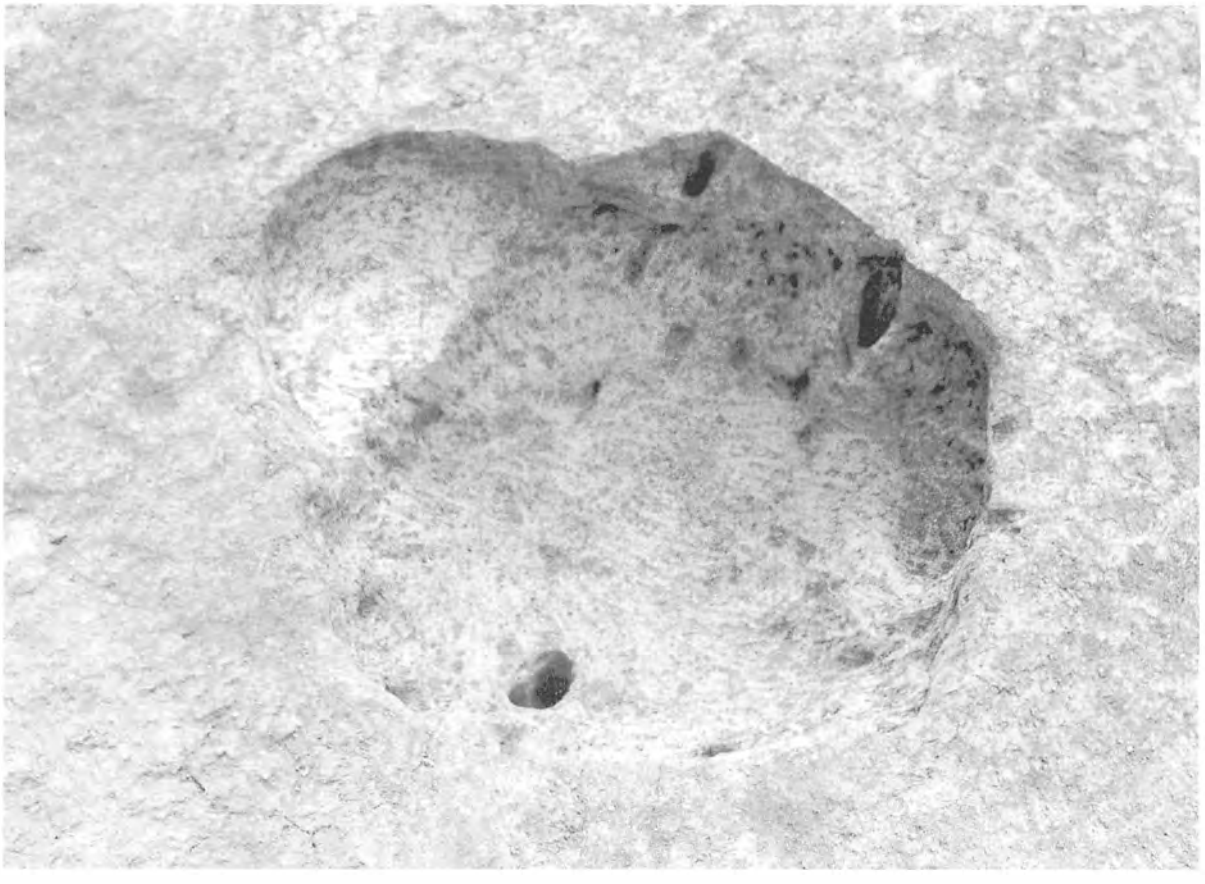
図版21　竪穴式住居跡　上；22号　下；24号



図版22　上；27号竪穴式住居跡　下；１号土坑

図版23　土坑　上；2号　下；6号

図版24　土坑　上；10号　下；12号

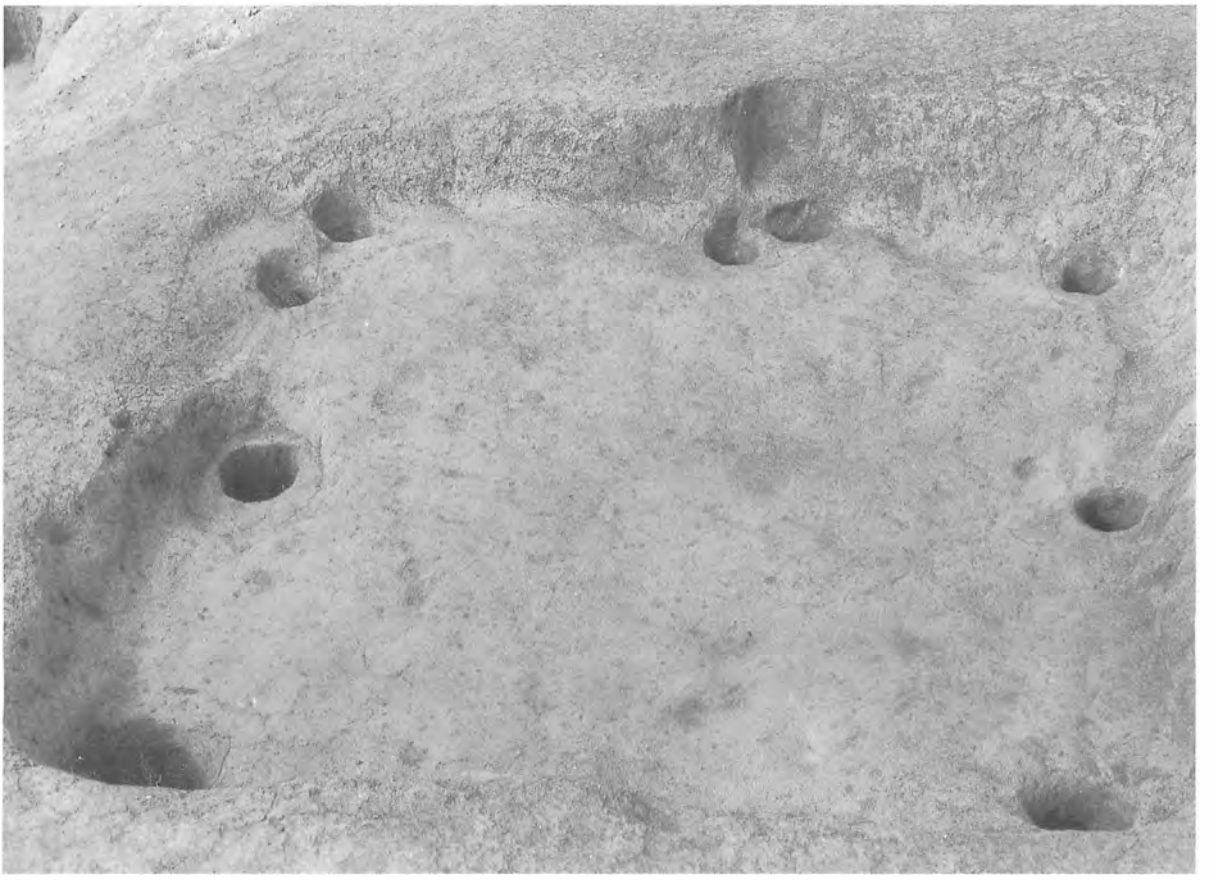


図版25　土坑　上；15号　下；17号

図版26　土坑　上；21号　下；22号

図版27　上；23号土坑　下；28号竪穴式住居跡

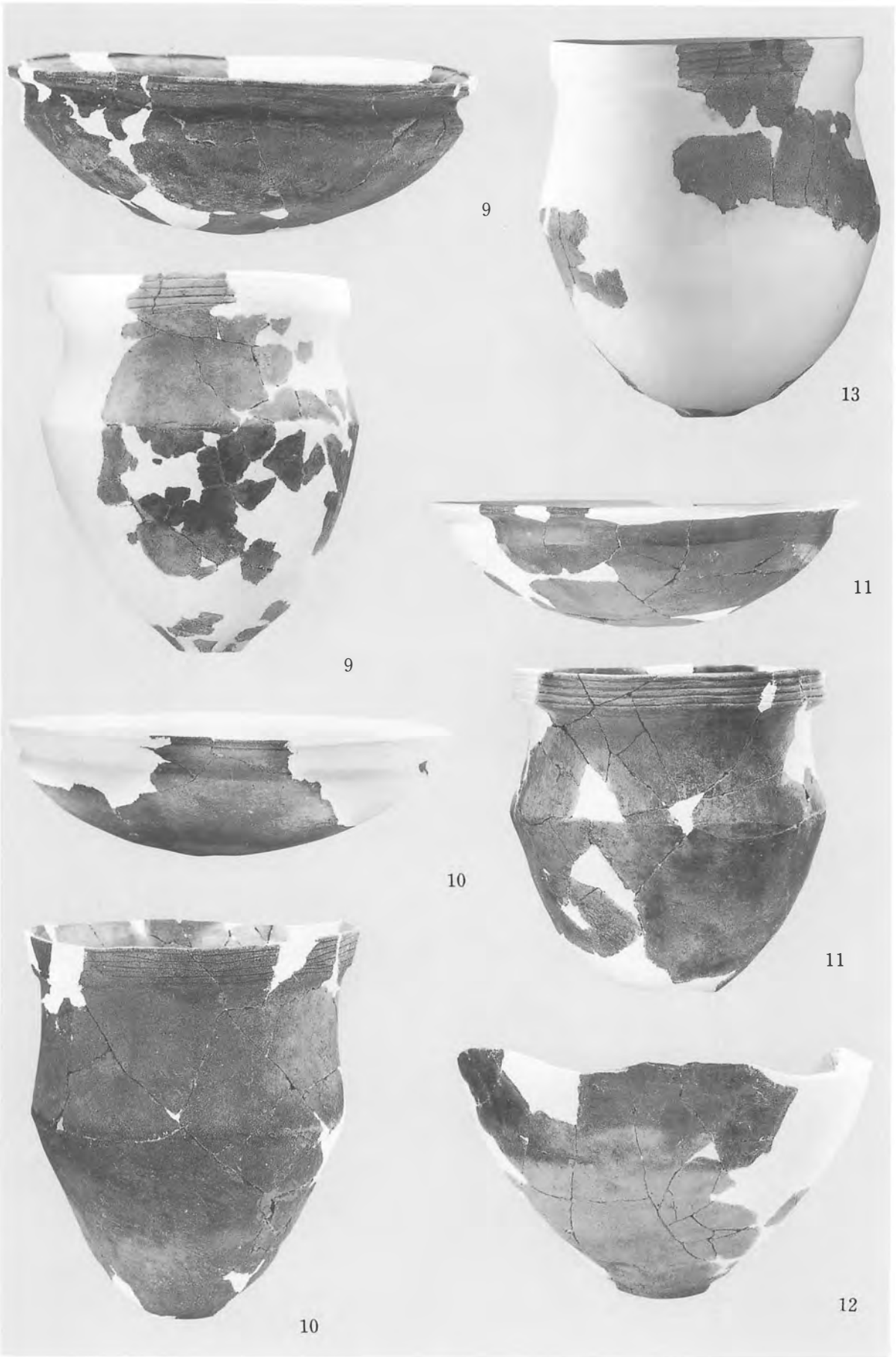
図版28　上；１号掘建柱建物跡　下；２号掘建柱建物跡



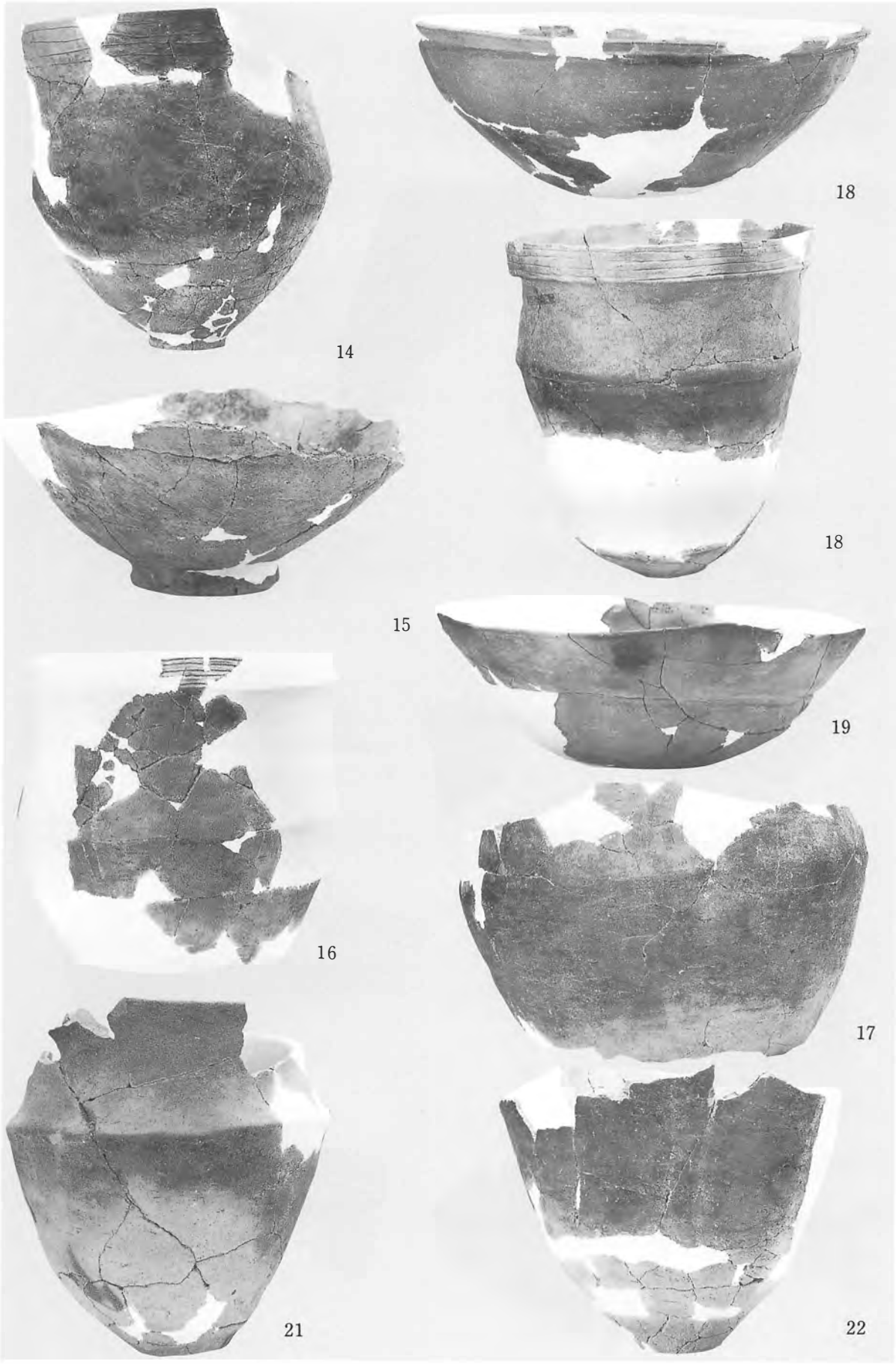
図版29　上；３号掘建柱建物跡　下；29号竪穴式住居跡

図版30　上；30号竪穴式住居跡　　下；不明遺構

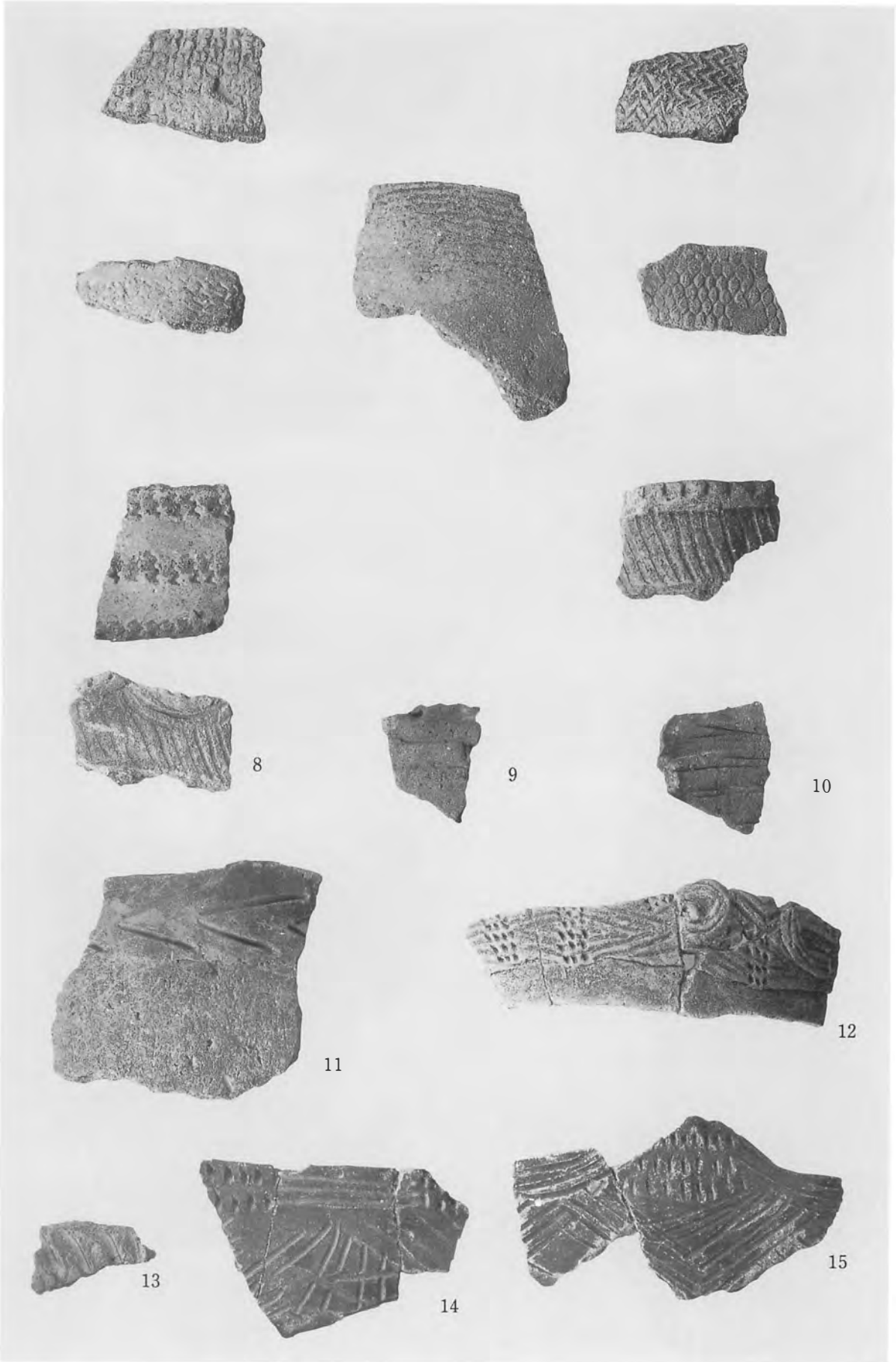
図版31　1～5・7・8号埋設土器



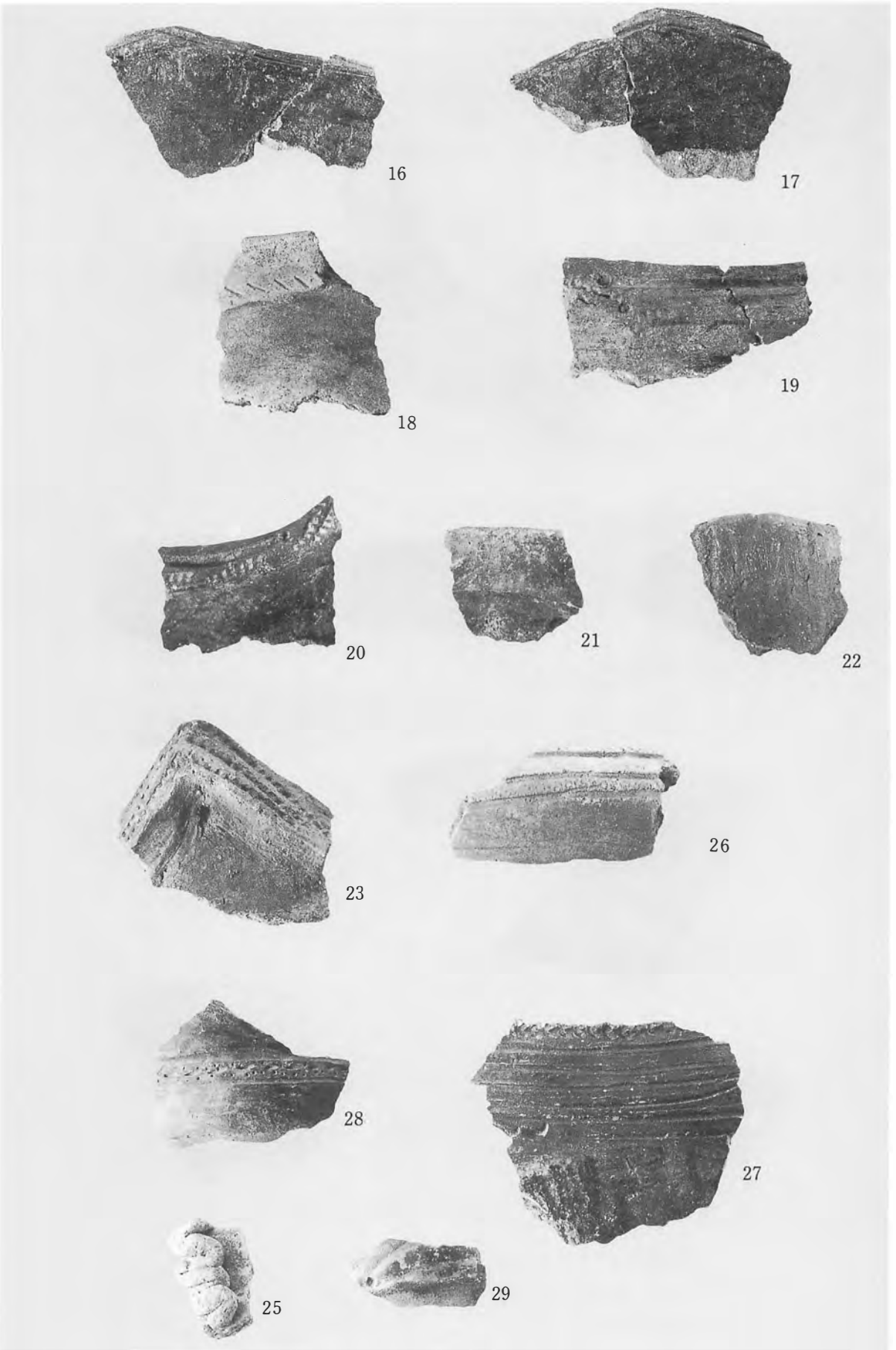
図版32　9～13号埋設土器



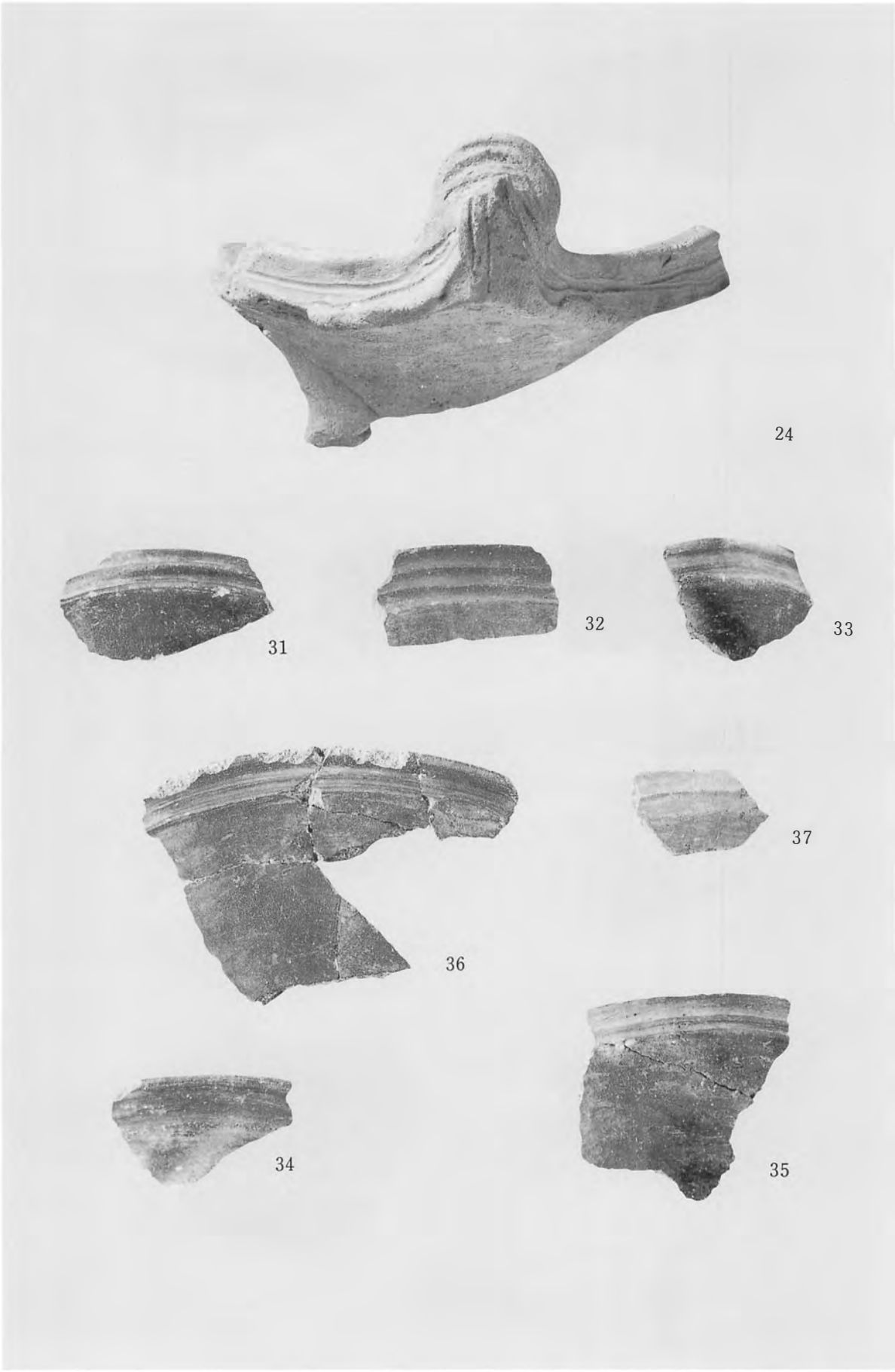
図版33　14～19・21・22号埋設土器



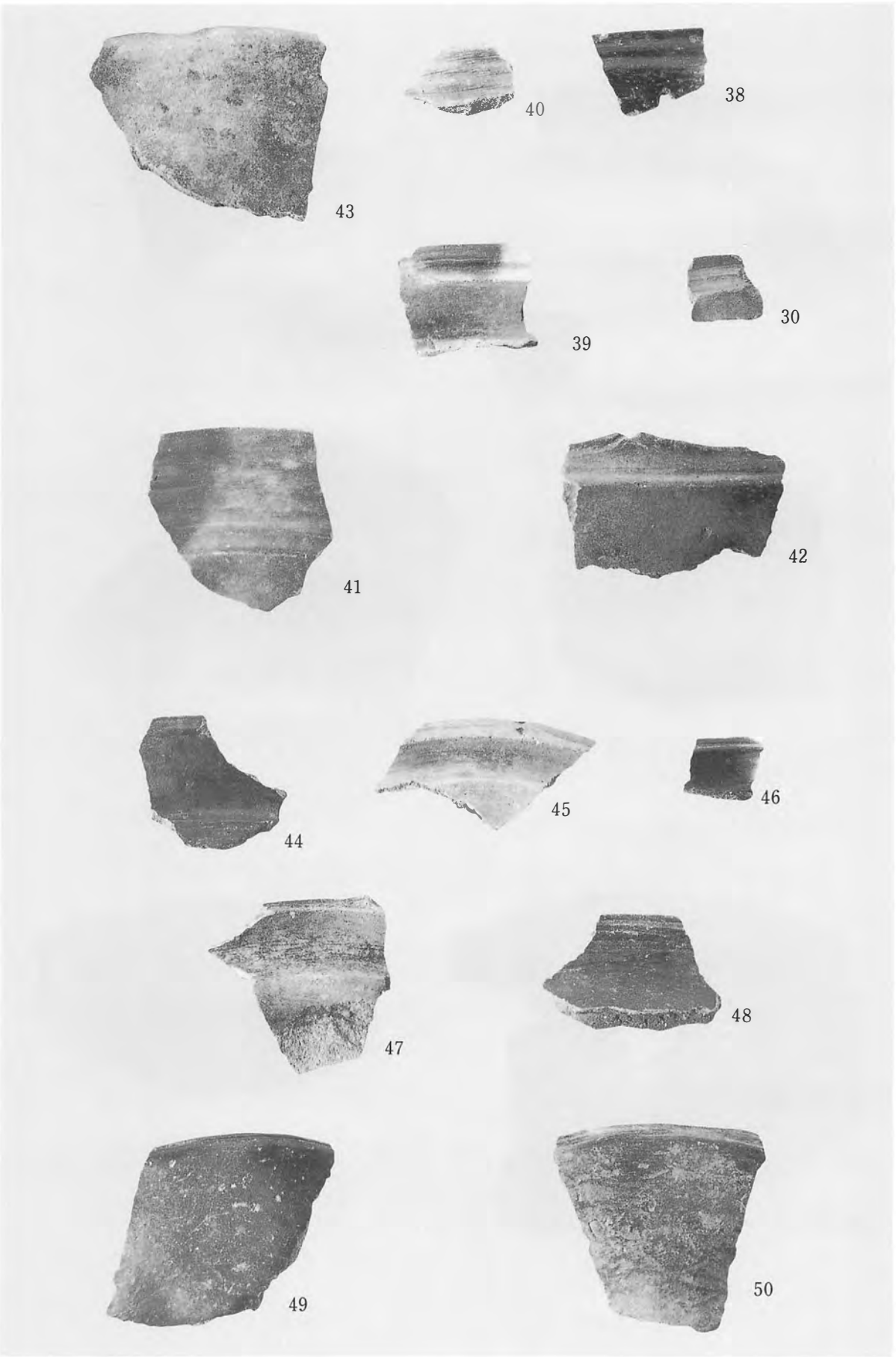
図版34　ナイフ形石器・縄文時代早期・後期の土器



図版35　縄文時代後期の土器

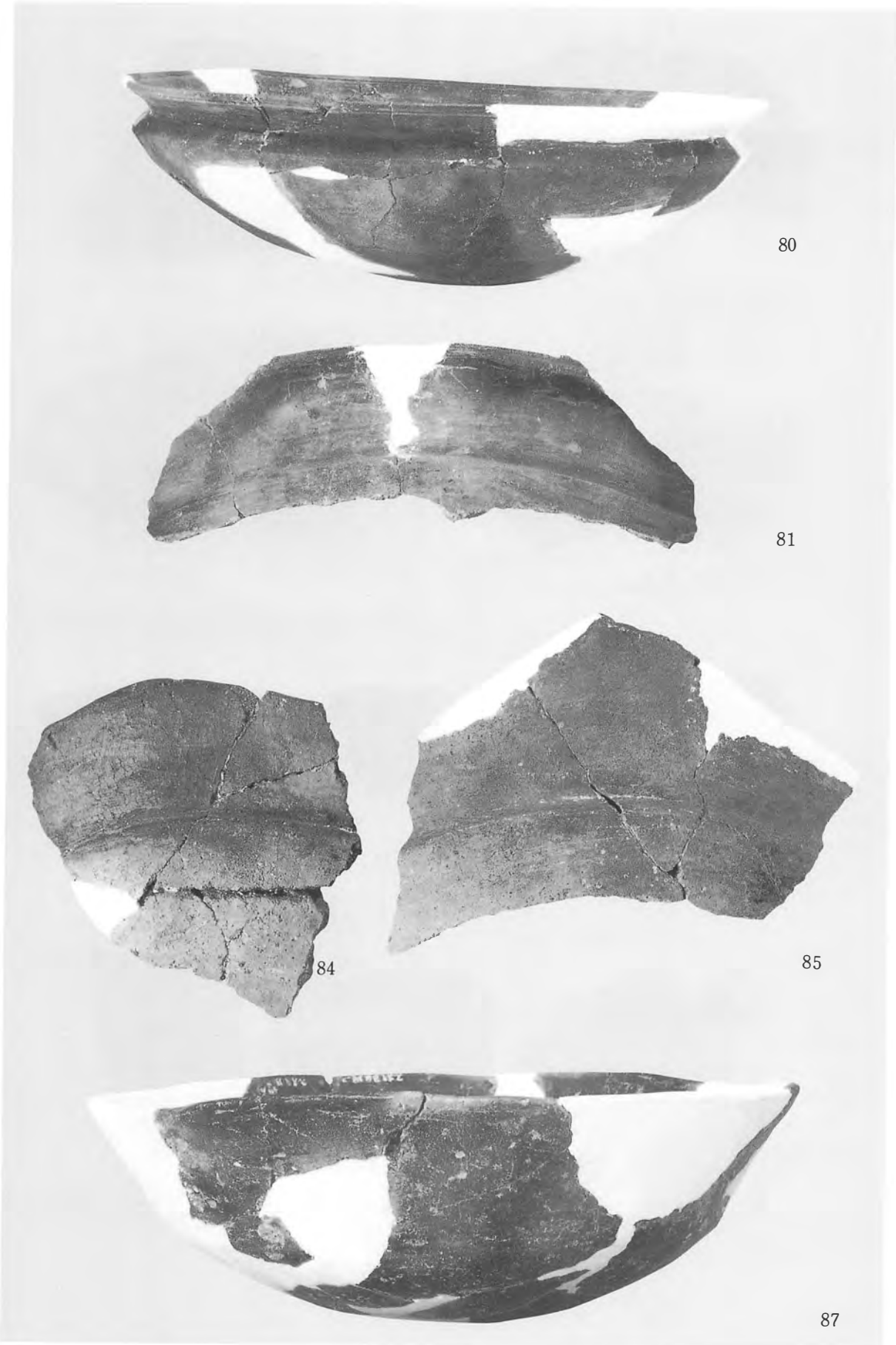


図版36　市来式土器；24,　浅鉢形土器Ⅰａ類；31～37

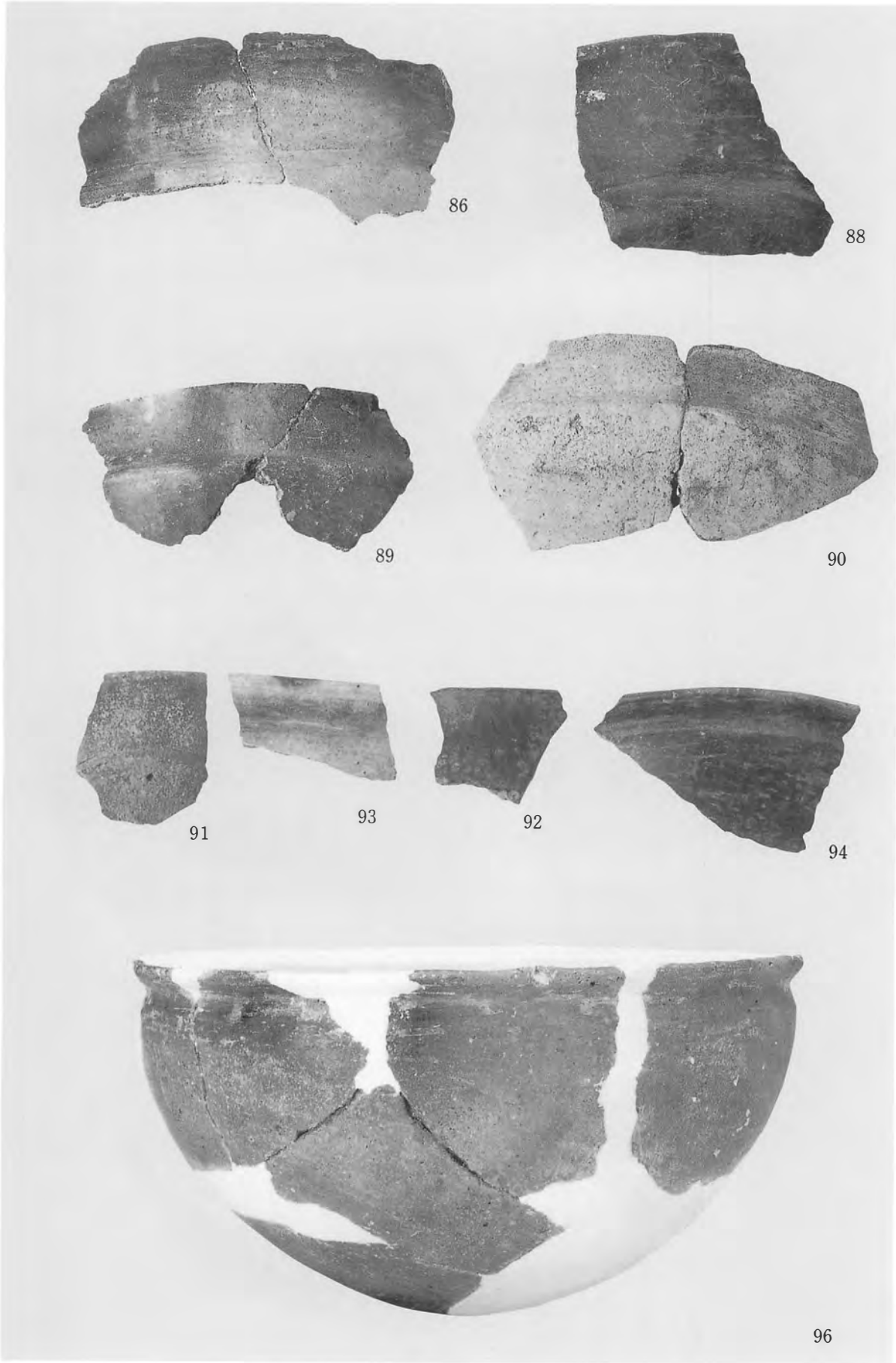


図版37　浅鉢形土器Ⅰａ類；30・38～43，Ⅱ類；44～50

図版38　浅鉢形土器Ⅲ類ａ・ｂ；51～56, Ⅲｄ類；79, Ⅴａ類；83

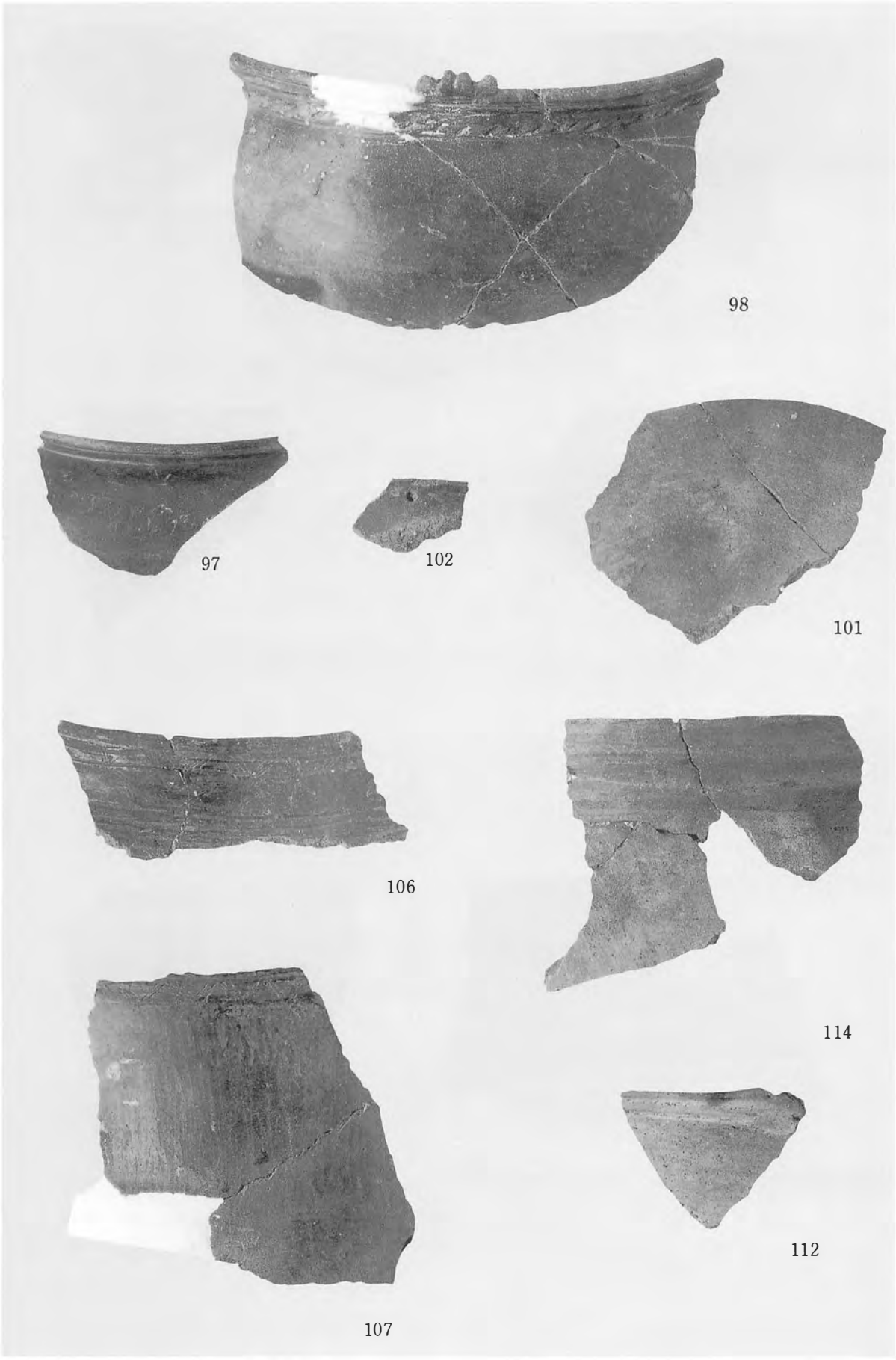


図版39　浅鉢形土器Ⅲｅ類；80,
Ⅳａ類；81・84・85,　Ⅳｂ類；87



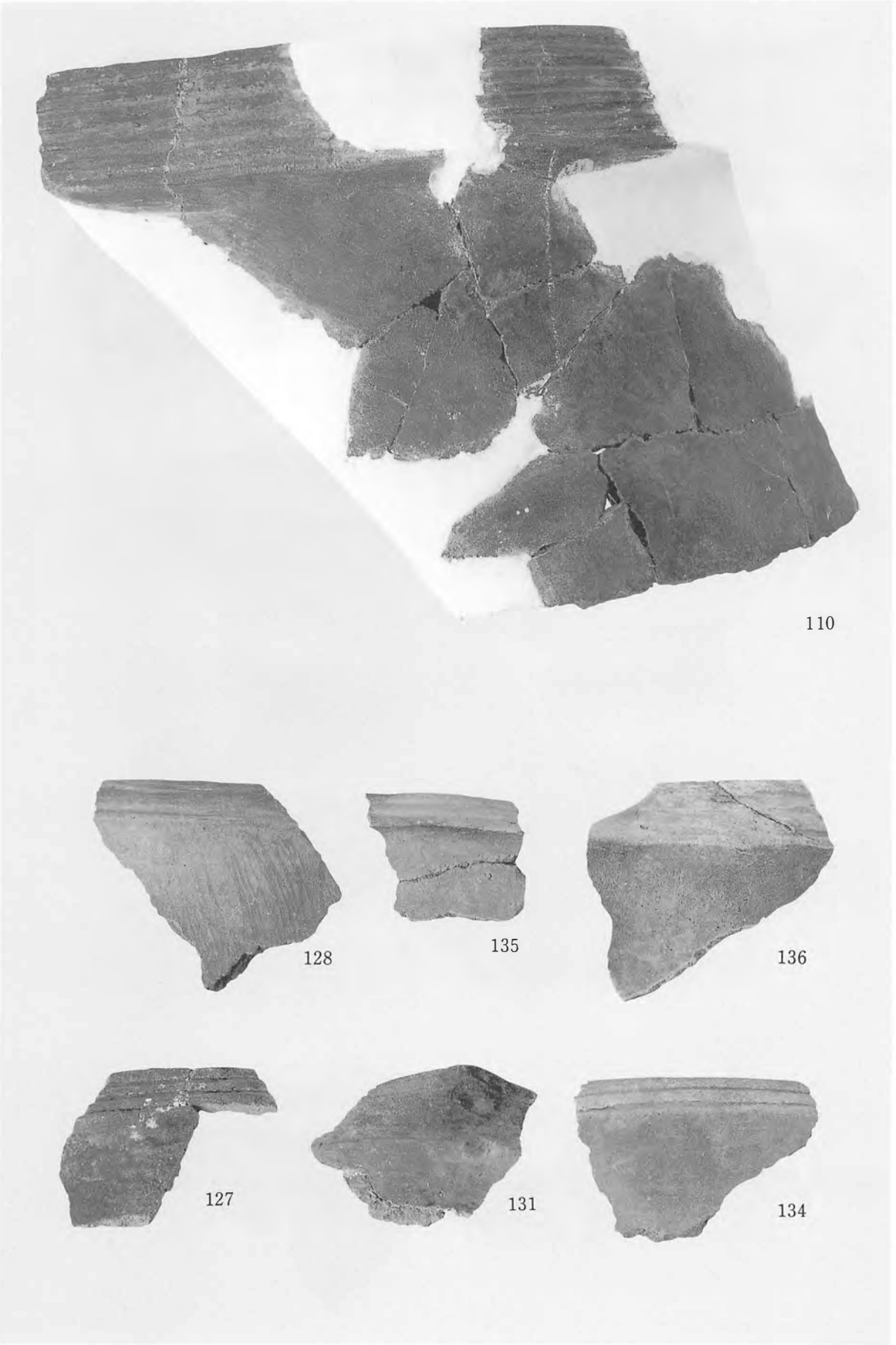
図版40　浅鉢形土器Ⅳ類；86・88・89～92

Ⅴ類；93・94・96



図版41　浅鉢形土器Ⅴｂ類；97・98　Ⅵ類　；101・102
深鉢形土器ⅠＡ類；106・107・112・114

図版42　深鉢形土器ⅠA類；122～124，
ⅡA類；108・109・125・126

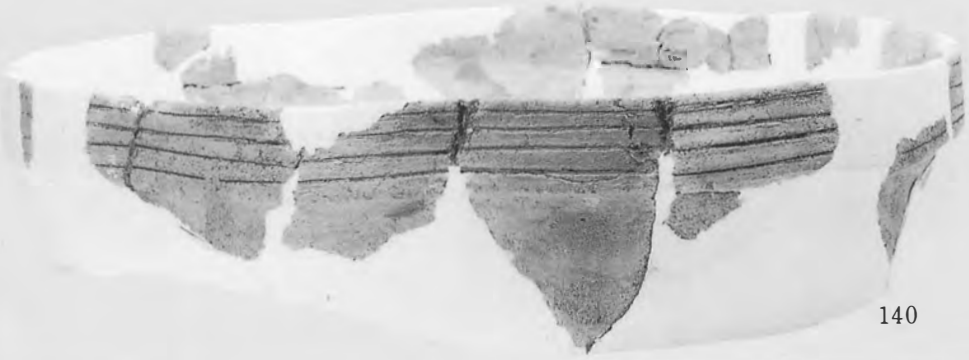


図版43　深鉢形土器ⅡA類

129

133

137

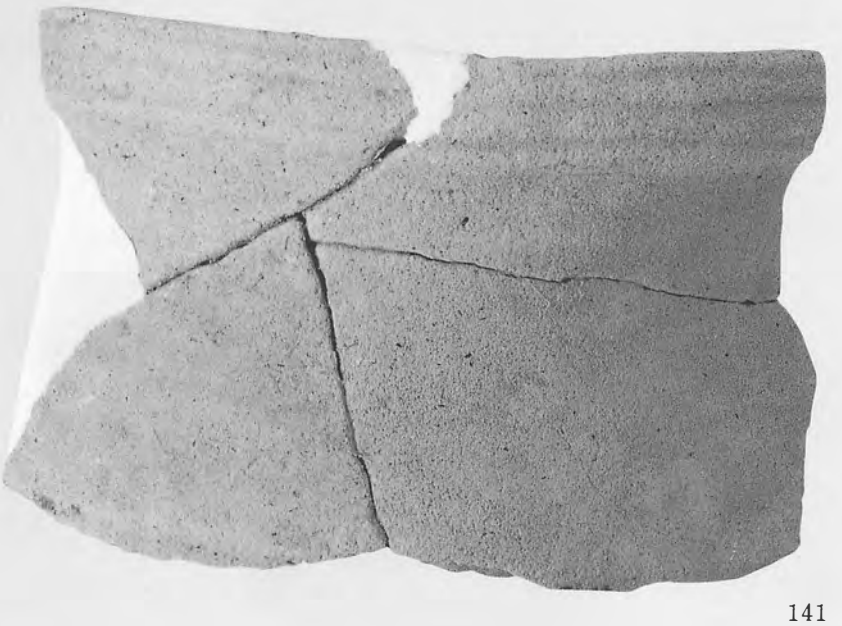


140

図版44　深鉢形土器Ⅱ A類；133,

Ⅲ A類；129・137・140

138



141

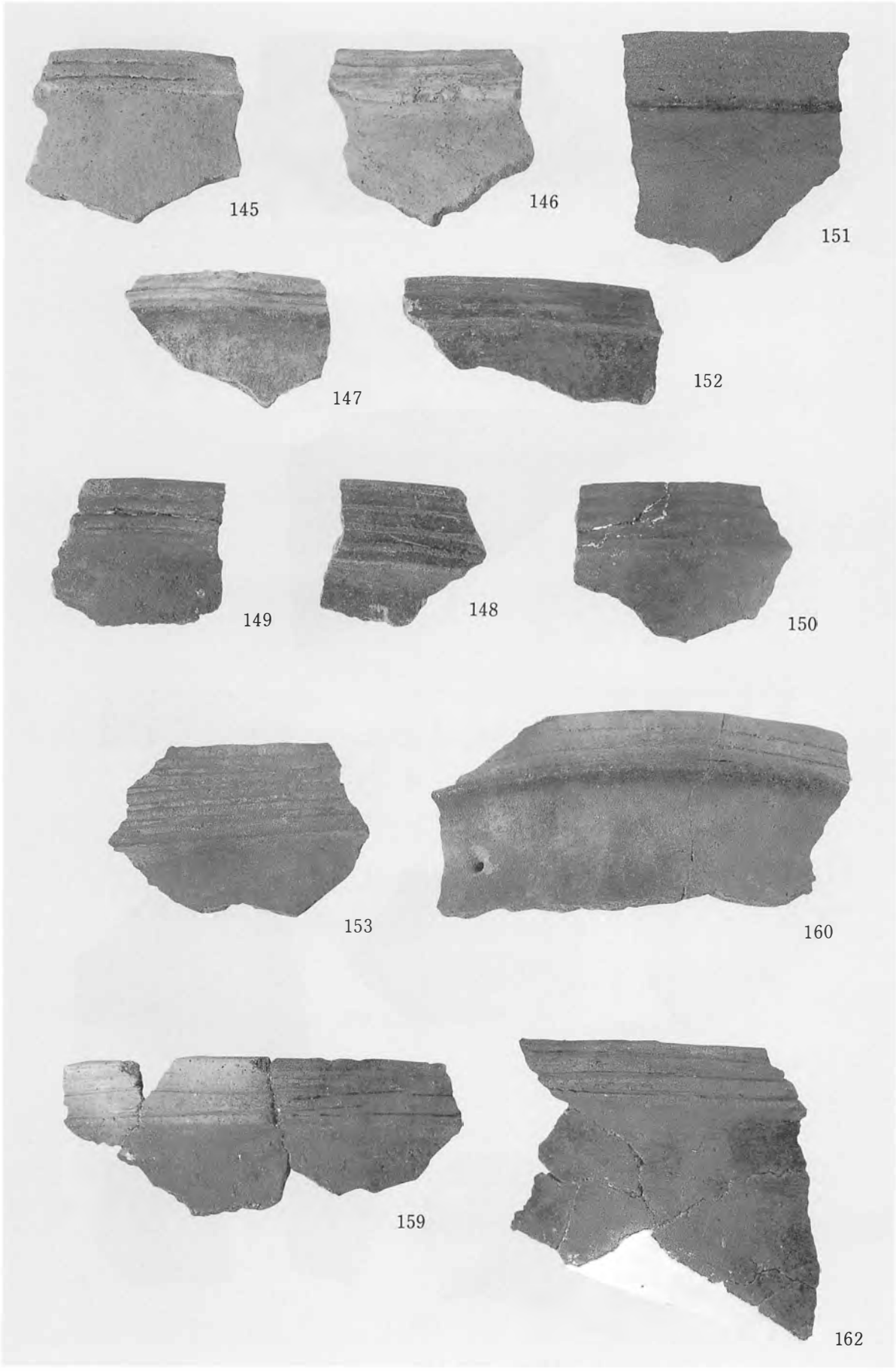
図版45　深鉢形土器ⅢＡ類

142

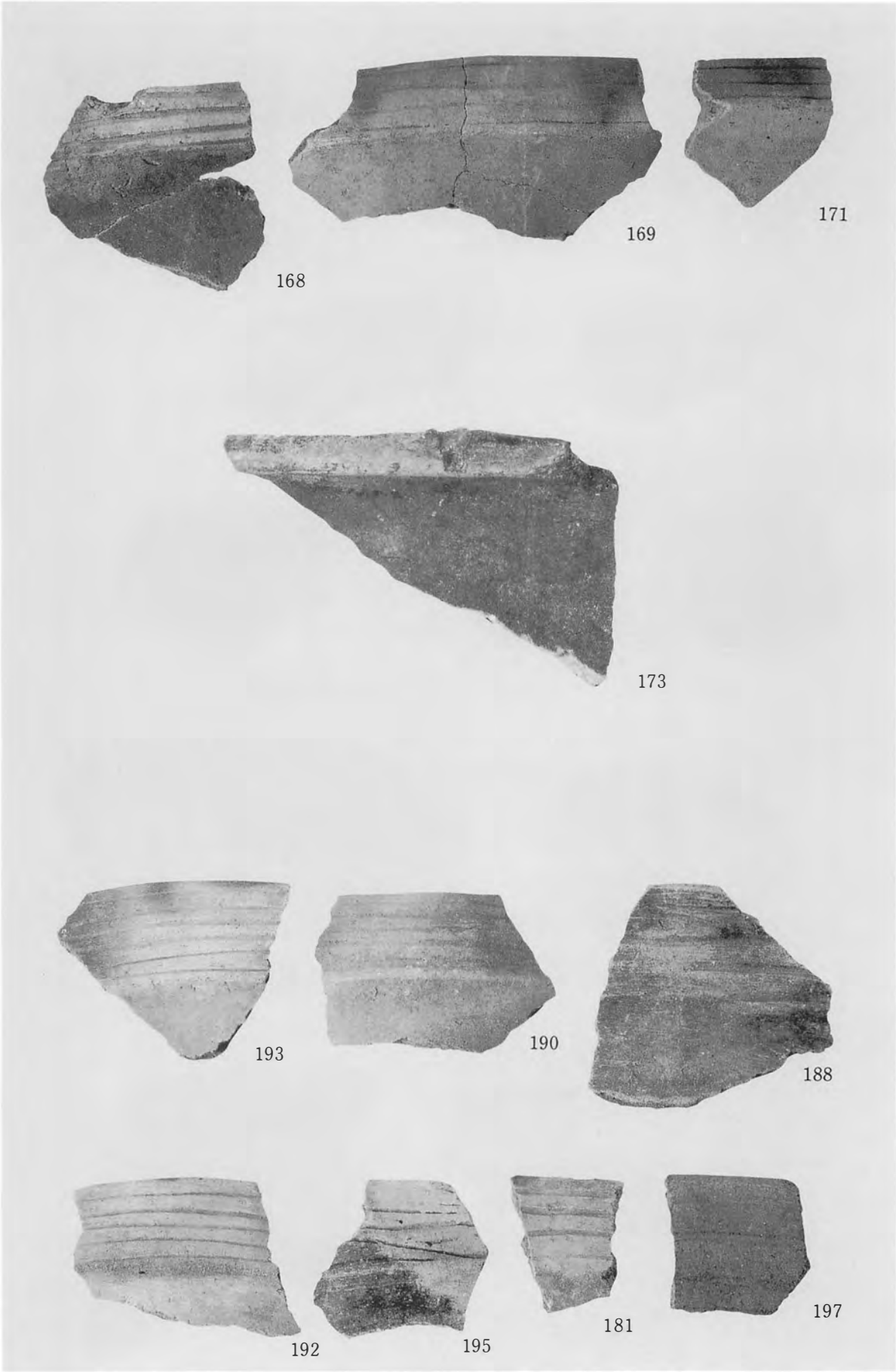
143

144

図版46　深鉢形土器ⅢＡ類；142，ⅢＡｇ類；143
ⅢＡｈ類；144

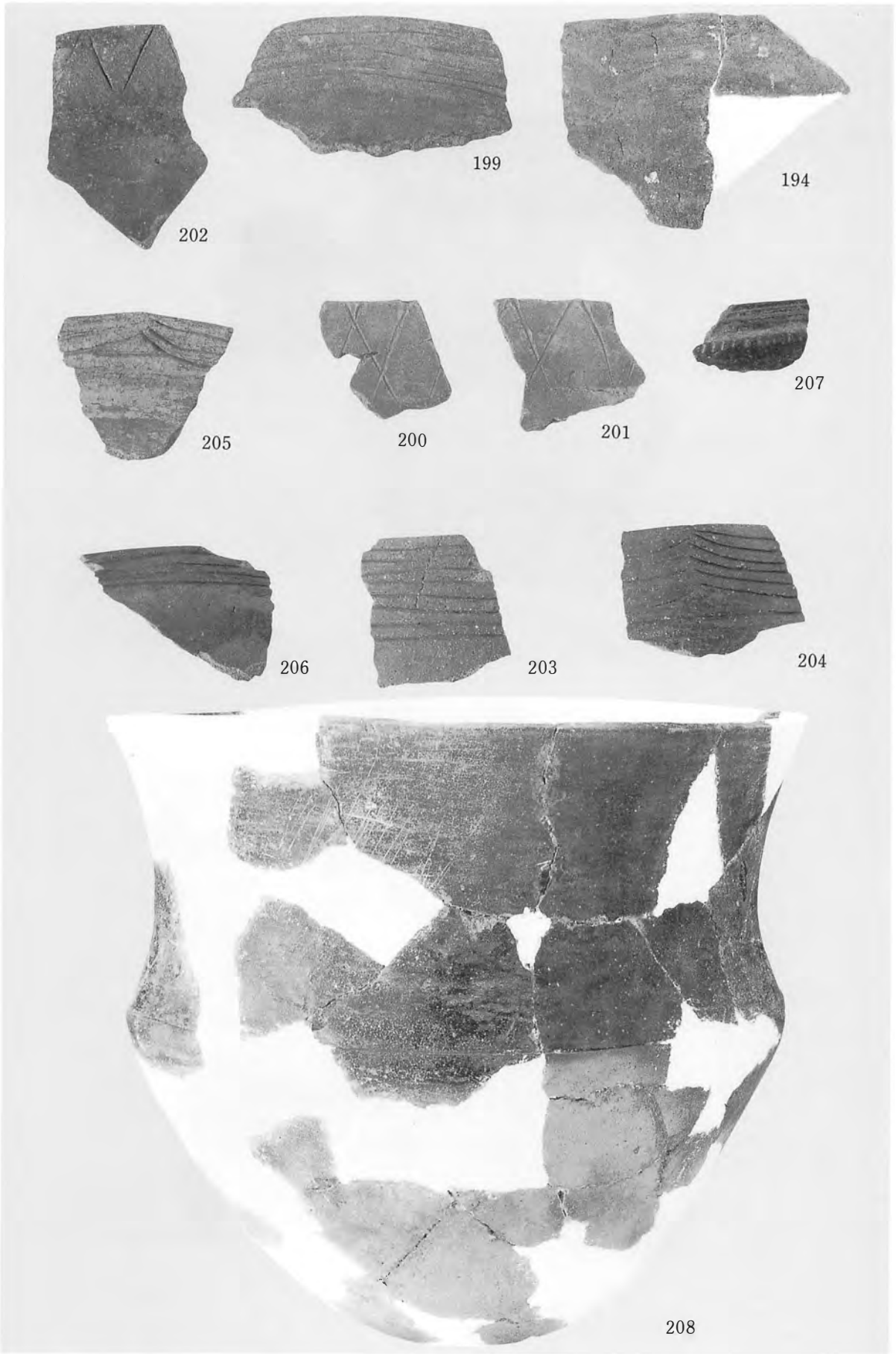


図版47　深鉢形土器ⅢＡ類



図版48　深鉢形土器ⅢＡ類

ⅢＡｇ類；173,　ⅢＡｈ類；197

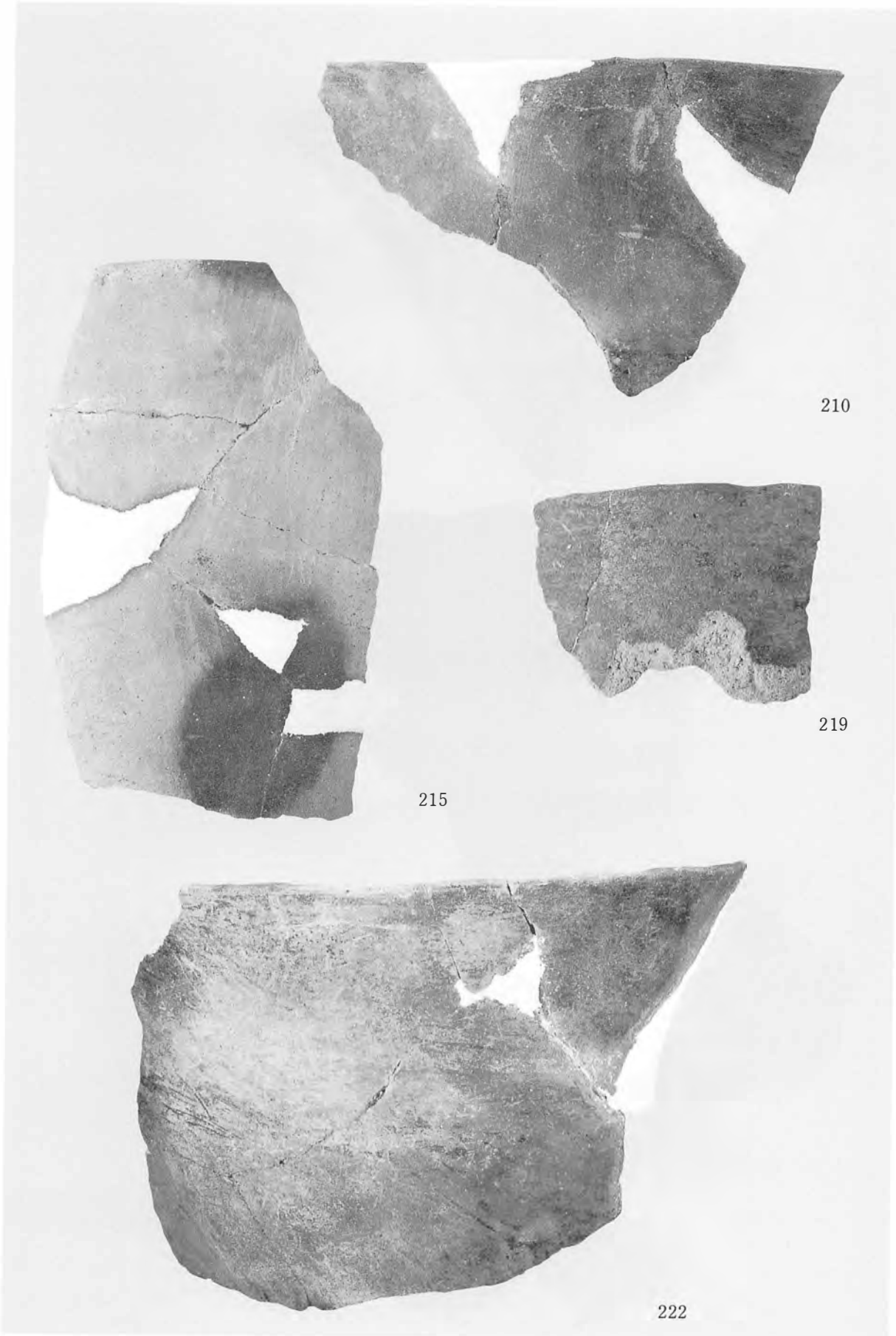


図版49　深鉢形土器ⅢＡ類；194，ⅢＡｈ類；199
ⅣＡ類；200～206，ⅣＢａ類；208

209

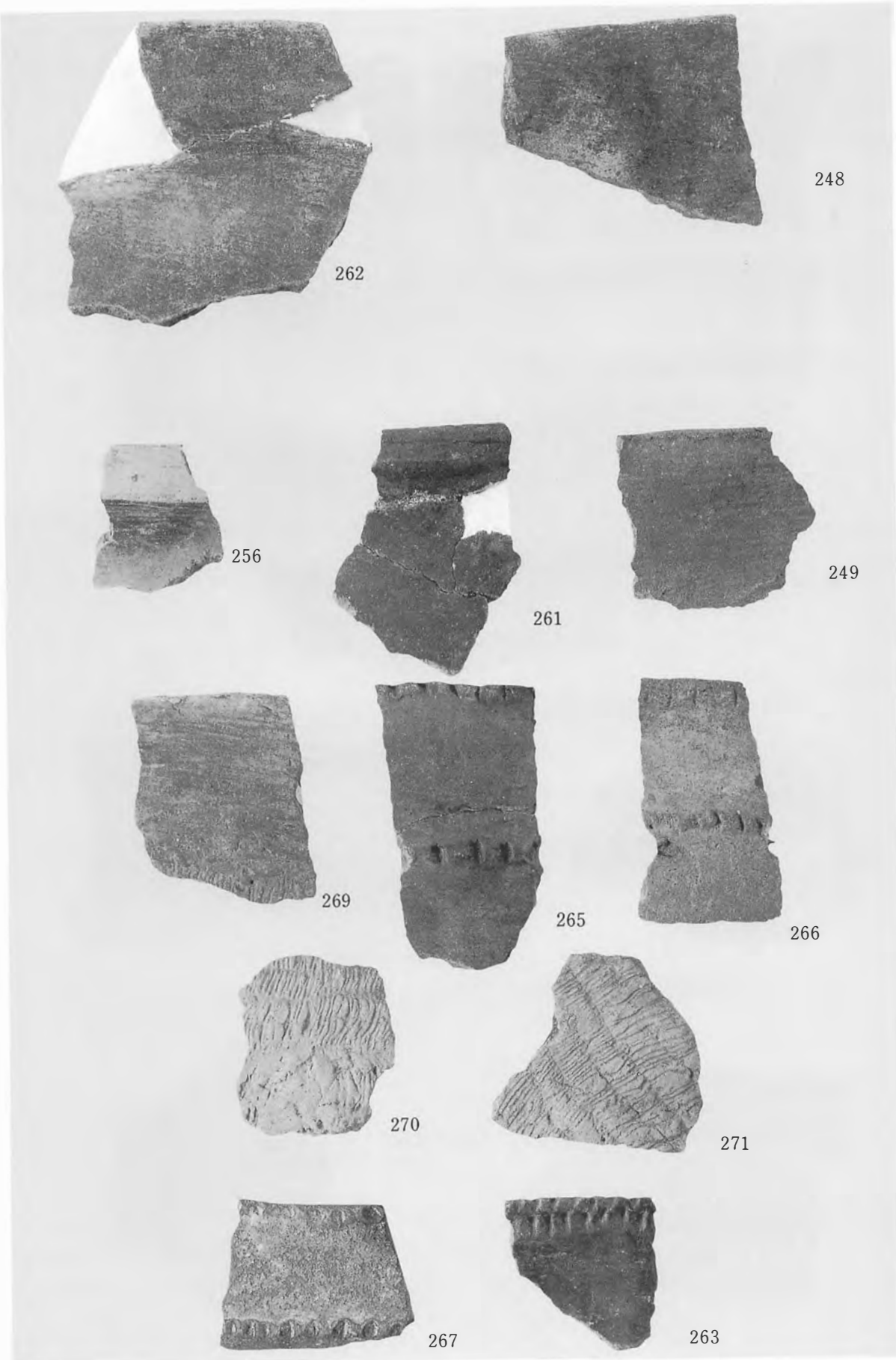
211

図版50　深鉢形土器ⅣＢａ類；209，ⅣＢｂ類；211

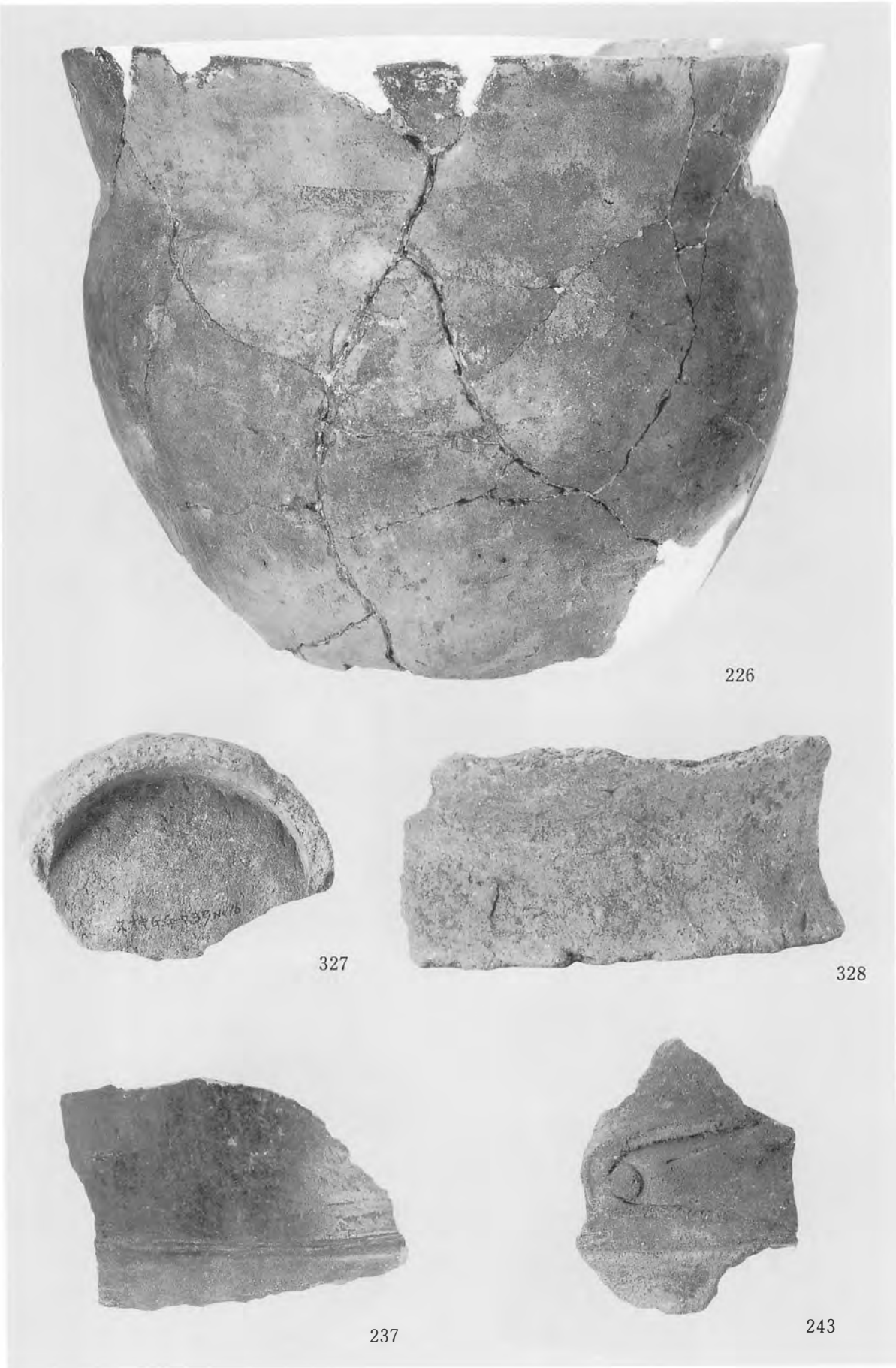


図版51　深鉢形土器ⅣＢｂ類；210・215
ⅣＢｃ類；222

図版52　深鉢形土器Ⅶ類（ａ；242,　ｂ；238）



図版53　深鉢形土器Ⅷ B 類；248・249，Ⅷ A 類；256・261・262
Ⅸ類；263・265～267，組織痕文土器；269～271



図版54　深鉢形土器Ⅵ類；226，Ⅶａ類；237
Ⅶｅ類；243，底部Ⅵ類；327・328

326

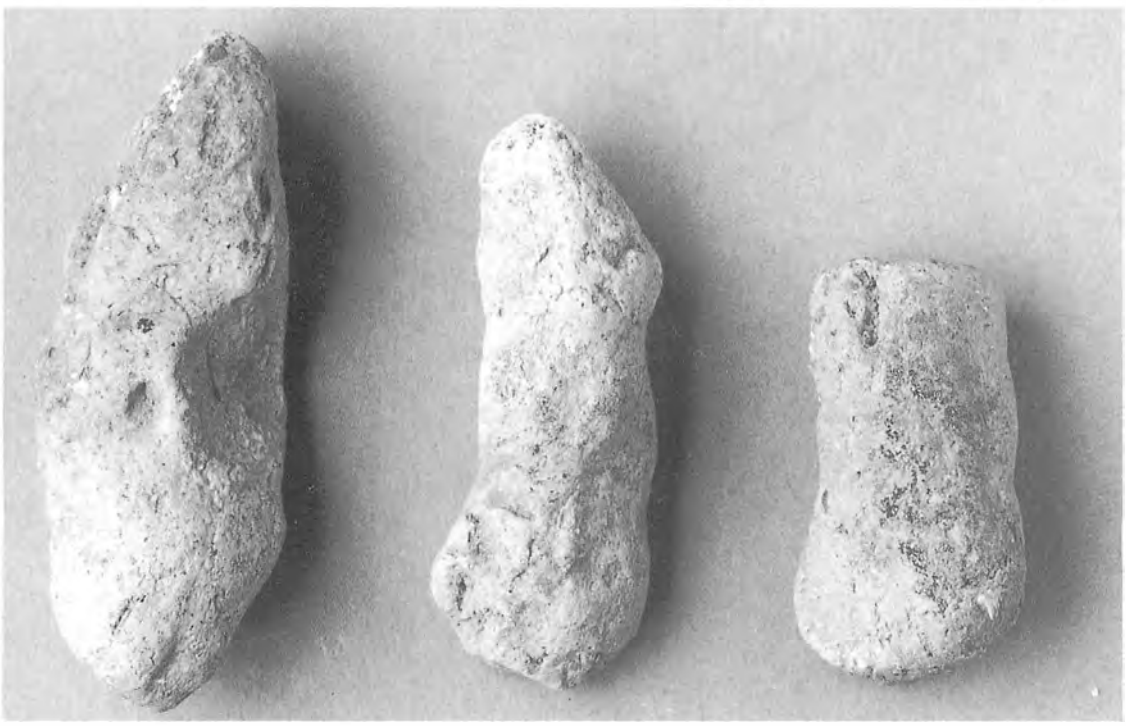
332

324

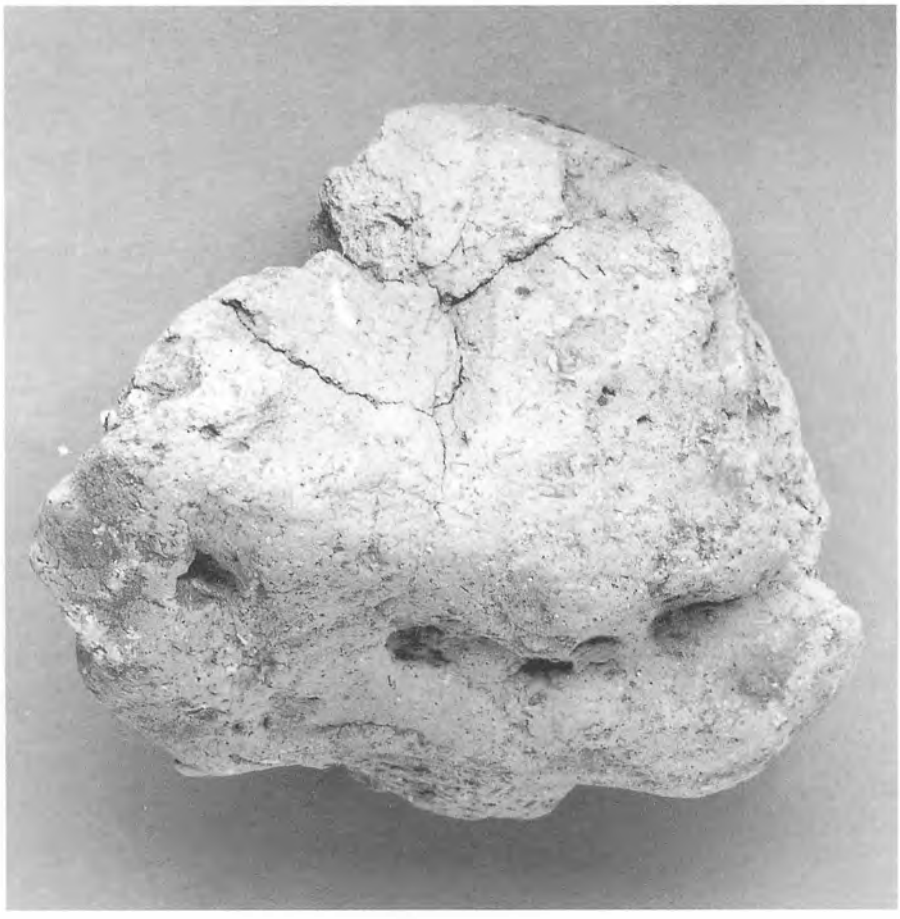
225

図版55　深鉢形土器Ⅵ類；225，底部Ⅲ類；332
底部Ⅳ類；324・326

図版56　高坏形土器・土製品等

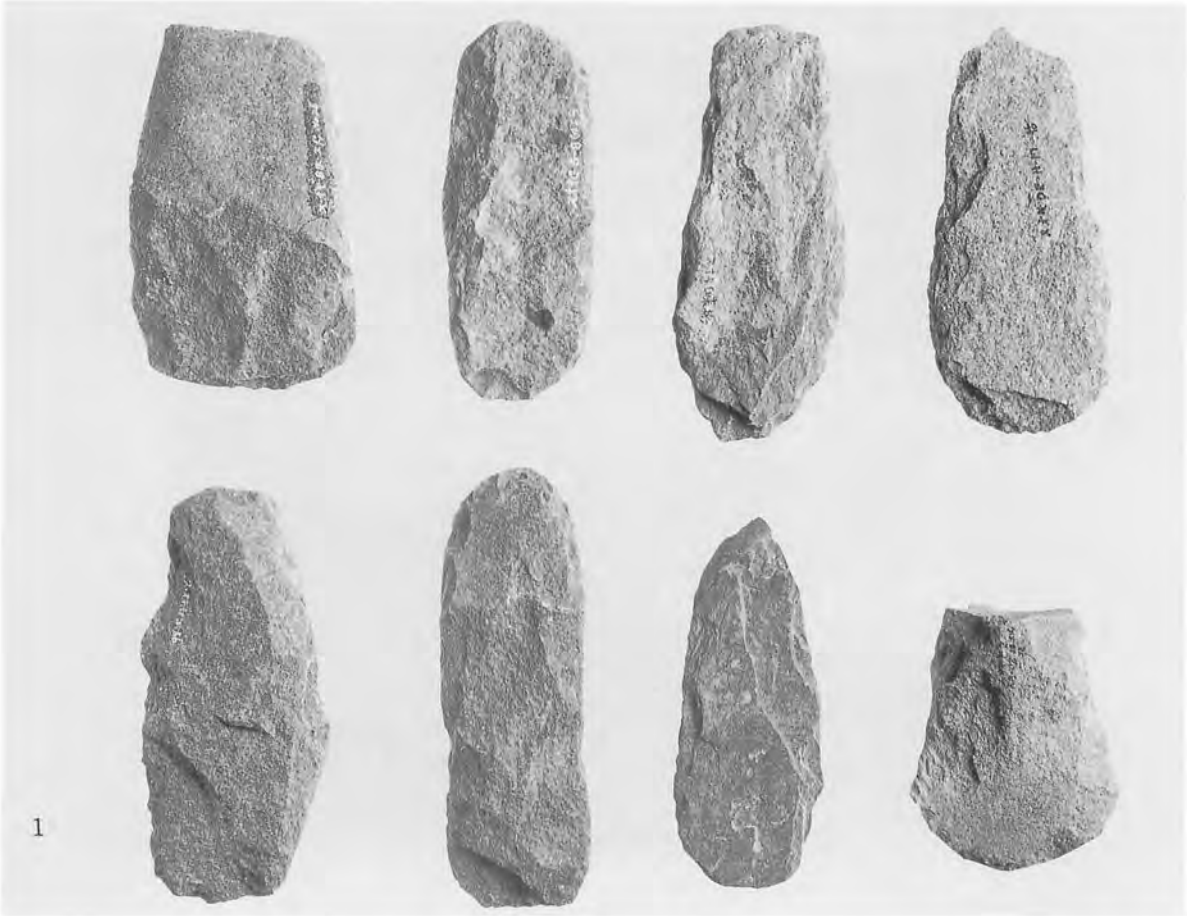


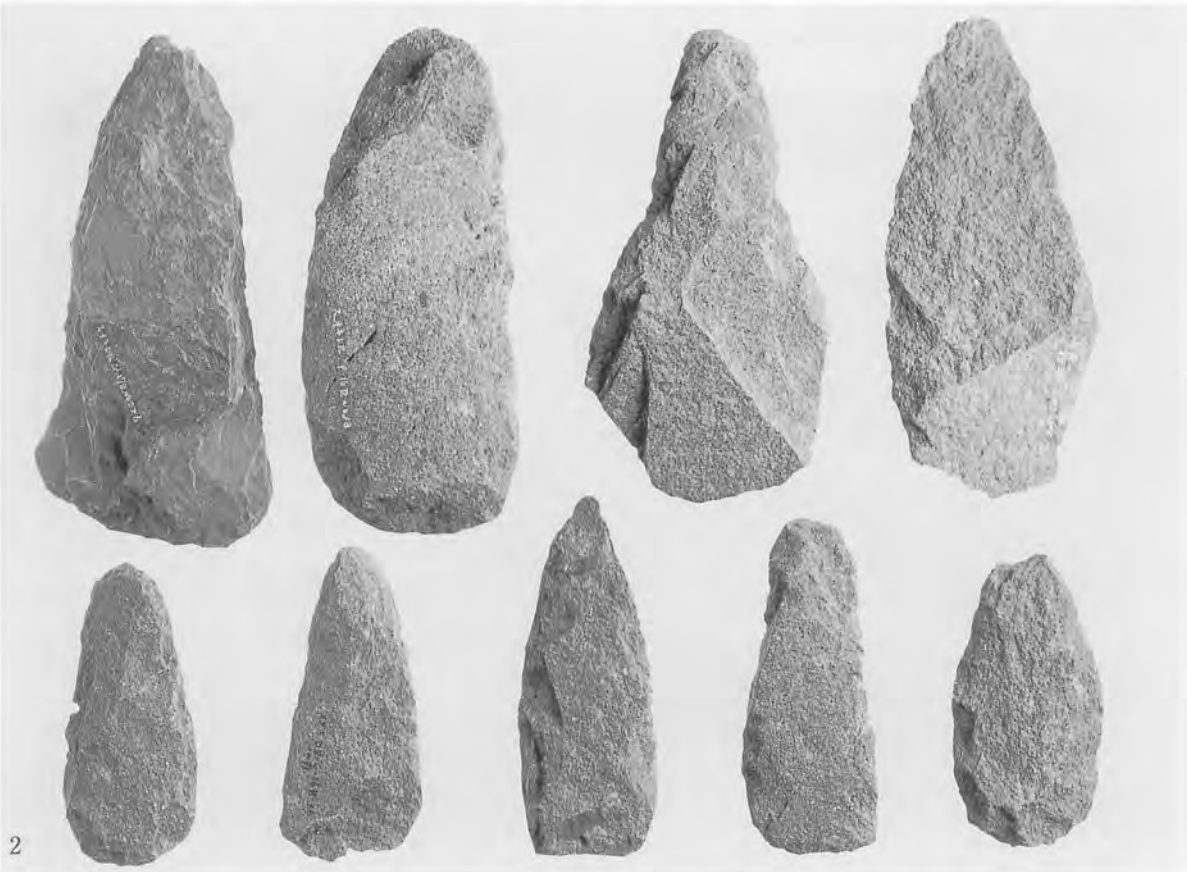
図版57　土製品・焼成粘土塊



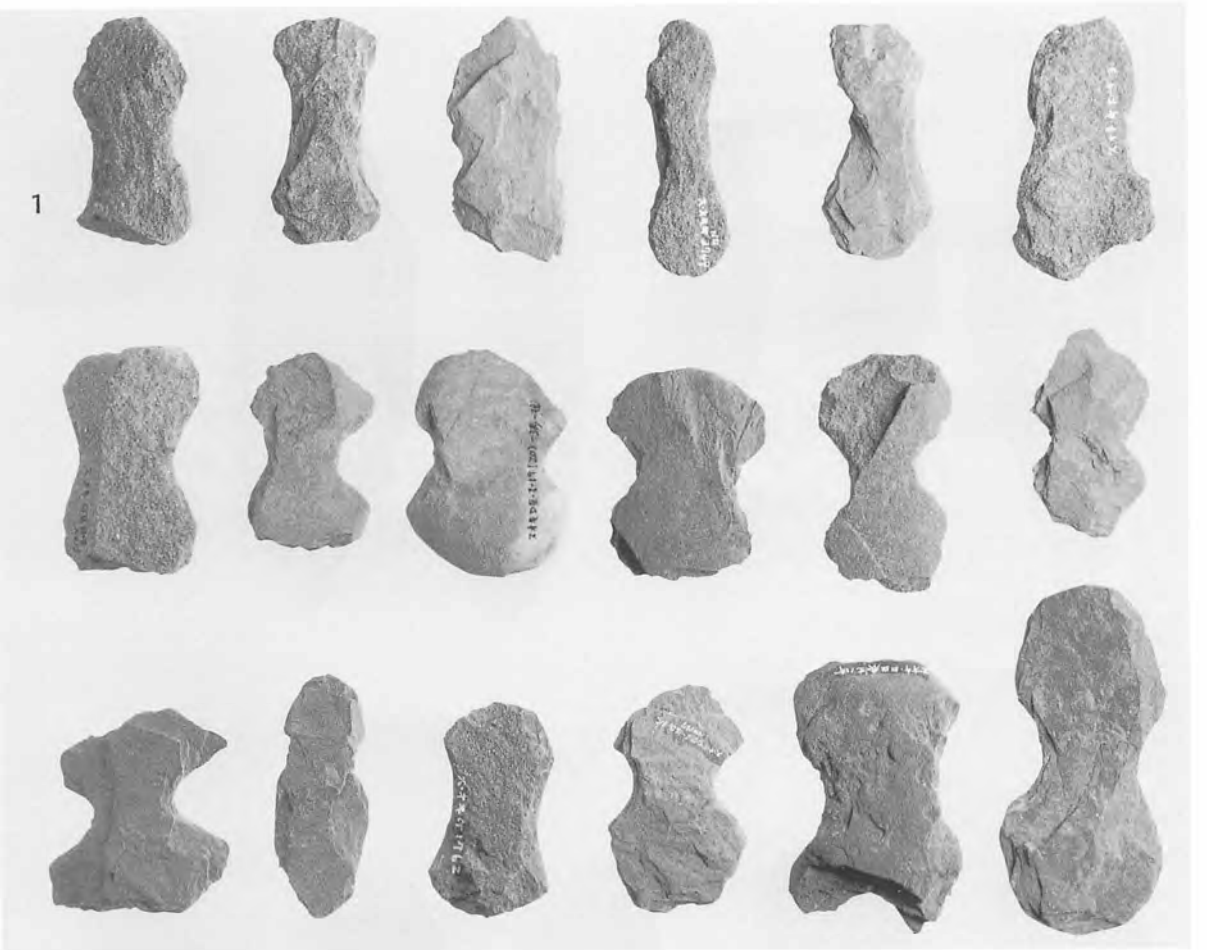
図版58　焼成粘土塊

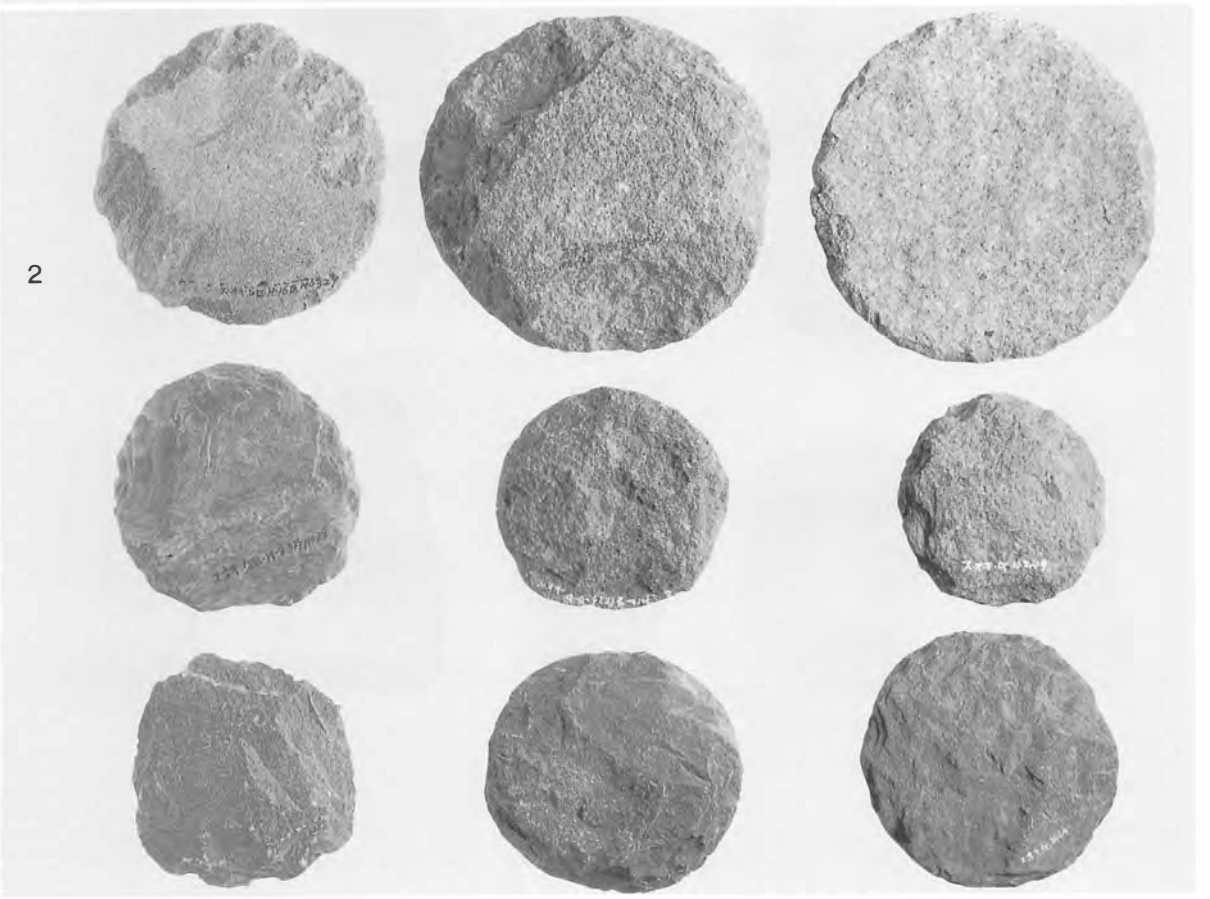
図版59　焼成粘土塊



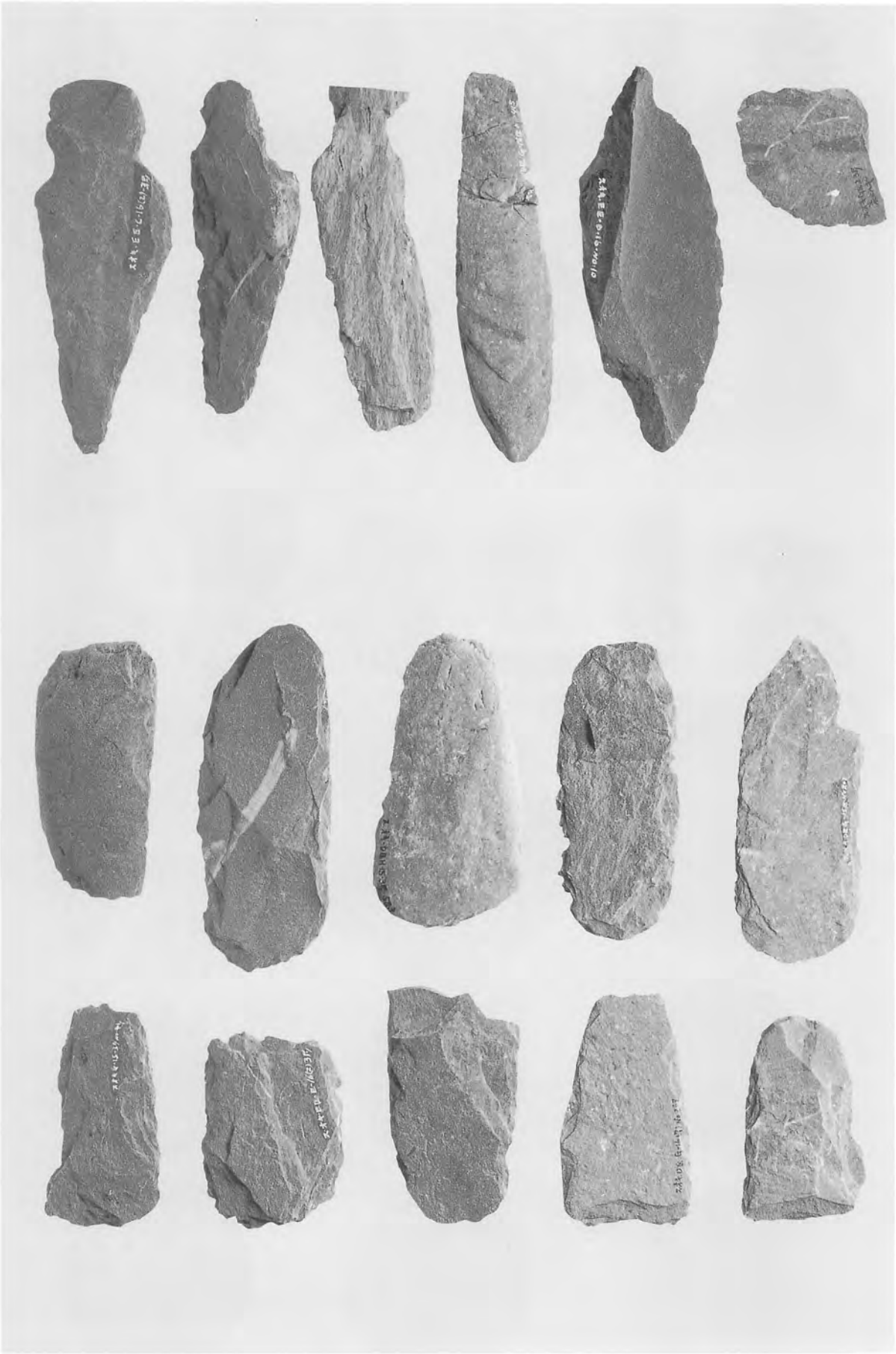


図版60　打製石斧　1；Ⅰ類（短冊形）2；Ⅱ類（バチ形）

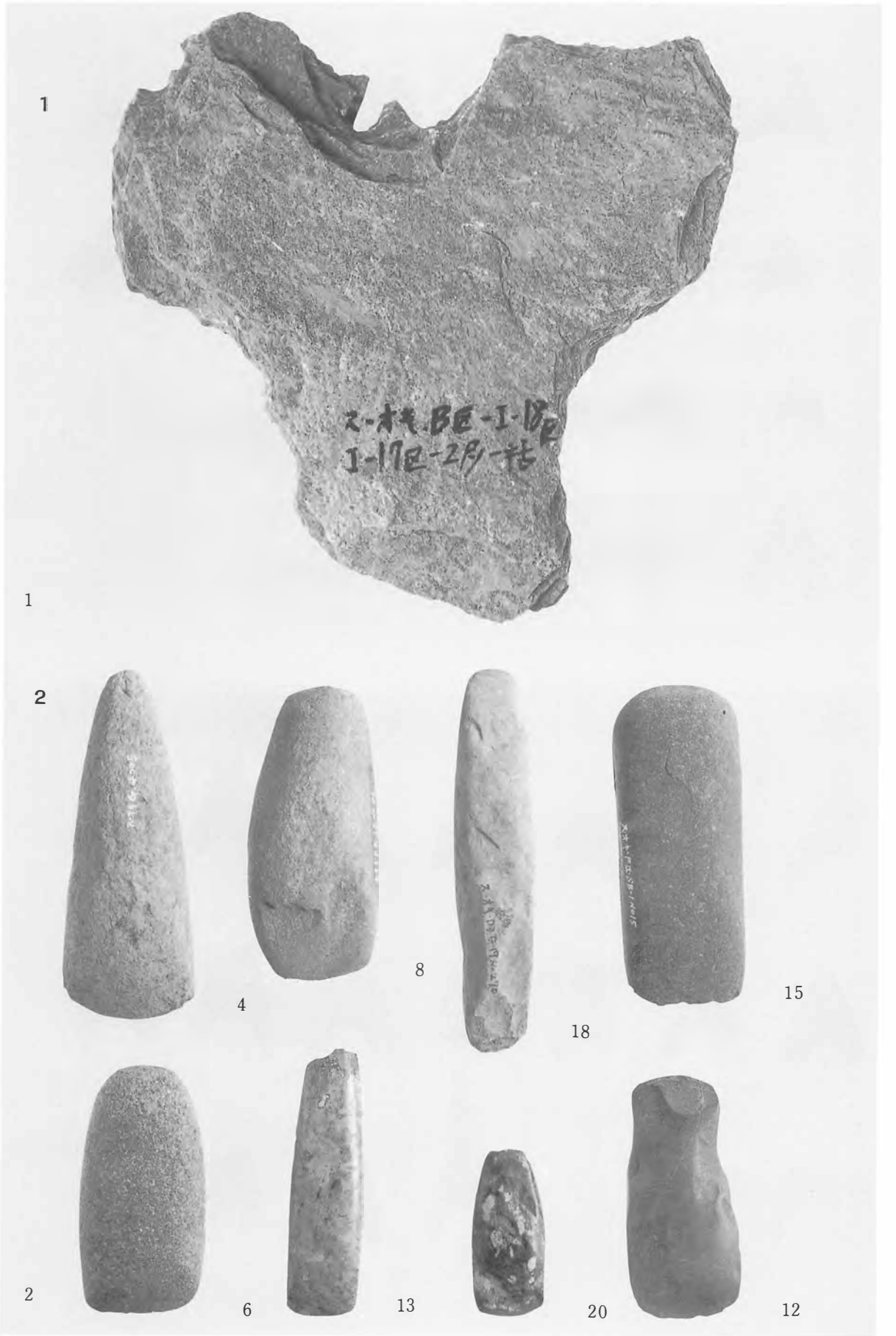




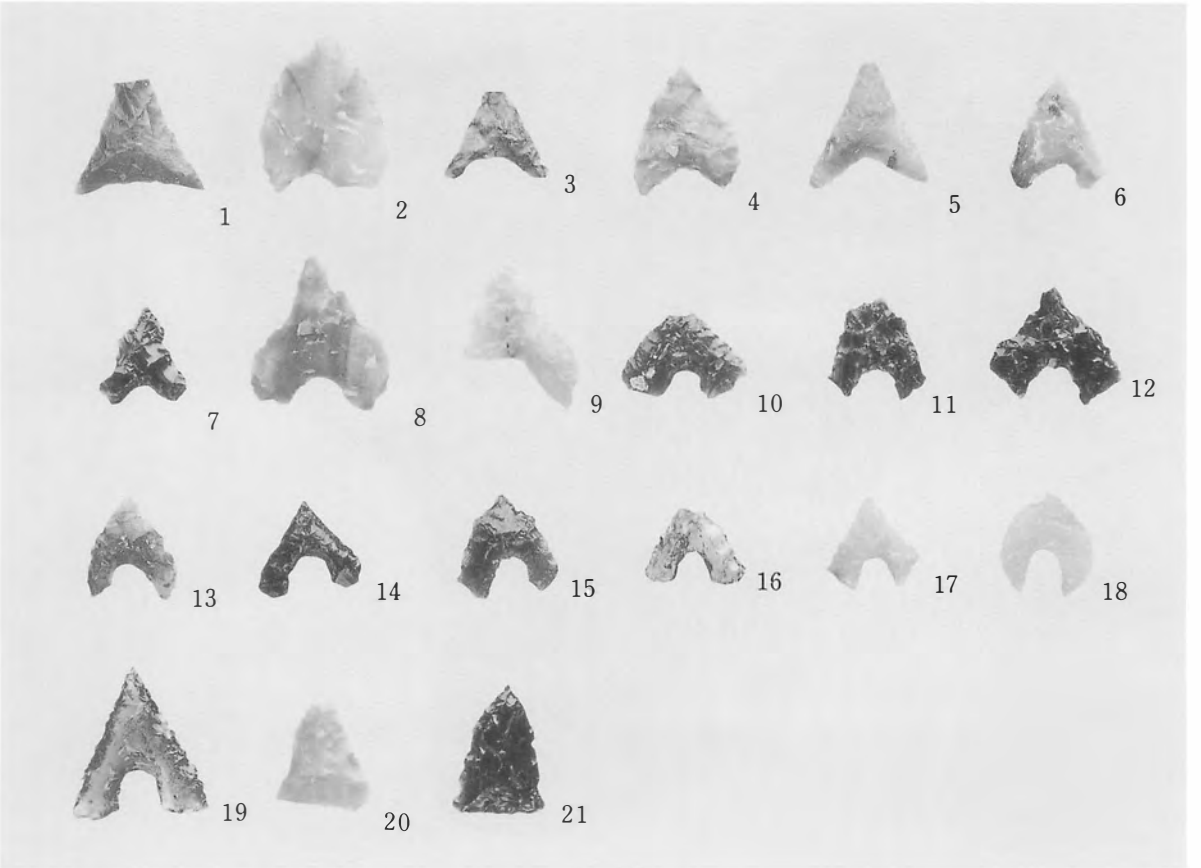
図版61　打製石斧　1；Ⅲ類（分銅形）2；Ⅳ類（円盤状石器）

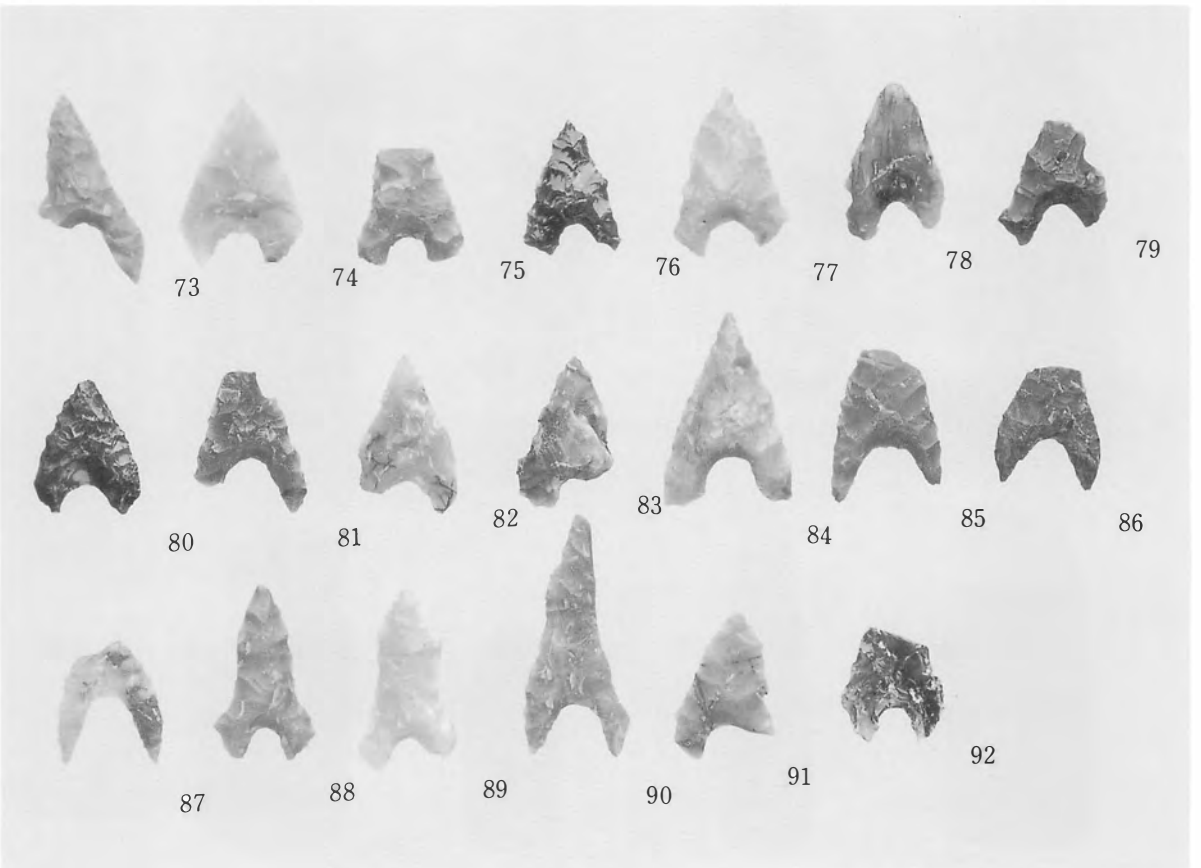


図版62　打製石斧Ⅴ類

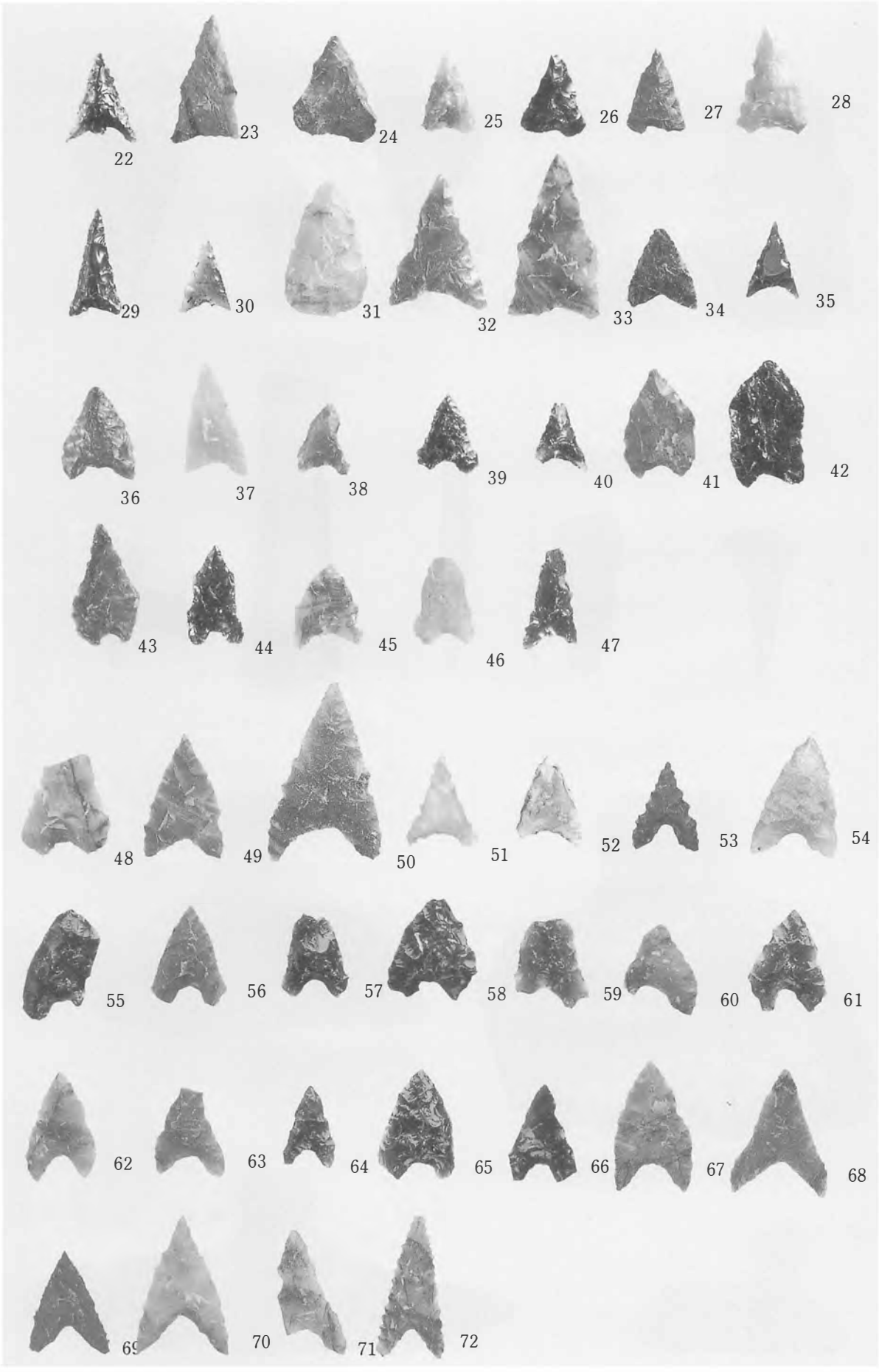


図版63　1；打製石斧Ⅵ類，2；磨製石斧

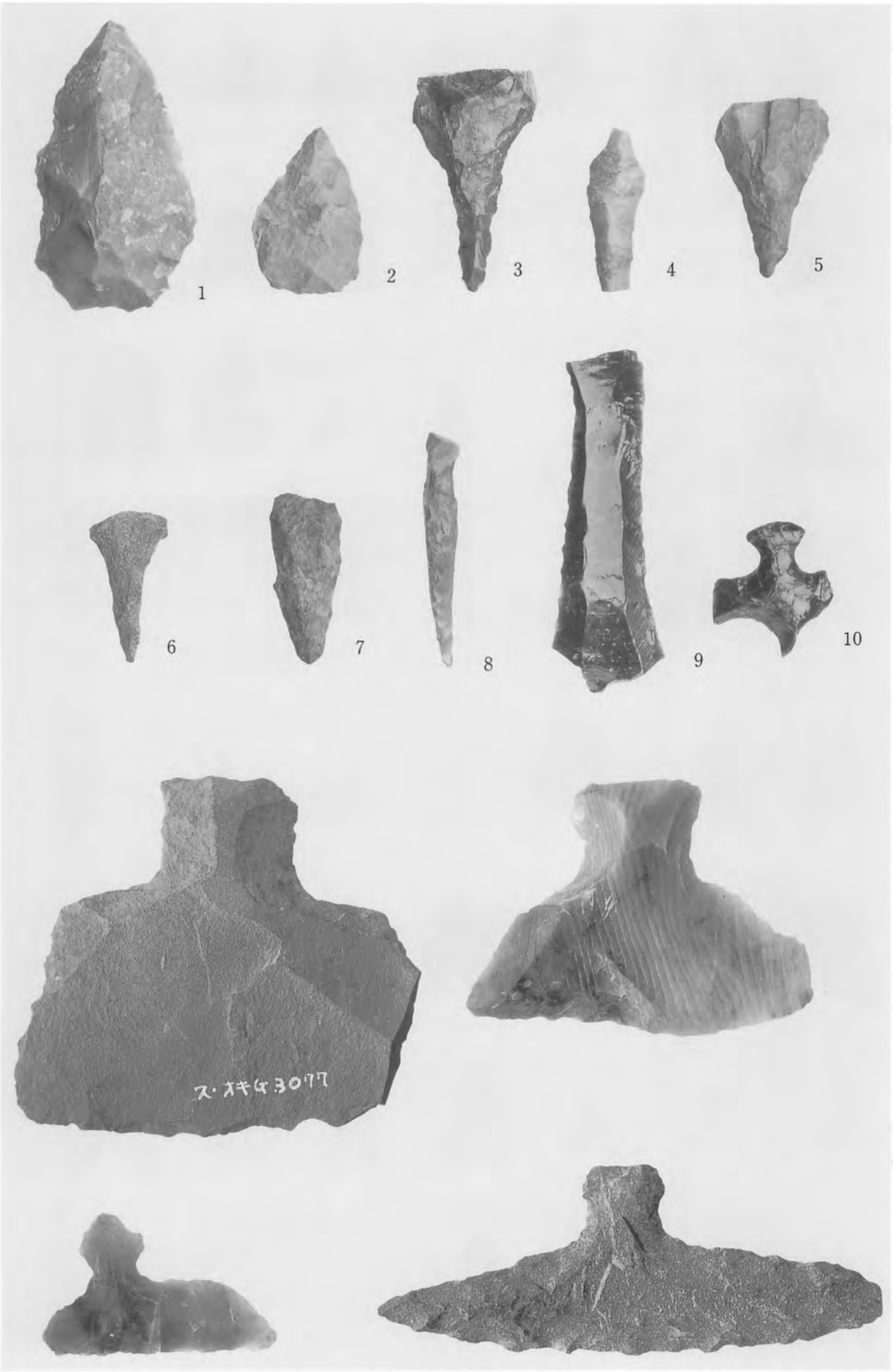

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21


73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92

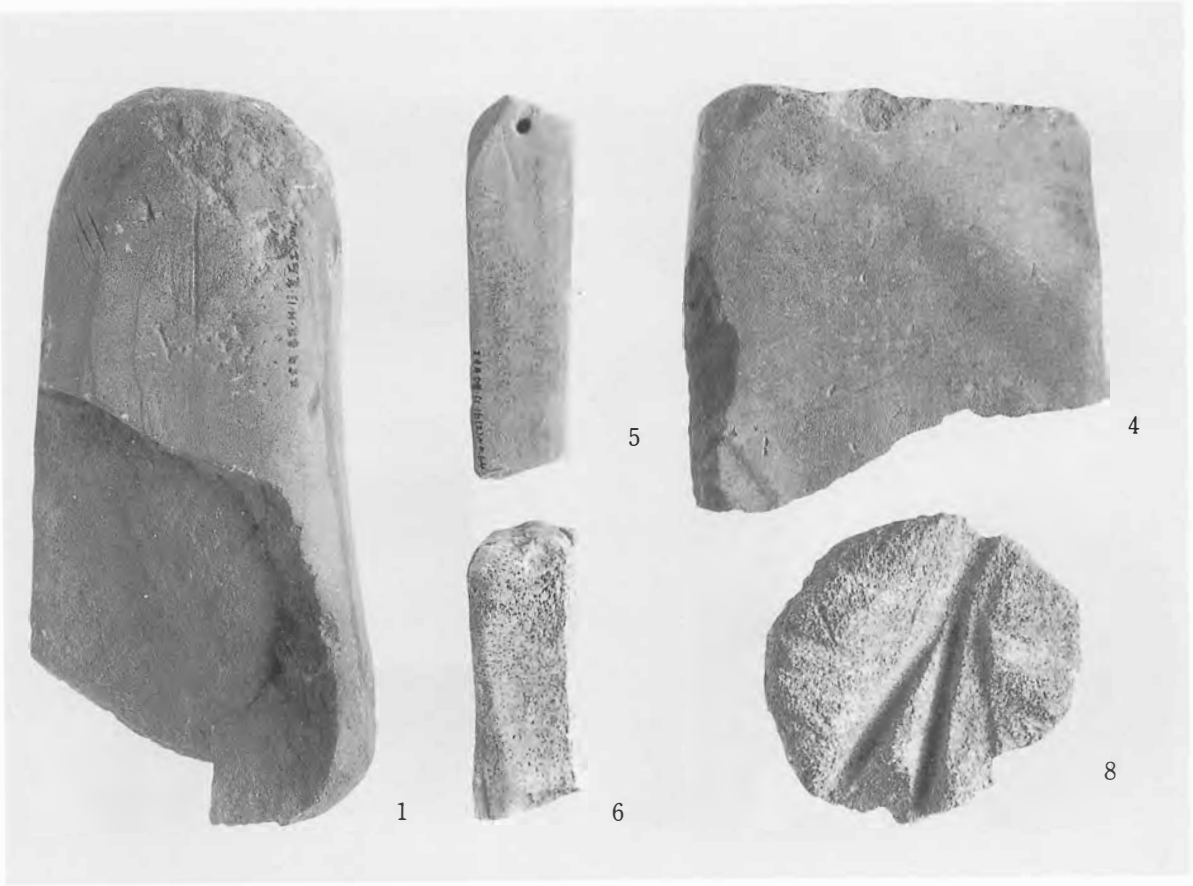
図版64　石鏃

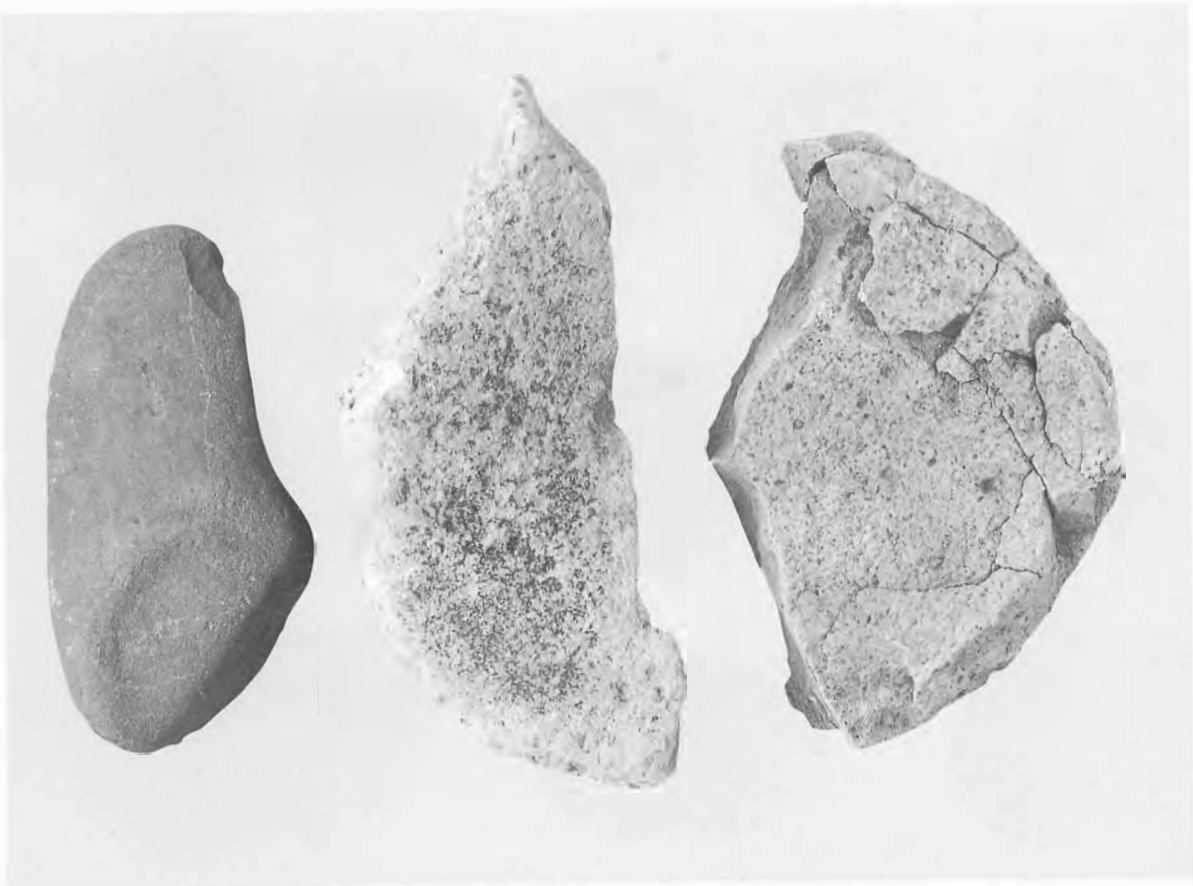

22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72

図版65　石鏃



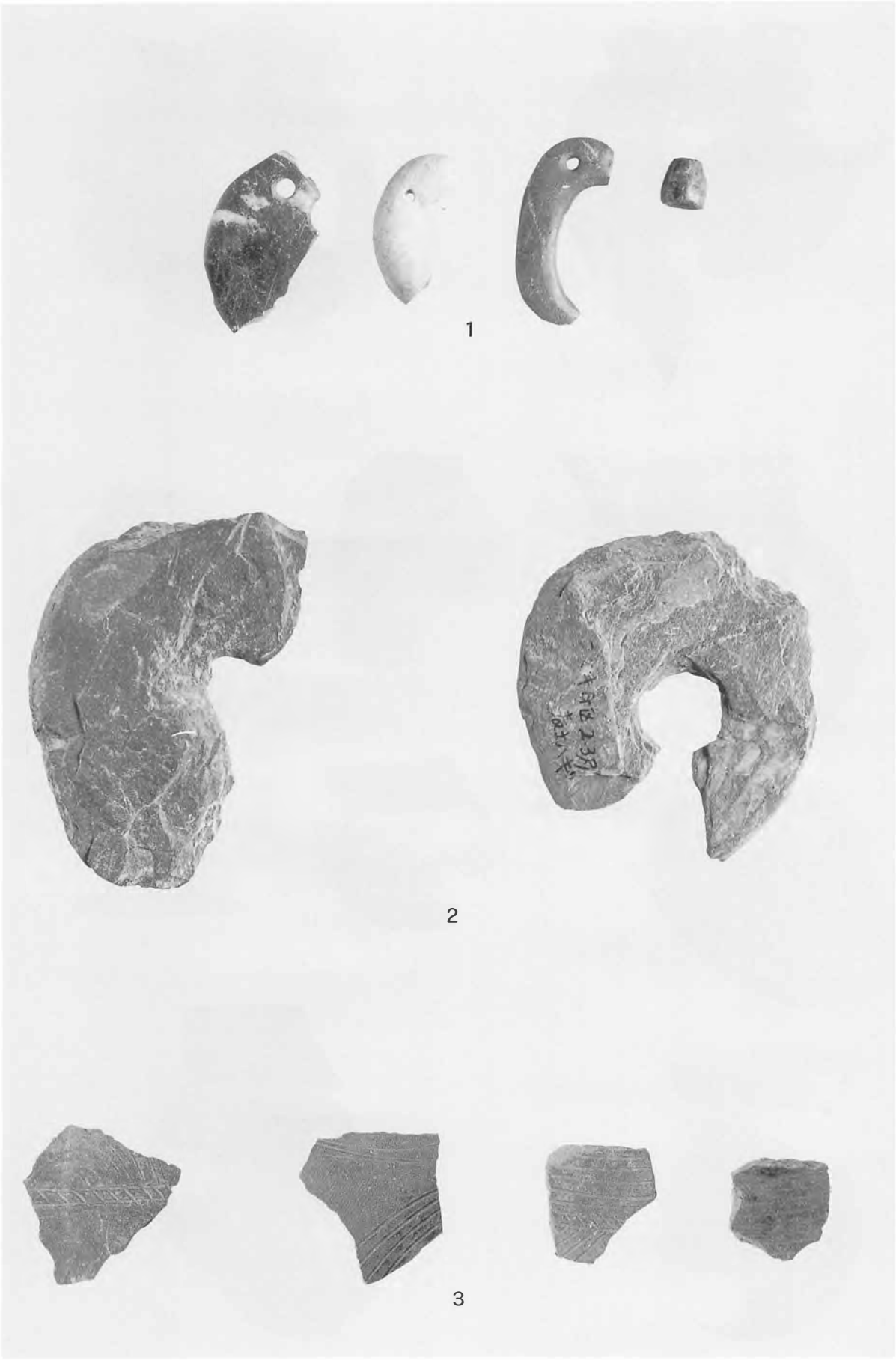
図版66　石錐・石匙等



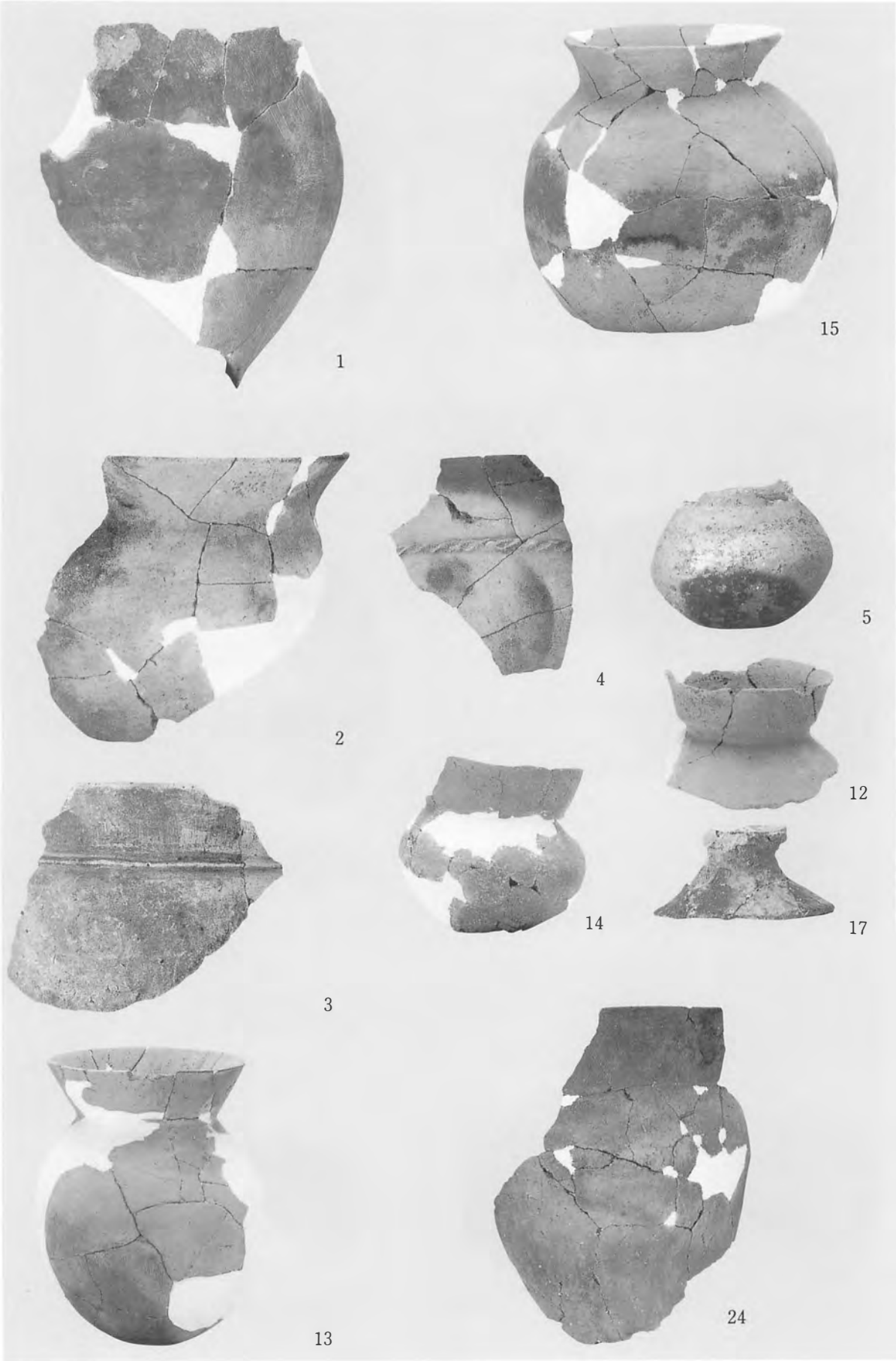


図版67　砥石（1・4～6・8），石皿

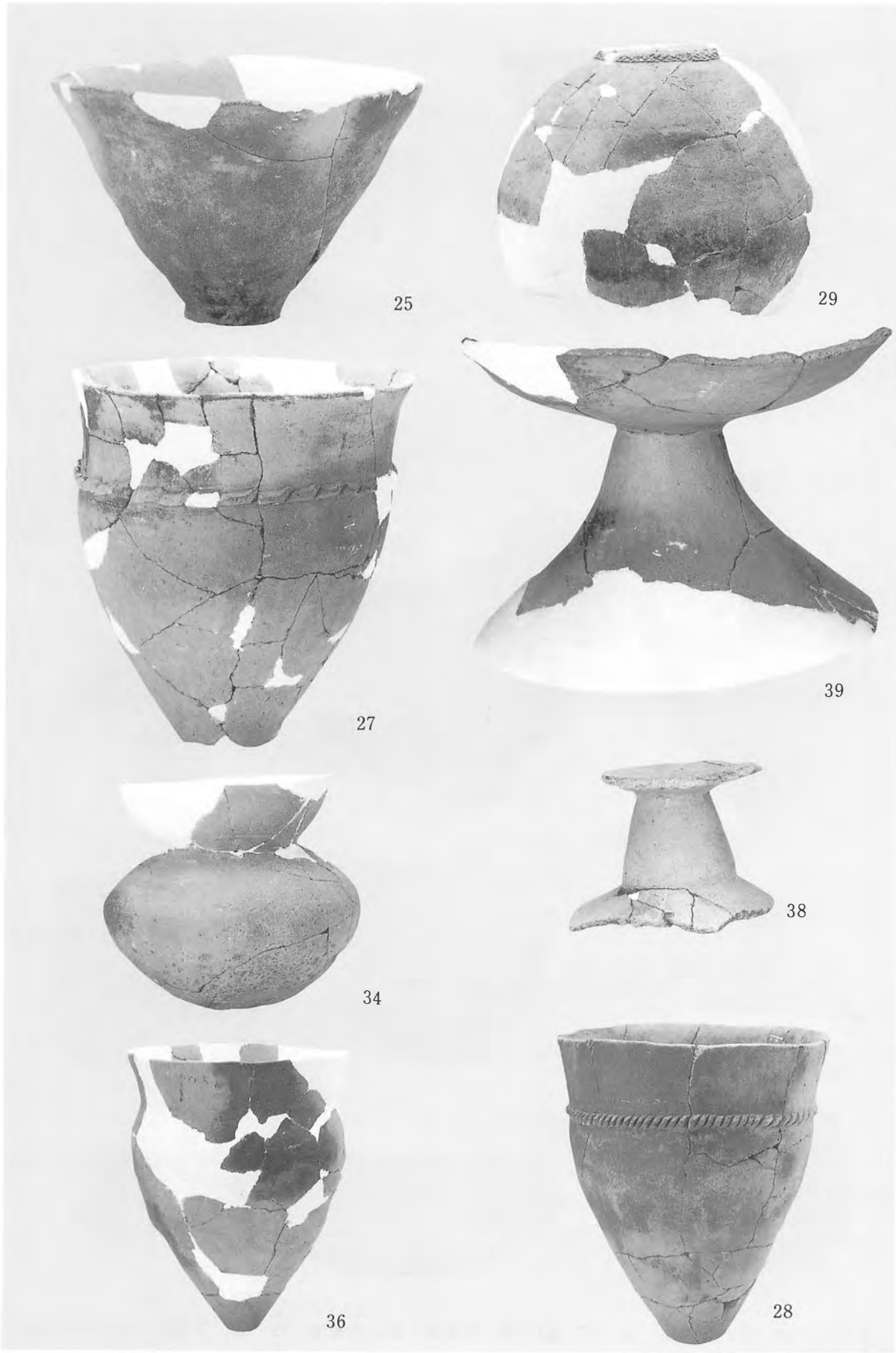
図版68　1；磨石・敲石，2；石錘



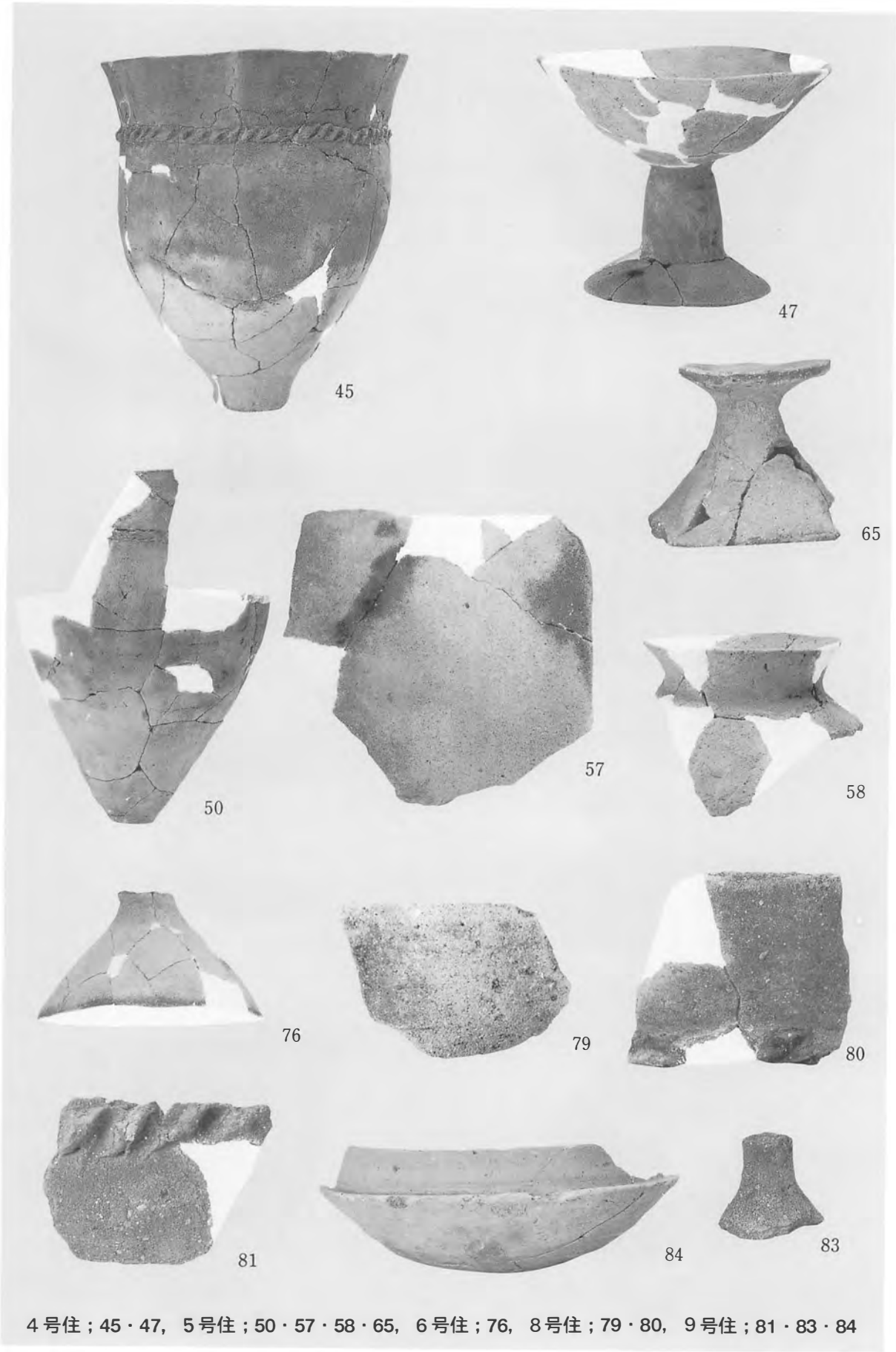
図版69　1；石製装身具　2；不明石製品　3；弥生式土器



図版70　１・２号竪穴式住居跡出土土器（24；２号住，その他：１号住）

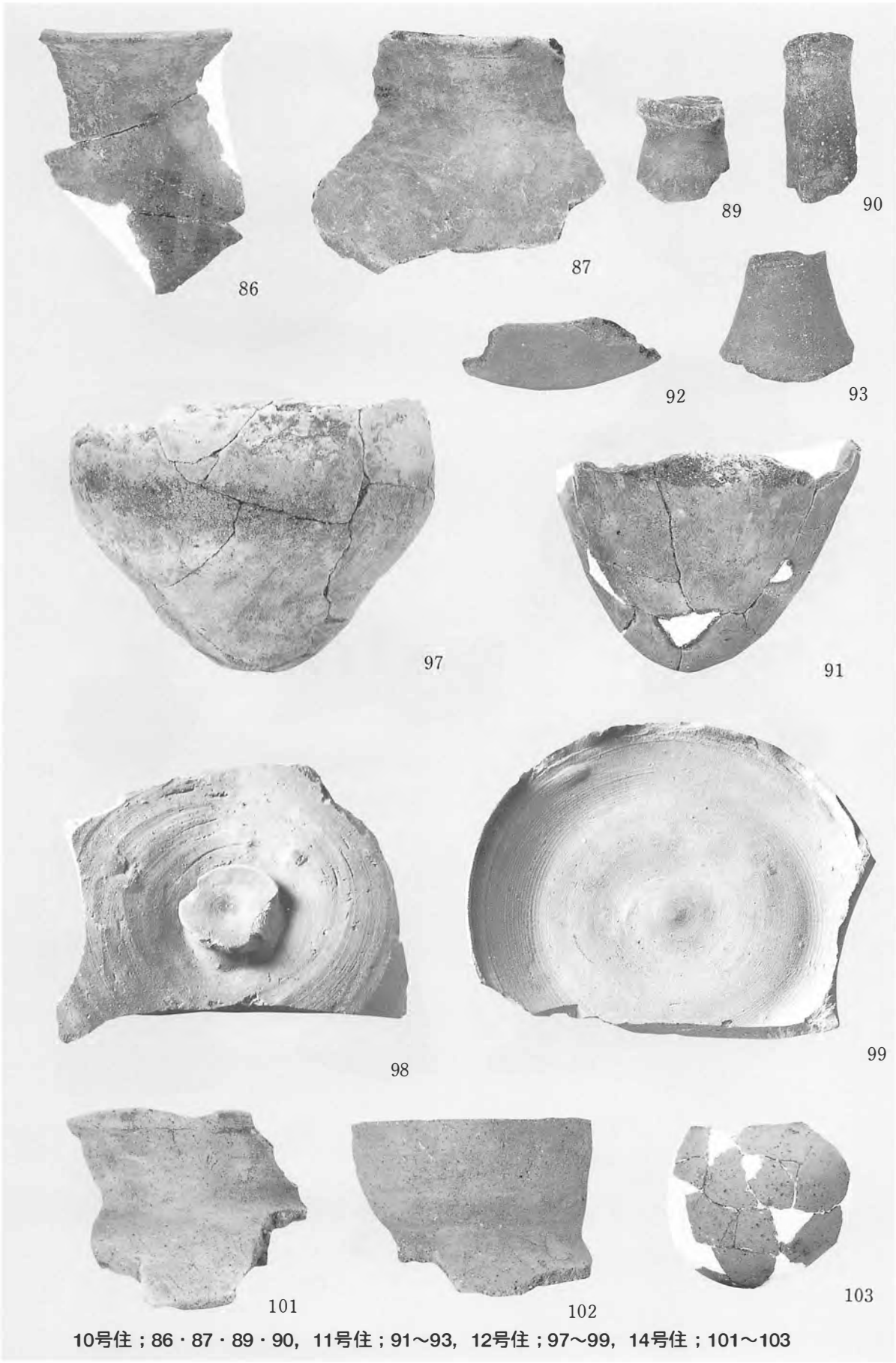


図版71　３号竪穴式住居跡出土土器



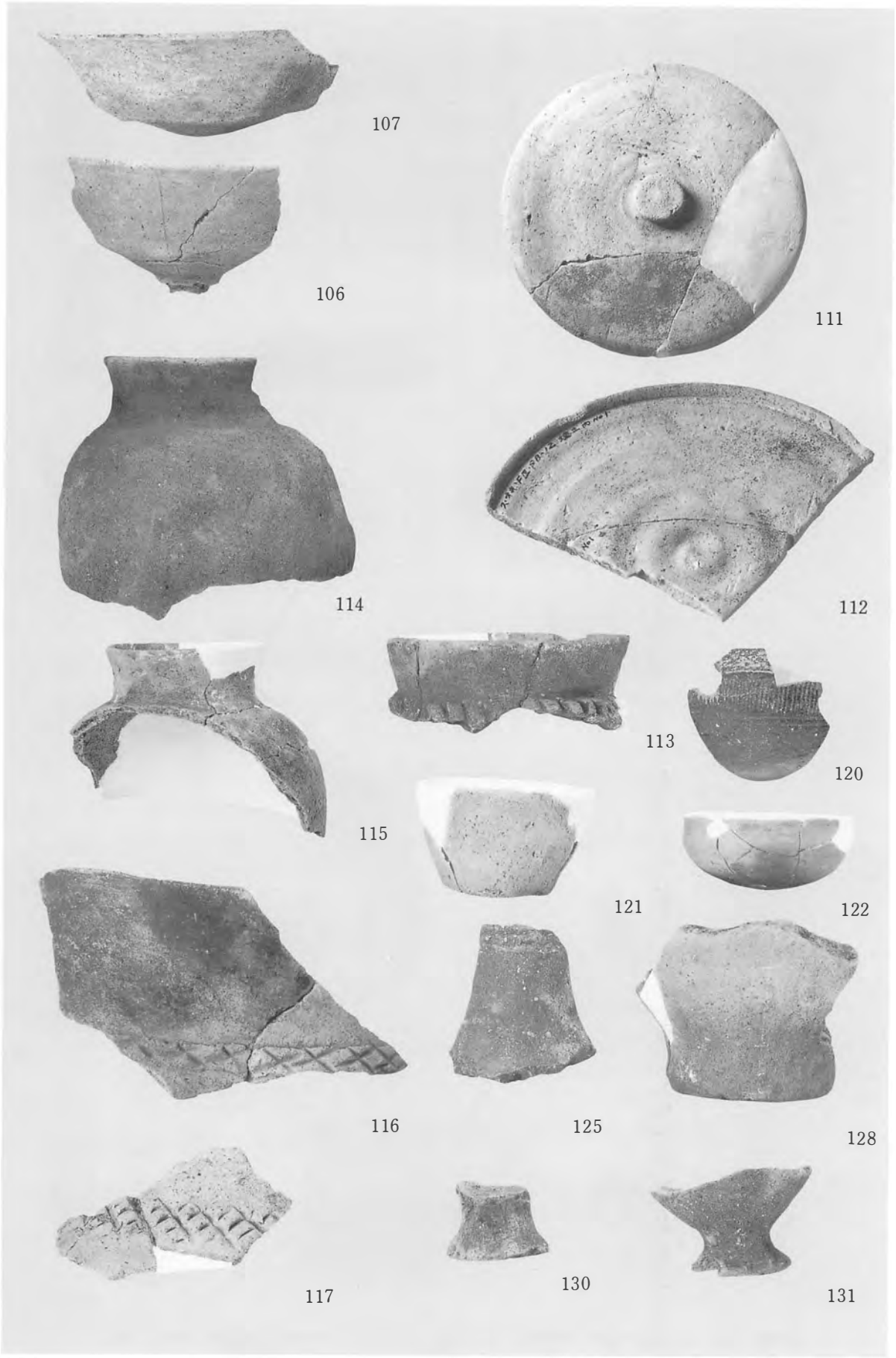
4号住；45・47，5号住；50・57・58・65，6号住；76，8号住；79・80，9号住；81・83・84

図版72　4～6・8・9号竪穴式住居跡出土土器

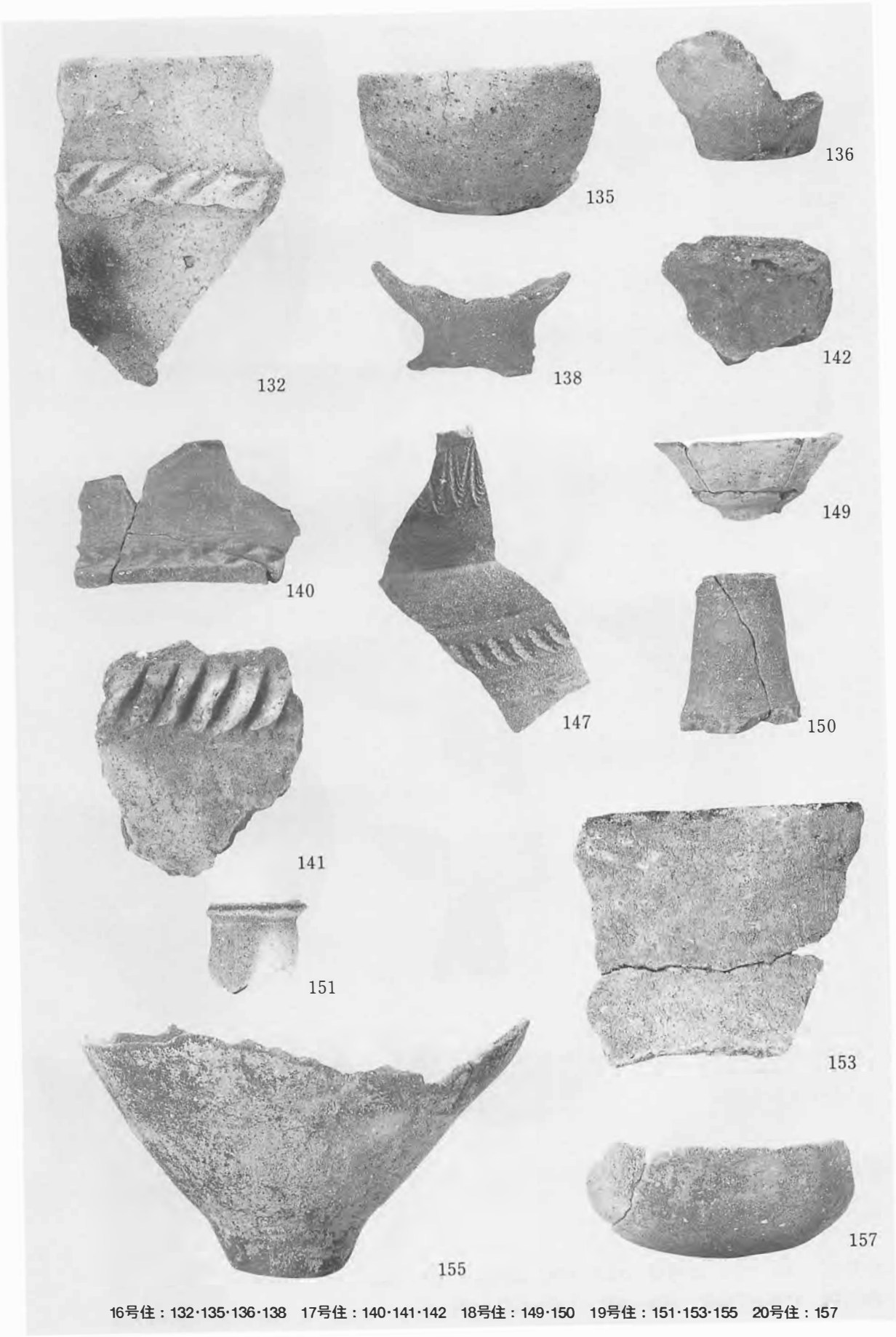


10号住；86・87・89・90，11号住；91～93，12号住；97～99，14号住；101～103

図版73　10～12・14号竪穴式住居跡出土土器

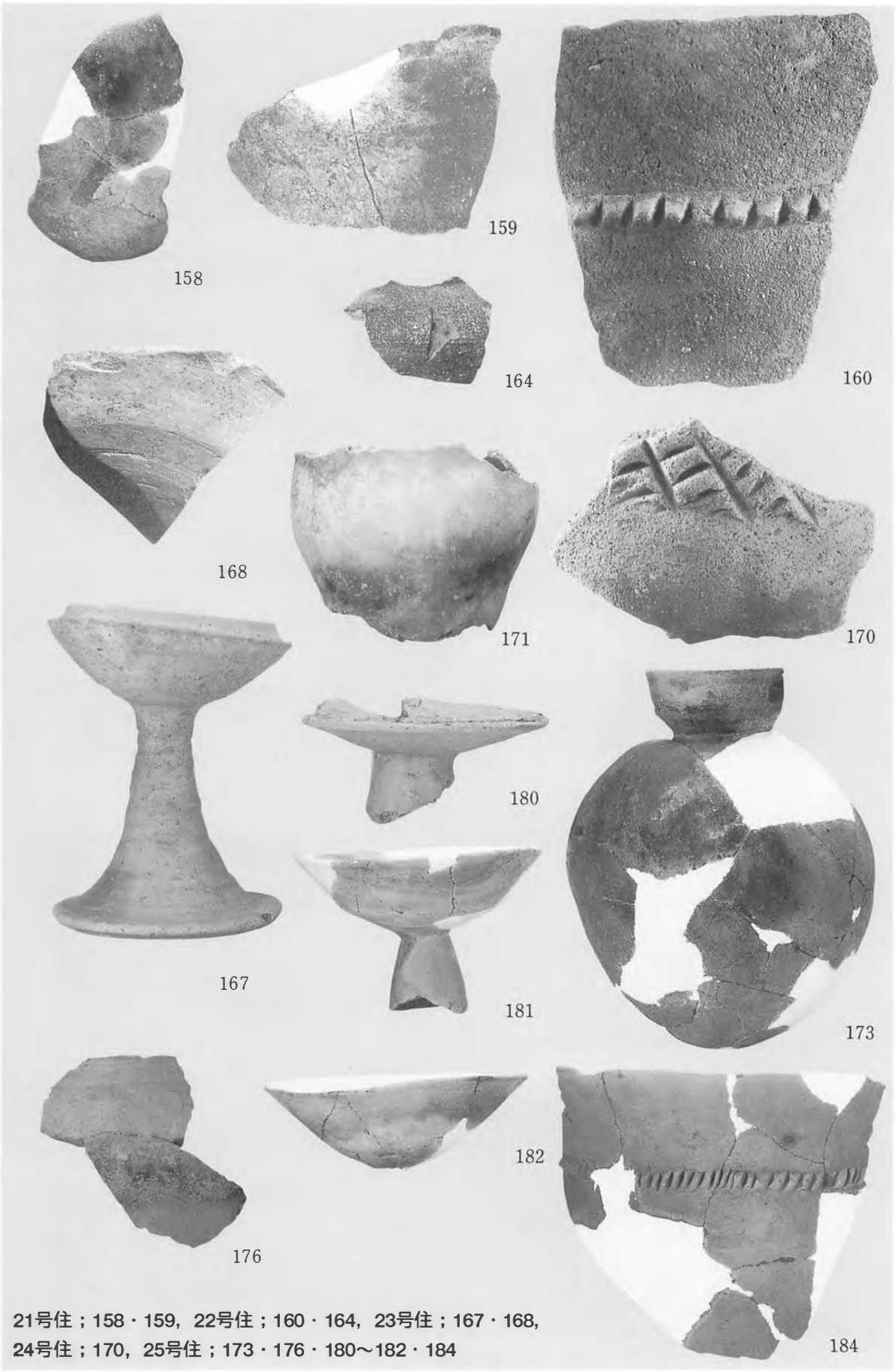


図版74　14・15号竪穴式住居跡出土土器



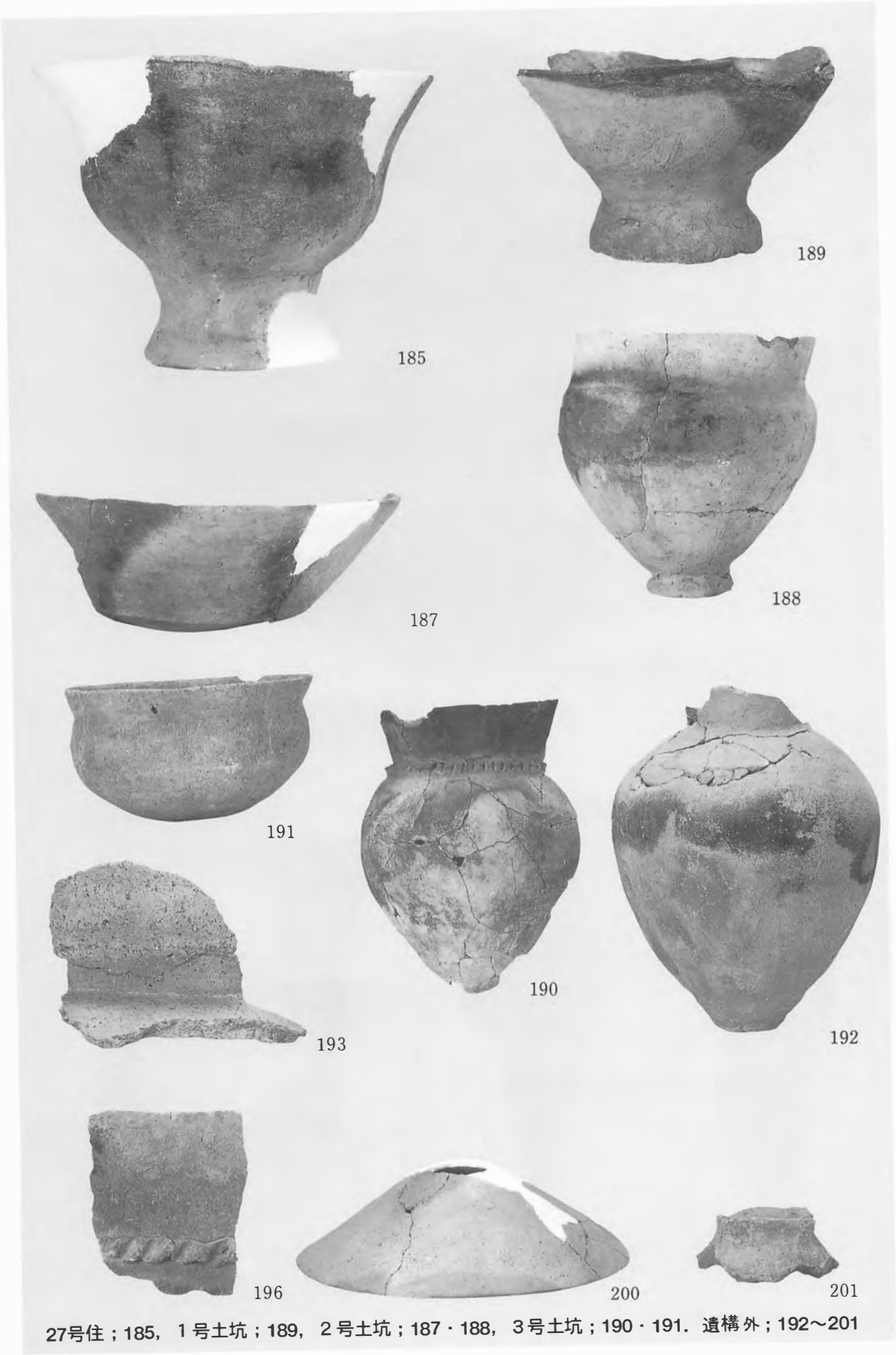
16号住：132･135･136･138　17号住：140･141･142　18号住：149･150　19号住：151･153･155　20号住：157

図版75　16～20号竪穴式住居跡出土土器



21号住；158・159，22号住；160・164，23号住；167・168，
24号住；170，25号住；173・176・180～182・184

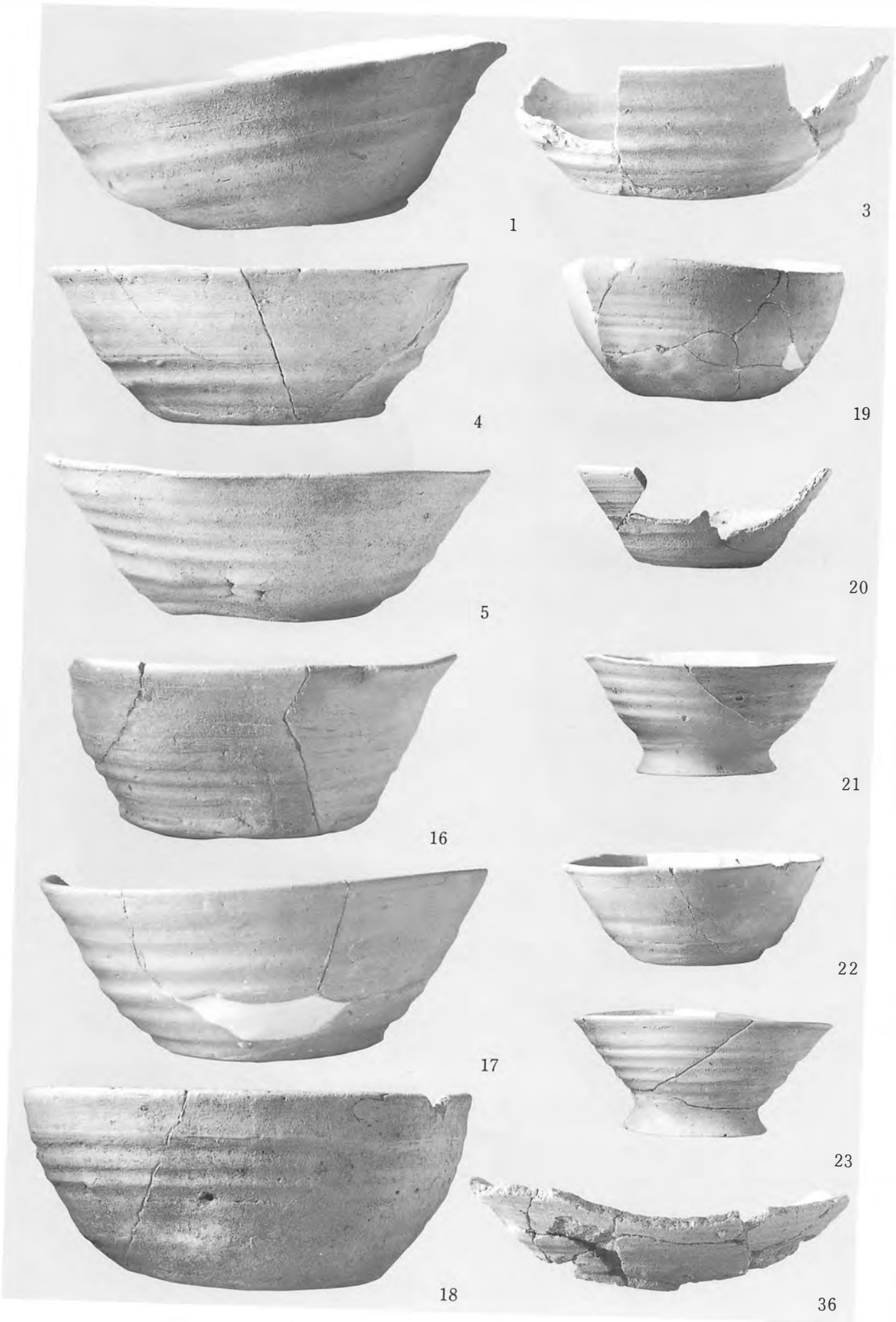
図版76　21～25号竪穴式住居跡出土土器



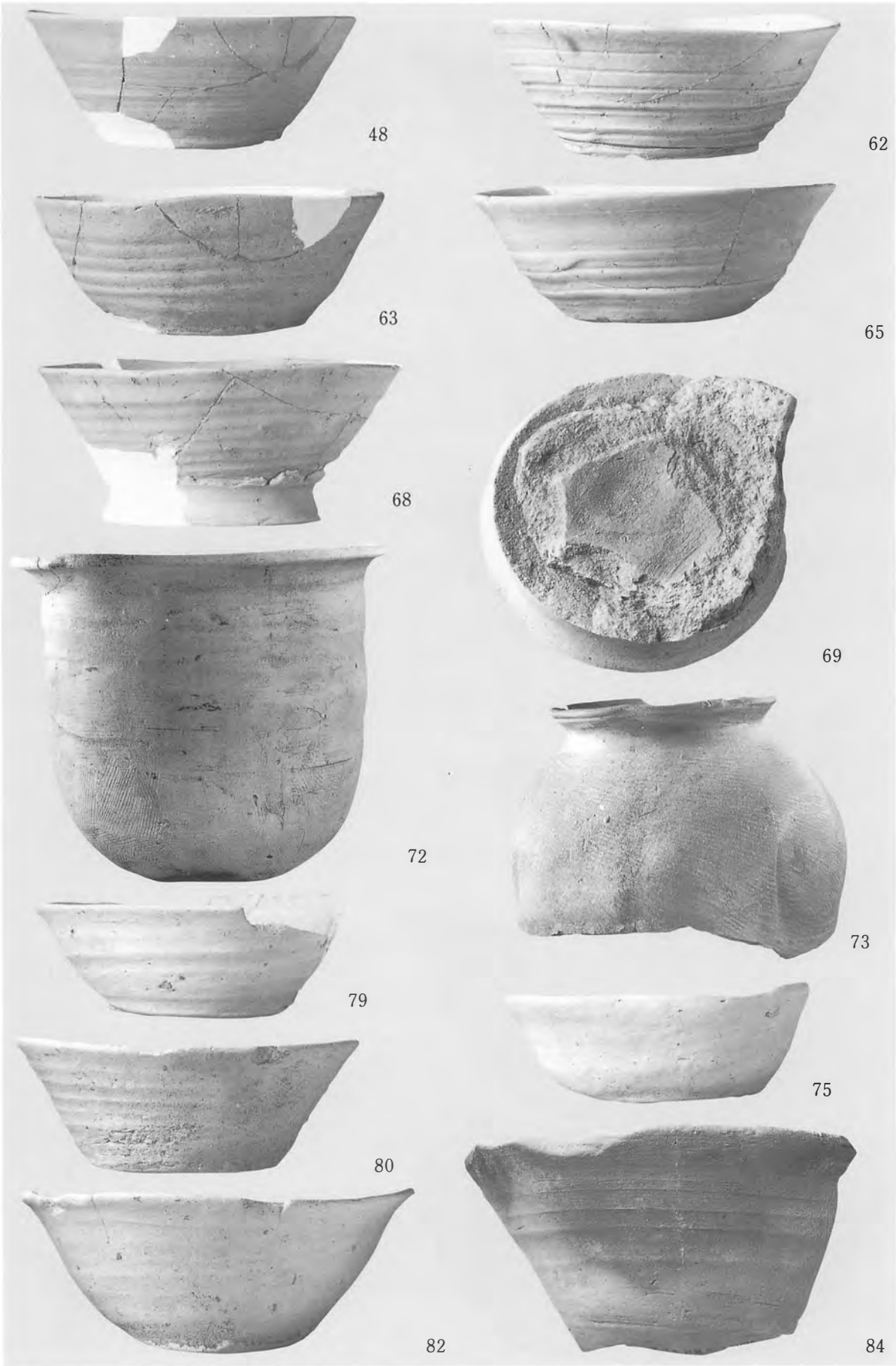
27号住；185，１号土坑；189，２号土坑；187・188，３号土坑；190・191．遺構外；192～201

図版77　27号竪穴式住居跡出土土器　１～３号土坑等出土土器

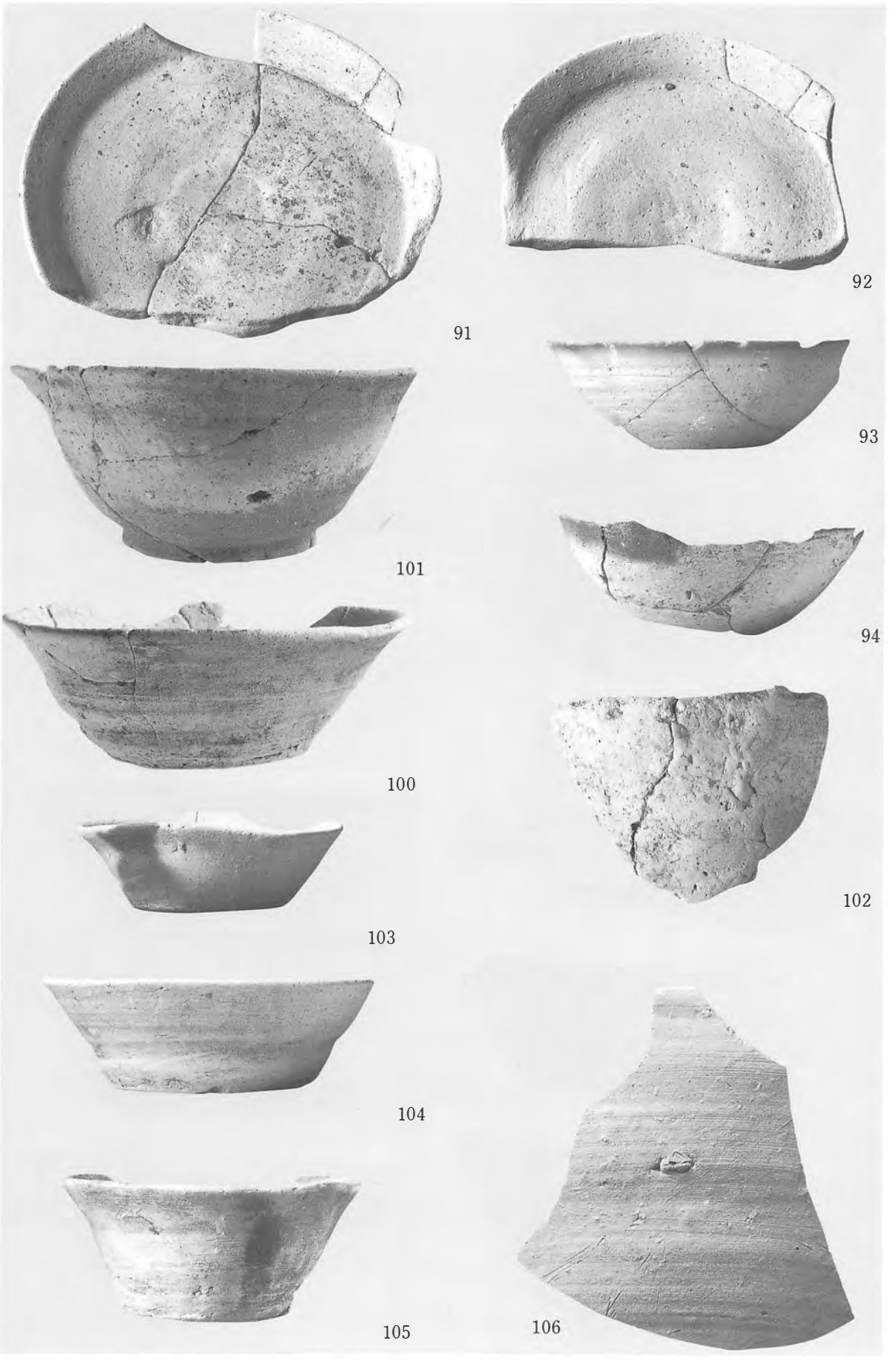
図版78　不明石器・鉄鏃



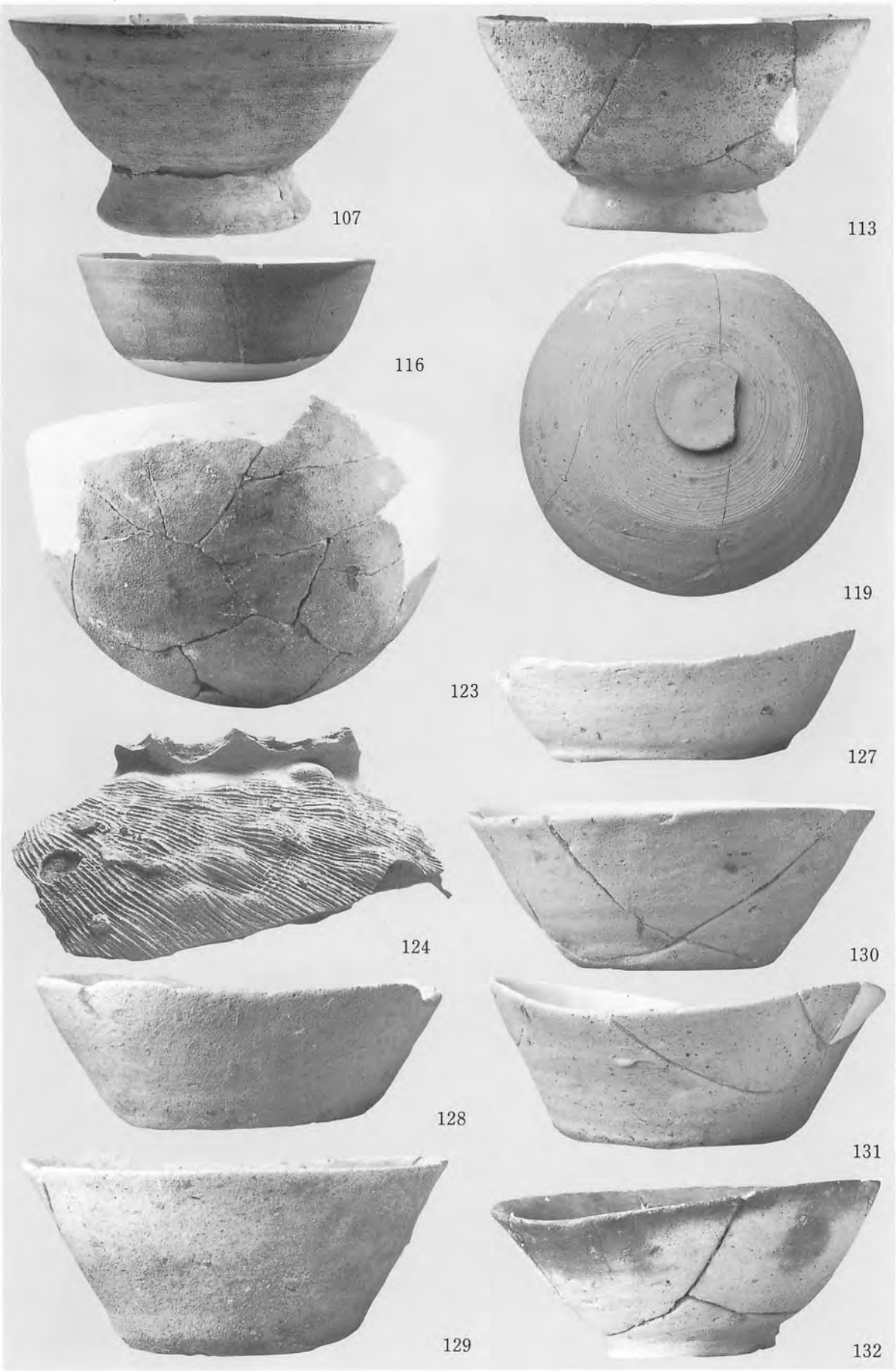
図版79　４号土坑出土遺物



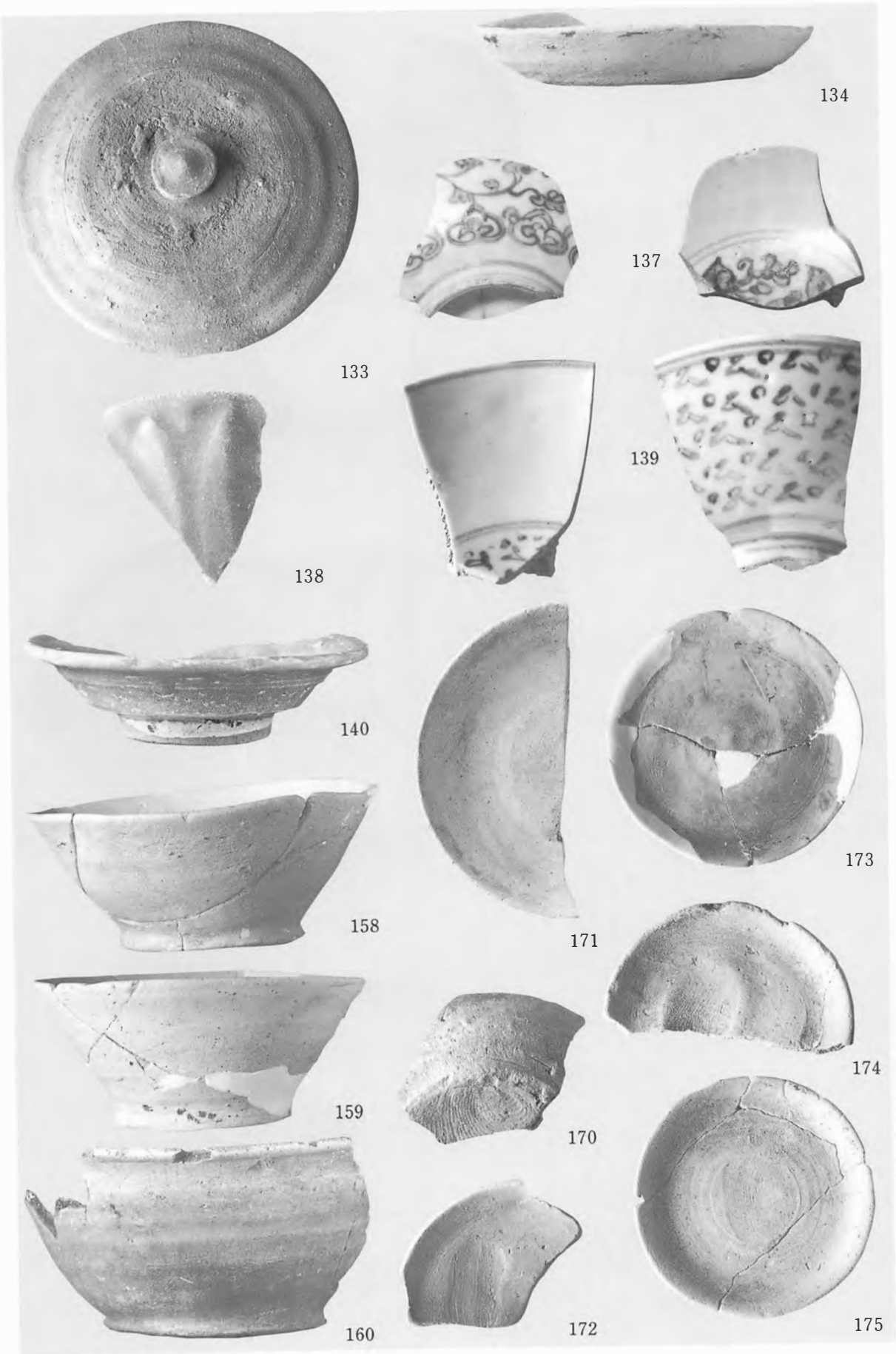
図版80　土坑出土遺物　5号；48，7号；62・63・65・68
8号；69，10号；72・73　11号；75・79・80・82・84



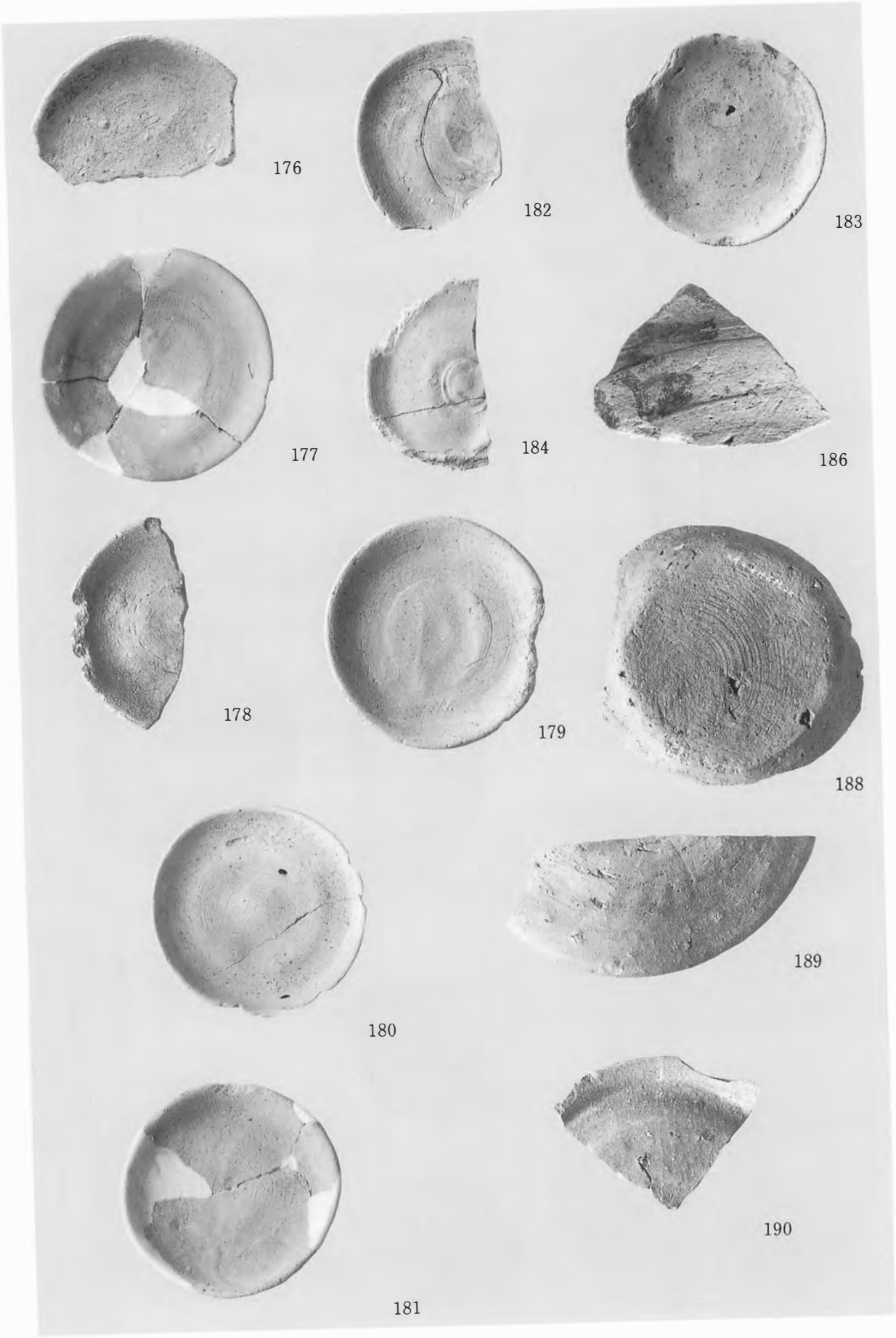
図版81　土坑出土遺物15号；91～94・100・101　16号；103～106



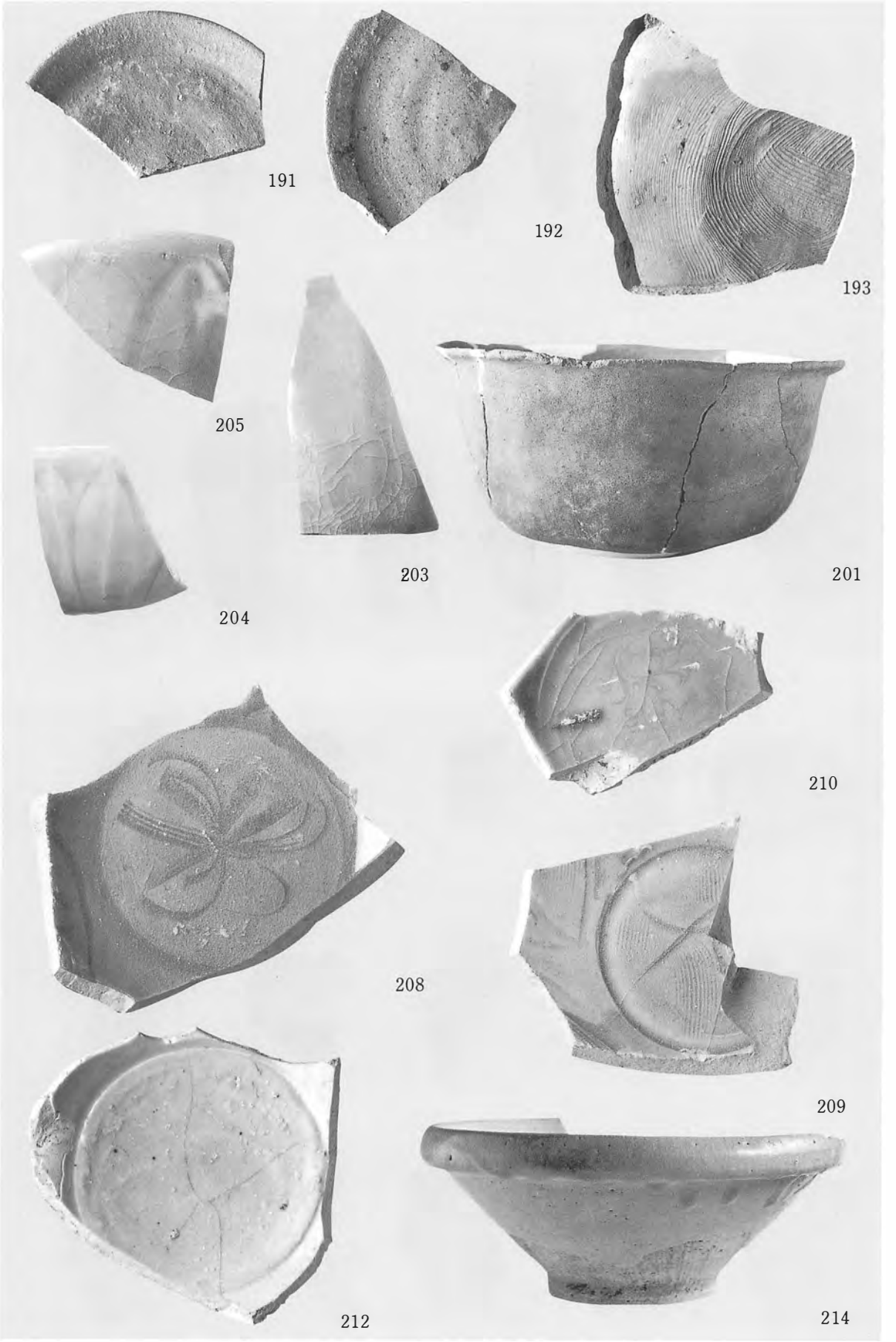
図版82　土坑出土遺物17号；107・113，20号；116
22号；119，23号；123・124・127～132



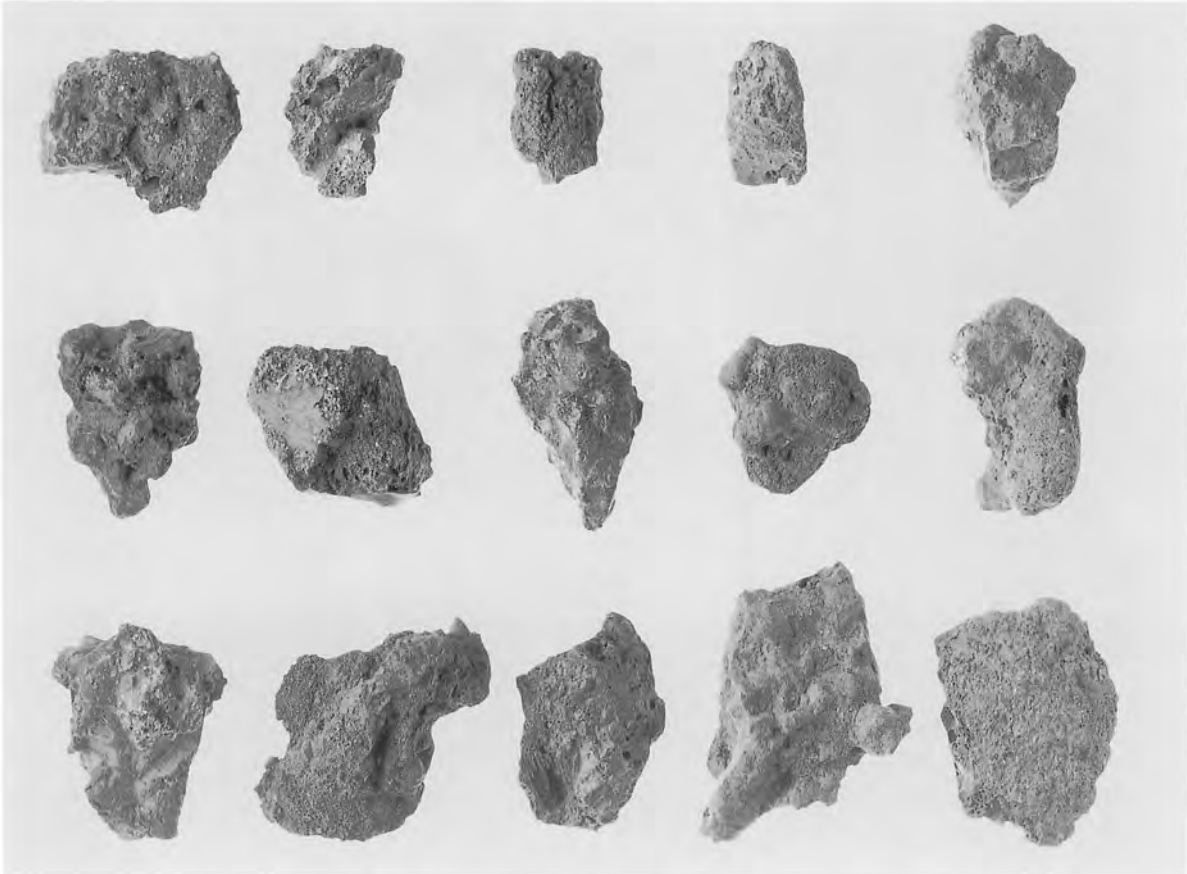
図版83　土坑出土遺物24号；133，25号；134　30号竪穴式住居跡；137～140，その他



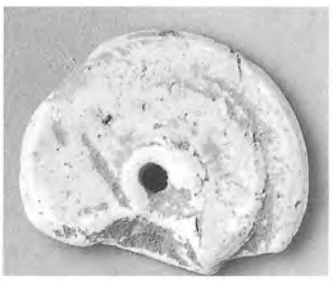
図版84　遺構外出土遺物



図版85　遺構外出土遺物



図版86　土錘・スラグ



紡錘車

瓦

鞴羽口

図版87　紡錘車・鞴羽口等

熊本県文化財調査報告書　第154集

沖　松　遺　跡

平成8年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　敷島印刷株式会社
〒861-41 熊本市近見町15-1

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 154 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：沖松遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日